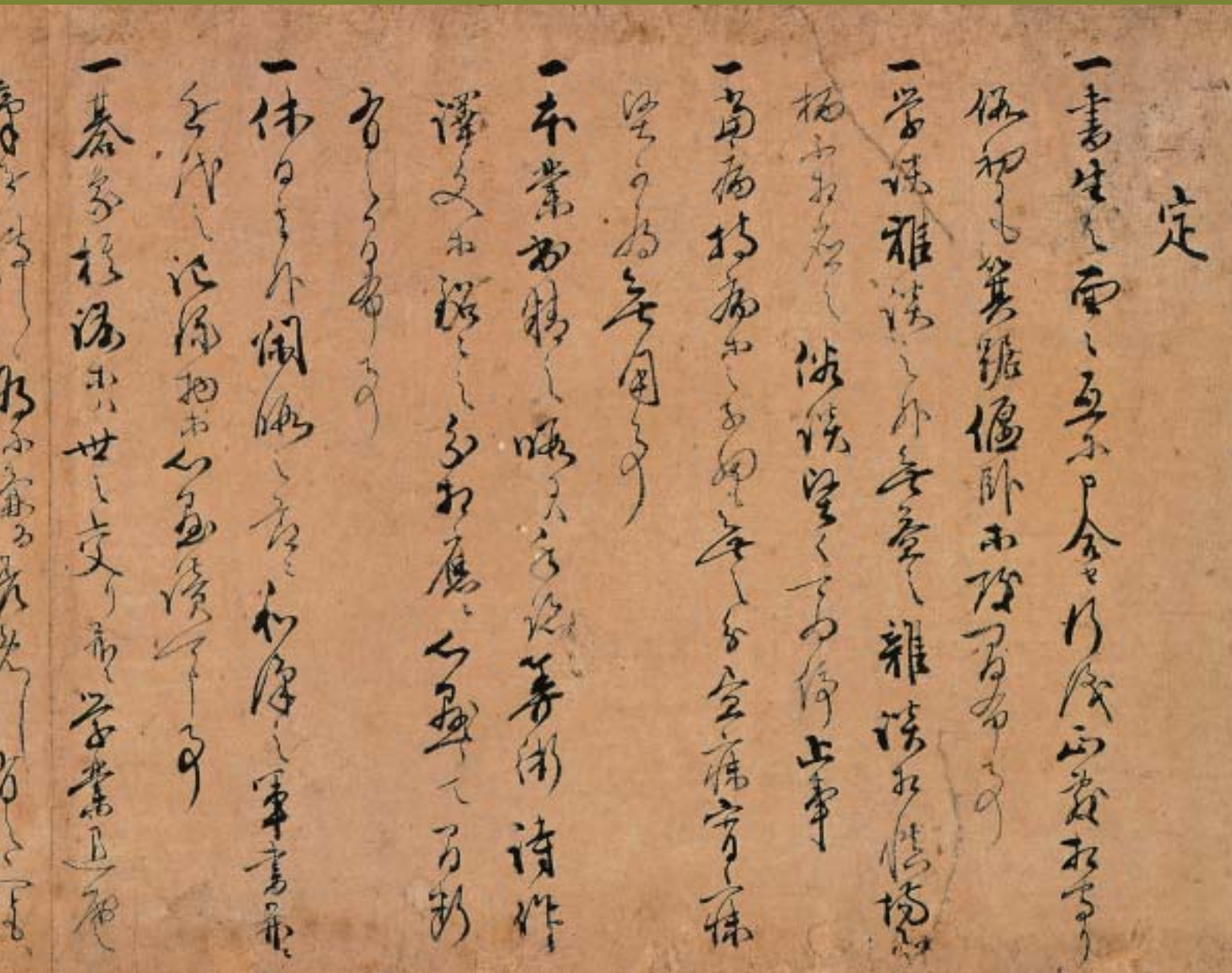


大阪大学大学院文学研究科

年報 2006

教育・研究(2004-2005年度)



大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

大阪大学大学院文学研究科

年報 2006

教育・研究 (2004-2005 年度)

大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

表紙解説

中井竹山筆「懷徳堂定書」

大阪大学懷徳堂文庫蔵

三〇・七×六六・四センチ

享保九年（一七二四）、大坂の有力町人によって創設された学問所懷徳堂は、江戸時代の後半、約百四十年間にわたって、日本近世の学術史と商道德の形成に大きな影響を与えた。大阪大学は、この懷徳堂を精神的源流と位置づけ、現在、文学研究科が（財）懷徳堂記念会と協力して、資料調査や公開講座の開催など、各種の社会教育活動を推進している。

本資料は、その懷徳堂の貴重資料の一つである。懷徳堂内に寄宿していた書生の生活態度について、第四代学主の中井竹山が安永七年（一七七八）に定めた規定である。毎月、五と十の付く休日に、寄宿生を講堂に集め、読み聴かせるのがきまりであったという。「箕踞偃臥」「無益の雑談」「昼寝宵寝」などを禁ずる一方、「手跡・算術・詩作・訳文」「和訳の軍書」「近代の記録物」など広範な学芸領域に関心を持つよう勸奨している。

同じく中井竹山が宝暦八年（一七五八）に掲げた「書生の交わりは貴賤・貧富を論ぜず同輩たるべき事」という開明的な懷徳堂の基本精神を受け継ぎ、総じて、学生相互の自律・自助を勧める内容となっている。

〔釈文〕

定

- 一 書生の面々互に申合せ行儀正敷相守り仮初にも箕踞偃臥等致す間布き事
 - 一 学談雅談の外、無益の雑談相い慎み、場所柄不相応の俗談、堅く停止と為すべき事
 - 一 当病持病等の子細も之が分無く昼寝宵寝は堅く無用と為すべき事
 - 一 本業出精の暇には、手跡・算術・詩作・訳文等、銘々の分相応に心懸け候て、間断之れ有る間布き事
 - 一 休日其の外閑暇の節に、和訳の軍書并に近代の記録物等心懸け読み申すべき事
 - 一 碁象棋謡等は世の交り并に学業退屈の氣を転じ候為に兼ねて差免じ之有り候へども休日の外は昼迄の内右様の雑芸に懸り候儀、無用と為すべき事
 - 一 銘々行届き申さざる事は、同輩の内より互に心を添へ切磋有るべきの事
 - 一 人の切磋を受け、却つて立腹など致し候はば、傍人より早々その段、申し出るべき事
- 以上
- 安永七年戊ノ六月

年報2006

目次

大阪大学大学院文学研究科『年報 2006』の刊行に寄せて	天野文雄	1
大阪大学大学院文学研究科『年報 2006』発刊の趣旨	評価・広報室	2

第1部 大阪大学大学院文学研究科および文学部における教育・研究活動の概要

1-1	学部・大学院の教育活動	5
1-2	教育・研究の支援体制	8
	研究推進室	8
	教育支援室	9
	評価・広報室	16
	国際連携室	24
	国際交流センター(留学生相談室)	24
1-3	魅力ある大学院教育	27
1-4	国際交流活動	28
1-5	外部資金の導入	30
1-6	21世紀COEプログラムについて	32
1-7	懐徳堂センターの活動	36
1-8	埋蔵文化財調査室の活動	38
1-9	性差別問題委員会の活動	42
1-10	大阪外国語大学との統合にともなう改組計画	43
1-11	アンケートの結果から今後へ	44

第2部 各専門分野における教育・研究活動の概要

2-1	哲学哲学史	47
2-2	現代思想文化学	56
2-3	臨床哲学	64
2-4	中国哲学	77
2-5	インド学・仏教学	87
2-6	日本学	96
2-7	日本史学	111
2-8	東洋史学	130
2-9	西洋史学	148
2-10	考古学	163
2-11	人文地理学	174
2-12	日本文学	185

2-13	比較文学	202
2-14	中国文学	210
2-15	国語学	217
2-16	英米文学	228
2-17	ドイツ文学	242
2-18	フランス文学	249
2-19	英語学	259
2-20	日本語学	269
2-21	美学・文芸学	288
2-22	音楽学・演劇学	306
2-23	美術史学	329
2-24	文化基礎学(広域文化形態論講座)	342
2-25	地域社会論(広域文化形態論講座)	343
2-26	言語文芸学(広域文化表現論講座)	345
2-27	留学生専門教育	347

付録 2005 年度実施アンケート結果

付録 1	2005 年度「大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」実施結果報告	351
付録 2	2005 年 12 月実施「卒業生アンケート」の結果のまとめ	362
編集後記		368

大阪大学大学院文学研究科 『年報2006』の刊行に寄せて

わたくしたち大阪大学大学院文学研究科は、2004年の国立大学の法人化を機に、文学研究科と文学部で行われている教育と研究活動について、『年報』として、2年ごとにその軌跡と成果をまとめてゆくことにし、その第一歩として2005年3月に『年報2004』を刊行したが、それをうけて、このたびここに『年報2006』を刊行するのはこびとなった。ここには、2007年3月現在の「いま」に直結するもっとも近い過去である2004年と2005年の2年間にわたる文学研究科の教育研究活動の全体が、ある場合には統計等の数値によって、またある場合には関係教員の分析によってまとめられていて、この2年間わたくしたちが、どのような活動をしてきたのかを、やや巨視的に鳥瞰することができるようになっている。もちろん、それはたんなる過去の記録ではなく、今後わたくしたちがどのような姿勢や方向性をもって教育と研究にあたってゆけばよいのかということについての貴重な指針を提示することにもなっているわけで、むしろその点にこそ、わたくしたちの年報隔年刊行の意味がある。

この『年報2006』は、いわゆる自己評価書であり、ここ10年ほど国や社会が大学に求めている評価活動の一環である。そうした潮流のなか、わたくしたちは1992年に自己評価委員会を設置し、同委員会のもとで、1994年に最初の自己評価書を刊行してからは、1995年の大講座化や1998年の文学部創設50周年、そして2003年の法人化直前に、それぞれ『現状と課題』『年報』などの名で一部に外部評価をも含む自己評価書を刊行してきた。そして、法人化後の隔年刊行という方針のもと、自己評価委員会の後身である評価・広報室によって『年報2004』がまとめられ、さらに2006年3月には、2度目の外部評価を行い、『外部評価報告書』も刊行している。わたくしたちはこのように、この10年ほど、継続して自己評価や外部評価を行ってきたのだが、そもそも自己評価とは、「なにを」「どのように」評価するのか、そして、なによりもそれは「何のため」の作業なのか、わたくしたちはそろそろそういったことについても考えておくべき時期に来ているように思われる。このうち、「何のため」かについてはすでに述べたような将来への指針としての意味があげられるが、もっとも問題なのは、「どのように」ということではないかと思う。というのも、自己評価においては、たとえばわたくしたちがあることがらに高い評価をくださった場合、それが客観的な正しい評価であったとしても、お手盛りの自己満足と受けとられる可能性が少なくないからである。すると、自己評価は本当に必要なのかという根本的な疑問に逢着することにもなるが、わたくしは、わたくしたちが隔年で刊行することになっている年報は、評価ということ以前になによりもまず文学研究科の活動を確認するための基礎資料として重要な意義を持っていると思う。そして、その基礎資料を、活動の指針としてどのように利用するかがわたくしたち文学研究科の仕事であり、また、それをどう評価するかは、社会という名の「外部」の仕事なのではないかと思う。自身の教育研究活動をなるべく正確に記録し、それについての評価は他者にゆだねる、それが素朴ではあるが、もっとも意味のある自己評価のかたちではないかと思うのである。

以上はわたくしの個人的な意見ではあるが、この『年報2006』も、期せずしてほぼそのようなかたちになっている。つまり、これがこの10年来、いわゆる自己評価について模索してきたわたくしたちが到達した結論ということになる。とすれば、この『年報2006』の刊行は過去2年間の自己評価の終了ではなく、今後の利用や評価のはじまりということになる。そして、この『年報2006』は今年10月に予定されている大阪外国語大学との統合による新専攻文化動態論専攻の創設という大きな変革にさいしても、もちろん貴重な指針となるはずである。

さいごに、この『年報2006』の作成にあたられた評価・広報室研究評価部門の室員各位、また諸事多端のなかをご協力いただいた、文学研究科の教員各位に深甚の謝意を表して緒言とするしだいである。

2007年3月

文学研究科長、文学部長
天野 文雄

大阪大学大学院文学研究科 『年報2006』 発刊の趣旨

大阪大学大学院文学研究科 評価・広報室

『年報2006』は、年報の発刊を隔年で行うことが2005年2月に文学研究科において決定されたことに基づき、『年報2004』に続いて刊行されることとなった。本年報は、『年報2004』の基本方針を踏襲し、各種データの提示においても継続性を意識して行った。なお、『年報2004』はまた、『年報2002』の基本方針を受け継いだものであり、『年報2002』発刊の経緯やその特徴については『年報2004』発刊の趣旨に詳しい。

『年報2006』は、大きく2つの部分に分かれている。第1部「大阪大学文学研究科および文学部における2004年度～2005年度の教育・研究活動の概要」では、文学研究科・文学部全体の教育および研究活動全体についてふれている。『年報2004』に掲載されたトピックに加えて、文学研究科・文学部に所属する学生および教職員に関わるセクシュアル・ハラスメント等の性差別の防止と解消に取り組む性差別問題委員会の活動状況、2007年10月に大阪外国語大学と統合することにもなう文学研究科改組の計画および決定事項、さらに実施責任者1名、実施担当者2名をおいて行われる魅力ある大学院教育のプログラムについて、それぞれ関係者に執筆を依頼し紹介している。

第2部「各専門分野における教育・研究活動の概要」では、各専門分野の教育および研究活動の概要およびその特色を簡潔に示した後、各種データを提示するほか、2004年度および2005年度の教育・研究活動に関する自己評価を掲載している。2005年度より実施されるようになった専門分野・専修の年度目標の明示化およびその達成状況に関する調査結果も、ここに反映されている。

『年報2004』は、文学研究科の中期計画に基づいて2005年度に行われた外部評価（『外部評価2005』として編集・刊行）のための基礎資料として用いられたが、同様に『年報2006』も、2008年度の実施が予定されている外部評価の基礎資料として利用されることになっている。

データ収集に関して、『年報2004』は文学研究科構成員の負担をできるかぎり軽減する方向で進められ、その結果、逆に年報作成者には多大な労苦が課せられることとなった。教員の業績に関するデータは、まず大阪大学データ管理分析室に集積されたものを転用し編集されたが、これらは著書・論文・学会発表・講演等にかざられるため、翻訳・書評・解説・辞典項目などについては、改めて各教員からデータを収集し、それらをとりまとめる必要があったからである。『年報2006』は、このときに作成された個人ファイルを利用することができたので、きわめて効率よく作業を進めることができた。

『年報2006』が、『年報2002』および『年報2004』と共有する重要な特色は、大学院生の業績について詳細に記載されていることにある。『年報2004』発刊の趣旨にあるとおり、文学研究科では大学院生と教員が連名で論文を発表することはきわめて少なく、教員による指導がかなりなされた場合であっても、院生がその研究成果を単著として公刊することが一般的である。したがって、文学研究科の研究成果ということになると、教員の名前が著者として記載された論文や学会発表リストをつくるだけでは不十分であり、大学院生の論文や発表も考慮にいれざるをえないわけである。もちろん、大学院生のこうした業績リストには、各専門分野の研究活動の成果のみならず、教育活動の成果もまた反映されていると言えよう。

なお、『年報2006』も先行する2つの年報と同様に、文学研究科のホームページ(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/>)を通じてWeb上に公開する予定である。文学研究科の教育・研究活動全般を広く知っていただき、忌憚のないご意見をお寄せいただくよう期待したい。

第 1 部

**大阪大学大学院文学研究科および文学部
における教育・研究活動の概要**

* コメントは、原則として2004年度および2005年度のデータに関するものであるが、『年報2004』に掲載された2001年度～2003年度のデータも、参考のため提示しておいた。

教育活動の基礎的データ

1. 大学院の教育活動

1-1. 大学院博士前期課程入学者

まず博士前期課程の入学者から見ると(表1-1-1)、一般選抜による入学者数が最近5年間で最高だった2004年度に比べると2005年度はやや減少している。また、社会人選抜による入学者は年々減少傾向にある。ただし、外国人留学生特別選抜による入学者は一定水準を維持しており、総計ではいずれの年度においても募集人員(82名)をうわまわっている。

表 1-1-1 大学院(前期課程)入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2001	66	13	9	88
2002	68	10	13	91
2003	73	8	13	94
2004	77	7	15	99
2005	68	4	15	87

1-2. 大学院博士前期課程学生

博士前期課程の学生数は、ほぼ同じ水準で変化している(表1-1-2)。修了者が増加し、留年者数が学生数に対して20%を切っていることはよい傾向であるが、減少しつつあった休学者が増加に転じた点については、今後の経過に注目すべきであると考えられる。

表 1-1-2 大学院(前期課程)の学生数、休学者数、留年者数、修了者数

年度	学生数	休学者数	留年者数	修了者数
2001	228	31	44	84
2002	227	31	50	91
2003	220	28	38	83
2004	230	16	37	85
2005	223	23	39	100

1-3. 大学院博士後期課程入学者

博士後期課程の入学者について言えば、一般選抜に関しても社会人特別選抜に関しても、明らかに減少傾向にある(表1-1-3)。ただし、募集人員(41名)をうわまわる入学者数は依然として確保されている。

表 1-1-3 大学院(後期課程)の入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2001	54	12	10	76
2002	53	8	8	69
2003	60	6	7	73
2004	45	5	15	65
2005	34	2	9	45

1-4. 大学院博士後期課程学生

博士後期課程の学生数は、2004年度までは増加傾向にあったが、2005年度で減少に転じ、しかし休学者数はわずかながら増加した(表 1-1-4)。学位論文提出者数は学生数に対して2004年度が7.79%だったが、2005年度には9.52%となり、2001年度(9.59%)の水準に回復しつつあるものの、まだ10%を超えるまでには至っていない(2003年度は11.95%)。

表 1-1-4 大学院(後期課程)の学生数、休学者数、学位論文提出者数、退学者数

年度	学生数	休学者数	学位論文提出者数	退学者数
2001	292	52	28	51
2002	294	63	29	34
2003	318	81	38	42
2004	321	76	25	57
2005	294	77	28	36

(注)退学者には単位修得退学者をふくむ。

1-5. 大学院研究生

大学院に関連して、さらに研究生についても見ておきたい。留学生に関してはほとんど変動がないが、日本人に関しては大幅に増加した(表 1-1-5)。

表 1-1-5 大学院研究生数

年度	日本人	留学生	計
2001	13	3	16
2002	12	4	16
2003	12	4	16
2004	20	2	22
2005	21	2	23

2. 学部の教育活動

2-1. 学部入学者

学部に入ると、一般入試による入学は、定員(前期日程 125名、後期日程 40名、計 165名)を10名程度うわまわる数で推移しており、大きな変化はない(表 1-2-1)。ただし、外国人入学者が2004年度、2005年度はともに0名である。

表 1-2-1 学部入学者数

年度	一般	外国人	計
2001	176	4	180
2002	172	2	174
2003	178	2	180
2004	174	0	174
2005	174	0	174

2-2. 学部学生

学生数・卒業生数に大きな変化はないが、2004年度に一度減少した休学者数および留年者数が2005年度に再び増加に転じたことが懸念される(表 1-2-2)。

表 1-2-2 学部の学生数、休学者数、留年者数、卒業生数

年度	学生数	休学者数	留年者数	卒業生数
2001	791	33	72	171
2002	783	36	79	182
2003	777	41	70	171
2004	773	29	64	150
2005	791	35	87	179

2-3. 学部研究生

学部の研究生数は、日本人に関しては明確に減少傾向にあり、総数も減少している(表 1-2-3)。

表 1-2-3 学部研究生数

年度	日本人	留学生	計
2001	19	20	39
2002	15	15	31
2003	32	10	42
2004	15	23	38
2005	12	14	26

研究推進室

組織・体制

文学研究科内のさまざまなレベルの研究活動の現状をトータルに把握し、かつ研究を支援する機能をそなえた組織が「研究推進室」である。そのメンバーは文学研究科の教職員によって構成される。「研究推進室」の室長および副室長は、総務委員会の議を経て、研究科長が委嘱することになっている。

「研究推進室」は、「科研・共同研究部門」「図書管理部門」「紀要・論叢部門」の3部門体制になっており、各部門にチーフが置かれている(チーフは室長が委嘱する)。各部門が行っている業務内容は、次のとおりである。

1. 科研・共同研究部門

- 1) 文学研究科共同研究の募集・選定、運営に関すること
- 2) 科研費その他の研究助成金等に関する公募情報の収集・提供、申請書作成・計画実施の補助に関すること
- 3) 教員・研究員の公募情報の収集・提供に関すること
- 4) 全学研究推進室その他の関係組織との連絡・調整に関すること

2. 図書管理部門

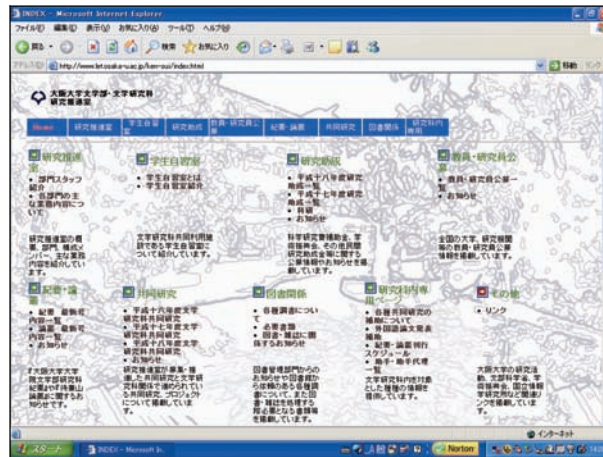
- 1) 「学生自習室」の管理運営および設備機器の充実に関すること
- 2) 文学研究科共同利用にかかる図書、資料に関する企画、運用に関すること
- 3) 文学研究科の図書利用についての附属図書館との連絡、調整に関すること

3. 紀要・論叢部門

- 1) 『大阪大学大学院文学研究科紀要』および『待兼山論叢』の発行、ならびにこれに付随する諸問題の処理に関する
こと
- 2) その他

活動状況

1. 「研究推進室」独自のホームページを立ち上げた。
2. 部局内共同研究の募集・管理にあたったほか、各種研究助成の情報収集・広報を一元管理して、研究資金獲得を支援した。
3. 競争的外部資金等の情報収集・広報、科学研究費の応募を一元管理する体制を作り、申請書類作成等のアドバイスや提出書類のチェックを行い、研究活動を推進・支援した。
4. 文学研究科共同施設である「学生自習室」を効果的に運用、夜間開室も実施した。
5. 外部資金による研究活動や共同研究の把握・調整などを行うとともに、図書業務を遂行し、また定期刊行物の刊行を支援した。
6. 各年度に『文学研究科紀要』(総集編・モノグラフ編)、『待兼山論叢』(計5分冊)を刊行した。
7. 「電子化」に伴う『文学研究科紀要』のバックナンバー著作権の処理作業を行った。
8. 研究成果の国外への発信および情報交換の促進のために、文学研究科の各教員および博士後期課程学生によって外国語で書かれた公刊論文について各自に申請してもらい、審査の上、運営費交付金からの予算を配分した。



【研究推進室ホームページ】 URL <http://www.let.osaka-u.ac.jp/ken-sui/index.html>

(真田信治)

教育支援室

組織・体制

教育支援室は、文学部学生・文学研究科大学院生に対する教育支援のための組織で、2004年度、2005年度は、下記の体制のもとに運営された。

教育支援室長(1名)・副室長(2名)

- (1) 教務・学位部門：部門チーフおよび室員
- (2) 入試部門：部門チーフおよび室員
- (3) 学習支援部門：部門チーフおよび室員
- (4) 生活支援部門：部門チーフおよび室員
- (5) 就職支援部門：部門チーフおよび室員

(1)教務・学位部門と(2)入試部門は、従来の委員会を再編成した部門であるが、(3)学習支援部門、(4)生活支援部門、(5)就職支援部門は、2004年度より新たに発足した教育支援部門である。共通教育委員会および博物館実習委員会、また教務係、庶務係、会計係とも連携しつつ、教育支援室チーフ会議と各部門会議によって運営が進められた。

各専門分野にコースオーガナイザーを設け、教育支援室との連携のもと、開講科目の調整、卒業・修了時までの達成目標の策定、オフィスアワーの導入等、学生・院生に対する細やかな教育支援ができる体制を整えてきた。

学生・院生に対する教育支援を充実させるために、2004年度より玄関横に教育支援室を設置している。2004年度は、非常勤職員1名とアルバイト職員1名、2005年度は非常勤職員2名が在室し、常時学生の相談に対応できるようにした。

また、2004年度より教育支援室ホームページを開設し、インタラクティブに学生への対応ができるようにした。2004年度より学習相談室を開設したが、2005年度からは、第2ミーティングルームを設置し、秘密厳守の相談に応じられる体制も整えている。

活動状況

1. 教育支援室長・副室長

1-1. 会議

総務委員会とも連携しつつ、下記のような会議を開催した。

【2004 年度】

- (1) 新たに発足する 26 名の室員よりなる大きな室体制であるため、新年度開始に先立ち、2004 年 3 月 22 日に、教育支援室全体会議を開催。部門チーフと各部門室員の確定、中期計画書に基づく年間計画、特に新規事業の確認、玄関横に新しくできる教育支援室の配置・使用方法、事務スタッフの仕事の内容等を検討した。(なお、教育支援室室員は、後期からは 28 名体制となった。)
- (2) 4 月 8 日に、正副室長、部門チーフよりなる第 1 回教育支援室チーフ会議を開催。中期計画に基づく年間計画を具体的に検討し、インターンシップ等に関わる専門室員も置いて、新規事業が円滑に実施できる体制を整えた。また、高度専門職業人養成のためのカリキュラムの検討等、副室長と各部門が協力して実施すべき新規事業等も確認した。
- (3) 各部門会議は、教授会開催日(原則隔週)に行い、正副室長、部門チーフ、専門室員、博物館実習委員会委員長、共通教育委員からなるチーフ会議は、教授会のない木曜日午後(原則隔週)に行った。チーフ会議には、必要に応じて、全学学生委員会委員、教務係、会計係、事務スタッフも出席。2004 年度のチーフ会議開催は、全 20 回である。また、必要に応じて、正副室長会議を 10 回行い、教育支援室全体に関わる調整等を行った。
- (4) 室長は、常に総務委員会に出席して、教育支援室チーフ会議における重要な案件を説明した。総務委員会における議論や判断を、教育支援室に持ち帰りチーフ会議で決定した。なお、教務・学位部門、入試部門に関わる案件については、必要に応じて、部門チーフが総務委員会に出席し、説明を行った。
- (5) 教授会開催時に「教育支援室活動報告」を配布し、必要に応じて口頭で補足説明等を行った。また教員全体の意見集約、議論が必要な案件は、教授会懇談会の議題とした。
- (6) 室長(室長不在時は副室長)は、教育課程委員会に出席し、全学との連携を図った。
- (7) 10 月 14 日に、コースオーガナイザー会議を行い、新たに発足したコースオーガナイザー制度に関する意見交換等を行った。

【2005 年度】

- (1) 4 月 21 日に教育支援室全体会議を開催し、部門チーフ、各部門室員、専門室員の確定、ならびに年間計画の確認や、各部門と副室長の協力体制等の確認を行った。
- (2) 2004 年度通り、チーフ会議と部門会議を隔週に行った。チーフ会議は 20 回開催し、必要に応じて正副室長会議を 7 回開催した。
- (3) 2004 年度と同様に、室長は常時、入試部門チーフは必要に応じて、総務委員会に出席し、文学部・文学研究科全体における調整を行った。
- (4) 教授会開催時に「教育支援室活動報告」を配布した。また、長期履修学生制度の導入問題等、教員全体の意見集約、議論が必要な案件は、教授会懇談会の議題とした。
- (5) 室長(室長不在時は副室長)は、教育課程委員会に出席し、全学との連携を図った。
- (6) チーフ会議において、2004 年度、2005 年度の「教育支援室の課題と展望」を検討し、3 月 16 日の教授会懇談会で報告した。

1-2. 教育支援室(玄関横)の運営

文学研究科本館の玄関横に設置した教育支援室は、室長をはじめとする教育支援室の教員と事務スタッフが協力して運営にあたってきた。開室は月曜日から金曜日の午前 10 時から午後 5 時までで、情報機器ではパソコン 6 台、プリンター 1 台、コピー機 1 台を配置し、就職関連図書を配架し、室内外に設置した掲示板に求人情報などの各種案内を掲示して学生の利用に供してきた。

事務スタッフとしては、2004 年度は非常勤職員 1 名とアルバイト職員 1 名、2005 年度は非常勤職員 2 名が常時在室する体制をとり、来室する学生の相談などに対応するとともに、正副室長、部門チーフ、教務係等との連携のもとに、次のような活動を行った。教育支援室内の情報機器やホームページの維持管理、各種案内の掲示、プロジェクター・スクリーンなどの備品の貸出しや保管、学務情報システム窓口として統一アカウントの配布、過去の大学院入試問題の公開と複写サービス、TA の任用や TA 研修会に際して募集や案内、奨学金の返還免除申請に必要な書類の配布、第 2 ミーティ

ングループの利用受付と鍵の管理、学習相談の窓口を務め、学習相談報告書を管理、就職関係では求人票の管理・履歴書用紙の配布・就職関係図書の購入及び貸出・就職ガイダンスや就職説明会の事務、セルフプレゼンテーション講座の募集や講師・応募者との連絡、博物館実習用ノートの管理、教育支援室の予算書・決算書・年度計画書、全学基礎データ・年報・外部評価報告書などの教育支援室関連部分の作成のための事務補助、教育支援室内の各種会議の会場設定や資料作成などである。学生、大学院生への周知徹底を行うため、2004年度と2005年度は、ちらし、ポスター等の配布を積極的に行った。

1-3. 教育支援室ホームページ

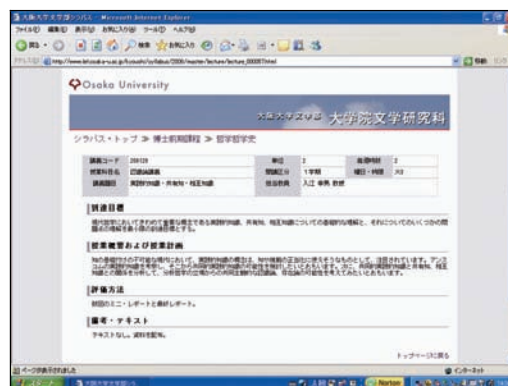
2004年度に教育支援室ホームページを開設し、2005年度には、教育支援室に関連するすべての業務に関する包括的なホームページを構築した。ホームページ上には、学部と大学院の前・後期の全シラバスや時間割、全教員のオフィスアワーを掲載するだけでなく、学習相談のコーナーを特別に設置し、相談フォームによってメールによる学習相談を随時受け付けてきた。また、奨学金の情報や就職活動に関する情報も掲載してきた。教育支援室ホームページは、通常、教育支援室スタッフが管理・運営を行ってきた。



【教育支援室ホームページ】 URL <http://www.let.osaka-u.ac.jp/kyoushi/index.html>

1-4. シラバス委員会

2005年度、教務部門と学習支援部門の協力の下に、文学研究科・文学部シラバスの電子化を実行するために、藤川(委員長)、蜂矢、荒木の3名によりシラバス委員会が設置された。学務情報システムの進展にともない、それと重複しないように、2005年度には、2006年度シラバスのウェブ・バージョン、紙のシラバスの簡易版、紙のシラバスの完全版の3種類のシラバス作成を行った。3種類のシラバスの作成を実際に行ったことは、PDFファイルの作成における問題点、データベースを3種類のシラバスに変換するプロセスに関わる課題など、学務情報システムに移行する上での多くの問題点を浮かび上がらせた点で有益であった。他方、シラバス作成過程において、多大な負担を教育支援室事務スタッフにかけたことは、今後は避けるべき課題であろう。それに関連し、今後、複数のシラバスを作成することは、実施前に慎重に検討すべきであると思われる。2006年度ウェブ版シラバスは、教育支援室ホームページで公開している。



1-5. セルフプレゼンテーション講座

学生の就職活動や進路決定を支援することを目的として、自分をどのように表現して自己の長所をアピールするかを学ぶ「セルフプレゼンテーション講座」を2005年度に8回開催した。日程は、10月13日(木)、10月27日(木)、11月10日(木)、11月24日(木)、12月8日(木)、12月22日(木)、1月19日(木)、1月26日(木)で、午後3時から5時30分まで2時間30分開催し、講師は(有)ノトコード代表取締役で東京大学研究員の平林慶史氏が務めた。



「セルフプレゼンテーション講座」

1-6. その他の活動と今後の課題

- (1) 2004年度、2005年度において、副室長と学習支援部門とが連携して、高度専門職業人養成のためのカリキュラム策定に関する検討を行った。アンケートを実施、分析結果を教授会で報告した。今後も継続審議が必要である。
- (2) 2004年度に、学部の成績評価ガイドライン策定、表彰制度検討のための実態調査(各専修の成績評価の状況調査)を行い、教授会で報告した。それを受けて、楠本賞候補者等の選抜方法を改正した。また大阪大学後援会による平成18年度助成事業を受けて、成績上位者5名に文学部賞を贈ることとなった。今後の課題として、大学院生の成績評価制度の検討がある。
- (3) 2007年度から実施される全学共通教育カリキュラムの改訂など、種々の共通教育関連事項について、共通教育委員会と連携しつつ検討した。
- (4) 2004年度と2005年度の終わりに、教育環境に関わるアンケート調査を行い、会計係との連携のもとに機材やクーラー等の教室整備を行った。今後も教室整備を継続する必要がある。
- (5) 2004年度より、文学研究科・文学部全体の学位授与式を実施することとした。
- (6) 2005年度に、二瓶文博大阪大学監事による教育支援サービスに関する監査に対応した。
- (7) 2004年度、2005年度ともに、木曜日午後の時間帯を利用して、就職ガイダンス、TA研修会、奨学金に関わる説明会等を行ってきた。今後は、専任教員だけでなく、非常勤講師による授業等も段階的にこの時間帯から外していく必要がある。

(工藤眞由美、榎本文雄、藤川隆男)

2. 教務・学位部門

2-1. 教務関係

教務係と連携しつつ、教務に関する業務を行った。神戸大学、大阪外国語大学との相互履修制度に基づく教育交流も担っている。また、教育支援室会議との連携の上にシラバス作成委員会を設置し、シラバス作成の円滑化を図り、ホームページによる閲覧を可能とする措置をとった。併せてシラバスに成績評価基準を明示した。社会人等に向けて「大学院の長期履修学生制度」の導入を図り、教授会の合意を得て当大学で初めて2007年度の実施を決定した。また、1年次生のため、年度初頭にオリエンテーションを実施し、1学期には全専修参加の「文学部共通概説」を行い、秋には「専修ガイダンス」を通して専修決定への便宜を提供している。さらに、毎春、3年次学生の成績を点検し、卒業論文執筆にあたっての履修状況の把握に努めている。2004年度より、大学院における複数指導教員制度を周知徹底させた。

2-2. 学位関係

学位関係の業務は、教務に関する活動の一環であって、独立して行われているわけではない。ただし学位の授与は、教育・研究支援の重要な目に見える成果であるために、これに係わる業務分野を特に区別して、その諸案件を慎重に着実に処理してきた。したがって学位関係の仕事も、教務関係の活動と併せて、本部門に属する室員全員で遂行している。

修士および博士の学位授与に係わる業務は、論文提出までの日程と流れの策定、ことに論文提出資格者の判定、題目提出・論文提出・合否判定提出の締切日の確定など、毎年度変わらない一種のルーティン・ワークであるが、教務日程・行事日程また卒業論文に関するスケジュールを勘案して、院生の教育・研究支援上、細心の配慮を尽くしてきた。題目提出・論文提出について前年度と何日ずらすか、修士と博士とで何日ずらすか、年末年始の曜日を見て、院生が論文を提出しやすいように、一日ごとに想定してきた。また博士課程を経た者以外の学位請求論文が提出されることも少なくない。その結果、2004年度は85名の文学修士、25名の課程博士、10名の論文博士が、2005年度は100名の文学修士、28名の課程博士、11名の論文博士が誕生している。さらに別して、学位論文の評価に成績の別を設けることも、困難が多い課題ではあるが、論議している。

(梅村喬、上倉庸敬)

3. 入試部門

教務係と連携しつつ、文学研究科・文学部の各種入学試験とそれに関連する業務を行った。

【2004年度】

2005(平成17)年度の文学研究科・文学部入学試験に関する業務を行った。文学部入試に関しては、2005年2月に前期日程の個別学力試験を、同3月に後期日程の個別学力試験を実施した。文学研究科入試に関しては、従来春期に一回のみ実施していた入試を秋期(9月)・春期(2月)の二回に分けて実施した。2004年9月には、博士前期課程(一般)、博士前期課程(社会人)、博士後期課程(社会人)の試験を実施し、2005年2月には、博士前期課程(一般)、博士後期課程(一般)、博士前期課程(外国人留学生)、博士後期課程(外国人留学生)の試験を実施した。また、文学研究科の入学試験については、教育支援室において一定の期間を設けて過去の入学試験問題の閲覧サービスを行うとともに、文学研究科ホームページ上でも一部公開した。このほか、入学試験に関する各種広報活動を文学研究科ホームページなどを通して行った。

教授会懇談会の場で文学研究科・文学部入試に関する反省会を実施した。2004年3月に2004(平成16)年度文学部入試に関する反省会を実施し、2004年5月に同文学研究科入試に関する反省会を実施した。

適切な入学試験のあり方を検討するため、文学研究科・文学部の入学者の入学試験の成績とその後の成績との関連を調査するための方法を策定した。

2005(平成17)年度の文学研究科および文学部研究生の選抜を、2004年9月および2005年3月に行った。

【2005年度】

2006(平成18)年度の文学研究科・文学部入学試験に関する業務を行った。文学部入試に関しては、2006年2月に前期日程の個別学力試験を、同3月に後期日程の個別学力試験を実施した。文学研究科入試に関しては、前年度同様、秋期・春期の二回に分けて実施した。2005年9月には、博士前期課程(一般)、博士前期課程(社会人)、博士後期課程(社会人)の試験を実施し、2006年2月には、博士前期課程(一般)、博士後期課程(一般)、博士前期課程(外国人留学生)、博士後期課程(外国人留学生)の試験を実施した。また、文学研究科の入学試験については、教育支援室において一定の期間を設けて過去の入学試験問題の閲覧サービスを行うとともに、文学研究科ホームページ上でも一部公開した。このほか、入学試験に関する各種広報活動を文学研究科ホームページなどを通して行った。

教授会懇談会の場で文学研究科・文学部入試に関する反省会を実施した。2005年3月に2005(平成17)年度文学部入試に関する反省会を実施し、2005年5月に同文学研究科入試に関する反省会を実施した。

適切な入学試験のあり方を検討するため、前年度に策定した方法に基づき、文学研究科・文学部の入学者の入学試験の成績とその後の成績との関連について調査を開始した。

2006(平成18)年度の文学研究科および文学部研究生の選抜を、2005年9月および2006年3月に行った。

2006(平成18)年度の文学部学士入学試験を2006年2月に行った。

(荒川正晴)

4. 学習支援部門

4-1. 学習支援

【2004年度】

部門会議を隔週に開催し、TA 雇用、インターンシップ推進、社会人サポート体制の検討など業務内容を確認しつつ初年度をスタートした。また教育支援室全体課題の高度専門職業人養成のためのカリキュラム策定について検討を行い、副室長と連携しつつ幾通りかの可能性を箇条書きにして年度末に総務委員会に提出した。TA については、8月6日締め切りで教員のTAに対する意識調査のアンケートを行い、情報の集約とフィードバックを行った。また11月25日に、TA研修会を開催し、TA 学生の意見を集約するためのアンケートも併せ行った。

TA の効率的運用については、問題点を整理し、会計・庶務係とも連携しつつ、円滑な執行を推進した。また、次年度のTA雇用の応募については、通常通りアナウンスをし、専門分野を軸に応募を呼びかけた。また年度末には事業を総括し、次年度への引き継ぎ事項を確認した。

【2005年度】

部門会議を隔週に開催し、TA 雇用、インターンシップ推進、社会人サポート体制の検討、また教育支援室全体課題の高度専門職業人養成のためのカリキュラム策定について、検討を行った。中心的業務の一つであるTAについては、4月13日にTA研修会を開催した。

TA の効率的運用について、会計・庶務係とも連携しつつ、円滑な執行を推進した。また、次年度のTA雇用の応募については、11月24日に研究科にアナウンスをし、専門分野を軸に、広く応募を呼びかけ、2回の公募を行って、2月には十全の雇用を確定した。また年度末には事業を総括し、次年度への引き継ぎ事項を確認した。

4-2. インターンシップ

【2004年度】

2004年度より、教育支援室学習支援部門内にインターンシップ担当の専門室員を置き、取り組みを強化した。その結果、2004年度には、新聞社(全国紙文化部)2件、音楽ホール2件を受け入れ機関として、各2名程度のインターンシップを実施した。なお、これに関連して、事前事後指導という形で、上記の諸機関から、授業にゲスト講師を招くことも行った。

これらの活動は2004年度インターンシップ報告書としてまとめられ、教育支援室ホームページに掲載されるとともに、冊子として刊行されている。ここには当該学生による報告、担当教員によるまとめ、受け入れ機関からのメッセージなどが、掲載されている。

【2005年度】

前年度に引き続き、専門室員を中心にインターンシップ関係の事業の強化に取り組んだ。まず、現状把握のため、インターンシップを含む授業科目についてのアンケートを行い、教授会に報告した。またこの結果に基づき、次年度のシラバスに「インターンシップを含む科目」という頁を設け、一覧できるようにした。さらに2005年度にも、新聞社、音楽ホールなどを受け入れ機関として、前年度と同規模のインターンシップを実施した。前年度にはなかった取り組みとして、インターンシップ終了後に、当該機関において報告会が行われた。これらの活動については前年度同様の報告書を作成中である。

(荒木浩、伊東信宏)

5. 生活支援部門

5-1. 生活支援

各種奨学金の情報収集と周知等、生活支援に関わる業務に関与してきた。また2004年度より学習相談室を設置し、メールによる学習相談に応じる体制が整った。必要に応じて、性差別問題委員会との連携も図ってきている。

奨学金関係で特記すべきことは、日本育英会から日本学生支援機構への組織変更に伴い、2004年度から日本学生支援機構大学院第一種奨学金の返還免除制度が改変されたことである。従来の免除職制度の利用者は多かったと思われるが、在学中の研究と学習成果を自己申請によってアピールし、高い評価を得た者が全額(半額)免除を受けるという新しいシステムを教職員・院生の間で定着させる方策を検討すべく、部門会議を重ねた。

2004年度は、対象者が少人数であったが、新制度の2年目にあたる2005年度は、博士前期課程修了予定者が申請するため、教育支援室のホームページなどを利用して情報を知らせるとともに、2005年10月6日には、返還免除に関する説明会を開催した。院生の参加者は35名にのぼり、この問題への関心の高さをうかがわせた。2006年度は、博士後期課程修了予定者が出てくるため、さらに慎重な配慮が求められることとなる。

5-2. 学習相談室

学内の各部局の学習・生活支援体制を調査したうえで、2004年度に教育支援室のなかに学習支援室を設置した。学習相談室では、専修決定、履修方法、進路相談など学習上の悩みに対して、メールおよび教育支援室への来室に応じて、随時相談を受け付けている。相談件数は、2004年度は6件、2005年度は11件であった。

(杉原達)

6. 就職支援部門

6-1. 就職支援

2004年度および2005年度に行った就職支援活動は、以下の(1)~(7)である。

(1) 就職ガイダンス

文学研究科・文学部では、例年10月第三木曜日に文学部主催の就職ガイダンスを実施してきた。その内容は、(イ)就職支援会社による就職活動説明、(ロ)就職先として人気のある2社による会社説明、(ハ)就職内定者(4年生2名、大学院博士前期課程2年生1名)の就職活動体験談、というもので、2004年度および2005年度も、同様の構成で実施した。



「就職ガイダンス」(2005年度)

2005年度は、これに加え、7月に文学部同窓会との共催による就職ガイダンスも実施した。これは、学生・院生たちに、就職に不利といわれる文学部であるが、文学部ならではのメリットもあることを気づかせることがねらいで、2005年度は、企業人事部勤務の卒業生1名をメイン講師とし、就職後1~2年目の卒業生2名をサブ講師とした。いずれのガイダンスも好評で、多数の参加者を得たが、学生・院生への周知をいかに行うかが課題として残った。

(2) 会社説明および企業セミナー

2004年度は、就職支援部門発足の年であったので、この種の催しは行わなかったが、2005年度は積極的に企画を行い、実施した。具体的には、(a)教育支援室における会社説明、(b)企業セミナーである。

(a)教育支援室における会社説明

2005年4月11日~15日(1社参加)、7月19・21・22日(3社参加)、2006年1月16日~20日(5社参加)の3回にわたって実施した。教育支援室の専用カウンターで、時間を決め、企業の人事担当者が説明を行うもので、1社につき、数名~十数名の参加者があった。学生・院生への周知が不足していたことや、企業の知名度等により、全体として低調であったといえる。そのため、2006年度は、次の(b)企業セミナーに統合することを考えている。

(b)企業セミナー

2005年12月1日、文学部の会議室において実施した。ブース形式で各社が会社説明を行う形式のもので、6社が参加した。あわせて、別室において、それぞれ時間帯を決め、業界説明と会社紹介を行うプレゼンテーションも実施した。また、ブースの1つを就職支援ブースとし、内定者2名が就職活動の方法を訪問者にアドバイスした。プレゼンテーションへの参加者は少なかったものの、各ブースを訪れた学生・院生は多数にのぼった。この企画はおおむね好評であったので、2006年度は、12月または1月に、2日連続で実施し、1日の参加企業も1~2社増やし、7~8社とする方向を考えている。なお、参加企業をどのような基準で決めるかが大きな課題である。

(3) 面接対策講習会

2005年度は、教育支援室が主催し、就職支援会社が後援する面接対策講習会を2月および3月に実施した。おおむね好評であったので、今後も実施したい。

(4) 就職情報の提供と整理

2004年度・2005年度とも、教育支援室において、文学研究科・文学部に対する求人票および求人票データベースを公開した。また、学生部提供の就職情報も公開した。

教育支援室には、学生の就職相談に応じることができるスタッフがいないため、就職相談に応じることができなかった。

しかし、2004年度・2005年度とも、学生には豊中学生センター就職相談室を訪れるよう勧めた。

その他、文学部同窓会に対して、就職支援活動の実態を知らせるとともに、現役学生・院生への就職支援をお願いした。2004年度は同窓会会誌『同窓会ニュース・レター』で就職支援要請を行い、2005年度は、教育支援室と文学部同窓会との共催で実施した就職ガイダンス記事を同誌に掲載した。文学部同窓会との関係では、同会が蓄積してきたデータをいかに共有するかが課題となっている。また、それを行うにあたって、個人情報保護の観点からルール作りも必要である。

(5) 就職関係図書の購入・管理

2004年度より就職関係図書の充実に努め、一部の図書は貸し出しも行えるようにした。2005年度は、就職情報誌や就職活動マニュアル本だけでなく、日本経済の現状に関する図書なども購入した。

(6) 就職支援部門ホームページの維持・管理

2004年度より、就職支援部門ホームページに、就職支援行事情報を随時掲載した。ただ、内容更新という点ではやや問題を残した。今後は頻繁に内容更新を行うとともに、就職活動体験記や就職活動のモデルケース紹介などを載せるなど、内容を豊富にする工夫が必要である。

(7) 進路・就職(内定)状況調査

例年、文部科学省による「学部卒業予定者・大学院修了予定者の進路・就職(内定)状況調査」に応じ、文学研究科・文学部では、10月・12月・2月・4月のいずれも1日時点における調査結果を学生部に提出することになっている。これは学生・院生が提出する「進路・就職(内定)届」を集計した結果を報告するものであるが、2004年度まで、この届けの提出率は極めて低かった。2005年度は、種々の工夫により提出率の向上に努め、提出率は飛躍的に高まった。

(村田路人)



「面接対策講習会」(2005年度)

7. 博物館実習

2004年度は、3つの博物館に計34名、2005年度は、6つの博物館・美術館に計42名の実習生を受け入れて頂いた。両年度とも、実習前年の12月に実習履修予定者登録を行い、実習が行われる年の7月初めに実施した実習ガイダンスで、最終的な実習生の振り分けを行った。また、博物館実習委員(3名)は、実習実施前に手分けをして、お礼と挨拶のため各受け入れ館に赴いた。

(村田路人)

評価・広報室

組織・体制

1992年に文学部内に自己評価委員会が設置されて以来、自己評価及び外部評価は繰り返し行われてきている。その後組織が改変され、企画・評価委員会として設置形態やその理念、将来計画などを検討すると同時に、旧自己評価委員会の評価活動や部内基礎データの収集、学生への授業アンケートなどを担当してきた。2004年度には、法人化に伴って従来

の企画・評価委員会が、設置形態や将来計画を検討する部門と切り離され、同時に従来からあった広報委員会と合体して現在の評価・広報室が組織された。この2004年度～2005年度の2年間は、評価・広報室として室体制を構築しつつ、評価関係及び広報関係の仕事を行った。

評価・広報室は、研究評価部門、教育評価部門、広報部門、ネットワーク部門の大きく4つの部門を持つ。研究評価部門では教員や大学院生の研究業績の収集や社会貢献などのデータの収集と年報の編集、教育評価部門では教育関係のアンケートやファカルティ・ディベロップメントの実施などを担当する。また広報部門では、文学部や文学研究科の紹介冊子の編集・刊行、公式サイト管理運営、大学見学会や説明会の開催、高大連携の推進などを行う。ネットワーク部門では部内サーバやネットワークの整備・運営を行う。室には室長1名と副室長1名が全体を統括しながら各部門間の調整を行い、これ以外の業務や緊急の課題にも迅速に対応している。この4つの部門において各部門長(チーフ)1名とそれぞれ数名ずつの教員が分担して活動している。

活動状況

1. 評価・広報室長・副室長

1-1. 会議（室会議、総務委員会）

会議は、各部門の個別の部門会議、室長と副室長そして部門のチーフによるチーフ会議、室員全体が出席する全体会議がある。日常的な活動は各部門に分担されており、各部門において単独で会議を開催して多種の問題に対応している。チーフ会議は、隔週で開催され、本部からの依頼事項や室での問題点を議論し、方針の決定などを行っている。全体会議は教授会日の午後で開催し、室員全員で諸問題を議論し解決にあたり、またさまざまな方針を確認している。室長は隔週の総務委員会に出席し、室の活動の報告をし、また他の室との連携、研究科内の問題を室に持ち帰って対応している。

1-2. データ収集（全学基礎データ、教員基礎データ、基礎評価シート）

「全学基礎データ」とそこに含まれる「教員基礎データ」のデータ収集は、全学規模の取り組みであり、文学研究科はこれに積極的に関わることで自己評価への意識を高め、全学の取り組みに協力してきている。これらを基に『全学基礎データ 2004』、『全学基礎データ 2005』を刊行し、研究科内での便宜を図っている。『年報』『外部評価報告書』など研究科独自に行う評価活動に加え、これらの冊子は毎年刊行することとしており、研究科の評価活動の意識の高さを示している。基礎評価も全学規模の評価活動であり、研究科としてはこれにも積極的に協力する姿勢を示している。2005年度に作成したその基礎評価シートは全学で高い評価を受けた。

1-3. 年度計画・達成状況

全学規模の評価活動の一環として、毎年年度計画を策定し、年度末に達成状況を自己評価するシステムがある。これは中期計画・中期目標の方針にのっとり行うものである。この2年間の年度計画は大きくは評価体制の構築と広報活動の活発化であった。つまり自己評価と外部評価、授業アンケート実施、専門分野評価体制を刷新することと、学外に向けての情報の公開や発信などであった。評価活動においては、自己評価書である『年報』は隔年刊で定着しつつあり、外部評価も2005年度には実施した。授業アンケートも、大学院・学部のみならず、留年生・休学生、卒業生のアンケートを実施し、データの蓄積を行っている。今後はこれらのデータを利用して、ファカルティ・ディベロップメントなどの展開と合わせて、教育体制をよりよいものに改善していくことが求められている。広報活動も活発化している。サーバの管理・運営体制も確かなものになり、研究科の公式サイトも昨年度にはリニューアルを行い、2006年度当初より運営されている。研究科や学部の紹介冊子も年を追うごとに充実してきており、また2005年度には文学部紹介ビデオを製作し、各種の見学会や説明会などで映写して理解を深める一助としている。また見学会や模擬授業、出張授業なども増える傾向にあり、社会連携の必要性が要請される中、現代社会の要望に対応できているように思われる。

(永田靖)

2. 研究評価部門

2-1. 年報

2004年度には過去2年間(2002～2003年)における研究教育活動の情報を収集整理した『年報2004』を刊行した。内容は研究科全体としての組織運営・活動に関する第1部と各専門分野単位の活動をまとめた第2部からなり、総頁数はA4判330頁である。それぞれの専門分野が活動成果に基づいて行った「過去2年間の自己点検と評価」を合わせて掲載することで、たんなる情報発信のための冊子ではなくその作成作業自体が自己点検の機会となるように考慮した。今後も原則として2年ごとに『年報』を刊行する予定であり、2005年度には次号へ向けての準備作業に取りかかっている。今後も引き続きその内容やデータ収集法などについて工夫を重ねていきたい。なお、『年報2004』は学内の他部局、学外機関等に約430冊を配布した。



『年報2004』文学部・文学研究科
公式サイトにてPDFで公開中

2-2. 外部評価

研究科の年度計画では2005年度に外部評価を実施する予定であったので、2004年度にはその準備作業として必要データの選定や収集などを進めた。

2005年度当初からは、研究評価部門が主担当となって外部評価の方式について具体的な議論を重ねた。その結果、2002年度に専門分野別の大規模なピアレビューを行っているの、今回は2002～2004年度の文学研究科の全体的な組織評価として実施し、評価事項も「研究の現状」「教育・研究の実施体制とその方法」「教育の達成状況」「学生への支援体制」を柱として研究科の活動全般を対象とする方針が定まった。また、評価委員としては国立大学、私立大学の機関長や部局長の経験者である3名の方に依頼することになった。9月末までに具体的な提供資料の作成を終え、評価委員に送付するとともに、2006年1月10日を目途に評価書を提出していただくよう正式に依頼を行った。評価期間中には必要に応じて評価委員による訪問調査の機会を準備し、実際に1名の委員が来学された。評価委員からは期限内に評価書を提出していただいた。その内容についてまず評価・広報室内で協議したうえで、2006年3月20日にはファカルティ・ディベロップメントの一環として全教員対象の外部評価報告・検討会を開催し、ひろく意見交換を行った。



『外部評価報告書2005』文学部・
文学研究科公式サイトにてPDF
で公開中

評価書でとりあげられた課題や問題点については、3名の委員が一致して指摘された事項と見解のやや異なる事項とがあつて、本研究科としてもなお分析が必要であるが、とりわけ前者については実質的な改善をはかる取り組みがまず求められよう。

2005年度に行った外部評価の内容は、委員からの評価書、現時点で本研究科が認識している「課題と展望」、評価委員に提供した全資料などを収載した『大阪大学大学院文学研究科外部評価報告書2005』(A4判293頁)として2006年3月に刊行し、学内外に約450冊を配布した。

2-3. 専門分野別年度目標

2004年度は文学研究科の自己点検評価の実施方法について検討した。その結果、23専門分野が年度当初に「教育」「研究」「社会連携」等について目標を設定し、これに対する達成度を年度末に自己点検する方式をとることになった。研究科が外部評価の一つとして採用する分野別ピアレビューの際の評価資料にもなるように考慮したものである。2005年度にはこの方式による自己点検評価を試行した。今後は、年度目標や達成度の自己評価結果をどのように周知活用していくかといった運用面についての検討をさらに進めていくことが必要である。

(福永伸哉)

3. 教育評価部門

2004(平成16)年度の最初の室会議で、中期目標期間中に学生による授業評価や卒業生による評価など、諸種の評価を2回以上実施することとした。ファカルティ・ディベロップメント(FD)についても各年度1回ずつ実施することとした。

3-1. アンケート

アンケートについては、当該2年間において、下記のように計5回実施した。それらの結果およびその分析については、各項目右の括弧内に示す資料を参照いただきたい。これらのアンケートについては、その結果をどのように教育活動に反映させていくかが重要であり、教育支援室との連携等を含めてさらなる検討が求められている。また質問項目や回答設定をはじめ、アンケートそのもののシステムについても引き続き改善の必要がある。

(1)「留年者・休学者に対するアンケート」(『年報2004』掲載)

2004年7月30日に、総計246通を発送した。2004年8月31日をアンケートの返送期限としたが、9月に入っても回答が戻ってきたため、9月30日到着分までを集計対象とした。

(2)2004年度文学部開講科目を対象とする「授業改善のためのアンケート」(『外部評価報告書2005』掲載)

2005年1月から2月にかけて、文学部専任教員担当の授業に限定して実施した。

(3)2004年度「大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」(『外部評価報告書2005』掲載)

文学研究科博士課程の院生を対象。ウェブ上で端末から各自で回答入力してもらう方法により、2005年2月7日から3月15日にかけて実施した。

(4)2005年度「大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」(『年報2006』=本書掲載)

2005年度文学研究科に在籍する大学院生(休学者を除く)を対象。実施期間は2005年11月21日から12月2日。マークシート(自由記入欄付き)を各研究室の助手等を通じて各人に配布し、文学部棟正面玄関に設置したボックスにて回収した。

(5)卒業生アンケート(『年報2006』=本書掲載)

2005年12月16日に547件発送。うち91件住所不明で返送。(456件着) 2006年1月末日までの回答数103件。2月24日までの回答数108件。

3-2. ファカルティ・ディベロップメント

FDについては、下記のように実施した。試行段階にあり、いずれもテーマや講師を決めるまでにかなりの時間を要したが、これらを通じて徐々にFDについての共通認識が得られてきたといえよう。

(1)講演会

2005年3月7日(月)

1. 「FDの理念と課題」 新潟大学現代社会文化研究科教授・前大学教育開発研究センター長 小林昌二氏
2. 「授業評価アンケートとFDの課題」 大阪大学大学教育実践センター助教授 望月太郎氏

(2)報告検討会

2006年3月20日(月)

「研究教育の課題と展望」

1. 2005年度「外部評価」の報告と検討
2. 大学院生アンケートの結果報告と検討
3. 卒業生アンケートの結果報告と検討

(根岸一美)

4. 広報部門

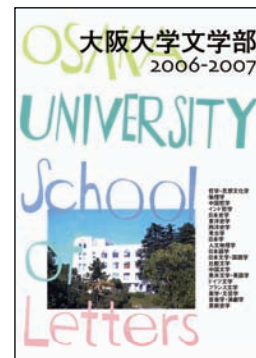
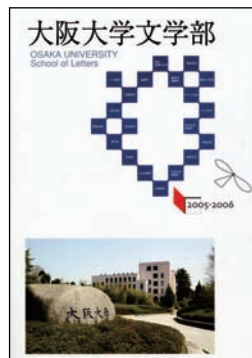
2004年4月1日に独立法人化した大阪大学の文学研究科・文学部においては、委員会制度の改革が行われ、整備されたうちの一つの室として評価・広報室が発足し、その中の一部門として、広報部門はそれ以来新たな活動を行っている。広報部門は大学における広報の役割の重要性を認識し、文学研究科・文学部から発信する情報を常に刷新し、また広く高

校生や社会人に教育と研究の現況を提供し続けている。ここでは、大きく、冊子メディア、電子メディア(HP)、オープンキャンパスに分け、三つのジャンルの活動について、2004年度から2005年度を概観し、その問題点と今後の展望を述べておきたい。

4-1. 冊子メディア

文学部で広報活動の一環として重要なものが、『文学部紹介』である。この冊子は、毎年刊行されているもので、各高校、各種大学説明会などで配布される。毎年6000部を刊行し、文学部の教育と研究の現状と理念を分かりやすく紹介している。構成は、文学部のアドミッション・ポリシー、文学部長挨拶、入学後の学習課程、各専修紹介、文学部沿革、卒業後の進路、その他懐徳堂記念会の紹介や、埋蔵文化財調査室などの紹介まで、文学部に関わる基本的な事項が網羅された簡便な紹介冊子である。

中でも専修紹介には力を入れており、毎年のように掲載写真を刷新し、紹介原稿に修正を加えることで常に最新の情報を提供している。またここでは各教員すべての、専門領域と研究テーマ、そして高校生へのメッセージを、顔写真入りで掲載している。文学部内の専修の教育と研究のあり方を、各教員の生の声と写真とで、きわめて人間的で、近づきやすく、そして視覚的にも豊かに提示している。2004-2005年版からは、従来の編集方針をさらに分かりやすく、読者の視点を導入する編集に変更した。在学生のメッセージの欄を強調し、専修紹介では各研究を分かりやすくキャッチ・コピーで提示



『大阪大学文学部 2005-2006』 『大阪大学文学部 2006-2007』

している。また卒業論文一覧を各専修紹介の中に収め、同時に開講科目の題目名を掲載することで、専修のイメージを膨らませやすくしている。また卒業後の進路のページにも力をいれ、文学部を出た後の姿をイメージしやすくしている。

2005年度に編纂した2006-2007年版においては、高校生及び学部1年生が2年次に配属になる専修決定の参考にするという従来の意味合いに加えて、より社会に開かれた広報誌という位置づけに軌道修正した。予算に限りがある中での広報活動である以上、ターゲットを絞るよりは、広く社会に文学部をアピールする戦略の方が有効だという判断である。そのために、「文学部人物クローズアップ」というコーナーを作り、何人かの文学部教員の教育研究活動を取り上げた。また、高校生の情報への要求は高まっており、新入生アンケートを見ると、従来から力を入れていたはずの専修紹介なのだが、さらに詳しく説明して欲しいという意見が多くあった。教員の詳しい専門内容は『大学院紹介』という別の広報誌に譲って、簡明を目指したわけだが、高校生に対しても教員の著書などの業績や専修の専門内容をより詳しくアピールする必要があると考えられる。今後の課題である。

4-2. 電子メディア

2006年度入学生の新入生アンケートを見ると、大学と学部選択にあたって学生たちが参照する割合が最も大きいのが、文学部公式サイト(以下HPと略記)である。ほとんどの新入生はHPを見て、詳しい情報を得ている。HP充実は、広報活動としては、『文学部紹介』と共に極めて重要な位置を占めている。

HPの中では、文学部紹介での内容とは基本的に変わらないものの、差違化を図った情報発信を行っている。大学院入試問題の掲載を行うことで、入学希望者への便宜を図っている一方で、各教員の出版、受賞、研究会などの様々な活動をタイムリーに掲載することに努力し、冊子媒体にはない迅速な情報提供に資している。また国際化が叫ばれる中、2003年度から英語版HPを作成し掲載している。またここには、各研究室で独自に管理運営している研究室サイトがリンクされており、より詳細な情報はそれぞれの研究室サイトで提供している。

大阪大学文学研究科・文学部のHPは何年か同じデザインを踏襲してきたが、2005年度に、よりスリムで分かり易いHPを目指して準備を行い、2006年度よりデザインを一新し、情報を取り出しやすいものとした。



【文学部・文学研究科公式サイト】URL <http://www.let.osaka-u.ac.jp/>

4-3. オープンキャンパス

広報活動の3つ目の柱はオープンキャンパスである。これには7月に文学部独自に行なう文学部見学会、大阪大学の全学部が8月に行う大学説明会がある。

7月の見学会は広島県城北高校の希望に応じる形で始められたものだが、現在では近隣の大阪府第1学区の高校にも呼びかけて、平均して毎年40名前後の高校生の参加がある。毎年教員がそれぞれの専門を高校生向けにわかりやすく授業し、文学部の教育と研究への関心の向上を図っている。同時に、各研究室を開放し、自由に高校生に研究室の雰囲気味わってもらい貴重な機会を提供している。この見学会は文学部独自のものであるため、高校生のニーズに合わせて柔軟に対応している。

また8月下旬に行われる文学部説明会は年々大規模化している。2005年度は実に一千名を越す参加者があり、関心の高さが窺われた。学部長の挨拶の後、教員の講演、在校生のスピーチ、各ブロックから一人ずつ教員が出て各ブロックの教育と研究を分かりやすく説明する。その後、参加者との質疑応答があり、参加者の理解を高める努力をしている。

2005年度からは、個別に高等学校が見学を要望されるケースが増えている。その都度、出来る限り対応するよう努力を行っており、2005年度には、大阪府立春日丘高等学校、金沢二水高等学校、清風高等学校が訪問された。2006年度はさらに増加することが見込まれる。

この他、各種大学説明会が学外で開催されているが、それらの説明会にも上記冊子媒体や入学要項、その他の冊子を提供するなどして広報に努めている。

4-4. 展望

2004年度から2005年度の広報関係の状況は以上の通りであるが、文学研究科としては破格の予算を計上して、懸命の広報活動を行っているにもかかわらず、やはり私立大学の派手な広報には太刀打ちができないということは事実である。金銭的なリソースが少ないというだけでなく、評価・広報室全体の支援があるとはいえ、広報部門の教員は3人でしかなく、紹介冊子、電子メディア、オープンキャンパスという三本柱のルーティンをこなすだけで精一杯である。今後、一層激化する大学間競争において、広報活動が果たす役割は大きく、何らかの抜本的対策を講じることが可能な状況を是非作り出していきたい。今後の課題として、広く社会に開かれた広報活動の活性化を挙げた。文学部は大学院重点化された後、文学研究科が本体となったわけだが、大学院の広報にまで手が回らないという問題点もある。様々な課題を抱えながらも、何とか少しずつでも改革を進めることが肝要であろう。『文学部紹介』の方向転換の模索、HPの刷新などはこの二年間の成果であり、また文学部見学会を積極的に受け入れているのも、地道な活動ではあるが、着実に広報を行っていくという点では重要なことである。今後ともこのような努力を積み重ねていくことが必要であると考えられる。

(服部典之)

5. ネットワーク部門

2004年4月に評価・広報室が設置された際、従来の情報通信網整備管理小委員会が担っていた業務を、同室・ネットワーク部門が引き継いだ。主たる業務は、文学研究科サーバ管理、教職員および学生へのメールアカウント発行、その他、研究科内ネットワーク設備の管理およびネットワーク・セキュリティの維持全般である。以下に、「サーバ管理」「メールアカウント」および「ネットワークの維持」に分けて2年間の総括を行い、最後に2006年度以降へ向けての展望を述べる。

5-1. 文学研究科サーバ管理

前年度に引き続き、文学研究科内にサーバマシンを置き、Webサーバ、メールサーバ、DHCPサーバ、ネームサーバを兼ねて運用していた。Webサーバには、文学研究科・文学部のホームページだけでなく、各講座・研究室のホームページ、教育支援室、研究推進室のページ、21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」のホームページが収められている。このサーバの実質的な管理は、基礎工学研究科、情報科学研究科等に所属する、大学院生をアルバイトとして雇用し、その方にあたっていただいていた。代々の管理者には、献身的に管理に取り組んでいただき、そのおかげで、この2年間は幸い大きなトラブルもなく、運用を続けることができた。今期、管理にあたって下さった垣内洋介さん(基礎工学研究科、2001年度～2005年度)、田中直樹さん(基礎工学研究科、2002年度～2004年度)さんに、この場を借りてお礼を申し上げたい。

しかしながら、このような管理体制には問題があることも確かである。そもそも、サーバ管理という責任の重い業務に学生があたることの適切性が問われなければならないであろう。学内のみならず、社会におけるITへの依存度が増せば増すほど、サーバの安定運用ということが求められるのであり、Webやメールが止まることで、さまざまな業務がたちまち大きな影響を受けることになるのである。しかも、外部からのアタックやウィルスメールなど、ネットワークに対する脅威への不安も日々高まる一方であり、セキュリティ保持の作業だけでも、気の抜けない、大変責任の重い業務である。そのような重責を学生に任せることにそもそも本質的な問題があった。また、昨今、勤務管理の厳格化が進められる中、サーバ管理という業務がアルバイトという雇用形態となじみにくいことも明らかになってきた。

ネットワーク部門では、このような問題を解決するために、サイバーメディアセンターとも連絡を取りながら、いくつかの可能性について検討を進めた。例えば、サーバおよびネットワークの管理にあたる非常勤職員の雇用、業者によるサーバのホスティングサービスへの移行などである。結果として、2005年度末、サイバーメディアセンターがホスティングサービスを請け負うとの方針を示されたので、その恩恵に与ることを決定した。年度末に、関係者が打ち合わせと準備を重ね、2006年4月17日をもってサーバの移行を完了した。Webサーバ、メールサーバ、ネームサーバはそれぞれサイバーメディアセンター内の別々のマシンに移され、従来の文学研究科サーバマシンには、DHCPの機能のみが残された。このことによってサーバの安全性が格段に増大したことは間違いなく、また、学生によるサーバ管理という不安定な状況が取り除かれたことも、喜ばしいことである。

5-2. メールアカウント

上に述べたように、文学研究科サーバマシンでは、独自のメールサーバを立ち上げ、…@let.osaka-u.ac.jpのアカウントを発行している。教員および非常勤職員は、ほぼ全員このアカウントを利用している。大学院生・研究生に対しては、1999年度には238名に対して発行していたが、2006年6月現在では64名に止まっている。この減少は、民間のプロバイダやフリーメールの利用者が増え、特に大学発行のアカウントを必要としなくなったこと、また文学研究科のアカウントは学外からアクセスできないなど、利便性において劣る面があることなどの理由によるものと考えられる。

一方、メーリングリストの設定は増加しており、室・委員会、COE等の運営において、メーリングリストの利用はもはや不可欠のものとなっている。

これだけメールの利用が必要不可欠のインフラとなった以上、もとめられるのは、安全・安心な運用である。これは即ち、サーバダウンの回避、ウィルスメール、スパムメール等の排除など、セキュリティの確保を意味する。サーバの維持については、前節に述べたとおりで、管理者の懸命の努力により、高い水準が保たれたと考えるが、2006年度からのサイバーメディアセンターによるホスティングサービスによって、より安定した運用が期待されるのである。ウィルスメー

ル対策についても、ODINS が提供するウイルス監視システムを介することによって、かなり安全性が高まった。しかしながらこれも完全ではないため、引き続き、ユーザ端末におけるウイルスチェックなど、今後も油断なく続行していく必要がある。一方、最近とみに増加しているのが、スパムメールであり、メールの利便性を大きく損なうのみならず、ワンクリック詐欺などの被害も生んでいる。これに対しては、サーバや端末でのスパムチェックで対応しつつあるが、いまだ、完璧な防護策とはなりえていない。

5-3. ネットワークの維持

さほど高頻度ではないものの、時折、ネットワークの不具合が生じている。端末がネットワークに繋がらない、あるいは極端に繋がりにくいなどの現象であるが、原因としては、端末の不具合、設定の誤り、DHCP のトラブル、通信機器やケーブルの不具合、ウイルスの感染等さまざまであり、その原因の特定が難しい。不具合の報告を受けた場合、ODINS の職員の方が対応して下さるばあいもあるが、大部分はネットワーク部門の教員が出向いて、原因の特定および問題解決にあたってきた。専門家ではない教員が、本来の教育・研究のための時間を割いて作業にあたることは、大変非効率的であり、望ましいこととは言えないが、部局ネットワークの維持が部局の責任として任されている以上、致し方ないことである。このような体制は今後とも継続するのであり、管理にあたられる教員の方に多大なご苦勞をおかけすることと思う。少しでも事態を改善するためには、ネットワークをさらに小さなサブネットワークに分割し、責任を分散させることが必要であると考え、この点に関しては、次節で述べたい。

5-4. 展望

すでに述べたように、Web サーバ、メールサーバ、ネームサーバはすでにサイバーメディアセンターのホスティングサービスに移行しているが、DHCP サーバは維持しており、これを今後どのようにしていくかが一つの課題となる。DHCP に関しては、前節に述べたように、いままでトラブルの原因となってきた経緯がある。IP アドレスの枯渇や、その他の原因で IP アドレスが取得できないために、端末が不接続となるトラブルである。また、ウイルスの感染や不正アクセスなどの事態が生じたとき、問題となる端末を特定しにくいというのも、現在のシステムの難点である。この問題を克服するためには、DHCP を最低限維持したうえで、文学研究科ネットワークを NAT(ネットワークルータ)によって小さく切り分け、その中でローカルなアドレスを使用するという方式が有望である。この方式は、すでに美学棟で試行されている。さらに、このサブネットワークの管理責任者を設定して、サブネットワークの問題はできるだけその中で解決していただくという管理方式を徹底していけば、ネットワーク部門の教員の負担もある程度軽減されるであろう。インターネットの維持・管理は、全てのユーザによる不断の努力が不可欠であるということを、文学研究科ユーザが自覚していくためにも、管理責任の分割は必要な方針であると考え。

(金水敏)

6. ビデオ製作チーム

2004 年度に文学部紹介ビデオ製作作成の計画を立て、2005 年度に完成した。評価・広報室の中でビデオ製作チームを組織し、立案から撮影、編集まで立ち会った。当初は、複数のビデオ製作者と計画について議論し、最終的に一つの業者に決定した。2004 年 6 月から具体的な撮影を開始し、各研究室、授業風景、キャンパスライフ、卒業論文試問、卒業式そして入学式と、文学部学生の過ごす 1 年をセミ・ドキュメンタリー方式で撮影していくものであった。同時に、各専修の授業風景も織り込み、学生の生の声を豊富に取り入れた具体的な内容となっている。そのため 1 年以上の撮影期間を必要とし、完成は 2005 年 8 月となった。完成したビデオは、各種説明会や見学会などに利用され、好評を得ている。映像のデータはハードディスクで納品されており、部分的にリニューアルしていくことでアップ・トゥ・デートな映像に再編集できるようになっている。



文学部紹介ビデオ『文学部の春夏秋冬
ようこそ、大阪大学文学部へ』(約 30 分)

(永田靖)

国際連携室

組織・体制

室長 1 名、副室長 1 名が全体の事業を統括する中で、留学生の勉学・生活全般にわたって助言・支援を担当する留学生支援部門と、日本人学生の海外の大学への送り出しのための支援、情宣活動を担当し、また海外の大学との交流協定締結に関する業務を担当する教育交流部門、および、国際共同研究、学術交流協定など海外の大学・学術機関との連携を担う研究交流部門の 3 部門体制をとり任務にあたっている。それ以外に本室には国際交流センター(留学生相談室)が併設されており、常駐の専門スタッフと留学生専門教員が配置されていて、日常的に留学生のきめ細かいケア、指導を行っている。事務部門としては教務の国際連携担当スタッフが室員、とりわけセンター専門職員、留学生専門教員と緊密に連絡をとりつつことにあたっている。

活動状況

定例の会議としては教授会開催日に会議をもちさまざまな事項を審議しているが、必要に応じ、該当する部門の担当者や室長/副室長らが協議し対処している。

1. 2004 年度実績

研究科長と留学生との懇談会を定例化し、茶菓を提供しながらくつろいだ雰囲気の中で自由に意見交換する場を作っている。その場でも出された意見については室会議で議論し、総務委員会へ提言するなど、後に具体化した提案も多い。留学生と日本人学生、教職員の交流については従来も年末のパーティーなどを設けてきたが、あらたに「ことばの教室」と題し、留学生のなかから講師を募り外国語の学習を通じて交流をさらに深める場を設けた。そのために本館 2 階に交流コモンルームを整備した。留学生への各種奨学金の推薦者決定については公平に選ぶ困難さを感じていたが、より公平を図るため、書類選考を厳密に行うこととした。一定額以上のものに関しては、それに加え、複数の室員が面接するなど、きめ細かい選考方法を模索中である。大学院前期課程出願資格として研究生期間 1 年という要綱が従来より問題視されていたが、室での慎重な検討の後、半年と改めることで懸案を解決したことも大きい。

2. 2005 年度実績

ホーム・ページ立ち上げのための準備を完了したこと、留学生に貸し出すパソコン、プロジェクター等の備品を充実させたこと、また、国際交流センターを一部改装し、留学生が気持ちよく相談にのれる環境作りを行ったことなどが地味ながら今後の活動の基盤整備として意義深い。その他、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」と連動して、主として韓国在住の旧留学生のネットワーク構築に尽力し、室員の主要メンバーが訪韓して、連携の絆を強めた。まもなく配信が始まるメールマガジンの準備態勢を整える作業も進めている。

(森岡裕一)

国際交流センター(留学生相談室)

組織・体制

国際連携室に併設された国際交流センターでは、室長(国際連携室長と兼任)1 名、副室長(国際連携室副室長と兼任)1 名の統括の元に、常駐の専門職員(留学生アドバイザー)と留学生専門教育教員 1 名が配置され、留学生および招聘研究員を勉学・研究と生活の面で支援する傍ら、国際交流に関する教員の活動、教務系の業務を補佐している。常駐の留学生アドバイザーは、留学生、招聘研究員からの生活、勉学・研究上のさまざまな相談にあたる他、行事、教務関連業務等々を担当し、留学生専門教育教員は、論文作成法と日本語の授業を受け持ち、個人指導も行っている。

活動状況

1. 留学生相談

日常の業務として、留学生アドバイザーと留学生専門教育教員が、留学生の勉学・研究および生活上の多様な相談にきめ細かく対応している。件数は多くないが、招聘研究員からの相談にも応じている。

勉学に関する相談のおもなものは、大学院入学試験、学位論文、研究の方法、休学・退学・転学などに関する制度についてであるが、進路や大学での人間関係などに起因する精神的な悩みもある。

また、ノートパソコン、ヴォイスレコーダーを購入して貸出している他、学位論文執筆者には日本語の添削を目的とする論文チューターをつけるなど勉学の援助をしている。

生活上の相談では、宿舎、奨学金、ビザ、アルバイト、リサイクル用品、医療についてが多いが、相談内容は日常生活の細かい事柄から精神的な問題に至るまで非常に多岐に渡る。心身の病気や事故については、必要に応じて保健センター、学生相談、指導教員などと連携を取りながら対応している。



国際交流センター内での相談の様子

2. 年間行事

留学生生活の充実を図るために、1年を通じて次のような行事を催している。

- ・新入生オリエンテーション(4月、10月)
- ・チューターガイダンス(5月、11月)
- ・親睦バス旅行(4～5月、2004年度は信楽とミホミュージアム、2005年度は倉敷)
- ・研究科長との懇談会(10月)
- ・親睦パーティー(12月)
- ・日本の伝統芸能鑑賞
- ・ことばの教室(2004年度は中国語、2005年度は韓国語)

これらのうちには、親睦パーティーやことばの教室など日本人学生や教職員との交流の場となるものも含まれ、学内の国際交流を深めるのに役立っている。



ことばの教室—韓国語— (2005年)



第25回親睦パーティー—留学生と共に— (2005年)

3. 教務関連業務

教務関連の業務として、入学希望者や教員からの受け入れに関する問い合わせへの対応、奨学金・寮の応募のとりまとめ、印刷物等の掲示・配布、各種調査の回答などを行っている。



国際交流センター(留学生相談室)

4. その他の留学生支援

留学生と学内の人や部局、学外の人や留学生支援団体をつなぐ役割を果たしている。具体的には、留学生センターが催す日本語・英語プログラム、ホストファミリープログラム、地域の学校の国際理解プログラム、海外留学オリエンテーションなどに協力すると共に、留学生や招聘研究員に学外の催し物や趣味に関する情報を提供し、参加申込みの補助を行っている。日本人学生の調査研究や地域団体の企画へ留学生の人材紹介もしている。

5. 広報

文学研究科・文学部の留学交流・学術交流のおもな事項を記録し、広報することを主目的として、年 2 回『室報』を刊行している。2004 年度は 49 号、50 号、2005 年度は 51 号、52 号を刊行した。

6. 留学生アドバイザー

留学生アドバイザーは、JAFSA(国際教育交流協議会)に加入する一方で、大阪大学の他部局で留学交流に携わる職員および留学生センター生活指導部門と連携し、大阪大学留学生支援フロントスタッフネットワークを組織している。年 4 回のミーティングでは情報を交換し、関係部署に働きかけて、より良いサービス体制の構築をめざしている。

(山田和子)

組織・体制

研究科長を取組代表者にして、実施責任者 1 名、実施担当者 2 名をおき活動を行っている。また専従の補佐員を雇用し実務にあたっている。事業の実際の運営については、文学研究科全体が支援する体制をとっているが、とりわけ、4 つの主要事業に直接関わっている芸術学講座、世界史講座、西洋文学・語学講座、および、国際連携室の支援を受け、効率的な運営を行った。

活動状況**1. 芸術関連機関とのネットワーク形成とインターン、リカレント教育の遂行**

アートネットワーク会議(PAN: Praxis, Arts Network)を 3 月に国立国際美術館において開催。美術、音楽、演劇、映画等関係者約 60 名が集まり、ネットワークの可能性について議論を交わした。同時にネットワークの参加者の登録も開始した。大学院生を京都国立美術館などに派遣し、実際の業務ならびにその補佐を行うとともに、インターンなど今後の協力の可能性についても調査を行った。

2. 中等歴史教育研究会の組織化

大学院学生が運営し、京阪神だけでなく北海道、関東、東海、中国、九州の高校・予備校教員も共同研究者として、計 4 回の研究会を開催したほか、ホームページ・メーリングリストも立ち上げた。それらを通じて、アジア海域史と東南アジア史、近現代の宗教史、日本列島の北方史などの分野で現在の学界動向を踏まえた歴史教育改善の方向性を明らかにした。

3. 理想の教科書像の策定

すでに刊行されているフランス文学史、アメリカ史の教科書については使用者へのアンケート調査、古書店での書き込み等の調査をふまえ、改訂版の方針を策定した。新規のドイツ文学、英語英米文学の教科書についても編集方針を定め、院生への役割分担を終えて、出版元との交渉に入っている。

4. 国際連携ネットワーク構築と海外インターンシップ

旧留学生のメールアドレスの整備を終え、メールマガジン編集方針もほぼ策定されており、そのための原稿も集まりつつある。また、旧留学生が多い韓国(ソウル)にて同窓会の立ち上げに関係者が参加し、協力体制を確立させた。日本人学生の短期留学先として米国アイヴィーリーグを中心に選定のための基礎的リサーチを行った。

(森岡裕一)

客員研究員の受け入れと本研究科教員の海外における研究活動

1. 客員研究員

2004年度の客員研究員は総勢19名、中国、韓国からの研究員が多く、あとは欧州2名、米国・オーストラリアからそれぞれ1名ずつ受け入れている。分野的には日本文学、日本語研究が圧倒的に多いが、他に芸術学、考古学分野の研究員なども数名受け入れている。2005年度は16名。やはり中国、韓国が大半を占め、分野的にも前年度とほぼ同様の傾向である。

2. 教員の海外研究活動

本研究科教員の海外での研究活動については、2004年度の外国出張は延べ65件と大幅に伸び、地域別内訳は欧米32件、アジア32件、その他が1件となっており、ほとんどがフィールドワーク・学会参加および発表・講演の目的で、科研、海外政府、大学の招聘による出張である。海外研修は21件、うち欧米11件、アジア10件となっている。2005年度の外国出張は54件で、内訳は欧米23件、アジア26件、オーストラリア5件となっている。海外研修は19件、うち欧米9件、アジア10件である。教員数で単純計算すると、この二年間は、ほぼ教員全員がなんらかの形で海外でのフィールドワーク・学会参加・研究発表・講演等の活動に従事したことになり、これに在外研究等、長期の海外滞在者を加えると、本研究科の研究成果の一端を海外において積極的に公開し、還元を行ったと結論づけることができるだろう。

留学状況および留学生の受け入れ状況

1. 留学状況

いまだ数量的には目覚ましい成果をあげているとは言いがたい。2004年度に送り出した学生は北米2名(学部4年、博士後期課程3年)、オセアニア1名(博士後期課程3年)、ヨーロッパ1名(博士後期課程3年)の計4名であり、2005年度はアジア2名(学部4年、博士後期課程2年)、北米2名(学部3年、博士後期課程3年)、ヨーロッパ3名(学部4年2名、博士後期課程3年)の計7名である。以上はここ数年の傾向と大差はない。今後、さらに、海外の大学事情、留学情報の周知、TOEFL等の語学能力テスト受験のアシストなど国際連携室として支援の方策を検討しなければならない。2005年度から開始された「魅力ある大学院教育イニシャティヴ」と連動して日本人学生の海外先進大学への送り出しについては、いっそうの努力が必要だろう。

2. 留学生の受け入れ状況

2004年度は、合計116名(男38名、女78名)の留学生を受け入れている。地域別では韓国・中国・台湾が圧倒的に多く、ついでタイ・オーストラリア・アメリカ・カナダ・シンガポール等が続いている。大学院レベルが大半だが、研究生が25名を数え、また特別聴講生が数名いる。指導分野別では日本語学、日本文学、比較文学、日本学、音楽学・演劇学、東洋史学、美術史学、国語学、美学・文芸学、日本史学などとなっている。2005年度は、総計が112名(男36名、女76名)で学年別、指導分野別も前年同様である。なお、2004年度には大阪大学短期留学制度にもとづく留学生が9名、2005年度は5名含まれているが、いずれにせよ、総計100名を超え、この傾向は今後も続くものと思われ、文学研究科の教育と研究がアジア各国を主として注目されていることを如実に物語っている。

留学生の博士学位取得

2004年度は、日本学1名、日本語学4名、比較文学1名、計6名が博士(文学)の学位を与えられている。2005年度は、

臨床哲学 1 名、日本文学 3 名、国語学 1 名、日本語学 1 名、音楽学・演劇学 1 名の計 7 名が学位を授与された。留学生の総数と比較しても高い取得率となっており、研究科の教育成果を雄弁に物語っていることは間違いないだろう。

数量的にはここ数年と同水準であるが、従来から多い日本文学、日本語学、日本学に加え、臨床哲学や音楽学などの分野でも博士論文を提出する学生が現れるなど専門分野が多岐にわたってきたことを示している。

(森岡裕一)

近年の文学研究科では、教育・研究活動における外部資金の役割はますます大きくなっている。外部資金はさまざまなかたちで導入されており、その全容の把握は容易ではない。研究代表者となっている場合だけでなく、研究分担者となっている場合でもかなりの件数と金額が導入されていると考えられる。逆に研究代表者となっている場合でも、金額のすべてが文学研究科で支出されているわけではない。ここでは件数や金額が把握しやすい、文学研究科の構成員が代表者となって取得している外部資金について概要を紹介しておきたい。なお、文学研究科の教員だけでなく、大学院生が獲得している外部資金も考慮に入れることとする。

* コメントは、原則として2004年度および2005年度のデータに関するものであるが、『年報2004』に掲載されたそれ以前のデータも、参考のため提示しておいた。

1. 科学研究費

科学研究費の取得について件数、金額の増減をまずみておくことにしたい。なおここでは、日本学術振興会の特別研究員奨励費も含んでいることを断っておきたい。

表 2-5-1 取得された科学研究費の件数と金額変化およびその科研費予算総額との比較

年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度
件数	58	58	62	64	64
増減	—	1.00	1.07	1.03	1.00
金額(千円)	102,861	106,340	103,210	120,920	152,020
増減	—	1.03	0.97	1.17	1.28
科研費予算総額(億円)	1,580	1,703	1,765	1,830	1,880
増減	—	1.08	1.04	1.04	1.03

2002年度、2003年度において、取得された科学研究費総額の増加率が科研費予算総額の増加率を下まわっていることが、『年報2004』の中で懸念されていたが、2004年度、2005年度は、予算総額の増加率が減少傾向にあるにもかかわらず、取得された科学研究費総額の増加率は上昇した。ただし、取得件数は両年度において横ばいであり、今後の動向が注目される。

表 2-5-2 取得された科研費の内訳

年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度
特定領域研究件数	4	0	0	0	2
同金額(千円)	9,300	0	0	0	9,200
基盤研究(A)	1	3	1	2	4
同金額(千円)	5,300	23,800	11,310	25,220	54,080
基盤研究(B)	12	10	12	13	15
同金額(千円)	46,400	30,200	40,100	47,000	49,000
基盤研究(C)	16	14	25	26	19
同金額(千円)	18,861	16,900	30,200	26,300	16,300

『年報 2004』において、より大きな規模の科研費の取得が求められていたが、2004 年度、2005 年度においては基盤研究(A)の取得数が飛躍的に増加している。基盤研究(B)も取得件数および金額が増加しているが、基盤研究 (C)の件数および金額が減少傾向にあることがやや懸念される。

2. その他の外部資金

科学研究費以外の外部資金も近年ますます重要になっている。「1-6. 21 世紀 COE について」に示す大型の資金から、各種財団などからの奨学寄付金もみられる。このなかには大学院生が取得しているものもあり、以下に簡単な表にして示しておきたい。2005 年度は、各種財団などからの研究助成金が大幅に増加しており、これが一過性のものとどまらないことが望まれる。

種類	件数と金額	2002 年度	2003 年度	2004 年度	2005 年度
21 世紀 COE	件数	1	1	1	1
	金額(千円)	106, 000	164, 000	110, 200	83, 600
科学技術振興調整費	件数	1	1	0	0
	金額(千円)	23, 061	16, 520	0	0
各種財団などからの研究助成金	件数	5	5	9	7
	金額(千円)	3, 800	6, 800	8, 990	32, 273
大学院生の獲得している研究助成金	件数	6	10	5	5
	金額	3, 147 千円 3, 000USドル 12, 200 ユーロ	1, 800 千円 6, 500USドル 6, 600 ポンド 30, 760 ユーロ 7, 900 オーストラリアドル	5, 680 千円 25, 000USドル	3, 360 14, 085 ユーロ
受託研究	件数	1	0	2	2
	金額(千円)	7, 000	0	9, 251	10, 701

概要

本研究科は人間科学研究科、言語文化研究科と共同で 2002 年度からの 21 世紀 COE プログラムに応募し、採用された。概要は次の通りである。

- **プログラム名** 「インターフェイスの人文学」(英語名: Interface Humanities)
- **担当部局** 文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科・コミュニケーションデザイン・センター(2005 年度より)
- **拠点リーダー** 鷺田清一(大阪大学理事・副学長)
- **期間** 2002 年 10 月～2007 年 3 月
- **交付金額** 2004 年度 110,200 千円
2005 年度 83,600 千円(間接経費 7,600 千円を含む)
- **連絡先** 〒560-8532 豊中市待兼山町 1-5 大阪大学大学院文学研究科内
大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」事務局
電話: 06-6850-6716 FAX: 06-6850-6718
E-mail: coe_office@let.osaka-u.ac.jp
- **ホームページ** <http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/>

事業推進担当者(2004 年度～2005 年度)

鷺田清一(大阪大学理事・副学長)、柏木隆雄(文学研究科)、小泉潤二(人間科学研究科)、園府寺司(文学研究科)、栗本英世(人間科学研究科)、中川敏(人間科学研究科)、ヴォルフガング・シュヴェントカー(人間科学研究科: 2005 年度より)、森安孝夫(文学研究科)、桃木至朗(文学研究科)、平雅行(文学研究科)、秋田茂(文学研究科: 2005 年度より)、伊藤公雄(人間科学研究科: 2004 年度まで)、金水敏(文学研究科)、富山一郎(文学研究科)、津田葵(言語文化研究科)、真田信治(文学研究科)、工藤眞由美(文学研究科)、永田靖(文学研究科)、中岡成文(文学研究科)、藤田治彦(文学研究科/2005 年度よりコミュニケーションデザイン・センター)、渥美公秀(人間科学研究科/2005 年度よりコミュニケーションデザイン・センター)、小林傳司(コミュニケーションデザイン・センター: 2005 年度より)、池田光穂(コミュニケーションデザイン・センター: 2005 年度より)、前迫孝憲(人間科学研究科)

プログラムの目標・活動方針(2004 年度～2005 年度)**1. 国家・地域・言語等を超えた複層的な人文学アプローチ**

環境危機、生命操作、教育、介護といった現代社会が抱える問題の多くはもはや政治・経済レベルだけでは解決できない。また特定の国家、地域、言語等の枠のなかでは対応できないグローバルな広がりを持っている。こうした世界規模で複雑多層に入り組んだ現代社会の問題を探究するには、例えば英国史、アジア史など地域で分断された歴史学、あるいは仏文学、国文学など言語圏で分けられている人文学など旧来の縦割り型の人文・社会科学的研究アプローチでは成果を上げることは難しくなっている。

「インターフェイスの人文学」プログラムは、複数文化のグローバルな錯綜のなかでの文化の生成を、それらが接触する界面、つまりは“インターフェイス”の視点から動的に捉え、21 世紀型の新しい人文学の構築を目指す取り組みである。

このインターフェイスは二重の構造を持っている。一つは異なる複数の文化の間の接触、摩擦、交差を国家、地域を超

えた視点で見る「横断的な知」、もう一つは研究者と現場、専門家と一般市民などの非専門家をつなぐ「臨床的な知」である。

「臨床的な知」ではとりわけ、原子力発電、ゴミ処理、遺伝子操作といった科学技術の問題をめぐって、官と民、専門家と市民、マジョリティとマイノリティなど異なるコミュニケーション文化を持った集団の間でさまざまな文化摩擦や軋轢が顕在化していることから、これらを架橋するインターフェイスの構造を解明することになっている。

2. 6つのモデル研究とそれらを統合する〈研究集合〉

2002・2003年度は、《インターフェイスの人文学》のモデル・ケースとなりうる複数の事例研究を、「交錯する世界」「縫合される日本」「越境する芸術・文化」「臨床と対話」という四つの軸で推進してきた。2004年度からはそれを《インターフェイスの人文学》のモデル研究へと更新すべく、6つのモデル研究グループ(トランスナショナルリティー研究、世界システムと海域アジア交通、イメージとしての〈日本〉、言語の接触と混交、モダニズムと中東欧の芸術・文化、臨床と対話)を編成、定例研究会をベースに着実に研究を進めてきた。具体的には、トランスナショナルリティー研究セミナー、グローバルヒストリー・セミナーと海域アジア史研究会、「共生を生きる日本社会」研究会、ポピュラーカルチャー若手研究者ワークショップ、中東欧モダニズム研究会である。また、「臨床と対話」は不定期ではあるが相当の頻度で(科学技術、医療・介護、まちづくりをめぐる)「専門家と非専門家をつなぐコミュニケーションのモデル構築」の事業に取り組み、これが2005年春、大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの臨床コミュニケーション・デザイン部門の立ち上げとして具体化した。これらモデル研究は、すべて討議記録やディスカッションペーパーを残し、事後の遠隔議論のなかでリファインするという形で着実にその成果を蓄積している。またこれらの研究成果は国際ワークショップにおいて公表するとともに、COE科目を通じて、次世代の特別研究員となりうる大学院生の教育にも強く反映させている。

他方、これらのモデル研究の推進と並行して、それらを求心化するかたちで、2004年度より事業推進担当者と若手研究員がそれぞれ「研究集合」を形成し、前者は月1回、後者は隔週で、《インターフェイスの人文学》の方法論の構築に集中的に取り組みはじめた。そこから浮かび上がってきたのは、臨床的・横断的な人文科学研究の対象を、〈流動-閉鎖-脱領域化〉という三つの相で構造生成的にとらえていくことの必要性である。2005年度後半からは、これらの理論的成果を各モデル研究に還流させ、モデル研究を練り上げるとともに、最終目標である人文科学の再編成プログラムの総合的な設計にとりかかっている。

主要な成果(2004年度～2005年度)

1. 報告書

各モデル研究プロジェクトおよび若手〈研究集合〉等の活動報告として、以下の報告書、ワーキングペーパーが刊行された。発行はすべて大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」である(一部共同発行)。

1-1. トランスナショナルリティー研究

『〈日本〉を超えて ——トランスナショナルリティー研究 4』小泉潤二, 栗本英世(責任編集), 224p., 2006/3

『ポスト・ユートピアの民族誌 ——トランスナショナルリティー研究 5』田沼幸子(編集), 278p., 2006/2

『グローバル化と市民社会——トランスナショナルリティー研究 3』木前利秋(責任編集), 180p., 2004/12

1-2. 世界システムと海域アジア交通

Global History and Maritime Asia, Working and Discussion Paper Series, No. 1, Fujita Kayoko, "In the Twilight of the Silver Century: A Re-Examination of Dutch Metal Trade in the Asian Maritime Trade Networks.", 17p., 2005/10

『世界システムと海域アジア交通 2004年度報告書』桃木至朗(責任編集), 佐藤貴保(編集), 96p., 2005/2

Global History and Maritime Asia, Working and Discussion Paper Series, No. 2, Walter Dermel, "The Nobility: A Global Perspective" / Aoki Atsushi, "Local Elites in Medieval China.", 37p., 2005/2

1-3. イメージとしての〈日本〉

『イメージとしての〈日本〉05——海外における日本のポピュラーカルチャー受容と日本研究の現在』伊藤公雄(責任編集), 太田健二, 吉澤弥生, 山中千恵, Jessica Bauwens, 伊藤遊(編集), p. 344, 2006/1

1-4. 言語の接触と混交

『言語の接触と混交——共生を拓く日本社会』津田葵, 真田信治(責任編集), 222p., 2006/3

『言語の接触と混交——サハリンにおける日本語の残存』津田葵, 真田信治(責任編集), 160p., 2006/3

『言語の接触と混交——ブラジル日系社会言語調査報告』工藤真由美(責任編集), 48p. + 1CD-Rom, 2006/3

『言語の接触と混交——共生を生きる日本社会』津田葵, 真田信治(責任編集), 156p., 2005/3

『言語の接触と混交——国際シンポジウム「多言語・多文化社会としての日本の現状と課題」』津田葵, 真田信治(責任編集), 94p., 2005/3

『言語の接触と混交——台湾残存日本語の談話データ』津田葵, 真田信治(責任編集), 160p., 2005/3

1-5. 臨床と対話

『臨床と対話 2005年度報告書——第4回対話シンポジウム in 愛媛』稲葉一人, 和田直人, 家高洋(編集), 146p., 2006/2

『神戸ー中越被災地交流フォーラム——生活支援員の最前線から学びあう——』神戸ー中越被災地交流実行委員会(編集), (日本災害救援ボランティアネットワーク・震災がつなぐ全国ネットワーク・中越復興市民会議・大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」の共同発行), 79p., 2006/2

『臨床と対話 2004年度報告書——第3回対話シンポジウム』稲葉一人, 大阪大学文学研究科臨床哲学研究室(編集), 209p., 2005/2

1-6. <若手研究集合>

『インターフェイスの人文学——2005年度〈若手研究集合〉報告書』〈若手研究集合〉報告書編集委員会(編集), 312p., 2006/3

1-7. 大阪大学フォーラム 2004(於ストラスブール)報告書

Le Japon, d'autres visages『日本、もうひとつの顔』金水敏(編集長), 和田章男(翻訳), 藤本武司(編集), 竹内史郎, 松本陽子(編集補助), 西田優子(デザイン), 240p., 2005/2

2. イベント

定例の研究会、セミナー以外にも、多くの国際シンポジウム、フォーラム、講演会、ワークショップ、研究会等のイベントが開催された。以下に一部を紹介しておく。

2-1. トランスナショナルリティ研究

「ポスト・ユートピア研究会シンポジウム「ポスト・ユートピア：フィールドからのアプローチ」大阪大学大学院人間科学研究科ユメヌス・ホール, 2005/10/29-30

「ワークショップ「人類学の複数化とトランスナショナルな関係」大阪大学中之島センター, 2005/2/13

2-2. 世界システムと海域アジア交通

International Workshop “Criticism to Sinocentrism: From Inside and Outside” 大阪大学待兼山会館, 2005/10/22

「第3回全国高等学校歴史教育研究会」大阪大学附属図書館本館図書館ホール, 2005/8/9-11

“Globalization in Northeast Asia in the 20th Century” 大阪大学待兼山会館, 2005/6/25

「ワークショップ「海から見た東北アジア：東南アジアとの対話」メルパルク沖縄(那覇市), 2004/10/29-30

「第2回全国高等学校歴史教員研修会」大阪大学附属図書館本館図書館ホール, 2004/8/9-11

2-3. イメージとしての〈日本〉

- 「若手研究者交流ワークショップ 2005「イメージとしての〈日本〉」 大阪大学中之島センター, 2005/6/25-26
- 「国際シンポジウム「イメージとしての〈日本〉」 モナシュ大学(メルボルン), 2005/3/4-5
- 「若手研究者交流ワークショップ「イメージとしての〈日本〉」 大阪大学中之島センター, 2004/9/25-26
- 「研究ワークショップ第4回「資料としてのポピュラーカルチャー」 大阪大学待兼山会館, 2004/7/30

2-4. モダニズムと中東欧の芸術・文化

- 「シンポジウム「中東欧の近現代芸術——美術・建築・音楽・演劇——」 大阪大学中之島センター, 2005/10/30-31
- 「日本とポーランドにおける美術史および音楽学シンポジウム」 ポーランド美術史家協会(ワルシャワ), ニコラウス・コペルニクス大学(トルン), 2004/11/14-22

2-5. 臨床と対話

- 「ワークショップ「科学技術と倫理」 クレオ大阪北(大阪市立男女共同参画センター北部館), 2006/2/11
- 「神戸—中越被災地交流フォーラム」 人と防災未来センター防災未来館(神戸市), 2006/1/23
- 「第4回対話シンポジウム in 愛媛 ～地域での、市民との連携の元での紛争解決とは」 ホテル奥道後(松山市), 2005/12/10-11
- 「第3回対話シンポジウム@阪大中之島センター～Mediation(調停)トレーニングを体験する」 大阪大学中之島センター, 2004/12/4-5
- 「第3回対話シンポジウム@東京大学～医療紛争解決における Mediation の可能性」 東京大学医学部附属病院入院棟レセプションルーム, 2004/12/1-2
- 「第4回アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議」 トインビー・ホール(ロンドン), 2004/7/26-28

2-6. プログラム全体

- 「大阪大学フォーラム “Le Japon, d'autres visages”」 マルク・ブロック大学(ストラスブール), 2004/11/5-7
- 「大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」ワークショップ」 大阪大学中之島センター, 2004/12/21-22

3. COE 科目

COE 科目として、2004 年度～2005 年度に、下記のような科目数の授業が提供された。

	博士前期課程	博士後期課程
文学研究科	22	37
人間科学研究科	23	26
言語文化研究科	12	6

4. ニュースレター

2004 年度～2005 年度に 3 冊のニュースレターが発行された。

1. *Interface Humanities*, No. 04, 2004 年 7 月 30 日発行
《特集》モノの人文学
2. *Interface Humanities*, No. 05, 2005 年 2 月 28 日発行
《特集》不安をかたどる
3. *Interface Humanities*, No. 06, 2005 年 10 月 21 日発行
《特集》コミュニケーションの技・知

(藤本武司)

機能と活動(2004年度・2005年度の概況)

1. 懐徳堂デジタルコンテンツ、特に懐徳堂研究の総合サイトである「WEB 懐徳堂」の運営、懐徳堂センターHP、関係CD-ROMなどを含む電子情報の制作・発信。
2. 懐徳堂関係資料、レプリカ・パネル、デジタルコンテンツの展示解説(常設展)。
3. いちよう祭、総合学術博物館企画展、豊中まつりなど学内外での展示解説(特別展)。
4. 学内所蔵の懐徳堂関係資料の調査・研究(学内調査)。
5. 学外からの寄託資料、調査依頼資料についての調査・研究(学外調査)。
6. 懐徳堂関係資料の学内外からの問い合わせに対する調査・回答。
7. 附属図書館所蔵の「懐徳堂文庫」の複写・転載願、問い合わせなどへの対応。
8. (財)懐徳堂記念会事業に関する資料調査・研究。
9. 『懐徳堂センター報』、懐徳堂センターパンフレットなど、広報媒体の編集・刊行。
10. 学内教職員・学生に対する広報や教育活動。

その他、当該年度で特記すべき事項としては、次の二点がある。

- 平成16年度～平成17年度・文化庁委嘱「全国の博物館・美術館等における収蔵品デジタル・アーカイブ化に関する調査・研究事業」……「懐徳堂文庫」貴重資料のデジタル・アーカイブ化に関する調査研究を実施。多くの貴重資料の撮影を推進したほか、懐徳堂文庫の印章資料をデジタルコンテンツ化し、「懐徳堂印章展示」としてインターネットで閲覧できるようにした。
- 韓国 SBS テレビの取材……平成16年12月、懐徳堂の歴史と現在について、韓国のテレビ局の取材を受けた。

現状と問題点(2004年度・2005年度の概況)

1. 文学研究科内における位置の問題

懐徳堂センターは、当初、文学研究科全体の広報活動の拠点として設立された。しかし、2000年度までは、資料展示のスペースがまったく得られず、また、2001年度にセンター室が確保された後も、そうした目的を達成するためのスペースとしては狭隘であり、防音や遮光の問題、温度・湿度管理の問題なども残った。そのため、常設展示としては、懐徳堂関係資料を中心とし、かつデジタルコンテンツやパネル、レプリカなどを展示するに止まっている。

さらに、2004年度、大阪大学の法人化にともない、文学研究科内の業務組織が改編され、新たに、評価・広報室および研究推進室などが開設された。これにより、当初、懐徳堂センターに求められていた機能を、この内の評価・広報室が担うこととなり、懐徳堂センターはむしろ、懐徳堂の資料調査、電子情報化などを推進する拠点、というのがその実態となりつつある。2005年度には、他の室とともに、委員会組織として再編され、現在、委員長1名、委員2名、非常勤職員1名の体制で運営を続けている。

2. 職員・予算に関する問題点

懐徳堂センターは、上記のような膨大な業務を抱えながら、それを専門に担当する常勤スタッフは1名も配置されていない。文学研究科予算の中から週30時間を上限とする非常勤職員1名が配置されているのみであり、担っている機能に比してスタッフが著しく少なく、このことは、下記のように、2003年度の文学研究科外部評価によっても指摘されている。

【参考】文学研究科外部評価 2003 年 3 月(抜粋)

懐徳堂に関わる研究活動を安定的に持続させるために、懐徳堂センターに専任スタッフを配置するといった取り組みも必要であろう。(東北大学・浅野裕一教授)

また、懐徳堂センターの経費については、文学研究科内で年間 200～300 万円を計上しているが、この内の 25～30% は(財)懐徳堂記念会等との共催事業関係費であり、純粋にセンターの活動費として執行できる予算はそれほど多くはない。

3. (財)懐徳堂記念会との関係

(財)懐徳堂記念会と文学研究科とが密接な関係にあることは言うまでもない。ただ、本来、懐徳堂記念会が担うべき記念会関係資料の調査・研究業務が、現在は、すべて懐徳堂センターに委託されている。これは、懐徳堂記念会が法人賛助会員の減少により、研究員を配置する余裕がないことにもよるが、懐徳堂センターの側にも、専任スタッフは配置されておらず、両者がもたれ合う関係になっている。

4. 附属図書館との関係

懐徳堂文庫資料は、現在、大阪大学附属図書館に收藏されており、その調査・研究に文学研究科は多大な貢献をしてきている。ただ本来、附属図書館が担うべき懐徳堂文庫の資料整理、複写・転載願いに対する審査業務などが、すべて懐徳堂センターに委託されている。これは、附属図書館に、貴重資料を管理運営する組織やスタッフが存在しないことによるが、膨大な資料を抱えながら、学内に専任スタッフがないことは、資料サービスという対外的観点からも大きな問題であると言える。

(湯浅邦弘)

活動の概要とその特色

2004年度・2005年度の専任スタッフは寺前直人助手の1名である。兼任として2004年度は文学研究科の都出比呂志教授、福永伸哉助教授、高橋照彦助教授が、2005年度は福永伸哉教授と高橋照彦助教授の2名が業務を担っている。

石橋団地(通称：豊中キャンパス)はその全域が待兼山遺跡として遺跡台帳に登録されている。また、医学部や附属病院がかつて所在し、現在は大阪大学中之島センターがある大阪市北区中之島は、江戸時代の蔵屋敷が建ち並んだ場所として知られている。こうした遺跡や遺跡から出土した遺物は、1950年に施行された文化財保護法の規定により国民共有の財産・文化財として保護・活用をはかる対象とされている。大阪大学では、キャンパス内の遺跡の保全と建物計画などの調整を行うために、全学委員会として埋蔵文化財調査委員会を設置しており、その委員会の指導の下、埋蔵文化財調査室が校地内遺跡の調査にあたっている。

2004年度、2005年度においても石橋団地を中心に建物の改修や新設が引き続き進行しており、工事着手前の試掘および立会調査は以下に報告した件数を実施している。とくに2005年度実施した待兼山修景工事に伴う埋蔵文化財調査では、5世紀後半の古墳1基(待兼山5号墳)と中世の火葬墓群、そして近世の早桶等が発見され、新聞やテレビなどに広く取り上げられた。また、発掘調査現場において実施した現地説明会では雨天にもかかわらず、約200名の方々が参加された。その後も教職員および市民の関心は高く、発掘現場に用意した資料1000部は2週間ほどで配布を完了したほどである。さらに本調査ではその成果速報を毎日インターネット上において公開し、調査の透明性と情報の公開に努めた。

なお、施設部をはじめとする関係部局の協力を得て、主要な遺構については地中保存し、解説板の設置や遺構の地表表示などを通して調査の成果を修景工事に生かすことができたのは大きな成果である。

以上の発掘調査出土品については、整理作業を実施し、その成果を調査研究報告書や年報として刊行している。また、整理の完了した出土品は、いちょう祭や大阪大学総合学術博物館常設展示での公開、大阪府下の小・中学校への出張授業などを通して、一般に広く公開し活用をはかっている。

現在の組織

教授 0(1) 助教授 0(1) 助手 1 (括弧内は兼任教員数)

教授：福永 伸哉(兼任)

助教授：高橋 照彦(兼任)

助手：寺前 直人

組織の活動

1. 発掘調査

2004・2005年度は、以下の埋蔵文化財発掘調査を実施した。

【2004年度】

1月18日	石橋団地・学生会館便所改修工事(2)立会調査
1月20日	石橋団地・待兼池周辺整備工事(電気工事含む)立会調査
2月10日	石橋団地・共通教育棟支障架構工事及びガス配管改修工事立会調査
2月10日	石橋団地・共通教育本館テレビ共同受信設備そのほか工事立会調査
2月15日	石橋団地・ガス配管改修工事(1)(理学研究科レプトン実験棟横)立会調査
2月15日	石橋団地・ガス配管改修工事(2)(サイバーメディアセンター棟横)立会調査
2月21日	石橋団地・ガス配管改修工事(3)(太陽エネルギー研究センター棟)立会調査

- 2月21日 石橋団地・ガス配管改修工事(4)(極低温実験室)立会調査
- 2月28日 石橋団地・待兼池周辺整備事業(配水管改修工事)立会調査
- 3月1日～4日 石橋団地・構内仮設駐車場等工事試掘調査
- 3月14日 石橋団地・共通教育棟本館前階段改修工事立会調査
- 3月17日 石橋団地・図書館前排水改修工事(電気工事含む)立会調査

【2005年度】

- 5月25日 埋蔵文化財調査委員会
- 7月～3月 石橋団地・待兼山周辺修景工事発掘調査



待兼山周辺修景工事に伴う埋蔵文化財調査(待兼山5号墳)

- 1月31日 埋蔵文化財調査委員会
- 2月9日 石橋団地・グラウンド周辺給水管改修工事立会調査(1)
- 2月13日 石橋団地・グラウンド周辺給水管改修工事立会調査(2)
- 2月20日 石橋団地・グラウンド周辺給水管改修工事立会調査(3)
- 2月23日～28日 石橋団地・理学部ボンベ庫新営工事試掘調査
- 2月28日 石橋団地・グラウンド周辺給水管改修工事立会調査(4)
- 3月3日 石橋団地・浪高庭園配水管設置工事立会調査
- 3月17日 石橋団地・理学部ボンベ庫新営工事試掘調査

2. 広報・埋蔵文化財の公開

【2004年度】

- 3月～5月 総合学術博物館常設展示準備
- 9月7日 総合学術博物館第3回企画展(大阪大学中之島センター)説明会出席
- 9月15日 総合学術博物館第3回企画展(大阪大学中之島センター)ブース展示準備
- 9月16日～23日 同上 展示解説



大阪大学総合学術博物館第3回企画展の様相

9月18日 同上 ミニレクチャー 講演

【2005年度】

大阪大学総合学術博物館史料準備室(修学館)への出展

待兼山修景工事に伴う埋蔵文化財調査現地説明会(参加者200名)



待兼山遺跡発掘調査現地説明会の様子



整備された「阪大坂」と待兼山5号墳周濠の表示



地中保存された古墳上に設置された解説板

3. 印刷物の刊行

【2005 年度】

待兼山 5 号墳現地説明会資料

埋蔵文化財調査委員会ニュース第 4 号

今後の課題

大阪大学構内における開発と埋蔵文化財の保護の両立をめざし、施設部をはじめとする関係部局と密接に連絡をとり、円滑な運営を目指す。

石橋団地(通称:豊中キャンパス)の所在する待兼山は、弥生時代から歴史時代までの遺構や遺物が確認されており、2005 年度には多数の埋蔵文化財が出土している。すでに、この発掘成果については、現地説明会の実施と発見された遺構の説明板と地表表示を現地に設置することにより、地域に広く公開することができた。しかし、発見された膨大な出土品の歴史的意義については、いまだ不明な点が多い。今後の整理作業では、これらを学術的に解明したうえで、その成果に基づき、地域の歴史を復元することに努めたい。また、以上のような成果については、大阪大学総合学術博物館や地域の文化財関係者と協力し、広く公開するとともに地域への普及活動をさらに進めていく予定である。

(寺前直人)

組織・体制

研究科長直属の委員会として設置。委員は、委員長 1 名を除く全員が相談員を兼ね、学生・教職員からのセクシュアル・ハラスメント問題にかかわる相談に当たる。必要に応じ、全学セクシュアル・ハラスメント相談室と連携をとる場合もある。

2004 年度：委員会メンバー10名(女性 6 名、男性 4 名)。

2005 年度：委員会メンバー10名(女性 5 名、男性 5 名)。退職等にもない、一部委員が交代。

活動状況**2004 年度実績**

1. 学部・大学院新入生オリエンテーションで委員会活動について説明。パンフレット「やめよう・とめようセクシュアル・ハラスメント」と缶バッジを新入生に配布。(4月)
2. 各専修での講座ガイダンス時に、セクシュアル・ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットを学生に配布。(4月)
3. 学生向け講演会(「セクシュアル・ハラスメントについて——理解を深めていただくために」講師：松岡秀子豊中地区専門相談員)を開催。(4月)
4. キャンパス・セクシュアルハラスメント全国ネットワーク大会(盛岡で開催)に、研修のため委員 2 名が参加。(10月)
5. 青木直子前委員長が教授会懇談会において、セクシュアル・ハラスメントの起きない環境作りについて発言し、議論を行う。(11月)
6. A46 演習室の第 2 ミーティング・ルームへの改修にあたり、相談室として活用するための設備等について種々提案を行う。(11月～12月)
7. パンフレット「やめよう・とめようセクシュアル・ハラスメント」を改訂。改訂版 2000 部を作成。ストップ・セクハラ・シール(4000 枚)も合わせて作成。(12月～2005 年 3 月)
8. 年間相談・対処件数は 3 件(前年度からの継続分を含む)。

2005 年度実績

1. 学部・大学院新入生オリエンテーションで委員会活動について説明、パンフレットおよびシールを新入生に配布。大学院オリエンテーション終了後、引き続き学生向け講演会(「セクシュアル・ハラスメント相談室です」講師：松岡秀子豊中地区専門相談員)を開催。(4月)
2. 各専修での講座ガイダンス時に、セクシュアル・ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットおよびシールを配布。(4月)
3. キャンパス・セクシュアルハラスメント全国ネットワーク大会(大阪で開催)に、研修のため委員 6 名が参加。(7月)
4. 教職員向け研修会を開催。講師：金子雅臣氏、テーマ「何故起きる、どう対処する——セクハラ最新事情」。(11月)
5. 参考用図書を選定・購入し、学習支援室に配備。
6. 年間相談・対処件数は 3 件。

(荻野美穂)

大阪大学と大阪外国語大学の統合については、4年前にも断続的に話し合いが行われていたが、いったん中断し、2005年度に入ってより具体的な計画を立てるべく交渉が再開された。

年度初は言語文化研究科と国際公共政策研究科の改組と新学部の設立という構想が打ち出されており、文学研究科は大きく変わることはないと考えられていた。しかし新学部案に文部科学省が難色を示したため、8月ごろから文系各部局が一定数の外大の人員を迎え入れ、それぞれ大規模改組や新組織の設立を行うという案が支配的となった。

この情勢を受けて文学研究科でも、外大から10人～30人の教員が加わることを前提として、研究科の改組案を検討し始めた。当初は既存専攻の各専門分野を「主分野」と位置づけ、新たに「副分野」の集合体として新専攻を設けるという案が有力であったが、8月末から9月にかけて、修士課程のみの専攻として「文化実践論専攻」を設置する案が浮上してきた。人文科学の新領域をとりこむ形で3つのコース、6つの専門分野を置き、外大から20人ほどの教員を迎えけるとともに、既存専攻からも6人ほどが参加することが計画の骨子である。しかし全学の統合ワーキングではこのころ、外大側の要望を前提に、阪大の文系諸部局に移動できる人員は国際文化学科を中心に50名前後と見なしており、文学研究科は希望人員数を12人に抑えるよう求められた。

10月、11月は言語学関係の部局の改組をめぐって両大学の交渉は停滞したが、12月に入って急速に進展した。新年に入って新専攻の名称は「文化動態論」に改められ、また研究科長が外国語大学で他の文系諸部局長とともに構想説明会を行って、新専攻への参加希望者を募った。部内でもこれに参加する教員の人選が始まった。また新専攻の教員の業務や将来の人事手続きについても、議論の末に一応の合意が得られた。2月半ばには文部科学省での交渉のために「設置構想の概要」を提出している。

さまざまな力学が働く込み入った状況の中で、外大からの参加希望者の動きも複雑を極めたが、2月初めからは文学研究科の統合ワーキンググループと外大からの新専攻教員候補による「文化動態論編成実務者会議」が開かれるようになった。3月初めには、そこでの議論の中で、専門分野を設けず「共生文明論」、「アート・メディア論」、「文学環境論」、「言語生態論」の4講座＝4コース制をとることが決まった。3月半ばには既存専攻からの7人および外大からの12人を合わせ、総勢19人の教員候補がほぼ確定した。

2006年3月23日に大阪大学と大阪外国語大学は「大学統合推進合意書」を取り交わしたが、その直後に文学研究科は新専攻設置をめざして文部科学省に認可申請書類を提出した。この新専攻案は現在、同省の大学設置分科会で審議されている。新専攻の名称、構成、教員数についてはすでに述べた。設立目的は人文科学の新しい動向を取り入れた研究教育の推進によって既存専攻のそれを補完すること、人文科学の高度な知見を有し、外国語の運用能力に優れた高度専門職業人を養成することである。専攻組織の発足は2007年10月、第一期学生の入学は2008年4月で、定員は19名を予定している。

(江川温)

2005年度大学院生アンケートの「問題点の分析」は、先に掲げた通りであるが、そのことは、2006年3月20日、ファカルティ・ディベロップメント「研究教育の課題と展望」において、アンケートの結果とともに報告され、検討もされている。ここには、それらを踏まえて既に改善に向かっていること、今後の改善につなげる努力をしていることを、いくつか挙げておくことにする。

施設の改善

まず、施設の改善についてである。これはアンケートの結果が出るより前から取り組んでいたことであるが、現状の施設に対する不満はかなり大きいところがあるので、アンケートの結果に応えることにもなるものでもある。既に、いくつかの教室のマルチ・メディア化を計画し、それに伴い、多くの教室の空調・照明等について、かなり大規模な改善に取り組んでいる。2006年度中に、かなりの成果が見られるものと期待される。また、日本学棟のトイレについても、従来の経緯の問題に拘わらず、設置の方向で現在努力中である。

大学院の長期履修学生制度

次に、大学院の長期履修学生制度についてである。これもまたアンケートの結果が出るより前から取り組んでいたことであるが、この制度を、大阪大学の中で文学研究科が先駆けて、2007年度から施行する予定で、大学院入試要項に既に記載している。この制度は、定まった職業を有する者、出産・育児・介護等を行う者等を対象とするもので、前期課程では最長4年間、後期課程では最長5年間の在学年限で、計画的に教育課程を履修し、課程を修了することを認める制度である。

文学研究科内各委員会・室等での検討事項

その他に、アンケートの結果を承けて、文学研究科内の委員会・室等での検討を依頼している事柄をいくつか挙げておく。自習室の確保についてアンケートの中の希望を伝えたが、これについては、本館一階にある「学生自習室」の利用状況等をよく見た上で、現在計画中の文系統合棟新館の中（ないし、それに伴う移転後の空室）に何らかのスペースを確保できないか検討する方向である。図書が分散していることへの不満についても伝えたが、これはなかなか改善が難しいけれども、雑誌については、重複購入雑誌の整理を含めて、ある程度集中管理の方向で考えることができる点もあるので、今後検討の見通しである。また、後期課程の院生で在学中の3年以内に博士号を取得できると見込んでいる者が1割に満たないという現状について、学位について再検討する場合の一つの検討材料にしてほしいと申し入れた。

このように、既に改善に向かっていること、今後の改善につなげる努力をしていることは多いのであるが、改善がなかなか困難なことも多く、また、改善に向かうものでも、直ちにはできない、十分にはできないこともあろうかと思われる。しかしながら、こうした形で様々な努力をしており、アンケートが意見を聞いただけで終わることにならないよう、今後とも留意して行きたいと考えている。

(蜂矢真郷)

第 2 部

各専門分野における 教育・研究活動の概要

【凡 例】

- I. 現在の組織については、2006年4月1日を基準とし、この時点での教員および在学生の現員を示す。また修了生・卒業生については、2004年度(2005年3月修了・卒業)および2005年度(2006年3月修了・卒業)について記す。
- II. 大学院生の研究業績、受賞等は、2004年度～2005年度に在籍した者が、2004年度～2005年度中に発表あるいは授与されたものについて記す。また2004年度～2005年度におこなわれた学位授与について、課程博士と論文博士にわけて記載する。
- III. 教員の研究活動については、原則として2006年4月1日現在各専門分野に属している現員のものを示す。研究業績については2004年度～2005年度に発表されたものを記載する。2004年度～2005年度中に、本研究科大学院生であったものが本研究科教員になった場合には、その大学院生時代に発表した研究業績をあわせて記入する(この場合には大学院生の研究業績の欄にも同じ業績が示される)。なお受賞については2004年度～2005年度にかぎらず記載する。
- IV. 教員による競争的外部資金の獲得については、原則として2006年4月1日現在各専門分野に属している現員が代表者になっているもので、2004年度～2005年度の間に配分を受けたものを記す。
- V. 教員による学会役員等の引きうけ状況については、2006年4月1日現在各専門分野に属している現員が、2004年度～2005年度の間に引きうけ、あるいは遂行した任務に関して記す。

* 広域文化形態論講座および広域文化表現論講座については、上記の限りではない。

2-1 哲学 哲学史

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

哲学哲学史は、文学部発足当初からの長い伝統を有し、哲学と哲学史は不可分であるとの観点から、(1)アカデミズムの確立 (2)哲学の普遍性の標榜 (3)現代的課題の探求を掲げて、教育・研究を続けてきた。研究は、第一に、綿密な文献解読に基づく近代現代哲学の歴史的研究を大きな柱としている。その上で第二に、現代哲学の諸問題にも積極的に取り組んでいる。

第一の柱については、デカルトからラカン、デリダまでのフランス系の哲学、ドイツ観念論やフランクフルト学派などのドイツ系の哲学を研究の中心にしている。近年はさらに西田哲学などの日本の哲学、さらには英米系の言語哲学や問答論理学の研究にも手を広げている。

第二の柱については、伝統的な認識論や存在論のほか、精神科学方法論、言語行為論、コミュニケーション論、哲学的意味論などにも目を向けている。

研究室員はみな、隣接の現代思想文化学と連携して、自由闊達に切磋琢磨している。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 2 助教授 1 講師 0 助手 0

教授：入江 幸男、上野 修

助教授：舟場 保之

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
24	6	6	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	8	6	1	0	2
'05	6	3	2	0	2
小計	14	9	3	0	4

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	0	0	0
'05	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	4	1	5	1	0	11
'05	3	0	2	0	0	5
計	7	1	7	1	0	16

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	3	0	0	0	3
'05	0	2	1	0	0	3
計	0	5	1	0	0	6

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2004年度】

津崎良典「フランスにおける高等教育改革覚書——高等師範学校 *Ecole normale supérieure* における LMD 改革を中心に——」大阪大学大学教育実践センター『大阪大学大学教育実践センター紀要』1, pp. 65-78, 2005/3

津崎良典「<精神の修練>としてのデカルト哲学(1)——「観念」の本有性と神のア・ポステリオリな実在証明——」『メタフィシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 35, pp. 37-48, 2004/12

Yoshinori TSUZAKI, “*L’habitus scolastique et la vertu cartésienne*,” in *Revue de philosophie française*, Société franco-japonaise de philosophie, n° 9, pp. 93-102, 2004/9

中村修一「カント歴史哲学とグローバリゼーション」溝口宏平代表『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』課題番号 14310004, 2002年度～2004年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2)), pp. 72-81, 2005/3/25

- 中村修一『はじめて学ぶ西洋思想』（「フィヒテ」の章担当），村松，小泉，長友，嗟峨編，ミネルヴァ書房，pp. 144-146，2005/3/10
- 中村修一『「純粋理性批判」における「質的な単一性」概念』『フィヒテ研究』12，晃洋書房，pp. 67-83，2004/12/20
- 西田充穂「初期レヴィナスにおける存在論についての諸論考」『メタフュシカ』（大阪大学大学院文学研究科哲学講座），35，pp. 27-35，2004/12
- 前田直哉「フッサールの『世代発生的考察』について」『待兼山論叢（哲学篇）』38，pp. 33-48，2004/12
- 前田直哉「超越論的現象学と世代発生的現象学」『メタフュシカ（別冊）』（大阪大学大学院文学研究科哲学講座），35，pp. 137-144，2004/12
- 森田邦久「科学理論の意味論的概念による物理学的方法論の分析」『科学哲学』37-2，日本科学哲学会，pp. 119-132，2005/2
- 森田邦久「ヘーゲルの労働概念」『人間会議』冬号，宣伝会議，pp. 78-80，2004/12

【2005年度】

- Yoshinori TSUZAKI, “Une lecture ‘probabiliste’ de la visée pratique chez Montaigne et Descartes,” in *Revue de philosophie française*（『フランス哲学・思想研究』），Société franco-japonaise de philosophie（日仏哲学会），n° 10，pp. 103-119，2005/9
- 平光哲朗「創造の持続、はじまりの遍在」『待兼山論叢（哲学篇）』39，大阪大学文学会，pp. 1-19，2005/12
- 平光哲朗「イメージと運動と延長」『現象学年報』21，日本現象学会，pp. 79-87，2005/11
- 平光哲朗「実現は偽の概念ではない。——ベルクソンにおける actualiser と réaliser——」『フランス哲学・思想研究』10，日仏哲学会，pp. 132-143，2005/8
- 森田邦久「科学者の誠実さとは何か」『待兼山論叢』39，大阪大学文学会，pp. 21-31，2005/12

(2)口頭発表

【2004年度】

- 中村修一「カントの定義論——『判明性』の数学論——」第29回日本カント協会大会，京都大学，2004/11/14
- 平光哲朗「運動からイメージへ」日本現象学会，東洋大学，2004/11
- 平光哲朗「ベルクソンにおける物質の諸相」2004年秋季日仏哲学会，東京大学，2004/9

【2005年度】

- 森田邦久「科学理論の意味論的捉え方による実験の分析」北大夏のセミナー，北海道大学，2005/8/25
- 森田邦久「科学的説明と自然現象の本質」科学基礎論学会，東北公益社大学，2005/6/18
- 森田邦久「科学理論の意味論的概念による科学的説明の分析」科学哲学コロキウム，京大会館，2005/5/29

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2004年度 PD：0名 DC2：0名 DC1：0名（計0名）
2005年度 PD：1名 DC2：0名 DC1：0名（計1名）

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004年度 学部：2名 大学院：2名（計4名）
2005年度 学部：2名 大学院：3名（計5名）

6. 専門分野出身の研究者

(2004 年度～2005 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)
なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004 年度～2005 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 9 名

2004 年度：6 名 2005 年度：3 名

<内訳> システムエンジニア 2 名 その他 7 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2004 年度 『メタフュシカ』第 35 号、『メタフュシカ』別冊

2005 年度 『メタフュシカ』第 36 号、*Philosophia OSAKA*, No. 1

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日独哲学シンポジウム・関西プログラム開催協力

2006 年 3 月 28-29 日

(日本におけるドイツ年 2005/06 フンボルト・コレーク主催)

於：大阪大学中之島ホール

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

handai metaphysica 特別講演会(美学・文芸学専門分野と共催)

2006 年 3 月 30 日

"Wahrheit und Versöhnung" 発表者：Anton Friedrich Koch (Universität Tübingen)

於：待兼山会館 2F 会議室、出席者約 20 名

handai metaphysica 特別講演会(美学・文芸学専門分野と共催)

2006 年 3 月 27 日

"Die systematische Bedeutung von Hegels Konzeption der Anerkennung"

発表者：Michael Quante (Universität Köln)

於：待兼山会館 2F 会議室、出席者約 20 名

第 2 回 handai metaphysica 研究例会

2006 年 3 月 18 日

「<習俗の倫理>について——ニーチェの<遠近法主義>の前景と背景——」

発表者：須藤訓任(現代思想文化学教授)

「現象学におけるアプリオリ」発表者：中橋誠(現代思想文化学助手)

『『百科全書』における<線維>の項をめぐる——生命の学の近代化を促した一要因——」

発表者：百崎清美(現代思想文化学博士後期課程院生)

於：待兼山会館 2F 会議室、出席者 23 名

第 1 回 handai metaphysica 研究例会

2005 年 7 月 16 日

「上野修『スピノザの世界』を読む」発表者：上野修(哲学哲学史教授)

特定質問者：須藤訓任(現代思想文化学教授)、中野彰則(現代思想文化学博士後期課程院生)

司会：吉永和加(哲学哲学史助手)

於：修学館人文学オープンセミナー室、出席者 29 名

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

学部教育(哲学・思想文化学専修)については、哲学史についての基礎的な知識を身につけるために「近代哲学史」「現代哲学概説」を開講し、また外国語の哲学文献をはじめ読む学生のための基礎的な演習として「英米哲学基本文献読解」「フランス哲学基本文献読解」「ドイツ哲学基本文献読解」を提供するとともに、英語、フランス語、ドイツ語の演習に加えて、西洋文化理解に必須のラテン語による演習を複数開講した。現代哲学を研究する上で不可欠の知識となっている「論理学」を開講したが、これには、他専修、他学部の学生も多数参加し、広範な学生からの要望がみられた。また、留学生をチューターにして、英語で議論する訓練のための自主ゼミを2004年度に行い、海外大学との交流協定など様々な派遣制度を利用して、過去2年、留学生を送り出してきた。研究指導については、全スタッフが、オフィスアワーを週1、2回もち、個別の相談に応じた。また、年に2回の研究発表の機会をもうけて、文章作成、口頭発表、討論の訓練を行うとともに、専修が主催する研究会への学生の参加をうながした。

大学院教育については、各スタッフの専門的な講義と演習の他に、論文作成指導の授業をもうけて、文章作成、口頭発表、討論の訓練をすることによって、個別の論文指導をきめ細かく行い、また専門分野主催の研究会への多数の参加をみたように、院生の自主的な研究活動を育成し支援した。院生を対象とした自主ゼミを複数行ったが、これには他専門分野や他研究科の院生の参加もあった。また、学部生に対してと同様に、留学生をチューターにして英語で議論する訓練を実施し、留学の指導も積極的に行った。後期課程の院生に対しては、専門分野発行の専門誌への論文執筆掲載へ向けて査読および指導を行うとともに、学会や研究会での発表をすすめ、学内および学外の雑誌への論文の応募をうながした。ただし、後期課程3年間で博士論文を提出できる院生の数の少ないことが今後の指導の課題である。

12-2. 研究活動

研究活動は、学問の性格上個人研究が中心であり、各自が積極的に論文執筆、学会や研究会での発表を行った。海外の学会へ参加するだけでなく、外国の研究者を招き、講演会を複数回開いた。2006年3月に大阪大学中之島ホールにおいて開催された「日独哲学シンポジウム」(日本におけるドイツ年 2005/06, フンボルト・コレーク)においては、各スタッフがシンポジウムの司会やコメンテータを務め、積極的に協力した。科学研究費の交付を受けていた「哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション」(研究代表者・溝口宏平・現代思想文化学)に関する、哲学哲学史、現代思想文化学および臨床哲学各専門分野による共同研究の成果をまとめ、2004年度に報告書を作成した。従来どおり、当研究室の研究成果の一部は、現代思想文化学および臨床哲学専門分野と共同で発行している年刊雑誌『メタフィシカ』として公刊したが、2005年度よりこれに加えて新たに、現代思想文化学専門分野と共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* を発刊し、研究成果の海外発信をはかった。同じく2005年度より、現代思想文化学専門分野と共同で、哲学研究会 *handai metaphysica* を立ち上げ、研究会例会を夏と春に2度開催し、特別講演会も行った。学会活動についても、これまでと同様に、ほとんどのスタッフが、各種の委員として学会の運営に貢献しており、学会の司会も数多くこなした。

哲学および哲学史研究の国際的な拠点となるために、これまで以上に積極的な計画を立てることが今後の重要な課題になると考えている。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 上野 修 教授

1951年生。1982年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。大阪大学助手、山口大学助教授、同教授を経て、2004年4月から現職。専攻：哲学哲学史。

1-1. 論文

Osamu UENO, "The Certainty of the Cogito: A Modal Perspective", *Philosophia OSAKA*, No. 1, pp. 1-12, 2006/3/1
上野修「必然、永遠、そして現実性——スピノザの必然主義」『スピノザーナ』6, pp. 5-21, 2005/3

上野修「コギトの確実性——様相の観点から——」『メタフィシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 35, pp. 1-12, 2004/12

1-2. 著書

上野修ほか, 村上勝三編『真理の探究——17世紀合理主義の射程』(共著)知泉館(「第3部第2章 スピノザと真理」), pp. 155-176, 2005/6/1

上野修『スピノザの世界——神あるいは自然』講談社, 2005/4/1

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上野修「二〇〇五年読書アンケート」『みすず』Vol.48, No. 1, p. 84, 2006/2/1

上野修「佐藤一郎著『個と無限——スピノザ雑考』」『フランス哲学・思想研究』No. 10, pp. 218-221, 2005/8/1

上野修「スピノザから見える不思議な光景」『本』No. 5, pp. 22-4, 2005/4/1

上野修「正義／力」「論理／信」「決定論／自由」「時間／意味」「個／責任」「まなざし／人間」『imidas 2005』pp. 1198-1201, 2005/1

上野修「(ブックガイド)『エチカ』」『現代思想』32-11, pp. 48-51, 2004/9

1-4. 口頭発表

上野修『スピノザの世界 神あるいは自然』(講談社現代新書)(第1回 handai metaphysica 研究例会——上野教授『スピノザの世界 神あるいは自然』(講談社現代新書)の合評会), 2005/7/16

Osamu UENO: 'Faith and Reason in Spinoza's Tractatus Theologico-Politicus'. XIXth World Congress of the International Association for the History of Religions (IAHR) in Tokyo, 日本学術会議, 日本宗教学会主催, 2005/3/29

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

スピノザ協会・運営委員	2002年5月～2006年3月
西日本哲学会・運営委員	2005年12月～現在
同上・運営常任委員	2002年12月～2005年12月
同上・『西日本哲学年報』編集委員	2003年12月～2004年12月

2. 入江 幸男 教授

1953年生。1983年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。大阪大学助手、大阪樟蔭女子大学講師、同助教授、大阪大学助教授を経て、2003年10月から現職。専攻：哲学哲学史。

2-1. 論文

Yukio Irie 'Der transzendente Beweis der Sittlichkeit bei Fichte' in *Philosophia OSAKA* Nr. 1, Published by

Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 13-22, 2006/3

入江幸男「グローバル化の中での社会問題と公共性」2002年度～2004年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(2)研究成果報告書『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』(研究代表者：大阪大学大学教育実践センター教授・文学研究科教授(兼任) 溝口宏平), pp. 19-27, 2005/3

入江幸男「三つの「なぜ」の根は一つか」『メタフシカ(別冊)』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 35, pp. 59-68, 2004/12

入江幸男「相互知識はいかにして可能か」『アルケー』(関西哲学会), 12, pp. 54-67, 2004/7

2-2. 論文著書

入江幸男(共著)『ドイツ観念論を学ぶ人のために』世界思想社(担当箇所「倫理」 pp. 144-157), 2006/1

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

入江幸男「後期フィヒテの『現象論』について」『フィヒテ研究』(日本フィヒテ協会), 12, pp. 4-12, 2004/12

2-4. 口頭発表

Yukio Irie „Der transzendente Beweis der Sittlichkeit bei Fichte“, in Kolloquium „Japanische Fichte-Forschung heute“, Philosophie-Department der Ludwig-Maximilians-Universität München, 2005/7

入江幸男「ボランティアから見た社会問題と公共性」国立民族学博物館「運動の現場における知の再編」研究会にて発表, 2004/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

入江幸男 第一回フィヒテ協会研究奨励賞, 日本フィヒテ協会, 1995/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2004年度～2005年度、財団法人大川情報通信基金研究助成、代表者：入江幸男(研究分担者無し)

研究題目：コミュニケーションにおける相互知識の分析とその応用

助成金額：2004年度 500千円

2005年度 500千円

2-7-2. 2004年度～2005年度、海外先進教育研究実践支援プログラム、代表者：入江幸男、研究分担者：1名

研究題目：フィヒテ研究のための国際的連携構築

助成金額：2004年度 607千円

2005年度 3,393千円

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本フィヒテ協会・会長(任期3年)	2004年3月～現在
同上・賞選考委員	1998年11月～2004年11月
同上・編集委員	1993年11月～2004年11月
Internationale Fichte-Gesellschaft 会員	2003年11月～現在
日本哲学会・委員	2003年7月～現在

日本哲学会・編集委員

2001年7月～現在

国際ボランティア学会・理事

2002年11月～現在

同上・編集委員

1999年11月～現在

関西哲学会・委員

2004年11月～現在

3. 舟場 保之 助教授

1962年生。1992年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。立命館大学嘱託講師を経て、2004年4月から現職。専攻：哲学哲学史。

3-1. 論文

Funaba, Yasuyuki Zur Möglichkeit des unvollendeten Projekts der Moderne, *Philosophia OSAKA*, No. 1, pp.57-64, 2006/3

舟場保之「トラブルと理性の公的使用」『現代におけるグローバル・エシックス形成のための理論的研究』(2003年度～2006年度科学研究費補助金基盤研究(B)中間報告書), pp. 1-6, 2005/9

舟場保之『『9.11』とフェミニストによるアーレント再読』『現代におけるグローバル・エシックス形成のための理論的研究』(2003年度～2006年度科学研究費補助金基盤研究(B)中間報告書), pp. 53-55, 2005/9

舟場保之「ハーバーマスは十分に普遍主義的か」『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』(2002年度～2004年度科学研究費補助金(B)(2)研究成果報告書), pp. 82-91, 2005/3

舟場保之「カント実践哲学のコミュニケーション論的転回へ向けて」『別冊情況 特集カント没後200年』(情況出版), pp. 201-211, 2004/12

舟場保之「応答可能性としての責任とカント」『日本カント研究 5 カントと責任論』(日本カント協会), pp. 23-37, 2004/7

舟場保之『『本音主義批判』とコミュニケーション』『情況』(情況出版), pp. 102-108, 2004/5

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

紺野茂樹, 田辺俊明, 舟場保之訳, J・ボーマン, M・ルツツーパツハマン編(翻訳)『カントと永遠平和』(未来社), pp. 81-106, 2006/1

加藤泰史, 日暮雅夫, 舟場保之, ほか訳, A・ホネット著(翻訳)『正義の他者』(法政大学出版局), pp. 93-119, 2005/5

舟場保之(解説)「ハーバーマス」「ロールズ」村松, 小泉, 長友, 嗟峨編『はじめて学ぶ西洋思想』(ミネルヴァ書房), pp. 249-251, pp. 262-268, 2005/3

舟場保之(書評)「朝倉輝一『討議倫理学の意義と可能性』」『メタフィシカ(別冊)』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 35, pp. 145-152, 2004/12

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

舟場保之 大阪大学共通教育賞, 大阪大学, 2005/11(2005年度前期)

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日本カント協会・編集委員

2005年12月～現在

2-2 現代思想文化学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

現代思想文化学は、従来の専攻・哲学哲学史から分かれて設立された新しい専門分野である。西洋近世および現代の哲学研究を基盤としながら、今日対応が焦眉の課題となっている社会的・文化的諸問題に哲学的視座から積極的にアプローチすることを目指している。

研究室では、まずデカルトをはじめとする 17 世紀哲学、フランス啓蒙思想、ドイツ観念論、生の哲学、実存主義、現象学ならびに解釈学等を幅広く研究の対象としているが、加えてこれらの研究を基礎に生命、環境、科学技術、さらには宗教などの抱える現代的諸問題の哲学的考究にも努めている。教育・研究活動は、専門分野・文化基礎学および哲学哲学史との密接な連携のもとに行われている。

I. 現在の組織

1. 教員(2006 年 4 月現在)

教授 2(兼任 1) 助教授 1(兼任) 講師 0 助手 1

教授：溝口 宏平(大学教育実践センター所属・兼任)、須藤 訓任

助教授：望月 太郎(大学教育実践センター所属・兼任)

助手：中橋 誠

※溝口宏平教授は、2006 年 6 月 22 日に逝去されましたので、「Ⅲ. 教員の研究活動」には記載がありません。

2. 在学生(2006 年 4 月現在)

2006 年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
24 (哲学・思想 文化学)	7	5	1	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	8 (哲学・思想文化学)	3	1	1	0
'05	6 (哲学・思想文化学)	2	2	1	0
小計	14 (哲学・思想文化学)	5	3	2	0

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	1	0	1
'05	1	0	1
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

木村健 「一人称単数と世界内の人物」 2006/3

主査：望月太郎 副査：入江幸男、須藤訓任

入谷秀一 「ハイデガーの時間論とそのテキスト解釈の歴史——先駆的なものの二重の構成——」 2004/9

主査：入江幸男 副査：溝口宏平、望月太郎

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	0	1	0	0	1	2
'05	1	0	2	0	0	3
計	1	1	2	0	1	5

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	0	0	0	0	0
'05	0	1	2	0	0	3
計	0	1	2	0	0	3

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

中野彰則「スピノザにおける「完全性」について——「健康」概念の再検討のために——」大阪大学医学研究科医の倫理学教室『医療・生命と倫理・社会』4, pp. 124-132, 2005/3

中野彰則「創造論と内在因としての実体——ピエール・ベールのスピノザ批判——」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 38, pp. 17-32, 2004/12

【2005年度】

安里淳「前期ハイデガーの現象学と地盤としての世界」『メタフシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 36, pp. 53-64, 2005/12

百崎清美「18世紀フランス『百科全書』における「繊維」の項をめぐる——生命の学の近代化を促した一要因——」『メタフシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 36, pp. 15-28, 2005/12

百崎清美「ビシャにおける生命体の構成要素——『諸膜論』から『生物学史研究』(日本科学史学会生物学史分科会編), 74, pp. 27-39, 2005/4

(2)口頭発表

【2005年度】

中野彰則「「神の存在証明」における存在の原因と様相概念について」スピノザ協会第40回研究会, 京大会館, 2005/10

百崎清美「18世紀フランス『百科全書』における「繊維」の項をめぐる——生命の学の近代化を促した一要因——」第2回 handai metaphysica 研究例会, 待兼山会館, 2006/3

百崎清美「『百科全書』における「繊維」の項をめぐる——生命の学の近代化を促した一要因——」日本科学史学会西日本研究大会, 龍谷大学深草キャンパス, 2005/11

(3)その他(書評・翻訳など)

【2005年度】

中野彰則「書評：上野修『スピノザの世界——神あるいは自然』」『メタフシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 36, pp. 89-94, 2005/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2004年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2005年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004年度 学部：0名 大学院：2名（計2名）

2005年度 学部：2名 大学院：0名（計2名）

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度～2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004年度～2005年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 7名

2004年度：学部5名(哲学・思想文化学)、大学院博士前期0名(いずれも「その他」に該当)

2005年度：学部2名(哲学・思想文化学)、大学院博士前期0名(いずれも「その他」に該当)

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2004年度 『メタフシカ』第35号、『メタフシカ』別冊

2005年度 『メタフシカ』第36号、『*Philosophia OSAKA* No. 1

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第2回 handai metaphysica 研究例会

2006年3月18日

第1回 handai metaphysica 研究例会

2005年7月16日

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

学部教育(哲学・思想文化学専修)については、哲学史についての基礎的な知識を身につけるために「近代哲学史」「現代哲学概説」を開講し、また外国語の哲学文献をはじめ読む学生のための基礎的な演習として「英米哲学基本文献読解」「フランス哲学基本文献読解」「ドイツ哲学基本文献読解」を提供するとともに、英語、フランス語、ドイツ語の演習に加えて、西洋文化理解に必須のラテン語による演習を複数開講した。現代哲学を研究する上で不可欠の知識となっている「論理学」を開講したが、これには、他専修、他学部の学生も多数参加し、広範な学生からの要望がみられた。また、留学生をチューターにして、英語で議論する訓練のための自主ゼミを2004年度に行い、海外大学との交流協定など様々な派遣制度を利用して、過去2年、留学生を送り出してきた。研究指導については、全スタッフが、オフィスアワーを週1、2回もち、個別の相談に応じた。また、年に2回の研究発表の機会をもうけて、文章作成、口頭発表、討論の訓練を行うとともに、専修が主催する研究会への学生の参加をうながした。

大学院教育においては、専門分野・哲学哲学史と緊密な連携のもとに、フランス哲学およびドイツ哲学に関する専門的知識の教授に努める一方で、科学史や思想史の研究方法を取り入れつつ、学生の多様な関心に対応している。修士論文および博士論文の作成指導については、発表とディスカッションを中心とした演習を毎週2コマ連続で開講し、各自の

論文の完成を助けると同時に、学会等での口頭発表に向け表現力を養う訓練を行い、さらに徹底したディスカッションを通じて批判的思考力を高める努力を続けている。後期課程の院生に対しては、専門分野発行の専門誌への論文執筆掲載へ向けて査読および指導を行うとともに、学会や研究会での発表をすすめ、学内および学外の雑誌への論文の応募をうながした。ただし、後期課程3年間で博士論文を提出できる院生の数の少ないことが今後の指導の課題である。

12-2. 研究活動

研究活動は、学問の性格上個人研究が中心であり、各自が積極的に論文執筆、学会や研究会での発表を行った。海外の学会へ参加するだけでなく、外国の研究者を招き、講演会を複数回開いた。2006年3月に大阪大学中之島ホールにおいて開催された「日独哲学シンポジウム」(日本におけるドイツ年 2005/06, フンボルト・コレーク)においては、哲学哲学史専門分野とともに積極的に協力し、各スタッフがシンポジウムの司会やコメンテータを務めた。科学研究費の交付を受けていた「哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション」(研究代表者・溝口宏平・現代思想文化学)に関する、哲学哲学史、現代思想文化学および臨床哲学各専門分野による共同研究の成果をまとめ、2004年度に報告書を作成した。従来どおり、当研究室の研究成果の一部は、哲学哲学史および臨床哲学専門分野と共同で発行している年刊雑誌『メタフィシカ』として公刊したが、2005年度よりこれに加えて新たに、哲学哲学史専門分野と共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* を発刊し、研究成果の海外発信をはかった。同じく2005年度より、哲学哲学史専門分野と共同で、哲学研究会 *handai metaphysica* を立ち上げ、研究例会を夏と春に2度開催し、特別講演会も行った。学会活動についても、これまでと同様に、ほとんどのスタッフが、各種の委員として学会の運営に貢献しており、学会の司会も数多くこなした。

現代思想研究の国際的な拠点となるために、これまで以上に積極的な計画を立てることが今後の重要な課題になると考えている。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 須藤 訓任 教授

京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。大谷大学助教授、同教授を経て、2004年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：西洋近現代哲学

1-1. 論文

Norihide SUTO, “Erlebnis und Gedanke der ewigen Wiederkehr des Gleichen bei Nietzsche”, *Philosophia OSAKA*

(Osaka University, Philosophy and History of Philosophy/ Studies on Modern Thought and Culture), No. 1, pp. 23-31, 2006/3

須藤訓任 「「習俗の倫理」について——ニーチェの「遠近法主義」の前景と背景——」大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフィシカ』36, pp. 1-13, 2005/12

須藤訓任 「人間において最善なところ」『アルケー』(関西哲学会編), 13, pp. 30-45, 2005/6

1-2. 著書

須藤訓任ほか(共著者：片柳榮一、安部浩、山本幾生、有馬善一、加藤泰史、宮原勇、中山善樹、山本精一、品川哲彦、望月俊孝、高橋憲雄、木岡伸夫、井上克人、松本啓二郎、竹市明弘、小浜善信)『哲学は何を問うべきか』(竹市明弘、小浜善信編)、担当論文「美のかたち——身体性の観点から」pp. 225-244(総335(+xxv)頁中20頁)、晃洋書房、2005/10

須藤訓任ほか(共著者：岡崎文明、杉田正樹、加藤泰史、小浜善信、菊池伸二、宮崎隆、田中敏彦、榊原哲也、村井則夫、平田一郎、柏端達也、古田智久、監修者：渡邊二郎、編集：哲学史研究会)『西洋哲学史観と時代区分』(担当論文「学説と人格のあいまい——「哲学史」の成立条件を求めて」)、昭和堂、pp. 265-311(総頁数484(+xxvi)頁中47頁)、2004/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

須藤訓任「「強者」とは誰のことか——ニーチェの場合」『文知の可能性 日本学術会議哲学系 公開シンポジウム 提題レジュメ集』(第19期日本学術会議哲学研究連絡委員会), 2005/9

須藤訓任「リチャード・ウォーリン著『ハイデガーの子どもたち』を読む」『図書新聞』263, 図書新聞, 2004/9/11

1-4. 口頭発表

須藤訓任 日独哲学シンポジウム関西プログラム「絶対的なものに即して/のあとに？」第3セッション・シンポジウム「絶対者と空無の思想」コメンテーター, 2006/3/29

須藤訓任「人間において最善なところ」第57回関西哲学会課題研究発表「人間は特異な存在者か」立命館大学, 2004/10/24

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本倫理学会年報編集委員・和辻賞選考委員	2003年9月1日～2005年8月31日
日本哲学会会誌『哲学』編集委員	2005年6月～2007年5月

2. 望月 太郎 助教授

1962年生。1985年、国際基督教大学教養学部人文科学科卒業(教養学士)。1988年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(修士課程)哲学哲学史専攻修了(文学修士)。1991年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程哲学哲学史専攻中退。文学博士(大阪大学、1997年)。1991年4月、徳島大学教養部講師。1993年4月、徳島大学総合科学部講師。1994年4月、東海大学文明研究所講師。1997年4月、東海大学文明研究所助教授。1998年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2004年4月、大阪大学大学教育実践センター助教授。専攻：西洋近世哲学史／フランス哲学、高等教育論。

2-1. 論文

望月太郎「教育評価の国際的基準についての研究(2)——ボローニャ・プロセスにおけるENQAの役割——」『大阪大学大学教育実践センター紀要』(大阪大学大学教育実践センター), 2, pp. 39-49, 2006/3

Taro Mochizuki, Climate and Ethics——Ethical Implications of Watsuji Tetsuro's Concepts : "Climate" and "Climaticity", *Philosophia OSAKA*, No. 1, pp. 43-56, 2006/3

望月太郎「教育評価の国際的基準についての研究(1)——ユネスコ文書をてがかりにした哲学的研究：文脈と展望——」『大阪大学大学教育実践センター紀要』(大阪大学大学教育実践センター), 1, pp. 79-96, 2005/3

望月太郎「グローバリゼーションの中の大学改革——それはいかなる思想に導かれているか?——」溝口宏平(研究代表者)編『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』(2004年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(2)研究成果報告書), pp. 92-98, 2005/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 望月太郎「海外展望：ボローニャ・プロセスはく帝国へのもう一つの道か」大学評価学会年報『現代社会と大学評価』
2, 「大学マネジメントと大学評価」晃洋書房《大学時評》, pp. 96-100, 2006/3
- Michaela Martin and Taro Mochizuki, “The Bologna Process in Europe — Can it be a model for other regions —”,
UNESCO-IIEP Newsletter Vol. XXIII, No. 3, July-September 2005, p. 11, 2005/9
- 望月太郎 春季シンポジウム報告「啓蒙と反啓蒙」はじめに『フランス哲学・思想研究』(日仏哲学会), 9, p. 1, 2004/8

2-4. 口頭発表

- 望月太郎「何のための評価か、誰のための評価か」(提題: ボローニャ・プロセス(ヨーロッパ)に見る<基準>の視点から),
大学評価学会第3回全国大会シンポジウム(提筆者: 茂木俊彦、碓井敏正、望月太郎(発表順), 司会: 橋本勝), 桃山学院
大学, 2006/3/18
- Taro Mochizuki “Rencontres avec la philosophie française : trois cas de philosophes japonais, KUKI Shuzo,
OMODAKA Hisayuki et MORI Arimasa”, Le 3^e Colloque d’Etudes japonaises de l’Université de Marc Bloch de
Strasbourg, La rencontre du Japon et de l’Europe : Image d’une découverte, Université Strasbourg II et Centre
européen d’Etudes Japonaise d’Alsace, 8-11 décembre, Strasbourg/Colmar, France, 2005/12/9
- Taro Mochizuki and Satoshi Ogihara “Teaching Quality Evaluation for Better In-house Staffing at the Higher
Education Level: A Case Study of Gender Disparity in a Japanese Research-centered University”, OECD
Conference on Trends in the management of human resources in higher education, 25-26 August 2005, Paris,
France, 2005/8/25
- 望月太郎「東南アジア諸国における教育改革の現状から——SEAMEO-UNESCO 教育会議(2004)に参加して——」大阪
大学大学教育実践センター第1回大学教育セミナー「世界の大学の現状と今後の課題」2004/9/15
- Taro Mochizuki, “Crisis of Academic Freedom”, The International Conference, Managing Teacher Education for
Excellence, July 11-14, 2004, Faculty of Education, Chulalongkorn University (Bangkok, Thailand), 2004/7/12

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2004年度、海外先進教育研究支援プログラム(文部科学省)、代表者: 望月太郎

研究題目: 教育評価の国際的基準についての研究

助成金額: 4,000千円

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日仏哲学会・理事・編集委員長

2004年8月～現在

日仏哲学会・理事・編集委員

2001年8月～現在

3. 中橋 誠 助手

1968年生。1993年、神戸大学法学部法律学科政治コース卒業。1996年、大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士前期課程修了。2000年、大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士後期課程単位修得退学。2004年現職。専攻: 現代思想文化学。

3-1. 論文

Makoto Nakahashi “Die aus der ἀλήθεια sich verstehende Phänomenologie”, in: *Philosophia OSAKA*, No.1, edited by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, OSAKA UNIVERSITY, pp. 65-77, March 2006

中橋誠「環境倫理の成立条件としての倫理」『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 46, pp. 23-35, 2006/3

中橋誠「現象学におけるアプリアリ」『メタフシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 36, pp. 29-39, 2005/12

中橋誠「相互承認としての相互闘争——グローバリゼーション・ローカリゼーション問題における民族概念の一考察——」『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』(2002年度～2004年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(2)研究成果報告書『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』(課題番号:14310004、研究代表者:大阪大学大学教育実践センター教授・文学研究科教授(兼任) 溝口宏平), pp. 63-71, 2005/3

中橋誠「アレーテアから把握される現象学」『倫理学年報』(日本倫理学会), 54, pp. 83-97, 2005/3

中橋誠「実存論的構成としての頽落」『メタフシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 35, pp. 49-59, 2004/12

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

中橋誠「現象学のアプリアリ」第2回 handai metaphysica 研究例会, 待兼山会館, 2006/3

中橋誠「環境と倫理——世界内存在」『生きられる空間』の生成と変容——システムとその外部——」シンポジウム(2005年度名古屋大学総長裁量経費プロジェクト・文学研究科プロジェクト「言語表象と脳機能に基づく環境哲学の拠点形成」), 2006/2

中橋誠「ハイデガールの思惟における感性的直観」日本哲学会, 南山大学, 2004/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-3 臨床哲学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

当分野は、現代社会において大小さまざまな問題(例えば、科学技術、医療、看護、介護、教育、環境、芸能、ジェンダー／セクシュアリティなど)について考えるために、(1)近代西洋／日本の倫理思想・道徳理論や現代の社会哲学・文化理論を学びながら、問題の定式化・分析を行うための方法論を探求する。それと同時に、(2)当事者・関係者ととも、それぞれのおかれた具体的な文脈に即して問題を掘り起こし、考察するための哲学的対話法やコミュニケーション方法の調査・開発を行っている。また、学内外のさまざまな研究者・活動家と連携しつつ、社会で現実に機能し得る研究活動プラン作りと遂行に取り組むなど、共同研究プロジェクトを推進している。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 2 助教授 1 講師 1 助手 0

教授：中岡 成文、鷺田 清一

助教授：本間 直樹

講師：紀平 知樹

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
26	6	3	0	0	0	2	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	7	5	4	1	1
'05	7	4	5	5	0
小計	14	9	9	6	1

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	1	0	1
'05	5	0	5
計	6	0	6

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

大北全俊	「あるがままを欲するということ——「注意深い観察」をめぐるナイチンゲールの思索——」2005/3 主査：鷺田清一 副査：中岡成文、紀平知樹
高橋綾	「こども学から〈こどもの哲学〉へ——メルロ＝ポンティ、デューイとともに」2006/3 主査：中岡成文 副査：鷺田清一、本間直樹
玉地雅浩	「転調する身体——中枢神経系の障害を持った人に対する理学療法を考え直す——」2006/3 主査：中岡成文 副査：鷺田清一、本間直樹
森芳周	「カント批判哲学におけるカテゴリー論の研究」2006/3 主査：中岡成文 副査：鷺田清一、舟場保之
渡邊美千代	「身体とケアの看護現象——ケアの〈あいだ〉に見えること・見えないこと——」2006/3 主査：中岡成文 副査：鷺田清一、本間直樹、紀平知樹
Lyudmila Pavlova Slavianska	The Impossibility of Reaching a Social and Moral Consensus on Euthanasia and Physician-Assisted Suicide and the Search for Alternatives 2006/3 主査：中岡成文 副査：鷺田清一、霜田求

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	2	0	1	0	0	3
'05	0	1	1	0	0	2
計	2	1	2	0	0	5

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	2	0	0	0	2
'05	0	0	0	0	0	0
計	0	2	0	0	0	2

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

岸田智「他者から／他者へ——メルロ＝ポンティと他者——」『待兼山論叢(哲学篇)』38, pp. 49-63, 2004/12

桑原英之「何が具体的か?——SDにおける具体例の位置づけ」『臨床哲学』6, pp. 31-40, 2005/1

瀬川睦子, 原頼子「終末期看護実習における死生観構築と共感性育成の効果的指導」『川崎医療福祉学会誌』15(1), pp. 141-147, 2005/3

【2005年度】

榎本直樹「インフォームド・コンセント:医療上の意思決定をめぐる」『擬似法的な倫理からプロセスの倫理へ——「生命倫理」の臨床哲学的変換の試み』課題番号 15320003-00 2003年度～2005年度 科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究成果中間報告書 研究代表者 大阪大学大学院文学研究科教授 鷺田清一(2003年度), 同講師 紀平知樹(2004年度～2006年度), pp. 3-14, 2006/3

玉地雅浩「我々は物とどのように出会っているか——洛星高校での授業の経験を通して——」『臨床哲学』7, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 1-20, 2006/3

(2)口頭発表

【2004年度】

原頼子, 瀬川睦子「看護大学生の終末期看護論授業前後の死に対する不安・態度の変化」日本看護研究学会地方学会, 第9回日本看護研究学会九州地方学会学術集会, くまもと県民交流館, 2004/11/13(『学術集会プログラム・抄録集』p. 30)

寺田敦子, 瀬川睦子, 原頼子「終末期における看護学生の実習修得度と共感性の関連」日本看護研究学会, 第30回日本看護研究学会学術集会, 大宮ソニックシティ, 2004/7/29 *Journal of Japanese Society of Nursing Research* (『看護研究内容要旨』p. 80)

(3)その他(書評・翻訳など)

【2005年度】

榎本直樹(書評)「プラグマティズムと政策:水の事例 Andrew Light and Eric Katz ed.: *Environmental Pragmatism*」『臨床哲学』7, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 63-75, 2006/3

榎本直樹「洛星高校の授業にコーディネーターとして参加して」『臨床哲学のメチエ』15(特集:哲学@洛星高校), 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 42-43, 2006/3

榎本直樹他「「出会いのつがく 2003」@福井高校 <二学期>」『臨床哲学のメチエ 臨床の知のネットワークのために』14(特集 臨床哲学の現在——哲学カフェ/高校での哲学教育), 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 17-23, 2005/8

榎本直樹, 川上展代(翻訳)「ソクラテック・ダイアログの方法論:遡及的抽象——どのように哲学的認識を求め、見出すのか」『臨床哲学』7, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 77-104, 2006/3

高嶋麻衣子「つつこむことから始めよう」『臨床哲学のメチエ 臨床の知のネットワークのために』14(特集 臨床哲学の現在——哲学カフェ/高校での哲学教育), 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, p. 27, 2005/8

武田朋士「「これが私の優しさです」——須磨友が丘高校の生徒たちとの対話と彼女／彼らの優しさ」『臨床哲学のメチエ 臨床の知のネットワークのために』14(特集 臨床哲学の現在——哲学カフェ／高校での哲学教育), 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 4-5, 2005/8

武田朋士「「笑い」を哲学する」『臨床哲学のメチエ』15(特集: 哲学@洛星高校), 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 27-29, 2006/3

玉地雅浩(共著・分担執筆 27 項目), 宮原伸二編著『福祉医療用語辞典』創元社, pp. 192-200, 2006/3

玉地雅浩「我々は物にどのように出会っているか」『臨床哲学のメチエ』15(特集: 哲学@洛星高校), 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 21-22, 2006/3

濱田唯「洛星高校での授業について」『臨床哲学のメチエ』15(特集: 哲学@洛星高校), 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 40-41, 2006/3

松川絵里(書評)「言語の政治性と calling into question ——ジュディス・バトラー「性的差異の終焉？」—— Judith Butler: *Undoing Gender*」『臨床哲学』7, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 51-60, 2006/3

松川絵里, 本間直樹, 横田恵子(報告)「性について対話するためのツールとしての絵本」『臨床哲学』7, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 111-120, 2006/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2004 年度 PD : 1 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

2005 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

なし

6. 専門分野出身の研究者

(2004 年度～2005 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004 年度～2005 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2004 年度 : 0 名 2005 年度 : 1 名

<内訳> 高等学校教員 1 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2004 年度 『臨床哲学』、『臨床哲学のメチエ』

2005 年度 『臨床哲学』、『臨床哲学のメチエ』

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

引き続き臨床哲学という新しい理念を学生に理解させ、参与させるべく、種々の授業を開設しており、所定の成果をあげている。例えば「臨床哲学概論」という授業では、過去の哲学思想を振り返りつつ、臨床哲学の理念を所属の全教員及び学生とともに明確にしようと努めている。またある授業では分科会形式をとり、学生に部分的にイニシアティブを任せると、学生の自主性を促進することに成功している。これらの点については関係学会から注目され、「大学教育」についてのシンポジウムに招かれている。またせっかく学生に海外での学会に参加し、研究発表する機会を与えているにもかかわらず、外国語(主として英語)の発信能力が不十分であり、十分にその機会を生かすことができていなかったため、それを組織的に養成する授業の必要性が感じられていた。これについては集中講義として、英語のみでディスカッションを行う授業を開講したり、授業外で希望の学生を募り英会話のトレーニングを行うなどして対応しているが、やはりネイティブスピーカーや外国の方とじかに話す機会が定期的にあることが望ましいと思われる。この点が、今後の課題である。

12-2. 研究活動

文献研究を中心として哲学・倫理学の研究を推進する傍ら、大学の内外で様々な職業や立場の市民と協力しつつ、哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行っており、企業・自治体・NPOなどからも注目を集めつつある。これらの研究・実践活動には学生も積極的に参加して経験を積んでいる。それに伴い、従来見られた学生の研究方向に関する迷いもかなり解消していると見られる。具体的には、研究室のメンバーが中心となり、学外に任意団体「café philo」を設立し、定期的に哲学カフェを開催し、哲学的対話の文化を社会に浸透させるよう努めている。またそのような活動の成果を用い、京都の洛星高校で2年間にわたり、学生の手を借りつつ哲学の授業を行っている。

また中岡が「公共的対話モデルの有効性の検討」で、本間は「子供の哲学」創成に向けた基礎的・実践的研究」で、紀平は「擬似法的倫理からプロセスの倫理へ——「生命倫理」の臨床哲学的変換の試み」という課題でそれぞれ科学研究費の交付を受けて、研究を遂行している。またそれらの成果や研究室発行の雑誌などは電子化し、インターネット上に公開している。

設備の面では、読書会・研究会の活発な開催を可能にするスペース(ゼミ室)が依然として不足しており、学生の研究遂行を圧迫している。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 鷺田 清一 教授

1949年生。1977年、京都大学大学院文学研究科博士課程修了。関西大学文学部専任講師、助教授、教授を経て、1992年大阪大学文学部助教授、1996年大阪大学文学部教授。2004年より大阪大学理事・副学長。大阪大学出版会会長。専攻：哲学・倫理学。

1-1. 論文

鷺田清一「イメージと表面」「モード化される身体」徳丸吉彦・青山昌文編『芸術・文化・社会』(放送大学教育振興会), pp. 24-38, 2006/3

鷺田清一「〈老い〉はまだ空白のままである」『中央公論』2006年1月号(中央公論新社), pp. 229-235, 2006/1

- 鷺田清一「社会学連携の新しいかたち——大阪大学 CSCD の実験」『21 世紀フォーラム』(政策科学研究所), pp. 12-19, 2005/12
- 鷺田清一「表象としての身体——身体のイメージとその演出」叢書《身体と文化》3・『表象としての身体』(大修館書店), pp. 8-28, 2005/7
- 鷺田清一「見えない衣——下着という装置、マネキンという形象」叢書《身体と文化》3・『表象としての身体』(大修館書店), pp. 352-371, 2005/7
- 鷺田清一「〈健康〉と現代社会」『理学療法学』(日本理学療法学会), 32-1, pp. 6-10, 2005/2
- 鷺田清一「日本、もうひとつの顔」『大阪大学 21 世紀 COE プログラム《インターフェイスの人文学》報告書』pp. 28- 35, 2005/2
- 鷺田清一「身体クライシス」『大航海』53, 新書館, pp. 40-45, 2005/1
- 鷺田清一「ヒト胚利用の恩恵が、いかに多大でも、「倫理」をしのぐことにはならない」文藝春秋編『日本の論点 2005』文藝春秋, 2004/ 11
- 鷺田清一「働くことの意味?」『倫理学研究』(関西倫理学会), 34, pp. 23-32, 2004/4

1-2. 著書

- 鷺田清一『〈想像〉のレッスン』NTT 出版ライブラリー・リゾナント 015, NTT 出版, 2005/10/31
- 鷺田清一, 野村雅一(編著)『表象としての身体』叢書《身体と文化》第 3 巻, 大修館書店, 2005/7/15
- 鷺田清一『ちぐはぐな身体』ちくま文庫, わ-8-1, 筑摩書房, 2005/1/10
- 鷺田清一『ことばの顔』中公文庫, わ-20-1, 中央公論新社, 2004/4/25
- 鷺田清一『教養としての「死」を考える』新書 y108, 洋泉社, 2004/4/21

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 鷺田清一「「静かな革命家」に密着して描いた肖像・瀧口範子『にほんの建築家／伊東豊雄・観察記』』『朝日新聞』朝刊, 2006/3/26
- 鷺田清一「水平的な共生めざす「まつろわぬ」宣言・『ピーブルの思想を紡ぐ』』『朝日新聞』朝刊, 2006/3/19
- 鷺田清一「市民との公共的な討議で方向の模索を・中島秀人『日本の科学／技術はどこへいくのか』』『朝日新聞』朝刊, 2006/2/26
- 鷺田清一「「自己統治」強調で制約がより大きく・齋藤純一『自由』』『朝日新聞』朝刊, 2006/1/29
- 鷺田清一「見晴らしのよい「最強の民族音楽」史・岡田暁生『西洋音楽史』』『朝日新聞』朝刊, 2005/12/18
- 鷺田清一「無視されてきた西欧の辺境で小説は進化した・ミラン・クンデラ『カーテン——7 部構成の小説論』』『朝日新聞』朝刊, 2005/12/4
- 鷺田清一「音楽の「なぜ」を精密に語ることばたち・『グレン・グールド発言集』』『朝日新聞』朝刊, 2005/11/20
- 鷺田清一「微細な応答の積み重ねで「特異」を解く・森岡正芳『うつし/臨床の詩学』』『朝日新聞』朝刊, 2005/10/30
- 鷺田清一「変化し続ける路上生活者住居の記録・長嶋千聡『ダンボールハウス』』『朝日新聞』朝刊, 2005/10/23
- 鷺田清一「体験を引き受けなおす真摯な自己描写・宮地尚子『トラウマの医療人類学』』『朝日新聞』朝刊, 2005/9/18
- 鷺田清一「「人間よりも進みすぎた」隣人に学びたい・山際寿一『ゴリラ』』『朝日新聞』朝刊, 2005/7/3
- 鷺田清一「「似ている」から始まる思考の魅力・松田行正『眼の冒険——デザインの道具箱』』『朝日新聞』朝刊, 2005/6/26
- 鷺田清一「明るく薄っぺらな「晴れ舞台」を徹底解剖・榎木野依『戦争と万博』』『朝日新聞』朝刊, 2005/4/24
- 鷺田清一「教訓垂れず経験をさらりと・木田元『新人生論ノート』』『日本経済新聞』朝刊, 2005/4/10
- 鷺田清一(解説)「南木佳士『神かくし』』文藝春秋, 2005/4
- 鷺田清一「えらぶらず、ぎりぎりまで考える・福田定良遺稿集『堅気の哲学』』『朝日新聞』朝刊, 2005/3/20
- 鷺田清一「「みつともない」からやめるのです・村上陽一郎『やりなおし教養講座』』『朝日新聞』朝刊, 2005/2/10
- 鷺田清一「向こうから「乗りだして」くる顔・J. L. ナンシー『肖像の眼差し』』『朝日新聞』朝刊, 2005/1/23
- 鷺田清一「青木淳『原っぱと遊園地』』『朝日新聞』朝刊, 2005/1/9

- 鷺田清一(解説)「食べないと死ぬ」から「食べると死ぬ」へ・『十代に何を食べたか』平凡社, 2004/12
- 鷺田清一, 湯沢英彦『クリスチャン・ボルタンスキー』『朝日新聞』朝刊, 2004/11/14
- 鷺田清一「福祉」の未来を見つめる格闘と葛藤●落合恵子『母に歌う子守唄』『朝日新聞』朝刊, 2004/10/31
- 鷺田清一「三角測量と強靱な視線が生む「語り」●川田順造『人類の地平から』『アフリカの声』『人類学的認識論のために』『朝日新聞』朝刊, 2004/9/19
- 鷺田清一「切迫感漂う亡き師の「総括」・熊野純彦『戦後思想の一断面——哲学者廣松渉の軌跡』『朝日新聞』朝刊, 2004/6/27
- 鷺田清一「伝わらない不安直視する「対話」・平田オリザ『地図を創る旅——青年団と私の履歴書』『朝日新聞』朝刊, 2004/6/13
- 鷺田清一「建築の「強さ」とことん検証の評論集・隈研吾『負ける建築』『朝日新聞』朝刊, 2004/5/30
- 鷺田清一(解説)「双児のこころざし・鎌田實・高橋卓志『生き方のコツ、死に方の選択』集英社文庫, 2004/5
- 鷺田清一「現代社会憂う成熟した知性のささやき・チャールズ・テイラー『〈ほんもの〉という倫理』『朝日新聞』朝刊, 2004/4/18

1-4. 口頭発表

- 鷺田清一「文化と「元気」山城いきいき文化カシンポジウム(京都府山城広域振興局), 2006/3/21
- 鷺田清一, 西村佳哲「公開対談・「働くこと」を考える——職業生活をデザインする」奈良県立図書館開設記念トークセッション, 2006/3/18
- 鷺田清一「聴くことの意味」第12回日本死の臨床研究会近畿支部会《緩和ケアにおける傾聴》, 2006/1/29
- 鷺田清一「生命・アート・社会」アーツ・イン・ヘルスケア学会設立発起人会記念講演会, 2005/12/20
- 鷺田清一, 立岩真也, 川本隆史, 清水哲郎, 上野千鶴子「シンポジウム・ケアと自己決定」21世紀COEプログラム「死生学の構築」/応用倫理教育プログラム, 2005/11/26
- 鷺田清一「分からないことの大切さ」大谷大学2005年度宗教シンポジウム, 2005/11/13
- 鷺田清一「文化としてのケア」平成17年度日本看護協会九州地区看護研究学会, 2005/11/12
- 鷺田清一「専門家と市民のカルチャー・ギャップ」第9回関西科学技術セミナー《市民のための科学技術?》, 2005/11/8
- 鷺田清一「弱さについて」第36回日本看護学会——地域看護——, 2005/10/29
- 鷺田清一, 河合隼雄, 山折哲雄, 藤見幸雄「シンポジウム・宗教性をめぐって」日本心理臨床学会第24回大会, 2005/9/8
- 鷺田清一「からだの現在」第39回日本作業療法学会, 2005/6/26
- 鷺田清一, 猪木武徳, 嘉田由紀子, 小林傳司, 野村雅一「シンポジウム・歩く人文学」人間文化研究機構第1回公開シンポジウム, 2005/6/25
- 鷺田清一「医療の技術、医療の倫理」第4回再生医療学会総会, 2005/2/28
- 鷺田清一「看護と現象学」静岡県立大学, 静岡県立大学看護学部特別講義, 2004/11/20
- Kiyokazu WASHIDA “D’autres visages du Japon”, Université Marc Bloch, Hall Louis Pasteur, Forum 2004 de l’université d’Osaka a Strasbourg, 》Le Japon, d’autres visages 《, 2004/11/5
- 鷺田清一「聴くことは疲れるが、でも聴かなければならない——聴くことの意味」パシフィコ横浜, 第20回日本歯科医学会総会, 2004/10/30
- 鷺田清一, 田中每実, 鳥光美緒子『『つなぐ』——むすぶ手、かよう心、人と人との暮らしづくり』「研究発表・専門と臨床のあいだ」シンポジウム・臨床的人間形成論の構築 横浜国立大学, 教育哲学会第47回大会, 2004/10/16
- 鷺田清一, 高木慶子, 柳田邦男「公開鼎談・思いを抱えて(震災後10年)」神戸国際会議場, 第47回日本病院・地域精神医学会神戸総会, 2004/10/2
- 鷺田清一「ケアにおける専門性」名古屋国際会議場, 第35回日本看護学会(成人看護I), 2004/10/1
- 鷺田清一「からだの現在」若里市民文化ホール(長野市), 日本体育学会第55回大会(社団法人日本体育学会), 2004/9/25
- 鷺田清一「教養としての「死」を考える」奈良市男女共同参画センターあすなら, 特別講座シリーズ・「ケアの文化」の創造②(たんぼの家), 2004/8/22

鷺田清一「めいわくかけてありがとう」ば・る・るプラザ KYOTO, 第 29 回会近畿知的障害養護学校教育研究大会, (近畿知的障害養護学校教育研究協議会), 2004/8/20

鷺田清一「高齢者の心の理解と心のケア」国立京都国際会館, 2004 年度近畿老人福祉施設研究協議会京都大会『施設から地域への発信・新たなケアの方向性をさぐる』第 10 研究分科会「老いを問い直す」2004/7/27

鷺田清一「シンポジウム・健康の視点」仙台国際センター, 日本理学療法学会, 2004/5/28

鷺田清一「看護と哲学をつなぐもの」愛知医科大学, 愛知医科大学看護学研究科創立記念式典, 2004/5/22

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

鷺田清一 紫綬褒章, 内閣府, 2004

鷺田清一 桑原武夫学芸賞, 潮出版社, 2000

鷺田清一 サントリー学芸賞(思想・歴史部門), サントリー文化財団, 1989

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2002 年度～2006 年度、21 世紀 COE プログラム、代表者：鷺田清一

研究題目：「インターフェイスの人文学」

課題番号：機関番号 14401、整理番号 D-1

研究経費：2004 年度 110, 200 千円

2005 年度 直接経費 76, 000 千円 間接経費 7, 600 千円

研究の目的：

環境危機、生命操作、医療と介護、教育、性のあり方、家族とコミュニティ、マイノリティ等をめぐって現代社会が抱え込むさまざまな困難な問題は、もはやかつてのような政治・経済レベルで対応できる問題ではなく、また特定の地域や国家に限定して処理しうる問題でもない。

文明の転換期にあって、これら文化の根幹に関わる諸問題は、文化への根源的な問いかけなくしては解決できない状況にある。その意味で、現代の社会問題は、人文学の視点をこそ強く必要としている。

人文学は、思想や芸術、さらには科学研究をもふくめて文化と歴史の総体を問題とするものでありながら、その研究はこれまで、国家や地域、さらには言語圏によって分割され、その縦割りの制度のなかで文献研究を中心的な方法として追求されてきた。しかし、「ひとつの文化」といわれるものも実際には、複数の文化の接触と越境、交錯と遮断のなかで生成し、流動する。とりわけ、複数文化の接触は近年、一方ではグローバル化の進行によって国家や地域の間でますます加速され、そのことでさまざまな摩擦を引き起こしつつあるとともに、他方でそれぞれの国家や地域の内部でも、民族間、あるいはマジョリティとマイノリティ、「官」と「民」、専門家と一般市民等のあいだでさまざまな文化的軋轢を顕在化させつつある。いずれの局面でもコミュニケーションとディスコミュニケーションの様相はますます複雑になっている。そういう問題の複雑さに現在の人文学がアクチュアルに対応できていないとすれば、その原因は、国家や地域をある閉じた固定的な枠組みとするこれまでの人文学の考え方にある。

本プログラムは、文化の生成をつねに複数文化のインターフェイスの相対動的に見てゆく〈インターフェイスの人文学〉への、人文学の創造的変換を目的とする。具体的には、複数文化の激しい接触の中で変動する 21 世紀の社会を的確に捉えるために、人文学を、二つの新しい知、つまり、異なる複数文化の接触・交差・軋轢を、国家・地域横断的に捉える〈横断的な知〉と、文化の諸次元、とりわけ研究者と問題発生の現場、専門家と一般市民とを架橋する〈臨床的な知〉を核とするものへと構造変換するためのプログラムを設計する。このことで、複数文化の交錯のなかで発生するさまざまな社会問題にアクチュアルに対応できる新しい 21 世紀型の人文学がデザインされる。

1-8. 学会役員等の引き受け状況

(学会役員等)

日本学術会議連携会員	2006年3月～現在
アートミーツケア学会会長	2006年3月～現在
日本哲学会・男女共同参画検討委員	2005年7月～現在
同上・委員	2001年6月～現在
関西哲学会委員	1995年10月～現在
関西倫理学会委員	1991年11月～現在
日本倫理学会評議員	1991年4月～現在
日本現象学会委員	1989年4月～現在
日本現象学・社会科学会委員	1984年12月～現在

(審議会委員・審査委員等)

第24回朝日現代クラフト展審査委員長(朝日新聞社)	2006年1月～現在
河上肇賞選考委員(藤原書店)	2005年4月～現在
文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会・豊かな心をはぐくむ教育の在り方に関する専門部会委員	2004年9月～現在
人間文化研究機構国際日本文化研究センター運営会議委員	2004年4月～現在
(財)懐徳堂記念会・理事	2004年4月～現在
日本学術振興会・人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業委員会委員	2004年1月～現在
京都府文化力創造懇話会委員	2003年10月～現在
社会福祉法人京都市社会福祉協議会京都市長寿すこやかセンター運営委員会委員	2003年7月～現在
サントリー学芸賞審査委員	1993年4月～現在
稲盛財団研究助成選考委員会委員	2005年度
科学技術・学術審議会科学研究費補助金審査部会委員〔人文・社会系委員会、研究成果公開発表委員会、がん領域評価委員会〕	2005年4月～2006年3月
(財)国際高等研究所特別委員	2002年4月～2006年3月
大阪府現代美術センター指定管理者選定委員会委員	2006年1月
日本学術振興会「魅力ある大学院教育」シニアティブ委員会人社系分野別審査部会専門委員	2005年8月～2005年12月
2005 国際クラフト展審査委員長(伊丹市／伊丹市クラフト協会)	2005年8月
第20回京都賞思想・芸術部門専門委員会委員	2003年11月～2004年11月
内閣府総合科学技術会議専門委員(生命倫理)	2001年4月～2004年10月
2004 国際クラフト展審査委員長(伊丹市／伊丹市クラフト協会)	2004年8月

2. 中岡 成文 教授

1950年生。1973年、京都大学文学部哲学科卒。1978年、京都大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位修得退学。文学修士(京都大学)。1980年、福岡女子大学専任講師。1987年、大阪大学助教授。1996年9月、大阪大学教授。専攻：倫理学／臨床哲学。

2-1. 論文

中岡成文「科学論から1930年代を見る——下村寅太郎の思想を中心に」『日本思想史学』37, pp. 20-28, 2005/9

中岡成文「大学における科学技術コミュニケーション教育」『Science & Technology Journal』14/4, pp. 22-23, 2005/4

中岡成文「「倫理なんて」という前に」『図書』664, pp. 12-15, 2004/8

2-2. 著書

堀江剛, 中岡成文『ケアの社会倫理学——医療・看護・介護・教育をつなぐ, 第6章臨床哲学とケア』有斐閣選書, pp. 181-200, 2005/8

中岡成文他『生命, 第1章講義の七日間——生命に肉薄する言葉』(岩波応用倫理学講義第1巻), 岩波書店, 2004/7

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中岡成文「コミュニケーションをデザインするとは」『生産と技術』57/3, pp. 63-64, 2005/7

2-4. 口頭発表

Nakaoka, Narifumi, Invention of Boundaries - Kyoto-School Philosophers Confronting Western Modernity, ボローニャ大学言語学・東洋学科, 2006/2

中岡成文「臨床哲学とコミュニケーションデザイン」日本倫理学会第56回大会共通課題「倫理学の現実(リアリティ)」2005/10

中岡成文「臨床哲学の実践と課題」日本哲学会第63回大会ワークショップ「哲学教育を考える」2004/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2004年度～2007年度、科学研究費補助金基盤研究(B)(2)、代表者：中岡成文

課題番号：16320005

研究題目：新しい公共的対話モデルの有効性の検討

研究経費：2004年度 3,400千円

2005年度 2,200千円

研究目的：

研究代表者・分担者を中核とするチームによってすでに開発されつつある「対話コンポーネツ」という公共的対話のモデルを多数回実践し、社会的争点について当事者たちが一定の相互理解や合意を達成するうえでそれがどの程度有効であるかを明らかにする。また、その知見をもとに、さらにモデルを改善し、試行する。

対話コンポーネツという、3段階の公共的対話の方法論はこれまでいかなる国でも知られておらず、独創的であるといえる。これはたんなるディスカッション、意見交換ではない。第1段階では社会的な「争点」(たとえば先端科学技術の危険と可能性)について当事者たちがどんな具体的な「懸念と期待」をもっているかを幅広く探り出し、それを列挙する。第2段階では、当事者たちによる10人程度の小規模対話を何回か組織し、「懸念と期待」の底にある「原点」、すなわち基本的な問題点(たとえばそもそも「リスク」とは何か)をパーセプション(感じ方)のレベルにまで降りて対話参加者が内省し、そこから「原点」についての合意を模索する。このモデル(または改善されたモデル)を利用することにより、市民参加に新しい局面が開かれると予想される。すなわち、たんに既存の利害得失をもとにした最大公約数的な合意ではなく、参加者各人としても発見があり、社会としても新たな方向性をもつ合意が可能となる。

1. ドイツ語圏やオランダ、イギリスなどでは、「ソクラティック・ダイアログ」(ソクラテス的対話、以下SD)という少人数の哲学的対話方法論がすでに数十年来研究され、企業や教育、医療・看護・介護などの分野で市民を相手に実践されている。それを踏まえて、オーストリアのB・リティヒは「異種移植」の倫理的問題のアセスメントにSDを導入する研究(欧州委員会により採択)を2002年度より2年の予定で実施中で、2004年3月までにはその報告が出る。我が国では唯一大阪大学で市民の参加するSDが1999年から30回近く実践され、その成果も評価・公表されている。本研究はこの実績に基づき、前述したドイツ語圏SDの実践家たちとの交流および意見交換に支えられ、リティヒとの国際共同研究の側面をもちつつ遂行されるものである。

2. 遺伝子作物や原子力発電所などの争点をめぐる「コンセンサス会議」については、EU圏の先行例を参考に我が国

でも、小林傳司教授(南山大)や平川秀幸助教授(京都女子大)などの STS(社会・科学技術論)関係者、倫理学者が加わって幾度か試行されているが、それについての詳細な評価はこれまでに出不されてない。本研究代表者はこの人々とも共同して、2002年度、2003年度に文部科学省の科学技術振興調整費(科学技術政策提言)で「臨床コミュニケーションのモデル開発と実践」の調査研究を行い、本研究で利用する「対話コンポーネツツ」のモデルを開発した。本研究は当該調査研究の成果を受けて発展させるものである。

3. 法曹の領域や環境問題、消費者問題における紛争解決の新たなシステムとして、アメリカに続き我が国でもADR(裁判外紛争処理、「調停」とそれを担うミディエーター(調停人)の制度が注目を集めつつある。本研究は、我が国におけるADR研究および実践者の第一人者である稲葉一人氏(科学技術文明研究所)を分担者に加え、稲葉氏の調停人養成プログラム策定の経験をより幅広い領域で生かしてもらおうことをねらっている。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 21世紀COEプログラム分担

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

3. 本間 直樹 助教授

1970年生。1998年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。1998年、大阪大学大学院文学研究科哲学講座助手。2000年同研究科講師、2005年学内派遣教員として新設コミュニケーションデザイン・センター講師として文学研究科兼任、2006年4月より現職。専攻：哲学／倫理学／臨床哲学。

3-1. 論文

本間直樹, 久保田テツ 「『眼のことば』とカメラの眼：映像ドキュメンテーションの可能性について考える」2005年度科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果中間報告書『擬似法的な倫理からプロセスの倫理へ：「生命倫理」の臨床哲学的変換の試み』pp. 111-128, 2005/3

本間直樹 「対話を演ずる：「子どもの哲学のため」の二つの実践から」『臨床哲学』6, pp. 40-53, 2004/12

3-2. 著書

本間直樹(分担著執筆)中岡成文編『応用倫理学講義 1 生命』岩波書店, pp. 107-127, 2004/7

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

本間直樹, 松川絵里, 横田恵子(報告)「性について対話するためのツールとしての絵本」『臨床哲学』7, pp. 111-120, 2006/3

本間直樹(翻訳)ロンダ・シービンガー「クローゼットの中の骸骨たち」『叢書 身体と文化』3, 市川雅, 菅原和孝, 野村雅一, 鷺田清一編『表象としての身体』大修館書店, pp. 74-118, 2005/7

本間直樹(ハンドブック項目)「つながり、からだ、ことば、ちがひ——コミュニケーションについて」『ケアリングソサエティ「生きやすい社会へ」』財団法人たんぼぼの家, pp. 48-58, 2005/3

3-4. 口頭発表

Naoki Homma, Tsuyoshi Horie, Trial Application of the "Dialogue Complex" : With the theme of in-home medical care, 5th International conference on Socratic dialogue in Berlin, July 2005

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2005年度～2007年度、若手研究A、代表者：本間直樹

課題番号：17682001-00

研究題目：『子どもの哲学』創成にむけた基礎的・実践的研究

研究経費：2005年度 2,800千円

研究目的：

本研究の目的は、教育学および教育技術論として哲学の「応用」ではなく、哲学および哲学教育の一つの柱として「子どもの哲学」創成を目指すことにある。つまり、「子ども」を「大人」を完成形とした未熟な存在として捉えるのではなく、「文化の生い立つ場」として「子ども⇄大人」の相互移行関係を研究の中心に据え、それについての心理学・社会学・人類学を含めた総合的研究を行う。その際、子ども自身が単に研究の対象となるのではなく、哲学的思考の主体として研究に加わることが必須である。そのために、「遊び」と「対話」を重視した子どもたちとのさまざまな活動を実際に試み、そのなかで子どもたちが考えることをさまざまな表現媒体へと定着させ、そこからさらに申請者がこれまで取り組んできた哲学的対話法(ネオソクラテック・ダイアログなど)の研究と実践を活かすことによって、子どもたち自身が彼ら彼女らの具体的な経験や想像力から出発して、抽象的・知的概念操作にまで至ることのできるよう、一連の方法論を確立する。また扱われるテーマについても、「自由」や「存在」などに限らず、科学的・技術的知を生活知(知覚世界)から批判的に問い直す現象学的方法を用いるなどして、現代の科学技術に関わる問題をも子どもたちとともに考えることを目指す。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

4. 紀平 知樹 講師

1969年生。1992年、立命館大学文学部哲学科卒。2000年、大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史(倫理学)専攻単位修得退学、大谷大学特別研修員。2002年、大阪大学大学院文学研究科助手。2003年、文学博士(大阪大学)。2004年、大阪大学大学院文学研究科講師。専攻：哲学／倫理学／臨床哲学。

4-1. 論文

紀平知樹「生物多様性の保全と持続的な利用」『擬似法的な倫理からプロセスの倫理へ——「生命倫理」の臨床哲学的変換の試み』(2003年度～2006年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果中間報告書 研究代表者 紀平知樹), pp. 79-95, 2006/3

紀平知樹「均された世界と生——自然科学と開発による生活世界の喪失」『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』(2002年度～2004年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書 研究代表者 溝口公平), pp. 28-38, 2005/3

紀平知樹「フッサール」村松茂美、小泉尚樹、嗟峨一郎編『はじめて学ぶ西洋思想——思想家たちとの対話』ミネルヴァ書房, pp. 193-199, 2005/3

紀平知樹「持続可能な開発としてのエコツーリズム」田中朋弘、柘植尚則編『ビジネス倫理学』ナカニシヤ出版, pp. 145-173, 2004/11

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2003年度～2006年度、科学研究費補助金基盤研究(B)、代表者：紀平知樹

課題番号：15320003

研究題目：擬似法的な倫理からプロセスの倫理へ——「生命倫理」の臨床哲学的変換の試み

研究経費：2004年度 3,500千円

2005年度 3,500千円

研究の目的：

本研究は、従来の生命倫理を擬似法的倫理と見なし、それに替わる倫理としてプロセスの倫理の構築を目指すものである。従来の生命倫理は、当初まさに倫理的原則の応用として構想された応用倫理学の一部門として形成されたものであるがゆえに、現実問題への規則の制定に重点が置かれていた。またそれはあるケースを第三者的な立場から判定するという、いわば法廷モデルによって構築された理論であるように思われる。倫理学を、社会の様々な場面で生じてくる問題に目を向けさせたという点では評価に値するが、しかし、現実が生じている問題は、単に原則を適用すればすむ問題ではない。そこで本研究においては、問題—解決へと至るプロセスに着目する倫理をプロセス倫理とよび、その構想を具体化することを目的とする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

日本現象学会委員

2004年11月13日～現在

2-4 中国哲学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

中国哲学は、中国古典の精読を通じて、広く東アジア世界の文化的特質を解明しようとする実証的学問である。本研究室は、全国の主要大学の中でも、この学問を主対象として、体系的・組織的・継続的に教育・研究を行っている数少ない拠点の一つである。

その中でも突出した特色としては、①既存の伝世文献に加え、新たに発見された竹簡・帛書などの出土資料を積極的に取り上げて考究する点、②担当教員数は少ないながらも、中国古代から近世、さらには日本漢文に至る幅広い時代・思想を対象とする点、③大阪大学が誇る漢籍コレクション「懐徳堂文庫」の整理・調査、およびその電子情報化を推進する点、などが挙げられる。具体的な成果物としては、学術誌『中国研究集刊』の編集・刊行(年2~3回)、『懐徳堂文庫図書目録』電子版の作成・公開、研究室HPを通じた研究情報の公開などがある。

また本研究室は、旧来の小講座制の良き伝統を継承しながらも、とかく閉鎖的になりがちな小講座の体質を脱却し、学内外の組織と密接な協力関係を築いている。具体的には、『中国研究集刊』の刊行母体である「大阪大学中国学会」の事務局、新出土資料を研究する「戦国楚簡研究会」の事務局、懐徳堂文庫の調査・研究に当たる「懐徳堂研究会」の事務局を兼ね、学外研究者と協力しながら斯学の発展に努めている。また、名古屋大学の中国哲学・中国文学研究室と定期的な研究交流を行い、出土資料の国際シンポジウムを開催するなど、開かれた教育・研究組織として積極的な活動を展開している。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 1 助教授 0 講師 1 助手 1

教授：湯浅 邦弘

講師：辛 賢

助手：前川 正名

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
5	4	2	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	0	0	1	1	0
'05	2	1	2	2	2
小計	2	1	3	3	2

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	1	0	1
'05	2	0	2
計	3	0	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

池田光子「懷徳堂と中井履軒——「徳」解釈を中心に——」2006/3

主査：湯浅邦弘 副査：辛賢、高橋文治

黒田秀教「章學誠の思想構造」2006/3

主査：湯浅邦弘 副査：辛賢、高橋文治

佐野大介「「孝」思想の研究」2005/3

主査：湯浅邦弘 副査：辛賢、高橋文治

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	0	1	2	0	0	3
'05	1	1	0	0	0	2
計	1	2	2	0	0	5

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	2	2	0	0	0	4
'05	0	1	0	0	0	1
計	2	3	0	0	0	5

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

上野洋子 『夢占逸旨』外篇について『待兼山論叢(哲学篇)』(大阪大学文学会), 38, pp. 65-78, 2004/12

佐野大介 「孝子義兵衛関連文献と懐徳堂との間 附翻刻」『懐徳堂センター報』(大阪大学文学研究科・文学部懐徳堂センター), 2005, pp. 145-179, 2005/2

佐野大介 『蒙養篇』諸本間の異同について 附校合記『懐徳』(懐徳堂記念会), 73, pp. 53-69, 2005/1

【2005年度】

上野洋子 『夢占逸旨』における陳士元の夢の思想——「真人無夢」をめぐって——『東方宗教』(日本道教学会), 105, pp. 41-59, 2005/5

黒田秀教 「懐徳堂学派葬祭説の来源——『喪祭私説』主面書式を手掛りにして——」『待兼山論叢(哲学篇)』(大阪大学文学会), 39, pp. 33-48, 2005/12

(2)口頭発表

【2004年度】

池田光子 「中井履軒における「心」と「四徳」」(名古屋大学・大阪大学 中国学研究交流会), 大阪大学, 2004/11

上野洋子 「關於《詩論》中的「民性固然」」(先秦思想暨出土文献国際青年学者学術研討会), 台湾大学, 2005/3

上野洋子 『夢占逸旨』と道家の夢理論——「真人不夢」を中心に」(道教学会), 大阪市立大学, 2004/12

佐野大介 「東漢三思想家的对孝的批判与《荀子》的孝的觀念」(先秦思想暨出土文献国際青年学者学術研討会), 台湾大学, 2005/3

【2005年度】

草野友子 「上博楚簡『魯邦大旱』における子貢の「天」観」(第六回大阪大学・名古屋大学中国学研究室交流会), 名古屋大学, 2005/11

(3)その他(書評・翻訳など)

【2004年度】

池田光子 「懐徳堂文庫資料解題(22)」『懐徳堂文庫の研究』(大阪大学文学研究科), 2005, pp. 111-113, 2005/2

池田光子 「第一次新田文庫暫定目録(続)」『懐徳堂センター報』(大阪大学文学研究科・文学部懐徳堂センター), 2005, pp. 7-25, 2005/2

池田光子, 黒田秀教 「新出土資料関係文献提要(四)」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 35, pp. 49-55, 2004/6

矢羽野隆男, 湯城吉信, 井上了, 佐野大介, 池田光子, 黒田秀教, 上野洋子, 杉山一也 「中井履軒『昔の旅』翻刻訳註および解説」『懐徳堂センター報』(大阪大学文学研究科・文学部懐徳堂センター), 2005, pp. 7-25, 2005/2

上野洋子 「懐徳堂文庫資料解題(22)」『懐徳堂文庫の研究』(大阪大学文学研究科), 2005, pp. 115-121, 2005/2

上野洋子 「懐徳堂関係研究文献提要(22)」『懐徳』(懐徳堂記念会), 73, pp. 70-74, 2005/1

草野友子 「懐徳堂文庫資料解題(22)」『懐徳堂文庫の研究』(大阪大学文学研究科), 2005, pp. 122-124, 2005/2

草野友子 「懐徳堂関係研究文献提要(22)」『懐徳』(懐徳堂記念会), 73, pp. 74-78, 2005/1

黒田秀教「懐徳堂文庫資料解題(23)」『懐徳堂文庫の研究』(大阪大学文学研究科), 2005, p. 114, 2005/2
佐野大介「懐徳堂文庫資料解題(21)」『懐徳堂文庫の研究』(大阪大学文学研究科), 2005, pp. 107-110, 2005/2

【2005年度】

池田光子・黒田秀教「新出土資料関係文献提要(七)」『中国研究集刊』別冊, 38(『戦国楚簡研究 2005』), (大阪大学中国学会), pp. 205-217, 2005/12

上野洋子「《書評》陳桐生著『孔子詩論』研究」『中国研究集刊』別冊, 38(『戦国楚簡研究 2005』), (大阪大学中国学会), pp. 196-204, 2005/12

草野友子「新出土資料関係文献提要(六)」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 37, pp. 85-93, 2005/6

黒田秀教「新出土資料関係文献提要(五)」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 37, pp. 75-84, 2005/6

西本和巳「懐徳堂関係研究文献提要(23)」『懐徳』(懐徳堂記念会), 74, pp. 53-58, 2006/1

南雄介「懐徳堂関係研究文献提要(23)」『懐徳』(懐徳堂記念会), 74, pp. 58-60, 2006/1

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004年度 学部：0名 大学院：0名 (計0名)

2005年度 学部：1名 大学院：0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度～2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

黒田秀教 博士後期課程, 明道管理学院(台湾), 助理教授, 2006/8

佐野大介 博士後期課程, 明道管理学院(台湾), 助理教授, 2005/8

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004年度～2005年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3名

2004年度：0名 2005年度：3名

<内訳> 大学教員 2名 システムエンジニア 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2004年度 『中国研究集刊』・半年刊(年2回)

2005年度 『中国研究集刊』・半年刊(年2回) および別冊特集号『戦国楚簡研究 2005』1冊

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

①博士学位(課程博士)の取得.....研究室は、教員数・学生数も少ないながら、教育・研究の両面にわたって豊富な活動を展開している。その教育面における表れの一つが、学位の取得であろう。2005年度は、池田光子「懐徳堂と中井履軒——「徳」解釈を中心として——」、黒田秀教「章学誠の思想構造」が博士(文学)の学位を取得し、博士後期課程を修了した。研究室の教育成果、特に学位取得の態勢が整ってきたことを実証するものである。またこの内の1名は台湾の大学に助理教授として赴任し、1名は本学の総合学術博物館非常勤職員として採用された。

②研究室HPの拡充と研究室端末の整備.....全国の中国哲学研究室の中で、我が研究室は、最も早く研究室HPを開設し、また現在も、充実したコンテンツを提供している。その後、九州大学や名古屋大学の中国哲学研究室からは、阪大中哲HPをモデルとして研究室HPを開設したとの連絡が入っており、人文学における電子情報化推進の先端的事例として注目を集めている。これは、2005年3月に大阪大学で開催された第1回文科省・知的資産のための技術基盤シンポジウムで「大阪大学懐徳堂文庫のデジタルアーカイブ化」として講演したことも影響していると思われるが、平素、研究室の学生諸君によって研究室HPが逐次更新され、教育活動の一環として研究室の求心力となっていることが最大の要因であろう。特に、中国古典の電子テキストや関係目録の作成・公開は、単に教育面での成果と言うにとどまらず、学界全体の研究活動に資するところが極めて大きい。また、これを支えるためのハード面も徐々に整備され、2005年度末現在で、研究室のパソコン端末は、学生の教育活動にほぼ支障のないような数量となってきている。

③教員や大学院生の社会教育活動.....湯浅教授、辛賢講師は、近年、学内外において数多くの講演・研究発表を行っている(後掲の「教員の研究活動」参照)。また、研究室の大学院生も、積極的な社会教育活動を展開している。具体的には、豊中まつり(2005年8月)、懐徳堂アーカイブ講座(2004年9月、2005年11月)などにおいて、懐徳堂貴重資料およびデジタルコンテンツの展示解説を務めた。学生による社会教育活動の重要な成果である。

④他大学との学术交流.....開かれた研究室を目指し、本研究室では、2000年から名古屋大学大学院文学研究科中国哲学研究室と交流会を行っている。毎年秋、両研究室の全教員・院生が一堂に会して研究発表会を行うもので、研究室の学生がお互いの教育面での情報交換を行う良い機会ともなっている。2004年11月には第5回研究会を大阪大学で、また、2005年11月には第6回研究会を名古屋大学で開催した。

12-2. 研究活動

①中国思想史研究を中心とする着実な教育・研究.....本研究室は、初代教授木村英一の学風に見られる通り、実証的な経学(中国儒教經典に対する注釈学)を中心としながらも、古代から近世に至る諸思想(法家、老荘、仏教など)についても、重厚な教育・研究を展開する点に特色を有する。現在の教授である湯浅邦弘も、既存の枠に囚われることなく、思想的には、儒家に加えて、法家・兵家・道家にも充分な目配りを行い、また資料的にも、伝世文献のみならず、1970年代以降に発見された新出土資料を積極的に取り上げ、多くの研究業績を積み上げている。こうした学風の中で薫陶を受けた大学院生も、様々な時代・思想を対象として研究を進めている。

②『中国研究集刊』の刊行.....本研究室は、1984年(昭和59年)に組織された大阪大学中国学会の事務局として、『中国研究集刊』を年2回編集・刊行している。中国学に関する学術誌として国外からも高い評価を得ている。2004年度は通常号を2冊刊行し、2005年度には、通常号2冊に加えて、別冊特集号『戦国楚簡研究2005』を刊行した。

③人文学における電子情報化の開拓と推進.....本研究室の近年の最大の成果は、懐徳堂文庫資料を中心とする電子情報化の推進である。大阪大学が誇る漢籍コレクション「懐徳堂文庫」については、これまで、『懐徳堂文庫図書目録』(1976年)があるのみであったが、湯浅教授を中心として組織された懐徳堂研究会により、貴重資料の総合調査が行われ、それらは精細な画像と解題をともなったデータベースとして結実した。その成果の集大成として、総合研究サイト「WEB懐徳堂 <http://kaitokudo.jp/>」を公開し、人文学における電子情報化の先端的業績をあげている。

④(財)懐徳堂記念会事業への支援.....大阪大学文学部と密接な協力関係にある懐徳堂記念会については、本研究室の歴代教授がその運営幹事を務めるなど、特に積極的な支援を行っている。大学院生も、懐徳堂記念会機関誌『懐徳』に毎号、関係文献提要や関係論考・目録などを提供している。また、上記の懐徳堂電子情報化事業とも相俟って、懐徳堂記念会の諸事業に研究室を挙げて取り組んでいる。社会貢献の顕著な成果であろう。

⑤出土資料の研究.....中国哲学研究室を事務局とする「戦国楚簡研究会」が定期的に研究会合を行っている。これは、近年新たに発見され、次々と公開が進められている戦国時代の竹簡資料について、その読解と研究を進めるもので、2004年度は国内での研究会合を5回、2005年度は4回開催したほか、2005年度には、竹簡の出土地である中国湖北省荊門の学術調査を行い、その成果を『中国研究集刊』第38号(別冊特集号『戦国楚簡研究2005』)として発表した。また、戦国楚簡研究会の学術活動が機縁となり、台湾大学との大学院生レベルの研究交流が開始されることとなった。2005年3月に台湾大学で開催された国際学会「先秦思想暨出土文献国際青年学者学術研討会」に研究室の大学院生など4名が招待され、研究発表を行った。

⑥課題と要望.....本研究室は、本業の中国哲学の教育・研究に加えて、上記のような懐徳堂関係事業を長年担ってきている。それは、懐徳堂文庫の主要部分が漢籍資料(中国の儒教関係を初めとする古典)であったことによるもので、このことは、教育・研究の大きな推進力になっているとも言える。しかし一方では、わずかな人員で構成されている中国哲学研究室の大きな負担になっているのも事実である。中国哲学研究室は、長年、優に二つの研究室分の活動を推進してきている。大阪大学が、懐徳堂を大学の源流の一つとして標榜し、社会貢献の窓口として重視するのであれば、懐徳堂関係事業については、恒常的な全学的支援体制(人員と予算)を確立すべきであろう。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 湯浅 邦弘 教授

1957年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、大阪大学、1997年)。北海道教育大学講師、島根大学助教授、大阪大学助教授を経て、2000年4月現職。専攻：中国哲学／中国古代思想史／新出土文献研究／懐徳堂研究。

1-1. 論文

湯浅邦弘「懐徳堂の祭祀空間——中国古礼の受容と展開——」『大阪大学大学院文学研究科紀要』46, pp. 1-33, 2006/3

湯浅邦弘「上博楚簡『彭祖』における「長生」の思想」『中国研究集刊』致号(37), pp. 20-36, 2005/6

湯浅邦弘「『従政』の竹簡連接と分節」浅野裕一編『竹簡が語る古代中国思想——上博楚簡研究——』汲古書院・汲古選書, pp. 53-81, 2005/4

湯浅邦弘「『従政』と儒家の「従政」」浅野裕一編『竹簡が語る古代中国思想——上博楚簡研究——』汲古書院・汲古選書, pp. 83-115, 2005/4

湯浅邦弘「ロシア軍艦ディアナ号と懐徳堂——並河寒泉の「攘夷」——」『国語教育論叢』14, pp. 151-163, 2005/3

湯浅邦弘「奈良 大阪 墨の道——古梅園蔵懐徳堂墨型について——」『懐徳』73, pp. 6-14, 2005/1

湯浅邦弘「上博楚簡『従政』の竹簡連接と分節について」『中国研究集刊』騰号(36), pp. 113-131, 2004/12

湯浅邦弘「上博楚簡『従政』と儒家の「従政」」『中国研究集刊』騰号(36), pp. 132-153, 2004/12

1-2. 著書

湯浅邦弘, 竹田健二『懐徳堂アーカイブ 懐徳堂の歴史を読む』大阪大学出版会, 2005/3

湯浅邦弘『懐徳堂文庫の研究2005』(大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書), 大阪大学大学院文学研究科, 2005/2

浅野裕一, 湯浅邦弘『諸子百家〈再発見〉——掘り起こされる古代中国思想——』岩波書店, 2004/8

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

湯浅邦弘「よみがえる重建懐徳堂——復元模型の制作について——」『懐徳堂センター報2006』pp. 5-14, 2006/2

湯浅邦弘「懐徳堂文庫へのいざない」『大阪大学図書館報』39-3, pp. 3-4, 2006/1

- 湯浅邦弘ほか「中国湖北省荊州・荊州学術調査報告」『中国研究集刊』別冊(38), pp. 44-64, 2005/12
- 湯浅邦弘ほか「「上博楚簡」解題——『上海博物館藏戰国楚竹書』(三)(四)所収文献——」『中国研究集刊』別冊(38), pp. 1-43, 2005/12
- 湯浅邦弘「体験懷徳堂 CD-ROM の制作と懷徳堂モニターの取り組み」『懷徳堂センター報 2005』 pp. 1-6, 2005/2
- 湯浅邦弘「戦国楚簡研究関係 HP 紹介」『中国研究集刊』騰号(36), pp. 94-104, 2004/12
- 湯浅邦弘「文化庁アーカイブ事業の概要——成果と課題——」2004 年度文化庁委託全国の博物館・美術館等における収蔵作品デジタル・アーカイブ化に関する調査・研究事業『調査研究報告書』 pp. 2-6, 2004/6
- 湯浅邦弘「人文学における共同研究と情報発信」『日本中国学会便り』2004 年第 1 号, pp. 4-5, 2004/4

1-4. 口頭発表

- 湯浅邦弘「夷狄と中華——中華思想の展開——」シルクロード・奈良国際シンポジウム 2005、専門セミナーセッション I, 奈良県新公会堂レセプションホール, 2005/12
- 湯浅邦弘「懷徳堂の印章」懷徳堂アーカイブ講座 2005「近世大阪の書と印章——大坂学問所「懷徳堂」の貴重資料——」国立国際美術館 B1 階講堂, 2005/11
- 湯浅邦弘「父母の合葬——上博楚簡『昭王毀室』について——」日本道教学会第 56 回大会, 専修大学, 2005/11
- 湯浅邦弘「『孫子』の基本的特質と文章の構造」チャイニーズ・マネジメント&マーケティング・スクール講演, 関西日本香港協会主催, 香港貿易發展局大阪事務所, 2005/9
- 湯浅邦弘「奈良 大坂 墨の道——発見された懷徳堂の墨型——」豊中まつり・懷徳堂資料展講演会, 豊中市民会館, 2005/8
- 湯浅邦弘「懷徳堂の歴史を読む——江戸時代の大坂学校——」懷徳堂サロン講演会, 大阪大学中之島センター, 2005/5
- 湯浅邦弘「大阪大学懷徳堂文庫のデジタルアーカイブ化」第 1 回文科省・知的資産のための技術基盤シンポジウム講演, 大阪大学豊中キャンパスサイバーメディアセンター豊中教育研究棟 7 階会議室, 2005/3
- 湯浅邦弘「孫子の兵法——勝者と敗者——」中京日本香港貿易協会講演, 名古屋国際ホテル, 2005/2
- 湯浅邦弘「懷徳堂と適塾——天保山の出会い——」大阪市立高等学校教育研究会社会科部会冬季研修会・講演会, 大阪大学中之島センター, 2005/1
- 湯浅邦弘「孫子兵法の継承と展開」関西日本香港協会主催チャイニーズ・マネジメント&マーケティング・スクール講演, 香港貿易發展局大阪事務所, 2004/11
- 湯浅邦弘「兵法—孫子」関西日本香港協会主催チャイニーズ・マネジメント&マーケティング・スクール講演, 香港貿易發展局大阪事務所, 2004/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 湯浅邦弘 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学, 2003/12
- 大阪大学中国哲学研究室(湯浅邦弘) 第 13 回蘆北賞(2003 年度), (財)橋本循記念会, 2003/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2005 年度～2008 年度、科学研究費補助金基盤研究(B)、代表者：湯浅邦弘

課題番号：17320012

研究題目：戦国楚簡の総合的研究

研究経費：2005 年度 3,000 千円

研究の目的

中国古代思想史研究は、大きな転換期を迎えている。通説に重大な影響を及ぼす大量の新出土文字資料が近年相次いで発見されているからである。

本研究は、2000 年度～2003 年度の科学研究費補助金・基盤研究(B)の交付を受けて推進した「戦国楚系文字資料の研究」(研究代表者：竹田健二、以下「前研究」と略称)の成果を踏まえ、更にそれを格段に発展させることを目的とした共同研究である。前研究では、1998 年に公開された郭店一号楚墓出土竹簡(郭店楚簡)を対象とし、その全容をほぼ解明す

ることに成功したが、本研究では更に 2001 年から公開が始まっている上海博物館蔵戦国楚竹書(上博楚簡)をも対象に加え、その全容の解明と中国古代思想史の再構築を図りたい。具体的には、次のような課題について研究を推進する。

(1)新たに公開されつつある上博楚簡の各文献について解読を進め、詳細な釈文・訳注を作成する。また、その成果を、既に釈文作成を終えている郭店楚簡各文献と突き合わせ、難読文字の解明を図り、思想史上・古文字学上の意義を明らかにする。

(2)郭店楚簡が儒家系と道家系の文献で構成されていたのに対し、上博楚簡には、更に孔子の弟子門人に直接関わる文献、言語学(字書)関係の文献、兵学的著作などが含まれており、順次公開が進んでいる。これらの諸思想についても網羅的に検討を加え、新たな中国古代思想史の記述を目指す。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2004 年度～2005 年度、文化庁委託全国の博物館・美術館等における収蔵作品デジタル・アーカイブ化に関する調査・研究事業、代表者(文化庁との連絡責任者): 湯浅邦弘

研究題目:「懐徳堂文庫」貴重資料のデジタル・アーカイブ化に関する調査研究

研究経費: 2004 年度 2,881,500 円

2005 年度 2,901,900 円

1-8. 学会役員等の引き受け状況

全国漢文教育学会・評議員	2005 年度～現在
日本道教学会・理事	2004 年度～現在
懐徳堂記念会・運営委員幹事	2001 年度～現在
懐徳堂研究会・代表	2000 年度～現在
中国出土資料学会・理事	1999 年度～現在

2. 辛 賢 講 師

1967 年、ソウル生。2002 年、筑波大学大学院哲学・思想研究科博士課程修了。博士(文学)。日本学術振興会外国人特別研究員(筑波大学)を経て、2004 年 4 月現職。専攻: 中国哲学、漢代易学。

2-1. 論文

辛賢「兪琰覚書」『テキストの読解と伝承』大阪大学大学院文学研究科 広域文化表現論講座共同研究 研究成果報告書(研究代表 浅見洋二), pp. 24-31, 2006/3

辛賢「韓国における近十年間の両漢研究」『両漢の儒教と政治権力』汲古書院, pp. 287-302, 2005/9

辛賢「荀爽の延熹対策について」『待兼山論叢(哲学編)』38, pp. 1-16, 2004/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

戦国楚簡研究会による共著、辛賢(解題)「周易」(『上博楚簡』解題——『上海博物館蔵戦国楚竹書』(三)(四)所収文献)『中国研究集刊』38, pp. 3-4, 2005/12

辛賢(コメント)「(王啓發報告)近十年来中国大陸「両漢儒学と政治権力」相關研究成果簡介和評議」『両漢の儒教と政治権力』汲古書院, pp. 11-20, 2005/9

辛賢(書評)「池田知久他編訳『占いの創造力——現代中国周易論文集——』」『東方宗教』103, pp. 90-95, 2004/6

2-4. 口頭発表

- 辛賢「易緯における世軌と『京氏易伝』」科学研究費補助金「両漢儒教の新研究」(代表者：渡邊義浩)による国際シンポジウム「易と術数研究の現段階」(東京大学), 2005/12
- 辛賢「漢代の易と暦について」2005年度文学研究科 研究教育フォーラム(第36回教員研究会, 大阪大学), 2005/11
- 辛賢「シンポジウム東アジア(日本・中国・台湾・韓国)の漢文(古典)教材の比較——「雑説(馬説)」 「送元二使安西」をめぐって」中国文化学会(千葉大学), 2005/6
- 辛賢(コメント)「(王啓発報告) 近十年来中国大陸「両漢儒学と政治権力」 相関研究成果簡介和評議」第50回国際東方学者会議 symposiumVI「両漢儒学と政治権力」(日本教育会館), 2005/5
- 辛賢「荀爽の延熹対策について」阪神中哲談話会(第365回, 茨木市民会館ユアアイホール), 2004/11
- 辛賢「上海楚簡『周易』について」戦国楚簡研究会(第21回, 大阪大学会議室), 2004/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 辛賢 日本中国学会賞(哲学・思想部門), 日本中国学会, 2001/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2005年度～2007年度、若手研究、代表者：辛賢

課題番号：17720007

研究題目：易緯の新研究——漢代易学における緯書思想の展開と行方——

研究経費：2005年度 900千円

研究の目的：

本研究は、易緯資料を全面的に取りあげ、その思想内容に関する総合的研究を目指す。本研究の主要な特徴は、とくに易緯が前漢末から宋代において成立しているという歴史的事実にもとづき、以下のような時代区分による易緯思想の思想史的展開の探求に重点を置くことにある。

(1)前漢末～六朝間における易緯の思想史的展開：象数易学の盛行と衰退、王弼易の幕が開かれる思想史的背景のなかで、易の緯書に見られる様々な術数技法や易説はどのように展開したかを探る。

(2)六朝～唐・宋間における易緯の思想史的展開：易緯資料中、後代の成立と見られる資料を取り上げ、その思想的変容と展開を探る。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

3. 前川 正名 助手

1975年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程終了。博士(文学、大阪大学、2004年)。京都産業大学非常勤講師、大阪府立工業高等専門学校非常勤講師を経て、2005年10月現職。専攻：中国哲学／先秦両漢儒家思想／日本漢文学研究。

3-1. 論文

前川正名「西村天囚の楚辞学」『國學院雑誌』106-11, pp. 442-450, 2005/11

前川正名「蘭学者時代の橋本左内(承前)——嘉永六年作の漢詩を中心として・橋本左内漢詩研究(三)——」『適塾』37, pp. 110-126, 2004/12

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

前川正名「懷徳堂文庫資料解題(20)」「懷徳堂文庫の研究 2005 共同研究報告書』pp. 104-106, 2005/2

3-4. 口頭発表

前川正名「若州良民伝」に学ぶ」若狭路文化研究会主催 第二回記念フォーラム(パネラーとして), 敦賀短期大学, 2005/6

前川正名「《新書》的諫諍研究——從先秦到漢代的諫諍變遷——」「先秦思想与出土文献」国際青年学者学術研討会, 台湾大学, 2005/3

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪大学中国学会・事務員

2004年4月～現在

2-5 インド学・仏教学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

教育活動としては、インド学仏教学研究の基礎となる原典を正しく理解する能力を養うために、サンスクリット語やパーリ語など古典インド諸語の文献を精密に読解する演習授業が中心となる。また、各学生が言葉と文献とを処理する能力を習得・応用する過程で、論理的思考力や批判的精神を養うことも目指している。

研究活動としては、インド学仏教学の文献学的研究に専心しており、その中でも初期の仏教文献やヴェーダ、ジャイナ教文献の研究が中心となっている。特色として、本専門分野ではインド学の一環として仏教学を位置づけ、仏教研究を広く当時のインド思想全体の視点から研究し、仏教以外のインド学を研究するものも仏教文献を積極的に活用していることが挙げられる。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 1 助教授 0 講師 1 助手 1

教授：榎本 文雄

講師：堂山 英次郎

助手：河崎 豊

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
8	1	2	0	0	0	3	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 3 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	2	1	2	0	0
'05	0	3	0	0	0
小計	2	4	2	0	0

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	0	0	0
'05	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	2	0	0	0	0	2
'05	3	0	0	0	0	3
計	5	0	0	0	0	5

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	0	0	0	0	0
'05	0	3	0	0	0	3
計	0	3	0	0	0	3

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

生野昌範 「布薩と罪」『佛教史學研究』47-1, pp. 52-72, 2004/7

大西啓一 「Kumārabhūta 小考」『待兼山論叢(哲学篇)』(大阪大学文学会), 38, pp. 1-17, 2004/12

【2005年度】

生野昌範 "On *adhikaraṇa*-"『印度学仏教学研究』54-3, pp. 1167-1170, 2006/3

生野昌範 「Varṣāvastu の再校訂に向けて」『待兼山論叢(哲学編)』(大阪大学文学会), 39, pp. 21-39, 2005/12

畑昌利 "Heretical Views in the *Pañcattayasutta*"『印度学仏教学研究』54-3, pp. 1163-1166, 2006/3

(2)口頭発表

【2005 年度】

生野昌範「アディカラナについて」日本印度学仏教学会第 56 回学術大会, 日本印度学仏教学会, 四天王寺国際仏教大
学/大阪府羽曳野市, 2005/7/29

畑昌利「初期仏教における ātman 観の一側面」日本仏教学会学術大会, 日本仏教学会, 駒澤大学/東京都世田谷区, 2005/
9/4

畑昌利「Pali『五三経』の外道説」日本印度学仏教学会第 56 回学術大会, 日本印度学仏教学会, 四天王寺国際仏教大
学/大阪府羽曳野市, 2005/7/29

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

なし

6. 専門分野出身の研究者

(2004 年度～2005 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004 年度～2005 年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通
訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

なし

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

＜概要＞ 本専門分野の教員は2003年度まで榎本教授1人の体制が続いていたが、2004年4月に堂山講師と河崎助手が着任したことにより、全体的な教育の幅が格段に広がった。堂山講師は古インド・イラン語文献、特にリグヴェーダを中心とするヴェーダ文献群を、河崎助手は初期ジャイナ教文献を専門とし、これにより本専門分野では教育・研究において、ヴェーダ学・初期仏教・初期ジャイナ教という、紀元前後までのインド古代思想の中核的領域をほぼ全面的に扱えるようになった。教員の増加に伴い学生への学習・論文指導が質・量ともに高まったことは、本専修を選択希望する学部生の数が2004年度以降安定して増加を示していることに影響しているものと分析される。

＜教育と学生の状況＞ 学部生の増加と勉強・研究に関するニーズの多様化に伴い、授業の数・性質や教材の選択を軌道修正する機会が増えてきている。今後ますますこの傾向は強まると思われるが、その際に、いかに学生一人一人に対して偏り無くきめ細やかな指導を維持・改善してゆくかが個々の教員の課題である。学生の希望によっては、文献のみを扱う伝統的な方法論のみならず、二次文献をより多く使った広い視野からの文化研究等にも対応すべきかも知れない。大学院生に対する高度な専門教育に関してもこれまで以上に密な指導体制を取っており、2004年度～2005年度にかけて毎年優秀な修士課程修了者を輩出したことはその成果と評価できる。こうした学生の移動・活動によって、以前に問題となっていた学生数の逆ピラミッド構造は解消されつつある。一方、研究者育成という点からすると、2004年度～2005年度の課程博士号取得者が0名であるのは反省材料である。しかしながら、2004年度、2005年度に1名ずつ課程博士予備論文を提出し、いずれも審査の結果合格の判定を受け、目下本論文を執筆中である。これは、膨大で地道な解読作業を前提とする本専門分野の性質に鑑みれば極めて活発な研究活動であり、2003年度に本専門分野初の課程博士を出して以降、大学院生の中に博士論文執筆の気運が高まっていることを実感させるものである。大学院生の学会発表や論文が比較的少ないことに関しては、上記の本分野の性質上やむを得ない所があるにしても、より積極的な研究活動は可能であり、そのためには教員の指導にも学生の研究計画にもまだ改善の余地があると言えよう。学生の留学に関しては、2004年度～2005年度にかけて外国の諸大学に長期留学した者はいないが、2005年度に博士後期課程学生と科目等履修生の2名がゲッティンゲン大学(ドイツ連邦共和国)で短期間の調査をする機会に恵まれた。当該学生がこれを足がかりとして長期留学のチャンスを窺っているのみならず、他の学生もこの事実に触発され短期・長期留学への意欲が高まっている。専門分野全体としても学生の留学をサポートする体制の構築を検討している。教員による海外研究拠点及び研究者との連絡や各種情報提供はもちろんであるが、例えば留学に際して必要な各種言語の運用力を養う演習・勉強会を開くなどの対策も視野に入れる必要がある。日本学術振興会特別研究員数が2004年度・2005年度ともに0名であったのは残念である。2006年度以降の採用に向け、学生・教員が一層団結して努力を払う必要がある。卒業・修了者の就職については良好であるが、博士後期課程修了者・単位修得退学者の教育・研究職への就職は他専攻と同様に厳しい現状にある。個別地域・個別言語の研究という専門分野の性質も影響しているようだが、これからの学生はより学際的な視点と知識を身につけることが望ましく、教員もこれを視野に入れた教育方針を練り直す時期に来ていると言える。

＜授業内容と問題点＞ 授業では、インド思想史概説の講義、普通演習としてパーリ語やヴェーダ語文献の輪読、論文作成演習ではヴェーダ文献・初期仏教経典・戒律・インド古典医学などの研究指導が行われた。非常勤講師からは、各自が専門とするヒンドゥー教文献や仏教教団規定に関する文献などの分野の教育を受けた。いずれの場合においても基礎になるのは原典に基づく厳密な文献学的手法であるため、学生がこれに十分に習熟して自らの研究活動においても確実に行使できるよう、教育の徹底化を図っている。なお、現在の本専門分野の教員によってヴェーダから古代インドの文献が広くまかなえるとはいえ、古代インドの膨大な文献とその内容の多様性から、細分化された専門分野やその文献、また当然ながら後代の宗教・哲学文献に関しては、基礎的な知識伝授はともかく、高度な専門的訓練は非常勤講師に頼らざるを得ない。こうした状況下での非常勤講師枠削減は、学生から多様な分野・文献を習得する機会を奪うという点からも、また学生の様々な関心や研究に対応するという点からも、教員全員が極めて憂慮すべき問題と認識している。本学の現制度では、一時的なゲストスピーカーの招聘を申請するなどの措置は可能であるが、それもセメスターを通しての授業や指導の代用となり得るにはほど遠い。学外専門家による教育の強化は、本専門分野の教育活動に直接参与するものであるだけに、今後非常勤講師枠の再拡充が望まれる。

<学外での社会教育活動> 2003 年度より当専門分野の教員が懐徳堂記念会の古典講座に年 10 回出講し、地域に密着した社会人向けの講義を行っており、これは 2004 年度以降も継続された。また各種講演会での講演活動、一般向けセミナーでの講義も機縁があれば行っており、直接本専門分野の研究内容を広く紹介するのみならず、専門的内容をより普遍的なテーマやメッセージに転換し、人間や社会のあり方を大きな視点から考える場を社会に提供してきたと考えている。今後もこのような機会を積極的に利用あるいは企画し、本専門分野が現代社会に何を伝えるべきか、そしてそれによって我々が何を学べるのかを、大学人として意識しておく必要がある。

12-2. 研究活動

<教員の研究資金獲得> 科学研究費補助金に関しては、堂山講師が 2004 年度に若手研究(B)を、榎本教授が 2003 年度に基盤研究(C)を取得し、2004 年度～2005 年度は継続年である。この間、堂山講師が科学研究費による研究成果の一部として、博士論文の改訂版を『大阪大学大学院文学研究科紀要』モノグラフ編として 2004 年度に出版したことは特筆すべき成果であり、大いに学界を裨益したと考えられる。河崎助手は任期制かつ再任なしの職であり、中長期の研究計画が要求される科学研究費補助金を任期途中で申請することが事実上困難な立場にある。そのような状況下で同助手が 2005 年度に三島海雲記念財団および大阪大学後援会という二つの民間団体から研究助成金を取得したことは、大いに評価できるものであろう。今後とも官民を問わず積極的に資金を獲得し研究・教育に還元すべく、努力する必要がある。特に科学研究費補助金や大型の民間助成金に関しては、今後は他大学の研究者と連携しつつ、基盤研究(B)クラス以上の取得を本専門分野の教員主導で目指し、インド学・仏教学分野における一大拠点として本学を機能させるべく努力したい。

<教員の研究成果> 詳しくは「Ⅲ.教員の研究活動」を参照されたい。各教員とも各種国内学会への参加・発表、論文執筆等を精力的に行い、当該研究領域における平均値を十分にクリアしたと思われる。特に、『大阪大学大学院文学研究科紀要』には、上述した堂山講師の 2004 年度モノグラフ編のみならず、翌年には河崎助手の 2005 年度論集編という次第で、2 年連続して本専門分野所属教員の研究成果が掲載されたことは特筆すべき点である。研究会活動では、文学研究科内のみならず、学外の京都大学人文科学研究所や、新たに総合地球環境学研究所における共同研究会にも大学院生ともども参加し、研究発表も行っている。また、榎本教授は各年度に国際シンポジウムで発表し、堂山講師と河崎助手は英語で論文を発表し、「Ⅲ.教員の研究活動」には記載がないが、堂山講師は 2004 年 10 月にポーランドで印欧語学会に出席、アルメニアで古典アルメニア語に関する調査に従事した点に研究の国際化が認められる。ただし、海外学会での発表や海外の学術誌への投稿がないのは今後改善すべき課題である。海外へのより積極的な成果の発信を通じ、本専門分野を世界にアピールする努力が一層求められるであろう。

<学生の研究成果> 詳しくは「Ⅱ.2 大学院生等による論文発表等」を参照されたい。全体として発表数・論文数が少ないのは 2004 年度～2005 年度にかけて在籍した博士後期課程の学生数が少ないことに起因する。個人としての論文数及び発表数は当該研究領域における年間数としては平均的もしくはそれ以上であり、またその内容も他大学の同年代の学生と比べて遜色のあるものではない。博士後期課程学生には今後とも継続的に論文を書かせるよう指導していくが、学会での発表・学会誌への投稿が増えることは、それだけ年限内に博士論文執筆に割く時間が削られてしまうことを事実上意味する。博士後期課程に所属する以上、博士論文の執筆に専心させることは当然であるが、彼らの研究成果をいち早く学界に発信することは学界全体の利益になるのは当然のこと、彼ら自身の今後を考えても不可欠である。即ち現在では、研究職・教育職への公募に際し、博士号取得の有無と同時に発表論文数が問われるという事実が存在するからである。この辺の折り合いをどう付けさせるかは依然課題として残るが、課程博士号取得に対する硬直的な指導マニュアルをいきなり構築するよりも、個々の学生の特性を見極め個別に対処する方が現実的であり、またそのような日々の対処の中でのみ、何らかの方策を生みだす土壌も育まれるであろう。このような状況の中で、大学院生 2 名が学会誌に英語で論文を発表したことは特筆すべき点である。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004 年度～2005 年度の過去 2 年間)

1. 榎本 文雄 教授

1954 年生。京都大学文学部卒、京都大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学。文学修士(京都大学)、博士(文学、

京都大学)。京都大学助手、華頂短期大学専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999年8月現職。専攻：インド仏教学。

1-1. 論文

榎本文雄「nibbuta/nivvuda について」『長崎法潤博士古稀記念論集・仏教とジャイナ教』pp. 553-560, 2005/11

榎本文雄「仏教研究における漢訳仏典の有用性」『中国宗教文献研究国際シンポジウム報告書』京都大学人文科学研究所, pp. 37-55, 2004/12

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

榎本文雄「インド思想における絶対的なものと相対的なもの」日独哲学シンポジウム, 2006/3

榎本文雄「初期経典の視点から」日本南アジア学会第18回全国大会小パネル縁起解釈の再評価, 2005/10

榎本文雄「仏教研究における漢訳仏典の有用性」中国宗教文献研究国際シンポジウム, 2004/11

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)、代表者：榎本文雄

課題番号：15520050

研究題目：初期仏教関係諸典籍の対応関係の研究

研究経費：2004年度 直接経費 1,300千円

2005年度 直接経費 1,000千円

研究の目的：

ゴータマ・ブッダを中心とした初期仏教研究は、東南アジアに伝播した南方上座部の伝えたパーリ語経典が主な資料となるが、漢訳の阿含経典が分量的にこの次に位置する。パーリ語仏典に示されたブッダの教説の内容には南方上座部独自の発展が含まれていると考えられるので、ブッダの直説に迫ろうとする時には他の部派の初期仏典との比較が不可欠である。諸部派の初期仏教文献を比較する対照表としては、赤沼智善『漢巴四部四阿含互照録』が70年以上も前に出版されている。しかし、この『漢巴四部四阿含互照録』はその名前からして漢訳阿含経典とパーリ語経典の対応が主体となっているため、特にチベット語資料などに遺漏が目立つ上に、当然のことながら以後に公表された諸インド語テキスト(主にサンスクリット断片)が収録されていない。また、経単位でなく、もっと小さな範囲、例えば韻文経典の場合は、各詩節ごとの対応関係も提示する必要がある。したがって、『漢巴四部四阿含互照録』は大幅な増広、むしろ根本的に作成し直す必要がある。そこで、本研究では、科学研究費の交付を希望する期限内で、この大部な『漢巴四部四阿含互照録』のできるだけ多くの部分を根本的に作成し直すことを目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

仏教史学会・評議員	2003年11月～現在
東方学会評議員	2003年9月～現在
インド思想史学会・理事	2003年4月～現在
パーリ学仏教文化学会・理事	1999年4月～現在
日本仏教学会・理事	1996年4月～現在
日本印度学仏教学会・理事	1996年4月～現在

2. 堂山 英次郎 講師

1972年生。大阪外国語大学外国語学部卒、東北大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。文学修士(東北大学)、博士(文学、東北大学)。京都大学人文科学研究所助手を経て、2004年4月現職。

2-1. 論文

DOYAMA, Eijiro “A morphological study of the first person subjunctive in the Rigveda,” *Machikenyama Ronso*, vol. 39: pp. 1-19, 2005/12

堂山英次郎「古代イランにおける社会組織の再編——『アヴェスタ』の記述を中心に——」前川和也, 岡村秀典編『国家形成の比較研究』学生社, pp. 232-257, 2005/5

2-2. 著書

堂山英次郎『リグヴェーダにおける1人称接続法の研究』大阪大学大学院文学研究科紀要(モノグラフ編), 45-2, 大阪大学, 2005/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

堂山英次郎(辞典項目担当)「ガンダーラ」「ゾロアスター」三木紀人, 山形孝夫編『宗教のキーワード集』別冊國文学, 57, 学燈社, p. 45, p. 97, 2004/12

2-4. 口頭発表

堂山英次郎(書評)“N. Sims-Williams (ed.), *Indo-Iranian Languages and Peoples*. (Proceedings of the British Academy 116), Oxford, 2002”, 中央アジア学フォーラム, 2004/12

堂山英次郎「ヴェーダ語(Vedic)の動詞研究における新段階」土曜ことばの会, 2004/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2004年度～2006年度、科学研究費補助金、若手研究(B)、代表者：堂山英次郎

課題番号：16720014

研究題目：ヴェーダ語における接続法の研究——リグヴェーダを中心として——

研究経費：2004年度 1,100千円

2005年度 900千円

研究の目的：

本研究の目的は、ヴェーダ語(古インド語)の動詞組織のうち、話者の心的態度を表わす法(話法、叙法、ムード)の一つである接続法(英 *subjunctive*, 独 *Konjunktiv*)に焦点を当て、その統辞機能を包括的に分析・分類し、機能体系を明らかにすることである。対象とするのは、接続法が唯一生産的なカテゴリーとして機能するヴェーダ語最古層の文献、リグ

ヴェーダ(RV)である。RV における接続法の全用例について語形を再チェックするとともに、動詞語根の構造、語幹の種類、人称、数といった語形自体が有する性質や、関係文、疑問文、複文などの文構造のタイプによって用例を分類し、それぞれにおける統辞機能(用法)を決定・分類することを主たる作業過程とする。更に、それら個々のデータの総合的な分析に基づき、接続法全体の機能体系に一定の理論的仮説を与える一方、その仮説を繰り返し個々の実例と照らし合わせることで、より実際的な機能体系を構築することを目指す。最終的には、希求法や命令法といった叙法を始めとする他の動詞組織との比較によって、接続法の機能を、共時体として見た RV の動詞体系全体の中に位置付けることを研究の区切りとしたい。一方でまた、接続法の研究により、RV の詩人や祭官が神々と如何なる関係にあったかといった思想的背景の理解にも迫りたい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本印度学仏教学会・評議員	2004年7月～現在
印度学宗教学会・評議員	2004年6月～現在

3. 河崎 豊 助手

1975年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程2003年単位修得退学。博士(文学、大阪大学)。大阪大学助手、大阪大学文学部 COE 研究員を経て現職。専攻: インド学、初期ジャイナ教研究。

3-1. 論文

河崎豊 “A Note on *Uttarajjhāyā* 25.18” 『印度学仏教学研究』 54-3, pp. 1121-1125, 2006/3

河崎豊 「マハーヴィーラの肉体 ——ジナ身観の研究(1)——」 『大阪大学大学院文学研究科紀要』 46, pp. 37-63, 2006/3

河崎豊 「パーリ仏典に現れる *sallekha* 等の語について」 『ジャイナ教研究』 11, pp. 21-51, 2005/9

河崎豊 「出征するジャイナ教在家信者」 『印度学仏教学研究』 53-1, pp. 436-432, 2004/12

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

河崎豊 「*Uttarajjhāyā* 25.18 の一考察」 日本印度学仏教学会第56回学術大会, 2005/7

河崎豊 「*sallekhanā* 研究 ——特に初期仏典に現れる *sallekha* という語について」 ジャイナ教研究会第19回研究会, 2004/9

河崎豊 「ジャイナ教在家信者と戦争」 日本印度学仏教学会第55回学術大会, 2004/7

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2005 年度、研究助成金、助成金獲得者：河崎豊

助成金名：財団法人三島海雲記念財団第 43 回学術奨励賞

研究題目：ジャイナ教における信仰の概念の基礎的研究

助成団体名：財団法人三島海雲記念財団

助成金額：700 千円

3-7-2. 2005 年度、研究助成金、助成金獲得者：河崎豊

助成金名：財団法人大阪大学後援会平成 17 年度教育・研究助成金

研究題目：インド宗教の女性観 ——ジャイナ教聖典を中心に——

助成団体名：財団法人大阪大学後援会

助成金額：600 千円

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-6 日本学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

日本学研究室の源流は、1974年の日本学専攻の開設にさかのぼるが、その後の組織改変を経て、近年は、ふたつの学問的特色を備えてきた。ひとつは、日本という地域の歴史や、文化、思想を孤立した特殊なもの、あるいは自明なものとしてみるのではなく、一国史・単一文化の枠を突破しようとする点である。

いまひとつは、既存のディシプリンをふまえつつ学際的な研究方法を意識的に追求する点である。この点については、教員・院生が所属し研究報告をおこなう学会の多様性に示されている。例をあげてみよう。日本民俗学会、日本民族学会、日本宗教学会、日本女性学研究会、日本思想史学会、日本社会学会、解放社会学会、女性史総合研究会、日本史研究会、日本移民学会、社会思想史学会、「女性・戦争・人権」学会、「宗教と社会」学会、口承文芸学会、近代女性史研究会、芸能史研究会、朝鮮史研究会、在日朝鮮人研究会、等々。

日本学研究室は、このような特色を生かすために、多彩なアプローチの掘り下げを促すとともに、それらの意識的な交錯を保証するような教育・研究体制を組んでいる。とりわけ全教員が出席し、院生がタコソボ型の研究に陥らず、多分野の研究状況から刺激を得て論文を練り直す場としての「日本学研究方法論演習」は、日本学研究室の教育・研究活動を象徴的に表現するものである。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 3 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：川村 邦光、杉原 達、荻野 美穂

助教授：富山 一郎

助手：真鍋 昌賢

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
63	14	30	1	0	0	1	5	0

※うち留学生 12 名、社会人学生 9 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	19	3	6	2	1
'05	19	7	5	1	1
小計	38	10	11	3	2

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	1	1	2
'05	0	1	1
計	1	2	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

全成坤 「崔南善論——植民地期朝鮮における檀君論とナショナリズムの創出」 2005/3
主査：川村邦光 副査：杉原達、富山一郎

【論文博士】

王秀文(大連民族学院外国言語文化学院) 「桃の民俗誌」 2006/3
主査：川村邦光 副査：飯島吉晴(天理大学)、杉原達、富山一郎

矢野敬一(静岡大学) 「慰霊・追悼・顕彰の近代——個へのまなざしと歴史意識の生成」 2005/3
主査：中村生雄 副査：川村邦光、杉原達、佐野賢治(神奈川大学)

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	1	11	0	3	5	20
'05	2	8	0	0	6	16
計	3	19	0	3	11	36

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	2	3	11	0	0	16
'05	0	3	6	1	0	10
計	2	6	17	1	0	26

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文・単行本

【2004年度】

- 伊賀みどり「開業助産婦のライフストーリー作成の実践——<いま—ここ>の語りをもどのように構成するか」『日本学報』24, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 137-148, 2005/3
- 石川浩士「「アイヌ語復興運動」を考える——『チサンケ ソンコ』の復刊によせて」『日本学報』24, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 125-136, 2005/3
- 井濱葉月「眼病と目薬のゆくえ——「治療」概念から「爽快感」へ」『文化／批評』春季号, 文化／批評[cultures/critiques]編集委員会, pp. 235-271, 2005/3
- 植野真澄「占領下日本の再軍備反対論と傷痍軍人問題」『大原社会問題研究所雑誌』550・551 合併号, 大原社会問題研究所, pp. 1-16, 2004/9
- 金城正樹「成熟の夢——清田政信の叙述より共同性を再考する——」『日本学報』24, 大阪大学文学研究科日本学研究室, pp. 25-44, 2005/3
- 崔博憲「自分に新しい名前をつけるために——李良枝、姜信子、そして民族——」『日本学報』24, 大阪大学文学研究科日本学研究室, pp. 1-24, 2005/3
- 鈴木景「日本民族、同化、そして社会史へ——喜田貞吉に見る同一であること／差異があるということ——」『文化／批評』春季号, 文化／批評[cultures/critiques]編集委員会, pp. 180-221, 2005/3
- 鈴木景「「濃淡」の内意——喜田貞吉の民族論における「日本民族の成立」」『日本学報』24, 大阪大学文学研究科日本学研究室, pp. 107-124, 2005/3
- 宋英子「学校現場に取り残された在日朝鮮人教育の課題——子どもの意識調査の読み直しを通して——」『日本学報』24, 大阪大学文学研究科日本学研究室, pp. 85-106, 2005/3
- 茶園敏美「おんたちを管理する法制度——花柳病予防法特例から性予防法まで——」『日本学報』24, 大阪大学文学研究科日本学研究室, pp. 79-99, 2005/3
- 永岡崇「飯降伊蔵論——「おさしづ」と本席体制」『文化／批評』春季号, 文化／批評[cultures/critiques]編集委員会, pp. 291-331, 2005/3
- 花森重行「消費財としての「歴史」／「フィクション」という思想」『現代思想』33-3, 青土社, pp. 194-213, 2005/3
- 花森重行「歴史と反歴史との相克」『日本思想史研究会会報』22, 日本思想史研究会, pp. 8-18, 2004/12
- 花森重行「「記憶」と「記録」の狭間で——梅棹忠夫の戦中と戦後をめぐる——」『待兼山論叢(日本学篇)』38, 大阪大学文学会, pp. 25-61, 2004/12
- 花森重行「複数の「憲法感覚」へ向けて」『現代思想』32-12, 青土社, pp. 136-150, 2004/10
- 花森重行「歴史に抗する「歴史」へ」『情況』3-5-8, 情況出版, pp. 196-223, 2004/8
- 林葉子「娼婦運動家」論・再考——久布白落実と『婦人と日本』(1950-1965)』『日本学報』24, 大阪大学文学研究科日本学研究室, pp. 63-84, 2005/3
- 日高由貴「「キリシタン」をめぐる記述——新村出と名づけえぬもの——」『日本学報』24, 大阪大学文学研究科日本学研究室, pp. 79-99, 2005/3
- 兵頭晶子「「人格」概念と精神病学——日本近代における精神病の社会化過程をめぐる一考察——」『文化／批評』春季号,

- 文化／批評[cultures／critiques]編集委員会, pp. 222-234, 2005/3
- 渡邊里紗「貞明皇后論——たった一人の「良妻」から、賢母・慈母たる「国母」へ——」『文化／批評』春季号, 文化／批評[cultures／critiques]編集委員会, pp. 272-290, 2005/3
- 【2005年度】
- 石山祥子「誰が能を演じるか——黒川能と素人能が迎えた近代——」『近代日本における宗教とナショナリズム・国家をめぐる総合的研究』(2003年度～2005年度 科学研究費補助金基盤研究(B)(2)), 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 213-235, 2006/3
- 伊藤遊「ポピュラーカルチャー＝日常生活を研究する／表現する——考現学における「芸術」と「博物学」」『日本学報』25, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 73-82, 2006/3
- 植野真澄「「白衣募金者」とは誰か——厚生省全国実態調査に見る傷痍軍人の戦後」『待兼山論叢 日本学篇』39, 大阪大学文学会, pp. 31-58, 2005/12
- 金廣植「「実践力」をとまなう民俗学のゆくえ——孫晋泰の新たな資料発掘と「新民族主義史学」再考——」『近代日本における宗教とナショナリズム・国家をめぐる総合的研究 2003年度～2005年度 科学研究費補助金基盤研究(B)(2)』大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 195-212, 2006/3
- 金廣植「植民地「郷土」を研究することの意味——朝鮮学、朝鮮民俗学、孫晋泰の再考——」『日本学報』25, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 23-44, 2006/3
- 小山有子「「決戦衣生活」の一側面——日本女子大学校『家庭週報』を中心に——」『日本学報』25, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 83-107, 2006/3
- ザイツェフ, デイミトリー「邦文新聞『浦潮日報』の報道から見た尼港事件」『日本学報』25, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 45-69, 2006/3
- ザイツェフ, デイミトリー「『浦潮日報』の創刊についての再考」『セーヴェル』21, ハルビン・ウラジオストクを語る会, pp. 70-83, 2005/6
- 宋英子「1970年代以降の教育実践からみた在日朝鮮人教育の成果と課題」『日本学報』25, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 1-22, 2006/3
- 永岡崇「歴史の記述と憑依——天理教における「おさしづ」と本席体制——」『文化／批評』2006年冬季号, 文化／批評[cultures／critiques]編集委員会, pp. 59-80, 2006/3
- 永岡崇「安丸良夫と「民衆」の原像——『出口なお』について」『日本学報』25, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 107-125, 2006/3
- 畑中小百合「農村演劇の誕生——一九二〇年代の農村文学運動とのかかわりから——」『日本学報』25, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 41-60, 2006/3
- 畑中小百合「憑依と演劇」『文化／批評』2006年冬季号, 文化／批評[cultures／critiques]編集委員会, pp. 161-172, 2006/3
- 兵頭晶子「憑依が精神病にされるとき」『文化／批評』2006年冬季号, 文化／批評[cultures／critiques]編集委員会, pp. 105-128, 2006/3
- 兵頭晶子「大正期の「精神」概念」『宗教研究』344, 日本宗教学会, pp. 97-120, 2005/6
- 水野守「政教社「国粹主義」の展開——「人種主義」との関わりについて——」『移民研究年報』12, 日本移民学会, pp. 131-140, 2006/3

(2)口頭発表

【2004年度】

- 伊賀みどり「病院出産の浸透と『自然』出産——開業助産婦のライフヒストリーより」日本民俗学会第56回年会, 園田学園女子大学, 2004/10/3
- 伊賀みどり「日本の助産院出産の戦後——出産・乳揉みの人類学序説——」日本文化人類学会第38回研究大会, 東京外国語大学, 2004/6/6
- 植野真澄「傷痍軍人・戦争未亡人・戦災孤児」『近代日本思想史研究会』立命館大学, 2005/3/9

- 植野真澄「軍事援護の戦時と戦後」史学会日本史(近現代)部会, 東京大学, 2004/11/14
- 植野真澄「白衣募金者一掃運動にみる傷痍軍人の戦後」15年戦争研究会, ピースおおさか, 2004/10/3
- 花森重行「思想を読む」日本思想史研究会春合宿, 立命館大学, 2005/3/16
- 花森重行「戦後思想史における歴史と主体の変容」日本思想史研究会夏合宿, 民宿「美吉野」2004/9/4
- 花森重行「植民地都市・上海——堀田善衛をめぐって」新植民地主義+都市, 立命館大学, 2004/7/16
- 花森重行「『綴方教室』の忘却／再発見」日本思想史研究会, 立命館大学, 2004/7/15
- 花森重行「亡国の民は亡国の歌を歌う」東アジア知識人会議, スユ+ノモ研究所(韓国・ソウル), 2004/5/2
- 日高由貴「水脈をさぐる」「文学史を読みかえる」研究会, 京都精華大学, 2005/1/29
- 日高由貴「「キリシタン」をめぐる記述——新村出と名づけえぬもの——」思想史・文化理論研究会, 京都国際交流会館, 2004/11/20
- 兵頭晶子「大正期の「精神」概念——大本教と『変態心理』の相剋を通して——」第19回国際宗教学宗教史会議世界大会, 品川プリンスホテル, 2005/3/26
- 兵頭晶子「精神医学史はなぜ怪異を語るのか」東アジア怪異学会定例会, 京都大学, 2005/2/20
- 兵頭晶子「精神病の日本近代」日本思想史研究会夏合宿, 民宿「美吉野」2004/9/4
- 兵頭晶子「「人格」概念と精神病学」懐徳堂研究会, 河合塾大阪校, 2004/8/21
- 【2005年度】
- 植野真澄「戦後日本の傷痍軍人問題——占領期の傷痍軍人援護をめぐって——」民衆史研究会, 早稲田大学, 2005/12/10
- 植野真澄「戦後日本社会福祉史における戦争犠牲者援護問題——傷痍軍人の白衣募金者問題をを中心に——」社会事業史学会, 長野大学, 2005/5/14
- ザイツェフ, デイミトリー「邦文新聞『浦潮日報』の報道から見た尼港事件」ロシア東欧研究会, 待兼山会館, 2005/4/24
- 永岡崇「天理教における「おさしづ」と本席体制——歴史の記述と憑依——」日本宗教学会日本宗教学会第64回学術大会, 関西大学, 2005/9/11
- 永岡崇「天理教における「おさしづ」と本席体制——憑依[で／をめぐる]ポリティクス」文化／批評[cultures／critiques]研究会, 大阪大学, 2005/7/29
- 林葉子「安部磯雄における産児制限論の変容——断種論と戦争協力」日本女性学研究会近代女性史分科会, ウイングス京都, 2005/7/16
- 兵頭晶子「未然の危険をめぐって」心楽の会(講演), 芦屋市民センター, 2005/12/25
- 兵頭晶子「憑依が精神病にされるとき」日本宗教学会第64回学術大会, 関西大学, 2005/9/11
- 兵頭晶子「憑依が精神病にされるとき」文化／批評[cultures／critiques]研究会, 大阪大学, 2005/7/29
- 兵頭晶子「精神病の日本近代」日本思想史研究会, 立命館大学, 2005/4/20

(3)その他(書評・翻訳など)

- 【2004年度】
- 伊賀みどり「家族研究の展望——『近代家族論再考』より」『日本学報』24, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 49-54, 2005/3
- 伊藤遊「テレビドラマ・映画レビュー 描かれたオウム真理教団と「教祖」」『文化／批評』春季号, 文化／批評[cultures/critiques]編集委員会, pp. 91-99, 2005/3
- デイミトリー, ザイツェフ「ロシアとオウム真理教——ドミトリー・シガチョフ被告へのインタビュー——」『文化／批評』春季号, 文化／批評[cultures/critiques]編集委員会, pp. 105-108, 2005/3
- 土井智義「米軍ヘリ墜落事件と「心の傷」」『けーし風』46, pp. 84-85, 2005/3
- 花森重行「棘の先端」『現代思想』32-9, 青土社, p. 258, 2004/8
- 【2005年度】
- 上地美和「『人権』博物館」『沖縄タイムス』(沖縄タイムス社), 朝刊9面, 2005/12/26
- 上地美和「大阪で考える」『沖縄タイムス』(沖縄タイムス社), 朝刊17面, 2005/11/28

上地美和「里帰り」『沖縄タイムス』(沖縄タイムス社), 朝刊 7 面, 2005/11/14
 上地美和「モスリン大橋」『沖縄タイムス』(沖縄タイムス社), 朝刊 6 面, 2005/10/31
 上地美和「そっくりさん」『沖縄タイムス』(沖縄タイムス社), 朝刊 9 面, 2005/10/17
 上地美和「おやつ」『沖縄タイムス』(沖縄タイムス社), 朝刊 10 面, 2005/10/3
 上地美和「標準語」『沖縄タイムス』(沖縄タイムス社), 朝刊 7 面, 2005/9/19
 上地美和「女性専用車両」『沖縄タイムス』(沖縄タイムス社), 朝刊 17 面, 2005/9/5
 上地美和「大阪の『沖縄タウン』」『沖縄タイムス』(沖縄タイムス社), 朝刊 7 面, 2005/8/8
 上地美和「近くて遠い沖縄」『沖縄タイムス』(沖縄タイムス社), 朝刊 10 面, 2005/7/11
 上地美和「私にとっての珍事」『けし風』47, p. 10, 新沖縄刊行会議, 2005/6
 上地美和「『人類館』事件のあらまし」『人類館——封印された扉』pp. 19-22, アットワークス, 2005/5
 兵頭晶子「精神病の日本近代」『日本思想史研究会会報』23, pp. 102-103, 日本思想史研究会, 2005/12
 廣岡浄進「『小日本!』というコトバ——長春からの通信その2」『ヒューマンライツ』207, pp. 58-61, 2005/6
 廣岡浄進「竹田の子守唄、海をわたる——中国の歌謡曲『祈祷』とジュディ・オング」『ヒューマンライツ』205, pp. 59-61, 2005/4

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2004 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)
 2005 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004 年度 学部 : 2 名 大学院 : 3 名 (計 5 名)
 2005 年度 学部 : 1 名 大学院 : 2 名 (計 3 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2004 年度～2005 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)
 伊藤遊 博士後期課程単位修得退学, 京都精華大学, 研究員, 2006/4
 浅川晃広 博士後期課程単位修得退学, 名古屋大学大学院国際開発研究科, 専任講師, 2005/1

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004 年度～2005 年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3 名
 2004 年度 : 0 名 2005 年度 : 3 名
 <内訳> 新聞記者 1 名 システムエンジニア 1 名 COE 研究員 1 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

1 名(全成坤[招聘研究員]2003 年 11 月 1 日～現在)

9. 刊行物

2004 年度 『日本学報』24, 『文化/批評』春季号
 2005 年度 『日本学報』25, 『文化/批評』冬季号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

日本学方法論の会

「蒐集という実践、想像される「郷土」——民俗学における研究／趣味の臨界をめぐって
：1920-30年代——」 2004年11月13日

担当者：真鍋昌賢

発表者：香川雅信(兵庫県立歴史博物館)、野村典彦(和洋国府台女子高等学校)

コメンテータ：川村清志(神戸学院大学)、伊藤遊(大阪大学)

於：大阪大学文学研究科第一会議室

「近代家族論再考」 2004年6月19日

担当者：荻野美穂

発表者：落合恵美子(京都大学)、山田昌弘(東京学芸大学)、牟田和恵(大阪大学)

コメンテータ：伊賀みどり(大阪大学)

於：大阪大学文学研究科第一会議室

「文化/批評」研究会(すべて担当：川村邦光、また所属記載ない場合はすべて大阪大学)

第16回研究会 2005年10月28日

発表者：藤本純子「『女学生の友』にみる男女交際をめぐって」

コメンテータ：川村邦光

於：大阪大学文学研究科美学棟日本B教室

第15回研究会 2005年9月2日

発表者：丸山泰明(神奈川大学)「靖国神社の戦後」

コメンテータ：川村邦光

於：大阪大学文学研究科美学棟日本B教室

第14回研究会 シンポジウム「憑依と近代のポリティクスⅡ」 2005年8月28日

発表者：塩月亮子(日本橋学館大学)「憑依を肯定する社会」、佐藤壮広(立教大学)「巫者の政治学」

コメンテータ：畑中小百合

於：舞鶴市市民会館

第13回研究会 シンポジウム「憑依と近代のポリティクスⅠ」 2005年7月29日

発表者：永岡崇「天理教における「おさしづ」と本席体制」、兵頭晶子「憑依が精神病に
されるとき——人格変換・宗教弾圧・精神鑑定」、川村邦光「近代日本における憑依の
系譜とポリティクス」

コメンテータ：畑中小百合

於：大阪大学待兼山会館

第12回研究会 2005年4月1日

発表者：川村邦光「オウムの廃墟から」

コメンテータ：永岡崇

於：大阪大学文学研究科美学棟日本B教室

第11回研究会 2004年11月12日

発表者：兵頭晶子「精神病の近代——憑依の再定義という視座からの思想史的考察」

コメンテータ：川村邦光

於：大阪大学文学研究科美学棟日本B教室

第10回研究会	2004年10月29日
発表者：藤田庄市(写真家)「カルト事件巡察報告——精神の自由とは何か」	
コメンテータ：川村邦光	
於：大阪大学文学研究科美学棟日本B教室	
第9回研究会	2004年7月24日
発表者：待井扶美子(東北大学)「日本人クリスチャンにみるキリスト教受容の諸相」	
コメンテータ：永岡崇、川村邦光	
発表者：兵頭晶子「「人格」概念と精神病学——明治末から大正期日本における」	
コメンテータ：富山一郎、鈴木景	
於：東北大学文学部	
夏季特別研究会	2004年7月14日
於：永井芳和氏宅(京都市)	
第8回研究会	2004年6月11日
於：大阪大学文学研究科美学棟日本B教室	
発表者：矢野敬一(静岡大学)「国民道徳論における先祖の位置づけ」	
コメンテータ：永岡崇、川村邦光	
第7回研究会	2004年5月14日
発表者：五十嵐恵邦(ヴァンダービルト大学)「任侠から実録へ——やくざヒーローの変遷と70年代日本社会」	
コメンテータ：川村邦光、永岡崇	
於：大阪大学待兼山会館	
第6回研究会シンポジウム「オウム真理教／事件をめぐって」	2004年4月2日
発表者：川村邦光「ハルマゲドンを戦う、ヴァジラヤーナの戦士たち」、伊藤遊「TVドラマ・映画における「オウム真理教／事件」」、表智之「差異に立ち止まること——森達也『A』『A2』の視点、ザイツェフ・デミトリー「ロシアとオウム真理教——ドミトリー・シガチョフ被告へのインタビュー」、畑中小百合「修業とオウム——身体を語る言葉についての試論」	
於：大阪大学待兼山会館	

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

日本学研究室の特徴である学際的な研究方法の実践の場としての「日本学研究方法論演習」は、関連分野の研究状況に機敏に反応しつつ問題発見的な研究スタイルを習得するという当初の目標に向け、確実に成果をあげている。とくに2002年度から、報告者は事前にホームページ上に提出原稿をアップしておき、参加者は当日までにそれを熟読しておいたうえで授業にのぞむことを義務化している。この方式により、授業時間の大部分をコメンテーターのコメントを含めた全体的討論に当てることができ、問題意識の共有と論点の明確化に大きく寄与している。当然そのことは、学会での研究発表や学会誌への研究論文の投稿という院生にとって重要な目的に直結するものとなっている。

また、外部からの講師を招いて定期的に行う「日本学方法論の会」も、院生の研究の幅をひろげる貴重な機会として定着してきた。とくにそこで取りあげられた研究テーマを『日本学報』の特集ページと連動させることによって、院生参加者の研究成果を発表する場が確保されている。

そのほか、各種の奨学金、助成金を得て欧米やアジア各地に研究・調査に向かう院生も少なくないし、さまざまなバックグラウンドをもった海外からの留学生も途切れることがなく、院生との多様で有益な交流が行われている。

また、21世紀COEプログラム関連のシンポジウム、ワークショップ、研究会にたいしても、多くの院生の参加が見

られる。

12-2. 研究活動

研究室所属教員の研究活動は、学会活動ばかりでなく種々の研究プロジェクトへの参加においても盛んであり、発表する著書・論文の点数も多い。また科学研究費の獲得状況においても、基盤研究(B)、若手研究(B)でそれぞれの採用があり、定例的な研究会の開催、それにもとづく研究論集の刊行、国際学会への参加や海外調査もふくめ、種々の成果をあげている。

院生の研究活動としては、学術振興会特別研究員の複数の採用があるほか、国内は言うまでもなく国外の学会・研究会への参加と研究発表も少なくない。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 川村 邦光 教授

1950年生。1984年、東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(東北大学、1978年)。天理大学文学部助教授、同教授を経て、1997年10月現職。専攻：民俗学／宗教学。

1-1. 論文

川村邦光「弔い論へ向けて——死者、亡霊、戦死者から」『現代思想』33-9, pp. 148-156, 2005/8

川村邦光「戦死者と亡霊——非靖国の視座とは」『情況』6-7, pp. 6-23, 2005/8

川村邦光「靖国を逆照する——賊軍・朝敵／非国民の位置とは」『東北学』4, pp. 157-161, 2005/8

川村邦光「純愛／性愛のルールとコンテクスト——“貧しさ”の文化の再発見」『木野評論』36, pp. 81-85, 2005/3

川村邦光「生きる」関一敏、大塚和夫編『宗教人類学入門』弘文堂, pp. 114-124, 2004/12

川村邦光「祈りとしての宗教／信仰」『春秋』春秋社, 464, pp. 9-12, 2004/11

川村邦光「誰が死者を弔うか——弔い論序説」『岩波講座宗教9 宗教の挑戦』岩波書店, pp. 19-38, 2004/7

川村邦光「闘いと切腹の民俗」『芸芸別冊 武士道入門』河出書房新社, pp. 190-193, 2004/6

1-2. 著書

川村邦光『ヒミコの系譜と祭祀』学生社, 2005/4

川村邦光, 早川紀代秀『私にとってオウムとは何だったのか』ポプラ社, 2005/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

川村邦光「靖国の亡霊」第174回現代史研究会, 明治大学駿河台リバティ・タワー, 2005/10

川村邦光「近代日本における憑依の系譜とポリティクス」日本宗教学会第64回大会, 関西大学, 2005/9

川村邦光「“老いの坂”と奪衣婆——老いと女／男の表象をめぐって」日本宗教民俗学会第15回大会, 大谷大学, 2005/6

川村邦光「総合コメント」『第三回 神道の連続と非連続』21世紀COEプログラム 神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成神道・日本文化研究国際シンポジウム, 國學院大學日本文化研究所, 國學院大學, 2004/9

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(B)(2)、代表者：川村邦光

課題番号：15320013

研究題目：近代日本における宗教とナショナリズム・国家をめぐる総合的研究

研究経費：2004年度 3,400千円

2005年度 3,300千円

研究の目的：

本研究では、近代日本における、宗教と国家との関係を研究することを目的とする。国家の宗教政策が国民の信仰生活に対してどのような影響を及ぼしたのか、宗教がナショナリズムの形成においてどのように関与したのかが、2つの大きなテーマである。

この研究課題は「国家神道体制」概念を検討し、それが国民の宗教生活をどのように組織化していったのかを、戦前・戦中における政府の神社政策、地域の神社や靖国神社・護国神社の動向を調査していくなかから明らかにしていくことである。

特に1940年に挙行された紀元2600年式典との関わりで、各地で行われた紀元2600年を記念する宗教的事業を文献研究を踏まえて現地調査し、宗教がナショナリズムの形成においてどのような役割を果たしたのかを明らかにすることを目的としたい。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2005年8月1日～2006年7月31日、研究助成金、助成金獲得代表者：川村邦光

助成金名：サントリー文化財団人文科学・社会科学に関する研究助成

研究題目：日本の知的遺産としての洋食文化の研究

助成団体名：サントリー文化財団

助成金額：1,500千円

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本宗教学会・評議員、理事

1999年9月～現在

2. 杉原 達 教授

1953年生。1975年京都大学経済学部卒業、1977年大阪市立大学大学院経済学研究科前期博士課程修了。博士(経済学)。1977年関西大学経済学部助手、1981年同専任講師、1984年同助教授、1991年同教授、1992年大阪大学文学部助教授、1997年同教授、1998年大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：日本学／文化交流史。

2-1. 論文

杉原達「帝国という経験——指紋押捺を問い直す視座から」杉原達他編『アジア・太平洋戦争』1, 岩波書店, pp. 47-86, 2005/11

杉原達「帝国との向き合いかた——中国人強制連行の戦後」歴史学研究会編『帝国への新たな視座』青木書店, pp. 67-103, 2005/5

杉原達「日本と台湾、アジアの戦後史の闇」徐勝編『東アジアの冷戦と国家テロリズム』お茶の水書房, pp. 17-20, 2004/12

2-2. 著書

杉原達『戦時期日本の中国人強制連行に関する歴史的研究』科学研究費補助金研究成果報告書, 2006/3

杉原達他編『岩波講座 アジア・太平洋戦争』全8巻, 岩波書店, 2005/6

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上田正昭, 姜尚中, 杉原達, 朴一(座談会)「歴史のなかの「在日」」藤原書店編集部編『歴史のなかの「在日」』藤原書店, pp. 11-88, 2005/3

2-4. 口頭発表

杉原達「コメント」政治経済学・経済史学会秋季学術大会・共通論題「労働のグローバル化と国家・地域——歴史と現状」早稲田大学, 2004/10

杉原達「猪飼野を語る」曹智鉉写真集『猪飼野』のつどい, 2004/4

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者：杉原達

課題番号：15520401

研究題目：戦時期日本の中国人強制連行に関する歴史的研究

研究経費：2004年度 700千円

2005年度 600千円

研究の目的：

本研究の目的は、第二次世界大戦期に行われた中国人強制連行に関して、その主要な産業である土木建築業については秋田県花岡と広島県安野、港湾荷役業については大阪港・新潟港・神戸港・七尾港・伏木港、そして炭鉱業については長崎県高島・端島・崎戸を、それぞれ主要な調査地として設定し、その全体像を歴史的に検討するところにある。

近年、中国人強制連行については、日本やアメリカで訴訟が提起される中、社会的注目を集めてきた。しかし、(1)連行時の中国での実態、(2)連行後の労働・居住実態、(3)帰国後の生活実態、(4)日本で死亡したり、帰国できなかった中国人の遺骨や行方の実態、(5)中国人強制連行の政策立案・展開過程、のそれぞれの具体的側面については、まだまだ学問的に明らかになっていないといえない。

申請者は、これまでの研究成果について杉原(2002)で一応のまとめを行ったが、それは一般書の制約を免れていない。そこでその成果をふまえた上で、上記5課題について、新たな聞き取り調査と更なる文献資料調査に基づいて総合的な学術研究を試みようとするものである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

3. 荻野 美穂 教授

1945年生。神戸女学院大学文学部卒業。奈良女子大学大学院博士課程中退。人文科学博士(お茶の水女子大学)。奈良女子大学文学部、京都文教大学人間学部助教授を経て2000年より大阪大学大学院文学研究科助教授。2005年8月より現職。専攻：女性史／ジェンダー論。

3-1. 論文

荻野美穂「障害を理由とした中絶とフェミニズム：アメリカの場合、日本の場合」『思想』979, pp. 85-111, 2005/11

荻野美穂「ART時代の家族の行方」『出生力に関連する諸政策が出生調節行動を介して出生力に及ぼす影響に関する研

究報告書』(国立社会保障・人口問題研究所), pp. 63-66, 2005/3

荻野美穂「近代家族と生殖技術」『日本学報』(大阪大学文学研究科), 24, pp. 39-47, 2005/3

荻野美穂『戦後世界における家族計画とジェンダーの史的的研究』(2002年度～2004年度科学研究費補助金研究成果報告書), 66p., 2005/3

3-2. 著書

荻野美穂「人口政策と家族：国のために産むことと産まぬこと」倉沢愛子, 杉原達他編『アジア・太平洋戦争3巻 動員・抵抗・翼賛』岩波書店, pp. 151-178, 2006/1

荻野美穂「家族計画援助と白人性」藤川隆男編『白人とは何か?』刀水書房, pp. 221-232, 2005/10

荻野美穂「国民国家日本の人口政策と家族：戦前・戦中期を中心に」比較家族史学会監修, 田中真砂子他編『国民国家と家族・個人』早稲田大学出版部, pp. 95-122, 2005/9

荻野美穂「ジェンダー論、その軌跡と射程」二宮宏之編『歴史はいかに書かれるか』岩波書店, pp. 189-215, 2004/6

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

荻野美穂「戦後の家族計画と夫婦の性の変遷」『現代性教育研究月報』6月号, pp. 1-5, 2005/5

荻野美穂「出産のユートピアの語り方」『助産婦雑誌』4月号, pp. 328-329, 2005/4

Ogino, Miho, “Commentary” 『F-GENS』(お茶の水女子大学21世紀COEプログラム), 3, pp. 217-218, 2005/3

荻野美穂『『反射する当事者性』と身体の政治：〈女性〉にとって男性史とはなにか』(海妻径子との対談)『情況』11月号, pp. 120-139, 2004/11

荻野美穂「人工妊娠中絶：アメリカにおける論争」『日本医師会雑誌』132-10, p. 1326, 2004/11

荻野美穂訳, ジョーン・W・スコット著「改訂版への序文」第10章 ジェンダーと政治について再考する『ジェンダーと歴史学』改訂版, 平凡社, pp. 9-18, pp. 402-442, 2004/10

荻野美穂(書評)「Tiana Norgren, Abortion before Birth Control: The Politics of Reproduction in Postwar Japan」『人口問題研究』(国立社会保障・人口問題研究所), 60-3, p. 82, 2004/9

荻野美穂「シンポジウム・コメント」『F-GENS』(お茶の水女子大学21世紀COEプログラム), 創刊号, pp. 96-98, 2004/4

3-4. 口頭発表

荻野美穂「身体史からスポーツを考える：性差はどのように語られてきたか」日本スポーツとジェンダー研究会大会講演, 2005/7

荻野美穂「公共的存在としての胎児」第59回公共哲学京都フォーラム, 2005/3

荻野美穂「コメント」お茶の水女子大学COEプログラム「ロンダ・シービンガー講演会：Exotic Abortifacients: The Gender Politics of Plants in the Eighteenth-Century Atlantic World」2004/12

荻野美穂「夫婦生活のエロス化と避妊」日本女性学研究会近代女性史分科会, 2004/10

Ogino, Miho “Reproductive Technologies and the Feminist Dilemma in Japan”, at the conference, “Going Too Far: Rationalizing Unethical Medical Research in Japan, Germany, and the United States”, University of Pennsylvania, USA, 2004/4-5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2002年度～2004年度、基盤研究(C)(2)、代表者：荻野美穂

課題番号：14594006

研究題目：戦後世界における家族計画とジェンダーの史的的研究

研究経費：2004年度 100千円

研究の目的：

本研究の目的は次の3点にある。

- 1)第二次世界大戦後の日本および国際的環境における家族計画推進の歴史的過程を明らかにする。
- 2)日本における家族計画の成功が、どのように他の国々、とりわけ開発途上国における家族計画の導入と実施に関連していたかを追究する。
- 3)日本および途上国における家族計画の導入と普及が、出産および避妊や中絶などの生殖コントロールの一番の当事者である女性に対してどのような意味を持ち、いかなる変化をもたらしたかを、ジェンダーと権力関係の視点から分析する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日本女性学会・幹事

2004年6月～現在

4. 富山 一郎 助教授

1957年生。1989年京都大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。1989年～1997年まで神戸市外国語大学助教授、その後現職。専攻：歴史学／文化理論。

4-1. 論文

- 富山一郎「沖繩戦『後』ということ」『日本史講座 10』歴史学研究会・日本史研究会編、東大出版会、pp. 291-324, 2005/7
- 富山一郎「鎮圧の後」『情況』(情況出版), 5-9(第三期), pp. 126-131, 2004/10
- 富山一郎「経験が重なり合う」(ハングル)『当代批評』(センガグナム(韓国)), 2004年9月号, pp. 302-311, 2004/9
- 富山一郎「帝国日本の人種および人種主義」『「人種」の概念と実在性をめぐる学際的基礎研究』2001年度～2003年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書(代表 竹沢泰子), pp. 187-194, 2004/5

4-2. 著書

富山一郎(共著)、竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う』人文書院、2005/2(総頁数 538 頁、担当「南島人とは誰のことか」)

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 富山一郎「裏切られた希望、あるいは希望について、文富軾著『失われた記憶を求めて』をめぐる省察」『日本学報』25, pp. 107-129, 2006/3
- 富山一郎「『戦場の記憶』から」『評論』153, 日本経済評論社, pp. 10-13, 2006/2
- 富山一郎「分析ということ、記憶ということ、あるいは正しい政治」『日本思想史研究会会報』23, pp. 1-8, 2005/12
- 富山一郎 鼎談「保安処分の新展開」(崎山政毅・田崎英明と)『インパクション』141, pp. 72-83, 2004/5
- 富山一郎「溢れ出る情動と問答無用の暴力」『インパクション』141, pp. 84-85, 2004/5
- 富山一郎「戦場の記憶」高等学校国語教科書『新現代文』筑摩書房, pp. 219-226, 2004/5

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

富山一郎 地域農林経済学会賞(奨励賞), 愛媛大学, 1991/11/2

富山一郎 農業史研究会賞, 東京大学, 1988/3/31

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 21世紀COEプログラム分担

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

5. 真鍋 昌賢 助手

1969年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学)。国際日本文化研究センター中核的研究機関研究員を経て2002年現職。専攻：民俗学、近現代芸能史、メディア文化論。

5-1. 論文

真鍋昌賢「民俗学史における問題としての「芸術」——特集にあたっての序言」『日本学報』25(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), pp. 1-8, 2006/3

真鍋昌賢「「地域」からはじまる「日本」研究——日本学事始め演習の実践記録と今後の課題——」『日本学報』25(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), pp. 71-82, 2006/3

真鍋昌賢「浪花節の「盛衰」と「新作」——近・現代の語り芸研究のための提案——」福田晃編『講座日本の伝承文学十卷 ヨミ・カタリ・ハナシの伝承世界』三弥井書店, pp. 251-264, 2004/8

真鍋昌賢「芸能のポピュラリティーと演者の実践——浪曲師・天龍三郎の口演空間の獲得史——」赤坂憲雄編『現代民俗誌の地平2 権力』朝倉書店, pp. 135-152, 2004/6

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

真鍋昌賢「「声の文学」としての語り物——近代における浪花節の変貌」『2004・2005年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書 台湾における日本文学・国語学の新たな可能性 アジアの表象/日本の表象』(大阪大学大学院文学研究科東アジア国際フォーラムプロジェクト編), 大阪大学文学研究科, pp. 118-121, 2006/3

真鍋昌賢「寛容な客——ニセ者の芸能史にむけて——」『月刊みんぱく』30-6, pp. 6-7, 2005/6

真鍋昌賢(改訂版)「第三巻解説」上笙一郎編『叢書 日本の児童遊戯』別巻クレス出版, pp. 57-62, 2005/4

5-4. 口頭発表

真鍋昌賢「声の文学としての語り物」国際フォーラム「アジアの表象/日本の表象」(チュラロンコン大学、タイ国), 2005/12/22

真鍋昌賢「ニセ者の芸能史試論」京都市立芸術大学 プロジェクト研究「近代日本における音楽・芸能の再検討」2005/11

真鍋昌賢「人はいかにして<客>になるのか——近代日本芸能史の受容史観についての対話——」京都市立芸術大学 プロジェクト研究「近代日本における音楽・芸能の再検討」(於京都市立芸術大学), 2005/5/28

真鍋昌賢 'The Decline of Rokyoku: 1960s as a turning point in the history of popular culture in Japan'(Imagining Japan: A Symposium)Osaka University's Centre of Excellence's 21st century program(at Japanese Studies Centre Monash University, Australia), 2005/3

真鍋昌賢「志賀志那人の民衆娯楽思想を位置づけるために」志賀志那人研究会(主催者森田康夫)(於大阪市社会福祉研究センター), 2005/1

真鍋昌賢「浪曲師の声をめぐる期待の交差：1930-1940年代——演者の人生史に内在する視点から——」国立歴史民俗博物館共同研究「20世紀における戦争」2005/1

真鍋昌賢「民俗芸術」概念の成立と展開」国際日本文化研究センター共同研究「出版と学芸ジャンルの再編成——近世から近代へ」2004/9

真鍋昌賢「1920-30年代における「民衆娯楽」としての浪花節」芸能史研究会8月例会, 2004/8

真鍋昌賢「義士伝」から「乃木伝」へ——浪花節における武士道のゆくえ——」日本国際文化学会第三回全国大会, 2004/7

真鍋昌賢「岡町と能勢街道——町場の暮らしにみる豊中の近代」新修豊中市史『社会教育』発刊記念講演 わがまち豊中を知る, 2004/7

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2004年度～2006年度、若手研究(B)、代表者：真鍋昌賢

課題番号：16720210

研究題目：「民俗芸術」概念の再検討による芸術・娯楽の民俗学の可能性

研究経費：2004年度 1,800千円

2005年度 900千円

研究の目的：

芸術・娯楽の民俗学の重要な基点となった雑誌『民俗芸術』の分析などにより、「民俗芸術」概念の歴史・社会的な位相、さらには芸術・娯楽というジャンルにこめられていた思想・方法を検討していく。研究会を開催し、芸術・娯楽の民俗学の可能性をひらかれた議論のもとで相対化することを目指し、また領域横断的な場で研究発表を行い「民俗芸術」研究の意義を理論的に担保していく。特に以下の点に留意しつつ研究を進めていくことになる。(1)「民俗芸術」関係の基礎文献の収集(2)「民俗芸術」概念をそれ以前の「民衆芸術」概念と比較(3)両大戦間期におけるポピュラーな娯楽・芸術の事例研究を行う。対象は浪花節であり、オーディエンスの経験の幅を浪花節の間メディア的位相から検討する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

比較日本文化研究会・運営委員

2004年12月～現在

2-7 日本史学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

日本史学専門分野では、学部生・大学院生に対する教育および研究活動の基本を、(イ)日本史学を研究するにあたっての基礎的な能力の習得、(ロ)精緻な実証をふまえた独創的な研究能力の育成、(ハ)時代・分野の枠にとらわれない、柔軟かつ幅広い歴史的思考力の獲得、(ニ)フィールドワークや古文書調査など実地調査能力の習得、(ホ)プレゼンテーション能力の育成、に置いている。

(イ)では、特に各時代(古代・中世・近世・近代)で開講されている史料講読演習によって、史料解釈能力や古文書解読能力の育成に努めている。(ロ)では、卒論演習や大学院ゼミ、また修士論文作成演習・博士論文作成演習などの場におけるきめ細かな指導により、論文作成能力の向上を図っている。(ハ)に関しては、年1回、学界の第一人者といわれる研究者に研究発表をしていただく場を日本史研究室として設けているほか、特に大学院生に対しては、学会運営に積極的に携わる中で、柔軟かつ幅広い歴史的思考力を身につけるよう指導している。(ニ)については、毎年恒例の新生歓迎小旅行や研究室旅行で、現地見学・現地調査を実施しているほか、近世古文書演習において古文書調査合宿を行っている。(ホ)については、毎年7月に院生報告会、10月に卒論・修論発表会を開催し、4年生・院生が日本史研究室構成員全員の前で研究発表を行う機会を設けている。

以上のほか、日本史学専門分野では、学会において、教員と院生がともに委員として学会運営や研究活動を行う機会が多く、本専門分野の特色のひとつをなしている。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 4 助教授 0 講師 0 助手 1

教授：猪飼 隆明、梅村 喬、平 雅行、村田 路人

助手：北泊 謙太郎

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
54	13	23	1	0	0	6	1	1

※うち留学生 4 名、社会人学生 6 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	10	2	6	3	0
'05	18	9	3	1	2
小計	28	11	9	4	2

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	3	0	3
'05	1	0	1
計	4	0	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

大田壮一郎 「室町幕府の宗教政策に関する基礎的研究」 2005/9

主査：平雅行 副査：梅村喬、村田路人

木村英一 「六波羅探題の成立・展開と公家政権」 2005/3

主査：平雅行 副査：梅村喬、村田路人

田中隆一 『満洲国』と日本の帝国支配——植民地朝鮮との構造連関を中心に——」 2004/10

主査：猪飼隆明 副査：村田路人、山室信一(京都大学人文科学研究所)

松村寛之 「萩原朔太郎 イデーとしての日本」 2005/3

主査：猪飼隆明 副査：村田路人、出原隆俊(日本文学専門分野)

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文(※科研費研究成果報告書、調査報告書所収の論文は「論文集」としてカウント)

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	5	2	0	1	6	14
'05	7	3	0	0	2	12
計	12	5	0	1	8	26

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	23	18	1	1	43
'05	1	23	24	6	0	54
計	1	46	42	7	1	97

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

飯沼雅行「幕府広域役負担から見る大山崎惣中と周辺諸村・社領内寺院との関係——淀川筋綱引役の場合——」『山城国大山崎荘の総合的研究(第二次)』神奈川大学日本常民文化研究所, pp. 46-56, 2005/3

飯沼雅行「朝鮮通信使・琉球使節通航時の綱引助郷——摂河両国を中心に——」『交通史研究』(交通史研究会), 54, pp. 23-56, 2004/4

大井喜代「明法勘文と関係史料の分析」(梅村喬編『平安時代における訴訟文書および関係史料の研究』第Ⅱ節(2002年度～2004年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書, 梅村喬), pp. 26-31, 2005/3

大井喜代「平安時代訴訟関係研究文献目録(稿)」(梅村喬編『平安時代における訴訟文書および関係史料の研究』第Ⅱ節(2002年度～2004年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書, 梅村喬), pp. 32-36, 2005/3

大田壮一郎(共編著)『箕面市地域史料 30 中倉家文書目録』箕面市役所, 2005/3

太田光俊「小牧長久手の戦いにおける本願寺勢力による軍事的行動——北伊勢の事例から——」研究代表者藤田達生『近世成立期の大規模戦争と幕藩体制——占領・国分・仕置の視点から——』(2001年度～2004年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(1))研究成果報告書, 藤田達生), pp. 230-242, 2005/3

佐伯徳哉「第2部(1)銀山開発から盛期における鞆ヶ浦、温泉津・沖泊」『石見銀山街道 鞆ヶ浦・沖泊集落調査報告』島根県教育委員会, pp. 17-27, 2005/1

佐伯徳哉「第3部(1)鞆ヶ浦・沖泊地域の平面構造」『石見銀山街道 鞆ヶ浦・沖泊集落調査報告』島根県教育委員会, pp. 42-48, 2005/1

杉本弘幸「日本近代都市社会政策と「下層社会」研究の再構成——不良住宅地区・被差別部落・在日朝鮮人——」『新しい歴史学のために』(京都民科歴史部会), 256, pp. 14-26, 2005/3

杉本弘幸「府県社会事業行政における都市社会事業の構造と展開——京都府・京都市社会事業行政と財団法人京都共済会の関係構造をめぐって——」(財)世界人権問題研究センター『研究紀要』10, pp. 43-65, 2005/3

豊田裕章「平安宮の朝堂院と豊楽院の模型製作・展示・発表について——養護学校における総合的な学習の試み——」『2003年度の研究・実践 いばらぎ』pp. 80-85, 2004/9

馬部隆弘「大阪府枚方市所在三之宮神社文書の分析——由緒と山論の関係から——」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 194, pp. 94-121, 2005/3

馬部隆弘「戦国期毛利氏の領国支配における『検使』の役割」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 192, pp. 77-108, 2004/11

馬部隆弘「城郭由緒の形成と山論——『津田城主津田氏』の虚像と北河内戦国史の実態——」『城館史料学会』(城館史料学会), 2, pp. 1-37, 2004/7

【2005年度】

上田長生「陵墓管理制度の形成と村・地域社会——幕末期を中心に——」『日本史研究』(日本史研究会), 521, pp. 80-108, 2006/1

上田長生「幕末・維新期の陵墓・皇霊祭祀の形成」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 182, pp. 13-26, 2005/12

太田光俊「大坂退城後の坊主衆の動向」大阪真宗史研究会編『真宗教団の構造と地域社会』清文堂出版, pp. 131-153, 2005/8

佐伯徳哉「石見銀山遺跡とその文化的景観」『世界遺産登録推薦書(本文)』(ユネスコ世界遺産センター), pp. 6-10, pp. 17-

25, pp. 31-37, 2006/1

田村正孝「中世後期における信濃国一宮諏訪社と地域」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 199, pp. 1-26, 2006/3

豊田裕章「古代景観形態学の試み——長岡宮「宝幢」パースペクティブ実験を例に——」『立命館大学考古学論集』IV, 立命館大学考古学論集刊行会, pp. 215-230, 2005/5(※中塚良氏との共著)

馬部隆弘「城郭政策比較試論——西国における『城督』を手がかりに——」『中世城郭研究』(中世城郭研究会), 19, pp. 252-255, 2005/7

馬部隆弘「偽文書からみる畿内国境地域史——『椿井文書』の分析を通して——」『史敏』(史敏刊行会), 2005 春(通巻 2 号), pp. 43-82, 2005/4

廣川和花「ハンセン病問題に関する歴史研究の現状と課題——『歴史評論』656 号特集「ハンセン病と隔離の歴史を問う」に寄せて——」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 183, pp. 11-18, 2006/3

廣川和花「ハンセン病者の療養形態に関する考察——群馬県吾妻郡草津町湯之沢部落の事例から——」『部落問題研究』(部落問題研究所), 173, pp. 22-43, 2005/8

松永和浩「中世後期政治史・文化史両研究の関係をめぐって——高岸輝著『室町王権と絵画』に接して——」『史敏』2005 春号, 史敏刊行会, pp. 31-42, 2005/4

吉田洋子「豊臣秀頼と朝廷」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 196, pp. 26-53, 2005/9

(2)口頭発表

【2004 年度】

飯沼雅行「幕府広域役負担基準としての村高——淀川右岸大塚組の綱引役への対応を中心に——」日本史研究会近世史部会, 機関紙会館 3F 日本史研究会事務所会議室, 2005/3/14

上田純「将軍九条頼経上洛についての一考察」日本史研究会中世史部会・大阪歴史学会中世史部会共催卒論報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会, 大阪市立中央青年センター／大阪府大阪市, 2004/5/16

上田長生「19 世紀日本の家と由緒——幕末維新期の天皇陵を素材に——」大阪歴史科学協議会 12 月例会, 東淀川勤労者センター, 2004/12/12

上田長生「日本近世の由緒・系譜研究をめぐって」大阪歴史科学協議会 12 月例会準備報告(前近代史部会・帝国主義研究部会合同部会), 大阪市立大学文化交流センター, 2004/11/16

上田長生「陵墓祭祀と村落祭祀——幕末維新期の飯豊天皇陵を中心に——」陵墓問題に関する検討会, 旅館大文字(奈良市), 2004/9/3

江副陽子「近世中後期畿内村落における刑事事件処理過程の一考察——在地代官・村役人層の動向を中心として——」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 大阪市立梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2004/9/10

太田光俊「小牧長久手の戦いにみる本願寺勢力による軍事的行動」大阪真宗史学研究会 3 月例会, 2005/3/30

太田光俊「木造荘中世資料調査の成果について(戸木地区に関して)」中世都市研究会三重大会準備会, 久居市戸木巡検, 2004/11/20

太田光俊「木造荘中世資料調査の成果について」シンポジウム木造氏と上野遺跡, 久居市教育委員会, 2004/10/3

太田光俊「大阪歴史科学協議会大会報告二日目批判」大阪歴史科学協議会前近代史部会・帝国主義研究部会合同部会, 大阪市立梅田東生涯学習ルーム, 2004/8/30

尾島志保「1920 年代における全国町村長会の歴史的的位置」日本史研究会近現代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 機関紙会館 3F 日本史研究会事務所会議室, 2004/5/16

尾島志保「論評: 秋田茂「帝國的な構造的権力——イギリス帝国と国際秩序——」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪市立西区民センター, 2004/4/7

小杉真之「2004 年度大阪歴史科学協議会大会「近代アジアにおける『帝国』支配と地域」反省」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 2004/7/27

小杉真之「幕末期の朝議と天皇」日本史研究会近現代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 機関紙会館 3F 日本史研究会事務所会議室, 2004/6/20

- 後藤敦史「論評：山田朗「現代における〈軍事力編成〉と戦争形態の変化」大阪歴史科学協議会前近代史部会・帝国主義研究部会合同部会，大阪市総合生涯学習センター／大阪府大阪市，2005/1/31
- 杉本弘幸「日本近代都市社会政策における構造と市政・市会・地域——京都市を事例に——」日本史研究会近現代史部会，機関紙会館 3F 日本史研究会事務所会議室，2005/3/24
- 杉本弘幸「府県社会事業行政における都市社会事業の構造と展開——財団法人京都共済会を中心に——」（財）世界人権問題研究センター第2部近現代研究班例会，世界人権問題研究センター，2005/1/22
- 杉本弘幸「日本近代都市社会政策と「下層社会」研究の再構成——不良住宅地区・被差別部落・在日朝鮮人——」（財）世界人権問題研究センター第2部近現代研究班例会，世界人権問題研究センター，2004/5/22
- 田村正孝「2004年度大会共同研究報告準備会報告」日本史研究会中世史部会，機関紙会館 3F 日本史研究会事務所会議室，2004/4/25
- 豊田裕章「豊臣期の大坂城について」城郭談話会，大山崎ふるさとセンター，2004/9/11
- 豊田裕章「藤原京の宮城と『周禮』（考工記）の國との対比——古代宮都の空間構成の再検討——」続日本紀研究会，アウィーナ大阪，2004/9/3
- 額田政男「書評：山内晋次著『奈良平安期の日本とアジア』」大阪歴史科学協議会5月例会，東淀川勤労者センター，2004/5/8
- 額田政男「書評：山内晋次著『奈良平安期の日本とアジア』」大阪歴史科学協議会前近代史部会，東淀川勤労者センター，2004/4/28
- 橋本孝成「近世豪農の行動・意識の領域と境界」尾張藩社会研究会，名古屋芸術大学，2005/2/26
- 橋本孝成「畿内旗本知行所における大庄屋役とその役割」日本史研究会近世史部会，機関紙会館 3F 日本史研究会事務所会議室，2005/1/24
- 橋本孝成「絵図にみる居住地変化とその背景」山口研究会，大阪工業大学，2004/10/27
- 橋本孝成「『天明八年』萩城下絵図作成・修正年代について」山口研究会，大阪工業大学，2004/7/27
- 橋本孝成「大坂における『尾張藩社会』とその関係性について」大坂諸藩研究会，関西大学，2004/7/18
- 橋本孝成「近世の中西家とその活動」守口市文化財講座，守口市中央公民館，2004/7/17
- 橋本孝成「萩城下町絵図にみる家臣の居住地について」山口研究会，大阪工業大学，2004/6/30
- 橋本孝成「尾張藩大坂屋敷奉行の背景とその活動」日本史研究会近世史部会・大阪歴史学会近世史部会合同部会，機関紙会館 3F 日本史研究会事務所会議室，2004/4/26
- 平岡瑛二「論評：藪田 貫「変わる近世史像」歴史学入門講座実行委員会勉強会，歴史学入門講座実行委員会勉強会，大阪市立東淀川勤労者センター／大阪府大阪市，2005/3/29
- 廣川和花「歴評特集「ハンセン病と隔離の歴史を問う」に寄せて」大阪歴史科学協議会3月例会，大阪市立今津会館，2005/3/12
- 廣川和花「歴評特集「ハンセン病と隔離の歴史を問う」に寄せて」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会，大阪市立大学文化交流センター，2005/3/1
- 廣川和花「書評：脇村孝平著『飢饉・疫病・植民地統治——開発の中の英領インド——』」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会，クレオ大阪西，2004/4/28（※松岡弘之氏との共同報告）
- 松永和浩「『勘仲記』裏文書輪読」『勘仲記』裏文書の会，名古屋大学，2004/7/4
- 松永和浩「論評：市沢哲「中世王権論のなかの足利義満」（『歴史評論』649，2004/5）」文殊の会，京都大学，2004/6/12
- 馬部隆弘「城郭政策比較試論——西国における『城督』を手がかりに——」第21回全国城郭研究者セミナー，東北大学，2004/7/31
- 馬部隆弘「城郭政策比較試論——西国における『城督』を手がかりに——」城郭談話会，大山崎ふるさとセンター，2004/7/10
- 吉田洋子「『後桜町天皇宸記』宝暦13年11月27日条前半 翻刻および参考資料」後桜町女帝宸記研究会，後桜町女帝宸記研究会，京都産業大学第3研究室棟3階会議室／京都府京都市，2004/11/30（※野村玄氏・武田和也氏との共同研究報告）
- 吉田洋子「『後桜町天皇宸記』宝暦13年11月12日～15日条 翻刻および参考資料」後桜町女帝宸記研究会，後桜町女

- 帝宸記研究会, 京都産業大学第3研究室棟3階会議室/京都府京都市, 2004/6/22(※野村玄氏・武田和也氏との共同研究報告)
- 吉永壯志「目代に関する基礎的考察——古代から中世における地方行政研究の一視角として——」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪/大阪府大阪市, 2005/3/18
- 吉永壯志「在庁官人の成立と展開——国司庁宣と留守所下文を中心に——」日本史研究会・続日本紀研究会共催卒業論文報告会, 日本史研究会・続日本紀研究会, ウイングス京都・セミナー室B/京都府京都市, 2004/6/6
- 【2005年度】**
- 飯沼雅行「昭和3年墓域縮小以前の墓地南部(現真田山小学校敷地)景観の復元」真田山陸軍墓地とその保存を考える会, 真田山陸軍墓地とその保存を考える会, 真田山陸軍墓地内集会所/大阪府大阪市, 2006/1/29
- 飯沼雅行「朝鮮人・琉球人來聘国役の実現メカニズムの変遷——畿内近国と東海を中心に——」大阪諸藩研究会, 大阪諸藩研究会, 関西大学文学部/大阪府吹田市, 2006/1/8
- 飯沼雅行「近世地域社会論の現在——畿内近国研究の立場から——」神奈川大学日本常民文化研究所, 大山崎ふるさとセンター, 2005/8/23
- 飯沼雅行「真田山招魂社の消滅と現景観の形成——埋葬人名簿と墓碑の配列から——」真田山陸軍墓地とその保存を考える会, 真田山陸軍墓地とその保存を考える会, 真田山陸軍墓地内集会所/大阪府大阪市, 2005/5/29
- 上田長生「幕末維新期の陵墓管理と地域社会——山陵奉行用達・河内守戸組合を中心に——」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム/大阪府大阪市, 2005/12/16
- 上田長生「幕末維新期の陵墓と村・地域社会——飯豊天皇陵の管理・祭祀を中心に——」歴史科学協議会第39回大会報告, 歴史科学協議会, 青山学院大学/東京都渋谷区, 2005/11/20
- 上田長生「幕末維新期の陵墓と村・地域社会——飯豊天皇陵の管理・祭祀を中心に——」第44回近世史サマーセミナー実行委員会研究会報告, 近世史サマーセミナー実行委員会研究会, 梅田東生涯学習ルーム/大阪府大阪市, 2005/10/8
- 上田長生「幕末維新期の陵墓と村・地域社会——飯豊天皇陵の管理・祭祀を中心に——」京都民科歴史部会・大阪歴史科学協議会合同例会(歴史科学協議会第39回大会準備報告), 京都民科歴史部会・大阪歴史科学協議会, 京都薬科大学/京都府京都市, 2005/9/25
- 上田長生「天皇「権威」と在地社会——山城国の陵墓を素材に——」近世史フォーラム例会, 近世史フォーラム, 梅田東生涯学習ルーム/大阪府大阪市, 2005/7/23
- 太田光俊「一身田専修寺巡検に向けて」中世都市研究会三重大会準備会, 中世都市研究会, 三重県津市一身田地区/三重県津市, 2006/3/25
- 太田光俊「戦国期専修寺の研究へ向けて」中世都市研究会三重大会準備会, 中世都市研究会, 三重大学/三重県津市, 2006/2/19
- 太田光俊「木造地区の歴史と地名」久居市木造地区歴史講演会, 久居市木造地区歴史講演会, 木造地区集会所/三重県久居市, 2005/10/7
- 太田光俊「本願寺勢力による軍事的行動——飛騨の事例から——」一向一揆勉強会, 一向一揆勉強会, 国民宿舎ビュウロッジ堅田/滋賀県大津市, 2005/8/22
- 尾島志保「谷口裕信氏業績検討報告」大阪歴史学会近代史部会, 大阪歴史学会, 大阪市立西区民センター/大阪府大阪市, 2005/5/21
- 片山早紀「近世大坂における寺院統制と都市支配」近世史フォーラム9月例会, 近世史フォーラム, 2005/9/28
- 片山早紀「論評: 藪田貫「文字と女性」(『岩波講座日本通史15近世5』所収)」歴史学入門講座実行委員会勉強会, 歴史学入門講座実行委員会, 東梅田生涯学習センター, 大阪府大阪市, 2005/6/1
- 片山早紀「近世都市大坂における寺院支配の構造」大阪真宗史研究会, 大阪真宗史研究会, 難波別院/大阪府大阪市, 2005/5/1
- 後藤敦史「書評: 赤澤史朗著『靖国神社』」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央/大阪府大阪市, 2006/2/21
- 後藤敦史「弘化・嘉永期における幕府の対外政策と海防掛」日本史研究会近世史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務

所会議室, 2005/4/13

- 小杉真之「文久期の京都政局と越前藩」第12回全国横井小楠研究会大会, 横井小楠研究会, 大阪大学中之島センター／大阪府大阪市, 2005/9/4
- 小杉真之「論評: 籠谷直人「緒論」(『アジア国際通商秩序と近代日本』所収)」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, 阿倍野区民センター／大阪府大阪市, 2005/5/10
- 佐伯徳哉「講演: 世界遺産登録推薦書提出(「報告: ここまでわかった石見銀山Ⅲ」所収)」シンポジウム“石見銀山遺跡…世界遺産として”, シンポジウム“石見銀山遺跡…世界遺産として”, 大田商工会議所／島根県大田市, 2006/2/11
- 佐伯徳哉「石見銀山遺跡の顕著な普遍的価値について」石見銀山遺跡専門家国際会議, 石見銀山遺跡専門家国際会議, 島根県男女共同参画センター／島根県大田市, 2005/6/1-4(※文化庁・島根県・大田市ほか主催)
- 立野康志郎「論評: 藪田貫「国訃と郡中議定——近代成立期の民衆運動と地域社会序説——」歴史学入門講座実行委員会勉強会, 歴史学入門講座実行委員会, 大阪市立東淀川勤労者センター／大阪府大阪市, 2005/5/15
- 田淵望「近世中後期畿内近国における代官所支配の性格——代官役所役人の動向を中心に——」大阪歴史学会近世史部会卒論報告会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2005/5/7
- 田村正孝「中世後期における豊前国宇佐宮の展開」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2005/12/16
- 豊田裕章「茨木城と城下町の歴史」茨木市教育委員会, 茨木市生涯学習センター／大阪府茨木市, 2006/2/17
- 豊田裕章「茨木城シンポジウム～よみがえれ 幻の茨木城～」茨木城シンポジウム, 茨木市生涯学習センター／大阪府茨木市, 2005/11/19
- 豊田裕章「茨木城と城下町の復元について」大阪府文化情報センター, 茨木市立福祉文化会館／大阪府茨木市, 2005/11/4
- 豊田裕章「藤原京の宮域と『周礼』(考工記)の國との対比——古代宮都の空間構成の再検討」京都大学人文科学研究所「伝統中国の生活空間」班研究会, 京都大学人文科学研究所「伝統中国の生活空間」班研究会, 京都大学人文科学研究所／京都府京都市, 2005/10/11
- 豊田裕章「『延喜式』卷四十九、兵庫寮延喜式輪読会, 延喜式輪読会, 向日市埋蔵文化財センター／京都府向日市, 2005/8/8
- 豊田裕章「日本の宮都における「周制」の三朝制から「唐制」の三朝制について——前期難波宮から平安宮までの俯瞰的考察——」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪／大阪府大阪市, 2005/6/17
- 西岡山奈仁子「書評: 日中韓3国共通歴史教材委員会編『未来をひらく歴史』」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, 桃山学院大学本町オフィス／大阪府大阪市, 2005/8/20
- 額田政男「養老令刪定の意義——戸令集解の分析を通じて——」日本史研究会古代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室, 2005/11/14
- 馬部隆弘「椿井文書の史料的价值」山城国一揆研究会, 山城国一揆研究会, 京都府立山城郷土資料館／京都府相楽郡山城町, 2005/11/20
- 馬部隆弘「戦国時代の枚方——津田地域を中心に——」枚方市市民センター主催くらわんか学園, 枚方市立中央図書館／大阪府枚方市, 2005/10/28
- 平岡瑛二「畿内『郷町』型村落における村政の特質と町・村」第44回近世史サマーセミナー, 近世史サマーセミナー実行委員会, 関ロジ／三重県亀山市, 2005/7/17
- 廣川和花「靖国神社存立の経済的条件と靖国神社の「平和主義」をめぐる(大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会 WG コメント)」大阪歴史科学協議会3月例会, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立東淀川勤労者センター／大阪府大阪市, 2006/3/25
- 廣川和花「戦後の靖国神社存立の経済的基盤と『平和主義』についてのメモ」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2006/3/15
- 廣川和花「近代日本のハンセン病者と地域——ハンセン病自由療養地をめぐる議論を素材に——」第43回部落問題研究者全国集会歴史Ⅱ分科会報告, 部落問題研究会, 京都橘大学／京都府京都市, 2005/10/30
- 廣川和花「近代日本のハンセン病者と地域——ハンセン病自由療養地をめぐる議論を素材に——」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会・部落問題研究所歴史部会合同部会, 大阪歴史科学協議会・部落問題研究所, 部落問題研究所／京都府

京都市, 2005/9/24

松永和浩「南北朝～室町期公武関係論の課題と展望」文殊の会, 文殊の会, アーブ滋賀/滋賀県大津市, 2006/3/12

松永和浩「室町殿・公家衆間の主従関係形成過程試論」文殊の会, 文殊の会, 京都大学文学部古文書室/京都府京都市, 2005/10/16

牧野雅司「維新政府の対朝鮮外交と東アジア」朝鮮史研究会関西部会 11 月例会, 朝鮮史研究会, 河合塾大阪校/大阪府大阪市, 2005/11/26

牧野雅司「論評: 籠谷直人「緒論」(『アジア国際通商秩序と近代日本』所収)・同「大英帝国「自由貿易原則」とアジア・ネットワーク」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, 阿倍野区民センター/大阪府大阪市, 2005/5/10

森榮倫「論評: 川合康「治承・寿永の内乱と地域社会」」日本史研究会中世史部会・大阪歴史学会中世史部会合同部会, 日本史研究会・大阪歴史学会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2006/2/21

森榮倫「『悪党』問題と地域社会」日本史研究会中世史部会・大阪歴史学会中世史部会合同卒論報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会, 西宮市大学交流センター/兵庫県西宮市, 2005/5/22

森脇崇文「宇喜多氏の家臣団編成と権力構造」岡山地方史研究会 2005 年度 3 月例会, 岡山地方史研究会, 岡山大学/岡山県岡山市, 2006/3/18

森脇崇文「論評: 藪田貫「近世社会と性差」(『日本史講座』6 所収), 歴史学入門講座実行委員会勉強会, 歴史学入門講座実行委員会, 大阪市立東淀川勤労者センター/大阪府大阪市, 2005/4/29

吉田洋子「『後桜町天皇宸記』宝暦 13 年 12 月 27 日～28 日条 翻刻および参考資料」後桜町女帝宸記研究会, 後桜町女帝宸記研究会, 京都産業大学日本文化研究所/京都府京都市, 2006/2/28(※野村玄氏・武田和也氏との共同研究報告)

吉田洋子「江戸幕府の成立と地下官人の再編」大阪歴史学会近世史部会大会準備報告会, 大阪歴史学会, 大阪市立東淀川勤労者センター/大阪府大阪市, 2006/2/17

吉田洋子「『後桜町天皇宸記』宝暦 13 年 12 月 16 日～18 日条 翻刻および参考資料」後桜町女帝宸記研究会, 後桜町女帝宸記研究会, 京都産業大学日本文化研究所/京都府京都市, 2005/10/25(※野村玄氏・武田和也氏との共同研究報告)

吉田洋子「『後桜町天皇宸記』宝暦 13 年 12 月 4 日～6 日条 翻刻および参考資料」後桜町女帝宸記研究会, 後桜町女帝宸記研究会, 京都産業大学日本文化研究所/京都府京都市, 2005/5/24(※野村玄氏・武田和也氏との共同研究報告)

吉永壮志「目代考——地方行政研究の一視角として——」日本史研究会古代・中世史合同部会, 日本史研究会, 機関紙会館 5 階大会議室/京都府京都市, 2006/2/27

(3)その他(書評・翻訳など)

【2004 年度】

飯沼雅行「ミニシンボ質疑応答の要旨」『旧真田山陸軍墓地を考える』5, 特定非営利活動法人旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会, pp. 12-13, 2005/3

飯沼雅行「第 10 回見学会報告」『真田山』1, NPO 法人旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会, p. 2, 2004/12

大井喜代「部会ニュース(古代史部会): 額田政男報告討論要旨」『日本史研究』(日本史研究会), 510, pp. 239-240, 2005/2

大井喜代「部会ニュース(古代史部会): 2003 年 4 月部会報告要旨」『日本史研究』(日本史研究会), 510, pp. 240-241, 2005/2

大田壮一郎「新刊紹介: 齋藤夏来著『禅宗官寺制度の研究』」『日本史研究』(日本史研究会), 507, pp. 91-92, 2004/11

太田光俊「部会ニュース(中世史部会): 永井隆之報告討論要旨」『日本史研究』(日本史研究会), 509, p. 86, 2005/1

大根田康介「栗山圭子報告討論要旨(2004 年度大阪歴史学会大会部会報告)」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 193, pp. 72-73, 2005/1

大根田康介「2003 年 12 月例会彙報」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 178, pp. 63-64, 2004/11

串山まゆら「2003 年 11 月例会彙報」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 177, pp. 50-51, 2004/6

小杉真之「2003 年度『第 19 回歴史学入門講座』の記録」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 190, pp. 136-138, 2004/6

後藤敦史「歴史学入門講座参加記」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 176, pp. 51-53, 2004/4

佐伯徳哉(辞典項目執筆)「出雲教」「井戸神社」「染羽天石勝神社」「太鼓谷稲成神社」「平浜八幡宮」 藪田稔, 橋本政宣編

- 『神道史大辞典』吉川弘文館, p. 54, p. 81, p. 614, p. 622, p. 851, 2004/7
- 杉本弘幸「第38回大会参加記」『歴史評論』(歴史科学協議会), 659, pp. 109-110, 2005/2
- 杉本弘幸「書評:小林丈広編著『都市下層の社会史』」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 193, pp. 217-225, 2005/1
- 杉本弘幸「歴史叙述における専門性と学際性」『グローブ』37, (財)世界人権問題研究センター, pp. 16-17, 2004/4
- 田村正孝「書評:桑田和明著『中世筑前国宗像氏と宗像社』」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 189, pp. 150-157, 2004/4
- 豊田裕章「大坂城模型展示解説文」大阪府教育センター, 2005/3
- 中野賢治「2004年度『第20回歴史学入門講座』の記録」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 194, pp. 162-164, 2005/3
- 西岡山奈仁子「部会ニュース(近現代史部会):2003年9月部会報告要旨」『日本史研究』(日本史研究会), 511, pp. 129-130, 2005/3
- 額田政男「部会ニュース(古代史部会):2003年3月部会報告要旨」『日本史研究』(日本史研究会), 510, pp. 238-239, 2005/2
- 額田政男「書評:山内晋次著『奈良平安期の日本とアジア』」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 178, pp. 59-61, 2004/11
- 橋本孝成『簡易図録「平成十六年度守口市文化財展『近世の刷物と庶民の文化』』守口市教育委員会, 2005/3
- 平岡瑛二「山下聡一報告討論要旨(2004年度大阪歴史学会大会部会報告)」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 193, pp. 168-170, 2005/1
- 廣川和花「2004年『建国記念の日』不承認 2. 11大阪府民のつどい」記録『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 177, p. 38, 2004/6
- 松永和浩「部会ニュース(中世史部会):2003年3月部会報告要旨」『日本史研究』(日本史研究会), 503, pp. 102-103, 2004/7
- 馬部隆弘「史料紹介 一五〜一六世紀の楠葉今中家文書——中世都市楠葉の構造分析序説——」『枚方市史年報』(枚方図書館市史資料室), 8, pp. 47-58, 2005/3
- 馬部隆弘「三浦家の言順堂と文化人グループ」『大阪春秋』(新風書房), 117, pp. 49-51, 2005/1
- 馬部隆弘「津田城」『図説近畿中世城郭事典』城郭談話会, 城郭談話会, pp. 200-201, 2004/12
- 馬部隆弘「犬田城」『図説近畿中世城郭事典』城郭談話会, 城郭談話会, pp. 202-203, 2004/12
- 馬部隆弘「大阪府枚方市に残る織豊政権関係の史料四点」『織豊期研究』(織豊期研究会), 6, pp. 33-43, 2004/10
- 吉永壮志「江草宣友報告討論要旨(2004年度大阪歴史学会大会個人報告)」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 193, pp. 215-216, 2005/1
- 【2005年度】**
- 飯沼雅行「部会ニュース(近世史部会):2005年3月部会報告要旨」『日本史研究』(日本史研究会), 514, pp. 92-93, 2005/6
- 上田長生「第44回近世史サマーセミナーの記録:分科会の内容紹介(分科会F)」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 199, pp. 140-141, 2006/3
- 上田純「部会ニュース(中世史部会):2004年5月部会(2004年度卒論報告会)報告要旨」『日本史研究』(日本史研究会), 514, pp. 84-85, 2005/6
- 尾島志保「部会ニュース(近現代史部会):2004年5月部会報告要旨」『日本史研究』(日本史研究会), 521, pp. 119-120, 2006/1
- 尾島志保「部会ニュース(近現代史部会):2004年6月部会成田雅史報告討論要旨」『日本史研究』(日本史研究会), 521, pp. 124-125, 2006/1
- 尾島志保「『第二回 シンポジウム 地域資料の保存と活用を考える』参加記(『第二回 シンポジウム 地域資料の保存と活用を考える「地域資料保存・活用ネットワークの構築に向けて」の記録)』, 『ヒストリア』(大阪歴史学会), 196, pp. 129-131, 2005/9
- 尾島志保「近況報告 より良い思考の場を求めて——近現代史勉強会と私——」『史敏』2005春号, 史敏刊行会, pp. 89-92, 2005/4
- 片岡太郎「歴史学入門講座参加記」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 182, pp. 38-39, 2005/12
- 片山早紀「笠置寺所蔵の近世文書について(笠置寺調査報告)」荒木浩編『小野随心院所蔵の文献・画像調査を基盤とする 相關的・総合的研究とその展開——Vol. 1 講演録・随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告』(2005年度科学研究費補助金(基盤研究(B)17320039)研究報告書, 荒木浩), pp. 120-126, 2006/3

- 片山早紀「熊谷光子報告討論要旨(2005年度大阪歴史学会大会部会報告)『ヒストリア』(大阪歴史学会), 198, pp. 141-143, 2006/1
- 後藤敦史「書評: 竹中亨著『帰依する世紀末 ドイツ近代の原理主義者群像』『パブリックヒストリー』(大阪大学西洋史研究室編集・発行), 3, pp. 88-93, 2006/2
- 後藤敦史「部会ニュース(近世史部会): 2005年4月部会報告要旨『日本史研究』(日本史研究会), 515, pp. 88-89, 2005/7
- 小杉真之「部会ニュース(近現代史部会): 2004年5月部会尾島志保報告討論要旨『日本史研究』(日本史研究会), 521, pp. 121-122, 2006/1
- 小杉真之「部会ニュース(近現代史部会): 2004年6月部会報告要旨『日本史研究』(日本史研究会), 521, pp. 122-123, 2006/1
- 小杉真之「2004年9月例会彙報『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 181, pp. 41-42, 2005/8
- 豊田裕章「養護学校における歴史教育の試み——博物館・大学・地域との連携——」『史友会会報』(待兼山史友会), 20, pp. 17-20, 2005/12
- 西岡山奈仁子「書評: 永井和著『青年君主昭和天皇と元老西園寺』『日本史研究』(日本史研究会), 517, pp. 65-70, 2005/9
- 長谷川裕峰「坂本亮太報告討論要旨(2005年度大阪歴史学会大会部会報告)『ヒストリア』(大阪歴史学会), 198, pp. 79-80, 2006/1
- 馬部隆弘「暮らしのなかで『枚方・交野今昔写真帖』郷土出版社, pp. 83-106, 2005/10
- 馬部隆弘「ある商人の茸狩り」『大阪春秋』(新風書房), 118, p. 32, 2005/4
- 平岡瑛二「第44回近世史サマーセミナーの記録: 巡見①「宿場町・関を歩く」」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 199, p. 143, 2006/3
- 廣川和花「大会一日目討論要旨『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 179・180 合併号(創立40周年記念特集号), pp. 28-30, 2005/5
- 牧野雅司「部会ニュース(近現代史部会): 2004年6月部会小杉真之報告討論要旨『日本史研究』(日本史研究会), 521, pp. 123-124, 2006/1
- 松永和浩「部会ニュース(中世史部会): 2004年11月部会金井静香報告討論要旨『日本史研究』(日本史研究会), 522, pp. 107-108, 2006/2
- 松永和浩「近況報告 さわ中の軌跡」『史敏』2005春号, 史敏刊行会, pp. 83-88, 2005/4
- 吉田洋子「膳所藩藩校」大石学編『近世藩制藩校大事典』吉川弘文館, p. 636, 2006/3
- 吉田洋子「仁正寺藩藩校」大石学編『近世藩制藩校大事典』吉川弘文館, pp. 637-638, 2006/3
- 吉田洋子「水口藩藩校」大石学編『近世藩制藩校大事典』吉川弘文館, p. 644, 2006/3
- 吉田洋子「山上藩藩校」大石学編『近世藩制藩校大事典』吉川弘文館, p. 645, 2006/3
- 吉田洋子「麻田藩藩校」大石学編『近世藩制藩校大事典』吉川弘文館, pp. 660-661, 2006/3
- 吉田洋子「狭山藩藩校」大石学編『近世藩制藩校大事典』吉川弘文館, pp. 664-665, 2006/3
- 吉田洋子「高槻藩藩校」大石学編『近世藩制藩校大事典』吉川弘文館, p. 666, 2006/3
- 吉田洋子「丹南藩藩校」大石学編『近世藩制藩校大事典』吉川弘文館, pp. 667-668, 2006/3
- 吉田洋子「伯太藩藩校」大石学編『近世藩制藩校大事典』吉川弘文館, p. 669, 2006/3
- 吉田洋子「新庄藩藩校」大石学編『近世藩制藩校大事典』吉川弘文館, p. 714, 2006/3
- 吉田洋子「高取藩藩校」大石学編『近世藩制藩校大事典』吉川弘文館, p. 715, 2006/3
- 吉田洋子「田原本藩藩校」大石学編『近世藩制藩校大事典』吉川弘文館, p. 716, 2006/3
- 吉田洋子「柳生藩藩校」大石学編『近世藩制藩校大事典』吉川弘文館, p. 718, 2006/3
- 吉田洋子「柳本藩藩校」大石学編『近世藩制藩校大事典』吉川弘文館, p. 719, 2006/3
- 吉永壮志「2005年3月例会報告要旨」『続日本紀研究』(続日本紀研究会), 359, p. 35, 2005/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2004年度 PD:1名 DC2:1名 DC1:0名 (計2名)
2005年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)
2005年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度～2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

野村玄 博士後期課程, 大阪青山短期大学, 専任講師, 2005/8

山内晋次 博士後期課程, 大阪大学大学院文学研究科, 助手(東洋史学専門分野), 2005/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004年度～2005年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 8 名

2004年度:3名 2005年度:5名

<内訳> 図書館司書 2名 大学職員 1名 学芸員 1名 中・高等学校の教員 4名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名(2005年度 Sykora, Jan(シーコラ, ヤン), カレル大学(チェコ共和国))

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「中世寺院法研究会」(研究会、研究会開催・事務局引き受け、 1988年より80回の研究会を開催)	1988年～現在
「大阪歴史科学協議会」(学会、編集事務局引き受け)	2000年6月～2006年6月
「横井小楠研究会第12回研究大会」(研究会、大会開催)	2005年9月3-4日
「大阪歴史学会」(学会、大会開催)	2004年6月27日
「大阪歴史学会」(学会、事務局引き受け)	2002年6月～2004年6月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

研究室例会(1998年度～2005年度):2004年度～2005年度は計3回開催

「日本近代史再考——日本人の歴史認識を問う——」 発表者:中塚明氏(奈良女子大学名誉教授)	2006年1月18日
「古代の村・中世の村」 発表者:大山喬平氏(立命館大学COE推進機構教授)	2005年1月21日
「日本、フランス、アジア、ヨーロッパ間の国際・学際的共同研究——学術機関の 歴史と発展、研究者個人の歩みと——」 発表者:アンヌ・ブッシイ氏(フランス極東学院専任研究員兼教授)	2004年10月6日

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

(1) 教員スタッフ

日本史学専門分野のスタッフは、古代から近代まで日本史の全時代をカバーしており、学生・院生に対し、行き届いた教育を行うことができている。

(2) 学生・院生数と教育・研究環境

日本史学専修に進んだ学部2年生は、2004年度18名、2005年度17名であった。例年通り、本専修の人気の高さを示している。

大学院の博士前期課程入学者は2004年度5名であったが、2005年度は9名となり例年よりかなり増えている。博士後期課程への入学者は2004年度5名、2005年度0名であった。2005年度の後期課程については入学希望者は多くいたが、結果的に0名となった。博士後期課程については、入学水準の維持に特段の配慮を払っている表れである。また前期課程・後期課程ともに、外国人留学生や他大学からの入学者が増えていることが大きな特徴である。内部からの進学者が大半を占めていた時期に比べ、院生間に活力が出てきたという点で評価できる。

いっぽう、学生・院生の増加により、2005年度は学部生54名、院生39名となった。このほか、研究生・科目等履修生などを加えると、研究室の学生・院生等は102名を教えるまでになり、活気がある。ただし、現在の研究室は人数に比べ手狭であり、教育・研究環境は必ずしも良好とはいえない。

(3) 学生・院生教育と就職状況

教員スタッフは全時代をカバーしているため、学部・大学院ともに、各時代にわたる講義・演習を用意している。この点では充実した教育体制といえる。一方、非常勤講師の割り当てが1 Semester分に減少したため、講座運営費でもう1 Semester分を確保して、従来通り2 Semester分を維持した。これにより前期・後期それぞれ1 Semesterずつ2人の講師に講義を担当していただいているが、現状では4時代のうち2時代に限定されるので、学生・院生間に不満の声が上がっている。日本史学はもちろんのこと、文学部・文学研究科の教育における非常勤講師の役割は極めて大きいだけに、この枠の特段の拡充が望まれる。

教育内容については、各時代とも、徹底した史料読解を訓練する史料講読演習を通して、日本史学を研究するにあたっての基礎的な能力の育成に努めており、一定の成果を上げている。また、近世古文書解読演習では、大学行事である「いちろう祭」の史料展示への参加や史料目録作りによって、実戦的な古文書教育を行っている。このほか、自治体史編纂事業の一環としての古文書現地調査への参加を積極的に進め、教育効果をさらに高めている。

就職については、学部卒業生に関しては、おおむね良好である。一般企業および官公庁が大半を占めるが、マスコミ企業に就職した者もいる。院生に関しても、前期課程修了者はおおむね良好である。全体的に、専門性の高い分野への就職が多いが、一般企業への就職も、かつてに比べれば増加している。大学院博士前期課程が、高度教養人養成機関としての性格をあわせもってきたことの反映として、評価できるのではないと思われる。後期課程修了者については、大学等への就職は相変わらず難しいが、特に就職率が低下したわけではない。

(4) 研究室全体としての教育

例年通り、学外の研究者を招いての例会、新入生歓迎小旅行や研究室旅行による現地見学・現地調査、卒論・修論中間発表会や院生報告会を行い、教室での講義・演習では修得できない能力の育成を図った。これらは、教育上、多大の効果を上げており、今後も継続して行いたい。

(5) 課程博士号学位取得

この2年間では4名で、院生の数を考えれば多くない。今後、学位取得者増加のため、指導の強化を図りたい。

12-2. 研究活動

日本史学専門分野の構成員は、それぞれの分野で各自の研究を進めるかわら、『日本史講座』（東京大学出版会）をはじめとする講座・通史の編集・執筆に関わるなど、学界の共有財産の蓄積や基礎的研究の充実のための諸活動に、積極的に参画している。また、全員が高校日本史の教科書を執筆し、歴史教育にも寄与している。

また、日本史研究会・歴史科学協議会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会などの学会・研究会の代表や事務局長、あるいは委員を構成員が担うなど、学会運営に積極的に関わり、日本史学界の研究の推進に大きく寄与している。上記のうち、大阪歴史学会については事務局を、大阪歴史科学協議会については編集事務局を本専門分野で引き受けた。

共同研究・学際研究の面では、各教員がそれぞれ科学研究費を獲得し、共同研究を進めている。国際的な共同研究としては、平雅行教授がフランス極東学院と「日本社会におけるウチとソトの力学」(2005年度～2006年度、代表アンヌ・ブッシイ氏)のテーマで研究を行っているほか、猪飼隆明教授が2005年度に、韓国釜山大学の金文吉氏が講演を行った横井小楠研究会大会の開催に尽力した。

他方、日本史学専門分野の構成員の多くは、地域社会との連携や社会への研究成果の還元に努めている。すなわち、『愛知県史』『三重県史』『瀬戸市史』『荒尾市史』『宇土市史』『新修熊本市史』『大阪狭山市史』『新修豊中市史』『三田市史』『夜久野町史』などの自治体史編纂事業を通して地域社会に新しい歴史像を提示しつつある。

このほか、本専門分野が保管している旧摂津国住吉郡平野郷町の含翠堂(土橋家)文書や旧摂津国嶋下郡沢良宜浜村高島家文書の整理・研究も無視できない。日本史学専門分野では、古文書演習や講義と有機的に関連させつつ、これら古文書の目録作成や内容分析を進めている。また、毎年その成果の一端を、大学行事である「いちよう祭」において披露している。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 猪飼 隆明 教授

1944年生。1974年、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(京都大学、1971年)。熊本大学専任講師、同助教授、同教授を経て、1998年より現職。専攻：日本近現代史。

1-1. 論文

猪飼隆明「明治維新と有司専制の成立」『待兼山論叢(史学編)』39, pp. 1-29, 2005/12

1-2. 著書

猪飼隆明『ハンナ・リデルと回春病院』熊本出版文化会館発行、創流出版、2004/11

猪飼隆明『性の分離と隔離政策——ハンナ・リデルと日本の選択』熊本出版文化会館発行、創流出版、2004/11

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

猪飼隆明(報告)「維新政権と横井小楠」全国横井小楠研究会大会、福井県立図書館、2004/9/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(B)(一般)、代表者：猪飼隆明

課題番号：16320087

研究題目：横井小楠の遺稿及び関係資料の書誌的研究

研究経費：2004年度 1,900千円

2005年度 1,900千円

研究の目的：

横井小楠研究の新たな進展を目指して、これまでほとんどの研究がよりどころとしてきた山崎正董『横井小楠史料』及び伝記の新資料による再検討をする。さらに全集刊行の基礎作業とすること。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

歴史科学協議会・代表

2003年9月～2006年11月

2. 梅村 喬 教授

1945年生。1974年、名古屋大学大学院文学研究科博士課程史学地理学専攻単位取得退学。文学博士(名古屋大学、1990年)。名古屋大学助手、愛知県立大学文学部助教授、同教授を経て、1999年4月、大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：日本史学／古代史。

2-1. 論文

梅村喬「石母田正の在地理論と古代・中世史学」『歴史学研究』801, pp. 19-27, 2005/5

2-2. 著書

梅村喬『日本古代社会経済史論考』塙書房, 470p., 2006/2

梅村喬『平安時代における訴訟文書および関係史料の研究』2002年度～2004年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書, 220p., 2005/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

梅村喬(書評)「吉田晶著『古代日本の国家形成』」経済122, pp. 128-129, 2005/11

梅村喬(史料紹介)「史料散歩——史料二題——」日本歴史686, pp. 87-88, 2005/7

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2002年度～2004年度、基盤研究(B)、代表者：梅村喬

課題番号：14310156

研究題目：平安時代における訴訟文書および関係史料の研究

研究経費：2004年度 1,800千円

研究の目的：

平安時代中後期における訴訟と紛争処理の実態を分析するため、法曹官人の答申(明法勘文)を中心に史料収集を行い、太政官体制下の実務組織の解明に努める。併せて10世紀前期以降、約1世紀にわたって百姓愁訴として拡大した民衆行動が政務にいかなる影響を及ぼしたかを考察する。

2-6-2. 2005年度、研究成果公開促進費(学術図書)、代表者：梅村喬

課題番号：175063

研究題目：日本古代社会経済史論考

研究経費：2005年度 2,600千円

研究の目的：

日本古代史の研究分野でも特に進展が求められる社会経済の領域について、古代から中世への移行期を対象に、財政、政治組織、土地制度、領主制、土地保証、社会習俗、史料研究などの諸側面から通時的な分析を進め、新たな問題提起を行う。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪歴史科学協議会・委員	2006年6月～現在
同上・委員長	2003年6月～2006年6月
歴史科学協議会・常任委員	2003年9月～2006年11月

3. 平 雅 行 教 授

1951年生。1981年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学博士(大阪大学)。京都橘女子大学、関西大学、大阪大学助教授を経て1996年1月より現職。専攻：日本中世史／古代中世仏教史。

3-1. 論文

平雅行「若き日の親鸞」『真宗教学研究』26, pp. 107-126, 2005/6

平雅行「殺生禁断と殺生罪業観」脇田晴子, コルカット, 平雅行共編『周縁文化と身分制』思文閣出版, pp. 240-268, 2005/3

平雅行「中世寺院の暴力とその正当化」『九州史学』140, pp. 57-71, 2005/2

平雅行「神仏と中世文化」歴史学研究会, 日本史研究会編『日本史講座 第4巻 中世社会の構造』東京大学出版会, pp. 167-195, 2004/9

平雅行「青蓮院の門跡相論と鎌倉幕府」河音能平・福田榮次郎編『延暦寺と中世社会』法蔵館, pp. 90-150, 2004/6

3-2. 著書

脇田晴子, コルカット, 平雅行共編『周縁文化と身分制』思文閣出版, 2005/3

平雅行『中世寺院の暴力とその正当化』科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書, 2005/3

平雅行, 平松令三『真宗史二』本願寺維持財団, 2005/1

平雅行『真宗史一』本願寺維持財団, 2004/9

平雅行ほか『日本史 B 指導資料』実教出版株式会社, 2004/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

平雅行, 草野頭之「これからの親鸞伝研究の課題 下」『真宗』1224, pp. 34-53, 2006/3

TAIRA MASAYUKI "La legitimization de la violence dans le bouddhisme au Moyen Age", *Legitimities, Legitimations*, Ecole française d'Extreme-Orient, Paris, pp. 79-104, 2006/2

平雅行, 草野頭之「これからの親鸞伝研究の課題 上」『真宗』1223, pp. 56-70, 2006/2

平雅行「仏教流派表」『日本古代史大辞典』大和書房, 巻末資料, 2006/1

平雅行「親鸞の歩みとところ 上下」真宗大谷派難波別院『南御堂』518・519, 2005/11

村井章介, 平雅行「はじめに 日本史講座 4」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座 第4巻 中世社会の構造』東京大学出版会, pp. 5-10, 2004/9

3-4. 口頭発表

平雅行「来世観の変容と天皇家の葬送」死と生の習俗をめぐる比較史研究, 2004/12

平雅行「若き日の親鸞」第12回真宗教学学会講演会, 真宗大谷派・真宗教学学会, 2004/11

平雅行「中世の神国思想と仏教」宗教史研究会例会, 2004/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平雅行 大阪大学共通教育賞, 大阪大学, 2003/12

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2002年度～2004年度、基盤研究(C)(2)、代表者：平雅行

課題番号：14510359

研究題目：中世寺院の暴力とその正当化

研究経費：2004年度 600千円

研究の目的：

本研究は、暴力を素材に、日本の中世寺院や中世仏教の特質を探ることを目的とする。この目的を達するため、本研究は第一に、中世寺院が駆使した暴力の特質を明らかにしたい。特に軍事的武力において武士との差異を確認できるか、検討したい。

第二に、殺人や暴力を正当化する論理を解明する。寺院は個別利害の追求の過程で暴力を行使したが、しかし他方では仏教は慈悲や救済の普遍性をタテマエとしている以上、暴力を行使するには、救済の普遍性との亀裂を糊塗・隠蔽する言説が必要となってくる。

第三に、寺院の暴力に対する俗権力の対応とその歴史の変遷を明らかにしたい。中世の世俗権力が寺社の暴力を禁止した段階から、それを容認・肯定してゆく歴史的過程とその原因を明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

史学会・評議員	1999年11月～現在
仏教史学会・評議員	1999年10月～現在
日本宗教史懇話会・呼びかけ人代表	1999年8月～現在
懐徳堂記念会運営委員会・幹事	1996年6月～現在
史学研究会・評議員	1990年5月～現在
大学設置・学校法人審議会専門委員	2003年4月～2006年3月
日本歴史学協会・委員	2000年7月～2005年6月
大阪歴史学会・特別委員	2000年6月～2005年6月
日根野を考える会・代表	2001年11月～2005年6月
科学研究費委員会・専門委員	2003年1月～2004年12月

4. 村田 路人 教授

1955年生。1977年、大阪大学文学部史学科卒業。1979年、大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程修了。1981年3月、大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程中途退学。文学博士(大阪大学、1994年)。大阪大学文学部助手、京都橘女子大学文学部専任講師、同助教授を経て、1996年4月、大阪大学文学部助教授。1999年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2002年4月、大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：日本近世史。

4-1. 論文

村田路人「一七世紀における堺奉行の『万事仕置』権と触伝達」2002年度～2005年度科学研究補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書『畿内譜代大名岸和田藩の総合的研究』（研究代表者:和歌山大学教育学部教授藤本清二郎），pp. 49-62, 2006/3

村田路人「宝永元年の大和川付替えと大坂」『水の都市文化——大阪市立大学大学院文学研究科 COE/重点研究シンポジウム報告書』大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター，pp. 83-98, 2006/3

村田路人「寛永後期北河内地域の触と触留帳——『河内国交野郡藤坂村寛永十六～二十年触留帳』の紹介を中心に——」『枚方市史年報』8, 枚方図書館市史資料室, pp. 1-18, 2005/3

村田路人「近世諸権力の位相」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座第6巻近世社会論』東京大学出版会, pp. 67-98, 2005/2

4-2. 著書

村田路人『幕府上方支配における享保改革の研究』（2003年度～2005年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書、研究代表者:村田路人），pp. 1-56, 2006/3

服部敬, 村田路人ほか『大阪狭山市史第5巻 史料編狭山池』大阪狭山市, 2005/3

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

村田路人「宝永元年の大和川付替えと大坂」大阪市立大学大学院文学研究科 COE/重点研究共催シンポジウム「水の都市文化」（大黒俊二, 樋脇博敏, 和栗珠里, 見市雅俊, 熊遠報, 村田路人）, 2005/3

村田路人「宝永元年大和川付け替えの歴史的意義」大和川水系ミュージアムネットワーク記念シンポジウム「大和川付け替え300年、その歴史と意義を考える」（中九兵衛, 村田路人, 小谷利明, 市川秀之, 八木滋, 黒田淳, 安村俊史, 西田敬之, 矢内一鷹）, 2004/11

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者：村田路人

課題番号：15520402

研究題目：幕府上方支配における享保改革の研究

研究経費：2004年度 直接経費 600千円 間接経費 0円

2005年度 直接経費 500千円 間接経費 0円

研究の目的：

享保期、上方における幕府支配機構のありかたに変化が見られることは、これまでもある程度知られていたが、「幕府上方支配における享保改革」という観点から、享保改革の一環としての機構改革を明確に意識しつつ、その変化をとらえた研究はない。また、従来享保期の変化として明らかになっているものも、京都町奉行および大坂町奉行の裁判管轄地域の変更など、ごく一部にすぎない。本研究は、享保期における幕府上方支配機構の諸変化を総合的に把握するとともに、それを享保改革の一環として位置づけようとするものである。なお、上方における享保改革を考察するには、元禄期における幕府上方支配機構の再編を視野に入れる必要があり、その点にも留意したい。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪歴史学会・事務局長

2002年6月～2004年6月

5. 北泊 謙太郎 助手

1971年生。1995年、大阪大学文学部史学科国史学専攻卒業、1997年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(史学専攻、日本史学専門分野)修了、2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化形態論専攻、日本史学専門分野)単位修得退学。修士(文学、大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科ティーチング・アシスタント(1997年6月～1998年2月)。2001年より現職。専門分野：日本史学／日本近現代史。

5-1. 論文

北泊謙太郎「問題提起：地域史研究の方法と思想——三つの地域での実践から——」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 179・180合併号, pp. 31-39, 2005/5(※大阪歴史科学協議会ワーキンググループの名で執筆)

5-2. 著書

北泊謙太郎(共著者：奥村弘, 李東彦, 河島真, 森下徹, 三村昌司, 印藤昭一), 三田市総務部総務課市史編さん担当編, 『三田市史 第5巻 近代資料I』三田市, 2005/3

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

北泊謙太郎「書評：一ノ瀬俊也著『近代日本の徴兵制と社会』」『歴博』(国立歴史民俗博物館), 129, p. 28, 2005/3

北泊謙太郎「第38回大会参加記(2004年度歴史科学協議会大会)」『歴史評論』(歴史科学協議会), 659, p. 110, 2005/3

北泊謙太郎「共同研究報告 近現代史部会大会報告批判(2003年度日本史研究会大会報告批判)」『日本史研究』(日本史研究会), 502, pp. 65-68, 2004/6

北泊謙太郎「都市部におけるフィールドワークをめぐって——「大阪天満宮史料閲覧と天満寺町ウォーク」参加記——」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 177, pp. 45-48, 2004/6

5-4. 口頭発表

北泊謙太郎「私立有馬会と三田市域」第10回三田市史編さん講演会講演, 三田市総務部総務課市史編さん担当, 2006/3

北泊謙太郎「問題提起：地域史研究の方法と思想——三つの地域での実践から——」大阪歴史科学協議会創立40周年記念大会報告, 大阪歴史科学協議会, 2004/6

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪歴史科学協議会編集委員長

2003年6月～現在

2-8 東洋史学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

阪大東洋史が世界の学界の中で重きをなす研究領域は、唐宋以後の中国史、イスラム化以前の中央アジア史、そして東南アジア・海域アジア史である。いずれの領域の教員も漢文文献を根本史料にしながら、現地語史料とフィールドワークの成果を合わせた研究を行い、院生達にもそれを指導している。学部生に対しては、全員に漢文演習を課すと共に、3つの領域のいずれかの英語論文講読演習に出席させ、世界の学界の動きを学ばせている。

本専門分野の教育の中で最も特徴があるのは、「合同演習」と通称され、教員から学部生まで全員が出席を義務づけられている演習である。そこでは日本語の論文紹介、卒論・修論の中間報告など、学年に応じた研究発表・報告が求められ、とりわけ大学院後期課程学生は、東洋史学史・工具書等について入門講義を行い、学部生に裨益すると同時に、自らが教職に就いた時のための訓練を行う。全員がこの合同演習に出席するという事は、広大な領域にまたがり、時代も古代から近現代に亘る東洋史全般の発表を聞き討論するという事で、狭い専門に閉じこもるのを打破する効果がある。大学院に進学する者は、この「合同演習」に学部時代から積極的に出席し続けることによって、幅広い知識と関心を持った研究者・高度職業人に育っていき、学部だけで卒業していく者にとっても、学問の厳しさと奥深さを肌で感じながら、ここを卒業したという誇りと自信を持って社会に出ていくことになり、教育効果も絶大である。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 4 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：森安 孝夫、片山 剛、荒川 正晴、桃木 至朗

助教授：青木 敦

助手：山内 晋次

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
24	9	11	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	4	4	0	0	0
'05	7	3	3	3	0
小計	11	7	3	3	0

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	0	0	0
'05	3	0	3
計	3	0	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

糸山大樹「清末の「差委」のシステムと「洋務人才」の登用——福建船政局の事例を中心に——」2006/3

主査：片山剛 副査：桃木至朗、青木敦

蓮田隆志「近世ベトナム鄭氏政権の成立と展開」2006/3

主査：桃木至朗 副査：荒川正晴、青木敦

横山政子「公共食堂・託児組織の運営からみた中国農村人民公社——黒竜江省の大躍進期を中心に」2006/3

主査：片山剛 副査：森安孝夫、青木敦

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	2	2	4	1	2	11
'05	7	0	0	0	2	9
計	9	2	4	1	4	20

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	3	7	4	1	0	15
'05	1	1	2	0	0	4
計	4	8	6	1	0	19

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

笠井幸代 “Ein Kolophon um die Legende von Bokug Kagan.” 『内陸アジア言語の研究』(中央ユーラシア学研究会), 19, pp. 1-27, 2004/7

坂尻彰宏 「2003年の歴史学界——回顧と展望——内陸アジア 1」 『史学雑誌』(史学会), 113-5, pp. 272-276, 2004/5

坂本和子 「織物にみるシルクロードの東西交流」 『シルクロード学研究叢書』10, 奈良, シルクロード学研究センター, pp. 1-17, 2005/2

坂本和子(共著) 『古代オリエント事典』 岩波書店, pp. 152-156, pp. 210-212, 2004/12

坂本和子 “Two Fragments of Luxury Cloth Discovered in Turfan: Evidence of Textile Circulation from West to East”, (eds.) D. Durkin-Meisternst and Others, *Turfan Revisited-The First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*, Dietrich Reimer Verlag, Berlin, pp. 297-302, 2004

佐藤貴保 「西夏と黒河流域」 『オアシスプロジェクト会報(総合地球環境学研究所)』 5-1, pp. 16-23, 2005/3

桃木至朗, 佐藤貴保 「第2回全国高等学校歴史教員研修会」 『インターフェイスの人文学 世界システムと海域アジア交通 2004年度報告書』 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-81, 2005/2

佐藤貴保 「十二世紀後半における西夏と南宋の通交」 『待兼山論叢(史学編)』 39, pp. 1-24, 2004/12

佐藤貴保 「シルクロード出土文献の現物調査」 『Interface Humanities』 04, 大阪大学大学院文学研究科 「インターフェイスの人文学」 研究開発委員会, pp. 28-29, 2004/7

鈴木宏節(共著) *Preliminary Report on Japan - Mongolian Joint Archaeological Expedition “New Century Project” 2003*. Kokugakuin Univ. / Niigata Univ. / Institute of Archaeology Mongolian Academy of Science. [——日本・モンゴル共同「新世紀プロジェクト」2003年度調査概報——, 2004/5]

早瀬晋三, 岡本弘道, 蓮田隆志, 大坪加代, 中井潤子(編) : 『東南アジア史学会関西例会通報総集編』 18(2003年度版), 東南アジア史学会関西例会, 2004/5

【2005年度】

赤木崇敏 「帰義軍時代チベット文手紙文書 P. T. 1189 訳註稿」 『東トルキスタン出土「胡漢文書」の総合調査』(2003年度～2005年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書・研究代表者 荒川正晴 研究課題番号: 15401021), pp. 77-86, 2006/3

赤木崇敏 「河西帰義軍節度使張淮鼎——敦煌文献 P.2555 pièce 1 の検討を通じて——」 『内陸アジア言語の研究』(中央ユーラシア学研究会), XX, pp. 1-25, 2005/8

赤木崇敏 「帰義軍初期敦煌の僧俗間の序列」 『東方学』(東方学会), 110, pp. 79-92, 2005/7

鈴木宏節, 中田裕子(共同執筆) 「2004年度モンゴル国調査記録」(研究代表者 村岡倫) 『文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「中世考古学の総合的研究——学融合を目指した新領域創生——」(領域代表 前川要) : 公募研究「中世北東アジア考古遺蹟データベースの作成を基盤とする考古学・歴史学の融合」2004年度・2005年度研究成果報告書』 pp. 1-20, 2006/3

鈴木宏節 「モンゴル国バヤンホンゴル・アイマク発現のブンブグル碑文——八世紀中葉の北アジア情勢を伝える突厥碑文——」 同, pp. 82-93, 2006/3

- 鈴木宏節(羅新訳)「瞰欲谷碑文研究史概論」『中国史研究動態』(中国社会科学院歴史研究所), 2006-1, pp. 20-27, 2006/1
 鈴木宏節「突厥阿史那思摩系譜考——突厥第一可汗国の可汗系譜と唐代オルドスの突厥集団——」『東洋学報』(東洋文庫),
 87-1, pp. 37-68, 2005/6
 中田美絵「唐朝政治史上の『仁王経』翻訳と法会——内廷勢力専権の過程と仏教——」『史学雑誌』115-3, pp. 38-63, 2006/3
 向正樹「元代“朝貢”与南海信息」『元史論叢』(元史研究会), 10, pp. 389-406, 2005/7

(2)口頭発表

【2004年度】

- 赤木崇敏「帰義軍時代沙州オアシスの社会秩序」中央アジア学フォーラム, 大阪大学, 2004/12/18
 大坪慶之「清末、清朝中央の外交政策決定過程」第18回明清史夏合宿, 山形県山形市, 2004/8/2
 坂尻彰宏「論文批評: 榮新江「再論敦煌藏経洞の宝物——三界寺与藏経洞——」」中央アジア学フォーラム, 神戸市外国語大学, 2004/8/7
 佐藤貴保「西夏と黒河流域」オアシスプロジェクト研究会, 総合地球環境学研究所, 2005/3/30
 佐藤貴保「西夏皇帝の側近集団——西夏語・漢語文献からの復原——」東洋史研究会大会, 2004/11/3(発表要旨: 『東洋史研究』63-3, pp. 162-163, 2004/12)
 佐藤貴保「西夏と黒河流域」オアシスプロジェクト水曜会, 総合地球環境学研究所(京都市), 2004/7/7
 鈴木宏節「突厥称号研究序説——中央ユーラシア遊牧国家史上のタルカン——」第5回遼金西夏史研究会大会, 新潟県新潟市, 2005/3/20
 蓮田隆志“Seeing Mainland Southeast Asian Experiences from the Early Modern Empire Perspective”. Panel 3-6: Critical Dialogues between Maritime Asian Studies and the World-System Theory: The “Early-Modern Empire” Concept from the Viewpoint of Asian History. The 18th IAHA Conference, 8 Dec. 2004, Academia Sinica, Taipei.
 蓮田隆志「東南アジア史からみた《東アジア近世帝国》」山下範久『世界システム論で読む日本』拡大書評会(科研「近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク」研究会〈代表桃木至朗教授〉), 大阪大学, 2004/10/27
 蓮田隆志「『華人の時代』と近世北部ベトナム: 1778年の越境事件を素材として」アジア民衆史研究会2004年度第3回研究会, 早稲田大学, 2004/10/9
 蓮田隆志“Khao cuu lai ve su thanh lap nha Le Trung Hung”. Hoi thao khoa hoc quoc te lan thu II ve Viet Nam hoc “Viet Nam tren duong phat trien va hoi nhap: Truy en thong va hien dai”. 15 July 2004, TP HCM. [「中興黎朝の成立再考」第2回ベトナム学国際会議「ベトナム: 発展・開発と統合への道」2004/7/15, ホーチミン市]
 蓮田隆志「ベトナムの農村から(1)(2)」追手門学院大学文学部「アジア文化論I」2004/5/19-26
 向正樹「忽必烈時代の朝貢与元朝の南海信息」「元代社会文化暨元世祖忽必烈」国際学術研討会, 中国・南開大学(天津), 2004/8/21-22
 山本明志「モンゴル時代の蔵漢交通」第41回日本アルタイ学会(野尻湖クリルタイ), 長野県信濃町, 2004/7/18(発表要旨『東洋学報』86-3, p. 140, 2004/12, 「彙報」所載〈澁谷浩一氏執筆〉)
 山本明志「書評: Igor de Rachewiltz, *The Secret History of the Mongols: A Mongolian Epic Chronicle of the Thirteenth Century. Translated with a historical and philological commentary*. 2 vols.(Brill's Inner Asian Library, Vol.7)」中央アジア学フォーラム, 大阪大学, 2004/4/3
- ### 【2005年度】
- 大坪慶之「從光緒帝親政問題看清廷的政治決策過程」2006年第1回漢学研究中心学術討論会, 台湾国家図書館, 2006/3/30
 梶原真「十九世紀初、湖南省西部における屯田制の設置とそのシステム」第19回明清史夏合宿, 兵庫県川辺郡猪名川町, 2005/8/7
 鈴木宏節「8世紀中葉の北アジア情勢とカルルク」第24回中央アジア学フォーラム, 神戸市外国語大学, 2005/4/2
 山本明志「モンゴル時代における站赤利用文書の発給をめぐる」第6回遼金西夏史研究会, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2006/3/11

(3)その他(書評・翻訳など)

【2004年度】

大坪慶之「(新刊紹介)陳捷『明治前期日中学術交流の研究』『史学雑誌』113-7, pp. 121-122, 2004/7

梶原真「(新刊紹介)松田吉郎『明清時代華南地域史研究』(汲古叢書37)『史学雑誌』113-7, pp. 119-120, 2004/7

沖田道成, 加藤聰, 佐藤貴保, 高橋文治, 向正樹, 山尾拓也, 山本明志「『烏臺筆補』訳註稿(2)『内陸アジア言語の研究』(中央ユーラシア学研究会), 19, pp. 109-155, 2004/7

【2005年度】

山本明志「書評: I. de Rachewiltz, The Secret History of the Mongols: A Mongolian Epic Chronicle of the Thirteenth Century. Translated with a historical and philological commentary. 2 vols, Leiden /Boston, 2004」『内陸アジア言語の研究』(中央ユーラシア学研究会), XX, pp. 123-135, 2005/8

沖田道成, 加藤聰, 佐藤貴保, 高橋文治, 山尾拓也, 山本明志「『烏臺筆補』訳註稿(3)『内陸アジア言語の研究』(中央ユーラシア学研究会), XX, pp. 77-122, 2005/8

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2004年度 PD: 1名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計2名)

2005年度 PD: 2名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004年度 学部: 0名 大学院: 4名 (計4名)

2005年度 学部: 0名 大学院: 6名 (計6名)

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度~2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004年度~2005年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

なし

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2004年度 『内陸アジア言語の研究』第19号(中央ユーラシア学研究会)

2005年度 『内陸アジア言語の研究』第20号(中央ユーラシア学研究会)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

中央ユーラシア学研究会(森安研究室に事務局)

『内陸アジア言語の研究』の編集・出版

中央アジア学フォーラム(森安研究室に事務局; 会場は

2005年4月2日、7月30日、12月17日

神戸市外国語大学と回り持ち)	2004年4月3日、8月7日、12月18日
参加人数は毎回30名～40名、参加者の所属機関は延べ約30	
海域アジア史研究会(桃木研究室に事務局；会場は大阪大学文学部)	2006年1月14日
参加人数は毎回10名～30名、参加者の所属機関は延べ26	2005年4月22日、5月2日、6月24日、
	7月23日、10月1日、10月21日、11月26日
第19回明清史夏合宿(片山研究室に事務局；会場は兵庫県川辺郡	2005年8月6日～8日
猪名川町尼崎高原ロッジ)	
参加人数は101名(海外1名を含む)	

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

2004年度～2005年度の博士後期課程在籍者は12名(うち留学生0名)、博士前期課程入学者は16名(うち留学生1名)であった。課程博士号取得者は3名、それ以後に続く博士予備論文合格者は4名である。残念ながらこの2年間にパーマネントの研究職を得た者はいなかったが、それに繋がる大学の非常勤講師職には3名が就き、日本学術振興会特別研究員PDが2名、DCが1名いた。公費による長期留学生は6名、私費留学生は2名であるが、後期課程のほぼ全員が公費ないし私費による短期の留学・海外資料調査・フィールドワークを経験し、成果を挙げている。例えば中国史分野では、2004年度に台湾師範大学への公費による長期留学が1名、2005年度に北京大学への公費による長期留学が1名、台湾の漢学研究中心の奨学金による短期留学が1名であった。それぞれ中国語に磨きかけるとともに、資料の収集・分析を進めて研究を充実させている。漢学研究中心の奨学金による短期留学者が、帰国直前の2006年3月に中国語で研究報告を行ったが、これは海外留学による成果を如実に示すものである。一方、短期の文書調査ないしフィールドワークとしては、例えば中央アジア史の分野で、森安が代表の基盤研究(A)「シルクロード東部地域における貿易と文化交流の諸相」により、2名が欧州に敦煌文書調査に赴き、1名が山西北部～寧夏～西安の現地調査に参加した。以前に比べて後期課程の院生の場合は公費とくに科学研究費による短期の海外資料調査・フィールドワークがしやすくなり、世界のトップにある東洋学のレベルを維持するためには、喜ばしい状況になりつつあるが、引き続き今後の財政的支援が望まれる。

本専門分野の教育の最大の特徴は「合同演習」にあるが、その概要は各年度の『大阪大学大学院文学研究科紹介』で繰り返している通りなので、ここでは省略する。各教員が研究科全体の平均よりは多くの授業を担当し、教育には熱心に取り組んでいることだけを特記しておく。例えば森安は、この20年間以上、共通教育を含めて毎週8～9コマの授業を担当してきた。また青木は新しい試みとして、2004年度後期の「英語ゼミ」を、最初の数回ではあるが、すべて英語によって行った。各学生に、現在の研究内容およびその動機付けを英語で発表させ、質疑応答にも日本語の使用を禁止した。

本専門分野では史料言語としてはなによりもまず古典漢文があげられ、その読解力の向上には学部から大学院まで一貫して力を注いでいる。近年は高校での漢文履修状況が悪化しているが、学部教育ではそれに対応できるカリキュラムを組んで訓練を施している。また、それにとどまらず、古代ウイグル語・トルコ語・モンゴル語・朝鮮語・チベット語・ベトナム語・タイ語など各自の必要に応じて修得の機会を提供してきた。さらに、論文用言語として英語はもちろん(学部段階では英文論著講読ゼミが全員必修)、ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語の修得・向上を指導し、これらの言語の論文を読むゼミも行っている。また中国語に関しては留学生を講師にした自主ゼミによって、現地調査や留学のための会話力向上に努めている。

いまや東洋学の分野でもパソコンを使つての検索システムが脚光を浴びるようになり、かつては碩学にしか集められなかった史料群が学生レベルで簡単に収集できるようになってきている。本専門分野では『四部叢刊』などのCD-ROMを設置し、さらには『大蔵経』などもネット検索ができるようになり、博士論文・修士論文・卒業論文作成に絶大な威力を発揮しつつある。

これと関連するものとして青木は、2001年6月より現在に至るまで、ウェブサイト「東洋史研究リンク集」を運営している。このサイトは、東アジア史を中心として、ネット上で用いることのできる文献・史料原文検索、その他有用な学術資源、東洋学関連の有用な個人・団体ページへのリンクを網羅的に収集するとともに、研究会の案内を随時載せ、阪大東洋史学生のみならず世界の東洋史学徒のインターネット利用の導き手となっている。日本・台湾を中心として、時にはスペインやモンゴル・カンボジアなどを含め、一日100～200アクセスを記録しており、またその掲示板は、実名による中国史研究者の学術的討論の場となっている。サイトは台湾の中央研究院、日本の東京大学東洋文化研究所などの公式サイト、各大学東洋史学研究室の公式サイトや国立大学図書館、研究者のブログなど東洋学関係の多くのサイトからリンクされている。ここ数年Googleなどの検索サイトで「東洋史」と入力すれば一番目にランクされている。

この2年間では東洋史の桃木・森安両教授、山内助手、佐藤貴保・藤田加代子・蓮田隆志3COE特任研究員の6名が中心となり、西洋史の秋田教授、日本史の平教授の協力も仰いで21世紀COEの一環として「世界システムと海域アジア交通」班を運営した。その際には海域アジア史研究会や中央アジア学フォーラムという学内外の研究会活動とも連動させて、COE事業を院生の教育に資することができた。しかしなんとといっても同班の活動のハイライトは、大学側が主宰者となる高校歴史教育研究会の開催であり、それは全国初の試みとして大きな反響を呼び、北海道大学・九州大学などで同じような企画が出てくるさきがけとなった。もちろん、ここにも多数の院生を参加させることにより、大きな教育効果があげられた。

さらに桃木は、2005年度に開始された「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の取り組み担当者となり、全国の高校教員と連携した「大阪大学歴史教育研究会」を立ち上げた。これまた、歴史教育刷新の取り組みに参画させることで大学院学生を訓練するものである。このほかにも桃木・秋田らが中心となって開講した史学系各専修共通の学部2回生必修講義「世界史・日本史研究の理論と方法」など、「概論」「方法論」に意図的に取り組む大阪大学史学系の一連の取り組みは、専門分化の中で社会的発言力を失いつつある歴史学の現状を打破する試みとして学内外の評価を得ている。

明清史夏合宿は、全国の大学等に勤務する明清史研究者と明清史研究を志す大学院生・学部生等、百余名余りが毎年夏季に集い、宿泊・食事をともにし、研究発表・討論や夜の懇親会等を通じて、日本における明清史研究の発展と交流を図ることを目的に開催されている。その意味で、日本における実質的な明清史学会に相当する。毎年、全国各地の大学が幹事校となるが、2005年度の第19回大会は片山・青木を中心に阪大が幹事校となり、8月に2泊3日の日程、研究報告6本(うち学界新人の報告4本、一般報告2本)、台湾からの来日参加者を含めて計101名の出席を得て実施された。本合宿は、阪大の中国史専攻の院生・学部生にとって、学会の雰囲気を感じ、かつ学会運営の経験を積む絶好の機会となっただけでなく、参加した明清史研究を志す全国の学生たちにとって、学界先輩からの厳しくも暖かなアドバイスを得るとともに、全国的なインターカレッジの場としても寄与した。阪大の博士後期課程院生も2004年度に1名、2005年度に1名が研究報告を行い、いずれも充実した報告として評価を得た。

荒川が主宰し、森安が補佐する西域出土文書ゼミは、学外の教員ならびに大学院生も受け容れるため、敢えてこれを土曜日にオープンな研究会形式で行い、成果をあげている。

12-2. 研究活動

大阪大学の東洋史関係スタッフは6名(うち助手1名)であり、旧国立総合大学の中ではもっとも数が少ないため、その研究対象範囲をパミール以東でインドを含まないアジアに明確に設定している。これは一見するとマイナス要素のようであるが、2002年度の外部評価でも述べられたように、スタッフ全員がアジア史さらには世界史全体への関心と視野を持ちつつ研究・教育を行っており、阪大東洋史の地位は今や国内のみならず海外からも評価され、揺るぎなきものとなっている。中央アジア史、中国史、東南アジアないしアジア海域史の3分野が相互の連関と世界史への位置づけを強く意識していることは、本専門分野の教育・研究の最大の特徴である「合同演習」や、21世紀COEの一環として開催した全国初の画期的な全国高校歴史教育研究会という形に収斂しているといえよう。

2002年度の外部評価で杉山正明・京都大学教授が指摘されたように、森安と荒川が担当するイスラム化以前の中央アジア史・北アジア史は、西域学・東西交渉史学における東京大学百年の伝統が消滅する中で唯一それを継承し、内部進学者のみならず他大学からも当該領域に関心を持つ院生を集め、さらにインターカレッジの中央アジア学フォーラムを主宰するなど、国内は言うに及ばず世界の中でも屈指の拠点を形成しつつある。2003年5月に森安がパリのコレージュ＝ド＝

フランスで4回の連続講演を行ったこと、2002年9月にベルリンで開催された国際トゥルファン学会において森安・荒川が共に英語で発表したこと、2004年4月に世界のソグド研究者を集めて開かれた北京の国際ソグド学会で荒川が中国語で発表したこと、2005年11月に森安がソウルで開催された韓国の中央アジア史学会創立10周年記念シルクロード学シンポジウムに招かれて講演したことなどは、その一端である。さらに東洋史研究室に本拠を置く中央ユーラシア学研究会が年1回発行する『内陸アジア言語の研究』は、第15, 17, 18号が世界的な東洋学雑誌である *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* ないし *Acta Orientalia (Hungarica)* の書評欄で取り上げられた。また森安・桃木が代表となって開催した最初の全国高校歴史教育研究会の報告書である森安孝夫編『シルクロードと世界史』(大阪大学 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」報告書第3巻, 豊中: 大阪大学大学院文学研究科, 2003/12)、並びに森安が代表、荒川が分担者となった2001年度～2003年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)「中央アジア出土文物によるシルクロード貿易と文化交流の諸相」の報告書である森安孝夫編『中央アジア出土文物論叢』(京都、朋友書店、2003年3月刊)が *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* ないしロシアの学術誌に紹介された。なお、この2年間も森安・荒川ともに科研費の代表者となっていること、別項の通りである。荒川は2003年度～2005年度科学研究費補助金基盤研究(B)「東トルキスタン出土「胡漢文書」の総合調査」によって、ヨーロッパの文書収蔵機関や東トルキスタンのコータンなどを調査し、その成果を報告書としてまとめた。森安が代表となった2005年度～2008年度科学研究費補助金基盤研究(A)「シルクロード東部地域における貿易と文化交流の諸相」では、初年度に山西北部～オールドス南部～寧夏～西安地区を実地調査したので、その報告書を内部出版して最終年度の報告書に備えた。

中国史・東アジア史では、伝統となりつつある海外資料収集および研究対象地域への実地踏査を博士後期課程院生が積極的に展開した。研究テーマが時代的にも地域的にも多様であることを反映して、資料収集地も広範囲にわたった。

片山は、2004年7月、中国広州で開催された国際シンポジウム《近代中国郷村社会権勢》に、華南珠江デルタ地域における漢族社会の成立と明朝との関係に関する論文を中国語で提出・報告するとともに、最終日には中国語による総括コメントを行った。また9月には、中国の歴史地理学における最重点単位である上海の復旦大学歴史地理研究所からの招請を受けて、同内容の講演を中国語で行った。その報告における研究視角の斬新さ、論証の堅実さは、研究者のみならず大学院生の反響を得、報告原稿に手を入れた論文が中国の学術誌『歴史地理』第21輯(2006年5月)に掲載された。2005年度には、前述した明清史夏合宿を主催するとともに、研究報告も行った。その報告は、長老研究者の「里甲制に関連する研究報告としては、故小山正明氏の十段法に関する郷土的な土地所有論を聞いて以来の衝撃的な報告」との感想を含めて、高い評価を得た。

また片山は2004年度～2005年度に、科研の代表・分担を含めて、台湾に3回(計30日間)の資料収集を、広東省に2回(19日間)の資料収集と農村での実地調査を行い、江蘇省でも2回(計28日間)の農村実地調査を行った。農村での実地調査では、寺廟を中心に農村社会における位牌祭祀の過去と現況に関する調査を実施した。台湾の資料収集では留学中の博士後期課程院生に対する研究指導を行うとともに、片山の科研課題に関する資料収集調査にも参加させた。この課題は地理学研究者も参加するものであり、中国史のみならず地理学的研究手法をも習得し、研究領域を拡大する場としても有意義であった。また大阪においても、収集した資料の整理に院生のみならず学部生も参加させることで、多様な資料の存在を知り、資料整理の手法を学び、視野を拡大させる得難い契機となった。

青木は2004年度より基盤研究(C)の研究代表者となり、さらに2005年度からは特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」の中の一分野の研究代表者となり、数々の国際会議を主宰・共催し、研究報告・討論を行うとともに、英語・中国語の通訳も手がけている。これらの研究活動の一環として、(財)東洋文庫での「朝野類要研究会」、東大での池田温主宰「律令制度研究会」、様々な合宿形式の学会での討論にもしばしば参加している。2004年5月には社会経済史学会共通論題で研究報告を行い、2004年12月には自ら組織して台湾での第18回IAHAでパネルを開催し、2005年5月には東南アジア史研究者を集めて第50回国際東方学者会議(ICES)東京会議のオーガナイザーを務め、11月には台湾文部科学省募集の「台湾研究短期フェロウシップ」に採択されて2週間の現地調査を行った。2006年3月には中央研究院歴史語言研究所で講演を行い、さらにこうした活動を幅広く活発に遂行すべく、出版局「宋朝政区研究事務局」を立ち上げ、ISBNを取得して2005年度から2006年度にかけて科研関連のディスカッションペーパー4冊を発刊している。

圧倒的に現代研究に偏った日本の東南アジア研究において、現地留学・フィールドワークを当然としつつ、漢籍を中心

とした高度の文献研究を推進する歴史研究の数少ない中心として、桃木の主導する大阪大学・東南アジア研究グループは異彩を放ちつつある。全国のベトナム研究者が協力して1994年度から続けている、ベトナム・ナムディン省の旧バッコック村総合調査に、桃木と各大学院生が連年参加しているほか、大阪市立大学と共同の、18世紀東南アジア史に関する資料の収集・調査プロジェクト(「不可視の時代の東南アジア」)、「東南アジア史学会関西例会」の運営など、関西地区の拠点校としての活動を続けてきた。

また、桃木が中心となり1993年に創設された海域アジア史研究会は、近年のアジア・日本海域史のブームの大半が、「日本史」「中華世界史」などの伝統的枠組みの中で自足しているのに対し、東南アジアという新しい世界に軸足を置き、しかもときには、内陸世界まで含めた広い世界の関係史や比較史を視野に入れることで、「大文明の周辺としての日本と東南アジアの比較研究」など、東南アジア海域史自身をも刷新する新しい視座を提供し続けている。この活動は、全国で注目され、関西以外の若手研究者が次々報告を希望している。これらの活動を基礎に、桃木は21世紀COEプログラムや、2004年度～2006年度の科研費(基盤研究(B))の代表などの形で、中世・近世のアジア諸地域・諸海域の関係史・比較史研究を進めている。さらに、東アジア諸語による研究成果が英語圏など海外で知られていない事態を克服するため、海外への発信にも近年は努力しつつあり、2004年10月に21世紀COEプログラムと国立シンガポール大学アジア研究所との共催でワークショップ Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast Asia を行ったほか、同年8月にアジア研究所で開催されたワークショップ New Scholarship on Champa の実行委員を務めた。これらの活動の中で桃木ほかのメンバーは、2004年度には英語で4件、ベトナム語で3件、2005年度に英語で1件(COE特任研究員によるものを含む)の研究発表を行った。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 森安 孝夫 教授

1948年生。1972年、東京大学文学部東洋史学科卒。1975年、東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻修士課程修了。1981年、東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻博士課程単位修得退学。1982年、金沢大学文学部助教授。1984年、大阪大学文学部助教授。1994年、大阪大学文学部教授。1998年、大阪大学大学院文学研究科教授。博士(文学、大阪大学)。専攻：東洋史学／中央ユーラシア史／敦煌学／トゥルファン学。

1-1. 論文

森安孝夫／遠藤和男／宅見有子／佐藤貴保「遼・西夏」礪波 護／岸本美緒／杉山正明(共編)『中国歴史研究入門』名古屋：名古屋大学出版会，pp. 158-171, pp. 408-411, 2006/1

森安孝夫「亀茲国金花王と碯砂に関するウイグル文書の発見」『三笠宮殿下米寿記念論集』東京：刀水書房，pp. 703-716, 2004/11

Takao MORIYASU From Silk, Cotton and Copper Coin to Silver. Transition of the Currency Used by the Uighurs during the Period from the 8th to the 14th Centuries. D. Durkin-Meisterernst / S. Raschmann / J. Wilkens / M. Yaldiz / P. Zieme (eds.), *Turfan Revisited -- the First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*, Berlin : Dietrich Reimer Verlag, pp. 228-239, 2004/5

1-2. 著書

Takao MORIYASU *Die Geschichte des uigurischen Manichäismus an der Seidenstrasse. --- Forschungen zu manichäischen Quellen und ihrem geschichtlichen Hintergrund ---*. Übersetzt von Christian Steineck, (Studies in Oriental Religions 50), Wiesbaden : Harrassowitz Verlag, xix + 292 p., 2004/12

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

森安孝夫「遊牧騎馬民族がつくった世界史」(2005年度懐徳堂春秋記念講座要旨)『懐徳』74, pp. 94-95, 2006/1

Takao MORIYASU Taxes and Labour Services in Pre-modern Central Asia. *Transactions of the International*

Conference of Eastern Studies 50, pp. 164-169, 2005/12

森安孝夫「前近代中央アジアにおける税役」『東方学会報』88, pp. 14-16, 2005/8

森安孝夫「中央アジア・シルクロードと中国史」『東洋史からアジア史へ——変わる世界史、広がるアジア——』(明治大学文学部特別企画シンポジウム報告), 明治大学文学部, pp. 3-6, 2005/3

森安孝夫「シルクロード「学」へのまなざし」NHK「新シルクロード」プロジェクト編『NHK スペシャル 新シルクロード 1 楼蘭・トルファン』日本放送出版協会, pp. 196-210, 2005/2

1-4. 口頭発表

森安孝夫「唐代の仏教的世界地理と「胡」の実態」International Conference 2005 “Life and Religion on the Silk Road”, organized by the Korean Association for Central Asian Studies, Seoul, 2005/11

森安孝夫「遊牧騎馬民族が作った世界史」2005年度懐徳堂春秋講座 [第109回]「世界史を書き直す——阪大史学の挑戦——」大阪大学中之島センター, 2005/5

森安孝夫「中央アジア・シルクロードと中国史」明治大学文学部特別企画シンポジウム：東洋史からアジア史へ——変わる世界史、広がるアジア——, 明治大学リパティ・タワー1階1012教室, 2004/10

森安孝夫「中央ユーラシアから見た世界史」全国高等学校世界史教員研修会, 大阪大学附属図書館, 2004/8

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

森安孝夫 大阪大学共通教育賞(第2回), 大阪大学, 2003/5

森安孝夫 コレージュ＝ド＝フランス招待教授記念メダル, コレージュ＝ド＝フランス, 2003/5

森安孝夫 東方学会賞(第7回), (財)東方学会, 1988/11

森安孝夫 流沙海西奨学会賞(第8回), 江上波夫記念流沙海西奨学会, 1975/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2005年度、基盤研究(A)(一般)、代表者：森安孝夫

課題番号：17202018

研究課題：シルクロード東部地域における貿易と文化交流の諸相

研究経費：2005年度直接経費 8,100千円

研究の目的：

本研究班は、モンゴル・チベットを含む中央アジア～中国北部(これを合わせてシルクロード東部地域と呼ぶ)から出土した文献や遺品の原物調査に加え、史跡・遺跡の現地調査によって、シルクロードによる人・物・情報の移動の実態と、それによって活性化された文化交流や社会変動の諸相を解明することを目的とする。前近代の世界史において大きな役割を果たしたシルクロード貿易について、従来、おおまかに見れば中国の絹織物が大量に西方にもたらされ、逆に西方の金銀器・珠玉・ガラス・琥珀・象牙・香料・薬品・絨毯などの奢侈品が中国に輸入されたこと、さらに言語・宗教・思想などの東西文化交流が促進されたことが判明している。とはいえ、これらは主に中央アジアの「外縁」に残された史料、即ち東の漢籍史料と西のイスラム史料によって引き出された概括的見方であり、その具体相になると実は多くは分かっていない。

近年、この研究を深化させうる遺跡や文物の発見・調査が相次いでいる。例えば、中国の陝西省や山西省で発見された墳墓からはソグド人を中心とする移住者集団の実態を示す図像や文字史料がもたらされており、シルクロード東部におけるソグド人のイメージを大きく修正する必要に迫られている。また、敦煌莫高窟では未調査であった北区の調査が進み、モンゴル時代にまで及ぶ新たな史料群が提示され、シルクロードの幹線としての河西回廊を研究するうえでの重要な糸口となっている。このような遺跡の現地調査の成果と出土文物から導き出された分析結果とを突き合わせるからこそ、新たな研究段階へと至る突破口となるのである。今回は限られた期間内で成果をあげるために、調査目標を陝西省～寧夏回族自治区～甘肅省北部(河西回廊)～新疆維吾爾自治区東部に限定し、出土文献の分析結果と、遺跡の景観・環境や出土した文物・図像資料とを比較・検討し、シルクロードを通じた東西交流の具体相に迫りたい。

明治以来の我が国の東洋学を支えた大きな柱の 1 つは中央アジア史学であった。これは紛れもない事実である。しかし 1980 年代以降、それまで手薄であったイスラム化以後の研究者が急増したのに対し、世界にその名を轟かせてきた仏教時代の中央アジア史研究者の層が薄くなってきた。仏教時代の中央アジアというのは、換言すればイスラム化以前ということであり、如実な例としては敦煌学・トゥルファン学の後継者を育てる大学院の講座が東大・京大から姿を消したことが指摘される。本研究の代表者である森安は、同僚であり共同研究者である荒川正晴と協力しながらも、阪大の枠を越えた研究者を組織して、斯学の再興をめざして微力を傾注しているが、本科研はその重要な一環である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 21 世紀 COE プログラム分担

1-8. 学会役員等の引き受け状況

東方学会『東方学』編集委員	2003 年 9 月～現在
同上・理事	2003 年 9 月～現在
東洋史研究会・評議員	2001 年 11 月～現在
内陸アジア史学会・常任理事	1994 年 11 月～現在
中央ユーラシア学研究会『内陸アジア言語の研究』編集長	1994 年 10 月～現在
日仏東洋学会・評議員	1991 年 3 月～現在
日本モンゴル学会・理事	1987 年 5 月～現在

2. 片山 剛 教授

1952 年生。1981 年東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。文学修士(東京大学)。1981 年高知大学人文学部講師、1984 年同助教授、1989 年大阪大学文学部助教授、1996 年同教授を経て、1998 年 4 月より現職。専攻：中国近世／近代史。

2-1. 論文

片山剛「中国史における明代珠江デルタ史の位置：“漢族”の登場とその歴史的刻印」『大阪大学大学院文学研究科紀要』46, pp. 37-64, 2006/3

片山剛「明代珠江デルタの宗族・族譜・戸籍：一宗族をめぐる言説と史実」井上徹・遠藤隆俊編『宋一明宗族の研究』汲古書院, pp. 459-486, 2005/3

2-2. 著書

片山剛編著『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』1, 大阪大学文学研究科片山剛研究室, 88p., 2006/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

片山剛「1930 年代の中国土地調査事業について：現存する広東省の土地調査冊の性格と作成経緯」京都大学人文科学研究所研究班「20 世紀中国の社会システム班」(於京都, 京都大学人文科学研究所東方部), 2005/12

片山剛「江蘇省における仏教寺院と位牌祭祀の現況について」共同研究「死と生の習俗をめぐる比較史研究」(於第一会議室), 2005/11

片山剛「中国史における明代華南史の位置：珠江デルタにおける“漢族”の登場とその歴史的刻印」第 19 回明清史夏合宿(兵庫県川辺郡猪名川町), 2005/8

片山剛「江蘇省常州市の寺院における位牌安置の現況」共同研究「死と生の習俗をめぐる比較史研究」(於文 12 番教室),

2004/10

片山剛「広府人誕生之謎及其社会烙印：里甲制的長存和宗譜的改編」(中国語)講演(於上海，復旦大学中国歴史地理研究所)，

2004/9

片山剛「広府人誕生之謎及其社会烙印：里甲制的長存和宗譜的改編」(中国語)《近代中国郷村社会権勢》国際シンポジウム(於広州，中山大学)，2004/7

片山剛「《死者祭祀空間の地域的構造：華南珠江デルタの過去と現在》補足および最近の研究動向」共同研究「死と生の習俗をめぐる比較史研究」(於待兼山会館)，2004/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2005年度～2008年度 基盤研究(A)(海外)、代表者：片山剛

課題番号：17251006

研究題目：1930年代広東省土地調査冊の整理・分析と活用

研究経費：2005年度 直接経費 6,800千円 間接経費 2,040千円

研究目的：

日本・欧米・中国における中国農村社会史研究の蓄積は豊富にある。ただし郷レベル以下に焦点を合わせて、個々の集落や一枚々々の農地の具体的配置を示して分析・解明したものは、管見では絶無である。その一因として、利用できる史料のなかに、集落や農地・水利施設など、農村を構成する諸要素の空間的編成を示す大縮尺地図がないことがある。

ところで、東アジアにおける近代的土地調査事業は、日本内地を嚆矢として、沖縄、植民地化された台湾・朝鮮半島と続き、1930年代に大きな波が国民党統治下の中国大陸に押し寄せる。そして中国でも、近代的な測量・製図技術の浸透に伴い、一枚々々の農地に関する情報やその具体的配置が記載された土地調査冊(地籍図や土地台帳)が作製されていった。だが、こうして作製された土地調査冊のうち、大量の現存を確認できるのは1930年代広東省のそれのみである。

本研究は、この広東省の土地調査冊を主要資料としながら、他省における同様の資料の探索・収集も進め、第一に、20世紀前半の中国における土地調査事業の特徴を考察し、第二に、これら資料の中から、データが比較的豊富かつ完備している郷を選定し、毎筆農地の図像・文字情報を収集・整理して、郷レベル以下における農村の空間的構成の復原図を作成し、第三に、この復原図を携えて中国農村で実地調査を行い、そこでの知見も加えて、20世紀前半の中国農村の郷レベル以下における“細密画”を、世界で初めて描き出すことを最終的な目標とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

史学会・評議員

2001年10月～現在

中国史学会・評議員

2001年4月～現在

3. 荒川 正晴 教授

1955年生。1986年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程中退。文学修士(早稲田大学)。早稲田大学非常勤講師、大阪大学文学部助教授を経て、2001年4月より現職。専攻：中央アジア古代史。

3-1. 論文

荒川正晴「唐代粟特商人与漢族商人」『粟特人在中国——歴史、考古、語言的新探索』(『法国漢学』10)，中華書局，pp. 101-109，2005/12

Arakawa M., Sogdian merchants and Chinese Han merchants during the Tang Dynasty , in: É. de la Vaissière and É. Trombert (eds.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris, pp. 231-242, 2005

荒川正晴「唐代前半の胡漢商人と帛練の流通」『唐代史研究』7, pp. 17-59, 2004/8

荒川正晴「道路、国家与商人」『読書』304, 北京, pp. 160-165, 2004/7

Arakawa M., Passports to the Other World : Transformations of Religious Beliefs among the Chinese in Turfan (Fourth to Eighth Centuries), in: D. Durkin-Meisterernst et al.(eds.), *Turfan Revisited -The First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road* ,Berlin, pp. 9-21+1pl, 2004

3-2. 著書

荒川正晴(編)『東トルキスタン出土「胡漢文書」の総合調査』2003年度～2005年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書, 2006/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

荒川正晴「オアシス王国ホータン点描」『NHK スペシャル 新シルクロード2 草原の道・タクラマカン』日本放送出版協会, pp. 208-223, 2005/4

荒川正晴「コートンの「木ぶり」と「根ばり」」『史滴』26, p. 1, 2004/12

3-4. 口頭発表

荒川正晴「トゥルファン漢人支配期(6-8c.)の税・役について」第50回国際東方学会議 Symposium II 「前近代中央アジアにおける税役」東方学会, 2005/5

荒川正晴「トゥルファン文書の世界——高昌国における税役の検討を中心にして——」龍谷大学文学研究科院生協議会主催学術講演会, 龍谷大学, 2004/11

Arakawa M., Sogdian Merchants and Chinese Han Merchants During the Tang Dynasty, *Les Sogdiens en Chine*, Beijing, 2004/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

荒川正晴 流沙海西奨学会賞, 流沙海西奨学会, 1986/12

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(B)(1)、代表者：荒川正晴

課題番号：15401021

研究題目：東トルキスタン出土「胡漢文書」の総合調査

研究経費：2004年度 直接経費 2,200千円

2005年度 直接経費 2,200千円

研究の目的：

東トルキスタン出土の「胡漢文書」が、これまで東洋史学や言語学・文献学などの研究に貴重な資料を提供してきたことは言うまでもない。それは、たとえ断片的な文書であっても、一次資料として既存の見解を大きく覆す可能性を秘めているからである。したがって、散発的に出土した断片的な文字資料であっても、それら資料に関する情報は、できる限り詳細に把握しておく必要がある。とりわけ、新中国成立以降において出土した文字資料の情報に関しては、トゥルファン以外の地域のはほとんど明らかになっていないのが現状であり、今後、集中的に調査をしてゆく必要がある。以上に述べた状況から、本研究は、新中国成立以降においてトゥルファン以外の東トルキスタン各地から出土した、古文書をはじめとする文字資料や文物、またそれらが出土した遺跡に関する情報を収集し公表することを大きな目的としている。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

内陸アジア史学会・監事

1994年4月～現在

4. 桃木 至朗 教授

1955年生。1984年、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。京都大学東南アジア研究センター助手、大阪外国語大学外国語学部専任講師、同助教授、大阪大学教養部助教授、同文学部助教授を経て2001年4月より現職。専攻：東南アジア史／アジア海域史。

4-1. 論文

桃木至朗 『詳説世界史』(山川出版社)の東南アジア史記述とそれに対するコメント・解説 早瀬晋三編『不可視の時代の東南アジア史・文献資料読解による脱構築』2003年度～2005年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書, pp. 88-129, 2006/3

桃木至朗 「ベトナム北部・北中部における港市の位置」歴史学研究会編『港町の世界史 1 港町と海域世界』青木書店, pp. 179-205, 2005/12

桃木至朗 「ベトナム王朝国家における「国土」「歴史」「伝統」」『歴史評論』659, pp. 19-33, 2005/3

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

桃木至朗 「『東南アジア史』の危機と新しい挑戦」『世界史のしおり』帝国書院, pp. 1-4, 2004/4

4-4. 口頭発表

桃木至朗 「大越陳朝碑文研究序説」東洋史研究会大会, 京大会館, 2005/11

Momoki Shiro, Viet Nam hoc o Nhat Ban, qua khu, hien tai va tương lai, 1st Vietnamese-Japanese Students' Scientific Exchange Meeting, Osaka University, 2004/11

Yamauchi Shinji, Momoki Shiro, The Relationship between Maritime Merchants and Politics in Northeast and Southeast Asian Seas from the 10th to the 15th Centuries, Workshop on Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast Asia (The 21st Century COE Program <Interface Humanities>, Osaka University, and The Asia Research Institute, National University of Singapore), Naha, 2004/10

Momoki Shiro, Mandala Champa Seen from Chinese Documents, Workshop: New Scholarship on Champa (Asia Research Institute, National University of Singapore), 2004/8

Momoki, Shiro, Su bien doi xa hoi Dai Viet the ky XIV qua van khac, khao sat truong hop vung Ha Tay, The Second International Conference on Vietnamese Studies, Ho Chi Minh City, 2004/7

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(B)、代表者：桃木至朗

課題番号：16320080

研究題目：近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク

研究経費：2004年度 4,800千円

2005年度 3,600千円

研究の目的：

ユーラシア諸地域の中・近世における「世界の一体化」に向かう動きの比較研究

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 2004年9月～2005年8月、研究助成金、助成金獲得者：桃木至朗

助成金名：サントリー文化財団特別助成

研究題目：東・東南アジアにおける「近世」と「近代」の連続と断絶に関する理論的研究

助成団体名：サントリー文化財団

助成金額：1,900千円

4-7-2. 2004年度～2006年度、21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」

「世界システムと海域アジア交通」班代表

助成金額：2004年度 3,800千円

2005年度 3,861千円

4-8. 学会役員等の引き受け状況

東南アジア史学会・理事

2005年4月～現在

史学研究会・評議員

2000年6月～現在

5. 青木 敦 助教授

1964年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。東京大学東洋文化研究所助手、岡山大学文学部助教授等を経て2001年10月より現職。専攻：10-14世紀江南社会経済史。

5-1. 論文

青木敦「宋元代江西撫州におけるある一族の生存戦略」『宋—明宗族の研究』汲古書院, pp. 95-122, 2005/3

5-2. 著書

青木敦『宋代判語に見る民事的立法と地価変動』(Working and Discussion Paper Series 1.), 宋朝政区研究事務局, 2006/2

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

青木敦「台湾調査」(前半)『学生のためのフィールドワーク入門』(アジア農村研究会編), めこん, pp. 165-177, 2005/10

青木敦「宋代の南海交易」『東方学会報』88, pp. 19-22, 2005/8

Aoki, Atsushi, "Trading in the Southern Sea of the Sung Dynasty". *Transactions of the International Congress of Eastern Studies*, 41, 2005/8

青木敦「法令・政事・雑制」『宋代の経済政策及び関連する諸政策の総合的研究』2002年度～2004年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書, pp. 81-88, 2005/3

青木敦「柳田節子著『宋代庶民の女たち』」『社会経済史学』70-4, pp. 491-493, 2004/11

青木敦「三浦徹・岸本美緒・関本照夫 編『比較史のアジア——所有・契約・市場・公正』」『史学雑誌』113-9, pp. 123-124, 2004/9

5-4. 口頭発表

青木敦「在二十一世紀日本の宋代史研究」中央研究院歴史語言研究所, 2006/3

青木敦「行政としての裁判——宋代判語に見る民事的法律と土地典賣」研究会「中國史料の世界」2006/1

青木敦『『清明集』戸婚門に見える民事的法条の再検討』第4回唐宋変革プロジェクト, 2005/12

青木敦「南宋の裁判事例における“二十年の法”について」特定領域<東アジア海域交流>第4回講演会シンポジウム, 2005/11

Aoki, Atsushi, "Trading in the Southern Sea of the Sung Dynasty". *Transactions of the International Conference of Eastern Studies*, 41, 2005/10

Aoki, Atsushi, "Local Elites in Medieval China" 大阪大学グローバルヒストリー・セミナー, 2005/9

Aoki, Atsushi, "The Boundaries of the Chinese Empire: Bandits, Barbarians, and Enemies" The 18th International Association of Historians of Asia(Chairperson, 台湾中央研究院), 2004/12

Aoki, Atsushi, "Eminent Judges in Frontier: Kiangnan in the Thirteenth Century"(Chairperson) The 18th International Association of Historians of Asia(台湾中央研究院), 2004/12

青木敦「宋代江西の法文化と契約」旧魏書研究会, 2004/8

青木敦「土地人口比率と長江流域社会」シンポジウム「長江流域史の可能性」中央大学後楽園キャンパス, 2004/8

青木敦「「地狭人稠」の表象——長江中下流域の土地稀少化と勸農文」第73回社会経済史学会全国大会共通論題報告「土地稀少化と勤勉革命の比較史——経済史上の近世——」2004/5

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(C)、代表者：青木敦

課題番号：16520416

研究題目：江西～湖南を中心とした宋朝「政区」の境界に関する研究

研究経費：2004年度 約1,500千円

2005年度 約1,100千円

研究の目的：

宋代「政区」の概念を、政治力の地理的範囲のみならず、その法的・文化的規範が効力を持ち得た地理的・社会的範囲という概念にまで拡張する。具体的には、治安維持や、法制・科挙による文化的統合、裁判における儒教的倫理観の貫徹といった政治上・文化上の「政区」の境界を、江西～湖南、すなわち長江中流域フロンティアを中心に明らかにする。特に、非漢族が裁判において頻繁に登場する地域的範囲はどこまでか、王朝的な儒教的原理が紛争処理（家産分割など）において通用する人々は、如何なる社会層に属したか、を更に広く文集・地方志史料をも網羅して明らかにする。さらに『宋会要』職官「黜降官」史料を用い、地方官弾劾の内容分析を地域別に行い、南宋において各地方が抱えていた統治上の問題点を数量的な手法で処理し、この時期において王朝の政治力の限界線がどこにあったかを、主に江西湖南付近の開墾地帯において明らかにする。

5-6-2. 2005年度～2009年度、特定領域研究、代表者：青木敦

課題番号：17083013

研究題目：中国の法文化の特質、変化、および地域的差異に関する研究

研究経費：2005年度 約1,100千円

研究の目的：

本研究は、領域研究全体の中で常に問題となってくる地域区分、例えば都市・地域・国家などの名称を冠する区分が、それぞれのどのような特質を持つかということ、法文化に即して具体的に解明することを目的とする。「法文化」とは、

近年、法人類学において注目を集めている概念で、社会学的な「法秩序」とは異なり、エスニック・文化ギャップを歴史的に考える際、より有効である。これを宋代中国、中世日本、清代台湾など、開発～定常段階の社会において検討する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

宋代史研究会・研究報告研究委員

2001年9月～2007年3月

6. 山内 晋次 助手

1961年生。1985年、大阪大学文学部卒。1988年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。1993年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。2005年、大阪大学大学院文学研究科(世界史講座・東洋史学)助手。博士(文学、大阪大学)。専攻：前近代アジア海域史／日本古代史。

6-1. 論文

Shinji Yamauchi / Shiro Momoki, The Relationship between Maritime Merchants and Politics in Northeast and Southeast Asian Seas from the 10th to the 15th Centuries, *Workshop on Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast Asia*, The 21st Century COE Program <Interface Humanities>, Osaka University, pp. 12-25, 2005/2

山内晋次「10-13世紀の東アジアにおける海域交流」『唐代史研究』(唐代史研究会), 7, pp. 101-115, 2004/8

6-2. 著書

山内晋次, 神野清一・梅村喬編『改訂日本古代史新講』梓出版社, 2004/4

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

山内晋次「モノと図像が語る琉球史 39/40 冊封琉球使と航海安全の祈り(上)・(下)」『沖縄タイムス』沖縄タイムス社, 2005/1/17-24

6-4. 口頭発表

山内晋次「海域アジア史からみた日宋貿易時代の福岡」福岡市中央市民センター・まちづくりセミナー第2弾, 福岡市中央市民センター, 2006/1

山内晋次「東アジア海上交易史をめぐる日本側の史資料」科研特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生——」文献資料研究部門・第二回研究集会, 大阪市立大学, 2005/12

Shinji Yamauchi / Shiro Momoki, The Relationship between Maritime Merchants and Politics in Northeast and Southeast Asian Seas from the 10th to the 15th Centuries, *Workshop on Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast Asia*, The Asia Research Institute, National University of Singapore / The 21st Century COE Program <Interface Humanities>, Osaka University, 2004/10

山内晋次「古代・中世の日本列島と海域世界」大阪大学 21世紀 COE プログラム・第2回全国高等学校歴史教員研修会, 2004/8

山内晋次「前近代東アジア海域史の諸相」洛北史学会第6回大会, 2004/6

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 学会役員等の引き受け状況

続日本紀研究会『続日本紀研究』編集委員

1994年8月～現在

2-9 西洋史学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

一般に西洋史学の教育・研究活動においては、ある種の慣行として、古代オリエント、古代地中海世界、中世のヨーロッパ世界、近世以降のヨーロッパ、ロシア、南北アメリカ、オセアニアといった対象領域が想定されている。しかし私たちの専門分野では、こうした地理的枠を限定的なものとしてはとらえていない。歴史研究の枠組みとして真に成り立ちうるのは世界史であって、西洋史学は世界史を西洋文明のインパクトとレスポンスという相互作用から考察することに他ならないと考えるからである。

もちろん西洋史学研究は個別具体的問題の考察から始まるのであり、そこにおける中心的主張は史料分析に基礎を置くものでなければならない。時代や地域によっては史料講読だけですでに多様な語学力が必要とされる。さらにその解釈に当たっては、通史的知識はもとより、人文・社会諸科学の成果を使いこなすだけの知的容量が要求される。しかし、こうして得られた個別の知見は、さらに関係史的、比較史的な考察を通じ世界史の中で意味づけされねばならない。このことは学生にも教員にも等しく要請される課題である。

学生には、一方で個人における強い自覚と自己研鑽を伴った個別テーマへの取り組みが、他方で演習や研究会において他のテーマを研究する教員・学生と活発に議論することが求められる。指導教員による個別指導はこうした自主的努力を補うものと位置づけられている。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 4 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：江川 温、竹中 亨、秋田 茂、藤川 隆男

助教授：栗原 麻子

助手：戸渡 文子

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
46	9	12	0	0	0	4	0	2

※うち留学生 0 名、社会人学生 6 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	11	6	5	0	0
'05	11	3	2	1	0
小計	22	9	7	1	0

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	1	0	1
'05	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

堀内真由美「イギリス女子教育のフェミニズムと植民地の意味」2005/3

主査：藤川隆男 副査：竹中亨、秋田茂

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	3	3	1	0	4	11
'05	4	2	2	0	2	10
計	7	5	3	0	6	21

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	6	9	1	1	17
'05	0	6	2	0	1	9
計	0	12	11	1	2	26

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004 年度】

- 北原靖明「ヒル・ステーション——インド植民地における英国人の特異な空間」川北稔, 藤川隆男 編『空間のイギリス史』(山川出版社), pp. 252-265, 2005/2
- 北原靖明『インドから見た大英帝国——キプリングを手がかりに』(昭和堂), 2004/4(著書, 総頁数 305 頁)
- 紫垣聡「中世後期ミュンヘンにおける都市自治と都市統治」『待兼山論叢(史学編)』38, pp. 27-51, 2004/9
- 津田博司「オーストラリアにおけるアンザック神話の形成——C. E. W. ビーン(一八七九—一九六八)とイギリス帝国——」『西洋史学』(日本西洋史学会), 220, pp. 22-42, 2005/3
- 戸渡文子「聖域の男たち 一九世紀国教会の専門職化とジェンダー」藤川隆男編『空間のイギリス史』刀水書房, pp. 90-103, 2005/1
- 平山篤子「フィリピナス総督府創設期の対外関係(II)——イスパニア・カトリック王国の対明観——」『帝塚山学術論集』11, pp. 53-91, 2004/12
- 松田祐子「ベル・エポックのフランスにおけるフェミニズム」『パブリック・ヒストリー 特集 社会人女性大学院生』(大阪大学西洋史研究室), 2, pp. 90-94, 2005/2
- 松田祐子「パリにおける『住み込み乳母』(1865-1914)」『国立女性教育会館研究紀要』8, pp. 51-60, 2004/8
- 宮崎章「「コモンウェルス」から「福祉国家」へ——空間のイギリス社会主義史——」川北稔, 藤川隆男編『空間のイギリス史』山川出版社, pp. 266-278, 2005/2
- 頼順子「中世後期の戦士の領主階級と狩猟術の書」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史研究室), 2, pp. 127-148, 2005/2
- 鷺田睦朗「ローマ史研究におけるブランド論の射程」『古代史年報』(属州研究会), 3, pp. 32-38, 2005/3

【2005 年度】

- 北原靖明「ナイポールの「歴史的時間」と「非歴史的時間」」『二十世紀研究』6(京都大学文学部, 二十世紀研究編集委員会), pp. 77-96, 2005/12/24
- 北原靖明「キプリングの帝国 現実と夢の境界」橋本慎矩, 桑野佳明編著『キプリング 大英帝国の肖像』彩流社, pp. 1-30, 2005/4/15
- 津田博司「死者たちの白人性——オーストラリアにおける戦争の記憶と「国民」の境界——」藤川隆男編『白人とは何か? ——ホワイトネス・スタディーズ入門——』刀水書房, pp. 233-243, 2005/10
- 中村武司『『イギリスのパンテオン』の創出と偉人顕彰——19 世紀前半のセント・ポール大聖堂とその公開性』『待兼山論叢(史学編)』(大阪大学文学部), 39, pp. 31-55, 2006/1
- 松田祐子「19 世紀末から 20 世紀初頭のフランスにおける新聞・雑誌が描く女性像」『女性空間』(日仏女性資料センター), 22, pp. 33-44, 2005/6
- 水田大紀「19 世紀後半イギリスにおける公開競争試験と「精神力」——人事委員会と試験官が考える官僚の「資質」について——」『パブリックヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 3, pp. 50-61, 2006/2
- 水田大紀「19 世紀後半イギリスにおける官僚制度改革とクラミング——自助による「競争精神」の浸透——」『西洋史学』(本西洋史学会), 219, pp. 17-37, 2005/12
- 森本慶太「新生期スイスの連邦論——I・P・V・トロクスラーを中心に——」『史泉』(関西大学史学・地理学会), 103, pp. 17-31, 2006/1
- 鷺田睦朗「サルススティウスによる audax、audacia の用法」『古代学年報』(属州研究会), 4, pp. 25-29, 2006/3
- 鷺田睦朗「偽り隠す者、サルススティウス——『カティリーナの陰謀』の執筆理由——」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史研究室), 3, pp. 77-87, 2006/2

(2)口頭発表

【2004年度】

- 木谷名都子「1930年代前半におけるイギリス綿業界の動向と対日通商関係——対英特惠関税問題とインド棉花問題をめぐって——」イギリス都市生活史研究会3月例会 京都大学, 2005/3/20
- 木谷名都子「対インド経済政策をめぐるランカシャー綿業利害と日本の存在——1933年英印民間会商とリース・モーディー協定をめぐる——」2004年度日本西洋史学会第54回大会, 東北学院大学, 2004/5/22(『日本西洋史学会第54回大会 シンポジウム報告要旨・部会別自由論題報告要旨・ミニシンポジウム報告要旨』p. 67)
- 紫垣聡「中世末バイエルンにおけるポリツァイ立法と都市」九州西洋史学会2004年度春季大会, 九州大学, 2005/3/26
- 竹中徹「シスマ初期のフランスにおける王権思想——『老いたる巡礼者の夢』を中心として——」2004年度日本西洋史学会第54回大会, 東北学院大学, 2004/5/22
- 津田博司「オーストラリアにおけるアンザック神話の形成——イギリス帝国、植民地ナショナリズム、世界大戦の記憶——」上方研(大阪大学イギリス史研究会), 大阪大学, 2005/3/19
- 平山篤子「16・17世紀明宣教を巡る議論と現代——アコスタ、ヴァリニャーノ、サンチェス神父の議論を中心に——」キリシタン文化研究会2004年度大会, 上智大学, 2004/12/5
- 平山篤子「フィリピン総督府、創設期(1565-c.1640)における対明関係——スペイン・カトリック王国の対明観——」東京外国語大学21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」東京外国語大学, 2004/7/22
- 平山篤子「フィリピン総督府創設期の対チナ観と対チナ関係」海域アジア史研究会, 大阪大学, 2004/4/24
- 松尾佳代子「カルチュレール編纂にみる11・12世紀の文書使用——サン・シプリアン修道院の場合——」2004年度広島史学会大会, 広島大学, 2004/10/31
- 松田祐子「パリにおける『住み込み乳母』(1865-1914)」日仏女性資料センター(日仏女性研究学会), 第23回定期総会記念講演会, 日仏会館, 2005/3/12
- 松田祐子「パリにおける『住み込み乳母』(1865-1914)」2004年度 男女共同参画のための女性学・ジェンダー研究・交流フォーラム, 入選論文報告会, 国立女性教育会館, 2004/8/27(『国立女性教育会館研究紀要 第8号入選論文報告会+論文の書き方講座』pp. 9-12)
- 水田大紀「19世紀後半イギリスにおける公開競争試験と「精神力」——委員会・試験官にとっての官僚の資質——」近代英国史研究会2月例会, 近代英国史研究会, 京都大学/京都府京都市, 2005/2/19
- 水田大紀「受験とクラミング——19世紀イギリスにおける官僚への「競争精神」の浸透——」イギリス都市生活史研究会7月例会, イギリス都市生活史研究会, 京都大学/京都府, 2004/7/24
- 水田大紀「受験とクラミング——19世紀イギリスにおける官僚への「競争精神」の浸透——」西洋近現代史研究会6月例会, 西洋近現代史研究会, 青山学院大学/東京都渋谷区, 2004/6/26
- 水田大紀「受験とクラミング——19世紀イギリスにおける官僚への「競争精神」の浸透——」第9回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学, 2004/6/19(『パブリック・ヒストリー』2, p. 158)
- 頼順子「中世後期の戦士の領主階級における狩猟と狩猟術の書」2004年度ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学, 2004/6/19(『パブリック・ヒストリー』2, pp. 158-159)
- 鷺田睦朗「ローマ期イタリアにおけるワイン産地ブランドの誕生」属州研究会, 同志社大学, 2004/6/13

【2005年度】

- 竹中徹「最もキリスト教的な王——14世紀フランスの王権思想」九州西洋史学会2005年度春季大会, 九州大学, 2006/3/18
- 津田博司「オーストラリア史はどこに向かうか?——「知」のグローバリゼーションと歴史学——」オーストラリア学会第1回関西地域研究会, 追手門学院大学, 2005/11/26
- 津田博司「創られる戦争の記憶——オーストラリアのナショナリズムと世界大戦——」2005年度オーストラリア学会全国研大会, 同志社大学, 2005/6/12
- 津田博司「オーストラリアにおけるアンザック神話の形成——C. E. W. ビーンによる戦史編纂を中心に——」第10回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学/大阪府豊中市, 2005/6/4

戸渡文子「マスキュリニティ、フェミニズム、老人——19世紀イギリスの宗教領域」日本西洋史学会、神戸大学／兵庫県神戸市、2005/5/15

中村武司「イギリスのパンテオンの創出と受容——19世紀前半のセント・ポール大聖堂」大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座共同研究・死と生の習俗をめぐる比較史研究会、大阪大学／大阪府豊中市、2005/7/9

中村武司「18世紀末イギリス政治文化と海軍提督——ウェストミンスター選挙区の事例を中心として」日本西洋史学会第55回大会・近世史部会、神戸大学／兵庫県神戸市、2005/5/15

松田祐子「ベル・エポックのパリにおけるブルジョワ女性」上智大学外国学部フランス語学科、上智大学、2005/10/25

森本慶太「新生期スイスの連邦論——I・P・V・トロクスラーを中心に——」2005年度広島史学研究会大会西洋史部会、広島大学東広島キャンパス、2005/10/30

(3)その他(書評・翻訳など)

【2004年度】

中尾恭三「〈書評〉周藤芳幸・澤田典子著『ギリシア遺跡事典』」『パブリックヒストリー』2, p. 156, 2005/2

中村武司「〈翻訳〉ヴァルター・デーメル著「近世ヨーロッパにおける日本人と中国人のイメージ:身体的特徴・習俗・技術——極東文化へのさまざまなアプローチの比較」『パブリックヒストリー』2, pp. 38-59, 2005/2

水田大紀「〈翻訳〉ジョン・ブルーア著「マイクロヒストリーと日常生活の歴史」『パブリックヒストリー』2, pp. 19-37, 2005/2

【2005年度】

中村武司「〈事典項目執筆〉「対仏大同盟」, 「ギリシア独立戦争」猪口孝, 田中明彦他編『国際政治事典』弘文堂, 2005/12

松田祐子「〈事典項目執筆〉「主婦」, 「性的分業」, 『歴史学事典』第13巻(弘文堂)「所有と生産」の項目, 2006/2

水田大紀「〈書評〉C. A. Bayly, *The Birth of Modern World, 1780-1914: Global Connections and Comparisons*」『西洋史学』(日本西洋史学会), 218, pp. 71-73, 2005/9

森本慶太「〈書評〉森田安一編『スイスと日本——日本におけるスイス受容の諸相——』」『西洋史学』220, 日本西洋史学会, pp. 82-84, 2006/3

森本慶太「〈新刊紹介〉森田安一編『日本とスイスの交流 幕末から明治へ』」『パブリック・ヒストリー』3, 大阪大学西洋史学会, pp. 94-95, 2006/2

森本慶太「〈新刊紹介〉ポール・ギショネ著(内田日出海, 尾崎麻弥子訳)『フランス・スイス国境の政治経済史——越境、中立、フリー・ゾーン——』」『西洋史学』(日本西洋史学会), 219, p. 89, 2005/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2004年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計1名)

2005年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004年度 学部: 0名 大学院: 3名 (計3名)

2005年度 学部: 0名 大学院: 5名 (計5名)

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度～2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004 年度～2005 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 5 名

2004 年度：4 名 2005 年度：1 名

<内訳> ジャーナリスト 3 名 教師 1 名 アーティスト・インストラクター 1 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2004 年度 『西洋史学』 213 号～216 号 学術雑誌(学会誌)

2005 年度 『西洋史学』 217 号～220 号 学術雑誌(学会誌)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

グローバル・ヒストリー・セミナー(経済学研究科と共催)	2004 年度～現在
日本西洋史学会『西洋史学』編集部	2004 年度～現在
大阪イギリス史研究会	2004 年度～現在
イギリス都市生活史研究会	2004 年度～現在
イギリス帝国史研究会	2004 年度～現在
大阪大学西洋史学会	2004 年度～現在
ジョン・ビントリフ教授(ライデン大学)講演会 ‘The Archaeology of Byzantine Civilisation, from the C4th AD to 1453 AD’	2005 年 1 月 15 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

大学院生に対しては、学内での教育・研究を支援するだけでなく、海外留学を奨励し、毎年 3 名～5 名が常時留学している状況にある。これらの学生に対する財政的な支援は今後の課題の一つであろう。西洋史専門分野は、社会人学生や他大学の学生の受け入れにも熱心であるが、スタッフの不足は深刻である。さらに、IT 教育の充実と研究への利用を重要な目標とし、データベースの作成とウェブ上での公開を教育・研究活動の一部としている。過去 2 年間、100 万字を超えるデータを西洋史ホームページ上で検索可能にしておき、西洋史研究室ウェブサイトの大幅な改良も行った。

12-2. 研究活動

西洋史研究室は、雑誌『西洋史学』や『パブリック・ヒストリー』の編集やワークショップ西洋史・大阪、大阪イギリス史研究会を恒常的に主催するだけでなく、イギリス都市生活史研究会、イギリス帝国史研究会、近世イギリス史研究会、「世界システムと海域アジア交通」研究会(阪大 COE)、世界における「白人」の構造化研究会(民博)、「グローバルヒストリー・セミナー、ワークショップ」(阪大、サントリー文化財団の後援)などの事務局や代表者を提供することで、西洋史学や他分野との共同研究の結節点としての役割を果たしてきた。共同研究機関のごとき役割を果たせるのは、スタッフの高い能力と、外部の研究者の高い評価を示唆している。また、日本西洋史学会の代表者や編集委員、日本歴史学協会や史学会、史学研究会、日仏歴史学会の役員を提供し、西洋史学界を支えてきた。

西洋史研究室のスタッフは、個人として個別研究に注力するのだけではなく、世界史・各国史、歴史事典類の編集、執筆など、学界の共有財産の形成や基礎的研究の充実のための作業にも積極的に参加している。それぞれ個人を見ると、江川は中世フランスを中心に王権論、貴族の社会関係、キリスト教と民衆文化に関する研究でユニークな視点を提供し、竹中は日独関係の研究を文化移転論など他領域に拡大する一方、国際的な場で成果を発表している。また、西洋史学会で西洋史研究のあり方に問題提起をしたのは記憶に新しい。秋田はアジア国際秩序を中心に、新たな関係史的な視点からグローバルヒストリーの構築をめざしている。外国人研究者を招いた国際セミナー(ワークショップ)を実施するとともに、Association of Asian Studies (AAS) や Global Economic History Network (GEHN)の研究ワークショップ、国際歴史学会等で研究成果を発表している。藤川はオーストラリア史、イギリス史、白人研究のそれぞれに関する本を編集し、広範な領域で活動している。栗原は、社会史の立場から古代民主制の見直しを進めている。水野は環境史という multi-disciplinary な分野に関心を持ち、関西で環境史研究会を立ち上げるなどしている。これらの研究活動は、各種の科学研究費だけではなく、松下国際財団・サントリー文化財団などの支援などのかたちで社会的評価を受けている。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004 年度～2005 年度の過去 2 年間)

1. 江川 温 教授

1950 年生。1979 年、京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)中退。文学修士(京都大学、1977 年)。大阪大学助手、同講師、同助教授を経て 1996 年、教授。2004 年 4 月より、放送大学客員教授。専攻：西欧中世史。

1-1. 論文

Atsushi Egawa, Tombeaux et monuments de mémoire des souverains en France et au Japon, 『大阪大学大学院文学研究科紀要』46, pp. 1-22, 2006/3

江川温「貴族とは何か——西ヨーロッパ中世の場合——」笠谷和比古編『国際シンポジウム 公家と武家の比較文明史』思文閣出版, pp. 283-293, 2005/8

江川温「君主の墓——日本とフランス」『日本、もうひとつの顔 大阪大学フォーラム 2004』阪大フォーラム 2004 実行委員会, pp. 87-99, 2005/2

1-2. 著書

江川温編著『ヨーロッパの歴史』放送大学教育振興会, 2005/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

江川温訳、イヴ・サシエ著「9-12 世紀フランスにおける王権、権門、助言による統治」笠谷和比古編『国際シンポジウム 公家と武家の比較文明史』思文閣出版, pp. 297-315, 2005/8

江川温(事典項目執筆)「領邦」「封建王政」「親王領」「騎士道」尾形勇、樺山紘一、川北稔、加藤友康、岸本美緒、黒田日出男、佐藤次高、南塚信吾、山本博文編『歴史学事典(王と国家)』12, 2005/3

1-4. 口頭発表

江川温「Le tombeau royal et impérial en France et au Japon」, 大阪大学フォーラム 2004, マルク・ブロック大学(ストラスブール), 2004/11/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2004 年度～2006 年度、基盤研究(A)、代表者：江川温

課題番号：16202012

研究題目：死者の葬送と記念に関する比較文明史——親族・近隣社会・国家——

研究経費：2004年度 11,300千円

2005年度 7,500千円

研究の目的：

東アジア文化圏と西ヨーロッパ文化圏に属する諸地域について、葬送と死者記念の儀礼を比較史的に考察すること。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

史学会・評議員	2005年11月～現在
史学研究会・評議員	2004年4月～現在
日仏歴史学会・理事	2003年4月～現在
日本西洋史学会・編集委員	1979年4月～現在

2. 竹中 亨 教授

1955年生。1983年、京都大学大学院文学研究科博士課程退学。文学博士(京都大学、1994年)。東海大学講師、同助教授、大阪大学教養部助教授を経て、1995年より現職。専攻：近代ドイツ史。

2-1. 論文

竹中亨「ジャポニズムから世紀末の憂鬱へ——19世紀末のオーストリアにおける日本観」『パブリック・ヒストリー』3, pp. 1-18, 2006/2

TAKENAKA, Toru, Foreign Sound as Compensation: Social and Cultural Factors in the Reception of Western Music in Meiji Japan (1867-1912), in Susan Ingram et al. (eds.), *Floodgates: Technologies, Cultural Ex/CHANGE and the Persistence of Place*, Frankfurt a.M.: Peter Lang, pp. 185-202, 2006/1

竹中亨「市場化・グローバル化と新宗教——19世紀ドイツにおける近代」『村田学術振興財団年報』19, pp. 58-65, 2005/12

TAKENAKA, Toru, Wagner-Boom in Meiji-Japan, in *Archiv für Musikwissenschaft* 62-1, pp. 13-31, 2005/1

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

竹中亨(書評)『保守革命とナチズム——E・J・ユングの思想とワイマル末期の政治』小野清美著『西洋史学』218, pp. 80-81, 2005/9

竹中亨「大陸国家」他『歴史学事典第12巻 王と国家』弘文堂, 2005/2

竹中亨(書評)『ドイツ社会民主党と地方の論理——バイエルン社会民主党 1890～1906』鍋谷郁太郎著『歴史学研究』795, pp. 70-72, 2004/11

2-4. 口頭発表

竹中亨「藤原辰史、足立芳宏両氏へのコメント」ドイツ現代史研究会 2006年度1月例会, 2006/1

TAKENAKA, Toru, Die Rezeption Richard Wagners in Japan, グラーツ大学音楽学研究所特別講演, 2005/1

TAKENAKA, Toru, Fremde Klänge als Kompensation. Soziokulturelle Aspekte in der Rezeption westlicher Musik in

Meiji-Japan, フライブルク大学音楽学研究所特別講演, 2004/10

TAKENAKA, Toru, Alien Sound as Compensation: Social Factors in the Reception of Western Music in Meiji Japan, グローニンゲン大学日本学研究所特別セミナー, 2004/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

TAKENAKA, Toru, ANNUAL REPORT OF OSAKA UNIVERSITY ON ACADEMIC ACHIEVEMENT, 2004-2005, 2005/11

竹中亨 大阪大学共通教育賞(2005年度第1学期), 大阪大学, 2005/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2004年度、日本学術振興会特定国派遣事業オーストリア、代表者：竹中亨、研究分担者：なし

研究題目：「ドイツ語圏から明治日本への文化移転としてのクラシック音楽」

助成金額：約1,800千円

2-8. 学会役員等の引き受け状況

『西洋史学』編集委員

1993年4月～現在

3. 秋田 茂 教授

1958年生。1985年、広島大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、大阪大学、2003年)。大阪外国語大学外国語学部助手、同講師、同助教授を経て、2003年10月より現職。専攻：イギリス帝国史、アジア国際関係史、グローバルヒストリー。

3-1. 論文

Shigeru Akita, "Recent Japanese Historiography on British Imperial and Commonwealth History", *The Korean Journal of British Studies*, Vol. 14, pp. 427-444, 2005/12

秋田茂「イギリス帝国史研究と地域史の対話」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 179-180 合併号, pp. 21-27, 2005/5

秋田茂「イギリス帝国と国際秩序」『歴史学研究・増刊号』(歴史学研究会編), 794, pp. 6-15, 2004/10

3-2. 著書

秋田茂編『イギリス帝国と20世紀 1 パクス・ブリタニカとイギリス帝国』ミネルヴァ書房, 2004/5

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

秋田茂(学界展望)「2004年の歴史学界——回顧と展望——ヨーロッパ・現代・一般」『史学雑誌』114・5, pp. 370-373, 2005/5

秋田茂(書評)「ウィリアム・G・ウッドラフ著(原剛, 菊池紘一, 松本康正, 南部宣行, 篠永宣孝訳)『概説現代世界の歴史——1500年から現代まで——』」『社会経済史学』70-1, pp. 125-127, 2004/5

3-4. 口頭発表

秋田茂「1950年代の東アジア国際経済秩序とスターリング圏」2005年度『比較の中の東南アジア研究』第8回会合, 京都大学東南アジア研究所, 2006/3/22

秋田茂「1930年代のイギリス非公式帝国と東アジア世界」2005年度東北学院大学ヨーロッパ文化研究所シンポジウム(社会経済史学会東北部会共催)「アジア世界における大英帝国と大日本帝国」東北学院大学, 2005/12/17

秋田茂「大英帝国と近代アジア・日本」第110回懷徳堂秋季講座「世界のなかの日本——阪大史学の挑戦2」大阪大学中ノ島センター, 2005/10/28

Shigeru Akita, “The Formation of Global History and Asia”, Osaka University-Groningen University Symposium, at Groningen, The Netherlands, 24-26, 2005/10

Shigeru Akita, “The British Empire as the ‘Imperial Structural Power’ and the Asian International Order”, The 7th GEHN (Global Economic History Network) Workshop on Imperialism, at Istanbul, Turkey, 11-12, 2005/9

秋田茂「世界システムから見た20世紀史の全体像」第3回全国高等学校歴史教員研修会「新しい歴史学と歴史教育」(大阪大学21世紀COE「インターフェイスの人文学」), 大阪大学, 2005/8/9

Shigeru Akita, “The British Empire and International Order of Asia, 1930s-1950s”, 20th International Congress of Historical Sciences, at Sydney, 3-9, 2005/7

秋田茂「アジアからのグローバルヒストリーの構築をめざして」中国上海・華東師範大学特別講座, 2005/3/16

秋田茂「1930-50年代のアジア国際経済秩序とイギリス帝国」中国上海・華東師範大学特別講座, 2005/3/14

Shigeru Akita, “Comments to Session I: American Empire in World History”, ReAS’s 4th International Symposium in Tokyo: “American Empire, Past and Present”, at Tokyo Green Palace, Tokyo, 2005/3/12

秋田茂「戦間期のイギリス帝国とアジア世界」大学講座「帝国の興亡VII:イギリス帝国」伊丹市教育委員会, 2005/1/29

秋田茂「『パクス・ブリタニカ』とイギリス帝国」大学講座「帝国の興亡VII:イギリス帝国」伊丹市教育委員会, 2005/1/22

秋田茂「1950年代の東アジア経済秩序とスターリング圏」東北学院大学渡辺科学研究会(東京大学), 2004/12/25

秋田茂「グローバルヒストリー研究の現状」市民社会のグローバルヒストリー研究会, 大阪大学中ノ島センター, 2004/12/23

秋田茂「グローバルヒストリーの構築とアジア世界」大阪大学大学院文学研究科教員研究フォーラム, 2004/11/18

秋田茂「世界システム・アジア交易圏と近代日本」第2回全国高等学校歴史教員研修会(大阪大学21世紀COE「インターフェイスの人文学」), 大阪大学, 2004/8/11

秋田茂「コメント Bruce Cumings, “The Korea-Centric Japanese Imperium and the Transformation of the International System from the 1930s to the 1950s”」大阪大学第5回グローバルヒストリー・セミナー, 大阪大学, 2004/7/23

Shigeru Akita, “The East Asian International Economic Order in the 1950s”, Anglo-Japanese Relations and International Politics in East Asia, at London (LSE), UK, 6-7, 2004/7

秋田茂「イギリス帝国史研究と地域史の対話」2004年度大阪歴史科学協議会大会報告, 関西大学, 2004/6/12

秋田茂「コメント John Brewer, “Historians and The Study of Everyday Life”」大阪大学第4回グローバルヒストリー・セミナー, 大阪大学, 2004/6/9

秋田茂「イギリス帝国と国際秩序」2004年度歴史学研究会大会報告(国立), 一橋大学, 2004/5/29

秋田茂, 横井勝彦「総司会 国際シンポジウム『帝国の終焉と国際秩序の再編——アジアをめぐる欧米諸国の相克——』」日本西洋史学会第54回大会(仙台), 東北学院大学, 2004/5/21

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

秋田茂 第20回大平正芳記念賞, 大平正芳記念財団, 2004/6

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2005年度～2007年度、基盤研究(B)、代表者：秋田茂

課題番号：17320095

研究題目：グローバルヒストリーの構築とアジア世界

研究経費：2005年度 直接経費 6,200千円

研究の目的：

① 本研究は、近代世界システムの形成・発展・変容の歴史的過程に着目し、アジア世界との関連に重点を置いて、アジ

アの側からグローバルヒストリーを構築することを目指している。具体的には、近代世界システムの形成と安定にとって、「中核」として決定的な役割を演じたとされるヘゲモニー国家の歴史的意義を、アジア世界との関連で以下の3点に絞って再検討し、現代のグローバリゼーションを歴史的に相対化する理論的枠組みを考える。

- (1) 17世紀オランダの「ヘゲモニー」の世界史的意義は何か。
 - (2) 19世紀イギリス(パクス・ブリタニカ)、20世紀アメリカ合衆国(パクス・アメリカーナ)の両ヘゲモニー国家にとって、アジア世界との関連はいかなる意味を有したのか。
 - (3) 近代世界システムにおけるアジア世界の「相対的独自性」は、世界システムの変容にいかなる影響を及ぼしたのか。
 - (4) 世界システム論の再考により、いかなるグローバルヒストリーが構築できるのか。
- ② 本研究の学術的な特色と独創性は以下の3点にある。
- (1) 歴史学、経済学、世界システム論の各分野の専門家を揃えて、学際的で専門分野を越えた議論を展開できる。近代世界システムの歴史的考察と現状分析をふまえたうえで、21世紀現代のグローバリゼーションを歴史的に相対化できるような理論的枠組みを提示する。
 - (2) 17-20世紀までの約400年にわたる時期を、ヘゲモニー国家の盛衰とアジア世界の関連を基軸にして、通時的に長期のパースペクティブで考察する。
 - (3) ロンドン大学歴史学研究所、LSE、アメリカ・フェルナンブローデル記念研究センター、カリフォルニア大学、オランダ・ライデン大学、中国・社会科学院、インド・ネルー大学(JNU)など、海外研究諸機関と協力して共同研究を行う。

3年間にわたる研究を通じて、従来の西洋中心主義的な近代世界システム論解釈に対して、アジア世界の「相対的自立性」と地域間関係史をキイ概念にした、日本発の世界システム論を構築する。研究成果は、国際シンポジウムを組織して公表するとともに、国際歴史学大会、国際経済史学会などの舞台で積極的に発表する。外国人研究者を含めた研究成果を、研究報告書として英語と日本語でそれぞれ出版する。

- ③ 欧米における代表的な世界システム論研究は、アメリカのイマニュエル・ウォーラーステインの一連の業績である。山本範久は、その諸研究の翻訳・紹介に努めてきた。だが最近、こうした西洋中心的なウォーラーステイン流の世界システム論解釈に対して、アジア世界の優位を説く、A.G.フランクやK.ポメラantz、ビン・ウオン等の研究が登場し、世界的に注目されている。

杉原薫は、世界システム内でのアジア世界の「相対的独自性」を主張する「アジア間貿易」論を提示した。杉原は、ポメラantzやP.オブライエンとの研究交流を深める中で、考察の時代と地域をさらに広げて、近世以降のアジアの経済発展を理論化する(労働集約的経済成長)グローバルヒストリー概念を模索している。また秋田茂は、イギリス帝国史研究の領域で、「ジェントルマン資本主義」論を提唱したA.G.ホブキンズ、P.J.ケインや、ロンドン大学LSEのグローバルヒストリー研究プロジェクト責任者オブライエンとの共同研究をベースにして、アジア経済史研究を組み込んだグローバルヒストリーの構築をめざしている。久保亨は、中国や台湾の研究者とともに、中国現代ナショナリズムをアジア国際関係から見直す議論を重ねてきた。水島司は、南アジア学会を中心に南アジア研究のグローバル化に努めてきた。さらに、シュヴェントカーは、日本近現代史を国際的な視野で再考するとともに、ドイツ語圏におけるグローバルヒストリー研究の紹介に努めている。

本研究は、こうした諸メンバーが行ってきた、国際的な研究交流や共同研究で培ってきた人脈と、それぞれの研究成果をつなぎ合わせて、世界システム論の根本的な見直しを通じて、アジア・日本の側からグローバルヒストリー研究に関する新たな展望を模索するものである。アジアと日本での研究蓄積に根ざしたグローバルスケールの世界システム論研究はまだまだ存在せず、その意味で、本研究は世界の学界に対しても大きく貢献できる水準と中身の共同研究である。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

社会経済史学会・評議員	2005年5月～現在
日本南アジア学会・理事	2004年10月～現在
日本西洋史学会・『西洋史学』編集委員	2000年10月～現在
西洋史研究会(東北大学)・評議員	1998年10月～現在

4. 藤川 隆男 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科前期課程修了。文学修士(大阪大学)、MA(ANU)。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋史、とくにオーストラリアの歴史。

4-1. 論文

藤川隆男(責任編集)「特集 白人と白人性」『民博通信』105, 2004/6

4-2. 著書

藤川隆男編著『白人とは何か？ホワイトネス・スタディーズ入門』刀水書房, 2005/10

藤川隆男(川北稔)編著『空間のイギリス史』山川出版社, 2005/2

藤川隆男, 木村和男編『世紀転換期のイギリス帝国』(共著), ミネルヴァ書房, 2004/10

藤川隆男編著『オーストラリアの歴史』有斐閣, 2004/4

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤川隆男監修(吉田忠正文・写真)『オーストラリア』ポプラ社, 2006/3

藤川隆男(編)「特集 社会人入学大学院生」『パブリック・ヒストリー』2, pp. 73-104, 2005/2

藤川隆男(監修)「フォーラム 白人性と帝国」『パブリック・ヒストリー』2, pp. 105-126, 2005/2

4-4. 口頭発表

藤川隆男 “Silence on Aboriginal Presence: Australia's Anti-Chinese Movements in the 1850s”, 20th International Congress of Historical Sciences, Sydney, 2005

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2004年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者：藤川隆男

課題番号：15510200

研究題目：19世紀オーストラリア連邦運動の研究

研究経費：2004年度 900千円

2005年度 800千円

研究の目的：

主な目的は、オーストラリアにおける史料の調査と、既存の史料のデータ・ベース化である。オーストラリア連邦運動の集会に関するデータの基本項目を整理して、これをデータ・ベース化することが第1の目的である。これによって、連邦運動に関する基礎的な事実の確定が、従来に比べてはるかに容易になり、今後の研究の展開の基礎にできる。第2に、連邦憲法制定会議の議事録のデータ・ベース化の手法を検討する。これは、記述史料を数量化して、より体系的な分析を行うための第1段階である。デジタル化されたデータをいかに有効活用できるかは、データ・ベースの設計に依存しているので、今後の活用の見通しを立てながら、設計の基本構想は立てる。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

オーストラリア研究編集委員	2005年4月～現在
オーストラリア学会理事	2004年4月～現在
日本西洋史学会・『西洋史学』編集委員	1996年4月～現在

5. 栗原 麻子 助教授

1968年生。1995年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程(西洋史学専攻)指導認定のうえ退学。博士(文学、京都大学、1998年)。京都大学研修員、日本学術振興会特別研究員を経て、1996年より奈良大学講師。2004年より大阪大学文学研究科助教授。専攻：西洋古代史。

5-1. 論文

栗原麻子「古典期アテナイにおける復讐と刑罰」(科学研究費補助金 研究成果報告 課題番号 15520470), pp. 1-83, 2006/2

栗原麻子「イサイオスの嘘について 法廷弁論における事実と説得のあいだ」『科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告 古代ギリシア・ローマにおける法学と弁論術に関する法制史的総合研究 研究代表者 葛西康德(新潟大学大学院実務法学研究所教授)』 pp. 50-61, 2005/3

栗原麻子「アッティカ碑文にみる役職者と私人についての予備的考察」『奈良大学総合研究所所報』13, pp. 53-63, 2005/3
Asako Kurihara, "Quiet Athenian" and Civic Identity, Takashi Minamikawa (ed), Material Culture, Mentality and Historical Identity in the Ancient World: Understanding the Celts, Greeks, Romans and the Modern Europeans, Kyoto, pp. 3-8, 2004/5

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

エレイヌ・マッシュューズ(栗原麻子訳)『古代世界におけるギリシア人と名前 伝統と革新』深津行則, 浦野聡編著『古代文字史料の中心性と周縁性』春秋社, pp. 147-184, 2006/3

5-4. 口頭発表

栗原麻子「古典期アッティカにおける復讐と刑罰」第10回ワークショップ・大阪, 2005/6

栗原麻子「Civic Values, Post-Colonialism, and the Use of Classical Antiquity (古典古代をめぐる座標軸)」国際シンポジウム 近代ヨーロッパにおける人文主義の継承と変容 政治文化・古典研究・大学、2005年3月。南川高志, 小山哲編『国際シンポジウム報告書 近代ヨーロッパにおける人文主義の継承と変容 政治文化・古典研究・大学』pp. 69-70, pp. 175-180, 2005/3

栗原麻子『何人でも欲するものによる訴追』再考』西洋史読書会大会, 2004年11月『西洋史読書会大会報告要旨』pp.1-2, 2004/11

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2004年度～2005年度、基盤研究(C)、代表者：栗原麻子

課題番号：15520470

研究題目：古典期アテナイにおける復讐と刑罰

研究経費：2004年度 900千円

2005年度 500千円

研究の目的：

古代ギリシアの国家ポリスの人的紐帯は、「友を助け敵を害する」ことを正義とみなす、ギリシア人の価値観に貫かれていた。「友を助ける」とは、すなわち相互扶助であり、「敵を害する」とは、すなわち復讐である。復讐は、共同体内部の秩序を破壊するものであると同時に、共同体精神の発露でもある。本研究は、ポリス共同体が復讐をどのようなかたちで制御していたのかということ、法制度と民衆意識の両面から検討することを目的とする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

日本西洋史学会・編集委員

2004年10月～現在

6. 戸渡 文子 助手

1973年生。大阪大学文学研究科 2006年単位修得退学。文学修士(大阪大学)。2006年より現職。専攻：イギリス史・老人史。

6-1. 論文

戸渡文子「聖域の男たち 一九世紀国教会の専門職化とジェンダー」藤川隆男編『空間のイギリス史』刀水書房, pp. 90-103, 2005/1

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

戸渡文子「マスキュリティ・フェミニズム・老人——19世紀イギリスの宗教領域——」日本西洋史学会第55回大会, 神戸大学, 2005/5

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-10 考古学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本学考古学分野の大きな特色としては次の3点があげられる。

第一は、考古学研究に必要な発掘調査、出土資料分析などの方法論や技術面に関する確実な基礎力の習得を重視していることである。そのために1988年の講座開設以来、毎年欠かさずフィールド調査を行い、成果を学術報告書にまとめる取り組みを継続している。

第二は、世界の考古学の研究動向に目を配りながら比較研究を積極的に進め、広い視野で日本考古学の研究に取り組んでいることである。とくに教員や大学院生は海外の発掘調査や学会にも参加して、自らの研究の意味をつねに問うことを心がけている。

第三は、教育・研究活動を通じた社会との積極的なかかわりを重視していることである。地域社会に入って行うフィールド調査、現地説明会、成果報告会などを通じて、地域の学校・生涯教育活動などにもかかわり、学問と社会とのあるべき関係を追求している。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 1 助教授 1 講師 0 助手 1(兼任)

教授：福永 伸哉

助教授：高橋 照彦

助手：寺前 直人(兼任)

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
14	10	4	0	0	0	1	0	0

※うち留学生 2名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	4	4	3	4	2
'05	7	2	0	1	0
小計	11	6	3	5	2

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	1	3	4
'05	0	1	1
計	1	4	5

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

中村(長友)朋子 「弥生時代の土器と社会」 2005/2

主査：福永伸哉 副査：都出比呂志、小林茂、高橋照彦

【論文博士】

秋山浩三 「弥生大形農耕集落の研究」 2006/2

主査：福永伸哉 副査：小林茂、高橋照彦

広瀬和雄 「古墳時代政治構造の研究」 2004/6

主査：都出比呂志 副査：梅村喬、福永伸哉、高橋照彦

福永伸哉 「三角縁神獣鏡の研究」 2005/3

主査：都出比呂志 副査：村田路人、高橋照彦

松木武彦 「日本列島先史時代の武器と戦い」 2005/2

主査：福永伸哉 副査：都出比呂志、川村邦光、高橋照彦

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	3	0	0	0	5	8
'05	1	4	0	0	0	5
計	4	4	0	0	5	13

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	1	5	6	0	1	13
'05	0	3	0	0	0	3
計	1	8	6	0	1	16

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

- 石井智大「弥生時代中期から後期への社会変化——丹後地域の事例から——」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室, pp. 291-308, 2005/3
- 高松雅文「竪穴式石室の編年的研究」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室, pp. 451-468, 2005/3
- 田中由理「剣菱形杏葉と6世紀前葉の馬具生産」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室, pp. 641-656, 2005/3
- 田中由理「f字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究』(考古学研究会), 51-2, pp. 97-114, 2004/9
- 中原計「出土状況からみた弥生時代木製品の製作」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室, pp. 175-198, 2005/3
- 中村大介「無文土器時代前期における石鏃の変遷」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室, pp. 51-86, 2005/3
- 中村大介「方形周溝墓の成立と東アジアの墓制」『朝鮮古代研究』5, 朝鮮古代研究刊行会, pp. 27-50, 2004/11
- 吉田知史「善通寺西遺跡出土櫛の意義」『香川考古』9, 香川考古刊行会, pp. 29-55, 2004/11

【2005年度】

- 石井智大「古墳への須恵器の供給とその背景」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告書』川西市教育委員会, pp. 239-258, 2006/3
- 石井智大「後期古墳における赤色顔料使用の衰退・消滅とその背景」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊, 大阪大学井ノ内稲荷塚古墳発掘調査団, 341, pp. 341-355, 2005/5
- 高松雅文「振り環頭大刀と古墳時代後期の政治的動向」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告書』川西市教育委員会, pp. 259-280, 2006/3
- 東影悠「近畿地方における尾張型埴輪の様相」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告書』川西市教育委員会, pp. 281-296, 2006/3
- 吉田知史「日本原始・古代の櫛の研究」『待兼山論叢』39, 大阪大学文学部, pp. 25-55, 2005/12

(2)口頭発表

【2004年度】

- 石井智大, 高松雅文, 柏原龍嗣「勝福寺古墳出土の龍文銀象嵌刀装具付鉄刀について」古代武器研究会, 滋賀県立大学, 2005/1/8
- 高松雅文「竪穴式石室の編年研究」大阪歴史学会, 大阪市文化財協会, 2005/1/21
- 中原計「植生から見た瓜生堂遺跡周辺の自然環境」瓜生堂遺跡の最新研究ミニシンポジウム, 大阪府立弥生文化博物館, 2005/3/13(『関連科学が明らかにした瓜生堂遺跡の実像発表資料』)
- 中原計「木質遺物から見た高地性集落」第18回古代学協会四国支部大会徳島大会, 徳島大学, 2004/12/4-5(『第18回古代学協会四国支部大会徳島大会 弥生時代の群像——高地性集落の実態——発表要旨集』)
- 丸山真史, 中原計, 山崎健, 寺前直人「近世における大坂, 京都の水産物利用——久留米藩蔵屋敷跡出土の資料を中心に——」日本考古学協会第70回総会, 千葉大学, 2004/5/23(『有限責任中間法人日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』 pp. 190-191)
- 中村大介「方形周溝墓の系譜とその社会」近畿弥生の会, 京都, 2005/3/13
- 中村大介, 長友朋子「縄文時代後・晩期の土器の容量」煤・焦げ・黒斑ワークショップ(小林正史科研), 熊本, 2005/3/12
- 中村大介「無文土器時代前期編年の再検討」東アジア研究会, 大阪, 2004/11/21

Daisuke Nakamura, "Relationship of funeral rituals between Korea and Japan", the Society for East Asian Archaeology, Korea, 2004/7/16

長友朋子, 庄田慎矢, 所一男, 久世建二, 小林正史, 松尾奈緒子, 中村大介, 鐘ヶ江賢二, 渡辺誠「弥生時代における覆い型野焼きの受容と展開」日本考古学協会第70回総会, 千葉大学, 2004/5/23

中村大介「土器副葬習俗の系譜とその変容」東北アジア考古学研究会, 東京, 2004/5/21

渡辺今日子「弥生時代の石器生産・流通と消滅過程」考古学研究会関西例会／大阪, 2005/3/26

渡辺今日子「近畿地方における弥生時代中期後半～後期の石器の様相」京都弥生談話会／京都, 2004/5/8

【2005年度】

高松雅文「振り環頭大刀と古墳時代後期の政治的動向——継体大王とその前後——」大阪歴史学会, 大阪市文化財協会, 2005/10/21

東影悠「近畿地方における尾張系埴輪の展開」大阪歴史学会, 大阪市文化財協会, 2006/3/17

吉田知史「法量と形態からみた縄文時代から古墳時代における櫛の様相と船舶関連資料の比較」大阪歴史学会, 大阪市文化財協会, 2005/12/16

(3)その他(書評・翻訳など)

【2004年度】

石井智大「埋葬施設 SX01」『日吉ヶ丘遺跡』(京都府加悦町教育委員会), pp. 37-41, 2005/2

石井智大「土製品・絵画土器等の概要」『日吉ヶ丘遺跡』(京都府加悦町教育委員会), pp. 91-93, 2005/2

石井智大「日吉ヶ丘遺跡 SZ01 関係の弥生時代中期墳墓集成 丹後・北丹波の墳墓」『日吉ヶ丘遺跡』(京都府加悦町教育委員会), pp. 207-241, 2005/2

石井智大「鉄製ヤリガンナ」『綾部山 39 号墓発掘調査報告書』(兵庫県御津町教育委員会), pp. 56-57, 2005/2

大賀克彦, 望月誠子, 戸根比呂子, 小山雅人「奈具岡遺跡再整理報告(1)——翡翠・ガラス製品——」『京都府埋蔵文化財情報』(京都府埋蔵文化財調査研究センター), 95, pp. 1-12, 2005/3

口野博史, 富山直人, 池田毅, 松林宏典, 前田佳久, 渡辺今日子「伯母野山遺跡の研究——斉藤英二氏寄贈資料の整理報告を中心として——」『神戸市立博物館研究紀要』(神戸市立博物館), 21, pp. 83-150, 2005/3

【2005年度】

石井智大「後円部北朝調査区」「須恵器」「須恵器」「勝福寺古墳出土須恵器の編年的位置」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告書』(兵庫県川西市教育委員会), pp. 27-30, pp. 130-133, pp. 176-184, pp. 201-216, 2006/3

石井智大「須恵器」「前方部 97 調査区におけるその他の遺物」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』(大阪大学文学研究科考古学研究室), pp. 149-151, 2005/5

高松雅文「後円部西セクション」「墳頂調査区の成果」「墳丘築造過程と盛土の特徴」「調査成果」「石室の構造」「石室壁体の構築過程」「石室の構築過程」「石室構築面の構造とその特徴」「前方部南棺」「第1石室の編年」「第1石室船頭の特徴」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告書』(兵庫県川西市教育委員会), pp. 30-35, pp. 54-60, pp. 69-76, pp. 87-93, p. 103, pp. 106-113, 2006/3

高松雅文「周溝出土須恵器」「須恵器」「SX15 出土遺物」「SD31 出土遺物」「4 号墳周辺出土須恵器」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』(大阪大学文学研究科考古学研究室), pp. 235-240, pp. 246-249, p. 250, 2005/5

田中由理「羨道の構造」「羨道における遺物出土状況」「馬具」「そのほかの鉄器」「不明鉄器(馬具)」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告書』(兵庫県川西市教育委員会), pp. 76-82, pp. 133-140, p. 174, 2006/3

柏原龍嗣「後円部第1石室の遺物」「刀剣」「刀」「刀子」「刀および刀子」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告書』(兵庫県川西市教育委員会), pp. 121-122, pp. 141-150, pp. 153-156, p. 174, 2006/3

東影悠「円筒埴輪」「形象埴輪」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告書』(兵庫県川西市教育委員会), pp. 185-199, 2006/3

吉田知史「須恵器」「土師器」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告書』(兵庫県川西市教育委員会), pp. 123-130, 2006/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004年度 学部：0名 大学院：0名（計0名）

2005年度 学部：0名 大学院：1名（計1名）

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度～2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専等の常勤職員として就職した者について)

和田一之輔 博士前期課程, 文化財研究所奈良文化財研究所, 研究員, 2005/4

中村大介 博士後期課程, 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター, 助手, 2005/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004年度～2005年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4名

2004年度：3名 2005年度：1名

<内訳> 公務員(教育委員会) 4名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名(権五榮[韓国・韓神大学校])

9. 刊行物

2004年度 『大阪大学小林行雄文庫目録』

『待兼山考古学論集——都出比呂志先生退任記念——』

2005年度 大阪大学文学研究科考古学報告第3冊 『井ノ内稲荷塚古墳の研究』

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

WAC Inter-Congress: Osaka, 2006 (世界考古学会議中間会議大阪大会) 開催協力

2006年1月12-15日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

考古学分野における教育の方針としては、自らの学問的関心に基づく研究テーマと、学外組織と協力して取り組む共同プロジェクトにかかわる研究テーマの二者を課すことによって、幅広い研究能力を向上させるとともに、学問の社会的意味を考えさせることに重点を置いている。それを実現するために、従来通り、3つの取り組みを行ってきた。

第一は、考古学研究に不可欠な発掘調査や出土資料分析などにかかわる基礎的な技術や知識の習得を重視することである。2004年度～2005年度には京都府亀岡市の篠窠跡群の調査を行うとともに、2003年まで発掘調査を行ってきた兵庫

県川西市の勝福寺古墳の成果報告書を作成する作業を併行して実施することにより、実践的な技能を深めることができた。

第二は、世界の考古学の研究動向に目を配りながら、比較考古学を積極的に進め、広い視野で研究に取り組みさせることである。すべての学年において英書講読を取り入れているほか、2004年度・2005年度はヨーロッパや中近東などと日本との比較考古学に関する集中講義も開講した。また、研究室として世界考古学会議中間会議大阪大会の開催に協力し、学生がそれらに主催者側の一員として参加する機会を得て、国際学会も成功裡に終えることができたのは、大きな収穫である。

第三は、社会との積極的なかかわりを重視することである。亀岡市での発掘調査においては、学生がコンテンツ作製などに参加する形で調査成果をHPで広く情報発信を行うとともに、市民向けの現地説明会の開催においても、見学者への解説などを分担することを通じて、研究成果の社会還元的重要性についての認識を深め、それらへの積極的な参加を導くという教育的な効果を果たすことができたものと言える。

ただし、これまでとは異なる教育状況にも直面して、従来にはない取り組みなども行ってきた。特に2005年度から考古学の教員数が3名から2名となったこともあり、学生に提供できる講義の数が大幅に減少しかねない状況になったため、共同プロジェクトなどのフィールド調査にかかわる形での演習、あるいは出土資料の整理作業への参加の中で実践的な技術の習得を教える演習などを新たに設けることにより、カリキュラムの改善を進めた。また、通常の講義についても、これまでは学部と大学院に共通する単位として設定していたことから、やや専門的な内容に偏していたため、学部生のみを対象とした講義を新規に開講し、基礎的な学問の知識を習得できる場を提供することにも意を注いだ。

前回の年報においては、研究室紀要的な刊行物の創刊を検討したい旨の目標を記したが、研究室によるフィールド調査やその成果報告書の刊行が重なったこともあり、資金的な問題もあって先送りせざるを得ないのが現状である。ただし、それに代わる刊行物として、都出比呂志教授(現名誉教授)の退任を記念する形で、大学院生による投稿も含む論文集を刊行して、研究論文を発表する機会を提供するとともに、発掘調査報告書の考察編の研究論文という枠の中でも、大学院生による論文の執筆を促し、それらによって実質的に研究室紀要の欠を補うことができたものと考えている。

このほか、専門機関への就職状況が厳しい中で、博士後期課程在学中での就職も実現している。このように、教育については所期の目標を概ね達成しているものと評価できる。

ただ、教育面で留意すべき点がまったくないわけではない。例えば、学部生における他専修への変更希望が少なくない点などは、その一つである。2年次での専修変更が学生の多様な希望に沿うシステムとして活用されることに対しては異をはさむ必要がないものの、専修変更による学生へのデメリットがないとは言えないため、専修決定前の1回生の段階で、専門課程における教育・研究の内容についてよりいっそうの周知をはかっておくことなどが必要と思われる。

12-2. 研究活動

組織全体の調査・研究活動としては、1990年代から進めてきた調査研究の集大成である京都府長岡京市井ノ内稲荷塚古墳の学術報告書『井ノ内稲荷塚古墳の研究』を刊行したことが大きな成果であり、学界に寄与するところも少なくない。川西市勝福寺古墳に関しては、2006年度に最終報告書の刊行を目指している。

また、それらの研究成果の公開ならびに社会連携にかかわる事業として、科研費で実施した川西市でのフィールド調査結果などを紹介するCDを作成配布し、それについては新聞などを通じて報道された。そのCDは現在も自治体を通して無償配布に応じており、追加製作を必要とするほど、地元を中心に好評を博している。

その一方で、これまでの研究室の主な研究対象であった弥生・古墳時代だけではなく、奈良・平安時代へも領域を広げる形で、科学研究費補助金(基盤研究(B)、代表高橋照彦)による亀岡市篠窠跡群の発掘調査に着手した。すでに2005年の時点でこれまでの篠窠のイメージを一新させるような新たな学問的成果が出ている。HPによる発信や市民向けの現地説明会の開催、さらには現地の高校生を対象とした見学会の受け入れなどによって、それらの調査研究成果も積極的に社会還元を行うべく努めている。

さらに、教育活動でも触れたが、『待兼山考古学論集——都出比呂志先生退任記念——』と題する論文集を刊行した。総頁で913頁に及ぶ大部の論文集であり、内容においても学界に裨益すること少なくない充実した論文集となっている。阪大考古学の存在を改めて印象付けるような意義深いものと評価できる。なお、2005年度には個人研究に属する成果とはいうものの、福永伸哉による『三角縁神獣鏡の研究』が発刊され、定年で退任した都出比呂志による『前方後円墳と社

会』も相次いで刊行されるなど、研究活動の充実振りの一端が窺われるところである。

以上のほかに、考古学分野では純粹の研究とともに社会貢献に属する内容も従来から重視しているが、例えば所蔵保管資料の社会的活用をはかるために、堺市ほか各地の博物館からの貸出依頼に積極的に応じている。また、大阪大学埋蔵文化財調査室が行う大学構内の発掘調査および文化財活用業務に協力しており、昨年では待兼山 5 号墳の発掘調査において研究室としても教員・学生も含めて全面的な支援を行うとともに、多くの成果を得ることができた。そこでは、学内関係者や報道関係者への遺跡案内説明、一般市民向けの現地説明会の開催、その後の修景計画における説明板設置など、埋蔵文化財調査室の援助も行っている。このほかにも、地方自治体の発掘調査や出土品整理への学術協力も行っており、地域の文化行政を支援することもできた。

なお、前回の年報にも掲げたように研究活動を進める上での資金不足は必ずしも解消される状況にはないが、それらを補うために、様々な外部資金の調達を試み、科学研究費補助金のほかにも、各種研究費を得ている。

このように、研究面において所期の目標はほぼ達成でき、十分に成果を出せたものと評価できるところである。ただ、教育面とも重なる課題を挙げるとすれば、大学院学生に対して論文作成演習以外に投稿論文作成の個別指導を強化してきたものの、なおも学術雑誌への投稿論文数が多いとは言えない状況にある。継続的な指導を含め、今後の課題として残されているだろう。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004 年度～2005 年度の過去 2 年間)

1. 福永 伸哉 教授

1959 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学博士(大阪大学)。大阪大学埋蔵文化財調査室助手、大阪大学大学院文学研究科助教授を経て、2005 年より現職。専攻：日本考古学(特に弥生時代、古墳時代)。

1-1. 論文

福永伸哉「三角縁神獸鏡論」『日本の考古学』(下), 学生社, pp. 457-463, 2005/12

福永伸哉「倭の国家形成過程とその理論的予察」『国家形成の比較研究』学生社, pp. 39-60, 2005/5

福永伸哉「いわゆる継体期における威信財変化とその意義」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学大学院文学研究科, pp. 515-524, 2005/5

福永伸哉「三角縁神獸鏡と画文帯神獸鏡のはざままで」『待兼山考古学論集』大阪大学大学院文学研究科, pp. 469-484, 2005/3

福永伸哉「弥生時代から古墳時代にいたる社会変化」『文化の多様性と 21 世紀の考古学』考古学研究会, pp. 130-149, 2004/4

1-2. 著書

福永伸哉『三角縁神獸鏡の研究』大阪大学出版会, pp. 1-358, PL. 1-48, 2005/8

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

福永伸哉「総括」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告』川西市教育委員会, pp. 309-315, 2006/3

福永伸哉(書評)「中井正幸著『東海古墳文化の研究』」『考古学研究』52-4, 考古学研究会, pp. 93-95, 2006/3

福永伸哉「長法寺南原古墳」『日本古代史大辞典』大和書房, 2006/1

福永伸哉「空白期 河内勢力台頭か」朝日新聞, 2005/9/24

福永伸哉「総括」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学大学院文学研究科, pp. 541-544, 2005/5

福永伸哉「近江の古墳と鏡の世界」『新・史跡でつづる古代の近江』ミネルヴァ書房, pp. 103-106, 2005/3

福永伸哉「鏡に映る古墳出現期の激動」滋賀民報, 2004/6/27

福永伸哉「三角縁神獸鏡の成分分析」西日本新聞, 2004/6/8

1-4. 口頭発表

- 福永伸哉「古墳時代の和川と淀川——前方後円墳成立期の地域関係——」考古学研究会関西例会第139回例会, 考古学研究会, 2006/3
- 福永伸哉「日本古墳時代研究の現状と課題」忠南大学校人文大学招請講演会, 韓国忠南大学校, 2005/11
- 福永伸哉「摂津の古墳時代と継体大王」大阪青山歴史博物館記念講演会, 大阪青山大学・大阪青山短期大学, 2005/9
- 福永伸哉, 寺前直人, 岡野慶隆「初期畿内型横穴式石室導入の政治的背景——兵庫県川西市勝福寺古墳の調査に関連して——」日本考古学協会第71回総会, 国士舘大学, 2005/5
- 福永伸哉「勝福寺古墳調査成果の学術的意義」2004年度勝福寺古墳発掘調査報告講演会, 川西市教育委員会, 2005/3
- 福永伸哉「西摂地域の古墳と日本古代史」2004年度西宮市歴史講座, 西宮市教育委員会, 2004/12
- 福永伸哉「弥生時代から古墳時代にいたる社会変化」考古学研究会50周年記念国際シンポジウム, 考古学研究会, 2004/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 福永伸哉 大阪大学共通教育賞(2003年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2003/12
- 福永伸哉(雪野山古墳発掘調査団) 第6回雄山閣考古学特別賞, 雄山閣出版, 1997/6

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2004～2005年度、基盤研究(C)(1)、代表者：福永伸哉

課題番号：16520461

研究題目：原始古代埋葬姿勢の比較考古学的研究——日本及び旧世界の事例を中心に——

研究経費：2004年度 直接経費 1,800千円
2005年度 直接経費 1,100千円

研究の目的：

原始古代葬制にかんする諸要素の中でも本格的な考察が遅れている埋葬姿勢について比較考古学的な視点を重視しながら検討し、人類史における埋葬姿勢と生業・階層差・社会発展段階・性別・死生観・信仰・成人と小児の違いなどとの多様な関係を考察する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2005年度、研究助成金、助成金獲得者：福永伸哉

助成金名：三菱財団人文科学研究助成

研究題目：古墳時代「継体王権」形成過程とその歴史的意義に関する考古学的研究

助成団体名：三菱財団

助成金額：1,600千円

1-7-2. 2004年度、研究助成金、助成金獲得者：福永伸哉

助成金名：「豊かで活力ある長寿社会の構築をめざして」を基本テーマとした研究助成

研究題目：デジタル技術を用いた高齢者に優しい考古学・遺跡体験システムの研究

助成団体名：ユニバーサル財団

助成金額：900千円

1-8. 学会役員等の引き受け状況

鹿児島県塚崎古墳群発掘調査指導委員会・委員	2006年1月～現在
京丹後市史編纂委員会・委員	2005年6月～現在
(財)大阪市文化財協会・評議員	2005年6月～現在
京丹後市史跡整備検討委員会・委員	2005年1月～現在

文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査検討委員会・委員	2005年1月～現在
考古学研究会関西例会・世話人	2004年4月～現在
大垣市昼飯大塚古墳調査整備委員会・委員	1994年12月～現在
大分県小熊山古墳調査指導委員	2005年4月～2006年3月
日本考古学協会・原稿査読委員	2005年4月～2006年3月

2. 高橋 照彦 助教授

1966年生。1992年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(京都大学、1991年)。国立歴史民俗博物館考古研究部助手、奈良国立博物館学芸課研究員を経て、2002年より現職。専攻：日本考古学(特に奈良時代、平安時代)。

2-1. 論文

- 高橋照彦「聖武朝の土器様式——研究現状の整理と問題の提起——」『古代の土器研究——聖武朝の土器様式——』古代の土器研究会, pp. 1-10, 2005/11
- 高橋照彦「銭貨と陶磁器からみた日中間交流——日本古代銭貨の発行を主な検討材料として——」『シルクロード学研究』23<中国沿海地帯と日本の文物交流の研究——港・船と物・心の交流——>, シルクロード学研究センター, pp. 75-112, 2005/3
- 高橋照彦「欽明陵と檜隈陵——大王陵最後の前方後円墳——」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室, pp. 731-754, 2005/3
- 高橋照彦「施釉陶器——その変遷と特質」『列島の古代史 ひと・もの・こと』5<専門技能と技術>, 岩波書店, pp. 273-286, 2005/2
- 高橋照彦「古代銭貨をめぐる諸問題」『考古学ジャーナル』526, pp. 10-14, 2005/2
- 高橋照彦「鹿蔵山遺跡出土奈良三彩について」『鹿蔵山遺跡——大社町立大社小学校改築事業に伴う発掘調査報告書——』大社町教育委員会, pp. 55-56, 2005/1
- 高橋照彦「阿武山古墳小考——鎌足墓の比定をめぐる——」『待兼山論叢(史学篇)』38, 大阪大学大学院文学研究科(大阪大学文学会), pp. 1-25, 2004/12

2-2. 著書

- 佛教学ニ雅遺迹学術研究機構編, 高橋照彦他『絲綢之路 尼雅遺址之謎』天津人民美術出版社, 2005/1

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 高橋照彦「まとめ」『京都府亀岡市篠窠跡群大谷3号窠 2005年度発掘調査現地説明会資料』大阪大学考古学研究室篠窠調査団, p. 8, 2005/8
- 寺前直人, 高橋照彦共編『井ノ内稲荷塚古墳の研究』<大阪大学文学研究科考古学研究報告>第3冊, 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団, 真陽社, 2005/5
- 高橋照彦「まとめ」『京都府亀岡市篠窠跡群大谷3号窠発掘調査現地説明会資料』大阪大学考古学研究室篠窠調査団, pp. 7-8, 2004/8

2-4. 口頭発表

- 高橋照彦「古代銭貨の経済外的使用法とその淵源」研究集会『和同開珎をめぐる史的検討』2006/1
- 高橋照彦「古墳・寺・焼き物——日本考古学からみた文献史料——」シンポジウム『物質文化の歴史学再考——「文化コンテクスト学」の構築をめざして——』2006/1
- 高橋照彦「聖武朝の土器様式——研究現状の整理と問題の提起——」古代の土器研究会第8回シンポジウム, 2005/11
- 高橋照彦「長門・近江の施釉陶器生産の展開と特質」埋蔵文化財担当者専門研修, 2005/2
- 高橋照彦「大阪大学考古学研究室による調査の概要と今後の計画」篠窠業生産遺跡調査に係る連絡会議, 2004/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003年度～2006年度、基盤研究(B)、代表者：高橋照彦

課題番号：15320108

研究題目：須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究——近畿地方を主な検討材料として——

研究経費：2004年度 直接経費 4,200千円

2005年度 直接経費 3,700千円

研究の目的：

本研究は、研究の手薄な、9～11世紀頃の須恵器生産を主な検討対象とする。平安時代は、須恵器生産の衰退時期と捉えられがちであるが、古代から中世への過渡期である。そこで、律令期の窯業生産把握がいかに中世的な須恵器生産に変容したかという問題を、具体的な窯跡群を構造的に分析することにより、跡付けることにしたい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

史学研究会・評議員

2005年11月～現在

東洋陶磁学会・幹事

1997年10月～現在

3. 寺前 直人 助手

1973年生。2001年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学、大阪大学)。大阪大学教務補佐員をへて、2003年現職。2003年より神戸女学院非常勤講師。専攻：日本考古学。

3-1. 論文

寺前直人「生産と流通からみた畿内弥生社会」『シンポジウム記録』5 畿内弥生社会像の再検討, 考古学研究会, pp. 105-122, 2006/3

寺前直人「後期古墳における土器使用の階層性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊大阪大学考古学研究, pp. 447-458, 2005/5

寺前直人「弥生時代における石棒の継続と変質」『待兼山考古学論集』大阪大学文学研究科, pp. 129-148, 2005/3

寺前直人「弥生時代における石製短剣の伝播過程」『古代武器研究』5, 古代武器研究会, pp. 19-28, 2005/1

3-2. 著書

岡野慶隆, 寺前直人, 福永伸哉編『川西市勝福寺古墳発掘調査報告書』川西市教育委員会, 2006/3

寺前直人, 高橋照彦編, 福永伸哉, 杉井健ほか『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第3, 大阪大学考古学研究室, 2005/5

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

寺前直人(書評)「前川和也, 岡村秀典編『国家形成の比較研究』」『史林』88-5, 史学研究会, pp. 124-131, 2005/9

3-4. 口頭発表

寺前直人「石器と弥生社会」『姿をあらわした謎の弥生遺跡』——太秦遺跡と北河内の弥生時代を考える——, 寝屋川市教育委員会, 寝屋川市立エスポアール(寝屋川市), 2006/3

福永伸哉, 寺前直人, 岡野慶隆「初期畿内型横穴式石室導入の政治的背景——兵庫県川西市勝福寺古墳の調査に関連して——」日本考古学協会第 71 回総会, 国士舘大学, 2005/5

寺前直人「後円部でみつかった新たな石室について」兵庫県川西市勝福寺古墳発掘調査講演会, 川西教育委員会, 兵庫(川西市中央公民館), 2005/3

寺前直人「6 世紀における古墳の変質とその背景」古代を偲ぶ会, 大阪(森ノ宮), 2005/2

寺前直人「武器の普及と集落形態の関係」『弥生社会の群像——高地性集落の実態——』第 18 回古代学協会四国支部大会, 徳島(徳島大学), 2004/11

丸山真史, 中原計, 山崎健, 寺前直人「近世における大坂, 京都の水産物利用——久留米藩蔵屋敷跡出土の資料を中心に——」日本考古学協会第 70 回総会, 千葉大学, 2004/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2004 年度、科学研究費補助金若手(B)、代表者：寺前直人

課題番号：16720184

研究題目：弥生時代における経済構造の研究——石器流通と金属器流通の比較分析——

研究経費：900 千円

研究の目的：

日本列島における弥生時代における経済構造について、在来素材である石器と外来素材である金属器のありかたを比較検討することにより、列島における社会複雑化、階層化の契機である弥生時代の社会構造を解明する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

考古学研究会・常任委員

1999 年 5 月～現在

2-11 人文地理学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

小規模教室ながら、現代の人文地理学の主要分野である空間分析および人間—環境関係について、先端的な研究を推進することに努め、同時にそれを教育に反映させることを目指している。また当教室の地図史研究の伝統を継承しつつ、近代地図作成に関連する学外の研究者との共同研究を組織している。

教育においては、先端の研究を意識しつつ、その実行につながるような視野と能力を修得できるよう努力している。またコンピュータ・リテラシーを重視し、各種データの整理、統計分析、プレゼンテーションの実習を課すほか、調査対象地域に関するさまざまな資料の収集、インタビューからデータの解析、報告にいたる作業も並行して実施している。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 1 助教授 1 講師 0 助手 0

教授：小林 茂

助教授：堤 研二

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
10	3	3	0	0	0	1	2	0

※うち留学生 3 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	4	0	0	0	0
'05	3	2	1	0	0
小計	7	2	1	0	0

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	0	0	0
'05	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	2	1	0	0	0	3
'05	0	0	0	0	0	0
計	2	1	0	0	0	3

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	1	9	0	0	0	10
'05	1	5	1	0	0	7
計	2	14	1	0	0	17

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

波江彰彦「ごみの排出とリサイクルにみられる地域間差異——福井県を事例に——」『人文地理』(人文地理学会), 56-2, pp. 170-185, 2004/4

小林茂, 渡辺理絵, 鳴海邦匡「アジア太平洋地域における旧日本軍の空中写真による地図作製」『待兼山論叢(日本学編)』 38, pp. 1-24, 2004/12

渡辺理絵, 小林茂「日本—中国間の地図作製技術の移転に関連する資料について」『地図』(日本国際地図学会), 42-3, pp. 13-28, 2004/9

(2)口頭発表

【2004年度】

- 折橋幸代「高齢者の外出行動パターン」2004年度人文地理学会大会, 佛教大学, 2004/11/14(『2004年度人文地理学会大会研究発表要旨』 pp. 98-99)
- 佐々木信行「国際航空ネットワークの結節構造——地域内と地域間関係に着目して——」2004年度人文地理学会大会, 佛教大学, 2004/11/14(『2004年度人文地理学会大会研究発表要旨』 pp. 110-111)
- 中村有作「沖永良部島和泊町における水資源開発と農業生産の変容」日本地理学会 2005年度春季学術大会, 青山学院大学, 2005/3/28(『日本地理学会発表要旨集』 67, pp. 92)
- 波江彰彦「大阪市におけるごみ処理事業の機能的変化」2004年度人文地理学会大会, 佛教大学, 2004/11/14(『2004年度人文地理学会大会研究発表要旨』 pp. 80-81)
- 朴澤龍「過疎地域における高齢者の日常生活行動——奈良県吉野郡川上町を事例として——」2004年度人文地理学会大会, 佛教大学, 2004/11/14(『2004年度人文地理学会大会研究発表要旨』 pp. 96-97)
- 渡辺英明「江戸時代の関東在方市町における町場を描いた絵図の作製契機とその表現内容」2004年度人文地理学会大会, 佛教大学, 2004/11/14(『2004年度人文地理学会大会研究発表要旨』 pp. 58-59)
- 渡辺理絵, 小林茂「20世紀初頭における日本—中国間の測量技術の移転——三角測量を中心として——」科学研究費基盤研究 A1「アジアとその周辺地域における伝統的地理思考の近代地理学の導入による変容過程」国際シンポジウム, 国際日本文化研究センター, 2005/2/13
- 渡辺理絵, 小林茂「日中間における地図作製技術の移転について——広西省を中心として——」2004年度人文地理学会大会, 佛教大学, 2004/11/14(『2004年度人文地理学会大会研究発表要旨』 pp. 88-89)
- 小林茂, 渡辺理絵, 鳴海邦臣「旧日本軍による空中写真要図の作製時期と範囲」2004年度人文地理学会大会, 佛教大学, 2004/11/14(『2004年度人文地理学会大会研究発表要旨』 pp. 214-215)
- 長澤良太, 今里悟之, 渡辺理絵「旧日本軍撮影の空中写真の特徴とその利用可能性」日本地理学会 2004年度秋季大会, シンポジウム VII「外邦図の基礎的研究」広島大学, 2004/9/26(『日本地理学会発表要旨集』 66, p. 66)

【2005年度】

- 波江彰彦「戦後の大阪市におけるごみ量の変動と地域差」2005年度人文地理学会大会, 九州大学, 2005/11/13(『人文地理学会大会研究発表要旨』 pp. 88-89)
- 波江彰彦「大阪市におけるごみ管理システムの発展と変容」2005年度経済地理学会関西支部 4月例会, 関西大学 100周年記念会館, 2005/4/23(『経済地理学年報』 51(2), pp. 48-49)
- 渡辺英明「江戸時代の関東の市町における市場争論と市場絵図」2005年度歴史地理学会大会, 奈良大学, 2005/7/2(『歴史地理学』 47(4), p. 57)
- 小林茂, 岡田郷子, 渡辺理絵「近代朝鮮半島における日本の地図作製——秘密測量と土地調査事業——」科学研究費・基盤研究(A)(1)「アジアとその周辺地域における伝統的地理思考の近代地理学の導入による変容過程」(代表: 千田稔), 国際シンポジウム「韓国における伝統的地理思考と近代地理学の成立」国際日本文化研究センター, 2006/2/12
- 渡辺理絵「近世農村における天然痘の空間的拡散過程」2005年度日本地理学会, 茨城大学, 2005/9/18(『日本地理学会発表要旨集』 68, p. 45)
- 小林茂, 渡辺理絵「日本の旧植民地における土地調査事業と地形図作製」2005年度日本地理学会, 茨城大学, 2005/9/18(『日本地理学会発表要旨集』 68, p. 49)
- 渡辺理絵「近世農村における天然痘の拡散過程: 米沢藩領 14ヶ村を事例として」科学研究費, 基盤研究(B)(1)「近現代アジアにおける『健康』の社会経済史——疾病、開発、医療・公衆衛生」(代表: 脇村孝平), 2005年度第2回研究会, 阪南パラドーム, 2005/8/6

(3)その他(書評・翻訳など)

【2005年度】

- 小林茂, 渡辺理絵「東アジアの土地調査事業における広東省土地調査冊の位置づけに関するノート」片山剛編『近代東ア

『アジア土地調査事業研究ニューズレター』1, 大阪大学文学研究科片山剛研究室, pp. 14-23, 2006/3
小林茂, 渡辺理絵, 鳴海邦匡「戦場における日本軍の地図作製」(中村和郎編『地図からの発想』古今書院, 2005), pp. 32-33, 2005/9
渡辺理絵, 小林茂「20世紀初頭における日本—中国間の測量技術の移転——三角測量を中心として——」*Newsletter* (科学研究費基盤研究(A)(1)「アジアとその周辺地域における伝統的地理思考の近代地理学の導入による変容過程」国際シンポジウム), 4号「中国近代地理学の成立と伝統的地理思考」国際日本文化研究センター, pp. 55-62, 2005/4

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2004年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)
2005年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

なし

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度～2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)
なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004年度～2005年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4名
2004年度: 3名 2005年度: 1名
<内訳> 技術職 4名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2004年度 『外邦図研究ニューズレター』3号(2002年度～2004年度, 科学研究費補助金[基盤研究(A)(1)]中間報告書)
『「外邦図」の基礎的研究: その集成および地域環境資料としての評価をめざして』(2002年度～2004年度, 科学研究費補助金[基盤研究 A1]研究成果報告書)
2005年度 『外邦図研究ニューズレター』4号(2005年度, 国土地理協会助成報告書)
『ネパールにおけるマラリアに対する遺伝的適応の調査研究: 文化的適応との対比を通じて』(2003年度～2005年度, 科学研究費補助金[基盤研究 B1]研究成果報告書)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

人文地理学会第99回歴史地理研究部会・第82回地理思想研究部会(共催) 2005年7月30日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

2001 年度に待望の独立した共同研究室兼実習室ができ、ようやく本格的な学部教育・大学院教育が展望できるようになってきた。当初はコンピュータやプリンタなど関連機器が充分でなかったため、以後その充実に努めてきた。その結果、現代人文地理学の基本的手法である統計解析、とくに多変量解析の実習が支障なくできるようになってきた。

その効果はすぐにあらわれ、卒業論文では多変量解析を行うものが増加するとともに、付図も多くはコンピュータで作製するようになっている。あわせて、卒業論文・修士論文の中間発表会でのプレゼンテーションをパワー・ポイントで行うよう指導し、学生のコンピュータ・リテラシーの向上にも役立っている。

またフィールド・ワークに関する基礎的訓練を、室内・屋外での実習と現地調査実習の諸形態で実施し、調査能力を有する学生の養成に努めており、調査データに多変量解析を実行したような卒業論文・修士論文も提出されている。

このような経過のなかで、大学院生・研究生による学会誌への論文の投稿や学会での口頭発表も恒常化しつつある。また、小規模教室ながら 2 名の大学院生が日本学術振興会の特別研究員に採用されている。今後は学会誌に掲載される論文の増加とともに博士の学位の授与の増加を目指したい。なお、卒業生の就職は順調で、毎年ほぼ全員が一般会社、公的機関の職員のほか、システム・エンジニア、教員のような専門職にも就いている。

他方、放送大学の講義ビデオの作製や教科書『人文地理学』の編集ならびに執筆、さらに「シリーズ人文地理学」(朝倉書店)への寄稿など、教材の開発にも努力してきた。放送大学用の教科書とビデオは、2004 年度より本学の全学共通教育でも利用しており、この方面でも意義あるものになってきている。

今後は、学部学生も含め、学生数の増加にも努力したい。

12-2. 研究活動

教室構成員はそれぞれの分野で研究をすすめ、『年報 2002』の外部評価で指摘された課題のうち、大学院生の論文の学会誌への掲載の増加、単著の研究書による研究成果の公表などを実現しつつある。また研究成果の国際雑誌への掲載にも努力している。

他方、学外の研究者との連携を強め、代表者として科学研究費の取得に努めてきた。この効果により、現在、教室構成教員によって基盤研究(C)1 件が取得されているほか、国土地理協会、昭和シェル石油環境研究助成財団など、民間の財団の助成も得ている。

とくに小林が共同研究を主宰してきたプロジェクトでは、継続して旧日本軍がアジア太平洋地域で作製した地図の研究を目的とし、地図史的な観点のほか、地球環境問題へのアプローチにつながる資料の整備としても意義あるものとして取り組んでいる。これに向けて全国の研究者の参加をえて研究会を組織し、学会発表も積極的に行っている。また新聞や雑誌の取材に応じるほか、科研費により購入した旧日本軍作製の「兵要地誌図」、「空中写真要図」などを、大阪大学総合学術博物館関連の展覧会で展示公開し、社会への研究成果の還元を企図している。

海外に関係した活動としては、堤が 2005 年 10 月開催の A Workshop on “Social Capital and Development Trends in Japan’s and Sweden’s Countryside”に参加してチェアパーソンを務めるとともに、“Social Ties in Communities: Some Rural and Urban Cases in Japan,” というタイトルでの発表も行っている(MARG, Nichi’nan town, Tottori prefecture, Japan)。また、小林は科研費によるネパール調査のほか、片山剛教授(東洋史)の科研費による研究に参加し、台湾で大学院生の渡辺理絵とともに文献調査を行った。くわえて国際日本文化研究センターで開催された国際シンポジウムでも大学院生・卒業生とともに東アジアの近代地図作製に関する発表を行った。

当教室は小規模であるがゆえに、教員・大学院生が相互に協力して研究を進めざるをえない状況にあるが、今後はさらにその展開に向けて努力していきたい。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 小林 茂 教授

1948年生。1974年、京都大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、京都大学)。東京都立大学助手、九州大学講師・助教授・教授、大阪大学文学部教授を経て1999年現職。2003年より放送大学客員教授を務めている。専攻: 文化地理学/文化生態学。

1-1. 論文

- 小林茂「疾病にみる近世琉球列島」財団法人 沖縄県文化振興会 公文書管理部 資料編集室編『沖縄県史 各論編 近世』沖縄県教育委員会, pp. 570-597, 2006/3
- 鳴海邦匡, 小林茂「近世以降の神社林の景観変化」歴史地理学(歴史地理学会), 48(1), pp. 1-17, 2006/1
- 小林茂「外邦図の目録および一覧図について」待兼山論叢 日本学編(大阪大学文学会), 39, pp. 1-29, 2005/12
- Sasaki, H., Kawasaki, T., Ogaki, T., Kobayashi, S., Itoh, K., Yoshimizu, Y., Sharma, S., Acharya, G. P., "The prevalence of diabetes mellitus and impaired fasting glucose/glycaemia (IFG) in suburban Kathmandu: Ethnic aspect of a community-based study of native Nepalese and Tibetan immigrants during the democratic movement in 1990. *Journal of Health Science*, 27, pp. 41-48, 2005/3
- 小林茂「太宰府市の土地利用変化と景観」高倉洋彰, 磯望, 小林茂, 石松好雄, 長洋一編『太宰府市史 通史編 I』太宰府市, pp. 193-202, 2005/3
- Sasaki, H., Kawasaki, T., Ogaki, T., Kobayashi, S., Itoh, K., Yoshimizu, Y., Sharma, S., Acharya, G. P., "The prevalence of diabetes mellitus and impaired fasting glucose/glycaemia (IFG) in suburban and rural Nepal: the community-based cross-sectional study during the democratic movements in 1990", *Diabetes Research and Clinical Practice*, 67(2), pp. 167-174, 2005/2
- 小林茂, 渡辺理絵, 鳴海邦匡「アジア太平洋地域における旧日本軍の空中写真による地図作製」『待兼山論叢(日本学篇)』32, pp. 1-24, 2004/12
- 佐々木悠, 川崎晃一, 大柿哲朗, 伊藤和枝, 小林茂, 吉水浩, 斉藤篤志, Sashi Sharma, Gopal P. Acharya「ネパール王国チベット難民キャンプ(Jawalakhel Refugees Camp)における肥満・糖尿病の変遷」*Diabetes Frontier* (メディカルレビュー社), 15(5), pp. 711-716, 2004/10
- 渡辺理絵, 小林茂「日本—中国間の地図作成技術の移転に関する資料について」地図(日本国際地図学会), 42(3), pp. 13-28, 2004/9
- 佐々木悠, 川崎晃一, 大柿哲朗, 伊藤和枝, 小林茂, 吉水浩, 斉藤篤志, Sashi Sharma, Gopal P. Acharya「ネパール王国・丘陵農村における2型糖尿病の増加: コテン村(Kotyamg-rural village)における経年的有病率の変化について」*Diabetes Frontier* (メディカルレビュー社), 15(3), pp. 361-367, 2004/6

1-2. 著書

- 小林茂ほか『外邦図研究ニューズレター』4, 外邦図研究グループ, 大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室, 2006/3
- 小林茂編『ネパールにおけるマラリアに対する遺伝的適応の調査研究: 文化的適応との対比を通じて』(2003年度～2005年度, 科学研究費補助金[基盤研究(B)(1)]研究成果報告書), 2006/3
- 高倉洋彰, 磯望, 小林茂, 石松好雄, 長洋一編『太宰府市史 通史編 I』太宰府市, 2005/3
- 小林茂ほか『外邦図研究ニューズレター』3, 外邦図研究グループ, 大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室, 2005/3
- 渡辺正氏所蔵資料集編集委員会(世話人: 小林茂)『終戦前後の参謀本部と陸地測量部: 渡辺正氏所蔵資料集』大阪大学文学研究科人文地理学教室, 2005/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 小林茂, 渡部理絵「東アジアの土地調査事業における広東省土地調査冊の位置づけに関するノート」片山剛編『近代東ア

- ジア土地調査事業研究ニューズレター』1, 大阪大学文学研究科片山剛研究室, pp. 14-23, 2006/3
- 小林茂「探検部と全共闘」京大探検者の会編『京大探検部 1956-2006』新樹社, pp. 395-409, 2006/3
- 小林茂「近代日本の地図作製と東アジア：外邦図研究の展望」*E-journal GEO*(日本地理学会), 1(1), pp. 52-66, 2006/1
- 田辺員人, 亀井明德, 小林茂, 高倉洋彰, 磯望, 森川哲雄, 佐伯弘次, 川口郁子, 松尾孝司, 清水恵美子(座談会)『九州国博』を語り尽くす』*Museum Kyushu: 文明のクロスロード*(博物館等建設推進九州会議), 80, pp. 3-31, 2006/1
- 小林茂「<外邦図>へのアプローチ」地図情報(財団法人地図情報センター), 25(3), pp.4-6, 2005/11
- 小林茂, 渡辺理絵, 鳴海邦匡「戦場における日本軍の地図作製」中村和郎編『地図からの発想』古今書院, pp. 32-33, 2005/9
- 小林茂「(書評)横山勝三: シラス学——九州南部の巨大火砕流堆積物——」地理学評論(日本地理学会), 78(8), pp. 542-543, 2005/7
- 小林茂「里山の環境史と今日の里山観: 福岡県太宰府市での調査から」溝口常俊, 高橋誠編『自然再生と地域環境史』(2004年度名古屋大学総長裁量経費, 自然再生のための地域環境史創出プロジェクト報告書), 名古屋大学大学院環境学研究科, pp. 89-97, 2005/5
- 渡辺理絵, 小林茂「20世紀初頭における日本—中国間の測量技術の移転——三角測量を中心として——」*Newsletter* (2004年度~2006年度・科学研究費基盤研究(A)(1), 東アジアとその周辺地域における伝統的地理思考の近代地理学の導入による変容過程), 4(国際シンポジウム: 中国近代地理学の成立と伝統的地理思考), pp. 55-62, 2005/4
- 小林茂「はしがき」渡辺正氏所蔵資料集編集委員会(世話人, 小林茂)『終戦前後の参謀本部と陸地測量部: 渡辺正氏所蔵資料集』大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. i-iii, 2005/3
- 小林茂「本書の編集経過と構成について」渡辺正氏所蔵資料集編集委員会(世話人, 小林茂)『終戦前後の参謀本部と陸地測量部: 渡辺正氏所蔵資料集』大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 1-2, 2005/3
- 濱野真二郎, 小林茂「ネパールにおけるマラリアに対する文化的・生物学的適応: ヘモグロビン異常とマラリア」医学のあゆみ(医歯薬出版株式会社), 212(4), pp. 285-289, 2005/1

1-4. 口頭発表

- 小林茂, 岡田郷子, 渡辺理絵「近代朝鮮半島における日本の地図作製——秘密測量と土地調査事業——」科学研究費・基盤研究(A)(1)「アジアとその周辺地域における伝統的地理思考の近代地理学の導入による変容過程」(代表: 千田稔), 国際シンポジウム「韓国における伝統的地理思考と近代地理学の成立」国際日本文化研究センター, 2006/2
- Kobayashi, S., “Strategies to cope with smallpox in the peripheral areas of East Asia during the early modern era”. International workshop on ‘Epidemic Diseases, Environmental Changes and Global Governance in the Historical Perspective’, Osaka, 2005/12
- 小林茂, 渡辺理絵「日本の旧植民地における土地調査事業と地形図作製」日本地理学会発表要旨集, 68, p. 49, 2005/9
- 鳴海邦匡, 小林茂「近世以降の神社林の景観変化: 北摂地域を中心として」歴史地理学会大会, 奈良大学, 2005/7
- 小林茂, 濱野真二郎, 白川卓, 鈴木朗「マラリアに関連する赤血球遺伝子の頻度と住民のマラリア観の関係」日本地理学会発表要旨集, 67, p. 159, 2005/3
- 溜宣子, 白川卓, 濱野真二郎, 中村安秀, 小林茂「ネパールの小中学生におけるサラセミアの分子遺伝学的解析」第23回国際医療保健学会西日本地方会, 2005/3
- 小林茂「里山の環境史と今日の里山観: 福岡県太宰府市での調査から」国際シンポジウム: 自然再生と地域環境史, 名古屋大学環境総合館レクチャーホール, 2005/2
- 渡辺理絵, 小林茂「20世紀初頭における日本—中国間の測量技術の移転——三角測量を中心として——」科学研究費基盤研究(A)(1)「東アジアとその周辺地域における伝統的地理思考の近代地理学の導入による変容過程」国際シンポジウム, 国際日本文化研究センター, 2005/2
- 小林茂, 鳴海邦匡, 渡辺理絵「旧日本軍による空中写真要図の作製時期と範囲」2004年度人文地理学会大会発表要旨, pp. 214-215, 2004/11
- 渡辺理絵, 小林茂「日中間における地図作製技術の移転について: 広西省を中心として」2004年度人文地理学会大会研究発表要旨, pp. 88-89, 2004/11

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

小林茂 第4回人文地理学会賞, 人文地理学会, 2004/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(B)(1)、代表者：小林茂

課題番号：15406009

研究題目：ネパールにおけるマラリアに対する遺伝的適応の調査研究：文化的適応との対比を通じて

研究経費：2004年度 3,700千円

2005年度 1,600千円

研究目的：

1996年以來のネパール中間山地低地部での調査により、高度1200メートル以下に居住してきた民族集団では高頻度(54%)で α +サラセミアがみられるが、それよりも高所に居住し、マラリア感染をさけてきた民族集団では、この頻度が低い(4～14%)ことが判明した。この成果をもとに関係住民のマラリア感染をDNA診断により検査したところ、正常の住民では24.2%に達するのに対し、 α +サラセミアの住民では12.9%と大きな差があることが判明した。くわえて年齢別に乾季の感染率を検討したところ、10歳以下の子どもでは8.5%と、それ以上の年齢層(18.8%)に比べていちじるしく低いことも判明した。

本研究では、これらの成果をもとにとくに学齢期の子どもを中心にマラリア感染の季節変動を検討する。子どもは、成人のようにたび重なるマラリアの感染を受けておらず、免疫が未発達で、 α +サラセミアとマラリア感染との関係が明確にあらわれると考えられる。またあわせて、 α +サラセミアについて、ホモ・ヘテロ・健常の赤血球でマラリア原虫の培養実験を行い、その差異を検討する。さらに他の寄生虫についても調査を行う。

1-6-2. 2002年度～2004年度、基盤研究(A)(1)、代表者：小林茂

課題番号：14208007

研究題目：「外邦図」基礎的研究：その集成および地域環境資料としての評価をめざして

研究経費：2004年度 直接経費 8,100千円 間接経費 2,430千円

研究の目的：

旧日本軍が作成した「外邦図」と呼ばれる現在の日本領土外の地図は、現在、国内では東北大学・お茶の水女子大学・京都大学・広島大学・東京大学・国立国会図書館など、海外ではアメリカ議会図書館・アメリカ地理学協会・大英図書館などに分散している。

本研究の目的は、①分散して所蔵され一部は未整理状態にある外邦図の全貌を把握し、その研究・利用にむけて、作製・出版年代や縮尺などを記載した所在目録を整備し公開する、②陸軍参謀本部からの持ち出し作業や整理作業にあたった関係者にインタビューし、その経緯や当時の実情を復元する、③戦時下の地図作製に関連する旧日本軍の組織や経過を解明する、④外邦図の保存および利用の簡便化をはかるため、画像データベース化を進め、戦前の地形や植生を克明に示す資料としてGISの適用も試みる、以上の4点である。

この作業を通じて、旧日本軍作製地図の所在ならびに資料価値を確定するとともに、貴重な地域環境資料として外邦図の再利用をはかることを最終的な目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2005年度、研究助成金、助成金獲得者(外邦図研究グループ代表者)：小林茂

助成金名：財団法人国土地理協会「社会教育機関等への助成」

研究題目：外邦図の研究

助成団体名：財団法人国土地理協会

助成金額：2,000 千円

1-8. 学会役員等の引き受け状況

福岡市史考古専門部会・専門委員	2006年1月～現在
人文地理学会・協議員	2004年11月～現在
同上・理事(集会担当)	2002年11月～2004年10月
同上・評議員	2000年11月～2004年10月
日本国際地図学会・評議員	2003年2月～現在
農耕文化研究振興会・『農耕の技術と文化』編集委員	2001年4月～現在
国立民族学博物館・共同研究員	2005年10月～2006年3月
柳川市史専門研究員	2005年5月～2006年3月
同上	2004年5月～2005年3月
日本地理学会・代議員	2004年4月～2006年3月
広島大学総合地誌研究資料センター・客員研究員	2003年8月～2006年3月
太宰府市史編集委員会・委員	1995年10月～2006年3月
『文明のクロスロード: Museum Kyushu』(博物館等建設推進九州会議)編集委員	1984年6月～2006年3月
太平洋学術研究連絡委員会・委員(日本学術会議)	2003年10月～2005年9月
(財)国土地理協会・研究助成審査員	2001年～2004年

2. 堤研二 助教授

1960年生。1986年3月、九州大学大学院文学研究科修士課程修了(史学・地理学専攻)。文学修士。1986年4月、国立佐佐保工業高等専門学校助手。1988年4月、同校講師。1990年10月、島根大学法文学部講師。1993年7月、同学部助教授。1999年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。専攻：人文地理学。

2-1. 論文

堤研二「高島炭鉱閉山に伴う人口流出の分析」『大阪大学文学研究科紀要(モノグラフ編)』46-2, v+pp. 1-113, 2006/3

堤研二「千里ニュータウン」金田章裕, 石川義孝編『近畿圏』(「日本の地誌」8), pp. 169-175, 朝倉書店, 2006/3

Tsutsumi, Kenji, "Social Ties in Communities: Some Rural and Urban Cases in Japan," Ito, K., Westlund, H., Kobayashi, K. and Hatori, T.(eds.) "*Social Capital and Development Trends in Rural Areas Vol.2*," pp.115-127(Chapter 9), MARG(Kyoto), 2006/3

Tsutsumi, Kenji, "Fundamental Functions of Living, Social Capital and Agents in a Small Community: A Case in Depopulated Areas in Japan," Kobayashi, K., Westlund, H. and Matsushima, K.(eds.) "*Social Capital and Development Trends in Rural Areas*," pp.131-138(Chapter 8), MARG(Kyoto), 2005/6

Mizuoka, Fujio, Mizuuchi, Toshio, Hisatake, Tetsuya, Tsutsumi, Kenji and Fujita, Tetsushi "The Critical Heritage of Japanese Geography: Its Tortured Trajectory for Seven Decades," *Society and Space* (Environment and Planning, Ser.D)23-3, pp.453-473, 2005/6

(電子ジャーナルによるフルテキスト : <http://www.envplan.com/epd/fulltext/d23/d2204r.pdf>)

Tsutsumi, Kenji, "Aging, Landscape, Restructuring and Conflicts in an Old New Town: Senri New Town in Osaka Metropolitan Area," Thomas Feldhoff and Winfried Flüchter (eds.) "*Shaping the Future of Metropolitan Regions in Japan and Germany: Governance, Institutions and Place in New Context*" (The 9th Japanese-German Geographical Conference, Ruhr University Bochum, Bochum, Germany, published in Duisburg): No1:ISSN 1861-3225, pp.171-177, 2005

堤研二「高度成長期の変貌」『太宰府市史・通史編・第三編』太宰府市, pp. 662-698, 2004/9

堤研二「社会地理学研究の系譜」『空間の社会地理』(水内俊雄編), 朝倉書店, pp. 1-22, 2004/6

2-2. 著書

堤研二『構造改革期における農山村・人口減少地域の変動と政策課題』2003年度～2004年度日本学術振興会科学研究費
基盤研究(C)(1)研究成果報告書, 研究代表者: 堤研二, 2005/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

堤研二「長崎県高島炭鉱閉山に伴う人口流出: 移動者の属性・移動パターンと転出先での生活状況」2005年人文地理学
会大会(九州大学六本松地区, 福岡県福岡市), 2005/11

Tsutsumi, Kenji, "Social Ties in Communities: Some Rural and Urban Cases in Japan," A Workshop on "Social
Capital and Development Trends in Japan's and Sweden's Countryside "(MARG), (Nichi'nan town, Tottori
prefecture, Japan), 2005/10

堤研二「太宰府の観光産業史」太宰府発見塾(太宰府市まるごと博物館推進プロジェクト会議・太宰府市まるごと博物館
推進室), 第12回(太宰府館, 福岡県太宰府市), 太宰府発見塾, 2005/9

Tsutsumi, Kenji, "Aging, Landscape, Restructuring and Conflicts in an Old New Town: *Senri New Town in Osaka*
Metropolitan Area". The 9th Japanese-German Geographical Conference (Ruhr University Bochum, Bochum,
Germany), 2004/9

Tsutsumi, Kenji, "Fundamental Functions of Living in a Small Community: Some Cases in Depopulated Areas in
Japan". The Workshop on "Social Capital and Development Trends in Japan's and Sweden's
Countryside"(Mid-Sweden University, Östersund, Sweden), 2004/8

堤研二「環境・地域・暮らしと地理的思考」大阪府第一学区校長会依頼事業(出前講義), 大阪府立池田高等学校(大阪府池
田市), 2004/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 2005年度国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 大阪大学, 2006/2

堤研二 第1回昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9

堤研二 地域地理学会賞, 地域地理学会, 1997/7

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003年度～2004年度(2年間)、日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)(1)、代表者: 堤研二

課題番号: 15520497

研究題目: 構造改革期における農山村・人口減少地域の変動と政策課題

研究経費: 2004年度 1,400千円

研究の目的:

本研究の研究目的のキーワードは、「点検」、「現状分析」、「展望」の3つである。すなわち、構造改革による大変動期を迎えた中で人口減少地域・農山村を対象として、(1)過疎政策や種々の振興法政策などのこれまでの地域政策を「点検」し、(2)当該地域での現実問題を整理して、「現状分析」を行い、(3)これらの地域がいかなる方向に動きつつあるのか、またそれに対応してどのような政策課題や地域生活機能の問題が新たに生じ、今後構想されるべき政策・対策は何かを「展望」するのが本研究の目的である。(1)の「点検」に関しては当該地域の社会経済的データをもとにデータベース(DB)を構築し、これまでの過疎行政・振興法行政の効果・功罪を点検していく(初年度～2年度目前半)。(2)の「現状分析」に関しては、マクロなスケールレベルでのDBに基づいた分析をふまえながら、研究組織構成メンバー6人が分担して実証的地域調査を行い、当該地域の現状・問題・課題・動向を整理する(初年度後半～2年度目前半)。とくに、ポスト公共事業・ポスト企業誘致の時代における就業問題、自立的・自律的あるいは内生的な住民組織や地域社会活動、森林

をはじめとする農山村の基幹産業と国土・環境保全との連携関係、さらにエコツーリズムやグリーンツーリズムなどの新展開に焦点を絞る。(3)の「展望」に関しては、21世紀の構造改革下での地域政策の課題・方法論を検討する。(2年度目)

2-6-2. 2005年度～2007年度(3年間)、日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)(1)、代表者：堤研二

課題番号：17520534

研究題目：人口減少期の地域社会における集落システムと生活機能の維持に関する地理学的研究

研究経費：2005年度 1,300千円

研究の目的：

本研究の目的は、広く人口減少期に突入してきている我が国の地域社会スケールでの人口動向をふまえながら、集落単位での地域社会維持システムを点検し、人口が減少していく地域社会における将来のプロジェクションをシミュレートして、ミクロなスケールでの地域政策・地域生活維持を検討する方向性を打ち出すことにある。また、こうした研究を実施するにあたって、これまで申請者が行ってきた研究をもとに構築した研究のフレームワークを精緻化する作業も行う。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2005年度(2005年9月～2006年8月)(1年間)、昭和シェル石油環境研究助成財団・一般研究、代表者：堤研二

助成金名：昭和シェル石油環境研究助成財団・一般研究

研究題目：水をめぐる環境コモンズと social capital

助成団体名：昭和シェル石油環境研究助成財団

助成金額：2005年度 1,500千円

研究の目的：

本研究の目的は、以下の3点に重点を置いて、水をめぐる環境コモンズの課題と展望を検討することにある。すなわち、(1)人口減少地域における水源地に立地する共有・共同利用的な森林や水面等に代表される「環境コモンズ」の本質的可能性を現地調査に即しつつ追究し明らかにすること、(2)それらを基礎的資源として位置付けながら、それらを育むコミュニティにおける新しい社会資本概念(social capital)、とくに地域生活機能における社会的紐帯や主体的行為者(agent)集団について、その持続性や地域連携・地域間交流の実態と可能性に着目して問題点を整理して実現可能なモデルを創案すること、(3)人口減少時代における環境コモンズに関する政策やそれをめぐる生活のプロジェクションを考察すること、である。具体的には、とくに環境コモンズを題材ないし原資とした地域連携教育や、水源地域における上流・下流域住民間交流、水源地域におけるコミュニティ生活機能維持の為の積極的・自立的活動、都市近郊地域における環境保全活動組織・NPO等に着眼して、21世紀の人口減少時代における環境コモンズの役割をコミュニティの視点から考究していく。

2-8. 学会役員等の引き受け状況

【学会役員など】

人文地理学会・評議員(任期2年2期)	2001年度～現在
同上・編集委員(任期1年2期)	2005年度～2006年度
同上・選挙管理委員長(任期1年)	2004年度

【公共団体等関連委員など】

島根県隠岐郡7町村ほか 隠岐空港整備利用促進協議会オブザーバー	2001年度～現在
島根県・島根県中山間地域研究センター地域づくり支援ブレーン	1998年度～2004年度
島根県安来市ほか5町村・鉄の道文化圏調査研究委員	1997年度～2004年度
福岡県太宰府市・太宰府市史資料調査員	1988年度～2004年度

2-12 日本文学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

日本文学専門分野は、所属教員の各時代にわたる専門性を活かし、古代から現代に至るまでの文学作品と作品を生み出す日本の言語・文化の諸相を研究対象とする。隣接専門分野である国語学・比較文学と連携し、広い視野に立った教育と研究活動を行っている。

系統立てられた教育と研究の推進のため、通常の講義・演習以外に研究会を組織することもあり、また、本学以外で開催される研究会・学会へへの学生・院生の積極的な出席を促し、他大学・他分野の研究者との研究上の交流を促進している。論文作成にあたっては、全教員・全学生の参加する卒業論文・修士論文作成のための中間発表会を国語学・比較文学と合同で行っている。

成果の公表に関しては、国語学とともに、大阪大学国語国文学会を組織し、学会誌『語文』を年 2 回刊行、研究成果発表と卒業生・名誉教授等との交流の場として大阪大学国語国文学会総会を毎年 1 度開催し、大学院生・学部生の研究環境の向上を図っている。学生や客員研究員との交流や意見交換を行うべく、年に 2 度、春と夏に、研修旅行・ハイキングを行い、日本文学関係の各種の研究資料や臨地調査を実施している。

各国からの要請にも応える形で留学生の受け入れも積極的に行っている。現在は、アジア、オセアニア、中東、ヨーロッパの各地域からの留学生が在籍しており、研究方法の模索と博士論文の作成に及ぶ指導を行っている。また、本国内で博士号を取得する研究者・大学院生に対しては、ディサテーション・リサーチのための 1~2 年間の研究生としての留学にも応えている。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 3 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：出原 隆俊、飯倉 洋一、荒木 浩

助教授：加藤 洋介

助手：海野 圭介

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
*学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
56	11	25	0	0	3	1	0	3

*国語学と合わせて ※うち留学生 9 名、社会人学生 3 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	*学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	8	9	3	3	1
'05	8	9	4	5	2
小計	16	18	7	8	3

*国語学と合わせて

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	3	0	3
'05	5	1	6
計	8	1	9

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

于永梅 「平安時代漢詩文における中国文学受容の研究」 2006/3

主査：後藤昭雄 副査：飯倉洋一、岡島昭浩

黄如萍 「志賀直哉初期〈犯罪〉作品研究」 2006/3

主査：出原隆俊 副査：内藤高、荒木浩

高兵兵 「菅原道真詩文研究——継承と独創——」 2006/3

主査：後藤昭雄 副査：荒木浩、高橋文治

徳永光展 「夏目漱石『心』論——〈曖昧化〉の構造——」 2005/3

主査：出原隆俊 副査：内藤高 飯倉洋一

中川真弓 「中世における伝承と信仰の基盤」 2005/3

主査：荒木浩 副査：後藤昭雄、平雅行

中山一麿 「中世仏教圏に於ける言説の形成と展開に関する研究」 2006/3

主査：荒木浩 副査：後藤昭雄、平雅行

仁木夏実 「院政期漢詩文の研究」 2004/10

主査：後藤昭雄 副査：荒木浩、梅村喬

箕浦尚美 「室町物語とその宗教環境の研究」 2006/3

主査：荒木浩 副査：後藤昭雄、天野文雄

【論文博士】

細谷博 「小林秀雄論 孤独から無私へ」 2006/3

主査：出原隆俊 副査：内藤高、飯倉洋一

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	5	1	15	0	2	23
'05	4	1	8	0	3	16
計	9	2	23	0	5	39

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	6	21	0	0	27
'05	0	4	14	0	0	18
計	0	10	35	0	0	45

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004 年度】

石原のり子『大鏡』における「魂」観の再検討『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会），36，pp. 30-41，2004/10

井真弓「女君の人物描写に見る『石清水物語』の救済の構図」『文学・語学』（全国大学国語国文学会），179，pp. 22-30，2004/8

井真弓『石清水物語』の後日談に示される「不義の子」の可能性とその意義『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会），35，pp. 77-89，2004/4

于永梅「平安時代の漢詩文における「猿声」「鹿鳴」の受容」『待兼山論叢 文学篇』（大阪大学大学院文学研究科），38，pp. 1-16，2004/12

岡崎昌宏「辻邦生「サラマンカの手帖から」論」『解釈』（解釈学会），50-7・8，pp. 48-53，2004/8

木下美佳「泣く昔男——『伊勢物語』の物語構成——」『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会），36，pp. 1-10，2004/10

黄如萍「志賀直哉「児を盗む話」論——父親の〈言葉〉をめぐって——」『阪大近代文学研究』（大阪大学近代文学研究会），3，pp. 28-43，2005/3

黄如萍「志賀直哉「濁つた頭」論——「ジャスティファイ」を中心に——」『解釈』（解釈学会編集），51-1.2，pp. 12-18，2005/2

越野優子「伝国冬本源氏物語の世界」『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会），35 pp. 59-76 2004/4

坂井二三絵「芥川龍之介『お律と子等と』論——複雑さの中から浮かび上がるもの——」『阪大近代文学研究』（大阪大学近代文学研究会），3，pp. 44-58，2005/3

辻村尚子「秋成の宇万伎入門——『文反古』所収書簡をめぐって——」『上方文藝研究』（上方文藝研究会の会），1，pp. 76-84，2004/5

徳永光展“Time in Memoranda as a Reflection of Time in Testament: A Study of Kokoro by Sōseki Natsume.”, Comparative Culture, 10(December 2004), pp. 209-215, 2004/12

徳永光展「静への眼差し——夏目漱石『心』論——」『近代文学論集』（日本近代文学会九州支部），30，pp. 39-47，2004/11

中井賢一「柏木不在の論理——柏木・弁少将の機能と夕霧・弁少将の対峙の構造——」『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会），35，pp. 32-58，2004/4

中川真弓「醍醐寺藏『菅茶集』について——付翻刻『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文

- 学の発生——』(科学研費成果報告書, 基盤研究(C)(2) 課題番号 14510462 研究代表者 荒木浩 2002年度~2004年度), pp. 87-116, 2005/3
- 中川真弓「国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧蔵『菅芥集』について——付翻刻『小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』(大阪大学大学院文学研究科共同研究成果報告書), pp. 306-323, 2005/3
- 中川真弓『宝物集』梅檀像震旦将来譚考『語文』(大阪大学国語国文学会), 82, pp. 13-23, 2004/6
- 西尾元伸「泉鏡花『沼夫人』論『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 3, pp. 13-27, 2005/3
- 西村真由美「宮沢賢治『なめとこ山の熊』論——小十郎の持つ二面性——』『語文』(大阪大学国語国文学会), 83, pp. 12-24, 2004/12
- 細川知佐子「定家の百首歌における「有明」——四季歌を中心に——』『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 35, pp. 100-111, 2004/4
- 溝端善子「正宗白鳥『何處へ』論『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 3, pp. 1-12, 2005/3
- 松本陽子「武田泰淳『非革命者』論『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 3, pp. 59-71, 2005/3
- 山田理恵「『後水尾院和漢千句』における固有名詞の特徴について——和漢聯句と和漢俳諧との比較——』『語文』(大阪大学国語国文学会), 83, pp. 1-11, 2004/12
- 【2005年度】**
- 石原のり子『大鏡』における天皇の〈声〉——一条天皇と三条天皇を中心に——』『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 38, pp. 28-43, 2005/10
- 石原のり子『大鏡』における兼家と三条天皇——もうひとつの系譜——』『中古文学』(中古文学会), 76, pp. 30-39, 2005/10
- 岡崎昌宏「『王国』と『運命』——辻邦生「遠い園生」論——』『解釈』(解釈学会), 50-7・8, pp. 22-27, 2005/8
- 恩田雅和「『近代日本の開化』と和歌山』『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 4, pp. 1-17, 2006/3
- 衣笠泉, 神明あさ子, 辻村尚子, 浜田泰彦, 篁田将樹「忍頂寺文庫蔵 市川团十郎関係書解題』『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』(大阪大学大学院文学研究科), pp. 17-38, 2006/3
- 高兵兵「菅原道真の「詩友」をめぐって——白居易との比較を中心に——』『語文』(大阪大学国語国文学会), 84・85, pp. 12-24, 2006/2
- 越野優子「『柏木』、『柏木の右衛門督』、『柏木権大納言』のこと——享受史を辿りつつ——』『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 38, pp. 28-43, 2005/10
- 勢田道生, 村山識「笠置寺蔵古筆切・懐紙資料三点』『小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開』1, pp. 116-119, 2006/2
- 丹下暖子『建礼門院右京大夫集』前半部の構成』『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 38, pp. 28-43, 2005/10
- 陳秉珊『徒然草』第七段と「莊子」再考——「夏の蟬」をめぐって——』『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 38, pp. 28-43, 2005/10
- 辻村尚子「其角『新山家』の方法』『近世文藝』(日本近世文学会), 83, pp. 1-13, 2006/1
- 辻村尚子「青木春澄の出自について』『上方文藝研究』(上方文藝研究会), 2, pp. 73-82, 2005/5
- 西尾元伸「芥川作品の中の〈鏡花〉——『奇怪な再開』を中心として——』『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 4, pp. 33-46, 2006/3
- 西村真由美「『宮沢賢治『貝の火』論——父と子の欲をめぐって——』『待兼山論叢 文学篇』(大阪大学文学会), 39, pp. 19-35, 2005/12
- アブドエルマクスード・ワーイル「梶井基次郎「ある崖上の感情における「窓」に関する一考察』『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 4, pp. 47-57, 2006/3
- 飯倉洋一, 篁田将樹「翻刻 忍頂寺文庫蔵 七代目团十郎の配り本二種』『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』(大阪大学大学院文学研究科), pp. 17-38, 2006/3

(2)口頭発表

【2004年度】

- 石原のり子『『大鏡』における兼家と三条天皇——もうひとつの系譜——』中古文学会 2004年度秋季大会, 広島大学, 2004/10/10
- 石原のり子『『大鏡』言葉を発する天皇』大阪大学古代中世文学研究会第 161 回例会, 大阪大学, 2004/7/17
- 井真弓『『石清水物語』の主人公造型に見る物語の構図』2004 年度中古文学会春季大会, 東京大学, 2004/5/23(『2004 年度中古文学会春季大会研究発表資料』 pp. 3-4, pp. 25-28)
- 奥田雅子『『徒然草』と『十訓抄』——出典の問題について——』大阪大学古代中世文学研究会第 159 回例会, 大阪大学, 2004/5/8
- 木下美佳「〈禁忌の恋〉における『伊勢物語』の語り」大阪大学古代中世文学研究会第 167 回例会, 大阪大学, 2005/2/20
- 木下美佳『『伊勢物語』泣く「昔男」——八十三段の場合——』大阪大学古代中世文学研究会第 160 回例会, 大阪大学, 2004/6/26
- 高兵兵「菅原道真の居住空間の表現と白居易」大阪大学古代中世文学研究会第 158 回例会, 大阪大学, 2004/4/11
- 越野優子「『柏木』の呼称——伝国冬本を素材として」大阪大学古代中世文学研究会第 162 回例会, 大阪大学, 2004/9/18
- 越野優子「伝国冬本の「ひかるきみ」——桐壺巻を中心に」物語研究会第 292 回例会, 横浜市立大学, 2004/6/19
- 澁谷浩史「西行の伊勢移住の意図」大阪大学古代中世文学研究会第 165 回例会, 大阪大学, 2004/12/18
- 鈴木隆広『『無名草子』と女性』大阪大学古代中世文学研究会第 167 回例会, 大阪大学, 2005/2/20
- 勢田道生『『新葉和歌集』における後醍醐天皇とその時代』大阪大学古代中世文学研究会第 166 回例会, 大阪大学, 2005/1/29
- 高嶋藍『『とはすがたり』における二条の庇護と後見——御所追放以前について——』大阪大学古代中世文学研究会第 158 回例会, 大阪大学, 2004/4/11
- 高山明子『『有明の別』左大臣と女院——巻二・三の構造——』大阪大学古代中世文学研究会第 159 回例会, 大阪大学, 2004/5/8
- 丹下暖子『『建礼門院右京大夫集』前半部の構想』大阪大学古代中世文学研究会第 166 回例会, 大阪大学, 2005/1/29
- 陳秉珊「兼好の無常観における荘子の齊物論」大阪大学古代中世文学研究会第 160 回例会, 大阪大学, 2004/6/26
- 辻村尚子「其角『新山家』考」大阪俳文学研究会, 柿衛文庫, 2005/2/20
- 辻村尚子「其角『新山家』の方法」大阪大学国語国文学会, 大阪大学中之島センター, 2005/1/8
- 中井賢一「夕霧不在の論理」大阪大学古代中世文学研究会第 164 回例会, 大阪大学, 2004/11/13
- 中川照将『『源氏物語』転移する不審』大阪大学古代中世文学研究会第 165 回例会, 大阪大学, 2004/12/18
- 中川真弓『『菅茶集』についての基礎的考察』大阪大学古代中世文学研究会第 162 回例会, 大阪大学, 2004/9/18
- 中川真弓「続群書類従所収『願文集』の嵯峨念仏房関係願文について」中世文学会 2004 年度春季大会, 成蹊大学, 2004/5/30(『中世文学会平成 16 年度春季大会資料集』 p. 4, pp. 29-34)
- 中村友美「真観と資経本私家集」大阪大学古代中世文学研究会第 163 回例会, 大阪大学, 2004/10/30
- 白雨田「宇治十帖における〈香〉の力」大阪大学古代中世文学研究会第 161 回例会, 大阪大学, 2004/7/17
- 日名子達郎「朝家の守護者としての頼光」大阪大学古代中世文学研究会第 164 回例会, 大阪大学, 2004/11/13
- 細川知佐子「定家の百首歌における「有明」」中世文学会 2004 年度春季大会, 成蹊大学, 2004/5/30(『中世文学会平成 16 年度春季大会資料集』)
- 松本陽子「武田泰淳『非革命者』論」大阪大学国語国文学会, 大阪大学中之島センター, 2005/1/8

【2005年度】

- 石原のり子『『大鏡』における一条摂政家と中関白家』大阪大学古代中世文学研究会第 173 回例会, 大阪大学, 2005/10/15
- 門屋敦『『平家物語』における園城寺の描写について』大阪大学古代中世文学研究会第 176 回例会, 大阪大学, 2006/2/4
- 高兵兵「菅原道真の白色好尚と日本の美意識」大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2006/1/14
- 高兵兵「菅原道真の交友——〈贈物詩〉をめぐる——」大阪大学古代中世文学研究会第 168 回例会, 大阪大学, 2005/4/16
- 木下美佳「「宮仕へ」する昔男——『伊勢物語』における機能——」大阪大学古代中世文学研究会第 173 回例会, 大阪

大学, 2005/10/15

越野優子「源氏物語に於ける花々の喩——諸本によって成立し、また崩されるもの」大阪大学古代中世文学研究会第 169 回例会, 大阪大学, 2005/5/21

坂井二三絵「森鷗外『電車の窓』の位相——「僕」の作り出す「女」の〈物語〉——」大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2006/1/14

鈴木隆広「『無名草子』の享受」大阪大学古代中世文学研究会第 172 回例会, 大阪大学, 2005/9/18

勢田道生「宗良親王と京都・二条為定」大阪大学古代中世文学研究会第 170 回例会, 大阪大学, 2005/6/25

勢田道生「新葉和歌集における後醍醐天皇とその時代」和歌文学会第 87 回関西例会, 奈良女子大学, 2005/4/23

高嶋藍「『とはずがたり』の女性——装束描写を着眼点に——」大阪大学古代中世文学研究会第 172 回例会, 大阪大学, 2005/9/18

丹下暖子「『建礼門院右京大夫集』前半部における資盛と隆信——「色好むと聞く人」をめぐって——」大阪大学古代中世文学研究会第 171 回例会, 大阪大学, 2005/7/31

陳秉珊「『徒然草』における「孔子」と「顔回」——『徒然草』第二百一段を中心に——」大阪大学古代中世文学研究会第 175 回例会, 大阪大学, 2005/12/17

辻村尚子「其角と紀行——『新山家』をめぐって——」日本近世文学会, 立教大学, 2005/6/12

白雨田「女三宮の仏道修行について——「何心なし」から「一心不乱」まで」大阪大学古代中世文学研究会第 176 回例会, 大阪大学, 2006/2/4

日名子達郎「御伽草子の鬼退治について——鬼の変容を中心に——」大阪大学古代中世文学研究会第 170 回例会, 大阪大学, 2005/6/25

細川知佐子「『久安百首』四季歌の歌材と構成——俊成・顕輔・崇徳院をめぐって——」大阪大学古代中世文学研究会第 174 回例会, 大阪大学, 2005/11/27

村山識「詞書「思ひつづく」考」大阪大学古代中世文学研究会第 177 回例会, 大阪大学, 2006/3/4

(3)その他(書評・翻訳など)

【2004 年度】

徳永光展「松田文子著『日本語複合動詞の習得研究——認知意味論による意味分析を通して——』(ひつじ書房)『比較文化』10, pp. 225-228, 2004/12

徳永光展「国際日本近代文学研究の必要性——ヨーロッパ日本研究協会ワルシャワ大会から——」『全国語学教育学会・日本教育カウンセラー協会山口支部研究紀要』9, pp. 158-164, 2004/8

徳永光展「翻訳研究の領域」『全国語学教育学会・日本教育カウンセラー協会山口支部研究紀要』9, pp. 164-169, 2004/8

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2004 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2005 年度 PD : 2 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 2 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

なし

6. 専門分野出身の研究者

(2004 年度~2005 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

中川照将 大学院研究生, 皇學館大学文学部, 講師, 2005/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004 年度～2005 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3 名

2004 年度：2 名 2005 年度：1 名

<内訳> 教員 1 名 国会図書館司書 1 名 朝日新聞記者 1 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 5 名

2004 年度：3 名 2005 年度：2 名

9. 刊行物

2004 年度 『阪大近代文学研究』(阪大近代文学研究)2 号
『語文』(大阪大学国語国文学会)82、83 輯
『詞林』(大阪大学古代中世文学研究)35、36 号
『上方文藝研究』(上方文藝研究の会)1 号
『小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』

2005 年度 『阪大近代文学研究』(阪大近代文学研究)3 号
『語文』(大阪大学国語国文学会)84・85 輯合併号
『詞林』37、38 号
『上方文藝研究』(上方文藝研究の会)2 号
研究成果報告書『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

[国内学会の開催]

2005 年度 大阪大学国語国文学会

2006 年 1 月

2004 年度 大阪大学国語国文学会

2005 年 1 月

[研究会の開催]

大阪大学古代中世文学研究会 第 158 回～第 178 回

2004 年 4 月 11 日～2006 年 3 月 25 日

2005 年度文学研究科共同研究「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」公開研究会

2006 年 1 月 17 日, 2005 年 10 月 30 日

2004 年度大阪大学大学院文学研究科共同研究「小野随心院所蔵の密教文献・

図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求」(2 回開催)

2005 年 1 月 17 日, 2004 年 10 月 30 日

上方読本を読む会(15 回開催)

2006 年 2 月 18 日, 2005 年 12 月 17 日,

11 月 26 日, 10 月 15 日, 7 月 16 日,

6 月 19 日, 5 月 21 日, 4 月 23 日,

2004 年 12 月 11 日, 11 月 13 日,

10 月 16 日, 7 月 10 日, 6 月 19 日,

5 月 15 日, 4 月 17 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

専門分野主催の研究会等の活動については、11. 及び 13-2. に情報が関連するため、両項に詳述した。

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

日本文学専門分野は、学部では同一専修を構成する国語学、隣接専門分野の比較文学と連携し、学生の指導を行っている。大学院研究発表会を2回、学部卒業論文発表会・大学院修士論文中間発表会を1回行い、全教員・学生の参加のもと、のべ1週間に涉って幅広い視点から指導を行っている。その発表は、学会発表に準じ、予稿集の提出、時間厳守の発表を課している。大学院生はその成果を踏まえ、各研究会・学会への発表へと展開し、1月の論文提出に備えている。

教員は、バランスよく各時代をカバーし、多様な演習・講義を提供している。ただし、本専門分野には非常勤講師がきわめて少なく、近隣の京都大学・奈良女子大学などに比べると数分の一にすぎない。そこで研究会や学会を利用した多様な研究者との交流を院生に指導し、多様な授業提供など、教員の最大限の負担によってカバーしようとしている。

研究に必要な度の高い書籍・雑誌およびCD-ROMは可能なかぎり研究室に常備されるよう配慮されている。学生用PCや必要なソフトも十分にはいかないまでも、かなり整備されている。

国際化に関連して、21世紀COE科目として2004年度には「三宝感応要略録を読む」、2005年度には「英語論文から見る日本文学」を開講。日本文学の国際化という課題に対応し、学生にも自覚を促している。またさまざまな地域から留学してくる学生へも可能な限りきめ細かく対応しているが、日本文学の基礎知識をいかに習得させるかなどの課題もある。

大学院生は総じて研究熱心であり、研究室は夜遅くまで活気にあふれている。ただし、研究室の絶対的なスペースの不足と、分散して位置していることの不便さを解消することが望ましいと思われる。

学生と教員との交流や研修を目的として、日本文学にゆかりの地を訪ねて、春には日帰りのハイキングを、夏には1・2泊の研修旅行を行っている。

12-2. 研究活動

個々の教員は、それぞれ中心的に研究するジャンルを中心に学界で広く活動し、院生もまた積極的に学会に参加し、成果の公表や情報の収集に努めているが、それら個々の活動・発表や学術論文執筆の詳細などについては本書に別掲されるので、繰り返さない。ここでは、教員や大学院生などによって組織運営される研究会や共同研究の活動について概観したい。教員が組織する研究会、また大学院生が自主的に企画する研究会は数多い。大阪大学古代中世文学研究会は、この2年間で、第158回(2004年4月11日)から第178回(2006年3月25日)まで21回を数え、のべ41人の研究発表が行われた。その成果は多様な媒体に活字化されているが、本研究会の機関誌『詞林』も、年2回順調に刊行されており(2006年3月まで既刊38号、以後継続中)、2004年度大阪大学大学院文学研究科共同研究「小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求」は研究会を2回開催、のべ6人が発表し、同タイトルの報告書を刊行した。これに関連して2005年度科研費(基盤研究B)「小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開」でも研究会・講演会を開催し、同タイトルの年次報告書を刊行している。

近世文学関係では、「上方読本を読む会」が開かれ、他大学の大学院生をも交えてこの2年間で、15回行われた。2004年には「上方文藝研究会」を卒業生や他大学の大学院生を交えて発足させ、5月に研究誌『上方文藝研究』創刊号を刊行、2005年に第2号を刊行した。

大阪大学近代文学研究会は、2003年に『阪大近代文学研究』を創刊し、年1回刊行している。

本専門分野所管の忍頂寺文庫所蔵の洒落本については大阪大学学術博物館統合データベースのひとつとして2005年度に画像および書誌データを公開した。2005年度は文学研究科共同研究として「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」を立ち上げ、2006年1月に公開研究会を開催、同年3月に研究成果報告書『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』を刊行した。

本専門分野は国語学専門分野とともに大阪大学国語国文学会を組織し、年1回、学会を開催し、講演・発表を行っている。半期に1度、学会誌『語文』(2006年2月時点で既刊85号)を刊行し、その成果を公表している。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 出原 隆俊 教授

1951年生。京都大学大学院博士後期課程中退。文学修士。県立広島女子大学講師・助教授・京都教育大学助教授・大阪大学助教授を経て現職。専攻：日本近代文学。

1-1. 論文

出原隆俊「透谷用語の在りか 「罪と罰」批評について」『国文学解釈と鑑賞 別冊』pp. 226-233, 2006/3

出原隆俊「一葉小説における〈仕草〉——「わかれ道」を中軸に——」『国語国文』74-11, pp. 1-15, 2005/11

出原隆俊「泉鏡花作品における〈内〉と〈外〉——〈魔〉を中心に——」『文学』隔月刊, 5-4, pp. 94-103, 2004/7

出原隆俊「〈内部〉と〈外部〉という問題——日本近代文学の一端——」『国語と国文学』81-4, pp. 1-16, 2004/4

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

出原隆俊「渡辺霞亭」など7項目『大阪近代文学事典』2005/5

1-4. 口頭発表

出原隆俊「〈郊外〉と〈貧民窟〉——生活環境という問題——」フォーラム「環境と文学——〈環境文学〉の可能性とその社会的効用」2005/3/18

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2005年度～2006年度、基盤研究(C)、代表者：出原隆俊

課題番号：17520112

研究題目：明治中期における関西文壇の研究

研究経費：2005年度 150千円

研究の目的：

明治期以降については、東京集中の風潮にあって、文学活動において関西はローカルな一地域に過ぎないかのように思われがちである。しかし、明治二十年代の前半ごろから、東京から関西の新聞社に移ってきた文学者が何人もいて盛んに発表を行っていたことや、二十年代半ばに、大阪を拠点とした文芸雑誌が相次いで創刊されたことなどは見落とせない。これらは、東京を中心とする雑誌の批評に取り上げられているだけではない。互いの存在を意識したり、地方雑誌でありながらも鷗外に論争を挑み、鷗外も視野に入れていたことなど、中央文壇を見ているだけでは見えてこない側面をもっており、改めて検討を要する対象である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本近代文学会・評議員

1994年4月～2008年3月

日本近代文学会・編集委員

2003年4月～2005年3月

2. 飯倉 洋一 教授

1956年生。1985年九州大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、九州大学、1998年)。九州大学助手・山口大学専任講師・同助教授・同教授・大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻：日本近世文学。

2-1. 論文

飯倉洋一 「菊花の約」の読解『大阪大学文学研究科広域文化表現論講座共同研究成果報告書』(浅見洋二編), pp. 6-15, 2006/3

飯倉洋一 「大江文坡と源氏物語秘伝——〈学説寓言〉としての『怪談とのみ袋』冒頭話——」『語文』(大阪大学), 84・85, pp. 108-118, 2006/2

飯倉洋一 「浮世草子と読本のあいだ」『国文学』(学燈社), 50-3, pp. 51-57, 2005/6

飯倉洋一 「人はばけもの」——『西鶴諸国はなし』の発想——『国文学解釈と鑑賞』別冊, pp. 550-556, 2005/3

飯倉洋一 「日本近世〈小説〉と寓言」『古典文学研究』(韓国古典文学会), 26, pp. 151-164, 2004/12

飯倉洋一 「上方の「奇談」書と寓言——『垣根草』第四話に即して——」『上方文藝研究』1, pp. 65-75, 2004/5

2-2. 著書

飯倉洋一 『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』2005年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書, 研究代表者：飯倉洋一, 2006/3

飯倉洋一 『秋成考』翰林書房, 2005/2

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

飯倉洋一 「忍頂寺文庫・小野文庫の研究について」『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』pp. 3-6, 2006/3

飯倉洋一, 簗田将樹 「忍頂寺文庫蔵 七代目团十郎の配り本二種」『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』(2005年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書), pp. 39-46, 2006/3

飯倉洋一 「学界時評 近世」『国文学』(学燈社), 50-9, pp. 162-163, 2006/3

飯倉洋一 「斉物論」(翻刻と解題)『中野三敏先生古稀記念資料集 雅俗文叢』(汲古書院), pp. 19-45, pp. 654-660, 2005/12

飯倉洋一 「学界時評 近世」『国文学』(学燈社), 50-9, pp. 162-163, 2005/9

2-4. 口頭発表

飯倉洋一 「大江文坡と源氏物語秘伝——「奇談」史の一面——」同志社大学国文学会, 同志社大学, 2005/11

飯倉洋一 「上田秋成の文事——『文反古』『神代がたり』を中心に——」大阪府立中之島図書館百周年記念古典講座, 大阪府立中之島図書館, 2005/8

飯倉洋一 「「奇談」書と寓言」日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)「近世後期江戸・上方小説における相互交流の研究」共同研究会, 広島大学, 2005/8

飯倉洋一 「テキストの生成と変容——近世における「奇談」の場合——」大阪大学文学研究科広域文化表現論プロジェクト「テキストの生成と変容」第1回研究会, 大阪大学, 2005/5

飯倉洋一 「日本近世小説史の新領域——「奇談」という書物たち」韓国日本学会第70回学術大会 韓国日本学会, 高麗大 学校, pp. 550-556, 2005/2

飯倉洋一 「日本近世〈小説〉と寓言——佚斎樗山を中心に——」2004年韓国古典文学会寓言文学国際学術会議「東アジア寓言文学の性格」仁荷大学, 韓国古典文学会・仁荷大韓国学研究所予稿集, pp. 78-82, 2004/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

飯倉洋一 第3回柿衛賞, 財団法人柿衛文庫, 1993/5

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(C)(2)、代表者：飯倉洋一

課題番号：16520103

研究題目：「奇談」書を手がかりとする近世中期上方仮名読物史の構築

研究経費：2004年度 1,000千円

2005年度 500千円

研究の目的：

本研究は申請者のこれまでの「奇談」書研究から展開するものである。すなわち宝暦四(1754)年刊『新增書籍目録』および明和九(1772)年刊『大增書籍目録』という、享保から明和期に出版された書籍の総合目録である両書に「奇談」として登載される百余点の仮名読物の、文学史的な位置づけを、とくに近世上方の初期読本成立と関わらせる形で行おうとするものである。その結果、従来の近世文学史の記述を考え直す視点を提供することになるのではないかという見通しを立てている。「浮世草子」「読本」らの概念を一度白紙に戻し、あらたな文学史を構築することにもつながるだろう。すでに完成している八文字屋全集や、談義本年表・読本年表などの従来型文学史に即した大きな企画にも、それぞれに関わるとともに、それらに相対的視点をもたらすことになるはずである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

上方文化芸能協会運営委員	2005年7月～現在
懐徳堂記念会運営委員幹事	2003年4月～現在
日本近世文学会・常任委員	2002年6月～現在
日本近世文学会・委員	2000年6月～現在
柳川市史・専門研究員	1995年4月～現在

3. 荒木 浩 教授

1959年生。1986年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。愛知県立女子短期大学・愛知県立大学講師、同助教授、大阪大学教養部助教授、同文学部・文学研究科助教授を経て現職。専攻：日本文学。

3-1. 論文

荒木浩「「木」と「眼」——柳田国男、南方熊楠、折口信夫の屈折をめぐって——」浅見洋二編『大阪大学大学院文学研究科広域文化表現講座共同研究研究成果報告書 テクストの読解と伝承』pp. 12-30, 2006/3

荒木浩「随心院所蔵『光聖問答法語』(聖一国師仮名法語)翻刻——付・『徒然草』と禅宗仮名法語のことなど——」(荒木編『小野随心院所蔵の文献・画像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開・Vol. I ——講演録・随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告』pp. 25-37, 2006/3)

荒木浩「武恵妃と桐壺更衣、楊貴妃と藤壺——『源氏物語』桐壺巻の准拠の仕組みをめぐって——」『語文』84・85輯, pp. 78-97, 2006/3

荒木浩「(擬作)の周辺——随心院本『啓白諸句』解題の補足をかねて——」『詞林』37, 大阪大学古代中世文学研究会, pp. 53-64, 2005/4

荒木浩「明恵『夢記』再読——その表現のありかとゆくえ——」(荒木編『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文学の発生——』(2002年度～2004年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(研究課題番号：14510462)), pp. 7-33, 2005/3)

荒木浩「『沙石集』と〈和歌陀羅尼〉説について——文字超越と禅宗の衝撃——」(荒木編『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文学の発生——』(2002年度～2004年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果

報告書(研究課題番号：14510462)), pp. 35-49, 2005/3

荒木浩「中世の二重の顔」(荒木編『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文学の発生——』(2002年度～2004年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(研究課題番号：14510462)), pp. 51-66, 2005/3

荒木浩「中世日本の二重の顔 宝誌和尚像から落語まで」《Le double visage du Japon medieval-de la statue du pretre Hoshi au conte du Rakugo》(『Le Japon, d'autres visages 日本、もうひとつの顔 Forum 2004 de l'Universite d'Osaka a Strasbourg』編集・発行 阪大フォーラム 2004 委員会大阪大学 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」), pp. 114-128, 2005/2

荒木浩「玄宗・楊貴妃・安祿山と桐壺帝・藤壺・光源氏の寓意——続古事談から見る源氏物語——」『詞林』36, 大阪大学古代中世文学研究会, pp. 11-29, 2004/10

荒木浩「モノ・ツクモ、カガミ・ココロ」『INTERFACE HUMANITIES』04号特集 モノの人文学, pp. 18-19, 2004/7/30

3-2. 著書

荒木浩編(荒木浩責任編集, 海野圭介, 中山一麿, 中川真弓, 石原のり子編集), 小野随心院所蔵の文献・画像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開-Vol. I ——講演録・随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告』大阪大学, 177p., 2006/3

荒木浩, 川端善明校注『新日本古典文学大系 41 古事談 続古事談』岩波書店, 986p., 2005/11

荒木浩編(荒木浩責任編集, 海野圭介・中山一麿編集, 中川真弓編集協力)『大阪大学大学院文学研究科共同研究研究成果報告書 小野随心院所蔵の密教文献・画像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』大阪大学, 143p., 2005/3

荒木浩編『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文学の発生——』2002年度～2004年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(研究課題番号：14510462), 143p., 2005/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

荒木浩「明恵「夢記」」(荒木編(荒木浩責任編集, 海野圭介, 中山一麿, 中川真弓, 石原のり子編集), 小野随心院所蔵の文献・画像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開-Vol. I ——講演録・随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告』pp. 114-115, 2006/3

荒木浩(書評)「竹村信治著『言述論 discours for 説話集論』『レポート笠間』46, 笠間書院, pp. 74-77, 2005/12

荒木浩(書評)「竹村信治著『言述論 discours for 説話集論』『説話文学研究』46, pp. 160-165, 2005/7

荒木浩「影印随心院本『寓言鈔』」荒木編『仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文学の発生——』(2002年度～2004年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(研究課題番号：14510462)), pp. 117-143, 2005/3

荒木浩「随心院蔵『啓白諸句』解題・翻刻——付作者索引」荒木浩編『大阪大学大学院文学研究科共同研究研究成果報告書 小野随心院所蔵の密教文献・画像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』大阪大学, pp. 284-305, 2005/3

荒木浩(項目執筆)「木」「秘密」「眼」『宗教のキーワード集』(三木紀人、山形孝夫編, 学燈社, 別冊國文学 No. 57), p. 48, p. 123, p. 137, 2004/11

3-4. 口頭発表

荒木浩「朝政の風景——院政と聖帝をめぐって——」大阪大学文学研究科広域文化表現論講座・特別研究会「テキストの生成と変容——絵画を読む——」(研究代表者：飯倉洋一), 大阪大学文学研究科, 2006/3/11

荒木浩「中世日本の二重の顔」《Le double visage du Japon medieval》, 阪大フォーラム 2004, 日本、もう一つの顔(Le Japon, d'autre visage), フランス・ストラスブール, マルクブロック大学, 2004/11/6

荒木浩「随心院所蔵文献と日本古典文学の一隅——源氏物語「北山のなにがし寺」と大雲寺、また『啓白諸句』逸文のことなど——」2004年度大阪大学大学院文学研究科共同研究費研究・大阪大学古代中世文学研究会例会 共同開催, 小野随心院所蔵の密教文献・画像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求、第一回研究会発表, 大阪大学文学部第一会議室, 2004/10/30

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

荒木浩 第18回日本古典文学会賞, 1992/6

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2002年度～2004年度、基盤研究(C)(2)、代表者：荒木浩

課題番号：14510462

研究題目：仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文学の発生——

研究経費：2004年度 900千円

研究の目的：

本研究は、古代・中世日本文学研究の立場から、密教を中心とした仏教文献(その対象には、関連する分野である禅宗等諸仏教、神道関係資料、さらには歴史史料や文学資料なども含まれる)の文献学的研究を基盤に、仏教修法に関わる文献や仏教文化圏などの研究を契機として、中世的な文学表現の根元を探ることを目途とする。明恵『夢の記』や『沙石集』研究など、研究代表者がこれまで蓄積した研究成果をもとに、単なる表現研究に留まらない、広く深い文献学的研究を目指す。さらに、より実践的な成果として各種文庫(特にこれまでの継続的对象である随心院などを中心に)に所蔵される文書の調査、紹介、読解などを行う。如上の研究成果は、デジタル画像を中心にCD-ROM等に蓄積し、目録作成等、データベース化を試みるが、調査・研究は、大学院生など若手研究者との共同研究的なスタンスで行い、研究成果は、研究課題総体と関連する調査資料の翻刻、分析、さらに、理論的研究としての論文の形などで公表し、成果報告書に結実していく。またこれまでの研究代表者の研究経過を踏まえ、海外との研究交流を継続する。

3-6-2. 2005年度～2007年度、基盤研究(B)、代表者：荒木浩

課題番号：17320039

研究題目：小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開

研究経費：2005年度 3,700千円

研究の目的：

本研究は2004年度までに、4年以上に涉って本研究代表者・分担者が行ってきた随心院研究とそれを基盤とする総合的研究の展開と集大成を目指すものである。

研究の柱は、以下の6点ほどに集約される。

- 1, 随心院所蔵文献について、その奥書・識語等を摘記・集成して、随心院文献の来歴、また寺院の人的・学問的交流を解明する基礎とする。
- 2, 随心院図像についての研究を進展させ、その目録を作成する。
- 3, 随心院所蔵文献の個別的精読・分析を行い、成果を公表する。
- 4, 随心院関連寺院等へ調査範囲を伸ばし、本研究後の展開を模索する。
- 5, 本研究に参加した人文諸学(日本文学、日本史、東洋美術史、日本思想史他)の研究者のジャンル相関的な総合研究を論文等のかたちに結実し、その成果を前提に、海外でのワークショップなどを企画する。
- 6, 上記研究成果を、研究会、講義、演習等を通じて、大学院生の教育・研究にフィードバックする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2004年度、大阪大学文学部共同研究、代表者：荒木浩(分担者7人)

助成金名：大阪大学文学部共同研究

研究題目：小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求

助成団体名：大阪大学

助成金額：750千円(当初配分額)

3-8. 学会役員等の引き受け状況

説話文学会・委員

1995年4月～現在

4. 加藤 洋介 助教授

1962年生。1989年名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。国文学研究資料館助手、愛知県立女子短期大学・愛知県立大学講師、同助教授、同教授を経て現職。専攻：日本平安文学。

4-1. 論文

加藤洋介「定家本源氏物語の復原とその限界」『国語と国文学』82-5, pp. 126-141, 2005/5

加藤洋介『源氏物語大成』のこと——青表紙本校異をめぐって——『むらさき』41, pp. 52-56, 2004/12

4-2. 著書

名古屋和歌文学研究会編, 加藤洋介ほか『私撰集作者索引 続編』和泉書院, 2004/12

加藤洋介『河内本源氏物語の本文成立史に関する基礎的研究』(2000年度～2002年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)研究成果報告書), 2004/6

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

加藤洋介「奥入付載の定家本源氏物語」中古文学会 2004年度春季大会, 2004/5(発表要旨は『中古文学』74, pp. 83, 2004/11に掲載)

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2003～2006年度、基盤研究(C)、代表者：加藤洋介

課題番号：15520113

研究題目：河内本源氏物語の本文成立史に関する基礎的研究

研究経費：2004年度 900千円

2005年度 700千円

研究の目的：

本研究の主たる目的は、河内本源氏物語が底本とした本文および校訂に使用した本文を具体的に明らかにし、その本文成立史の具体的様相を解明することにある。従来河内本源氏物語の成立については、源親行が記した奥書以外、その具体的事情はほとんど明らかにされていない。本研究はこの問題を解明するため、これまでの本文研究ではほとんど考察の対象にされなかった、音便や表記などの比較的軽微な異同とされてきた異文に注目し、青表紙本や別本との一致状況から、河内本源氏物語の巻ごとの底本選択状況および校訂のありようについて、具体的に明らかにすることを目的としている。そのための作業として最も重視しているのは、唯一の校本である『源氏物語大成』の別本校異について、刊行の際に割愛された音便や表記の異同を、原本や複写によりながら増補・修正することである。それによって上記の問題について、青表紙本・河内本・別本三者の詳細な比較検討が可能になると思われる。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

5. 海野 圭介 助手

1969年生まれ。大阪大学文学部卒。大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。1999年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学、大阪大学)。日本学術振興会特別研究員を経て2002年現職。専攻：日本文学(和歌文学)

5-1. 論文

海野圭介「随心院蔵『光明峯寺年中行事』『小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開』(全国大学国語国文学会), 1, pp. 72-76, 2006/3

海野圭介「随心院蔵和歌集とその周辺——晩年の実海の動向と訳和歌集の成立・伝来をめぐって——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 84・85, pp. 98-107, 2006/2

海野圭介, 尾崎千佳「京都大学附属図書館蔵中院文庫本『古今伝受日記』解題・翻刻(一)」『上方文藝研究』(上方文藝研究会の会), 2, pp. 94-104, 2005/5

海野圭介「随心院門跡伝来の歌書類と九条家」『小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』(大阪大学大学院文学研究科), pp. 37-58, 2005/3

海野圭介「海外における源氏物語の世界 翻訳と研究」『文学・語学』(全国大学国語国文学会), 179, pp. 44-55, 2004/8

海野圭介, 尾崎千佳「東山御文庫蔵『古今伝授日記』『古今集御講義陪聴御日記』解題・翻刻」『上方文藝研究』(上方文藝研究会の会), 1, pp. 10-20, 2004/5

5-2. 著書

荒木浩, 海野圭介, 中山一麿, 中川真弓, 石原のり子編『小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開 Vol. 1』(大阪大学大学院文学研究科), 2006/3

伊藤鉄也, 阿部真弓, 海野圭介, 胡秀敏, 藤井由紀子『源氏物語の享受と変容』(国文学研究資料館), 2005/8

荒木浩, 海野圭介, 中山一麿編『小野随心院所蔵の密教文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその探求』(大阪大学大学院文学研究科), 2005/3

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

海野圭介「慈恵大師七猿歌の周辺」『島津忠夫著作集』5, 和泉書院, 月報, 2004/10

海野圭介「古今集の注釈・享受」「古今集の注釈書」山本登朗, 田中登編『平安文学研究ハンドブック』和泉書院, pp. 37-38, 2004/5

5-4. 口頭発表

海野圭介「確立期の御所伝授の課題と和歌の家の再編」(和歌文学会第51回古今集・新古今集の年五十周年記念大会 会場：東洋大学), 2005/10

海野圭介「教戒・女訓と源氏物語」(韓国外国語大学日本近代文学会9月コロキウム 会場：韓国外国語大学校〔ソウル, 韓国〕), 2005/9

Unno Keisuke “The Relation between the Transmission of Poetic Knowledge and the General Intellectual Climate in the Context of Medieval Waka and *The Tale of Genji*”, The 11th International Conference of the EAJS(European Association for Japanese Studies) (at University of Vienna, Austria), 2005/8

海野圭介「シンポジウム 古今和歌集——注釈から伝授へ」(古今集成立1100年記念シンポジウム 古今和歌集——注釈から伝授へ 会場：古今伝授の里フィールドミュージアム), 2005/8

海野圭介「源氏物語の受容と和歌・絵画」(チュラロンコン大学文学部講演会 会場：チュラロンコン大学〔バンコ

ク, タイ]), 2005/3

海野圭介「シンポジウム 漢字文化圏と〈古典〉: 漢訳仏典の受容と和歌」(国際フォーラム「台湾における日本文学・日本語学の新たな可能性」会場: 長榮大學日本研究所〔台南, 台湾〕), 2004/12

海野圭介「道見聞書から後水尾院御抄へ——古今集後水尾院御抄の成立と伝来をめぐって——」(和歌文学会第 84 回関西例会 会場: 八坂神社), 2004/4

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2003 年度～2005 年度、若手研究(B)、代表者: 海野圭介

課題番号: 15720035

研究題目: 御所伝授関連資料の総合的調査及びその基礎的研究

研究経費: 2004 年度 800 千円

2005 年度 900 千円

研究の目的:

主として江戸時代初期から中期にかけて、天皇、上皇、および近臣公卿との間で行われた伝授を介在させた和歌に関わる学問的な営みである「御所伝授」の実態の究明を総括的なテーマとし、宮内庁書陵部、京都御所東山御文庫、京都大学附属図書館等に保管されている和歌の注釈と伝授に関わる諸資料(以下「伝授資料」と称す)の総合的な把握を目指し、基礎的事項(書誌データ・著述内容の同定・テキスト相互の比較検討と一覧, 等)データ化を目指す。具体的課題と達成目標は下記の通りである。

1. 京都大学附属図書館、京都大学総合博物館に所蔵される中院家旧蔵の伝授資料の書誌調査と基礎的書誌データ一覧の作成、著述内容の検討・同定、および、重要資料の画像データ・テキストデータ化。
2. 東山御文庫に所蔵される伝授資料(宮内庁書陵部にマイクロフィルム保管)の著述内容の検討・同定と内容細目の作成。および、重要資料の画像データ、テキストデータ化。
3. 宮内庁書陵部に所蔵される伝授資料(烏丸家旧蔵、桂宮家旧蔵)の書誌的調査と基礎的データ一覧の作成、著述内容の検討・同定、および、画像データ・テキストデータ化。

上記いずれも、今後の研究において共通の基盤となる基幹資料の集積を意図する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

5-7-1. 2005 年度、独立行政法人日本学術振興会 国際学会等派遣事業、代表者: 海野圭介(分担者なし)

助成金名: 独立行政法人日本学術振興会 国際学会等派遣事業

研究題目: The Relation between the Transmission of Poetic Knowledge and the General Intellectual Climate in the Context of Medieval *Waka* and *The Tale of Genji*

助成団体名: 独立行政法人日本学術振興会

助成金額: 2,483 千円

研究の目的:

本報告は、「Reception and Transformation of *The Tale of Genji*」と題されたパネルに属し、『源氏物語』の日本の伝統的文化に与えた影響を、『源氏物語』以後に著された物語文学・女流日記文学・韻文芸などの文学作品や絵画資料・小児用の学習資料などの非文学作品を素材に、その影響関係を 5 名のパネラーで討議・報告するものである。個別報告の重点は次の二点である。①主として室町時代後期から江戸初期頃の公家歌人達の和歌をめぐる学問のシステムの中での『源氏物語』の扱われ方や歌人の教養のあり方と和歌の実作の関係について、資料を再整理する形で把握を試みる。②教育プログラムに与えた『源氏物語』の影響の意義を確認し、文化的また社会的活動の背景としての『源氏物語』の在り方について報告を行う。

5-7-2. 2004年度、財団法人大阪大学後援会 教育研究助成金、代表者：海野圭介(分担者なし)

助成金名：財団法人 大阪大学後援会 教育研究助成金

研究題目：随心院門跡の学芸及び学芸資料に関する基礎的研究

助成団体名：財団法人大阪大学後援会

助成金額：600千円

研究の目的：

前近代の日本において学芸(学問・文芸)活動の一翼を担ってきたのは社寺であった。本研究は、撰閑家である九条家との血縁関係や東大寺・春日大社(奈良)との領袖関係により、様々な典籍を現在に伝える随心院門跡(京都市山科区)に所蔵される様々な学芸に関わる典籍・文書類の総合的調査を通して、室町後期～江戸初期の門跡寺院の学芸の実態を明らかにし、併せて、前近代における〈知〉のネットワークの実態の解明に寄与することを目的とする。

5-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-13 比較文学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

比較文学専門分野は、研究室設備などの整備とともに、学部生・院生の数も増え、また留学生の関心も高まりつつある。全国の国公立大学を通して、学部・大学院ともに比較文学の専門を置いている大学は非常に少なく、特に関西圏の国立大学としては唯一ともいえるので、一般に比較文学に対して関心が高まりつつある最近の状況を考えると、日本における比較文学研究の大きな拠点として今後大いに発展させたいところである。現在、本専門分野では教育・研究活動ともに日本近代文学を主な対象にして、西洋文学が日本文学に与えた影響、日本文学が東アジアに与えた影響、日本文学と西洋あるいはアジア文学との対比研究、文学と絵画、音楽、映画などとの関係を考えるジャンル間交渉、またたとえば子供をを手掛かりに数多くの作品を横断的に比較するテーマ研究など幅広い研究が行われている。着眼点としても、近代におけるセクシュアリティの問題など最近の新しい研究を反映したものも多い。日本比較文学会の研究発表において、当研究室の大学院生の発表が急激に増えているのは頼もしい限りである。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 1 助教授 0 講師 0 助手 1

教授：内藤 高

助手：鈴木 暁世

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
16	6	14	0	0	0	1	0	0

※うち留学生 7 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	7	2	5	4	1
'05	8	1	2	1	0
小計	15	3	7	5	1

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	4	0	4
'05	1	0	1
計	5	0	5

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 上垣公明 「三島由紀夫とヘミングウェイの比較研究——性の問題を中心に——」 2005/3
主査：内藤高 副査：出原隆俊、森岡裕一
- 金華榮 「近代日韓における「女性」をめぐる言説——羅蕙錫と日本との関わりを中心に——」 2005/3
主査：内藤高 副査：出原隆俊、佐伯順子
- 久田原泰子 「マルグリット・ユルスナールと日本文学」 2005/3
主査：内藤高 副査：出原隆俊、和田章男
- 崔殷景 「三島由紀夫作品論——太陽と暗闇——」 2005/3
主査：内藤高 副査：出原隆俊、佐伯順子
- 寺内伸介 「文学者が「映画」を語る時——日本近代文学における「映画」受容の諸相——」 2006/3
主査：内藤高 副査：出原隆俊、柏木隆雄

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	0	0	0	0	10	10
'05	0	0	1	0	11	12
計	0	0	1	0	21	22

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	1	9	2	0	0	12
'05	0	2	5	0	0	7
計	1	11	7	0	0	19

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

梅津彰人「リルケと安部公房」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 59-76, 2004/5

大廣典子「大正十年代における寺田寅彦の連句観についての考察」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 77-90, 2004/5

久田原泰子「ユルスナールの『沼地での対話』と能の関わりについて——『江口』から三島由紀夫の『班女』まで——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 1-29, 2004/5

荘中孝之『Kazuo Ishiguro と川端康成——遠い記憶のなかの日本——』『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 31-42, 2004/5

崔殷景「三島由紀夫『サド侯爵夫人』論——「一心同体」の幻想をめぐる——」『学芸国語国文』(東京学芸大学国語国文学会), 36, pp. 49-60, 2005/3

崔殷景「『わが友ヒットラー』論」『日本近代学研究』(韓国日本近代学会), 9, pp. 99-118, 2004/11

崔殷景「戯曲『サド公爵夫人』と『わが友ヒットラー』の比較——ルネとサド、レームとヒットラーの関係を中心に——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 105-119, 2004/5

出口馨「西條八十詩集『砂金』とメーテルランク」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 43-58, 2004/5

寺内伸介「谷崎潤一郎の映画論——映画・女・国民」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 121-138, 2004/5

平松秀樹「セーニー・サオワボン『ワンラヤーの愛』——タイ文学における新しい女性像——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 2, pp. 91-103, 2004/5

【2005年度】

梅津彰人「安部公房『カンガルー・ノート』をめぐる——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 3, pp. 27-39, 2005/8

江口恵「円地文子『冬紅葉』における老い」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 3, pp. 117-129, 2005/8

王海航「身体とコミュニケーション——『死者の奢り』の読み直し」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 3, pp. 99-115, 2005/8

荘中孝之「英訳で書かれた想像の日本語——カズオ・イシグロと翻訳——」『Problemata Mundi』(京都外国語大学国際問題研究会), 15, pp. 86-102, 2006/3/31

荘中孝之「英訳で書かれた想像の日本語——カズオ・イシグロと翻訳——」『台湾における日本文学・国語学の新たな可能性アジアの表象/日本の表象』(大阪大学大学院文学研究科東アジア国際フォーラムプロジェクト編), pp. 109-117, 2006/3/15

鈴木暁世「鏡の中の幽霊——『明暗』における<記憶>」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 4, pp. 18-32, 2006/3

鈴木暁世「芥川龍之介『母』の<透ける耳>描写における漱石の影響——中国特派員体験と聴覚——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 3, pp. 131-153, 2005/8

田辺裕視「『三四郎』、『それから』、『門』に聴かれる音と声」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 3, pp. 41-59, 2005/8

出口馨「メーテルランクと近代日本詩人たち——閉ざされた視覚への関心をめぐって——」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 39, pp. 93-108, 2005/12

出口馨「北原白秋『東京景物詩及其他』におけるモダン都市描写——『温室』の自由詩群との関わりをめぐる——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 3, pp. 61-77, 2005/8

藤田瑞穂「ポール・オースター『幽霊たち』論——ジョン・ケスラー展『幽霊たち』との比較を通して——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 3, pp. 153-166, 2005/8

李寧「東洋人が描いたロンドンの霧——老舎の『二馬』、漱石の『霧』を中心に——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 3, pp. 1-25, 2005/8

(2)口頭発表

【2004年度】

- 大廣典子「瞬間を巡る写真と俳句——福原信三の写真論を中心に——」日本比較文学会第40回記念関西大会, 日本比較文学会, 徳島大学/徳島, 2004/11/7
- 姜素英「横光利一の「機械」と韓国作家朴泰遠の「距離」における内的独白」日本比較文学会第40回記念関西大会, 日本比較文学会, 徳島大学/徳島, 2004/11/7
- 金華榮「女性が「女性」を描くこと——羅蕙錫^{ナヘソク}の裸体画における「女性」」日本比較文学会第40回記念関西大会, 日本比較文学会, 徳島大学/徳島, 2004/11/7
- 久田原泰子「マルグリット・ユルスナールによる三島由紀夫の『近代能楽集』の翻訳について」日本比較文学会第66回全国大会, 日本比較文学会, 東洋大学/東京, 2004/6/27
- 莊中孝之「Kazuo Ishiguroと原爆——Araki Yasusada事件を参照して——」日本比較文学会第66回全国大会, 日本比較文学会, 東洋大学/東京, 2004/6/26
- 鈴木暁世「芥川龍之介における「透ける耳」の描写——『母』を手がかりとして」日本比較文学会第40回記念関西大会 日本比較文学会, 徳島大学/徳島, 2004/11/7
- 平松秀樹「タイ文学における環境と文学」フォーラム「環境と文学——<環境文学(Eco-Literature)>の可能性とその社会的効用」日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト, 大阪大学, 2005/3/18
- 平松秀樹「大蔵経とパリー経」国際フォーラム「台湾における日本文学・日本語学の新たな可能性——国際化の中の日本文学・日本語学」長榮大学, 台南/台湾, 2004/12/12
- 平松秀樹「タイ現代文学に見る女性の「解放」:セーニー・サオワボン『ワンラヤーの愛』を例として」天理大学第4回東南アジア研究特別講義, 2004/12/6
- 平松秀樹「チャート・コープチッティ『裁き』——出家と実存のはざままで」日本比較文学会第40回記念関西大会, 徳島大学, 徳島, 2004/11/7
- 平松秀樹「タイ現代文学に見る女性の「解放」——セーニー・サオワボン『ワンラヤーの愛』を例として」日本比較文学会第66回全国大会, 東洋大学, 2004/6/26
- 李寧「東洋人が描いたロンドンの霧——老舎の『二馬』と漱石の「霧」を中心に——」日本比較文学会第66回全国大会, 日本比較文学会, 東洋大学/東京, 2004/6/26

【2005年度】

- 莊中孝之「英語で書かれた想像の日本語——カズオ・イシグロと翻訳——」日本比較文学会第41回関西大会, 甲南大学/兵庫, 2005/11/5
- 莊中孝之「英語で書かれた想像の日本語——カズオ・イシグロと翻訳——」大阪大学大学院文学研究科共同研究・アジアの表象/日本の表象・第2回研究会, 大阪大学/大阪, 2005/10/18
- 鈴木暁世「記述された上海・音の風景——芥川龍之介の紀行文をめぐって」フォーラム「環境と文学——<環境文学(Eco-Literature)>の可能性とその社会的効用」日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト, 大阪大学/大阪, 2006/3/17
- 鈴木暁世「『シング紹介』について——その影響源」芥川龍之介研究会, 大淀コミュニティーセンター/大阪, 2005/12/28
- 鈴木暁世「芥川龍之介とアイルランド文芸復興運動——大正期の同人雑誌をめぐって」日本比較文学会第41回関西大会, 甲南大学/兵庫, 2005/11/5
- 鈴木暁世「発題「内藤高『明治の音』」」日本比較文学会関西支部研究例会, 大阪大学/大阪, 2005/7/23
- 宮部遥「文学における環境思想——シートンの“Animal Heroes”を中心に——」大学院生研究発表会「環境と文学——<環境文学(Eco-Literature)>の可能性とその社会的効用」日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト, 大阪大学/大阪, 2006/1/28

(3)その他(書評・翻訳など)

【2004年度】

田辺裕視(事典項目)「道化の華」志村有弘, 渡部芳紀編『太宰治大事典』勉誠出版, pp. 551-553, 2005/1/10

【2005年度】

荘中孝之, Terry O'Brien, 木村博是他『Inside Britain／文法中心で学ぶイギリス生活』南雲堂, 全85頁+教授資料12頁, 2006/1/11 ※大学教養課程、短大生向けの総合英語テキスト

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

2005年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度～2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

寺内伸介 博士後期課程, 北京語言大学, 専任講師, 2006/9

荘中孝之 博士後期課程, 京都外国語大学短期大学部, 専任講師, 2004/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004年度～2005年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2名

2004年度: 2名 2005年度: 0名

<内訳> ジャーナリスト 1名 中・高等学校の教員 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 3名

2004年度: 1名 2005年度: 2名

9. 刊行物

2004年度 『阪大比較文学』2号

2005年度 『阪大比較文学』3号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

2005年度 文学研究科共同研究「アジアの表象/日本の表象——比較文学・対照語学的方法によるアプローチ」

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

教育体制については基本的に大きな変化はない。一般的に比較文学関係の講義の受講者はかなり多く、一定の知的関心を引く講義の水準は保たれていると思う。しかし、スタッフ数の関係もあり、どうしても学部と大学院共通の講義が多くなるのは問題であろう。2回生から、ドクターまでの講義ということになれば、どうしても学部3、4回生が照準となる。とくにまだ初歩段階の2回生には、さらにきめの細かい入門的講義がしたいのだが、それができないのは、やはり問題であろう。

こうした不足を補うために、数年前に行ったような外からの講師を招いてのシンポジウムや講演会を開き、通常では専任教員が担当できない様々な比較文学の研究テーマについて新たな知識と刺激を与える機会を持つことが是非必要であろう。

12-2. 研究活動

研究活動においては、DCの人数が増えたこともあり、非常に活発化しつつある。とくに日本比較文学会での活動が非常に積極的になりつつある。日本比較文学会の関西支部大会では、近年、当研究室の大学院生の発表が毎年半数近くを占め、発表の水準も一般に高いので、関西の中での学会のイニシアティブをとりつつある。また全国大会のレベルでも、高水準の発表が多く、査読つきの学会誌への査読委員会からの慫慂もうけている。とくに当研究室の留学生が学会活動で健闘していることは特筆に価するだろう。もちろん全国規模ではさらにレベルアップする必要はあるが、順調に成長していることは疑いない。博士論文も提出者が増える段階にきており、2004年度末には、かつて社会人学生として在籍した2名も含めて4名が提出し、2005年度末には1名が提出した。また交換留学の制度を利用して留学する日本人学生も出始めており、今後国際的な繋がりがさらに広まっていくことも十分予想できる。

それから2003年度から、念願の研究室発行の研究誌がスタートした。投稿者も多く、研究活動の活発化に大いに貢献している。運営上の問題や合評会の充実化などさらに健闘すべき点はあるが、学外者からも好評であり、出だしは順調といえよう。

院生の数が学年によってかなりばらつきがあり、コンスタントな研究体制が維持できるか、研究テーマがさらに多様化されたときの指導の対応の仕方など、いろいろ今後の課題も予想できるが、なんとか現在の盛り上がりをさらに発展させていきたいものである。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 内藤 高 教授

1949年生。1986年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。1985年、パリ第4大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(東京大学、1978年)・文学博士(パリ第4大学、1987年)。同志社大学専任講師、同助教授、同教授を経て、1996年10月現職。専攻：比較文学。

1-1. 論文

内藤高「明治——「音」の異文化理解」『聖教新聞』文化欄 2005年7月31日, p. 8, 2005/7

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

内藤高(展覧会カタログ評)「万国博覧会の美術」展(2004年11月大阪市立美術館)『比較文学研究』85, pp. 155-159, 2005/4

1-4. 口頭発表

内藤高「音を聴く・音を書くことを通して文化的交差について考える(永井荷風の場合)」日本学術振興会人文・社会科学
振興プロジェクト「環境と文学」研究フォーラム, 大阪大学文学研究科, 2006/3

内藤高「クローデルと京都の画家たち」クローデル歿後 50 年記念絵画展「ポール・クローデルと京都画壇」シンポジウ
ム(パネリスト), 京都国立近代美術館, 2005/11

内藤高「日本におけるクローデル——詩、絵画そして自然」クローデル歿後 50 年記念国際会議「クローデルと日本」日
仏会館(東京), 2005/11

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本比較文学会・理事

2001年6月～現在

2. 鈴木 暁世 助手

1977年生。大阪大学文学部卒。大阪大学文学部文学研究科博士前期課程修了。2005年、大阪大学大学院文学研究科博士
後期課程中退。文学修士(大阪大学、2004年)。2006年より現職。専攻：比較文学／日本近代文学。

2-1. 論文

鈴木暁世「鏡の中の幽霊——『明暗』における〈記憶〉」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 4, pp. 18-32,
2006/3

鈴木暁世「芥川龍之介『母』の〈透ける耳〉描写における漱石の影響——中国特派員体験と聴覚——」『阪大比較文学』
(大阪大学比較文学会), 3, pp. 131-153, 2005/8

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

鈴木暁世「記述された上海・音の風景——芥川龍之介の紀行文をめぐって」フォーラム「環境と文学——〈環境文学
(Eco-Literature)〉の可能性とその社会的効用」大阪大学／大阪, 2006/3/17

鈴木暁世「『シング紹介』について——その影響源」芥川龍之介研究会, 大淀コミュニティーセンター／大阪, 2005/12/28

鈴木暁世「芥川龍之介とアイルランド文芸復興運動——大正期の同人雑誌をめぐって」日本比較文学会第41回関西大会,
甲南大学／兵庫, 2005/11/5

鈴木暁世「発題「内藤高『明治の音』」」日本比較文学会関西支部例会, 大阪大学／大阪, 2005/7/23

鈴木暁世「芥川龍之介における「透ける耳」の描写——『母』を手がかりとして」日本比較文学会第40回記念関西大会,
徳島大学／徳島, 2004/11/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-14 中国文学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野は、主に清朝時代以前の漢語文献について、文言体と白話体の別なく、文献学的手法を用いて正確な訓詁を与える点に教育・研究の主眼が置かれており、そのため教員スタッフも伝統文学と白話文学を専門とするものが各1名ずつ配置されている。授業は、文献の精密な読解力とそれを踏まえての問題構成力を養うべく、大きく分けて演習と講義の二種類が設けられている。また、研究室内の教育・研究活動をより活性化するために、カリキュラムとは別に、教員スタッフを中心に三種の研究会が組織されており、文言体(宋代の詩)、白話体(明代の戯曲)、吏牘体(元代の法律文書)による漢語資料の訳注稿の作成が行われている。これらの研究会は単に教育活動の一環であるのみならず、それぞれの分野で一級の研究業績を上げることが目標としており、他大学や他専門分野の研究者も参加している。本専門分野の教育・研究活動の特色は、規模は小さいながらも、中国の古典文学の領域をバランスよくカバーしている点にある。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 1 助教授 1 講師 0 助手 0

教授：高橋 文治

助教授：浅見 洋二

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
5	4	5	0	0	0	0	0	1

※うち留学生 2名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	2	0	0	0	0
'05	2	2	0	0	0
小計	4	2	0	0	0

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	0	0	0
'05	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	3	0	0	0	0	3
'05	3	0	0	0	0	3
計	6	0	0	0	0	6

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	0	0	0	0	0
'05	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

加藤聡, 小林春代, 高橋文治, 谷口高志, 富永鉄平, 西尾俊, 藤原祐子「成化本『白兔記』訳註稿」(2)『中国研究集刊』35, pp. 84-138, 2004/6

谷口高志「唐詩の音楽描写——その類型と白居易「琵琶引」——」『日本中国学会報』56, pp. 78-93, 2004/10

富永鉄平「『西遊記』の叙述法について」『待兼山論叢』38, pp. 33-46, 2004/12

【2005年度】

加藤聡, 葛葉礼, 後藤安延, 高橋文治, 谷口高志, 陳文輝, 富永鉄平, 豊田祐佳, 西尾俊, 西川幸宏, 藤原祐子, 若松沙保, 渡辺克平「成化本『白兔記』訳註稿」(4)『中国研究集刊』39, pp. 151-193, 2005/12

加藤聡, 葛葉礼, 後藤安延, 高橋文治, 谷口高志, 陳文輝, 富永鉄平, 西尾俊「成化本『白兔記』訳註稿」(3)『中国研究集

刊』 37, pp. 94-111, 2005/6

西尾俊 『白兔記』のテキスト』『待兼山論叢』 39, pp. 37-51, 2005/12

(2) 口頭発表

なし

(3) その他(書評・翻訳など)

【2005 年度】

谷口高志翻訳, 尚永亮 『元和体』の原義とその受容』大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究研究成果報告書『テキストの読解と伝承』 pp. 66-94, 2006/3

後藤友里, 谷口高志, 富永鉄平, 藤原祐子翻訳, 葛兆光 「背景と意味——中国古典詩研究における伝統的方法をめぐって」大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究研究成果報告書『テキストの読解と伝承』 pp. 130-144, 2006/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004 年度 学部：0 名 大学院：2 名 (計 2 名)

2005 年度 学部：0 名 大学院：2 名 (計 2 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2004 年度～2005 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004 年度～2005 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

なし

8. 外国人研究者の受け入れ状況

2005 年度 1 名 (胡可先浙江大学中文系教授)

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

本専門分野は、主に清朝時代以前の漢語文献について、文言体と白話体の別なく、文献学的手法を用いて正確な訓詁を与える点に教育の主眼が置かれている。また、研究室内の教育・研究活動をより活性化するために、カリキュラムとは別に、教員スタッフを中心に三種の研究会も組織されている。

こうした体制の成果として、近年、大学院生の学力はかなり向上し、学外からも一定の評価を受けるに至っている。たとえば、研究会活動の成果として大学院生が中心となってまとめた「成化本『白兔記』訳注稿(一)(二)、『烏臺筆補』訳注稿(一)(二)(三)」は学界展望の類でも取り上げられているし、大学院生の論文は学会誌にも掲載されるようになっている。

が、一方で、学部・MC・DCの学力に合わせた、段階的なカリキュラム編成は必ずしも十分には整備されていない。これは主にスタッフの不足による。

今後は、大学院生、学部生ともに学生数を増やし、学年別に近いカリキュラム編成を取れるよう、努力したい。

12-2. 研究活動

教室構成員はそれぞれの分野で研究をすすめ、大学院生の論文の学会誌への掲載も徐々に増加しつつある。

海外、学外の研究者との連携もつよめ、大学院生の留学、教員の海外研修、外国人研究者の受け入れも活発に行われている。2004年度の大学院生の海外留学は、2件。中国政府給費留学生として、博士前期課程在籍中の2名の学生が、華東師範大学、浙江大学へそれぞれ留学している。教員の海外研修としては、浅見洋二が Harvard-Yenching Institute Visiting Scholar として、2003年8月25日より2004年8月24日まで「宋代を中心とする中国の別集編纂に関する文学論的・社会文化論的研究」と題する研究を行った。

また、科学研究費の取得にもつとめ、教員スタッフ2名は2004年度、2005年度を通じて「基盤研究(C)」「特定領域研究」等を取得している。

研究活動という面において、総じて本教室は十分活性化されていると言えよう。今後もこの方向を維持できるよう努力したい。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 高橋 文治 教授

1953年生。1982年、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学。文学修士(京都大学、1979年)。追手門学院大学講師、同助教授、同教授を経て、2000年10月現職。

1-1. 論文

高橋文治「阿識罕大王の令旨をめぐる」(単著)「大阪大学大学院文学研究科・広域文化表現論講座共同研究・研究成果報告書」『テキストの解説と伝承』pp. 50-65, 2006/3

高橋文治「成化本『白兔記』についての基礎的研究」(単著), 2003年度～2005年度科学研究費基盤研究(C)研究報告書, pp. 1-140, 2006/3

赤松紀彦, 井上泰山, 金文京, 小松謙, 佐藤晴彦, 高橋繁樹, 高橋文治, 竹内誠, 土屋育子, 松浦恒雄(共著)「元刊雑劇の研究(二)「漢高皇濯足気英布」全訳校注」『京都府立大学学術報告 人文・社会』57, pp. 1-64, 2005/12

加藤聰, 葛葉礼, 後藤安延, 高橋文治, 谷口高志, 陳文輝, 富永鉄平, 豊田祐佳, 西尾俊, 西川幸宏, 藤原祐子, 若松沙保, 渡邊克平(共著)「成化本『白兔記』訳注稿(四)」『中国研究集刊』39, pp. 151-193, 2005/12

沖田道成, 加藤聰, 佐藤貴保, 高橋文治, 向正樹, 山尾拓也, 山本明志(共著)『『烏臺筆補』訳注稿(3)』『内陸アジア言語の研究』20, pp. 77-122, 2005/7

加藤聰, 葛葉礼, 後藤安延, 高橋文治, 谷口高志, 陳文輝, 富永鉄平, 西尾俊(共著)「成化本『白兔記』訳注稿(三)」『中国

研究集刊』37, pp. 94-111, 2005/6

赤松紀彦, 井上泰山, 金文京, 小松謙, 佐藤晴彦, 高橋繁樹, 高橋文治, 竹内誠, 土屋育子, 松浦恒雄(共著)「元刊雜劇の研究(一)「尉遲恭三奪槊」全訳校注」『京都府立大学学術報告 人文・社会』56, pp. 1-44, 2004/12

沖田道成, 加藤聰, 佐藤貴保, 高橋文治, 向正樹, 山尾拓也, 山本明志(共著)『『烏臺筆補』訳註稿(2)』『内陸アジア言語の研究』19, pp. 109-155, 2004/7

加藤聰, 小林春代, 高橋文治, 谷口高志, 富永鉄平, 西尾俊, 藤原祐子(共著)「成化本『白兔記』訳註稿(二)」『中国研究集刊』35, pp. 84-138, 2004/6

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高橋文治(書評)「森田憲司著『元代知識人と地域社会』」『東洋史研究』63-4, pp. 138-147, 2005/3

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

高橋文治 東方学会賞, 東方学会, 1989/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者：高橋文治

課題番号：15520223

研究題目：成化本『白兔記』についての基礎的研究

研究経費：2004年度 直接経費 900千円

2005年度 直接経費 500千円

研究の目的：

成化本『白兔記』は、南戲系『白兔記』の最古のテキストであるばかりでなく、南戲そのものの現存する最古の版本である。したがって、その歴史的価値はきわめて高いが、一方本書は粗雑で俗なテキストでもあり、誤字、脱字、衍字、訛字、当て字が多いばかりでなく、当時の俗語、方言、スラングもふんだんに使われており、非常に難解である。そのため、1967年に発見されて以来、本格的な研究は殆ど発表されていない。本研究は、この成化本『白兔記』の注釈書、翻訳書を作成すべく、その基礎作業として、本書を校訂しつつコンピューター入力し、俗語や方言、スラングの意味の確定を行い、使用される曲牌について可能な限り格律の確定を行うことを第一の目的とする。また、初期の南戲の性格、ならびに初期の戯曲テキストの性格、劉知遠と李三娘の物語の演変、南曲の文学史的意義などについても、あわせて考察する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2. 浅見 洋二 助教授

1960年生。東北大学大学院文学研究科博士課程中途退学。文学修士(東北大学、1986年)。東北大学助手、山口大学助手、同講師、同助教授を経て、1996年10月、現職。専攻：中国文学。

2-1. 論文

浅見洋二『『形似』の変容——言葉と物の関係から見たいわゆる宋詩の日常性に関する一考察——』『中国——社会と文化』
20, pp. 390-408, 2005/6

浅見洋二「作者の夢、読者の夢——宋代における詩の解釈学をめぐって——」『文藝論叢』(大谷大学文藝学会), 64, pp.
26-44, 2005/3

浅見洋二「文学的歴史学——宋代詩人年譜、編年詩文集及“詩史”説——」(張劍, 易愛華訳)『新文学』(大象出版社), 3, pp.
102-125, 2005/2

2-2. 著書

浅見洋二『テキストの読解と伝承』大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究報告書, pp. 1-218, 2006/3

浅見洋二『距離与想象——中国詩学的唐宋転型』(金程宇, 岡田千穂訳), 上海古籍出版社, pp. 1-507, 2005/12

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

浅見洋二(批評)「詩における『ここ』と『かなた』——古典中国の詩と詩学 11——」『るしおる』(書肆山田), 59, pp. 91-101,
2005/12

浅見洋二(批評)「無人称の空間——楊煉の詩について——」『現代詩手帖』48-6, pp. 103-107, 2005/6

浅見洋二(書評), 衣若芬著『觀看・叙述・審美——唐宋題画文学論集——』『中国文学報』69, pp. 201-214, 2005/4

浅見洋二(翻訳)『幸福なる魂の手記』楊煉著, 思潮社, pp. 1-239, 2005/3

浅見洋二(批評)「言葉と物——古典中国の詩と詩学 10——」『るしおる』(書肆山田), 56, pp. 122-127, 2005/3

浅見洋二(批評)「言語と鏡——古典中国の詩と詩学 9——」『るしおる』(書肆山田), 54, pp. 110-115, 2004/8

浅見洋二(批評)『『空谷幽蘭』と『水月鏡花』(続)——古典中国の詩と詩学 8——』『るしおる』(書肆山田), 53, pp. 116-121,
2004/5

2-4. 口頭発表

浅見洋二『『形似』的新変——從語言与事物的關係論宋詩的日常性特点——』中国近世文学国際學術研討会, 台南, 2005/10

浅見洋二「唐宋詩学転型——詩歌与絵画中所見——」中央研究院中国文哲研究所「詩与詩学」研究群座談会, 台北, 2005/10

浅見洋二「論『拾得』詩歌現象及『詩本』、『詩材』、『詩料』問題——以楊万里、陸游為中心」第4回宋代文学国際學術
研討会, 杭州, 2005/9

浅見洋二『『形似』の変容——いわゆる宋詩の日常性をめぐって——』国際シンポジウム『伝統中国の日常空間』東京,
2005/1

浅見洋二「作者の夢、読者の夢——宋代における詩の解釈学をめぐって——」大谷大学文藝学会學術公開講演会, 京都,
2004/12

浅見洋二『『詩中有画』与『著壁成絵』——從兩種王維詩評看中国古代的詩画論——』第12回唐代文学国際學術研討会,
広州, 2004/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

浅見洋二 大阪大学共通教育賞(2004年度2学期), 大阪大学, 2004

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2005年度、日本學術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)、代表者：浅見洋二

課題番号：17520230

研究題目：中国宋代における別集の編纂に関する文学論的・社会文化論的研究

研究経費：800千円

研究の目的：

中国宋代は、文学者が自らの作品集(別集)を編むことに自覚的になった時代である。この時期の別集の編纂について、当時の文学論および社会文化的背景との関連に重点を置いて考察する。

2-6-2. 2005 年度、文部科学省科学研究補助金・特定領域研究、代表者：浅見洋二

課題番号：17083014

研究題目：五山文学における宋代詩文の受容と展開——詩文集の注釈と詩話を中心に

研究経費：6,200 千円

研究の目的：

日本の五山禅林における宋代文学の受容状況について、東アジア海域交流の視点から、多角的に考察する。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

中国社会文化学会・評議員

2005 年 4 月～現在

2-15 国語学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

国語学とは、日本語の音韻、文字・表記、文法、語彙などについて、上代から近・現代にわたり、通時的・共時的に研究するものであるが、大阪大学大学院文学研究科においては、別に現代語を主な対象とする日本語学専門分野があるので、国語学専門分野では通時の研究(国語史研究)に重点を置き、明治以前の時代を主な対象とする。講義・演習などの授業も、課程博士論文・修士論文や学部の卒業論文もまた同様である。文献により実証することを重視するので文学の知識も必要であり、学部では日本文学と専修を同じくしている。また、日本文学とともに大阪大学国語国文学会を組織し、学会誌「語文」を年2回刊行し、研究発表・講演を含む総会を年1回開いている。卒業論文・修士論文中間発表会や大学院生の研究発表会などは日本文学・比較文学とともにやっている。

蜂矢真郷教授は語構成、語彙史、上代語の研究を中心とし、金水敏教授は文法史を中心としつつ役割語の研究など多岐にわたっており、岡島昭浩助教授は音韻史、日本語学史、辞書史の研究を中心としている。このように、どの研究も、個別の文献や一つの時代に限らない、全体として大きな国語史となると言えるものである。現在、文字・表記の分野がやや手薄ではあるが、互いに補い合っている。多くの大学院生の多様な研究とともに、今後とも国語史研究に重点を置いた研究・教育が進められよう。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 2 助教授 1 講師 0 助手 0

教授：蜂矢 真郷、金水 敏

助教授：岡島 昭浩

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数								
学部*	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
58	6	7	0	0	0	1	0	3

*(日本文学と併せて) ※うち留学生 2 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業者*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	8	2	1	0	0
'05	8	5	3	3	0
小計	16	7	4	3	0

*(日本文学と合わせて)

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	0	3	3
'05	3	0	3
計	3	3	6

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

衣畑智秀 「日本語の「逆接」の接続助詞とその周辺——理論と記述の接点をめぐって——」 2005/9

主査：金水敏 副査：蜂矢真郷、渋谷勝己

朴美賢 「日本書紀の用字の研究」 2005/9

主査：蜂矢真郷 副査：後藤昭雄、岡島昭浩

深澤愛 「近代日本語書記における片仮名の研究」 2006/3

主査：岡島昭浩 副査：蜂矢真郷、金水敏

【論文博士】

廣岡義隆 「上代の言語に関する動態論的考察」 2004/12

主査：蜂矢真郷 副査：後藤昭雄、岡島昭浩

山内洋一郎 「活用と活用形の通時的研究」 2005/3

主査：蜂矢真郷 副査：金水敏、岡島昭浩

吉野政治 「古代の基礎的認識語と敬語の研究」 2004/11

主査：蜂矢真郷 副査：後藤昭雄、金水敏

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	4	1	4	0	1	10
'05	2	1	1	0	2	6
計	6	2	5	0	3	16

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	6	0	0	0	6
'05	2	5	1	0	1	9
計	2	11	1	0	1	15

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

小川志乃「カラニの一用法——接続助詞カラの成立の可能性をめぐって——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 82, pp. 47-59, 2004/6

衣畑智秀「副助詞ダニの意味と構造とその変化——上代・中古における——」『日本語文法』(日本語文法学会), 5-1, pp. 1-18, 2005/3

衣畑智秀, 楊昌洙「役割語としての「軍隊語」の成立」『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(2003年度～2004年度科学研究費基盤研究(C)研究成果報告書), pp. 73-101, 2005/3

衣畑智秀「古代語・現代語の「逆接」——古代語のトモ・ドモによる意味対立を中心に——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 83, pp. 49-58, 2004/12

高宮幸乃「ヤラ(ウ)による間接疑問文の成立——不定詞疑問を中心に——」『三重大学日本語学文学』(三重大学日本語学文学会), 15, pp. 17-31, 2004/6

竹内史郎「上代語における助詞トによる構文の諸相」『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 24, 和泉書院, pp. 167-184, 2005/3

竹内史郎「サニ構文の成立・展開と助詞サニについて」『日本語の研究』(日本語学会), 1-1(『国語学』通巻, 220), pp. 2-17, 2005/1

竹内史郎「ム型・ブ型・ミス型動詞とミ語法の形態論的必然性による推移」『萬葉』(萬葉学会), 191, pp. 19-40, 2005/1

林浩恵「上代に見られる形容詞語幹の副詞的用法——意味と形態との関係を中心に——」『待兼山論叢』文学篇(大阪大学文学会), 38, pp. 17-31, 2004/12

深澤愛「外来語の片仮名表記と表記体——『太陽』前誌群による考察——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 83, pp. 36-48, 2004/12

【2005年度】

衣畑智秀「上代語のヲ・モノヲ——その起源をめぐって——」『和漢語文研究』(京都府立大学国中文学会), 3, pp. 49-63, 2005/11

衣畑智秀「日本語の「逆接」の接続助詞について——情報の質と処理単位を軸に——」『日本語科学』(国立国語研究所), 17,

pp. 47-64, 2005/4

黒木邦彦, 高木千恵「奄美大島瀬戸内町の若年層の言語意識——自分のことばに対する意識とことばの弁別——」『大阪大学大学院文学研究科日本語学講座逐次刊行物』(大阪大学大学院文学研究科真田研究室), pp. 20-28, 2006/2

高木千恵, 黒木邦彦, 黄永熙「奄美大島瀬戸内町におけるネオ方言の名称と評価」『大阪大学大学院文学研究科日本語学講座逐次刊行物』(大阪大学大学院文学研究科真田研究室), pp. 8-19, 2006/2

蜂矢真弓「名詞被覆形・露出形の型の通時的相違」『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 25, pp. 105-123, 和泉書院, 2006/3

依田恵美「中央語におけるサ行四段動詞イ音便の衰退時期をめぐって」『待兼山論叢』文学篇(大阪大学文学会), 39, pp. 17-31, 2005/12

(2)口頭発表

【2004年度】

黒木邦彦「スル形式の意味の変遷」筑紫国語談話会 200 回記念大会, 九州大学, 2005/1/29

黒木邦彦「形式と意味内容——現代日本語と古代日本語のテンス・アスペクト——」熊本県立大学日本語日本文学会総会, 熊本県立大学, 2004/6/26

高宮幸乃「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」大阪大学国語国文学会 2004 年度総会, 大阪大学中之島センター, 2005/1/8

蜂矢真弓「被覆形・露出形の型の通時的相違」筑紫国語学談話会 200 回記念大会, 九州大学, 2005/1/29

深澤愛「外来語の片仮名表記と表記体——『太陽』と『太陽』前誌群を資料として——」第 4 回表記研究会, キャンパスプラザ京都, 2004/9/26

深澤愛「漢字表記から片仮名表記へ——近代における外来語表記の移行について——」日本語学会 2004 年度春季大会, 実践女子大学, 2004/5/23

【2005年度】

岩田美穂「並列表現の史的変遷」関西言語学会ワークショップ「歴史的観点から見た日本語における句の諸相」関西大学, 2005/6/4

衣畑智秀“Syntactic Change from Connective to Focus Particles in Japanese”, The 15th Japanese / Korean Linguistics Conference, University of Wisconsin-Madison, 2005/10/8

衣畑智秀「従属句、主題句、焦点句——日本語の統語変化から——」関西言語学会ワークショップ「歴史的観点から見た日本語における句の諸相」関西大学, 2005/6/4

金紋敬「日本書紀古訓における「ハラカラ」」第 92 回訓点語学会研究発表会, 甲南大学, 2005/5/27

黒木邦彦「中古日本語における基本形のアスペクト・テンス」韓国日本語学会, 東義大学, 2006/3/18

黒木邦彦「いわゆる完了の助動詞「つ」「ぬ」について」熊本県立大学日本語日本文学会, 熊本県立大学, 2005/7/16

黒木邦彦「中古日本語のアスペクト・テンス——時間的限定性との相関性をめぐって——」土曜ことばの会, 大阪大学待兼山会館, 2005/4/16

依田恵美「近世前期上方語の動詞音便形をめぐって——バ・マ行四段動詞を中心に——」大阪大学国語国文学会 2005 年度総会, 大阪大学, 2006/1/14

依田恵美「外国人らしさを担う役割語」若手研究者交流ワークショップ 2005「イメージとしての<日本>」大阪大学中之島センター, 2005/6/25

(3)その他(書評・翻訳など)

【2004年度】

岡島昭浩, 衣畑智秀, 大田垣仁, 覚野吾郎, 鳩野恵介「ピジン日本語その他資料」『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(2003 年度~2004 年度科学研究費基盤研究(C)研究成果報告書), pp. 73-101, 2005/3

小川志乃「抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙」項目執筆『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(2003

年度～2004年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書), pp. 45-71, 2005/3
竹内史郎「抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙」項目執筆『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(2003年度～2004年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書), pp. 45-71, 2005/3
蜂矢真弓「抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙」項目執筆『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(2003年度～2004年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書), pp. 45-71, 2005/3
林浩恵「抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙」項目執筆『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(2003年度～2004年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書), pp. 45-71, 2005/3

【2005年度】

衣畑智秀, 依田恵美「忍頂寺文庫蔵近世後期上方洒落本について」2005年度大阪大学大学院文学研究科共同研究(大阪大学・国文学研究資料館連携研究)「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」公開研究会, 大阪大学, 2006/1/15
衣畑智秀, 依田恵美「忍頂寺文庫蔵近世後期上方洒落本について」2005年度大阪大学大学院文学研究科共同研究(大阪大学・国文学研究資料館連携研究)「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」公開研究会, 大阪大学, 2006/1/15

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

なし

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度～2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004年度～2005年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2004年度：0名　2005年度：1名

<内訳>　高等学校の教員 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

外国人招へい研究員 計 3 名

9. 刊行物

2004年度～2005年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書『台湾における日本文学・国語学の新たな可能性』
〔2004年度〕研究代表者：金水敏, 『アジアの表象／日本の表象』〔2005年度〕研究代表者：内藤高・金水敏, 2006/2

*(日本文学専門分野とともに)

2004年度　「語文」82、83輯　大阪大学国語国文学会の機関誌　年2回

2005年度　「語文」84・85輯　大阪大学国語国文学会の機関誌　合併号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

開催	第 81 回国語語彙史研究会	2005/12/3
事務局	国語語彙史研究会	2002 年度以前から
	国語文字史研究会	2002 年度以前から
	土曜ことばの会	2002 年度以前から

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

*(日本文学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会	1 月 1 日間
研究誌「語文」を年 2 回編集・発行	

*(日本文学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会	10 月 3 日間
大学院研究発表会	7 月・11 月 各 2 日間

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

大学院生は前回『年報 2004』に示した数よりやや減っている(前々回『年報 2002』に示した数よりは多い)。それに伴ってか大学院生の学会での発表も前回より少し減っているが、論文数は前回と同じであるので、基本的には大学院生の研究がコンスタントに続けられていることを示している。

以前にも述べたが、国語学・日本語学界において、近年は、現代語を研究する人が多く、国語史や明治以前などを研究する人はあまり多くない。そうした中で、多くの文献資料を検討する必要がある、文学の知識も必要であるところの、決して楽ではない研究をしようとする大学院生が、これほどの論文を執筆していることは、もう少し評価されてよいのではないかと思われる。外国人招へい研究員を含めて留学生が現代語以外を研究対象としているのも、大きな努力をしていると見られる。

以前に大阪大学文学部からの大学院進学者が少ないことについて述べたことがあるが、その後徐々に増えている。そして、それが今後も期待される状況であることは、学部教育の一つの成果と言ってよいであろう。留学生を含めて他大学から来た大学院生とともども切磋琢磨していて、それなりに望ましい状況と言ってよい。自主的な研究会も開かれるなどしており、また新しい展開も期待される。

大学院生の研究が活発であるのに対して、近年、研究者として就職した者が 1 名にとどまっているのは決して望ましい状況とは言えない。しかし、日本学術振興会特別研究員(関西学院大学)に採用された者、京都大学の任期付研究員に採用された者もいて、近年の状況から見れば健闘している方であろう。博士の学位を取得しても大学非常勤講師の職すらない大学もあると聞く中で、博士後期課程修了者・単位修得退学者の未就職者のほとんどが(博士後期課程在学者の何人かも)大学非常勤講師に行っているのも健闘している例であると言ってよい。

12-2. 研究活動

前回も書いたが、蜂矢真郷教授・金水敏教授はいずれも多くの論文や著書・共著他を発表しており、岡島助教授もまた多くの論文他を発表していて、各人ともその研究が評価されている。この2年間の論文等の発表も多くあった。とりわけ、金水教授の本格的な著書『日本語存在表現の歴史』が刊行されたことは注目してよいと考えられる。各人とも多くの学会の役員等をよく務めていて、学会活動に対して積極的に接しており、他方、国語語彙史研究会・国語文字史研究会・土曜ことばの会の事務局を大阪大学に置いていて、これらのことが、大学院生や学部学生に対して、研究の面でも学界に接する面でも様々なよい影響をもたらしていると思われる。2004年度以降、科研費等を用いての全国的な研究会や国際的な研究会なども、金水教授を中心に多く持たれるようになっていく。また、2004年11月、岡崎友子助手(当時)が新村出記念財団研究助成金を受けている。

2003年度～2004年度科学研究費基盤研究(C)「文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について」は報告書を出してまとめることが出来たが、この研究から発展した研究も、各教員や院生によってなされていて、2006年度以降の科学研究費基盤研究「文献に現れた語彙・語法と国語史の不整合性について」を申請するなど、今後の新たな共同研究も期待できる。博士の学位も、課程博士を3名に、論文博士を3名に授与していて、引き続き今後も授与できる見込みである。今後とも、大学院生を含めて、研究はより活発に行われ、著書・論文等もさらに多くのものが公になることが期待できる状況であること、前回と同様である。

上記のように、今後への期待も含めて評価できるところは大きいと見られるが、教員の、教育・研究に直接する他の仕事がさらに増えていて、教育・研究の低下や、あるいは、個人の身体への悪影響をもたらすようなことにならないかと恐れるところもある。前回も書いたが、もう少し各人が教育・研究に専念できる環境を望みたいと思うのは贅沢なことであろうか。非常勤講師の配置は、現在最小限であるので、さらなる削減は是非とも避けてほしいと願っている。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004 年度～2005 年度の過去 2 年間)

1. 蜂矢 真郷 教授

1946 年生。京都大学文学部卒業、同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。博士(文学)。親和女子大学専任講師、同助教授、帝塚山学院大学助教授、奈良女子大学文学部助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：国語学。

1-1. 論文

蜂矢真郷「重複形容詞の周辺」『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会)25, 和泉書院, pp. 161-178, 2006/3

蜂矢真郷「形容詞スガシ(イ) [清] 考」『大阪大学大学院文学研究科紀要』45, pp. 1-19, 2005/3

蜂矢真郷「『長塚節歌集』の形容詞」『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会)24, 和泉書院, pp. 241-258, 2005/3

蜂矢真郷「一九六五～一九七五年度頃の略字」『国語文字史の研究』(国語文字史研究会)8, 和泉書院, pp. 197-214, 2005/3

蜂矢真郷「ウマシクニソとウマシキクニソ——ウマシ [シク活用] の問題から——」『萬葉』(萬葉学会)190, pp. 52-59, 2004/9

1-2. 著書

蜂矢真郷編『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(2003 年度～2004 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 [研究代表者：蜂矢真郷、研究分担者：金水敏、岡島昭浩、岡崎友子]), 2005/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

蜂矢真郷「抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』語彙」項目執筆(執筆項目：アヲナリ・アヲニ／トホニ、サミシラヤ、ヒソニ)『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(2003 年度～2004 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書), pp. 45-71, 2005/3

1-4. 口頭発表

蜂矢真郷「重複形容詞の周辺」第 80 回国語語彙史研究会, 龍谷大学大宮学舎, 2005/9/17

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

蜂矢真郷 第 17 回新村出賞, 新村出記念財団, 1998/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003～2004 年度、基盤研究(C)(2)、研究代表者：蜂矢真郷、研究分担者：金水敏、岡島昭浩、岡崎友子
課題番号：15520290

研究題目：文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について

研究経費：2004年度 直接経費 900千円 間接経費 0円

研究の目的：

従来の、歴史的文献に基づく国語史(日本語史)研究では、「口語性」を反映していると言われる文献が特に重要視されてきた。また、特に口語的でない文献からも、「口語性」が露呈していると言われる部分を恣意的に取り出して利用するということが行われてきた。本研究は、このような従来の観点を裏返し、むしろ「口語性」と不連続・不整合を見せる語彙あるいは形態を積極的に取り上げ、その由来、発展の過程を明らかにすることを目的とする。

従来の国語史は、「口語性」という必ずしも実態の明らかでない尺度によって文献を恣意的に選択し、切り取ることによって成立している一面がある。本研究はこれとまったく発想を異にし、文献の作り手が国語をどのように認識し、自らの表現を作り上げているかという観点に基づく研究であり、文献が本来持っている主体性、表現性を中心とする語彙・語法研究である。また、今までは切り捨てられてきた資料に光を当てることによって、国語のより豊かな実態が明らかになるであろう。本研究を押し進めることにより、日本語の歴史的な流れはより重層的・立体的に捉えられることになるはずであり、従来の硬直した国語観にも大幅な改変が迫られることもありうる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

国語文字史研究会・編集主任	2005年9月～現在
同上・委員	2002年4月～現在
国語学会(2004年4月より日本語学会と名称変更)・常任査読委員	2004年5月～現在
同上・評議員	2000年4月～現在
訓点語学会・委員	2003年11月～現在
国語語彙史研究会・幹事, 代表幹事	2001年4月～現在
萬葉学会・編輯委員	1979年12月～現在

2. 金水 敏 教授

1956年生。1982年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。文学修士(東京大学、1981年)。東京大学助手、神戸大学教養部講師、大阪女子大学助教授、神戸大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。専攻：国語学／言語学。

2-1. 論文

金水敏「存在表現の歴史と方言」『国語と国文学』82-11, 東京大学国語国文学会, pp. 180-191, 2005/11

金水敏「古代・中世の「をり」と文体」築島裕博士傘寿記念会(編)『築島裕博士傘寿記念 国語学論集』汲古書院, pp. 212-229, 2005/10

金水敏「日本語敬語の文法化と意味変化」日本語学会(編)『日本語の研究』1-3, pp. 18-31, 2005/7

金水敏「金剛寺一切経の古訓点本——『維摩経』を中心に——」石塚晴通教授退職記念会(編)『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』汲古書院, pp. 95-115, 2005/5

金水敏「歴史的に見た「いる」と「ある」の関係」日本語文法学会(編)『日本語文法』5-1, くろしお出版, pp. 138-157, 2005/3

金水敏「近代日本小説における「(人が)いる／ある」の意味変化」『待兼山論叢(文学篇)』(大阪大学大学院文学研究科), 38, pp. 1-14, 2004/12

金水敏「研究手帳：〈アルヨことば〉その後」『いづみミニ通信』3, 和泉書院, pp. 5-6, 2004/11

金水敏「全国共通語「おる」の機能とその起源」近代語学会(編)『近代語研究』12, 武蔵野書院, pp. 393-412, 2004/8

金水敏「文脈の結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」影山太郎・岸本秀樹(編)『日本語の分析と言語類型』柴谷方良教授還暦記念論文集, くろしお出版, pp. 47-56, 2004/7

金水敏「敬語動詞における視点中和の原理について」音声文法研究会(編)『文法と音声 IV』くろしお出版, pp. 181-192,

2004/5

金水敏「日本語の敬語の歴史と文法化」『言語』33-4, 大修館書店, pp. 34-41, 2004/4

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

金水敏(事典項目)「役割語」真田信治, 庄司博史(編)『日本の多言語社会』岩波書店, pp. 282-284, 2005/10

金水敏(書評)「李 長波著『日本語指示体系の歴史』」『国語学』日本語学会, 55-3 (通巻第 218 号), pp. 1-6, 2004/7

2-4. 口頭発表

金水敏「役割語研究の展開」韓国日本語学会第 13 回学術発表大会, 東義大学校(韓国・釜山), 2006/3/18

金水敏「役割語研究の動向」国際シンポジウム「アジアの表象／日本の表象」チューラーロンコーン大学文学部, 2005/12/22

Kinsui, Satoshi, "On "Role Language" in Contemporary Japanese: An Investigation of Prototypical Styles in Japanese," Main Hall, Taylor Institution, Oxford University, 2005/11/4

Kinsui, Satoshi, "On the Short History of *Oru*," Lecture Room 1, the Oriental Institute, Oxford University, 2005/11/2

金水敏「役割語研究の動向」共同研究会「日本語史・日本語学研究の新展開」高麗大学校 国際館 115 号室, 2005/9/30

金水敏「対照役割語研究の構想」関西言語学会第 30 回記念大会 シンポジウムⅡ「対照役割語研究への誘い」関西大学 千里山キャンパス 2 号館 B102 教室, 2005/6/5

金水敏, 吉村和真「近代日本漫画の言葉と身体」阪大フォーラム 2004 〈ストラスブール〉「日本、もうひとつの顔」マルクブロック大学パレ・ユニヴェルシテール, 119 ホール(フランス: ストラスブール), 大阪大学+21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」2004/11/6

Kinsui, Satoshi, "Interaction between Argument and Non-argument in the Historical Change of the Japanese Syntax," Oxford-Kobe Seminars, The Second Linguistics Seminar International Symposium: The History and Structure of Japanese Kobe Institute Oxford University, 2004/9/29

金水敏「「俺」の歌、「僕」の歌——日本流行歌に見る「男性性」の表現——」「日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開」国際学術会議 北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟, 2004/9/3

Kinsui, Satoshi, "Interaction between Honorification and Identification in the History of Japanese Grammar," Functional Approaches to Japanese Grammar: Towards the Understanding of Human Language, August 20-22, 2004 University of Alberta University of Alberta, 2004/8/22

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

金水敏, 原口裕他 豊田賞, 日本英学史学会, 1992/10

金水敏, 田窪行則 日本認知科学会論文賞, 日本認知科学会, 1991/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2004 年度～2006 年度、基盤研究(B)(1)、代表者：金水敏

課題番号：16320059

研究題目：日本語史の理論的・実証的基盤の再構築

研究経費：2004 年度 1, 800 千円

2005 年度 1, 400 千円

研究の目的：

本研究は、日本語の歴史的研究を進展させていく上で、伝統的な研究によって蓄積された知見と、新たな言語理論によってもたらされる視点を統合・整理し、いかなる研究形態がもっとも有用であるかという点についての指針を提示するこ

とを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」分担

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本語学会(旧・国語学会)・評議員	2003年4月～2009年3月
言語処理学会・理事	2004年3月17日～2008年評議員会当日
日本語文法学会・評議員	2003年4月～2007年3月
日本言語学会・委員	2003年4月～2006年3月
語用論学会・大会運営委員(企画担当)	2004年～2006年3月
同上・運営委員	2002年4月～2005年3月
同上・編集委員	2002年4月～2005年3月
訓点語学会・委員	2003年5月16日～現在
関西言語学会・委員	2000年～現在

3. 岡島 昭浩 助教授

1961年生。1987年、九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(九州大学、1986年)。九州大学文学部助手、京都府立大学女子短期大学部講師・助教授、福井大学教育学部(教育地域科学部)助教授を経て現職。専攻：国語学。

3-1. 論文

岡島昭浩「大矢透以前の史的五十音図研究」『語文』82, pp. 37-46, 2004/6

3-2. 著書

前田富祺監修(編集・執筆 安部清哉, 岡島昭浩, 小椋秀樹, 小野正弘, 木村義之, 佐藤貴裕, 田中牧郎, 矢田勉, 山本真吾, 渡部圭介)『日本語源大辞典』小学館, 2005/2

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岡島昭浩, 衣畑智秀, 大田垣仁, 覚野吾郎, 鳩野恵介「ピジン日本語その他資料」『文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について』(2003年度～2004年度科学研究費基盤研究(C)研究成果報告書), pp. 73-101, 2005/3

岡島昭浩『近世後期から近代前期にかけての五十音図研究についての研究』(2003年度～2004年度科学研究費基盤研究(C)研究成果報告書), 2005/3

3-4. 口頭発表

岡島昭浩「『俚言集覧』と『増補俚言集覧』——『今昔物語(集)』の引用を中心に——」第76回国語語彙史研究会, 2004/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003年度～2004年度、基盤研究(C)(2)、代表者：岡島昭浩

課題番号：15520287

研究題目：近世後期から近代前期にかけての五十音図研究についての研究

研究経費：2004年度 直接経費 500千円

研究の目的：

五十音図の歴史的研究を最初に行ったのは明治から昭和初期にかけての国語学者、大矢透であり、それ以前には歴史的・実証的な研究はなかったものと考えられてきた。たとえば平田篤胤が『古史本辞経』で示したのは、観念的で独断的なものであった。しかし、その一方で、実証的・歴史的な研究も行われていた。たとえば、伴信友の語学研究であり、さらにはその弟子である谷森善臣の語学研究がそれである。伴信友が『比古婆衣』の中で、いろは歌に先行する「たみへの歌」に言及していることは、知られておらず、「たみへの歌」の研究は、大矢透に始まるとの見方が一般的である。谷森善臣は伴信友の弟子に当たる人物であるが、その書き残したものをみると、「たみへの歌」への言及があり、さらには五十音図の研究もある。その五十音図研究が今まで国語学界に未紹介であったことは残念である。この谷森善臣の稿本類は宮内庁書陵部に蔵されているが、かなり多量なものであり、随筆のスタイルでもあり、さまざまな箇所に分かれて出てくるので、基本的調査が必要である。大矢透以前の五十音図研究がどこまで進んでいたのかを見極めることを目標とし、国学者の国語学から近代的な言語史研究へと、どのように発展していったのかについて考える一助としたい。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日本語学会・大会企画運営委員	2003年6月～2006年5月
日本語学会・電子化委員	2003年6月～2006年5月
国語語彙史研究会・委員	2003年4月～現在

2-16 英米文学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

英米文学専門分野では、学生の多様な関心に対応できる態勢を維持しつつ教育と研究に当たっている。17世紀・ルネサンス文学から20世紀現代に至るイギリス文学と、19・20世紀にわたるアメリカ文学において、正典といわれる古典的な作品はいうまでもなく、最近新たな評価を獲得し始めた作品までも幅広く取り上げ、それらの文学テキストを綿密かつ正確に読むことを基本方針としている。学生が研究対象とする作家、時代、ジャンル、テーマ、方法論等を限定することは行わず、したがって学生諸君は自分の文学的関心にもとづいて自由に研究テーマを選ぶことができるのが特色である。スタッフおよび学生は、こうした多様な教育と研究にもとづいて蓄積した実力を背景にして、日本英文学会や日本アメリカ文学会をはじめとするさまざまな学会を舞台にして精力的に研究活動を行っている。

本研究分野では、研究室修了者を主体として組織された阪大英文学会(会長・玉井 暲)と連携したり、年1回研究誌(*Osaka Literary Review*)を発行したりすることで研究を推進している。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 2 助教授 2 外国人教師 1 助手 1

教授：玉井 暲、森岡 裕一

助教授：服部 典之、片渕 悦久

外国人教師：ポール・ハーヴィ

助手：好井 千代

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
80	7	19	0	0	0	6	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業者	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	18	7	4	2	2
'05	16	5	2	1	1
小計	34	12	6	3	3

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	2	1	3
'05	1	2	3
計	3	3	6

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

桐山恵子 「Studies of the Fantastic Boundary in Oscar Wilde.” 2005/3

主査：玉井暲 副査：森岡裕一、服部典之、片渕悦久

小久保潤子 「Misleading Look: Representation in Nathaniel Hawthorne's Texts.” 2005/9

主査：森岡裕一 副査：玉井暲、服部典之、片渕悦久

三浦誉史加 「The Function of Storytelling in Shakespeare's Romance Plays.” 2005/3

主査：玉井暲 副査：森岡裕一、服部典之、片渕悦久

【論文博士】

宮川清司 「ヴィジョンの詩学——ワーズワスを中心に」 2004/12

主査：玉井暲 副査：森岡裕一、服部典之、片渕悦久

森岡裕一 「飲酒／禁酒の物語学——アメリカ文学とアルコール」 2006/3

主査：玉井暲 副査：和田章男、服部典之、片渕悦久

米本弘一 「フィクションとしての歴史——ウォルター・スコットの語りの技法」 2005/8

主査：玉井暲 副査：柏木隆雄、森岡裕一、服部典之

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	11	2	0	0	7	20
'05	9	2	0	0	0	11
計	20	4	0	0	7	31

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	5	2	0	0	7
'05	0	8	2	0	0	10
計	0	13	4	0	0	17

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

伊藤佳子「*The Return of the Native*——Clym の顔を読む」*Osaka Literary Review* (Osaka University), 43, pp. 73-86, 2004/12

伊藤佳子「『はるか群衆を離れて』における擬人法」『ハーディ研究』(日本ハーディ協会), 30, pp. 53-66, 2004/9

市橋孝道 “The Representation of the ‘Gentleman’ in *Barry Lyndon*: The Narrative Function of the German Setting,” *Machikaneyama Ronso (Literature)* (Osaka University), 38, pp. 17-32, 2004/12

垣口由香 “The Inevitable Destruction of the Mediated Self: The Future Dead, Tape-recording and Tape-recorded in Beckett’s *Krapp’s Last Tape*,” *Osaka Literary Review* (Osaka University), 43, pp. 153-164, 2004/12

垣口由香「研ぎ澄まされた聴覚——『しあわせな日々』におけるウィニーの腹話術的声の身体——」玉井暲, 仙葉豊編『病いと身体 of 英米文学——阪大英文学会叢書 1——』(英宝社), pp. 286-306, 2004/5

片山美穂「ファンタジーの世界——「グラス・タウン」」中岡洋, 内田能嗣編『ブロンテ姉妹を学ぶ人のために』(世界思想社), pp. 44-51, 2005/2

片山美穂「母なる大地に棄てられた子供——Emily Bronte の詩における死のテーマ——」『ブロンテ・スタディーズ』(日本ブロンテ協会), 4-2, pp. 29-40, 2004/10

小久保潤子「アメリカン・ゴシック」森岡裕一, 片渕悦久編『新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ——』(英宝社), pp. 76-84, 2004/10

桐山恵子「『ドリアン・グレイの肖像』における不在の悪魔と逆転した空間」『オスカー・ワイルド研究』(日本オスカー・ワイルド協会), 6, pp. 55-63, 2004/11

高橋信隆 “Haunted America: *The American Scene* as Gothic Landscape”, *Osaka Literary Review* (Osaka University), 43, pp. 87-103, 2004/12

高橋信隆「暴力・リンチ・カニバリズム」森岡裕一, 片渕悦久編『新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ——』(英宝社), pp. 157-165, 2004/10

武内正美「リリパットの国家身体——『ガリバー旅行記』における近代古代論争——」玉井暲, 仙葉豊編『病いと身体 of 英米文学——阪大英文学会叢書 1——』(英宝社), pp. 29-64, 2004/5

- 田中沙織 “Mirror Images Reflecting Self: Narcissism in F. Scott Fitzgerald’s *This Side of Parade*,” *Osaka Literary Review* (Osaka University), 43, pp. 123-140, 2004/12
- 橋幸子 “A Beautiful and Damped Woman: Gloria Gilbert Patch as a Heroine,” *Osaka Literary Review* (Osaka University), 43, pp. 141-152, 2004/12
- 橋幸子 「アメリカン・ドリーム」 森岡裕一, 片渕悦久編 『新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ——』 (英宝社), pp. 85-93, 2004/10
- 中井麻記子 “The Defective Copy of God: Imitative Acts in *Of Human Bondage*,” *Osaka Literary Review* (Osaka University), 43, pp. 105-122, 2004/12
- 三浦誉史加 “The Disappearance of ‘Narration’ in *The Winter’s Tale*,” *Osaka Literary Review* (Osaka University), 43, pp. 45-55, 2004/12
- 三浦誉史加 『『終わりよければすべてよし』と精神的不調——『二人の貴公子』を照射して——』 玉井暲, 仙葉豊編 『病いと身体 of 英米文学——阪大英文学会叢書 1——』 (英宝社), pp. 111-132, 2004/5
- 森本道隆 “The Structure of ‘Collaboration’ in Sam Shepard’s *Fool for Love*,” *Machikaneyama Ronso (Literature)* (Osaka University), 38, pp. 33-46, 2004/12
- 吉野麻子 “‘Abandoned and Natural Children’ in Jane Austen’s *Emma*,” *Osaka Literary Review* (Osaka University), 43, pp. 57-71, 2004/12
- 【2005 年度】
- 足達賀代子 “Hermaphrodite Cancelled: The Narrator’s Counterargument in *The Faerie Queene*,” 『英文学研究 (English Number, 47)』 pp. 23-44, 2006/3
- 市橋孝道 “‘Fable-land’ と Kindergarten—— *The Newcomes* にみる教育の寓話」 『ヴィクトリア朝文化研究』 3, pp. 20-35, 2005/11
- 伊藤佳子 『『カスタブリッジの町長』——表象としてのカスタブリッジ——』 『ハーディ研究——日本ハーディ協会会報』 31, pp. 32-46, 2005/9
- 隠岐尚子 “Memory and Oblivion: River Symbolism in *Sula, Song of Solomon, and Beloved*,” *Osaka Literary Review*, 44, pp. 85-102, 2005/12
- 垣口由香 “A Voyage Round the World in Beckett’s *Endgame*,” 『待兼山論叢』 (文学篇), 39, pp. 49-59, 2005/12
- 澤邊興平 “‘I Opened the Gate’: Benjy’s Non-Understanding of Physical Causation,” *Osaka Literary Review*, 44, pp. 53-68, 2005/12
- 澤邊興平 “‘I Opened the Gate’ and ‘I Was Trying to Say,’” 『関西アメリカ文学』 42, pp. 57-70, 2005/11
- 関良子 “Rebuilding Camelot in Alfred Tennyson’s *Idylls of the King*,” *Osaka Literary Review*, 44, pp. 19-38, 2005/12
- 橋幸子 「Fitzgerald のターニング・ポイント: *The Vegetable* の存在価値」 *Osaka Literary Review*, 44, pp. 39-51, 2005/12
- 田中沙織 “The Moment That Comes Back No More: Nostalgia in F. Scott Fitzgerald’s Works,” 『待兼山論叢』 (文学篇), 39, pp. 33-48, 2005/12
- 森本道孝 “The Effect of Rewinding in Sam Shepard’s *La Turista* and *The Unseen Hand*,” *Osaka Literary Review*, 44, pp. 69-84, 2005/12

(2) 口頭発表

【2004 年度】

[学会]

- 市橋孝道 「“fable-land” と Kindergarten —— *The Newcomes* にみる教育の寓話 」 日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第 4 回全国大会, 甲南大学, 2004/11/20(『研究発表要旨』 p. 2)
- 片山美穂 『『島の人々』におけるゴシック』 日本プロンテ協会 2004 年大会, シンポジウム 『『島の人々』に描かれた政治、幻想、および喜劇性について』 甲南女子大学, 2004/10/16
- 小久保潤子 「自制とパッション——*The Scarlet Letters* における分裂した男性主体」 日本アメリカ文学会第 43 回大会,

2004/10/20

小久保潤子『『ウェイクフィールド』を読み直す』日本ホーソン協会 2004 年大会, ワークショップ, 2004/5/21

三浦蒼史加『二人の貴公子』における恋の病——医者と患者の境界線の消失』日本英文学会中国四国支部第 57 回大会, 山口大学, 2004/10/23 (『第 57 回大会研究発表・シンポジウム梗概』 p. 4)

[研究会]

武内正美「政治的身体としての衣装——『桶物語』の〈衣装哲学〉——」18 世紀英文学研究会, 同志社大学, 2004/7/24

田中沙織「ナルシシズムとフィッツジェラルド」関西地区院生談話会, 2004/12/4

【2005 年度】

市橋孝道「洞察力の“Bildung”——Bildungsroman, *Pendennis* にみる“truth”」日本英文学会第 77 回全国大会, 日本大学, 2005/5/21-22

隠岐尚子「トニ・モリソンの『ジャズ』における場所の創造」三校(阪大・大阪外大・関学)談話会, 2005/12/3

澤邊興平「ポパイ擁護の可能性」関西フォークナー研究会, 海技大学校, 2005/9/11

高橋信隆「ヘンリー・ジェイムズの都市風景——フラヌール、『カサマシマ公爵夫人』、世紀末、「環境と文学」(日本学術振興会、人文・社会科学振興プロジェクト), 第 1 回大学院生研究発表会, 大阪大学, 2006/1/28

田中沙織「ノスタルジアの時空間——F. Scott Fitzgerald, *Basil Stories* におけるダブル・ヴィジョン」日本アメリカ文学会関西支部例会, 2005/10/1

中井麻記子「モームの部屋——サマセット・モーム作品における部屋の表象」日本英文学会中国・四国支部第 58 回大会, 香川大学, 2005/10/29-30

中井麻記子「「楽園」の建設者達——Somerset Maugham の“The Pool”に見るサモア表象——」日本英文学会第 77 回全国大会, 日本大学, 2005/5/21-22

村田幸範「ネットワーク・ユートピアの崩壊——E.M. Forster の“The Machine Stops”におけるハイパーテキスト——」日本英文学会第 77 回全国大会, 日本大学, 2005/5/21-22

森本道孝「Sam Shepard 劇における機能しない防御膜——*A Lie of the Mind* を中心に——」日本アメリカ文学会関西支部例会, 甲南女子大学, 2006/1/14

森本道孝「“Pretending”——Sam Shepard 演劇の特質」阪大英文学会第 38 回大会, 大阪大学, 2005/10/29

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004 年度 学部：3 名 大学院：0 名 (計 3 名)

2005 年度 学部：5 名 大学院：1 名 (計 6 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2004 年度～2005 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

桐山恵子 博士後期課程, 和歌山大学経済学部, 専任講師, 2006/4

小久保潤子 博士後期課程, 広島国際学院大学情報学部, 専任講師, 2006/4

三浦蒼史加 博士後期課程, 大谷大学文学部, 助手, 2006/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004 年度～2005 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 7 名

2004 年度：6 名(学部 4 名、院 2 名) 2005 年度：1 名(学部 1 名)

<内訳> 高等学校の教員 7 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2004 年度 *Osaka Literary Review* (OLR) No. 43

2005 年度 *Osaka Literary Review* (OLR) No. 44

阪大英文学会叢書 1、玉井暉、仙葉豊共編『病いと身体の英米文学』(英宝社、2004/5)

阪大英文学会叢書 2、成田義光、長谷川存古共編『英語のテンス・アスペクト・モダリティ』(英宝社、2005/10)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト領域 V

「文学・芸術の社会的媒介機能」－「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」

「環境と文学——第 2 回フォーラム」

2006 年 3 月

「環境と文学——<環境文学 (Eco-literature) の可能性とその社会的効用>

2006 年 1 月

——第 1 回大学院学生研究発表会」

「環境と文学——第 1 回フォーラム」

2005 年 3 月

日本英文学会関西支部設立準備大会

2005 年 12 月

日本ワイルド協会第 30 会記念大会(Mark Turner、London 大学教授特別講演を含む)

2005 年 11 月

英国 Nottingham 大学 Brean Hammond / Janette Dillon 両教授の英文学講演会

2005 年 5 月

日本英文学会第 76 回全国大会

2004 年 5 月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

スタッフ面では、専任教員として、玉井暉教授がヴィクトリア朝および世紀末英文学や批評理論、森岡裕一教授がアメリカ・モダニズム小説、服部典之助教授が 18 世紀および現代英国小説、片渕悦久助教授が 20 世紀現代アメリカ小説、ポール・ハーヴィ外国人教師がシェイクスピアなどを講じている。学外非常勤講師としては、齊藤兆史講師(東京大学)、村井美代子講師(三重短期大学)、水野尚之講師(京都大学)、村井和彦講師(高知大学)、大井浩二講師(関西学院大学名誉教授)が多種多様な講義を提供している。さらに、2004 年にはジョージ・ヒューズ講師(元東京大学)が集中講義講師として出講して英文学講義を担当し、2005 年にはフルブライト招聘講師としてダニエル・シフマン講師がスタッフに加わりアメリカ文学、アメリカ研究の授業を担当するなど、ヴァラエティに富んだ国際性豊かな教育水準を維持している。

院生の研究指導体制としては、従来の談話会形式による口頭発表に司会、コメンテーター制を導入し、さらに実践的な指導を行った結果、学会での院生の口頭発表数、レフリー査読つき論文採択数、全国的学会誌への掲載数は飛躍的に伸び、予想をはるかに上回る活躍ぶりを見せている。また、その他の同窓の研究者を基にした学会誌などへの掲載論文を含める

と、この2年間の院生の論文総数はおよそ30点に達している。また、海外からの研究者との積極的な交流によって、院生・学部生の間で英米の大学・大学院へ留学する気運が高まり、ほとんど毎年1名～2名の留学生を送り出している。以上のように、院生の活躍ぶりに関しても、阪大英米文学が日本の一大拠点になりつつあり、その教育水準の高さが全国的に認められている。

学位取得に関しては、この2年間に論文博士3名、課程博士3名を生み出している。学位論文提出はここ数年途切れることなく続いており、名実ともに、本専門分野の充実振りが実証されつつある。

教育面でさらに付け加えるならば、パソコン等機器の近代化を含むコモンルームの整備を行い、学生が自由に自習や授業の準備ができる環境を整えたり、院生・学部生・教員を交えて春・夏の研究室旅行を実施して親睦の場を積極的に設けるなど雰囲気作りにも努力しており、学問追及の厳しい雰囲気の中にも、和気あいあいとしたアットホームな空気が醸成され、また院生を中心としたホームページ作りがますます充実するなど、本研究室の雰囲気はきわめて良好である。

12-2. 研究活動

教員および学生の研究活動はきわめて旺盛である。その各々は、自分の従事する学問分野、研究領域にしたがって、種々の学会大会での研究発表、学会誌・専門誌への論文執筆、著書の出版、翻訳の出版等々の研究活動を行っている。とくに、日本英文学会と日本アメリカ文学会を舞台とする研究活動が積極的に行われているが、これらの学会のほかにも、日本英文学会中国・四国支部学会、シェイクスピア協会、17世紀英文学会、ジョンソン協会、日本18世紀学会、ロマン派学会、ブロンテ協会、ハーディ協会、ジョージ・エリオット協会、ペイター協会、ワイルド協会、ヴィクトリア朝文化研究学会、ベケット研究会などの英文学系の学会や、日本アメリカ文学会関西支部、ホーソーン協会、フォークナー協会、ヘミングウェイ協会、フィッツジェラルド協会、ペロー協会、マラマッド協会などのアメリカ文学系の学会など、種々の学会に積極的に参加をして、意欲的な研究活動を行っている。玉井教授を中心とした「環境と文学」に関する学術会議が文学研究科全体の取組として数回開催されているが、それにも、英米文学の院生は教員ともども発表など積極的に関わっている。

また、海外の研究者との交流にも積極的に取り組んでおり、海外への留学、海外の大学・研究機関への訪問、外国人研究者の招聘等の活動を通じて、研究の前線において行われている状況に触れることを怠りなく実行している。

本専門分野は、学部のレベルで同一の専修を構成している英語学専門分野と一緒に、「阪大英文学会」を組織し、これを母体にして、毎年1回、研究発表会を開催している。本専門分野出身の学生および研究者は、この同窓会組織の学会でも活発な活動を行っている。この阪大英文学会は、近年は、従来になかったシンポジウム形式を取り入れて、斯界に今日的な問題提起や研究成果を発表したり、発信する学会組織としての整備を推し進めて、また、本専門分野出身者からの投稿論文を編集して「阪大英文学会叢書」の刊行を開始するなど、活気にあふれる研究組織として全国的に注目されている。こうした学会を運営する母体である本専門分野研究室は、ますます研究組織として充実化の一途をたどっている。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 玉井 暲 教授

1946年生。1969年、大阪大学文学部(英文学専攻)卒業。1971年、大阪大学大学院文学研究科修士課程(英文学専攻)修了。文学博士(大阪大学、2000年)。大阪大学助手、大阪府立大学助手、和歌山大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999年1月現職。専攻：英文学。

1-1. 論文

玉井暲「批評の修辭的身体」『オスカー・ワイルド研究』7, 日本ワイルド協会, pp. 55-59, 2005/11

玉井暲「美の遺伝——ラファディオ・ハーンの日本文化論」『英語・英米文学の視座——上山泰教授喜寿記念論文集』大阪教育図書, pp. 239-249, 2005/11

玉井暲「芸術家たちの結社——ラファエル前派」『結社のイギリス史——クラブから帝国まで』山川出版社, pp. 163-176, 2005/8

玉井暲「J. ヒリス・ミラーの批評再考——ハーディの詩「引き裂かれた手紙」をめぐって——」『テキストの地平——森

晴秀教授古稀記念論文集』英宝社, pp. 183-197, 2005/3

玉井暉 『『ヴィレット』』『ブロンテ姉妹小説を学ぶ人のために』世界思想社, pp. 211-228, 2005/2

玉井暉 「ペイターとロマンティック・コネクション」『日本ペイター協会会報』25, pp. 5-6, 2004/10

玉井暉 「人の顔、風景の顔」『日本ハーディ協会ニュース』56, pp. 1-2, 2004/9

玉井暉 「英文学研究の喜び」『週刊読書人』2538, p. 8, 2004/5

1-2. 著書

玉井暉, 武田美保子共編 “New Woman Fiction: Gender Representation at the Fin-de-Siecle. ”, Part I, 5 vols. (『復刻：＜新しい女＞小説——世紀末のジェンダー表象』第1部, 計5巻), アティーナ・プレス, 2005/11

玉井暉, 仙葉豊と共編『病いと身体の英米文学——阪大英文学会叢書1——』英宝社, 2004/5

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

玉井暉, マイケル・ルイス(書評)『ゴシック・リヴィヴァル』(栗野修司訳、英宝社)『週刊読書人』2565, p. 5, 2004/12

1-4. 口頭発表

玉井暉 「詩の中の物語性——ハーディの詩と小説の相関性」日本ハーディ協会・第48回大会シンポジウム, 2005/11

玉井暉 「ジョン・ラスキンと環境文学」日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト領域V「文学・芸術の社会的媒介機能」——「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」——「環境と文学——環境文学(Eco-Literature)の可能性とその社会的効用——第1回フォーラム」2005/3

玉井暉 「ワイルド文学と身体」日本ワイルド協会・第29回大会シンポジウム, 2004/11

玉井暉 「世紀末文学と身体」京都女子大学文学部英文学会, 2004/11

玉井暉 「オスカー・ワイルド『サロメ』の魅力——言葉と映像の創る世界」愛知淑徳大学文学部英文学会, 2004/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2002年度～2004年度、萌芽研究、代表者：玉井暉

課題番号：14651083

研究題目：イギリス19世紀「社交界小説(fashionable novel)」の研究

研究経費：2004年度 600 千円

研究の目的：

本研究は、イギリス19世紀前半の1825～50年頃に現れた「社交界小説(fashionable novel)」と呼ばれる一群の小説のもっている文学的・文化的意味を考察し、その新たな今日的意義を明らかにしようとするものである。

まず、「社交界小説」の執筆およびその出版に関わった作家たち、たとえば Bulwer-Lytton, Benjamin Disraeli, Robert Plumer Ward, T.H. Lister, Mrs Gore, T.E. Hook, Charlotte Susan Bury らの作品や一次資料を収集する。次に、この派の作家たちの活動とその意味を論じた先行研究およびそれに関わる種々の文献を収集し、それらの検証作業を行わねばならない。

また、「社交界小説」に属する作品の中から、主要な小説作品を選別し、それらをまとめて復刻出版することも検討する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2004年度～2005年度、日本学術振興会助成金、代表者：玉井暉

助成金名：日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト「文学・芸術の社会的媒介機能——芸術とコミュニケーション

ンに関する実践的研究」(藤田治彦代表)

研究題目：環境と文学——環境文学の可能性とその社会的効用

助成団体名：日本学術振興会

助成金額：2004年度 850千円

2005年度 1,050千円

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本英文学会・学会誌『英文学研究』編集顧問	2004年4月～現在
日本英文学会中国四国支部学会・『中国四国英文学研究』編集委員	2003年10月～現在
日本英文学会・理事	2001年4月～現在
日本ブロンテ協会・理事	2004年4月～現在
阪大英文学会・会長	2003年11月～現在
日本オスカー・ワイルド協会会長	2003年11月～現在
日本ヴィクトリア朝文化研究学会・理事	2001年11月～現在
日本テキスト研究学会・幹事	2001年8月～現在
日本ジョージ・エリオット協会・理事	1997年11月～現在
日本トマス・ハーディ協会・運営委員	1992年10月～現在
日本ウォルター・ペイター協会・理事	1991年10月～現在

2. 森岡 裕一 教授

1950年生。1979年、大阪大学大学院修士課程修了。文学博士(大阪大学、2006年)。大阪大学助手、講師、奈良女子大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。専攻：アメリカ文学。

2-1. 論文

森岡裕一「酔いどれアメリカ文学」森岡裕一他編『新世紀アメリカ文学史』英宝社, pp. 166-174, 2004/10

2-2. 著書

森岡裕一『飲酒/禁酒の物語学——アメリカ文学とアルコール』大阪大学出版会, 2005/9

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

森岡裕一(翻訳)『酒場での十夜』松柏社, 2006/3

2-4. 口頭発表

森岡裕一「髪は細部に宿る——「パーニス断髪にする」を読む」日本スコット・フィッツジェラルド協会, 2004/10

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

森岡裕一 大阪大学共通教育賞, 大阪大学, 2005

森岡裕一 大阪大学総長奨励賞, 大阪大学, 2005

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2001年度～2004年度、基盤研究(C)、代表者：森岡裕一

課題番号：13610567

研究題目：アメリカ文学／文化とアルコールの関係に関する研究

研究経費：2004年度 500千円

研究の目的：

本研究は植民地時代から現代にいたるアメリカの歴史を射程に入れ、アメリカ文化における酒の持つ意味を、民族、地域間の格差を考慮しつつ考察する。とりわけ 19 世紀の節酒／禁酒運動にみられる発想法とレトリックを文学との関わりの中でとづけ、革新主義時代アメリカのイデオロギーに文学者たちがいかなる反応をしたかをさぐる。20 世紀初頭にあつては、作家たちの反禁酒法的態度をある種のモダニズムの身振りとしてとらえる視点から分析を進め、今日にいたるまでのアメリカの酒文化と芸術創造の関わりを探りたい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2005 年度～2006 年度、「魅力ある大学院教育イニシャティヴ」『ソーシャルネットワーク型人文学教育の構築』
取組責任者、総額 28,000 千円

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会・関西支部評議員	1997 年 4 月～現在
同上・関西支部副支部長	2003 年 4 月～2005 年 3 月
同上・代議員	2002 年 4 月～2005 年 3 月

3. 服部 典之 助教授

1958 年生。1981 年、大阪大学文学部(英文学専攻)卒業。1983 年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。同博士課程中途退学。文学修士(大阪大学、1983 年)。文学博士(大阪大学、2003 年)。和歌山大学教育学部助手、大阪大学言語文化部講師、同助教授を経て、2000 年 10 月現職。専攻：英文学。

3-1. 論文

服部典之「<トラベリング・スコッツ>——スモレットと「ユニオン」言説を巡って」浅見洋二編『大阪大学大学院文学研究科 広域文化表現論講座研究成果報告書 テクストの読解と伝承』pp. 16-23, 2006/3

服部典之「反乱のスコットランド——ジャック大佐とエドワード・ウェイバリー」富山太佳夫、加藤文彦、石川慎一郎編『テキストの地平——森晴秀教授古稀記念論文集』英宝社, pp. 183-197, 2005/3

服部典之「亡命者たちとバラバラ死体——『オルノーコ』から『ロビンソン・クルーソー』へ」玉井暲、仙葉豊編『病いと身体の英米文学——阪大英文学会叢書 1——』英宝社, pp. 5-28, 2004/5

服部典之「<トレインスポッティング>スコットランド」『英語青年』研究社, pp. 24-26, 2004/4

3-2. 著書

木村茂雄、服部典之他『ポストコロニアル文学の現在』晃洋書房, 2004/6

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

服部典之「Travelling Scots: スモレットと「ユニオン」言説を巡って」日本ジョンソン協会第 38 回全国大会シンポジウム『18 世紀イギリス文学におけるスコットランド問題——国家と小説の確立』の司会及び講師。アルカディア市ヶ谷私学会館, 2005/5/23

服部典之「遺棄された小説起源——Bastardy とイギリス 18 世紀小説」日本英文学会第 77 回全国大会シンポジウム第 3 部門『イギリス小説はどのように成立したか』における発表として。日本大学文理学部, 2005/5/21

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

服部典之 大阪大学共通教育賞, 大阪大学総長, 2004/11/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003年度～2005年度、萌芽研究、代表者：服部典之

課題番号：15652017-00

研究題目：イギリス小説起源論におけるスコットランド問題

研究経費：2004年度直接経費 700千円

研究経費：2005年度直接経費 700千円

研究の目的：

本研究は、この20年ほど行われてきた「イギリス小説起源論」に、スコットランドという新たな観点を導入することで、イギリス小説という「世界「近代小説」の元祖とされる文化媒体の誕生のダイナミズムを解明する研究である。また、イギリス18世紀から19世紀初頭のスコットランド人及びスコットランド文化が「小説の起源」に果たしてきた大きな役割を明らかにすることで、文学と政治経済社会などとの関わりが明らかになると考えている。文学のみに限定されず、歴史・政治・経済などの面でスコットランドを考察することは、分野横断的研究という新たな試みをすることであり、この意味において萌芽研究で申請する次第である。

イギリス小説の起源に関しては、Ian Wattの古典的研究 *The Rise of the Novel* (1957)によって、Daniel DefoeやHenry Fieldingが最初の小説家とされて以来、18世紀イングランド人が、社会の近代化に即した形で近代社会の市民層の新たな文学ジャンルとして「小説」を創始したということが、定説になっていた。ところが、Lennard J. Davisの *Factual Fictions: The Origins of the English Novel* (1983)によって、小説がそれだけで自立したジャンルとして突如創生されたのではなく、17世紀には「ニュース」というジャンルと「ノベル」という「フィクションか事実か」の区別を問わない「差異化されない混交体」が存在し、ここから二者に分かれていったことが証明された。これにより、17世紀から18世紀の社会政治的背景と「小説の起源」を連続させて論じるという視野が生まれた。その後、様々な起源論が生まれ、画期的なHomer Obed Brownの *Institutions of the English Novel* (1997)が発表された。これは、「小説」の起源は、その制度が整った時点で過渡的に確定されるのだとし、スコットランド人、Walter Scott(1771～1832)が国民小説を築いたとし、スコットランド人であるScottとイングランド人Defoeが小説起源に大きく関わることを主張し、スコットランド問題が、小説起源に関わる重要な視座であることを示唆した。私の研究の着想の契機となったのはこのBrownの説である。

しかしながら、H.O. Brownはスコットランド問題に着目しながらも、現実の政治社会の動きにまで分析が及んでいないため、スコットランド問題を十分論じているとはいえない。

本研究の目的は、第一に、イングランド・スコットランド合併(1707)締結に大きな役割を果たしたデフォーの一次資料をスコットランドの公文書等に直接あたることによって、なぜ彼が59才という晩年になって初めて *Robinson Crusoe* (1719)という小説を書くに至ったかという経緯を探り直すことである。第二に、この合併が起こった後18世紀のスコットランド人の多くの知識人(Tobias SmollettやJames Boswellなど)が文学に携わるようになりロンドンに出ていった背景、および特にSmollettがDefoeの悪漢小説の系譜を引いている意義をスコットランド・イングランド問題から明らかにする。第三に19世紀のWalter Scottの編纂したデフォー全集を検討し、彼がデフォーを再評価しその影響を受けることで、真の意味でスコットランドとイングランドの文化が合併した国民小説(「ブリティッシュ・ノベル」)を確立したことの意味を探ることを目的とする。

イングランドが近代国家を形成する際に、スコットランドと合併して、対フランス・対カトリック同盟をくむことが必須であったとされる。このような時代形成に直接関わったDefoeの一次資料を探りその役割を明らかにすることは、これまで歴史学、文学などの観点を合同した形で研究されたことはなかった。また、イングランド・スコットランド合併の政治・文化的波紋が19世紀に至るイギリスの文化的変遷に色濃く現れており、それらが生み出した「イギリス小説」は次の19世紀の世代のイギリス人が世界に躍進する、モラル的基盤を形成したと思われる。このような広い観点からスコットランド問題が研究されることはなかった。たとえばイギリス近代国家形成を論じたもっとも有名な著書であるLinda Colley, *Britons: Forging the Nation* (1992)においても、当時の文学の果たした大きな意味が指摘されながらも、その扱

いは不十分なものである。本研究、「イギリス小説起源論におけるスコットランド研究」は、こうして、18世紀から19世紀前半にわたる文学・歴史・文化研究のなかで欠落していた観点を補い、新たな角度から文化のダイナミズムを探る研究である。この萌芽的研究が結実するならば、新たな「イギリス小説起源論」が期待されるのみならず、この時代の歴史・文化的に重要な新局面が明確になると期待される。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

4. 片瀬 悦久 助教授

1965年生。1995年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士(大阪大学、1991年)。北陸大学講師、同志社女子大学講師、助教授を経て、2003年4月現職。専攻：アメリカ文学、20世紀ユダヤ系小説、現代小説。

4-1. 論文

片瀬悦久「帰るべき場所——『ベラローザ・コネクション』とホロコースト以後のディアスポラ体験」松本昇，広瀬佳司
他編『越境・周縁・ディアスポラ——三つのアメリカ文学』南雲堂フェニックス，pp. 232-47, 2005/4
片瀬悦久「アメリカのユダヤ人、その生と死——『ラヴェルスタイン』における病い、身体、自己」玉井暲，仙葉豊編『病
いと身体の英米文学』英宝社，pp. 65-85, 2004/5

4-2. 著書

森岡裕一，片瀬悦久共編『新世紀アメリカ文学史——マップ、キーワード、データ——』英宝社，2004/10

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

片瀬悦久「ソール・ベロー——思索と模索」『英語青年』151-5, pp. 294-96, 2005/8
片瀬悦久「不安のミニマリズム——現代アメリカ小説の行方」『インターフェイスの人文科学ニューズレター05——不安を
かたどる』p. 13, 2005/2
片瀬悦久「Saul Bellow の “The Old System” ——ユダヤ系アメリカ文学入門として」『英語青年』150-2, pp. 84-85, 2004/5

4-4. 口頭発表

押谷善一郎，町田哲司，山下昇，玉井久之，片瀬悦久「アメリカ文学とは何か——その歴史と現在」『シンポジウム——ア
メリカ文学をどう読むか』関西英語英米文学会第50回大会，2005/7

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

日本ソール・ベロー協会・理事

2004年10月～現在

5. ポール・ハーヴィ 外国人教師

1961年生。1980年9月、Oriel College, Oxford University 入学。1986年6月 Oriel College, Oxford University 卒業退学 (MA, MPhil 取得)。MA English Language and Literature, MPhil English Studies 1500-1660 (Renaissance Poetry and Prose) Oxford University。1986年10月、京都大学教養部招聘研究員 (1年間)。1988年4月、大阪大学言語文化部講師。1990年4月、カナダ商工会議所専務理事 (1年間)。1991年4月、大阪大学言語文化部講師。1995年4月、大阪大学言語文化部助教授。1999年10月、大阪大学文学部・大阪大学大学院文学研究科外国人教師に着任し現在に至る。専攻：シェイクスピア／イギリスルネッサンス／英文学。

5-1. 論文

Harvey, Paul A.S. and Bernice W. Kliman “Ninagawa Macbeth: Fusion of Japanese and Western Theatrical Styles” in Bernice W. Kliman, *Macbeth* (second edition) Manchester: Manchester University Press, pp. 159-182, 2004

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

Harvey, Paul A. S., “Unsex me here’: Gender and Lady Macbeth”, 第43回, シェイクスピア学会, 2004/10/9

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

6. 好井 千代 助手

1959年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。1987年大阪大学文学部助手。専攻：アメリカ文学。

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

好井千代 福原賞, 福原記念英米文学研究助成基金, 1993/2

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2005~2008 年度、基盤研究(C)、代表者：好井千代

課題番号：17520166

研究題目：19 世紀末のアメリカ小説とナショナリズムの諸相——グローバル化の中の国家と文学

研究経費：2005 年度 直接経費 1,100 千円, 間接経費 0 円

研究の目的：

本研究は、19 世紀末にグローバリゼーションの潮流と葛藤しながら時には密接に結びついて発展した欧米ナショナリズムの多様な形態(グローバリゼーションと対立する排他的な民族主義やネイティヴィズムから、グローバリゼーションを利用して展開する帝国主義あるいはアメリカの同化主義や **cultural pluralism** まで)を、同時代のアメリカ文学、特にコスモポリタンを自認すると同時にナショナリズムの隆盛も強く認識していた **Henry James** の作品を通して分析し、明らかにする。更に、こうした 19 世紀末のナショナリズムの様態が、グローバルな現代社会が抱えるナショナリズムの形といかに共通性があり、その源流であったかという点にまで議論を拡大し、最終的には 19 世紀末のナショナリズムの現代的意義を提示したい。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-17 ドイツ文学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野は、実証主義的な文献学の伝統を継承して「原典の緻密な読解」と「広範な文献資料の精査」に基づくテキスト読解という研究の基本姿勢を堅持し、そうした研究実践を可能にする基礎的な知識と方法の修得を教育の根幹に据えてきた。しかし同時に、国内外の新しい研究状況に対応して、地域文化論的アプローチへの関心を養う教育プログラムも提供している。

ドイツ文学には、18世紀後半から19世紀前半にかけての転換期、および19世紀末から20世紀前半にかけての転換期というふたつのピークがあることが知られており、現在のスタッフもまた、この両時期をカバーする配置となっている。また、ドイツ国民国家の領域内で展開した文学にくわえ、広く中東欧全域でドイツ語を媒体にくりひろげられた文化現象が近年注目されているが、その点にも即応したスタッフ配置であることは、本専門分野のすぐれた特色である。

ドイツ語学の基礎概念の修得、ならびに実際の運用能力向上のためドイツ人教師による授業が提供されている。さらに、現スタッフでは十分にカバーすることのできない研究テーマや研究方法について、言語文化部の併任教員および学外非常勤講師の来講を得て、学問動向をつねにフォローする教育・研究活動の構築を目指している。

とりわけ課程博士論文を準備中の大学院学生については、研究室修了者を主体として組織された大阪大学ドイツ文学会と連携してその研究活動を支援し、学会活動をつうじた研究者としての自立をうながすように努めている。

また、社会教育的なイベントである「ゲーテ生誕のタベ」（日本ゲーテ協会主催）の企画・運営をバックアップし、市民レベルでの日独文化交流の促進に取り組んでいる。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 1 助教授 1 講師 0 外国人教師 1 助手 0

教授：林 正則

助教授：三谷 研爾

外国人教師：イヨルク・ノヴァコヴィッチ

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
14	5	4	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	3	1	0	0	0
'05	3	3	0	1	0
小計	6	4	0	1	0

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	0	0	0
'05	0	1	1
計	0	1	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【論文博士】

三上雅子「プレヒト劇における母たち」2005/10

主査：林正則 副査：森岡裕一、永田靖、三谷研爾

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	2	1	0	0	0	3
'05	1	0	0	0	0	1
計	3	1	0	0	0	4

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	1	1	0	0	2
'05	0	0	0	0	0	0
計	0	1	1	0	0	2

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004 年度】

吉田耕太郎(特別研究生)「文学的営為と道徳——C. F. ゲラートの演劇論・文学論の分析から」『Der Keim』(東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会), 28, pp. 1-18, 2005/3

吉田耕太郎(特別研究生)「よき社会秩序とは何か——ポリツァイヴィッセンシャフトの言説分析の試み」『クアドランテ』(東京外国語大学海外事情研究所編), 7, pp. 381-392, 2005/3

吉田耕太郎(特別研究生)「啓蒙と視覚 18 世紀における ABC 絵本の成立とその思想史的背景の考察」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 20, pp. 29-52, 2004/11

【2005 年度】

吉田耕太郎(特別研究生)「ヴァイセ『子どもの友』に描かれた啓蒙の空間と限界」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 21, pp. 33-59, 2005/11

(2)口頭発表

【2004 年度】

吉田耕太郎(特別研究生)「作家や知識人はどのように交流していたのか?——18 世紀ドイツのメディアと知的公共性に関する研究状況報告」大阪大学ドイツ文学会 第 11 回総会・研究発表会, 2004/12/18

吉田耕太郎(特別研究生)「近代的警察(ポリツァイ)の誕生——カール・ゴットロープ・レッシッヒの『ポリツァイ教程』(1786)を中心に」海外事情研究所定例研究会, 2004/12/1

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004 年度 学部: 0 名 大学院: 1 名 (計 1 名)

2005 年度 学部: 0 名 大学院: 1 名 (計 1 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2004 年度～2005 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004 年度～2005 年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2 名

2004 年度: 1 名 2005 年度: 1 名

<内訳> システムエンジニア 2 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2004年度 『独文学報』20号

2005年度 『独文学報』21号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

大阪大学ドイツ文学会総会・研究発表会	2006年2月
日本ゲーテ協会「ゲーテ生誕の夕べ」(第256回目の誕生日記念)	2005年8月
大阪大学ドイツ文学会総会・研究発表会	2004年11月
日本ゲーテ協会「ゲーテ生誕の夕べ」(第255回目の誕生日記念)	2004年8月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

院生研究発表会	2005年7月・10月、2006年1月 2004年7月・10月・12月
---------	--

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

本研究分野の教育の基本は「原典の緻密な読解」にあり、ドイツ語テキストの正確・緻密な読解のトレーニングを重視している。過去2年間においてもこの方針に変化はないが、学部低学年教育との接続をいっそうスムーズにするため、授業内容の再編をすすめてきた。具体的には、1年次配当の専門基礎教育科目『ドイツ文学入門』において、高等学校段階での学習内容を配慮した内容を提供するとともに、2年次・3年次の専門教育科目のなかに中級ドイツ語文法の修得に目標をしばった演習を増設した。前者は受講者の好評を得て、専修志望者の発掘にもつながっている。後者は、本専修以外からも多くの学生が履修しており、この種の学部教育プログラムの需要が大きいことを示している。

大学院学生に関しては、ドイツ文学関連の研究職ポストの全国的激減が、大学院学生の進路選択に大きく影響していることを認めざるをえない。具体的には、本専修卒業者に占める大学院博士前期課程への進学者数割合の減少、ならびに前期課程修了者に占める後期課程への進学者割合の減少を結果しており、これは本専門分野だけで対応することのできない深刻な問題である。そのなかで、課程博士学位の取得指導に力を入れているが、その成果は今後を待ちたい。引き続き教育プログラムの再編をすすめるだけでなく、教育目標そのものの多様化を検討し、前期課程修了の時点で研究職以外での就職を希望する学生を積極的にサポートできる体制を構築していく必要がある。

この間、学生が自主的に利用できるコンピュータをはじめとする情報環境の整備をすすめ、学生の運用するホームページも充実してきた。今後は、こうした環境を教育・研究面で積極的に活用し、ドイツ語圏の情報にアプローチする技術を獲得するトレーニングをおこなうとともに、研究成果の国内外への発信を強化する方向をさぐるものが課題である。

12-2. 研究活動

本専門分野スタッフは、それぞれの研究テーマに即して着実に研究成果を挙げている。またこの2年間に、1件の論文博士学位を出すことができた。学位取得者は本専門分野で大学院課程を修了したものであり、修了者の学界における持続的な活躍の証左である。大学院学生の研究活動は、従来の質的水準を維持しているが、今後は全国規模での学会、また国際学会でもその成果を発信していくよう指導していきたい。

専門分野として、先の外部評価の提言をうけ、中東欧地域との研究交流の準備をすすめてきた。とりわけ三谷助教授が、本学のCOEプログラム「インターフェイスの人文科学」にも積極的に参加し、そのなかの「モダニズムと中東欧の芸術・文化」研究グループのメンバーとして、ドイツ、オーストリアのみならず、チェコやポーランドの研究者とのネットワー

クの構築をすすめている。また、国内では、関連する美術史、音楽学、演劇学といった専門分野の研究者・専門家とも連携した研究活動を展開中であり、本専門分野における領域横断的な研究活動の活性化を目指している。こうした経緯をふまえ、多部署とも協力して、中欧地域に研究・教育交流ができるパートナー機関を検討中である。

この間、特記すべきは、学生が短期・長期を問わず、積極的にドイツ語圏に留学し、その実際にふれて自身の研究を組み立てる姿勢を示しはじめた点である。留学の経験と実際の知識が専門分野内に蓄積されつつあり、それが後続する学生の知的関心を刺激するという良質のサイクルが、今後とも維持発展するよう配慮していく。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004 年度～2005 年度の過去 2 年間)

1. 林 正則 教授

1944 年生。大阪大学大学院文学研究科修士課程(ドイツ文学専攻)修了。文学博士(大阪大学)。大阪大学文学部助手、同言語文化部講師、同助教授、文学部助教授を経て 1996 年より現職。専攻：ドイツ文学。

1-1. 論文

林正則「牧歌か悲歌か? ——シラーの『素朴文学と情感文学』から見たゲーテの『アレクシスとドーラ』」『独文学報』20, pp. 73-92, 2004/11

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本ゲーテ協会・理事	2002 年 6 月 1 日～現在
ドイツ語学 文学振興会・評議員	2001 年 4 月 1 日～現在
大阪大学ドイツ文学会・会長	2000 年 4 月～現在
日本ヘルダー学会・常任理事	1994 年 5 月～現在

2. 三谷 研爾 助教授

1961 年生。1987 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(1986 年)。大阪府立大学助手、講師を経て 2000 年 4 月から現職。専攻：ドイツ、オーストリア文学および文化研究。

2-1. 論文

三谷研爾「プラハ・ドイツ人社会における文化的アイデンティティの形成と機能」(2003年度～2005年度 科学研究費補助金基盤研究(C) 研究成果報告書), pp. 1-49, 2006/3

三谷研爾「ユダヤ人のプラハ-カフカ家4代の記録から」『チェコ学・スロバキア学レクチャー集』(関西チェコ/スロバキア協会), 1, pp. 46-50, 2006/3

三谷研爾「脱領域の言語——プラハのユダヤ系ドイツ語作家における言語的アイデンティティ」『ドイツ文学』(日本独文学会編), 117, pp. 36-46, 2005/3

三谷研爾「流通のディスクール キッシュ『娘飼い』における近代都市の経験」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会編), 20, pp. 93-113, 2004/11

2-2. 著書

仙葉豊, 高岡幸一, 細谷行輝, 三谷研爾ほか『言語と文化の饗宴』(英宝社), pp. 1-370, 2006/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

井口壽乃, 園府寺司, 三谷研爾ほか(翻訳・解説)『アヴァンギャルド宣言 中東欧のモダニズム』(三元社), pp. 1-291, 2005/9

三谷研爾(書評)「鈴木隆雄監修『オーストリア文学小百科』」『ドイツ文学論攷』(阪神ドイツ文学会編), 46, pp. 108-110, 2004/12

2-4. 口頭発表

三谷研爾「芸術と芸術表現のあいだ」2004年度COEプログラム「インターフェイスの人文科学」ワークショップ, 2004/12/20

三谷研爾「Exterritoriality of Literature. Kafka-Reception in Japan before 1945」, Japanese-Polish Workshop in Warsaw, 2004/11/16

三谷研爾「ユダヤ人のプラハ」関西チェコ/スロバキア協会, 2004/10/30

三谷研爾「世紀転換期プラハのユダヤ人」神戸ユダヤ文化研究会, 2004/7/18

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

三谷研爾 大阪大学共通教育賞(2002年度1学期), 大阪大学, 2002

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)、代表者：三谷研爾

課題番号：15520176

研究題目：プラハ・ドイツ人社会における文化的アイデンティティの形成と機能

研究経費：2004年度 直接経費 1,100千円

2005年度 直接経費 700千円

研究の目的：

本研究は、典型的な中欧の多民族都市であった世紀転換期のプラハにおいて、言語的マイノリティに転落したドイツ人が、意識的に推進したドイツ文化アイデンティティ強化の動きと、それに拮抗して若い世代のユダヤ系知識人層のあいだに生じた美的モダニズムの相互作用を検証するプログラムである。

主として後者の運動に注目し、卓越した芸術表現の主体(リルケ、カフカ、ヴェルフエルなど)に還元して議論しがちであったこれまでの研究を再検討し、むしろ前者の実態をより正確に理解することに重点を置く。

この枠組のもとで、ナショナル・アイデンティティの強化をめざす動きと美的モダニズムとが交錯する地点を、主要メディアをとおして流通していた言説の分析をとおして、文化史的に明らかにする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2004年度～2005年度、文部科学省海外先進教育研究実践支援プログラム補助金

研究題目：都市空間の理解と表現のメディア論的研究

助成金額：2004年度 258千円

2005年度 3,742千円

2-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪大学ドイツ文学会・企画委員

2006年1月～現在

同上・『独文学報』編集委員長

2004年1月～2004年12月

関西チェコ/スロバキア協会・副会長

2003年4月～現在

3. イヨルク・ノヴァコヴィッチ 外国人教師

1952年生。1989年、ミュンヘン大学博士課程中途退学。文学修士(ミュンヘン大学、1987年)。1980-82年、熊本大学外国人教師。1989年より現職。専攻：日本学／社会学／中国学。

3-1. 論文

なし

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-18 フランス文学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野は、フランス文学研究の王道である文献学的実証性を重んじ、堅実な方法でフランス文学のテキストを読み、すでにパスカル研究では「エコール・ドーサカ(大阪学派)」と称されて著名であり、バルザック研究、プルースト研究ではフランス本国に伍して遜色のない教育と研究を行うことを創設以来努めてきた。その成果は数多くの国際的に通用する専門家を輩出したことによっても証明される。またフランス語教育において優れた経歴を持つ外国人教師はフランス語の実践的運用能力の養成に力を注ぎ、仏政府給費留学生を含む多くの留学生を海外に送った。さらに学外のアリアンス・フランセーズ、関西日仏学院とも協力関係を結び、学生の語学力の向上、海外思潮の速やかな摂取を図っている。

授業科目は中世から現代までのフランス文学を併任教授の助力も仰いで教授し、知識に偏りが無いことをめざし、語学教育も専門家が先端の理論を紹介している。大学院生については毎週研究指導の時間を設け、他の院生も含めた自由討議で、論理の整合性や発表の有効な表現法について訓練する機会としている。

また年一回発行する学術誌『ガリア』に寄稿させ、論文執筆の機会を多くするように心がけている。この学術誌はフランスのもっとも権威ある学会誌にも文献として載るほど著名となっており、学生もフランス語で執筆するか、フランス語の要旨を付けることにより、海外に発信している。近年では大部分の論考がフランス語によって執筆され、国際学術誌として評価されている。

フランスから研究者および小説家、詩人などの実作者を招聘し、講演会やセミナーを頻繁に開催している。このように日仏の学术交流を積極的に進めるとともに、実作者たちの創作方法の紹介などは文学研究に強い刺激を与えている。

研究室では大学院生と学部生が自由に討議できる時間と空間を設け、積極的な学生はそれぞれに読書会を開いて知識やフランス語応用能力を涵養できるようにしている。大学院生は学部生を指導し、教員とはまた別趣の効果をあげている。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 2 助教授 0 外国人教師 1 助手 0

教授：柏木 隆雄、和田 章男

外国人教師：アニエス・ディソン

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
12	4	14	0	0	0	0	0	1

※うち留学生 0 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	3	3	2	0	0
'05	5	3	1	0	0
小計	8	6	3	0	0

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	0	0	0
'05	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	8	1	0	0	1	10
'05	5	0	0	1	0	6
計	13	1	0	1	1	16

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	0	6	2	0	0	8
'05	6	10	0	0	0	16
計	6	16	2	0	0	24

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

足立和彦 “*Boule de suif*: l'existence problématique de la prostituée” *GALLIA*, 44, pp. 1-8, 2005/3

足立和彦 “Le trajet vers *Le Horla* — La « peur » dans les contes « fantastiques » de Maupassant —” *Études de Langue et Littérature Françaises*, 85.86, pp. 89-105, 2005/3

岩村(西川)和泉 「バルザック『コルネリウス卿』『赤い宿屋』における犯罪の表象」『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学会関西支部), 11, pp. 15-26, 2005/3

上江洲律子 「マルロー作品における「生暖かさ」についての考察」 *GALLIA*, 44, pp. 41-48, 2005/3

坂巻康司 “La « théâtralité négative » de Mallarmé dans les années 1860 — Sur « Le Faune, intermède héroïque » —” *Études de Langue et Littérature Françaises*, 85.86, pp. 74-88, 2005/3

坂巻康司 「マラルメの観たゾラの演劇——自然主義と象徴主義の狭間で——」『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学会関西支部), 11, pp. 27-38, 2005/3

坂巻康司 「フランス演劇の現在(1)」『大阪産業大学論集』人文科学篇, 115, pp. 41-53, 2005/2

坂巻康司 「メーテルランクの初期戯曲におけるマラルメ的演劇観」『演劇研究センター紀要』(早稲田大学 21 世紀 COE プログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」), 4, pp. 97-103, 2005/1

谷口智美 “Le rôle de la voix dans *L'Imposture* et *La Jolie*” *GALLIA*, 44, pp. 25-32, 2005/3

林千宏 “Le Temple de Mémoire dans les *Hymnes* de Ronsard” *Études de Langue et Littérature Françaises*, 85.86, pp. 1-12, 2005/3

【2005年度】

安部朋子 “Le rôle de deux épisodes insérés dans *Le Neveu de Rameau* — autour du lien entre le maître et le valet” *GALLIA*, 45, pp. 7-14, 2006/3

安藤麻貴 “Les figures de l'exil chez Camus : l'immobilité et le flottement dans « La Femme adultère »” *GALLIA*, 45, pp. 47-54, 2006/3

中尾雪絵 「レクチュールの冒険——新編・フランス文学選——」朝日出版社, 2005/4

濱野淑美 “L'ombre imaginaire dans la *Préface* de *Cromwell* de Hugo” *GALLIA*, 45, pp. 23-30, 2006/3

濱野淑美 「ヴクトル・ユゴーのドラマの文体——『リュイ・ブラス』を中心に」『関西フランス語フランス文学』12, pp. 25-34, 2006/3

脇聡 「ネルヴァルの都市描写——「タンブル大通り」をめぐる——」『関西フランス語フランス文学』12, pp. 35-45, 2006/3

(2)口頭発表

【2004年度】

安部朋子 「ディドロ『ラモーの甥』に追加された挿話の役割」大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大学, 2005/3/5

坂巻康司 「同時代演劇に対するマラルメの視線」日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 神戸大学, 2004/11/27

坂巻康司 「メーテルランクの初期戯曲におけるマラルメ的演劇観」関西マラルメ研究会, 2004/11/6

中尾雪絵 「医療診断用音声翻訳システム MedSLT における日本語規則の作成」(共同発表: 中尾雪絵, Manny Rayner 他), 日本情報処理学会, 香川大学, 2005/3/16

西川和泉 「『赤い宿屋』『コルネリウス卿』における犯罪の表象」日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 神戸大学, 2004/11/27

林千宏 「ロンサール『讃歌集』における記憶の神殿」日本フランス語フランス文学会春季大会, 白百合女子大学, 2004/5/29

廣田大地 「アナロジーの詩学——ボードレール韻文詩における直喩の変遷をめぐる——」第19回ボードレール研究会, 甲南女子大学, 2004/9/11

脇聡 「ネルヴァルの『塩密輸入たち』『アンジェリック』におけるヴァロワ地方の描写に関して」大阪大学フランス語フ

ランス文学会研究会, 大阪大学中之島センター, 2004/9/25

【2005 年度】

安部朋子『『ラモーの甥』に追加された挿話の役割——「アヴィニヨンの背教者」をめぐって』日本フランス語フランス文学会, 新潟大学, 2005/10/15

安藤麻貴『『生い出ずる石』における流動／不動のイメージ——『追放と王国』から『最初の人間』へ』日本カミュ研究会, 立教大学, 2005/5/28

高橋愛「ゾラと普仏戦争——『壊滅』におけるアルザス人 Weiss をめぐって」大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大学, 2006/3/4

高橋愛「印象派の射程——ゾラの小説描写における理念と実像」日本フランス語フランス文学会, 新潟大学, 2005/10/15

谷口智美「表現法としての聴覚——『悪魔の陽の下で』をめぐって」日本フランス語フランス文学会, 新潟大学, 2005/10/15

中尾雪絵「MedSLT のユーザビリティの向上——逆翻訳とヘルプ・システム——」(共同発表: 中尾雪絵, Manny Rayner, Nikos Chatzichrisafis, 神崎享子, Pierrette Bouillon, Beth Ann Hockey, 井佐原均), 日本情報処理学会, 慶應大学, 2006/3/16

中尾雪絵 “*Japanese Speech Understanding Using Grammar Specialization*”(共同発表: Manny Rayner, Nikos Chatzichrisafis, Pierrette Bouillon, Yukie Nakao, Hitoshi Isahara, Kyoko Kanzaki, Beth Ann Hockey, Marianne Santaholma, Marianne Starlander), in Human Language Technology Conference (Interactive Demonstrations Proceedings), Vancouver, Canada, 2005/10/7

中尾雪絵 “*Practicing Controlled Language through a Help System integrated into the Medical Speech Translation System (MedSLT)*”, Marianne Starlander, Pierrette Bouillon, Nikos Chatzichrisafis, Marianne Santaholma, Manny Rayner, Beth Ann Hockey, Hitoshi Isahara, Kyoko Kanzaki, Yukie Nakao, présentera à la conference de Machine Translation Summit (MT Summit 10), à Phuket, Thai, 2005/9/12-16

中尾雪絵 “*A Methodology for Comparing Grammar-Based and Robust Approaches to Speech Understanding*”, Pierrette Bouillon, Manny Rayner, Nikos Chatzichrisafis, Beth Ann Hockey, Marianne Santaholma, Marianne Starlander, Hitoshi Isahara, Kyoko Kanzaki, Yukie Nakao, présentera à la conférence de l’Interspeech 2005 à Lisbonne, Portugal, 2005/9/4-8

中尾雪絵 “*Breaking the Language Barrier: Machine Assisted Diagnosis using the Medical Speech Translator*”, Marianne Starlander, Pierrette Bouillon, Manny Rayner, Nikos Chatzichrisafis, Beth Ann Hockey, Hitoshi Isahara, Kyoko Kanzaki, Yukie Nakao, Marianne Santaholma, présentera à la conférence de l’European Federation for Medical Informatics (MIE) 2005, Genève, Suisse, 2005/8/28-9/1

中尾雪絵 “Representational and architectural issues in a limited-domain medical speech translator”(共同発表: Manny Rayner, Pierrette Bouillon, Marianne Santaholma, Yukie Nakao, Traitement Automatique des Langues Naturelles - TALN 2005, 2005/6/7, ドウルダン(フランス))

中尾雪絵 “*A Generic Multi-Lingual Open Source Platform for Limited-Domain Medical Speech Translation*”(共同発表: P. Bouillon, M. Rayner, N. Chatzichrisafis, B. A. Hockey, M. Santaholma, M. Starlander, H. Isahara, K. Kanzaki, Y. Nakao, The European Association for Machine Translation conference – EAMT 2005, 2005/5/31, ブダペスト)

濱野淑美「ヴィクトル・ユゴーのドラマの文体——『リュイ・ブラス』を中心に」日本フランス語フランス文学会関西支部会, 京都外国語大学, 2005/11/27

濱野淑美「Hugo, plasticien——グロテスク模様をめぐって」大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大学, 2005/10/1

間野照世「ゾラ『パスカル博士』における死と再生」大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大学, 2005/10/1

脇聡「ネルヴァルの都市描写——1840年代の雑誌記事を中心に——」日本フランス語フランス文学会関西支部会, 京都外国語大学, 2005/11/27

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004年度 学部：2名 大学院：3名 (計5名)

2005年度 学部：1名 大学院：0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度～2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004年度～2005年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2004年度：0名 2005年度：1名

<内訳>高等学校教員 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

年一回発行(第一号、1953年)、GALLIA(機関誌：大阪大学フランス語フランス文学会)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

大阪大学フランス語フランス文学会(第58回)(国内学会)	2006年3月4日
大阪大学フランス語フランス文学会(第57回)(国内学会)	2005年10月1日
大阪大学フランス語フランス文学会(第56回)(国内学会)	2005年3月5日
大阪大学フランス語フランス文学会(第55回)(国内学会)	2004年9月25日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

フランス文学専門分野では、「教育・研究活動の概要とその特色」において記したように、幅広い教育活動を活発に行っているが、学生数は決して多くない。若者の文学離れは近年の全国的な傾向ではあるが、当専門分野では、フランス

文学研究のおもしろさや阪大フランス文学研究室の雰囲気などを多くの人に伝えるため、学生たちが主体となって研究室のホームページを開設した。このホームページは学生が自主的に作成し、高校生にも親しみの持てるもので、情報量、内容の豊かさは他の大学のそれと比較しても遜色のないものと自負している。教員と学生との協同の成果が研究室の活動をいっそう活性化する証だろう。

12-2. 研究活動

フランス文学専門分野は、毎年春と秋に本専門分野が主体となって組織している大阪大学フランス語フランス文学会の活動として、専門家、学生による研究発表、シンポジウムを行い、学外を含めて毎回 50 名ほどのフランス文学・語学の研究者の参加を得て、研究活動の成果を公開し、議論している。この研究会は 2006 年 3 月で 57 回を数えるほどに、長い伝統を持っている。

また、大阪大学フランス語フランス文学会の機関誌『ガリア』は、1953 年の初号以来、大学紛争時に延期はあったものの、2006 年 3 月で 45 号を数える。このように研究室を拠点にした学術誌で、かくも長期間、定期的に発刊しているものは、フランス文学の分野では『ガリア』のみで、フランスの最も権威ある学会誌の文献目録に必ず採録されるなど国内外で注目される学術誌に成長した。フランス語での執筆者が多いこともその特徴の一つである。応募論文を、選出された委員で構成される編集委員会で審査するという査読制を導入し、質の高い論文を掲載すべく努めている。なお、過去のほとんどすべての論文をウェブ上で公開しており、多くの反響を得ている。

この 2 年間はフランスから研究者や作家を招く機会がなかったことが残念であるが、学生は交換留学制度を利用したり、奨学金を獲得してフランスへの留学の機会を得ている。また教員も様々な機会を利用して渡仏し、日仏の学術交流に努めるとともに、国際的な研究プロジェクトに参画している。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004 年度～2005 年度の過去 2 年間)

1. 柏木 隆雄 教授

1944 年生。1969 年 3 月大阪大学文学部卒、1971 年大阪大学大学院修士、1975 年大阪大学大学院博士課程単位修得退学、1981 年パリ第 7 大学博士課程入学。1982 年パリ第 7 大学第三期博士課程博士。1975 年神戸女学院大学文学部講師、1981 年同助教授、1983 年大阪大学文学部助教授、1991 年大阪大学文学部教授、1999 年大阪大学大学院文学研究科教授。2001 年 6 月より 2005 年 6 月まで日本フランス語フランス文学会副会長。2004 年 4 月から 2006 年 3 月まで大阪大学大学院文学研究科研究科長。2006 年 6 月より日本フランス語フランス文学会関西支部長。専攻：フランス文学。

1-1. 論文

柏木隆雄「フランス人の見た幕末日本」『日本、もう一つの顔』阪大フォーラム 2004 委員会, pp. 129-140, 2005/2

柏木隆雄「幸田露伴 螺旋の回廊」『文学』2005 年 1・2 月号, 岩波書店, pp. 75-82, 2005/1

1-2. 著書

柏木隆雄他『シュンポシオン』「無神論者のミサ」論, 朝日出版社, 2006/3/31

柏木隆雄他『ゾラの可能性』「ゾラ、紅葉、荷風——明治文学の間テクスト性——」藤原書店, pp. 299-329, 2005/6/30

柏木隆雄他『視覚芸術と比較文化』『美しき諍い女』カトリクス・レスコーとは誰か』大手前大学, 2004/5

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

柏木隆雄「澤美枝女史の死を悼んで」『懐徳』74, pp. 83-84, 2006/3/31

柏木隆雄(書評)「*La Fortune de Victor Hugo*」人環フォーラム 2006」18, p. 69, 京都大学人間環境学研究所, 2006/3/31

柏木隆雄「着物姿の似合う大先輩」『*GALLIA XLV*』高岡幸一教授退職記念号, pp. 55-56, 大阪大学フランス語フランス文学会, 2006/3/4

柏木隆雄「追悼 黒岡浩一君」『*GALLIA XLV*』p. 90-91, 大阪大学フランス語フランス文学会, 2006/3/4

- 柏木隆雄「図書館あれこれ」大阪大学図書館ニューズレター, 2006/3
- 柏木隆雄「原野先生のこと」『広島大学フランス語フランス文学研究第 24 号原野先生退職記念論集』pp. 608-610, 2005/12/25
- 柏木隆雄(書評)「小倉孝誠著『フロベール「感情教育」——歴史、革命、愛——』「ふらんす」2005年11月号, p. 68, 2005/10/20
- 柏木隆雄「堀口博信氏の画業」『堀口博信画集』私家版, p. 1, 2005/8/30
- 柏木隆雄「*Le Diable à Paris* 復刻を喜ぶ」『新刊速報』Athena Press, pp. 2-3, 2005/5/26
- 柏木隆雄(書評)「ジャック・オリガス著『物と眼 明治文学論集』』『比較文学』47, 2004, pp. 144-147, 2005/5
- 柏木隆雄「フランス文学研究室についての評価と提言」『名古屋大学大学院文学研究科外部評価ピア・レビュー報告書』名古屋大学大学院文学研究科, pp. 291-294, 2005/3
- 柏木隆雄「フランス山峡の『雨月物語』』『懐徳』73, pp. 2-4, 懐徳堂記念会, 2005/2
- 柏木隆雄「南仏の『作家と出会う会』に参加して」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/10/4
- 柏木隆雄「私のフランス語会話事始め」『室報』49, 大阪大学文学研究科・文学部国際交流センター, pp. 2-3, 2004/9/30
- 柏木隆雄「包丁の外国語」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/6/22
- 柏木隆雄「グローバルな言語」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/6/2
- 柏木隆雄「共通語」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/5/22
- 柏木隆雄「天国のような場所」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/5/17
- 柏木隆雄「平成の懐徳堂」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/5/13
- 柏木隆雄「宣長と秋成」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/5/7
- 柏木隆雄他(座談会)「八犬伝」(再読)『文学』岩波書店, 2004年5-6月号, pp. 2-21, 2004/5
- 柏木隆雄「私のプティット・マドレーヌ」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/4/24
- 柏木隆雄「倦まず怠らず」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/4/19
- 柏木隆雄「講義情報」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/4/8
- 柏木隆雄「国立大学の新しい出発」『読売新聞夕刊』(大阪本社版), 2004/4/2
- 柏木隆雄「懐徳堂講座の思い出」『懐徳堂だより』(懐徳堂記念会), 2004/4/1

1-4. 口頭発表

- 柏木隆雄「フランス人の見た幕末日本」三重日仏協会, 津市, 2006/3/26
- 柏木隆雄「正岡子規の墓碑銘を読む」小西嘉幸教授退官記念講演会, 大阪市立大学, 2006/3/25
- 柏木隆雄「『文学部』は何をすることでか——子規の墓碑銘をめぐって——」大阪大学大学院工学研究科フロアンティア機構講座(丸亀高校, 今治西高校, 尾道北高校, 観音寺第一高校共催), 扇町ビル, 2006/1/31
- 柏木隆雄「月と酒」懐徳堂サロン講演, 法然院, 2005/11/18
- 柏木隆雄「大阪商人の叡智——懐徳堂の過去と現在」「西日本社社会」講演, JCB グループ, 大津プリンスホテル, 2005/11/10
- 柏木隆雄「パリの魅力——本を片手に歩く——」神戸女学院教育文化振興めぐみ会, ヒルトン・ホテル, 2005/11/1
- 柏木隆雄「How did the Japanese learn the Dutch ?」大阪大学グローニンゲン事務所開所式・記念シンポジウム講演(大阪大学主催), グローニンゲン大学, 2005/10/24
- 柏木隆雄「懐徳堂の過去と現在」ハービス 6 階会議室「サロン・ド・K」2005/9/21
- 柏木隆雄「文学における時空」大阪大学総合博物館第 4 回企画展ミニ・レクチャー, 大阪大学中之島センター, 2005/9/18
- 柏木隆雄「古文の魅力——叡山焼き討ち三体(司馬遼太郎, 頼山陽, 新井白石)」JCB 社員教養講座, 大林ビル(JCB 大阪本社), 2005/6/8
- 柏木隆雄「学ぶことの楽しみ」懐徳堂サロン講演, 大阪大学中之島センター, 2005/5/22
- 柏木隆雄「古書の魅力——水鳥荘文庫由来——」「温故知新」追手門大学公開講座, 茨木市, 2004/4/12
- 柏木隆雄「働くことの楽しさ」サラヤ株式会社新入社員研修, 懐徳堂法人講座, 2005/4/6
- 柏木隆雄「洋学の系譜」三重日仏協会, 津市, 2005/3/27

柏木隆雄「幕末日本とフランス」京都大学人文研究所, 2004/12/18

柏木隆雄“Le Japon vu par un français à la fin de l'époque d'Edo”, Forum à l'université Marc Bloch, 2004/11/6

柏木隆雄「横のものを縦にする——日本近代文学の秘密——」大阪大学総合博物館第3回企画展, ミニレクチャー, 中之島センター, 2004/9/18

柏木隆雄 Démons et revenants dans l'*Ugetsumonogatari*(*Contes de pluie et de lune*) d'Ueda Akinari, communication faite à la neuvième Rencontre d'Aubrac, «Aubracadabura : Figures du fantastique dans les contes et nouvelles——conférences, contes, films», Sr-Chély d'Aubrac, 2004/8/27

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

柏木隆雄 Ordre de chevalerie République française, 2000/6

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 21世紀COEプログラム分担

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本フランス語フランス文学会・副学会長

2002年4月～2006年5月

2. 和田 章男 教授

1954年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。パリ第四大学第三課程博士(文学)。大阪大学文学部助手、言語文化学部講師、助教授を経て、1993年大阪大学文学部助教授、1999年大阪大学大学院文学研究科助教授、2004年より同教授。専攻：フランス文学。

2-1. 論文

和田章男「ジャン・ジオノの「自然」——環境文学の誕生」『シュンボシオン——高岡幸一教授退職記念論文集』朝日出版社, pp. 295-304, 2006/3

和田章男“Proust et la Normandie baudelairienne”, *Bulletin Marcel Proust*, 54, pp. 115-125, 2004/12

2-2. 著書

和田章男共編『レクチュールの冒険——新編・フランス文学選——』朝日出版社, 2005/4

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

和田章男「プルーストとネルヴァル批評」関西プルースト研究会, 京都大学, 2006/3/25

和田章男「プルースト草稿研究の現状と展望——『失われた時を求めて』劇場の場面の生成過程——」科学研究費補助金(基盤研究(A))共同研究「フランス文学における総合的生成研究」研究会, 京都大学, 2005/9/17

和田章男「ジャン・ジオノと環境文学——『世界の歌』を中心に——」フォーラム「環境と文学——<環境文学(Eco-Literature)の可能性とその社会的効用」大阪大学, 2005/3/18

和田章男“Proust et Leconte de Lisle : un autre poète dans le *Contre Sainte-Beuve*”, 国際シンポジウム« Manuscripts de Proust : Approches critiques et problèmes éditoriaux », 東京日仏会館, 2004/7/16

和田章男「ブルーストとノルマンディー地方——ボードレールとの関係を中心に——」関西ブルースト研究会, 京都大学, 2004/4/3

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪大学フランス語フランス文学会幹事	1993年4月～現在
日本フランス語フランス文学会・関西支部幹事	2003年4月～2005年3月

3. アニエス・ディソン 外国人教師

ブザンソン大学、パリ第四大学にて言語学、文学を学ぶ。近代文学の教授資格(CAPES)、記号学・言語学博士号取得。パリの言語学研究所(BELC)に勤めた後、イタリア、モロッコ、日本で教鞭をとる。1982年より現職。

3-1. 論文

アニエス・ディソン “Le monde est rond : Ryoko Sekiguchi et Suzanne Doppelt”, *ClipM / CCPn°10, Cahier Critique de Poésie*, pp. 216-217, 2005/10

アニエス・ディソン “Pierre Alferi : comme au cinéma, façonner des minutes réelles”, *Revue Sites / Contemporary French Studies*, n°93 / 94, *Ecrire / Filmer*, Connecticut University, USA, pp. 257-263, 2005/9

アニエス・ディソン “Parataxe et enjambement : la poésie d’Anne Portugal et Pierre Alferi”, *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, 85-86, pp. 195-205, 2005/3

アニエス・ディソン “Le document authentique, encore”, *Bulletin de la 18^{ème} Journée Pédagogique de Dokkyo*, pp. 14-16, 2005/3

アニエス・ディソン “Fumiya Ichikawa, L’interaction exolingue : analyse de phénomènes métalinguistiques”, *Revue de la société Japonaise de Didactique Française*, Maison Franco-Japonaise, pp. 146-147, 2005/3

アニエス・ディソン “Yûgure: sur Tokyo infra-ordinaire, de Jacques Roubaud”, *ClipM / CCPn°8, Cahier Critique de Poésie*, pp. 13-17, 2005/2

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

アニエス・ディソン “Pierre Alferi, poète du singulier”, 20th-21th Century French and Francophone Studies International Colloquium, Florida State University, Gainesville, USA, 2005/4

アニエス・ディソン “Roubaud sur Rimbaud : rimbaldisme, rupture métrique et monstration poétique”, Colloque

International Rimbaud, Institut du Kansai/Université de Kyoto, 2004/6

アニエス・ディソン “Le DVD est un livre : les ciné-poèmes de Pierre Alferi”, 20th-21th Century French and Francophone Studies International Colloquium, Florida State University, Tallahassee, USA, 2004/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-19 英語学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野は、主として、「統語論・生成文法理論」、特に N. チョムスキーの言語理論に基づく「生成文法の研究」と「機能文法」、「意味論・語用論」、「認知意味論」、「認知言語学」、「関連性理論」などを研究している。

本専門分野の特色は 3 つある。第 1 の特色は、これまでと同様に、言語の生成と運用という 2 つの両輪で学部生・大学院生を教育・研究指導する体制をとってきたことである。岡田助教授を本研究室に迎えたことで、その体制を今後も継続することが可能になった。この指導体制の利点は、言語の生成と運用という全く異なる理論的視点から研究・教育指導を行うため、学部生・大学院生は言語事実を相補的に柔軟に観察する目を養うことができ、バランスのとれた研究ができることにある。

第 2 の特色は、学部 4 年生と大学院生に各自の興味にしたがい自由に研究をさせていることである。実際、学部生の卒業論文の内容や大学院生の研究分野をみると、生成文法理論、統語論、関連性理論、意味論、認知言語学、語用論、形式意味論などのようにたいへん多岐にわたっている。これは、本研究室の授業内容に多様性があるということと、学部 4 年生や大学院生の研究への自主性を尊重しているという本研究室のスタンスを見事に反映している。この 2 年間、大学院生の研究発表した学会をみると、日本英語学会、日本英文学会、認知言語学会、日本言語学会、関西言語学会、日本語用論学会などとなっている。これは全国的にみてきわめて稀なケースであり、本研究室の特徴の 1 つと言えよう。

第 3 の特色は、この 2 年間において特に顕著なことであるが、国際学会でたいへん活発に研究成果を発表したことである。その開催国は、アメリカ、イギリス、ドイツ、オランダ、ノルウェー、オーストラリアなどとなっており、国際化の必要性が叫ばれている今日、本研究室ではその波を受けて、着実に研究成果を世界に発信している。

大学院生の教育の面で気をつけていることは、博士前期課程の院生には正規の授業の他に、学内外のすぐれた講演や講義にも積極的に参加し、広く英語学の知識を身につけるよう指導しており、また修士論文の作成にあたっては、中間発表や学会発表を通じて、その質的向上に努めていることである。博士後期課程の院生には、日本英語学会、日本英文学会などの全国大会で研究発表を行い、2 年次末に博士予備論文を提出し、3 年次末には学位申請論文を完成させる方向で指導している。また、学術振興会特別研究員にも積極的に応募することを勧めている。同時に、英語の運用能力を試す TOEIC や TOEFL を年に数回受験し、英語の実用能力を高めるよう助言している。その他、研究設備・環境の面でも、最新の書物や専門誌を完備してすぐに読めるように整備している。

なお、本研究室では、院生の研究意欲や意識を高めるために、年 2 回「待兼山ことばの会」を開催し、国内外の著名な言語学者や若手研究者に講演や研究発表をお願いした。また、本研究室のスタッフと大学院生による英語学論文集 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* を年 1 回刊行している。論文集は *MLA International Bibliography* に報告し、国際的に公表されている。この他、英米文学分野と共同で刊行している *Osaka Literary Review* に論文を投稿することもできる。

I. 現在の組織

1. 教員(2006 年 4 月現在)

教授 1 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：大庭 幸男

助教授：岡田 禎之

助手：岩崎 真哉

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
80	2	16	0	0	0	2	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	18	3	4	0	3
'05	16	5	0	1	1
小計	34	8	4	1	4

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	0	0	0
'05	0	1	1
計	0	1	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【論文博士】

西岡宣明「英語否定文の統語論研究」2006/2

主査：大庭幸男 副査：工藤真由美、岡田禎之

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	7	1	4	0	1	13
'05	6	1	5	0	0	12
計	13	2	9	0	1	25

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	8	10	4	0	0	22
'05	1	14	2	0	0	17
計	9	24	6	0	0	39

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

Ohkawa, Yuya “Referentiality of Noun Phrases in Japanese Existentials” *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 9, pp. 53-65, 2005/3

Ohkawa, Yuya “Generics and Topicality” *Osaka Literary Review (OLR)*, 43, pp. 1-11, 2004/12

黒川尚彦 「vice versa の語用論——「逆」とは何か?——」 *JELS (日本英語学会)* 22, pp. 61-70, 2005/3/10

貞光宮城 「英語第二公用語論とは何か」 *Osaka Literary Review (OLR)*, 43, pp. 13-30, 2004/12

Nishiguchi, Sumiyo “Consonant Assimilation and Sonority: A Case Study in Daasanach” *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 9, pp. 39-51, 2005/3

Nishiguchi, Sumiyo “Temporal Dynamic Semantics of Factual Counterfactuals” *Proceedings of JSAI 2004 International Workshop on Logic and Engineering of Natural Language Semantics, in conjunction with the 18th Annual Conference of the Japanese Society for Artificial Intelligence, 2004*, pp. 73-81, 2004/5

Fujii, Tomohiro “Some Preliminary Notes on the Scope of Numeral Phrases and Restructuring Contexts” *Machikaneyama Ronso (Japanese Studies)*, 38, pp. 47-60, 2004/12

Fujii, Tomohiro (ed.) (with P. Chandra, U. Soltan, and M. Yoshida) *University of Maryland Working Papers in Linguistics* (Department of Linguistics, University of Maryland, College Park), 13, 2004/12(総頁数 262 頁)

Fujii, Tomohiro “Multiple *zibun*” *Proceedings of the Fifth Tokyo Conference on Psycholinguistics* (Hituzi Syoboo), pp. 87-109, 2004/11

Minami, Yusuke “On the Categorization of “Appropriateness” Predicates in English and Japanese Property-Predicating Sentences” *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 9, pp. 25-38, 2005/3

森英樹 「感嘆文の認知構造」 *KLS (関西言語学会)* 24, pp. 228-237, 2004/10

森英樹 「トートロジーとメタファーについて」 『日本認知科学会第 21 回大会発表論文集』 pp. 240-241, 2004/7

Yoshimoto, Mayumi “Ā-Movement and Deletion in Comparative Clauses” *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 9, pp. 67-98, 2005/3

【2005 年度】

- Ohkawa, Yuya “On English Generics and Topicality: From a Viewpoint of Mental Space Theory” *KLS*(関西言語学会), 25, pp. 348-358, 2005/6
- 黒川尚彦 「「反対」とは何か? ——The opposite is true の場合——」 *JELS*(日本英語学会) 23, pp. 100-109, 2006/3
- 黒川尚彦 「The opposite is true の解釈に関する一考察」『待兼山論叢』(大阪大学文学研究科), 39, pp. 61-75, 2005/12
- 榊原愛 「談話における「やっぱり」の機能——交感的使用の観点から——」 *KLS*(関西言語学会), 25, p. 417, 2005/6
- Shinohara, Hiroki “The Function of the *it*-Cleft Construction” *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 10, pp. 103-128, 2006/3
- Hirakawa, Kimiko “On the Rise of the Possessive Meaning of *Have Got*” *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 10, pp. 1-37, 2006/3
- 平松佳二郎 「使役移動構文と再帰代名詞の出現に関する一考察」 *KLS*(関西言語学会), 25, pp. 337-346, 2005/6
- 南佑亮 「行為を伴う属性叙述文と事態認知」 *JELS*(日本英語学会) 23, pp. 150-159, 2006/3
- Murata, Kazuhisa “Directional Prepositions into the Slit Projection” *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 10, pp. 75-102, 2006/3
- 森英樹 「3つの命令文：日英語の命令文と潜在型／既存型スケール」『言語研究』129, pp. 135-160, 2006/3
- Mori, Hideki “Belfast English Imperatives and Ergativity” *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 10, pp. 63-73, 2006/3
- Yoshimoto, Keisuke “On the Category and Interpretation of Partial Control Infinitives” *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 10, pp. 129-147, 2006/3

(2)口頭発表

【2004 年度】

- 大川裕也 「英語における総称文とトピック性」 関西言語学会第 29 回大会, 京都外国語大学, 2004/10/31
- 川原功司 “Toward a Syntactic Treatment of Japanese Causatives” 日本言語学会 第 129 回大会(日本言語学会第 129 回大会予稿集, pp. 207-212), 富山大学, 2004/11/21
- Kawahara, Koji “Case Feature and Interpretation of DPs” Generative Lyceum, K.G. Hubsquare, Hotel Hankyu International, 2004/7/11
- 黒川尚彦 「vice versa の語用論——「逆」とは何か? ——」 日本英語学会第 22 回大会, 獨協大学, 2004/11/13(日本英語学会 Conference Handbook 22, pp. 21-24)
- 榊原愛 「「やっぱり」の談話機能と関連性：その交感的な使用をめぐる」 関西言語学会第 29 回大会, 京都外国語大学, 2004/10/30
- 貞光宮城 「共感覚比喩表現の転用——嗅覚について——」 第 13 回福岡認知言語学会, 西南学院大学, 2005/3/26
- Nishiguchi, Sumiyo “Covert *Only* and NPI Licensing,” The 79th Annual Meeting of the Linguistic Society of America, Marriott Oakland City Center, 2005/1/6
- Nishiguchi, Sumiyo “Temporal Dynamic Semantics of Factual Counterfactuals” 人工知能学会全国大会 第 19 回(JSAI 2004), 国際ワークショップ “Logic and Engineering of Natural Language Semantics” 石川厚生年金会館, 2004/5/31
- Nishiguchi, Sumiyo “Five Types of Affective Contexts: Nonmonotonic NPI Licensing” The 40th Annual Meeting of the Chicago Linguistics Society (CLS 40), The University of Chicago, Chicago, 2004/4/16
- 平松佳二郎 「使役移動構文と再帰代名詞の出現に関する一考察」 関西言語学会第 29 回大会, 京都外国語大学, 2004/10/31
- 平松佳二郎 「使役移動構文と再帰代名詞の出現に関する一考察」 関西レキシコンプロジェクト(KLP)研究会, 西宮市大学交流センター, 2004/10/2
- 平松佳二郎 「英語の結果構文に現れる擬似目的語に関して」 関西レキシコンプロジェクト(KLP)研究会, 西宮市大学交流センター, 2004/5/29
- Fujii, Tomohiro “Long Distance Subject Raising and Cyclic Chain Reduction” Workshop “The Copy Theory of

- Movement on the PF Side”, Institute of Linguistics OTS, Utrecht, Netherlands, 2004/12/15
- Fujii, Tomohiro “Copy-raising and A-chain Pronunciation” The Thirteenth Conference of the Student Organisation of Linguistics in Europe (ConSOLE XIII), Universitetet i Tromsø, Tromsø, Norway, 2004/12/4
- Fujii, Tomohiro “Binding and Scope in Japanese Backward Control” Workshop “Control Verbs in Cross-linguistic Perspective”, Zentrum für Allgemeine Sprachwissenschaft, Berlin, Germany, 2004/5/1
- 南佑亮「〈行為〉が生みだす属性とその言語化——Tough 構文を中心に」日本英語学会第 22 回大会(ワークショップ), 獨協大学, 2004/11/13
- 南佑亮「“Pretty 構文”再考——to 不定詞句は「余剰」か？」日本英文学会 第 76 回大会, 大阪大学, 2004/5/22
- Mori, Hideki “On Identification and Categorization” International Language and Cognition Conference 2004, Pacific Bay Resort, Coffs Harbour, Australia, 2004/9/11
- Mori, Hideki “Toward an Integrated Theory of Language and Emotion” International Conference of Language, Culture, and Mind 2004, University of Portsmouth, Portsmouth, England, 2004/7/19
- 森英樹「トートロジーとメタファーについて」日本認知科学会 第 21 回大会(ポスター発表), 日本未来科学館, 2004/7/31
- 森英樹「情動表出行動としての言語」日本感情心理学会 第 12 回大会(ポスター発表), ザ・パレスサイドホテル, 2004/5/16
- 森英樹「外界を認知するために」日本記号学会 第 24 回大会(ポスター発表), 京都精華大, 2004/5/16
- 【2005 年度】
- 岩橋一樹「絵画の特徴を述べる共感覚表現とその効果」日本語用論学会 第 8 回大会, 京都大学, 2005/12/10(日本語用論学会予稿集, pp. 89-92)
- 岩橋一樹「共感覚表現と共起する名詞の種類に関する一考察」六甲英語学研究会 6 月例会, 六甲道勤労市民センター, 2005/6/26
- 川原功司「Optional Scope Shifting Operation in Japanese」関西言語学会第 30 回大会, 関西大学, 2005/6/4
- 黒川尚彦「opposite の意味論と語用論——do the opposite をを中心に」日本語用論学会 第 8 回大会, 京都大学, 2005/12/10 (日本語用論学会予稿集, pp. 116-119)
- 黒川尚彦「『反対』とは何か? ——The opposite is true の場合——」日本英語学会第 23 回大会, 九州大学, 2005/11/12(日本英語学会 Conference Handbook 23, pp. 9-12)
- 香本直子「主語と相関する不定詞について」日本英文学会 第 77 回大会, 日本大学, 2005/5/22
- 榊原愛「「ちょっと」に関する一考察 ——「ちょっとすみません」は何が「ちょっと」なのか?」日本語学会 2005 年度秋季大会(2005 年度秋季大会予稿集, pp. 63-68), 東北大学, 2005/11/13
- 篠原弘樹「It-Cleft 構文——型と文脈——」日本語用論学会 第 8 回大会, 日本語用論学会, 京都大学, 2005/12/10(日本語用論学会予稿集, pp. 49-52)
- 篠原弘樹「“it-Cleft 構文[it be X that Y]”再考——相対的に解釈される X の特定性——」関西言語学会第 30 回大会, 関西大学, 2005/6/5
- 平川公子「参照点構造構築現象としての文法化——have got を中心として——」関西言語学会第 30 回大会, 関西大学, 2005/6/4
- 平松佳二郎「移動様態動詞と共起する再帰代名詞と自他交替」日本言語学会 第 131 回大会, 広島大学, 2005/11/20(日本語学会予稿集, pp. 132-137)
- 平松佳二郎「移動様態動詞と再帰代名詞の存在——one’s way 構文との比較を通して——」関西言語学会第 30 回大会, 関西大学, 2005/6/4
- 南佑亮「行為を伴う属性叙述文と事態認知」日本英語学会第 23 回大会, 九州大学, 2005/11/13(日本英語学会 Conference Handbook 23, pp. 69-72)
- 南佑亮「形容詞属性叙述文にみられる属性判断の階層性について」日本認知言語学会 第 6 回大会, お茶の水女子大学, 2005/9/17(日本認知言語学会 Conference Handbook, pp. 46-49)
- 南佑亮「日英語の属性叙述文における「適切性」述語のカテゴリー化について」言語科学会 第 7 回年次大会 (ポスター発表), 上智大学, 2005/6/26(JSLs 2005 ハンドブック, p. 158)

Mori, Hideki "The Type of Imperatives and Mood" The Linguistic Society of New Zealand, 2005 Linguistics Society Conference University of Auckland, 2005/11/18

吉本圭佑 "Binding PRO in Partial Control Infinitives," Generative Lyceum, 関西学院大学, 2006/2/24

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2004年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計1名)

2005年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004年度 学部: 3名 大学院: 3名 (計6名)

2005年度 学部: 5名 大学院: 5名 (計10名)

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度～2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004年度～2005年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 7 名

2004年度: 5名 2005年度: 2名

<内訳> 中学校の教員 1名 中・高等学校の教員 2名 高等学校の教員 3名

テレビ局ディレクター 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2004年度 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 9

OLR (Osaka Literary Review) No. 43

阪大英文学会叢書 1『病いと身体の英米文学』玉井暲, 仙葉豊編, 英宝社, 東京.

2005年度 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 10

OLR (Osaka Literary Review) No. 44

阪大英文学会叢書 2『英語のテンス・アスペクト・モダリティ』成田義光, 長谷川存古共編, 英宝社, 東京.

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本英文学会第76回大会

2004年5月22日・23日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会 38 回大会	2005 年 10 月 29 日
阪大英文学会 37 回大会	2004 年 11 月 6 日
第 74 回待兼山ことばの会	2005 年 9 月 30 日
第 73 回待兼山ことばの会	2005 年 8 月 13 日
第 72 回待兼山ことばの会	2004 年 8 月 7 日

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

2004 年度～2005 年度における大学院生が行った研究成果の発表件数から判断すると、本研究室の教育活動はたいへん充実していたと言える。たとえば、この 2 年間に於いて、大学院生が国内外の学会で行った口頭発表の総数は 39 件であり、また、学会誌を含む学術雑誌に掲載された論文の総数は 19 件にのぼる。その他、博士の授与数(論文博士)と日本学術振興会特別研究員数はそれぞれ 1 名であった。また、本研究室で発行した *OUPEL* 第 9 巻(2004 年)、第 10 巻(2005 年)にはそれぞれ 5 名の大学院生が論文を発表した。この学術雑誌は国内外の研究者や研究機関に 450 部送付しており、レベルの高い学術雑誌として評価を得ている。さらに、大学院生の研究意欲を促進するために「待兼山ことばの会」をこの 2 年間で合計 4 回開催した。2006 年度は海外のゲストスピーカーを招待する予定である。

次に、博士予備論文では 2004 年度～2005 年度において合計 2 名が提出した。残念ながら、当該年度には課程博士論文の提出はなかったが、現在大学院生 1 名が執筆中であり、2006 年度内に提出の予定である。これに関して特記すべきことは、課程博士論文の提出条件を見直したことである。従来、その提出条件として、博士予備論文の提出のほかに、「国内学会(日本英語学会、日本英文学会など)のレフェリーつき機関誌や国際学会誌、あるいは、それに相当するレベルの海外専門誌に 2 本以上の論文が掲載されていること」としていた。しかし、大学院生にとっては、レフェリーつきの学術雑誌(トップクラスの国内外の学会誌に限る)に 2 本の論文が掲載されていることという条件はかなりクリアしにくい。そこで、レフェリーつき機関誌等に「2 本の論文が掲載されていること」という条件を同種の機関誌に「1 本の論文が掲載されていること」に変更し、同時に掲載論文と口頭発表を点数化して、課程博士論文の提出条件を明確化した。したがって、今後、課程博士論文の提出数が増加することが期待される。

12-2. 研究活動

大学院生の研究活動は、極めて積極的に行われたと評価できる。すでに、上記の 12-1 教育活動で述べたように、日本国内のさまざまな学会(日本英語学会、日本英文学会、日本語用論学会、日本認知言語学会、関西言語学会など)の全国大会において、多数の大学院生が研究発表(39 件)を行った。また、学会誌を含め各種の学術雑誌にも多くの研究成果の発表(19 件)を行った。特に、口頭発表では国際学会で発表する大学院生が増加し、過去 2 年間で総計 9 件にのぼった。また、本研究室で発行している *OUPEL* 第 9 巻(2004 年)と第 10 巻(2005 年)には、それぞれ 5 名が論文を発表した。このことから、大学院生の研究活動はきわめて活発であると評価できる。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004 年度～2005 年度の過去 2 年間)

1. 大庭 幸男 教授

1949 年生。九州大学大学院文学研究科修士課程(英語学専攻)修了。文学博士(大阪大学、1997 年)。山口大学助手、同講師、大阪大学言語文化学部講師、同助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授を経て、1999 年 4 月より現職。専攻：英語学。

1-1. 論文

有村兼彬, 大庭幸男 「Promise 構文の補文主語 PRO の先行詞について」 『生成文法理論における空範疇の再評価』(2004

- 年度～2005年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, pp. 108-127, 2006/3
- 大庭幸男「結果構文について」『英語教育』54-11, 大修館書店, pp. 70-72, 2006/1
- 大庭幸男「二重目的語構文について」『英語教育』54-10, 大修館書店, pp. 63-65, 2005/12
- 大庭幸男 “The Double Object Construction and Thematization/Extraction”, *English Linguistics* Vol. 22. 1(日本英語学会), 開拓社, pp. 56-81, 2005/6
- 大庭幸男 “The Double Object Construction and the Extraction of the Indirect Object”, *Linguistic Analysis* 32. 1-2, pp. 40-71, 2005/4
- 大庭幸男, 有村兼彬「無生物主語を伴う二重目的語について」『生成文法理論における中核的な統語現象と周辺の統語現象の研究』(2002年度～2003年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, pp. 1-6, 2004/5
- 大庭幸男, 有村兼彬「特定性効果とフェイズ不可侵条件」『生成文法理論における中核的な統語現象と周辺の統語現象の研究』(2002年度～2003年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, pp. 7-13, 2004/5
- 大庭幸男, 有村兼彬「二重目的語構文の構造——分散形態論の枠組みを用いて——」『生成文法理論における中核的な統語現象と周辺の統語現象の研究』(2002年度～2003年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, pp. 14-30, 2004/5
- 大庭幸男, 有村兼彬「間接目的語と主題化／摘出規則」『生成文法理論における中核的な統語現象と周辺の統語現象の研究』(2002年度～2003年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, pp. 31-45, 2004/5
- 大庭幸男, 有村兼彬 “The Double Object Construction and the Extraction of the Indirect Object”『生成文法理論における中核的な統語現象と周辺の統語現象の研究』(2002年度～2003年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, pp. 47- 87, 2004/5

1-2. 著書

- 大庭幸男, 岡田禎之共編 *Osaka University Papers of English Linguistics (OUPEL)*, 10(2006/3)
- 大庭幸男編 *Osaka University Papers of English Linguistics(OUPEL)*, 9(2005/3)

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 大庭幸男「束縛と削除」『月刊言語』34-11, 大修館書店, p. 118, 2005/11
- 大庭幸男「言語と認知」(N. Chomsky 著)『英語教育』53.3, 大修館書店, pp. 87-88, 2004/6
- 大庭幸男「生成文法の方法——英語統語論のしくみ」(長谷川欣佑著)『英語青年』150-1, 研究社, pp. 56-57, 2004/4

1-4. 口頭発表

- 大庭幸男「構文の意味と構造」第22回日本英語学会シンポジウム『構文・語彙の意味と構造について——英文法教育に生かす方途を探る——』2004/11

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 大庭幸男 市河賞, 財団法人語学教育研究所, 1998/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

- 1-6-1. 2004年度～2005年度、科学研究費補助金(萌芽研究)、代表者：大庭幸男

課題番号：16652035

研究題目：インターネットを利用した所有名詞表現の分布と情報構造に関する理論的・実証的研究

研究経費：2004年度 直接経費 2,300千円 間接経費 0円

2005年度 直接経費 900千円 間接経費 0円

研究の目的：

本研究の目的は2つある。(1)現代英語における所有表現(NP₁'s NP₂)の使用傾向を電子化された雑誌、論文、小説等か

らインターネットを通じて探ることである。(2)その傾向の主たる原因を明らかにすることである。英語の所有表現では、John's car/?the car of Mary, ?the mountain's foot/the foot of the mountain のように所有形 NP₁ が人かどうかで容認性が異なる。Quirk et al. (1972)は、Gender Scale (human male and female<human dual<human common<human collective<higher animals<higher organisms<lower animals<inanimates)で、また、Hawkins (1981)は、Animacy Hierarchy (human<human attribute <non-human animate<non-human inanimate))でこの現象を説明している。両者は共通して、NP₁には[human]の方が[animal]より好まれると主張している。しかし、17世紀の所有表現(NP₁'s NP₂)を調査した Altenberg (1982)によれば、NP₁には animal(44%)の方が[human collective](10%)よりも断然多く生じている。この事実は Quirk et al.や Hawkins の予測とは異なっている。そこで、本研究は、現代英語の所有表現の実態を調査し、その結果を分析・説明する方法を考察することを目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本英語学会・理事	2005年12月～2009年11月
同上・ <i>English Linguistics</i> 編集委員	2003年10月～2007年9月
同上・評議員	2004年4月～2007年3月
同上・監事	2003年4月～2006年3月
関西言語学会・運営委員	1993年4月～現在
日本学術振興会・科学研究費委員会専門委員	2004年1月～2004年12月

2. 岡田 禎之 助教授

1965年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程(英語学専攻)中途退学。文学博士(大阪大学、2001年)。大阪大学助手、岡山大学教養部講師、岡山大学文学部講師、金沢大学文学部助教授、神戸市外国語大学英米学科助教授を経て、2005年10月より現職。専攻：英語学

2-1. 論文

岡田禎之「文の結束関係と残留要素の相関関係について(その2)」『神戸外大論叢』56-2, pp. 19-35, 2005/9

岡田禎之「文の結束関係と残留要素の相関関係について(その1)」『神戸外大論叢』55-3, pp. 47-67, 2004/9

2-2. 著書

大庭幸男, 岡田禎之共編 *Osaka University Papers of English Linguistics (OUPEL)*, 10(2006/3)

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岡田禎之「結束関係と残留要素の分布について」『英語青年』150-12, 研究社, pp. 731-734, 2005/3

岡田禎之, 八木克正監修(辞典項目)『ユースプログレッシブ英和辞典』(接続詞・副詞担当), 小学館, 2004/4

2-4. 口頭発表

岡田禎之「結束関係のタイプと残留要素の形態について」阪大英文学会, 2005/10

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡田禎之 市河賞, 財団法人語学教育研究所, 2003/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

3. 岩崎 真哉 助手

1976年生。2004年、大阪大学文学研究科後期博士課程単位修得退学。修士(文学、大阪大学)。2004年より現職。専攻: 英語学。

3-1. 論文

Iwasaki, Shin-ya “A Mismatch between Grammatical and Phonological Structures of Compound Nouns in English and Japanese” *OUPEL(Osaka University Papers in English Linguistics)*, 10, pp. 39-61, 2006/3

Iwasaki, Shin-ya “Reconsidering So-called Temporal Bare-NP Adverbials in English : A Construction Grammar Account” *OUPEL(Osaka University Papers in English Linguistics)*, 9, pp. 1-23, 2005/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-20 日本語学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

日本語学講座の特色は、日本語を一つの個別言語として客観的に対象化して観て行こうとする立場から、現代日本語学、社会言語学、対照言語学、日本語教育学の4つの分野について多角的な教育・研究を行っている点にある。現代日本語学では、話し言葉や書き言葉の実例を丹念に調査することによって、現代日本語の文法・語彙・音韻・表記等の特質を体系的・総合的に扱う。社会言語学では、日本語の地域差(方言)・性差・年齢差や場面による言葉の違い、非母語話者の日本語など、現代社会に存在する日本語の多様性と、それがもたらす言語学的な問題や社会的な問題を、フィールドワーク等によって把握し、分析する。対照言語学では、日本語や日本語による言語行動の特徴を、他言語やそれを用いた言語行動と比較し、その異同を把握すること、異文化間コミュニケーションの中で起こりうる言語に関連する問題の本質を明らかにすることを目的とする。日本語教育学では、日本語を第二言語として学ぶ人々、および日本語学習を支援するため人々を全人的に捉え、日本語の学習および教育に関わる複雑な心理的・社会的要因を質的に研究するとともに、高度の専門知識をもった日本語教師を育てるための教師教育を行っている。いずれの分野においても、外国人留学生を積極的に受け入れており、海外の研究者との交流も活発である。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 4 助教授 2 講師 0 助手 1

教授：真田 信治、土岐 哲、工藤 真由美、青木 直子

助教授：渋谷 勝己、石井 正彦

助手：松丸 真大

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
39	22	31	0	0	2	8	5	0

※うち留学生 32名、社会人学生 3名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	12	13	7	7	5
'05	11	10	2	4	4
小計	23	23	9	11	9

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	7	0	7
'05	2	2	4
計	9	2	11

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 嵐洋子 「特殊モーラ習得過程の研究」 2006/3
主査：土岐哲 副査：真田信治、石井正彦
- イブラヒム・インガ 「日本語音声の感情情報表現に見られる韻律的特徴の研究」 2005/3
主査：土岐哲 副査：真田信治、石井正彦
- 金美貞 「韓国における接客言語行動の社会言語学的研究」 2005/9
主査：真田信治 副査：土岐哲、渋谷勝己
- 司空煥 「韓国語話者による日本語破裂音・破擦音の生成及び知覚に関する実験音声学的研究」 2004/9
主査：土岐哲 副査：真田信治、石井正彦
- 高木千恵 「関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相」 2005/3
主査：渋谷勝己 副査：真田信治、工藤真由美
- 辻加代子 「京都語におけるハル敬語の展開に関する社会言語学的研究」 2005/3
主査：真田信治 副査：土岐哲、渋谷勝己
- 橋本礼子 「日本語諸方言における意志・推量表現の変化に関する研究」 2004/9
主査：真田信治 副査：工藤真由美、渋谷勝己
- 李曉博 「留学生を対象とする日本語教育における教師の専門知——実践の中の教師の学び・変化・成長についてのナラティブ的探究——」 2004/9
主査：青木直子 副査：真田信治、渋谷勝己
- 李吉鎔 「日本語学習者におけるスタイル切換え能力の発達」 2005/3
主査：渋谷勝己 副査：真田信治、工藤真由美

【論文博士】

- 陣内正敬 「外来語の社会言語学的研究」 2005/11
主査：真田信治 副査：土岐哲、石井正彦

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	6	2	8	1	4	21
'05	4	6	4	0	13	27
計	10	8	12	1	17	48

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	7	9	10	0	0	26
'05	6	7	13	0	0	26
計	13	16	23	0	0	52

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

阿部貴人「名古屋方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』（大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室），7，pp. 1-20，2005/3

阿部貴人「を格のスタイル切換え——東京下町・大阪市・津軽方言の対照——」『阪大社会言語学研究ノート』（大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室），7，pp. 21-38，2005/3

李宝瓊「韓国話者の日本語音声によるパラ言語情報の実現——「問い返し」と「疑い」の比較を中心に——」『日語教育』（韓国日本語教育学会），30，pp. 83-106，2004/12

廣利正代，上田和子，押尾和美，歳森真紀「年少者を対象としたインターネット日本語試験「すしテスト」開発報告」国際交流基金日本語教育紀要編集委員会『国際交流基金日本語教育紀要』（独立行政法人国際交流基金），1，pp. 241-248，2005/3

金智英「在日コリアン一世の否定表現」真田信治，生越直樹，任榮哲編『在日コリアンの言語相』（和泉書院），pp. 141-158，2005/1

金智英「在日コリアン一世の指示詞の運用」『日本語教育論集 世界の日本語教育』（国際交流基金日本語国際センター），14，pp. 21-34，2004/11

金美貞「韓国における接客言語行動意識——客側からの評価——」『阪大日本語研究』（大阪大学大学院文学研究科日本語学講座），17，pp. 91-110，2005/2

佐竹久仁子「〈女ことば／男ことば〉規範をめぐる戦後の新聞の言説——国研「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」から——」『阪大日本語研究』（大阪大学大学院文学研究科日本語学講座），17，pp. 111-137，2005/2

佐竹久仁子「〈女ことば／男ことば〉規範の形成——明治期若年者向け雑誌から——」『日本語学』（明治書院），23-7，pp. 64-74，2004/6

篠原玲子「間投助詞のスタイル切換え——方言間の対照——」『阪大社会言語学研究ノート』（大阪大学大学院文学研究科

- 社会言語学研究室), 7, pp. 39-50, 2005/3
- 高木千恵「大阪方言の述語否定形式と否定疑問文——「～コトナイ」を中心に——」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 7, pp. 73-87, 2005/3
- 高木千恵「若年層関西方言の否定辞にみる言語変化のタイプ」国立国語研究所『日本語科学』(国書刊行会), 16, pp. 25-46, 2004/10
- 高田祥司「岩手県遠野方言の非動的述語及び否定のテンス——〈過去〉の場合における「一ケ」の使用を中心に——」『日本語文法』(日本語文法学会), 4-2, pp. 103-119, 2004/9
- 永見昌紀「友だちとの会話と第2言語学習は両立するか——L1使用者とL2使用者の会話における訂正と発話援助——」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 17, pp. 27-57, 2005/2
- 林雅子「動詞テ形と連用形の使用差に関する計量的調査研究——中級以上の作文・小論文指導のために——」『龍谷大学国際センター研究年報』(龍谷大学国際センター), 14, pp. 15-23, 2005/3
- 林雅子「動詞テ形と連用形の使用差に関する計量的調査研究——新聞・小説における「なる」の用法を中心に——」『計量国語学』(計量国語学会), 24-7, pp. 325-349, 2004/12
- 範玉梅「日本語学校における一人っ子の中国人留学生増加に伴う問題」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 17, pp. 59-90, 2005/2
- 前田達朗『「在日」の言語意識——エスニシティと言語』真田信治, 生越直樹, 任榮哲編『在日コリアンの言語相』(和泉書院), pp. 87-114, 2005/1
- 前田達朗『「失う」不安』『「インターフェイスの人文学」ニューズレター』(「インターフェイスの人文学」研究開発委員会), 05, p. 16, 2005/1
- 水谷美保「方言敬語動詞に共通して生じる意味領域の変化」『待兼山論叢(日本学篇)』(大阪大学文学会), 38, pp. 17-34, 2004/12
- 八木真奈美「日本語学習者の日本社会におけるネットワークの形成とアイデンティティの構築」『質的心理学研究』(日本質的心理学会), 3, pp. 157-172, 2004/4
- 【2005年度】**
- 阿部貴人, 住川健一「奄美方言話者の使用する助詞「チ」の特徴」真田信治編『奄美』(科研報告書), pp. 69-85, 2006/2
- 阿部貴人「スタイル切換えと切換え能力の発達——青森県弘前市方言話者の目的表現を例に——」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 18, pp. 23-48, 2006/2
- アマタノン・ミーナ「政治とメタファー」『待兼山論叢(日本学篇)』(大阪大学文学会), 39, pp. 19-35, 2006/2
- 池田貴子「動詞の条件形とその転成——「いえば」を中心に——」許罗莎主编『东方语言文化论丛 第四辑』(中国・华南理工大学出版社), pp. 117-133, 2006/3
- 李宝瓊「韓国語話者の日韓両音声による「パラ言語情報」の実現に関する考察——「問い返し」と「疑い」の比較を中心に——」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 18, pp. 79-105, 2006/2
- 岡田祥平「音声変異の重層性——音韻論的対立の有無の観点から——」『龍谷大学国際センター研究年報』(龍谷大学国際センター), 15, pp. 65-78, 2006/3
- 岡田祥平「「縮約形」再考」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 18, pp. 49-78, 2006/2
- 岡本耕介「大阪方言話者による母音無声化——その個人的特徴について——」『待兼山論叢(日本学篇)』(大阪大学文学会), 39, pp. 37-53, 2006/2
- 岸本千秋「ネット日記における読み手を意識した表現——公開意識との関連から——」『メディアとことば』(ひつじ書房), 2, pp. 204-231, 2005/9
- 岸本千秋「日本のWeb日記における表現の特徴」『日本研究』(韓国外国語大学日本研究所), 24, pp. 525-538, 2005/6
- 齊藤美穂, 阿部貴人「奄美方言話者の使用するアスペクト形式の特徴——フォーマル談話に現れる方言形式——」真田信治編『奄美』(科研報告書), pp. 53-62, 2006/2
- 齊藤美穂「複文と会話の構造——いわゆる「逆接」の複文を中心に——」『日語日文学研究 日本語学・日本語教育学篇』(韓国日語日文学会), 53-1, pp. 215-234, 2005/5

- 住川健一, 松丸真大「奄美大島方言話者の使用する丁寧形式『デス』『マス』の特徴」真田信治編『奄美』(科研報告書), pp. 86-95, 2006/2
- チャーロンピット・ナッタウィパー「現代日本語における「自身」の使用実態について」『待兼山論叢(日本学篇)』(大阪大学文学会), 39, pp. 1-17, 2006/2
- 陳連冬「現代日本語の「なんて」の意味・機能」許罗莎主编『东方语言文化论丛 第四辑』(中国・华南理工大学出版社), 4, pp. 58-83, 2006/3
- 陳連冬「「なぞ」と「なんぞ」の意味・機能:「など」との比較を含めて」『世界の日本語教育』(国際交流基金), 15, pp. 117-133, 2005/11
- 濱中誠, 金昴京「奄美大島方言話者の使用するコ系指示詞の特徴」真田信治編『奄美』(科研報告書), pp. 12-23, 2006/2
- 濱中誠「奄美大島方言話者の使用する否定辞を含む表現の特徴」真田信治編『奄美』(科研報告書), pp. 63-68, 2006/2
- 林雅子「様態を表す副詞的表現をめぐって」『龍谷大学国際センター研究年報』(龍谷大学国際センター), 15, pp. 59-64, 2006/3
- 方允炯「現代日本語における「うえ」の意味・機能」『日語日文学研究(日本語学・日本語教育学篇)』(韓国日語日文学会), 53-1, pp. 177-192, 2005/5
- 高木千恵, 黒木邦彦, 黄永熙「奄美大島瀬戸内町におけるネオ方言の名称と評価」大阪大学大学院文学研究科真田研究室編『奄美大島における言語意識調査報告』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), pp. 8-19, 2006/2
- 高木千恵, 黄永熙「奄美大島瀬戸内町における若年層のことばの志向」大阪大学大学院文学研究科真田研究室編『奄美大島における言語意識調査報告』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), pp. 29-35, 2006/2
- 前田達朗, 白岩広行, 牧野由紀子, 中村宏子「奄美大島の言語文化をめぐる伝承活動の報告」真田信治編『奄美』(科研報告書), pp. 161-264, 2006/2
- 水谷美保, 齊藤美穂「奄美大島方言話者の使用する『ナンカ』の特徴」真田信治編『奄美』(科研報告書), pp. 24-35, 2006/2
- 水谷美保「『イラッシャル』に生じている意味領域の縮小」『日本語の研究』(日本語学会), 1-4, pp. 32-45, 2005/10
- 蓑川恵理子「商品名の命名メカニズム——家庭用電気製品『三種の神器』を例に——」『日本語の研究』(日本語学会), 2-1, pp. 48-63, 2006/1
- 尹英和「無意味語による日本語リズム単位に関する一考察——韓国語を母語とする学習者との比較の場合——」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 18, pp. 107-138, 2006/2

(2)口頭発表

【2004 年度】

- 阿部貴人「スタイル切換えにおける切換えパターン——青森県弘前市方言話者の場合——」第 114 回変異理論研究会, 大阪府立大学, 2005/3/5
- 嵐洋子「縦断的調査から考察する特殊モーラ意識の習得過程——モーラか音節かの選択——」第 18 回音声学会大会予稿集, 日本語音声学会, 東京外国語大学, 2004/9/26
- 出野晃子「関西方言話者の使用する共通語の韻律的特徴」近畿音声言語研究会 12 月例会, 近畿音声言語研究会, 西宮市大学交流センター, 2004/12/4
- 上田和子, 羽太園「「開かれた研修」のための装置の実践」教育現場からの日本語教育実践研究フォーラム予稿集」日本語教育学会 2004 年度研究集会 第 5 回実践研究フォーラム, pp. 60-63, 日本語教育学会, 昭和女子大学, 2004/7/31
- 江崎哲也, 田川恭識, 岡田祥平, 尹英和, 岡本耕介, 嵐洋子, 出野晃子, 橋本貴子, 土岐哲「『非母語話者による日本語話し言葉コーパス』の設計」韓国日本語学会第 10 回学術発表会予稿集, pp. 239-243, 韓国日本語学会, 誠信女子大学, 2004/9/18
- 江崎哲也, 田川恭識, 岡田祥平, 尹英和, 岡本耕介, 嵐洋子, 出野晃子, 橋本貴子, 土岐哲「『非母語話者による日本語話し言葉コーパス』の構築」日本音声学会第 309 回例会, pp. 41-46, 日本音声学会(共催: 音声研究会(電子情報通信学会・日本音響学会)・聴覚研究会(日本音響学会)), ATR, 2004/6/25
- 岡田祥平「助詞「を」の発音は[o]か[wo]か? ——『日本語話し言葉コーパス』を使用した分析——」第 15 回社会言語科

- 学会研究大会, 社会言語科学会, 早稲田大学, 2005/3/20
- 岡田祥平「助詞「を」の発音は[o]か[wo]か?——『日本語話し言葉コーパス』を使用した分析——」近畿音声言語研究会月例会, 近畿音声言語研究会, 西宮市大学交流センター, 2005/1/8
- 岡田祥平, 出野晃子, 郡史郎「京都人にとっての大阪方言、大阪人にとっての京都方言——近隣方言の相互認知研究の一例として——」第79回日本方言研究会研究発表会, pp. 25-34, 日本方言研究会, 熊本市民会館, 2004/11/12
- 岡田祥平, 出野晃子, 郡史郎「京都人にとっての大阪方言・大阪人にとっての京都方言——アクセントと音声に関する項目を中心にして——」近畿音声言語研究会11月例会, 近畿音声言語研究会, 聖和大学, 2004/10/2
- 岡田祥平「音声変異の重層性について」韓国日本語学会第10回学術発表会予稿集, 韓国日本語学会, 誠信女子大学, 2004/9/18
- 岡田祥平「『日本語話し言葉コーパス』に観察される母音連続/ei/のバリエーション——和語・漢語の場合——」早稲田大学日本語学会, 早稲田大学日本語学会, 早稲田大学, 2004/7/3
- 岡田祥平「『日本語話し言葉コーパス』に観察される母音連続/ei/のバリエーション——外来語の場合——」音声の基礎と応用シンポジウム(日本音声学会第309回例会), 音声学会, 電子情報通信学会: 音声研究会, IEEE SP Society Japan Chapter 共催, ATR, 2004/6/25
- 岡田祥平, 出野晃子, 郡史郎「ミニシンポジウム 京都方言話者と大阪方言話者の音声——知覚と意識——」近畿音声言語研究会5月例会, 近畿音声言語研究会, 西宮市大学交流センター, 2004/6/5
- 岡田祥平「日本語の接続母音/ei/のバリエーション——『日本語話し言葉コーパス』の分析結果——」近畿音声言語研究会月例会, 近畿音声言語研究会, 西宮市大学交流センター, 2004/4/3
- 齊藤美穂「会話の構造と複文——いわゆる「逆接」の複文を中心に——」『2004年度国際学術 SYMPODIUM・冬季国際学術大会 発表論文集』 pp. 181-187, 韓国日語日文学會, 韓國外國語大學校, 2004/12/11
- 司空煥「韓国語話者による『ザ行音』の調音的特性に関する研究——パラトグラフィによる分析から——」韓国日本語学会第10回学術発表会予稿集, pp. 19-26, 韓国日本語学会, 誠信女子大学, 2004/9/19
- 司空煥「韓国人学習者による日本語「ザ行音」の調音的特性に関する研究」日本音声学会第309研究例会, 日本音声学会, 国際電気通信基礎技術研究所(ATR), 2004/6/25
- 田川恭識「熊本方言における「問いかけ」と「非難の問いかけ」のイントネーションパターン」近畿音声言語研究会3月月例会, 西宮市立大学交流センター, 2005/3/5
- 田川恭識「The Influence of F0 Patterns on Perception of Declaratives and Declaratives with Dissatisfaction: The Case of Expression “awanaino”」, The proceedings of ICA2004, International Congress of Acoustics, 京都国際会議場, 2004/4/7
- 林雅子「動詞テ形と連用形の使用差に関する計量的調査研究——新聞・論説文・小説における語彙調査の結果から——」日本言語学会第128回大会予稿集, pp. 251-256, 日本言語学会, 東京学芸大学, 2004/6/20
- 方允炯「現代日本語における「うえ」の意味・機能」『2004年度国際学術 SYMPODIUM・冬季国際学術大会 発表論文集』 pp. 116-123, 韓国日語日文学會, 韓國外國語大學校, 2004/12/11
- 水谷美保「「イラッシャル」「イラッシャイ」の意味領域の縮小」日本語学会2004年度秋季大会, pp. 111-118, 日本語学会, 熊本大学, 2004/11/14
- 養川恵理子「商品名の構造とその変遷から見た固有名成立のメカニズム——家庭用電気製品『三種の神器』を対象として」土曜ことばの会, 土曜ことばの会, 大阪大学, 2004/7/10
- 関淳奎「「同～」表現の分類」土曜ことばの会, 土曜ことばの会, 大阪大学, 2005/1/22
- 尹英和「日本語リズムの単位に関する基礎的考察——韓国語を母語とする学習者との比較の場合——」韓国日本語学会第10回学術発表会予稿集, 韓国日本語学会, 誠信女子大学, 2004/9/18
- 【2005年度】
- 阿部貴人「青森県弘前市方言話者のスタイル切換え——アクセントの切換え——」『日本方言研究会第81回研究発表会 発表原稿集』 pp. 25-32, 東北大学, 2005/11/11
- 阿部貴人「地域の「標準語」の形成過程」第115回変異理論研究会, 変異理論研究会, 甲南大学, 2005/5/27

- 池田貴子「現代日本語における「いえば」「いうと」「いって」の意味・機能について」『2005年广州日本語学国際学術研究会 論文摘要集』(中国広東外語外貿大学東方言語文化学院), pp. 59-60, 広東外語外貿大学, 2005/12/17
- 出野晃子「大阪方言話者の使用する「標準語」の韻律的特徴——『日本語話し言葉コーパス』を資料とした二拍名詞の分析——」『第19回日本音声学会全国大会』 pp. 79-84, 県立広島大学, 2005/9/25
- 出野晃子「大阪方言話者の使用する「標準語」のアクセントおよびイントネーション——『日本語話し言葉コーパス』を資料として——」近畿音声言語研究会 9月月例会, 西宮市立大学交流センター, 2005/9/7
- 出野晃子「大阪方言話者の使用する「標準語」の韻律的特徴——『日本語話し言葉コーパス』を資料として——」第116回変異理論研究会, KKR ホテルびわこ, 2005/7/24
- 出野晃子「関西方言話者の使用する「標準語」の音声的特徴——行為指示表現を例に——」近畿音声言語研究会 5月月例会, 西宮市立大学交流センター, 2005/5/7
- 井脇千枝「ブラジル日系社会の方言接触——アスペクト形式を中心に——」『2005 Guangzhou International Symposium on Japanese Linguistics』(中国広東外語外貿大学東方言語文化学院), pp. 55-56, 広東外語外貿大学, 2005/12/17
- 土岐哲, 岡田祥平, 岩男考哲「スピーチ音声の実証的研究から教育実践へ——『非母語話者による日本語話し言葉コーパス』研究目的との関わり——」『第12回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム 学術日本語のための情報技術——展望と可能性——』 pp. 26-29, ハンブルク大学(ドイツ), 2006/3/19
- 岡田祥平, 出野晃子「『日本語話し言葉コーパス』に見る「標準語」の多様性」『2005年广州日本語学国際学術研究会 論文摘要集』(中国広東外語外貿大学東方言語文化学院), pp. 19-20, 広東外語外貿大学, 2005/12/17
- 江崎哲也, 岡田祥平, 出野晃子, 田川恭識, 尹英和, 岩男考哲, 岡本耕介, 土岐哲「非母語話者による日本語話し言葉コーパス」構築上の諸問題」『2005年广州日本語学国際学術研究会 論文摘要集』(中国広東外語外貿大学東方言語文化学院), pp. 22-23, 広東外語外貿大学, 2005/12/17
- 岡田祥平「文末位置の「デス」・「マス」の「ス」の母音の無声化——『日本語話し言葉コーパス』を用いた分析——」『日本音声学会 2005年度(第19回)全国大会』 pp. 119-124, 県立広島大学, 2005/9/25
- 岡田祥平, 出野晃子「『日本語話し言葉コーパス』を用いた「標準語」の地域差研究の可能性——「やはり」の変異を例に——」『日本方言研究会 第80回研究発表会 発表原稿集』 pp. 107-114, 甲南大学, 2005/5/27
- 各務裕香「特殊拍、アクセントがリズムに及ぼす影響——川柳の字余り感をもとに——」近畿音声言語研究会 10月月例会, 西宮市立大学交流センター, 2005/10/1
- 岸本千秋, 佐竹秀雄「ネット日記文体の計量的分析の試み」『計量国語学会第四十九回大会プログラム』 p. 5, 同志社大学, 2005/9/17
- 齊藤美穂「接続助辞ガ・ケレドモの用法と名詞句の役割——「あいつは男だが」と「あの男だが」の違いをめぐって——」『日本語文法学会 第6回大会発表原稿集』 pp. 145-154, 明海大学, 2005/11/27
- 佐竹久仁子「『女ことば／男ことば』規範の形成——明治期若年者向け雑誌から」『日本出版学会会報』 117, pp. 20-21, 関西学院大学大阪梅田キャンパス, 2005/10/26
- 白岩広行「郡山市方言のバイについて——〈確認要求〉の視点から新しい変化を見る——」『日本方言研究会第81回研究発表会発表原稿集』 pp. 1-8, 東北大学(仙台市戦災復興記念館), 2005/11/11
- 白岩広行「福島県郡山市方言の意志・推量表現「バイ」——若年層における変化——」変異理論研究会第116回発表会, KKR ホテルびわこ, 2005/7/24
- 田川恭識「熊本方言のイントネーションにおける感情表現——非難と不満——」近畿音声言語研究会 1月月例会, 西宮市立大学交流センター, 2006/1/5
- 田川恭識「熊本方言における「問いかげ」と「非難の問いかげ」のイントネーションパターンについて」『社会言語科学会 第16回大会発表論文集』 pp. 252-255, 龍谷大学, 2005/10/2
- 田川恭識「熊本方言における「問いかげ」と「非難の問いかげ」のイントネーションパターン;熊本方言話者と東京方言話者の判定結果について」近畿音声言語研究会 7月月例会, 西宮市立大学交流センター, 2005/7/2
- 陳連冬「「なんて」形式の意味・機能」『2005年广州日本語学国際学術研究会 論文摘要集』(中国広東外語外貿大学東方言語文化学院), pp. 26, 広東外語外貿大学, 2005/12/17

牧野由紀子「現代地域社会としてのニュータウンにおける行為指示の実態」『社会言語科学会第16回大会発表論文集』
pp. 58-61, 龍谷大学, 2005/10/2

山岸智子「持続時間の長い撥音に対する聴覚印象の差——京阪式アクセントをもつ者と東京式アクセントをもつ者——」
近畿音声言語研究会 2月例会, 西宮市立大学交流センター, 2006/2/4

尹英和「日本語のリズム単位に関する基礎的考察——韓国語を母語とする学習者との比較の場合——」近畿音声言語研究会
11月例会, 西宮市立大学交流センター, 2005/11/5

(3)その他(書評・翻訳など)

【2004年度】

佐竹久仁子(翻訳)「ディスコースと辞書 性差別的意味の公認化」(ポーラ・A・トライクラー), れいのるず秋葉かつえ, 永原浩行編『ジェンダーの言語学』明石書店, pp. 83-132, 2004/11

佐竹久仁子(翻訳)「男と無表情と力」(ジャック・W・サテル), れいのるず秋葉かつえ, 永原浩行編『ジェンダーの言語学』
明石書店, pp. 123-144, 2004/11

水谷美保(研究協力者としてプロジェクトに参加), 出雲弁保存検討委員会(監修)・出雲王国(制作)『出雲のことば』(湖西
振興機構), 2004/8

【2005年度】

中井精一編『社会言語学の調査と研究の技法』(おうふう), 執筆: pp. 28-29(第3章 3-1; 鳥谷善史・阿部貴人), pp. 29-53(第
3章 3-2; 鳥谷善史・阿部貴人), pp. 53-72(第3章 3-3; 松丸真大・阿部貴人), pp. 139-155(第7章; 鳥谷善史・阿部貴
人), 2005/4

阿部貴人「言語使用と社会」『日本語教育能力検定試験 合格するための本 2006年版』(アルク), pp. 102-109, 2005/5

黄永熙「韓国の日本語と植民地」真田信治, 庄司博史編『事典 日本の多言語社会』(岩波書店), pp. 324-327, 2005/10

佐竹久仁子「「言語とジェンダー研究」からのコメント」『語用論研究』7, 日本語用論学会, pp. 135-138, 2005/12

佐竹秀雄, 佐竹久仁子『ことばの表記の教科書』ベレ出版, 2005/4

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2005年度 学部: 2名 大学院: 0名 (計2名)

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度~2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

ボンサン・タナン 博士前期課程, タイ・プリンス オブ ソンクラー大学 パッタニー校(Prince of Songkla University
Pattani Campus), 講師, 2006/4

池田貴子 博士前期課程, 中国・広東外語外貿大学, 講師, 2006/2

江崎哲也 博士後期課程, 山梨大学, 講師, 2005/9

司空煥 博士後期課程, 韓国・放送通信大学校, 講師, 2005/9

永見昌紀 博士後期課程, シンガポール・シンガポール国立大学, 講師, 2005/8

李曉博 博士後期課程, 中国・深圳大学, 講師, 2005/6

嵐洋子 博士後期課程, 杏林大学, 講師, 2005/4

イブラヒム・インガ 博士後期課程, サンクトペテルブルグ大学, 講師, 2005/4
高田祥司 博士後期課程, 韓国・新羅大学, 講師, 2005/3

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004 年度～2005 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 12 名

2004 年度 : 9 名 2005 年度 : 3 名

<内訳> 中・高等学校の教員 6 名 アーティスト 3 名 技術職 3 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

2004 年度 5 名

2005 年度 4 名

9. 刊行物

『阪大社会言語学研究ノート』(論文集・年 1 回) 定期刊行物	1999 年度～現在
『現代日本語研究』(機関誌・年 1 回) 定期刊行物	1994 年度～現在
『阪大日本語研究』(機関誌・年 1 回) 定期刊行物	1989 年度～現在
『奄美大島における言語意識調査報告』逐次刊行物	2006 年 2 月

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

変異理論研究会(研究会)事務局	1989 年～現在
土曜ことばの会(研究会)事務局	1980 年～現在
日本方言研究会(研究会)事務局	2004 年～2005 年

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

日本語学講座では、言語研究者として広くバランスのとれた視野を持つ人材を育成するとともに、高度職業人として教育、出版等の分野で社会的貢献のできる人材の育成を目指している。また、活動範囲は、大学内部にとどまらず広く社会一般への啓蒙活動も積極的に行っている。

研究者養成に関しては、教員間での授業内容の重複を避け、日本語学および言語学の領域をできる限りまんべんなくカバーするように調整するとともに、卒論・修論の中間発表会および博士後期課程の学生の中間発表会を年に 1 回ずつ開催し、全教員出席の上で、それぞれの立場から適宜アドバイスをするという試みをしている。さらに、各教員がフィールドワーク、演習形式の授業等で、研究プロセスの実地訓練も行っている。また『阪大日本語研究』等の定期および逐次刊行物を発行し、学生への投稿を奨励し、査読を通して論文の書き方を指導することにより、研究者としての成長を支援している。これら諸活動の成果は、博士論文執筆期間に短縮の傾向が見られること、学生の論文が採用される学会誌の幅が広がる傾向が見られるなどの点で実を結びつつあると考えられる。

高度職業人養成に関しては、日本語教育を中心に現場の教師を積極的に大学院に受け入れ、従来の応用言語学の枠組みにとらわれない、新しいタイプの教育研究を奨励するとともに、2002 年に文化庁が発表した日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議によるカリキュラムのガイドラインにあわせて、日本語学以外の知識も含めた高度な職業的能力の育

成を目的とした実践的な授業を行っている。また、教師教育者の養成を目的とした授業も行っている。卒業生・修了生は、専任、非常勤講師、嘱託、青年海外協力隊等のボランティアを含めると、日本語教育の分野で多岐にわたり、幅広く活躍している。日本語教育関係の授業を履修した学生が中等教育における英語あるいは国語の教師を志し、就職するというケースも見られる。また、現場の日本語教師が社会人入学する例も、社会人入学の制度ができて以来継続的に見られる。そうした意味で、日本語学講座の高度職業人養成に関する教育実践は社会的な評価を受けていると考える。また、広告、放送などの分野における言語使用をテーマとする研究も奨励し、教育以外の分野でも日本語学の専門的知識をもった高度職業人の育成を目指しており、そうした業種への就職にも実績をあげている。

一般への啓蒙活動としては、言語使用に関する出版物の監修、講演、日本語教育に関わる団体の顧問等の役職への就任、研修会等の講師など、積極的な社会的活動を行っている。

この他、特筆すべき点としては、日本語学講座は伝統的に留学生を積極的に受け入れてきたということが挙げられる。特別聴講生、研究生等も含めると学部から博士後期課程までで2004年度は47名、2005年度は39名の留学生が在籍した。これは講座全体の学生数の3分の1程度にあたる。また、この内、2004年度は17名、2005年度は14名が国費または国費に準ずる交流協会の留学生である。このことから本講座に在籍する留学生は出身国でも非常に優秀な学生たちであるということが言える。卒業・修了した留学生の多くは、日本国内外で研究者あるいは日本語に関係する職業人として活躍している。

12-2. 研究活動

各教員の研究活動の状況は該当ページの通りである。それぞれが積極的な研究活動を行っており、外部資金の獲得にも努力している。海外での学会発表や講演の数、海外の大学への客員教授としての招聘などからも、各教員がそれぞれの専門領域で国内はもとより海外でも第一人者と言ってよい実績をあげ評価されていることが見てとれるであろう。この評価は、日本語学講座の客員研究員となることを希望する海外の研究者の数の多さにも反映されている。2004年度には5名、2005年度には4名の研究者を受け入れている。

外部評価によって要求された組織全体としての研究体制作りという点に関しては、全教員が参加する研究プロジェクトは現在のところ実施されていない。しかし、これは教員間の連携がないということは意味しない。『方言記述プロジェクト』や『スタイルシフト・プロジェクト』のようにプロジェクト毎に関連する分野の教員が協力するということは従来から行われてきており、新たな角度で新たな組み合わせの研究プロジェクトが生まれる可能性は常にある。こうしたゆるやかな結びつきが、各教員の独自性、それぞれが学外にもつネットワークの多様性を支え、研究者集団としての日本語学講座を開かれた豊かなものにしており、それが伝統的に本講座の教員の特徴とされる先見的でオリジナリティに富んだ研究を可能にしていると考えられる。

研究成果の公表に関しては、学外の媒体とともに、日本語学講座の刊行物によっても行っている。2004年度、2005年度に本講座で刊行した刊行物には、『阪大日本語研究』17号(2005年2月)、18号(2006年2月)、『阪大社会言語学研究ノート』7号(2005年3月)、『奄美大島における言語意識調査報告』(2006年2月)がある。特に、調査票など研究のプロセスや生のデータの公開に関しては、講座として対応していく必要や意義のあるものも多く、サンプルが当講座の報告書類に掲載されているものもある。今後、さらに公開できる資料を蓄積していくべく、フィールドワーク資料の電子化や、スタイルシフト談話資料データベース化、非母語話者の自発発話による日本語音声コーパスの構築、『日本語ポートフォリオ』の開発など作業中のものもある。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 真田 信治 教授

1946年生。1970年、東北大学大学院文学研究科修士課程修了、1972年、同博士課程中退。文学博士(大阪大学)。国立国語研究所研究員、大阪大学文学部助教授などを経て、1993年より大阪大学文学部教授。1999年4月より現職。専攻：日本語学／社会言語学。

1-1. 論文

- 真田信治「大阪方言の過去・現在・未来」『日本語の現在』 勉誠出版, pp.189-198, 2006/3
- 真田信治「方言の盛衰——大阪ことば・素描——」『関西方言の広がりコミュニケーションの行方』 和泉書院, pp. 3-18, 2005/12
- 真田信治「日本社会言語学的発展軌跡」『語学教学と研究』 北京語言大学語言研究所, pp. 66-70, 2005/11
- 真田信治「旧満州に残存する日本語——ある朝鮮族女性の談話——」『日本語学の蓄積と展望』 明治書院, pp. 60-83, 2005/5
- 真田信治「方言と地名——地域人の空間認識——」 吉田金彦, 糸井通浩編『日本地名学を学ぶ人のために』 世界思想社, pp. 190-201, 2004/11

1-2. 著書

- 真田信治, 津田葵(責任編集)『言語の接触と混交 サハリンにおける日本語の残存』 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」報告書, 2006/3
- 真田信治, 津田葵(責任編集)『言語の接触と混交 共生を拓く日本社会』 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」報告書, 2006/3
- 真田信治編『社会言語学の展望』 くろしお出版, 2006/3
- 真田信治, 高木千恵(責任編集)『奄美大島における言語意識調査報告』 大阪大学大学院文学研究科真田研究室, 2006/2
- 真田信治編『薩南諸島におけるネオ方言(中間方言)の実態調査』 大阪大学(科学研究費成果報告書), 2006/2
- 真田信治監修『方言の絵事典』 PHP, 2006/2
- 真田信治, 庄司博史編『事典 日本の多言語社会』 岩波書店, 2005/10
- 真田信治, 篠崎晃一(責任編集)『20 世紀方言研究の軌跡——文献総目録——』 国書刊行会, 2005/5
- 真田信治, 津田葵(責任編集)『言語の接触と混交 台湾残存日本語の談話データ』 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」報告書, 2005/3
- 真田信治, 津田葵(責任編集)『言語の接触と混交 共生を生きる日本社会』 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」報告書, 2005/3
- 真田信治, 津田葵(責任編集)『言語の接触と混交 国際シンポジウム「多言語・多文化社会としての日本の現状と課題」』 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」報告書, 2005/3
- 真田信治『都道府県別 気持ち伝わる名方言 141』 講談社, 2005/1
- 真田信治, 生越直樹, 任榮哲編『在日コリアンの言語相』 和泉書院, 2005/1
- 佐治圭三, 真田信治監修『文化・社会・地域』 東京法令出版, 2004/6
- 佐治圭三, 真田信治監修『言語一般』 東京法令出版, 2004/6
- 佐治圭三, 真田信治監修『音声, 文字・表記』 東京法令出版, 2004/6
- 佐治圭三, 真田信治監修『文法・語彙・日本語史』 東京法令出版, 2004/6
- 佐治圭三, 真田信治監修『日本語教授法』 東京法令出版, 2004/6
- 佐治圭三, 真田信治監修『異文化理解と情報』 東京法令出版, 2004/6

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 真田信治「日本が侵略したアジアの人々との交わり」『医学と福音』 58, pp. 7-11, 2006/1
- 真田信治「言語の変化」「方言学」『新版 日本語教育事典』 大修館書店, p. 540, p. 579, 2005/10
- 真田信治「方言の行方——方言と標準語をめぐる葛藤の歴史から——」『方言からみた丹波』 丹波の森協会, pp. 33-37, 2005/3
- 真田信治「東アジアの日本語——旧統治領に残存する日本語について——」 神戸親和女子大学国語国文学会「会報」 35, pp. 5-7, 2005/3
- 真田信治(書評)「言語表現は社会的環境を反映する『日本語の「配慮表現」に関する研究』」『東方』 282, pp. 31-33, 2004/8
- 真田信治「ネオ方言はどのように生まれるのか」『フィールドワークは楽しい』 岩波書店, pp. 21-38, 2004/6

1-4. 口頭発表

田原広史, 井上文子, 鳥谷善史, 佐藤亮一, 江川清, 真田信治「方言音声データベースの作成と普及について——『日本のふるさとことば集成』の紹介——」日本語学会 2004 年度春季大会デモンストラーション, 2004/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

真田信治 第 8 回とやま賞受賞, 富山県置県百年記念財団, 1991/5

真田信治 第 18 回金田一京助記念賞受賞, 金田一記念会, 1990/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003 年度～2005 年度、基盤研究(C)(2)、代表者：真田信治

課題番号：15520288

研究題目：薩南諸島におけるネオ方言(中間方言)の実態調査

研究経費：2004 年度 1,000 千円

2005 年度 1,000 千円

研究の目的：

かつての方言と標準語をめぐる葛藤の歴史の中から、基盤である方言と習得目標であった標準語との大きな隔たりの中間に、本来の方言にも、また標準語にも見られない第三の言語変種(ネオ方言)が各地で生成されつつある。

たとえば、奄美大島の名瀬あたりでは、標準語を話そうとしても完全な標準語が出せなくて、方言と標準語とが混ざった状態になったものを「トン普通語」と呼ぶことがある。この「トン」は「さつま芋」を表す奄美大島北部の方言である。ちなみに鹿児島ではこのようなスピーチスタイルを「カライモ普通語」と称している。この「カライモ」もまた「唐芋」でやはり「さつま芋」を表す鹿児島方言である。

本研究では、薩南諸島を主たるフィールドとして、これら中間方言の実態を明らかにすることをめざす。

①奄美大島、およびその周辺地域をフィールドに、各世代における比較的フォーマルな場面での談話を集録し、その談話データを文字化する。そして、データをさまざまな観点から分析し、特に若い世代におけるスピーチスタイルを記述する。

②「トン普通語」「カライモ普通語」などと名づけられる対象は、本来それぞれの方言のフィルターによって変形した標準語を指すものであったが、当該地域の若者たちは今や伝統的な純粋方言は、いわば文化財の地位のものに祭り上げ、これら変形標準語を、自分たちの生活方言(地域語)として活用しているという状況がある。本研究ではそのプロセスを具体的に解明することになるはずである。

③本研究の代表者は、これら接触によって生まれた新しい中間方言を「ネオ方言」と総称して、日本各地での動態を追究している。このような状況の生まれる背景には、標準としての東京語に牽引されつつも、そこからある程度の距離を置く、置きたい、そしてそのことを確認したい、といった現代の地域人の心情があるように思われる。なお、このような流れは世界の各地で今進行しつつある少数民族言語の復権の動きとも連動するものである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 21 世紀 COE プログラム分担

1-8. 学会役員等の引き受け状況

財団法人新村出記念財団・評議員	2005 年 7 月～2008 年 7 月
同上	2002 年 7 月～2005 年 7 月
日本方言研究会・世話人	2002 年 5 月～2008 年 5 月
NPO 日本話しことば協会・理事	2005 年 4 月～2007 年 3 月
同上	2003 年 4 月～2005 年 3 月
山口大学大学院『東アジア研究』・編集顧問	2002 年 4 月～現在

2. 土岐 哲 教授

1946年生。早稲田大学文学部日本文学科卒業。文学士。アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター専任講師、プリンストン大学東アジア学系客員講師、東海大学専任講師、同助教授、名古屋大学助教授、大阪大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：日本語教育学、音声学。

2-1. 論文

土岐哲「日本語音声教育の新視点」単著『バンコク日本文化センター日本語教育紀要』1, 国際交流基金, pp. 5-17, 2004/8

土岐哲「インタビュー・聞き書きと質問調査法」単著『日本語学6月臨時増刊号2004.vol23』明治書院, pp. 32-43, 2004/6

2-2. 著書

松岡弘ほか編, 土岐哲「音声研究と日本語教育」『開かれた日本語教育の扉』スリーエーネットワーク, pp. 137-148, 2005/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

真田信治, 土岐哲, 朝日祥之『言語の接触と混交 サハリンにおける日本語の残存』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」報告書, 大阪大学文学研究科, 160p., 2006/3/1

真田信治, 土岐哲, 簡月真『言語の接触と混交 台湾残存日本語の談話データ』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」報告書, 大阪大学文学研究科, 158p., 2005/3/1

2-4. 口頭発表

土岐哲, 岡田祥平, 岩男考哲ほか「スピーチ音声の実証的研究から教育実践へ～『非母語話者による日本語話し言葉コーパス』研究目的との関わり～」第12回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム, ハンブルク大学, 2006/3/17-19

江崎哲也ほか, 土岐哲 「『非母語話者による日本語話し言葉コーパス』構築上の諸問題」2005年広州日本語学国際学術検討会, 広東外語外貿大学, 2005/12/16-19

土岐哲「音声教育の新環境への期待」シンポジウム「新時代の音声教育」第18回日本音声学全国大会, 東京外国語大学, 2004/9/25

江崎哲也ほか, 土岐哲 「『非母語話者による日本語話し言葉コーパス』の構築」日本音声学第309回研究例会, 国際電気通信基礎技術研究所, 2004/6/25

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2005年度、基盤研究(A)、代表者：土岐哲

課題番号：17202011

研究題目：「非母語話者による日本語話し言葉コーパス」の構築と分析・研究

研究経費：直接経費 17,600千円 間接経費 5,280千円

研究目的：

本研究の主たる目的は、以下の四つである。

- (1).日本語学習者の産出した日本語音声のうち、朗読ではなく「自発発話音声」のコーパスを構築する。
- (2).(1)のコーパスを使用し、学習者が産出した日本語音声について、母語話者自身の産出した音声と詳細に比較対照し、より広い視野に立って異同を実証的かつ多角的に検証する。母語話者自身の不全性を実証的に明らかにしつつ、音声教育シラバスの見直しを図る。

- (3).(1)(2)で得られた成果を考察し、日本語音声教育の現場に、より現実的な目標および方法として提示する。
- (4).(2)(3)の成果の一部は、教育現場のみならず、広く日本語社会一般にも発信し、日本語学習者の音声について、より柔軟かつ公平な理解を求める。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本音声学会・評議員	1998年4月～2010年3月
同上・理事	2004年4月～2007年3月
同上・編集委員長	2004年4月～2007年3月
日本国際学習支援協会 国際交流基金・「日本語能力試験」試験小委員会 主任アドバイザー	2003年10月～現在
言語文化教育学会・理事	2002年9月～現在
日本国際学習支援協会・「日本語教育能力検定試験」実施委員会委員	1998年4月～現在
国際交流基金関西国際センター・事業協力委員	2000年4月～2006年3月

3. 工藤 眞由美 教授

1949年生。東京大学大学院人文科学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学、大阪大学、1999年)。横浜国立大学教育学部講師、同助教授を経て、1998年4月より現職。専攻：現代日本語文法論。

3-1. 論文

- 工藤眞由美 「文の対象的内容・モダリティー・テンポラリティーの相関性をめぐって」『ことばの科学 11』むぎ書房, pp. 139-182, 2006/3
- 工藤眞由美 「グローバルな視点からの日本語研究」『東方語言文化論叢』4, 華南理工大学出版社, pp. 9-22, 2006/3
- 工藤眞由美 「「ヨウダ」「ラシイ」とテンス」『日語研究』3, 商務印書館, pp. 1-24, 2005/10
- 工藤眞由美 「グローバルジャパンにおける日本語学のあり方」『日語日文学研究(日本語学・日本語教育学篇)』53-1, 韓国日語日文学会, pp. 1-11, 2005/5
- 工藤眞由美, 佐藤里美, 八亀裕美 「体験的過去をめぐって——宮城県登米郡中田町方言の述語構造——」『阪大日本語研究』17, pp. 1-25, 2005/2
- 八亀裕美, 佐藤里美, 工藤眞由美 「宮城県登米郡中田町方言の述語のパラダイム——方言のアスペクト・テンス・ムード体系記述の試み——」『日本語の研究』1-1(通巻 220), 日本語学会, pp. 51-64, 2005/1
- 工藤眞由美 「現代語のテンス・アスペクト」『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』朝倉書店, pp. 172-192, 2004/6

3-2. 著書

- 工藤眞由美他『方言における述語構造の類型的研究 II』科学研究費報告書, 2006/3
- 工藤眞由美他『言語の接触と混交 ブラジル日系社会言語調査報告』大阪大学 21世紀 COEプログラム「インターフェースの人文学」2006/2
- 工藤眞由美他「方言における述語構造の類型論的研究」科学研究費報告書, 2005/3
- 工藤眞由美他「方言における述語構造の類型論的研究」科学研究費報告書 CD-ROM版, 2005/3
- 工藤眞由美他『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系——標準語研究を超えて——』ひつじ書房, 2004/11

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 工藤眞由美 「言語行動の歴史」(pp. 463-4)「テンスの研究」(pp. 587-588)「アスペクトの研究」(pp. 578-579)『日本語教

3-4. 口頭発表

工藤眞由美 「日本語のさまざまなアスペクト体系が提起するもの」 日本語文法学会シンポジウム, 明海大学, 2005/11

工藤眞由美 「日本語の文法構造のバリエーションと言語類型論」 北京日本語学研究センター講演, 2005/11

工藤眞由美 「日本語の表現とモダリティー」 北京大学講演, 2005/10

工藤眞由美 「ブラジル日系移民における言語とジェンダー」 チュービンゲン大学, 2005/9

KUDO Mayumi "Time, cognition and emotion. The use of the past tense in Japanese" 11th International Conference, European Association for Japanese Studies, University of Vienn, 2005/9

工藤眞由美 「複数の日本語と日本語教育」『中国大学日語教育国際シンポジウム』西安交通大学講演, 2005/8

工藤眞由美 「日本語のアスペクト」『中日国際シンポジウム』アモイ大学講演, 2004/12

工藤眞由美 「グローバルジャパンにおける日本語学のあり方」『韓国日語日文学会 2004 年度国際学術シンポジウム』2004/12

工藤眞由美 「現代日本語のアスペクト——基本的な意味と派生的な意味・機能——」華東師範大学講演, 2004/11

工藤眞由美 「日本語文法と日本語教育——名詞・動詞・格を中心に——」華東師範大学講演, 2004/11

工藤眞由美 「時間・認識・感情——現代日本語研究の視点から——」『中・日・韓日本言語文化研究国際フォーラム』大連大学講演, 2004/7

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003 年度～2005 年度、基盤研究(B)(1)、代表者：工藤眞由美

課題番号：15320056

研究題目：方言の述語構造の類型論的研究

研究経費：2004 年度 5,400 千円

2005 年度 4,700 千円

研究の目的：

本研究は、(1)欧米における動詞述語、名詞述語、形容詞述語に関する類型論的研究の優れた成果を視野に入れ、(2)東北から沖縄に至るまでの全国諸方言の述語構造を「統一した枠組み」に基づいて記述し、(3)共通する(普遍的)側面と相違する側面とから、共時的バリエーションと通時の変化を考慮したタイプ化を行い、(4)文の中核をなす述語構造に基づく分布図を描き出そうとするものである。(5)伝統的方言体系の変化と標準語の浸透による言語接触の社会言語学的観点からの本格的アプローチも実施し、言語接触論への新たな展望も切り開く。

3-6-2. 2004 年度～2005 年度、萌芽研究、代表者：工藤眞由美

課題番号：16652032

研究題目：ブラジル沖縄系移民社会における言語接触

研究経費：2004 年度 1,900 千円

2005 年度 1,400 千円

研究の目的：

多様化した「日本語」の一つとして把握される、移民社会や多言語文化圏の中での日本語の実態に注目すべきことは、言語学のみならず文化人類学など人文諸科学における共通理解ともなっている状況である。その中でもブラジル日系移民の日本語に至っては、その移民構成員の多くが沖縄系であることから、琉球方言といった沖縄の言語を考慮する必要があるため、精緻な理論的枠組みと臆断を排した実証的研究が大いに望まれているところであった。本研究はかかる状況から

ブラジル沖縄系移民社会における日本語の問題を、言語接触の立場から、包括的に考察を試みようとするものである。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 21世紀COEプログラム分担

3-8. 学会役員等の引き受け状況

独立行政法人国語研究所・監事	2005年～現在
日本語文法学会・評議員	2000年～現在
国語学会・評議員	1996年～現在

4. 青木 直子 教授

1983年、上智大学外国語学研究科言語学専攻博士課程前期修了。PhD(Trinity College, Dublin, 2003年)。産能短期大学助教授、静岡大学教育学部助教授、大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻：第二言語教育学。

4-1. 論文

Aoki, Naoko, "Teachers' conversation with partial autobiographies", *The Teacher Trainer*, 18(3), pp. 3-8, 2004/9
(Hong Kong Journal of Applied Linguistics より転載)

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

青木直子「自律学習」『新版日本語教育事典』大修館書店, pp. 773-775, 2005/10

4-4. 口頭発表

Aoki, Naoko, "Second language user autonomy: Just a neologism or transformation of our practice?" Independent Learning Association Oceania Conference 2005, 2005/9

青木直子「学習者オートノミー」2004年度第11回日本語教育学会研究集会講演, 2005/3

青木直子「ナラティブ・モードの研究の意義と方法」ヴィゴツキー学ワークショップ, 2004/8

Aoki, Naoko, "Histories and aspirations: Reflecting on our learner autonomy practice and development as a pro-autonomy teacher", Keynote speech at *Autonomy and Language Learning: Maintaining Control*, 2004/6

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

兵庫日本語ボランティアネットワーク「もくもく会」・アドバイザー	2003年12月～現在
国立国語研究所・日本語教育上級研修講師	2005年4月～2006年3月

日本学術振興会・科学研究費委員会専門委員
日本語教育国際研究大会・研究発表セッション(自律学習)司会

2003年4月～2005年3月
2004年8月

5. 石井 正彦 助教授

1958年生。1983年、東北大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(東北大学、1983年)。国立国語研究所研究員、同室長を経て、1999年10月より現職。専攻：日本語学／計量言語学。

5-1. 論文

石井正彦「語構成研究と連語」『国文学解釈と鑑賞』70-7, pp. 130-140, 2005/7

石井正彦「現代日本語語彙の『中心』と『周縁』——語彙の構造を動的にとらえる——」『日語日文学研究』50-1, pp. 1-18, 2004/8

5-2. 著書

多門靖容・半沢幹一編, 石井正彦『ケーススタディ日本語の表現』おうふう, 2005/11

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

石井正彦「コーパス言語学と『キーワード』」『言語』33-12, pp. 90-91, 2004/12

石井正彦「日本語の学習サイト」『言語』33-6, pp. 70-71, 2004/6

5-4. 口頭発表

石井正彦「現代日本語語彙の『中心』と『周縁』——語彙の構造を動的にとらえる——」韓国日語日文学会・2004年度国際学術大会, 2004/6

石井正彦「日本語コーパス言語学における探索的データ解析の有用性」漢語語彙学第1回国際学術シンポジウム, 2004/4

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者：石井正彦

課題番号：15520289

研究題目：探索的データ解析による日本語研究法の開発

研究経費：2004年度 1,200千円

2005年度 600千円

研究の目的：

本研究は、(a)「探索的データ解析」という統計手法が日本語研究において有効な分析ツールとなることを、これまでの計量的日本語研究の成果・知見を検証・追試することによって確認し、その上で、(b)探索的データ解析が用意する一連の手法のうちのどれが、日本語についてのどのような調査・研究に利用可能であるのかを、独自に用意したコーパスを試料として明らかにすることによって、(c)日本語研究における探索的データ解析の利用法を、具体的な事例に基づいた手引書としてまとめることを目的とする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

情報知識学会・理事

2003年4月～2005年3月

6. 渋谷 勝己 助教授

1959年生。東京外国語大学外国語学研究所日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学、1990)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授を経て、1996年10月より現職。専攻：日本語学。

6-1. 論文

渋谷勝己「過去回想表現」『方言文法調査ガイドブック 2』(科研報告書), pp. 115-35, 2006/3

渋谷勝己, 澤村美幸, 大久保拓磨, 松丸真大「山形市方言の文末詞シタ——ベシタ・ガシタの用法にもとづいて——」『大日本語研究』18, pp. 1-21, 2006/3

渋谷勝己「日本語可能形式にみる文法化の諸相」『日本語の研究』1-3, pp. 32-45, 2005/7

渋谷勝己「山形市方言のモダリティ形式『ッダ』」『阪大社会言語学研究ノート』7, pp. 51-61, 2005/3

渋谷勝己「大阪人は大阪弁をどう思っているか」『日本語学』23-11, pp. 18-26, 2004/9

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渋谷勝己「戦後の日本語政策」「ミクロネシアの日本語」「言語交替・維持・喪失」「コード切り替え」「中間言語」真田信治, 庄司博史編『事典 日本の多言語社会』岩波書店, 2005/10

渋谷勝己「自発」「可能文に用いられる形式」「可能文の諸特徴」「日本語の流れ」「現代の言語変化」「バリエーション」「海外の日本語」「現代日本の言語政策」「ヴァリエーション理論」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』大修館書店, 2005/9

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 学会役員等の引き受け状況

第二言語習得研究会・ジャーナル委員長	2006年1月～2007年12月
同・編集委員	2004年1月～2005年12月
日本語政策学会・理事	2002年11月～現在
日本語教育学会・査読委員	2003年1月～2006年12月
国語学会／日本語学会・常任査読委員	2003年6月～2006年6月
日本語学会・大会運営委員	2003年4月～2006年3月

7. 松丸 真大 助手

1973年生。1997年、国際基督教大学教養学部卒業。2001年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。2004年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。修士(文学)。2004年より大阪大学大学院文学研究科助手。専門：社会言語学／方言学。

7-1. 論文

渋谷勝己, 澤村美幸, 大久保拓磨, 松丸真大「山形市方言の文末詞シタ——ベシタ・ガシタの意味にもとづいて——」『阪大日本語研究』18, pp. 1-21, 2006/2

松丸真大「奄美方言話者の使用する文末詞『よね』の特徴」真田信治編『奄美』(2003年度～2005年度科学研究費補助金「基盤研究(C)薩南諸島におけるネオ方言(中間方言)の実態調査」研究成果報告書), pp. 36-52, 2006/2

住川健一, 松丸真大「奄美方言話者の使用する丁寧形式『デス』『マス』の特徴」真田信治編『奄美』(2003年度～2005年度科学研究費補助金「基盤研究(C)薩南諸島におけるネオ方言(中間方言)の実態調査」研究成果報告書), pp. 86-95, 2006/2

松丸真大「島根県松江市方言のガ系文末詞」『阪大社会言語学ノート』7, pp. 62-72, 2005/3

7-2. 著書

中井精一編『社会言語学の調査と研究技法——フィールドワークとデータ整理の基本——』おうふう(担当：第3章第3節；阿部貴人と共著、第4章第1節；鳥谷善史と共著、第6章；単著), 2005/4

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

真田信治編『社会言語学の展望』くろしお出版(担当：6-1；田原広史と共著、6-2；ダニエル・ロング、テーヤ・オストハイダと共著), 2006/3

松丸真大「言語と社会の関係」『日本語教育能力検定試験に合格するための本 2006』アルク, pp. 94-101, 2005/5

7-4. 口頭発表

松丸真大「文法から見た方言類型・区画と社会言語学」日本海総合研究プロジェクト 2004年度第2回公開研究会「日本の社会言語学——新しい学の創造にむけた富山からの提言——」2004/12/18

松丸真大『「新修豊中市史」の言語資料とGIS』第23回西日本国語国文学データベース研究会, 2004/6/12

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 学会役員等の引き受け状況

日本方言研究会・事務局長

2004年12月～2005年12月

2-21 美学・文芸学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野では、おもに四つの方向で研究が行われている。第一に、古代から現代にいたる美学・芸術学の基本的な理論を、原典に即して比較研究の視点から研究すること。第二に、時代とともに変貌を続ける美的現象および芸術的造形を、事象に即して比較分析し考察すること。第三に、おなじく地域や時代によって異なったデザインの作品史や理論を、実証的に究明すること。第四に、西洋古典文学(ギリシア・ラテン文学)と古典文化を基礎としつつ、中世・近代の各国文学を、普遍的かつ体系的に研究すること。このような研究をおしすすめる上で、本講座は「美学」と「文芸学」の二つの研究室からなる。美学研究室は、ドイツ系、フランス系、英米系の領域を主とする専任教員からなり、また文芸学研究室は、西洋古代の美学思想と文芸理論(レトリック)を専門とする専任教員で、構成されている。したがって本講座は、文化系統別の美学教育・研究分野を網羅する、稀有の整った体制を有し、これが第一の特色となっている。しかしまた、教員たちの研究テーマはこれら文化系統を超えて、日本の美学、造形芸術、映画とパフォーマンス・アーツ、建築を含む各種デザイン、各種文学、風景論、工芸論とにわたり、その全体としての幅広さが第二の特色となる。さらに、第一、第二の特色を活かした種々の共同研究の体制が生まれ、学内の CSCD(コミュニケーション・デザインセンター)との連携をも密にした研究プロジェクトが推進されている。これが第三の特色となっている。このような特色と理念を有する教育・研究組織は、全国の大学の中でもユニークであると言わねばならない。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 3 助教授 2 講師 0 助手 1

教授：大橋 良介、上倉 庸敬、藤田 治彦

助教授：内田 次信、加藤 浩、

助手：渡辺 浩司

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
37	17	20	0	2	0	1	0	0

※うち留学生 2 名、社会人学生 2 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	9	3	0	0	0
'05	10	6	0	1	0
小計	19	9	0	1	0

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	0	0	0
'05	0	1	1
計	0	1	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【論文博士】

梅沢啓一「感性と造形表現——その発達のメカニズム」2005/6

主査：大橋良介 副査：上倉庸敬、藤田治彦

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	4	0	0	0	0	4
'05	1	0	0	0	0	1
計	5	0	0	0	0	5

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	1	12	0	0	0	13
'05	1	12	3	0	0	16
計	2	24	3	0	0	29

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

猪谷聡「工芸における‘製作’という概念——民芸理論に関する一考察——」『藝術研究』17, pp. 43-50, 2004/7

高橋奈保子「芥川の墨画と人文的風流」『待兼山論叢』(美学篇), 38, pp. 53-74, 2004/12

平井直子「イタリア合理主義建築——G・テラーニ、フィジーニとポッリーニを中心に」『フィロカリア』21, pp. 1-33, 2005/3

松友知香子「ブルーノ・タウト 旧日向邸について」『鹿島美術研究年報』22, 鹿島美術財団, pp. 214-223, 2005/3

【2005年度】

萩原康一郎「物語的理解と自己同一性——ポール・リクール『時間と物語』を中心に」『文芸学研究』10, 文芸学研究会, pp. 21-48, 2006/3

(2)口頭発表

【2004年度】

生島美紀子「アルチュール・オネゲルの旋律志向——《交響曲第1番》《第3番典礼風》創作における旋律性の探求」美学会西部会第250回研究発表会, 美学会, 大阪大学/大阪, 2004/9/25

石黒義昭「ハイデガーの思惟における音楽と思索」実存思想協会・ドイツ観念論協会第13回合同シンポジウム, 京都工芸繊維大学, 実存思想協会・ドイツ観念論研究会, 2004/6/27

井上由里子「ヴァレール・ノヴァリナにおける言葉の物質性——『時間に住むあなた』とポストドラマへの視座」第55回美学会全国大会・若手研究者フォーラム, 京都工業繊維大学/京都, 2004/10/10

猪谷聡「吉田璋也論」意匠学会, 大阪市立デザイン教育研究所, 2004/7/24

大塚美左恵「ミケル・デュフレヌにおける情感的アプリオリについて」第55回美学会全国大会, 京都工芸繊維大学, 2004/10/10

堂尾知里「猪熊弦一郎再考」第55回美学会全国大会若手研究者発表枠, 京都工芸繊維大学/京都, 2004/10/9

萩原康一郎「物語が生まれる前に——「前物語」における行動の先行理解について」美学会全国大会・若手フォーラム, 京都工業繊維大学(京都), 2004/10/10

春木有亮「エティエンヌ・スーリオは芸術作品をどのようにとらえたか」第55回美学会全国大会, 京都工芸繊維大学, 2004/10/10

平光睦子「明治期の工芸論における『嗜好』と『流行』——京都での展開から」第55回美学会全国大会, 美学会, 京都工芸繊維大学/京都, 2004/10/11

平井直子「ミラノの近代建築と『場所』性——フィジーニ+ポッリーニ、G・テラーニ、G・ポンティの建築と1920年代、30年代の都市」美学会西部会第252回研究発表会, 京都大学, 2004/12/11

松友知香子「パウル・クレーの色彩と形態」第55回美学会全国大会・若手研究者フォーラム, 京都工芸繊維大学/京都, 2004/10/10

孟白麗「南宋修内司官窯の青磁について——杭州老虎洞窯址出土品を中心に」意匠学会, 京都工芸繊維大学/京都, 2004/6/5

林承緯「台湾民間の縁起物および庶民精神」第2回台湾文化研究発表会, 拓殖大学, 東京, 2004/6/6

【2005年度】

井上由里子『ノヴァリナ演劇における否定性——「飛行する工場」をめぐる』文芸学研究会, 大阪大学, 2005/12/23

井上由里子『V. ノヴァリナのことばの演劇——「飛行する工場」から「時間を住むあなた」へ』近現代演劇研究会, 大阪大学, 2005/5/14

岡本梓「ジェイコブ・ローレンスにみるアフリカ系アメリカ人の芸術性」第56回美学全国大会・若手フォーラム, 慶応義塾大学, 2005/10/8

- 金相美「ジュエリー：その意味とデザインの変遷——19世紀を中心に」意匠学会第47回大会若手研究者発表, 京都嵯峨芸術大学, 2005/11/11
- 金聖恵「つか芝居の独自性」第56回美学会全国大会, 慶應義塾大学, 2005/10/8
- 清澤暁子『『美術評論』における作品批評「無扉門」の批評精神——岩村透の発言を中心に』第56回美学会全国大会若手研究者フォーラム, 慶應義塾大学, 2005/10/8
- 高山由佳「レイナー・バナムの建築批評について——環境としての建築とテクノロジーへの問いかけ——」意匠学会第47回大会若手研究者発表会, 京都嵯峨芸術大学, 2005/11/11
- 佐々木優「聴取の側からのノイズ——大友良英をめぐる」美学会西部会第254回研究発表会, 同志社大学, 2005/7/2
- 島本英明「肯定性としての「彫刻」性 R.E.クラウスの「否定性」を踏まえて」第56回美学会全国大会, 慶應義塾大学, 2005/10/8
- 中野逸雄「アーダルベルト・シュティフターの視覚 その文体と共感覚」2005年度美学会, 全国大会若手フォーラム, 慶應義塾大学, 2005/10/8
- 萩原康一郎「物語的理解と自己同一性——ポール・リクール『時間と物語』を中心に」第24回文芸学研究会, 神戸大学, 2005/9/10
- 松友知香子「パウル・クレーの都市画について」美学会第56回全国大会, 慶應義塾大学, 2005/10/10
- 松友知香子「ブルーノ・タウトの建築と色彩 タウトにおける東洋的なものと西洋的なもの」意匠学会第184回研究例会, 武庫川女子大学, 2005/7/23
- 楊氷「帰国直後の内田吐夢——『血槍富士』から『たそがれ酒場』へ」待兼山芸術学会, 大阪大学, 2005/4/9
- 林承緯「柳宗悦が見た台湾民芸」意匠学会第47回全国大会, 京都嵯峨芸術大学, 2005/11/13
- 林承緯「北台湾の祭りにみる民俗文化の再生」第四回台湾文化発表会, 台北, 2005/11/6

(3)その他(書評・翻訳など)

【2004年度】

- 秋岡啓子「鹿田淳史 モニュメント・近松門左衛門へのオマージュ」(尼崎市)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/9/8
- 生島美紀子「かぶとやま交響楽団<協奏曲の愉しみ>」(いずみホール)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/9
- 生島美紀子「アンサンブル・カプリスの第8回演奏会」(神戸うはらホール)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/6/2
- 池田(村田)葉子「ウェンディ・シュイ・ウォン論考」(翻訳)国際デザイン史論研究誌『デザイン・ディスコース』304号別冊, 2004/5
- 井上由里子「滋賀・佐川美術館 佐藤忠良の彫刻 人間の深奥に迫る」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/1/26
- 井上由里子「「人間とは何か」問う 劇団「維新派」新作の『キートン』」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/11/24
- 猪谷聡「いのちを考える」展(伊丹市立美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/9/1
- 猪谷聡「いきもの図鑑 牧野四子吉の世界」(大阪市立自然史博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/5/26
- 大塚美左恵「現代美術はこう見る 京都国立近代美術館 痕跡——戦後美術における身体と思考展」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/12/15
- 岡本梓「「ロートレック賛歌——ポスター芸術の魅力——」展批評」『美学研究』4, pp. 87-89, 2005/3/31
- 岡本梓「「日本漫画映画の全貌展」観客に届く豊かな想像世界」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/1/12
- 清澤暁子「新鮮によみがえる映画「映画がいっぱい——和田誠シネマランド」KPO キリンプラザ大阪」『大阪日日新聞』

- 「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/3/23
- 清澤暁子『『光の教会』日本基督教団茨木春日丘教会』『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/10/6
- 金聖恵「野田秀樹の「若い」芝居に対する挑戦 「走れメルス——少女の唇からダイナマイト！——」」『美学研究』4, pp. 83-85, 2005/3/31
- 金聖恵「意味あるグロテスク 大阪府立青少年会館プラネットステーション 「アジサイ天使」」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/11/10
- 金相美「中東のイメージを再考「アラビアンナイト大博覧会」展」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/11/17
- 佐伯瑠理子「八木一夫」展(京都国立近代美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/10/20
- 佐伯瑠理子「『睡蓮2004 森ヲ アツメル 山荘で過ごす夏』北尾博史が誘う想像の『森』」展(アサヒビール大山崎山荘美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/8/4
- 櫻間裕子「滋賀県立近代美術館「センシビリア」展について」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/3/15
- 佐々木優「Under1945 共生する美術」(京都芸術センター)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/7/14
- 島本英明「兵庫県立美術館コレクション展Ⅱ」(兵庫県立美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/8/11
- 島本英明「『壁ヲ通過スル。』展」(芦屋市立美術博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/5/19
- 島本英明「堀内正和展」(京都国立近代美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/4/14
- 城崎有沙「『作家からの贈りもの展』」(大丸ミュージアム・梅田)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/8/25
- 城崎有沙「特別展示『京の町家・夏のしつらえ』」(紫織庵)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/6/30
- 高山由佳「「アーキグラムの実験建築 1961—1974」展と「アーキラボ 建築・都市・アートの新たな実験展 1950—2005」展」『美学研究』4, pp. 96-100, 2005/3/31
- 高山由佳「<中村真木「パッサジオ」>」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/10/13
- 堂尾知里「「ジャック・カロ版画展」表情や動き線で表現」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/2/23
- 堂尾知里「没後30年、福田平八郎展」(西宮市大谷記念美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/11/3
- 堂尾知里「Reflection——山崎つる子展」(芦屋市立美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/8/18
- 堂尾知里「大チャンバラ祭」(京都映画祭開催イベント)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/5/12
- 萩原康一郎「馬野訓子「The Proof of Our Existence」展 音と影像の洪水 エジンバラお風景」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/3/9
- 萩原康一郎「「INDEXLESS——ノブのないドア」展 注目すべき日比野の作品」(アサヒビール大山崎山荘美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/12/22
- 萩原康一郎「白隠 禅と書画」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/6/9
- 春木有亮「高橋直樹「明日香むらの吹きガラス展」 もらったイメージ村へ還元」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/3/2
- 平井直子「写真の内と外に空間 芦屋市立美術博物館「震災から十年 米田知子」展」2005/3/16
- 平井直子「大阪府立中之島図書館」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/5/5
- 平光睦子「高島華宵展 大正・昭和☆レトロ・ビューティー」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/4/21
- 松友知香子「本田宗一郎と井深大展」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/2/9
- 楊氷「横山大観の美術展について」(京都国立近代博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2004/7/28
- 吉田馨「山田知事とざっくばらんに」『Leaf5月号』pp. 57-59, 2005/3/25
- 吉田馨「『ローレイ』 嫌味なく味わいすっきり」『信濃毎日新聞』<シネマの味かた> p. 20, 2005/3/17
- 吉田馨「『パッチギ!』 心にしみる素顔の京都」『信濃毎日新聞』<シネマの味かた> p. 24, 2005/2/17
- 吉田馨「『TAXY NY』 心をうばう「走る」快感」『信濃毎日新聞』<シネマの味かた> p. 20, 2005/1/20

吉田馨 『『Mr.インクレディブル』家族愛で闘うヒーロー』『信濃毎日新聞』〈シネマの味かた〉 p. 13, 2004/12/23

吉田馨 「第47回朝日ベストテン映画祭講評」『朝日新聞』 p. 2, 2004/12/10

吉田馨 『『隠し剣 鬼の爪』京都の風格薫る時代劇』『信濃毎日新聞』〈シネマの味かた〉 p. 13, 2004/11/25

吉田馨 「中島貞夫監督特集上映トーク 中島貞夫 VS 上倉庸敬&吉田馨」シネ・ヌーヴォ, 2004/10/31

吉田馨 『『スウィングガールズ』ジャズの魔法にかかる』『信濃毎日新聞』〈シネマの味かた〉 p. 20, 2004/10/28

吉田馨 『『青空天使』敗戦5年後の夢物語』『信濃毎日新聞』〈映画の缶づめ〉 p. 13, 2004/9/30

吉田馨 「第4回新京極映画祭『遊撃の美学』映画監督中島貞夫に聞く・映画愛」誓願寺境内, 2004/9/24

吉田馨 「YAMAMORI ラジオ」KBS 京都放送, 2004/9/20

吉田馨 「ザ・ワイド」日本テレビ, 2004/9/20

吉田馨 「情報ツウ」読売テレビ, 2004/9/20

吉田馨 「武部博の日曜トーク」KBS 京都放送, 2004/9/19

吉田馨 「得だねテレビ」KBS 京都放送, 2004/9/17

吉田馨 「京都映画祭ガイド」(13回シリーズ), 京都三条ラジオカフェ, 2004/9/1-9/17

吉田馨 「京都まんまんなか最新案内」『関西ウォーカー』 pp. 56-57, 2004/9/15

吉田馨 「市民手作りの京都映画祭」『毎日新聞』 p. 25, 2004/9/15

吉田馨 「みやびじょんワイド」みやびじょん, 2004/9/10

吉田馨 「京都ちゃちゃちゃっ！」KBS 京都放送, 2004/9/9

吉田馨 『『誰も知らない』4人の生静かに激しく』『信濃毎日新聞』〈映画の缶づめ〉 p. 13, 2004/9/2

吉田馨 「今年もやります！新京極映画祭」京都三条ラジオカフェ, 2004/8/30

吉田馨 「第4回京都映画祭『ターンオーバー』トーク」つたや, 2004/8/26

吉田馨 『『LOVERS』壮大な美の迷宮 満悦の悦び』『信濃毎日新聞』〈映画の缶づめ〉 p. 13, 2004/8/5

吉田馨 『『メダリオン』ジャッキー50本目ももはや不滅』『信濃毎日新聞』〈映画の缶づめ〉 p. 26, 2004/7/8

吉田馨 『『カレンダー・ガールズ』裸になった淑女たち』『信濃毎日新聞』〈映画の缶づめ〉 p. 20, 2004/6/10

吉田馨 「銀幕の湖国出版」『朝日新聞』〈あいあい広場〉 p. 3, 2004/6/9

吉田馨 『『ピーター・パン』夢見る心いつまでも』『信濃毎日新聞』〈映画の缶づめ〉 p. 20, 2004/5/13

吉田馨 「YAMAMORI ラジオ！」KBS 京都放送, 2004/5/4

吉田馨 「真夜中の京都映画祭」(6回シリーズ), 京都三条ラジオカフェ, 2004/4/28-5/3

吉田馨 『『恋愛適齢期』名優競演・大人の喜劇』『信濃毎日新聞』〈映画の缶づめ〉 p. 13, 2004/4/8

吉田馨 「海の撮影は琵琶湖で・京都映画人に聞き取り」『朝日新聞』〈テーブルトーク〉 p. 13, 2004/4/8

林承緯 「台湾の縁起物について」『PACIFIC TIMES』米国 ロサンゼルス, 2004/7/12

【2005年度】

猪谷聡 「土地柄に触れる機縁——上方浮世絵館」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2006/3/29

猪谷聡 「いのちを考える——伊丹市立美術館企画展」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/8/17

大西正洋 「梅田換気塔」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/11/23

大西正洋 「映画『アラキメンタリ』」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/5/18

岡本梓 「第124「大丸ミュージアム KOBE「日本漫画映画の全貌」展——観客に届く豊かな想像世界」」 p. 9, 2006/1/12

岡本梓 「第171「姫路市立美術館「ケーテ・コルヴィッツ」展——深い母性愛 平和訴え」」 p. 9, 2005/12/21

岡本梓 「第150「神戸しあわせの村 光の彫刻塔——孤高に希望を表現」」 p. 9, 2005/7/20

金聖恵 「——TeamARAGOTO『エビ大王』——どこまで通じる海外公演」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2006/2/8

金聖恵 「妖艶な女性にドキッ劇団『ラックシステム』公演、東學が描くチラシ」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/4/6

清澤暁子、国立国際美術館 「もの派——再考」展、関西美術探訪、『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/12/14

- 清澤暁子「光・水辺の球——大久保英治 西宮市大谷記念美術館展」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」
2005/7/27
- 黒田誠二郎「御堂筋でデ・キリコを見る」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/8/3
- 佐々木優『転換期の作法：ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリーの現代美術』国立国際美術館『大阪日日新聞』
「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/9/5
- 島本英明「Yoshitomo Nara + graf home 展についての批評」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」
2006/1/25
- 島本英明「芦屋市立美術館主催ホールワークショップについての批評」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学
研究室」2005/8/24
- 高橋直子「行基菩薩の噴水」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/10/26
- 中川禎子「ミュシャ展」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2006/1/11
- 中川禎子「白鳥の泉——伊丹市役所モニュメント」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/11/9
- 中川禎子(翻訳)ジル・ゴールズワージー「トインビー・ホールのボランティヤ・レジデント」『倉敷 2005「芸術と福祉」
国際会議論集』pp. 209-214, 倉敷 2005「芸術と福祉」国際会議実行委員会 デザイン史フォーラム, 2005/7/26
- 中野逸雄「プーシキン美術館展」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2006/2/15
- 中野逸雄「国宝薬師如来坐像」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/8/31
- 那須木綿子(展覧会評)「魅惑の16-17世紀フランス絵画」展『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」
p. 17, 2006/1/18
- 那須木綿子(論評)「エキスポタワー跡地の「タワーオブライフ」」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」
p. 17, 2005/9/21
- 松友知香子「永観堂禅林寺」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/11/30
- 柳楽あや「ongaloo feat. video manoo」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2006/2/1
- 柳楽あや「堂本尚郎点」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/11/16
- 柳楽あや(翻訳), 鶴岡真弓「Celtic Revival and Arts and Crafts Movement in Ireland and Scotland」『倉敷 2005「芸術
と福祉」国際会議』pp. 19-20, 倉敷 2005「芸術と福祉」国際会議実行委員会 デザイン史フォーラム, 2005/7/26
- 春木有亮「パウラ・モーダーゾーン=ベッカーとヴォルプスヴェーデの画家たち展 感情の揺れ突き抜けた表情」『大阪日
日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/9/14
- 楊氷「豊満すぎる唐美人の謎」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/6/8
- 横道仁志「天使と人間の弁証法」飛浩隆人間学小論, SFJAPAN, 徳間書店, pp. 26-31, 2006/3/31
- 横道仁志『「鳥姫伝」評論——断絶にかかる一本の橋——』『SFマガジン』早川書房, pp. 262-290, 2006/2/25
- 横道仁志「大徳寺黄梅院」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/12/7
- 横道仁志「ルーブル美術館展」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/10/19
- 横道仁志「飛田百番」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/8/10
- 吉田馨「特撮で空想の世界具現化——『ナルニア国物語・第1章ライオンと魔女』」『信濃毎日新聞』「映画の味かた」
2006/3/16
- 吉田馨「京都市美術館コレクション展・花鳥風月の変貌」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2006/3/1
- 吉田馨「覆面剣士の妻子も活躍——『レジェンド・オブ・ゼロ』」『信濃毎日新聞』「映画の味かた」2006/2/16
- 吉田馨「監督賞・音楽賞受賞理由」『第1回おおさかシネマフェスティバル 公式パンフレット』2006/2/3
- 吉田馨「スター集合の娯楽作——『THE 有頂天ホテル』」『信濃毎日新聞』「映画の味かた」2006/1/19
- 吉田馨「東映京都撮影所の意地——大和に託す」『大阪日日新聞』2006/1/1
- 吉田馨「京都市立美術館特別展・修羅と菩薩のあいだで」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2005/12/28
- 吉田馨「現実とは違う風俗絵巻——『SAYURI』」『信濃毎日新聞』「映画の味かた」2005/12/22
- 吉田馨「東映京都撮影所の意地——大和に託す」『大阪日日新聞』2005/12/20
- 吉田馨「童話ちりばめた冒険物語——『ブラザーズ・グリム』」『信濃毎日新聞』「映画の味かた」2005/11/24

吉田馨 「7年ぶり かわらぬパワー——『まだまだあぶない刑事』『信濃毎日新聞』「映画の味かた」 2005/10/27
 吉田馨 「日本人の清い心情描く『蝉しぐれ』『信濃毎日新聞』「映画の味かた」 2005/9/29
 吉田馨 「流行発信の「力」ある——『奥さまは魔女』『信濃毎日新聞』「映画の味かた」 2005/9/1
 吉田馨 「信じあう心の大切さ——『星になった少年』『信濃毎日新聞』「映画の味かた」 2005/8/4
 吉田馨 「京の優雅～小袖と屏風～千總コレクション」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」 2005/7/13
 吉田馨 「心癒す家族とピアノ——『ダニー・ザ・ドッグ』『信濃毎日新聞』「映画の味かた」 2005/7/7
 吉田馨 「終盤に静かな愛のドラマ——『ミリオンダラー・ベイビー』『信濃毎日新聞』「映画の味かた」 2005/6/9
 吉田馨 「踊れば幸せ、米国流賛美——『Shall We Dance?』『信濃毎日新聞』「映画の味かた」 2005/5/12
 吉田馨 「緻密に計算、深い余韻——『インファナル・アフェア』『信濃毎日新聞』「映画の味かた」 2005/4/14

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

横道仁志 第1回日本SF評論賞(『鳥姫伝』評論——断絶に架かる一本の橋——), 日本SF作家クラブ, 2005/12/24

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004年度 学部：0名 大学院：4名 (計4名)

2005年度 学部：0名 大学院：2名 (計2名)

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度～2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004年度～2005年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2004年度：0名 2005年度：1名

<内訳> システムエンジニア 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2004年度 『美学研究』
 『文芸学研究』
 『フィロカリア』
 2005年度 『美学研究』
 『文芸学研究』
 『フィロカリア』

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際デザイン史フォーラム事務局

2004年度～2005年度

民族藝術学会事務局	2004年度～2005年度
待兼山芸術学会事務局	2004年度～2005年度
意匠学会事務局	2005年度
文芸学研究会事務局(2004年度～2005年度)	
第25回研究発表会	2005年12月23日
『文芸学研究』第9号合評会	2005年6月25日
第21回研究発表会	2004年12月23日
『文芸学研究』第8号合評会	2004年5月1日
美学会西部会	
第255回研究発表会	2005年10月1日
第250回研究発表会	2004年9月25日
日独哲学シンポジウム	2006年3月28日・29日
第2回セツルメント運動史国際会議	2005年7月28日・29日
第5回アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議	2005年7月26日・27日
国際デザイン史フォーラム「芸術・コミュニケーション・デザイン」	2005年3月14日・15日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

待兼山芸術学会誌『フィロカリア』第23号刊行	2006年3月27日
待兼山芸術学会 第15回研究発表会	2005年4月9日
待兼山芸術学会誌『フィロカリア』第22号刊行	2005年3月27日
待兼山芸術学会 第14回研究発表会	2004年4月17日

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

美学研究室は大橋教授が赴任して以来、2年間、教授3名、助手代理1名ないし2名、非常勤講師1名という体制で運営されてきた。大橋教授は各種の国際シンポジウム(ベルリン、2004年9月など)の議長のほか、国際ヘーゲル学会理事、国際インターカルチャー哲学会副会長を務めるなど、国際的にも広く活動し、多数の著作活動と併せて高く評価されてきた。上倉教授はおもにフランス美学と映画の教育・研究に取り組み、映画界との提携も踏まえて、現場での実践教育にまで踏みこんだ意欲的な研究活動を展開している。藤田教授は環境美学を中心とする英米美学とデザインや工芸に関する教育・研究を展開している。2005年に国際デザイン史フォーラムを開催し、その成果を『国際デザイン史』『アーツ・アンド・クラフツと日本』等として刊行した。2004年度からは科学研究費補助金基盤研究(B)「近代工芸運動の総合的国際比較研究」(研究代表者：藤田教授)が始まった。

阪大美学研究会では、美学研究室編集の『美学研究』を刊行し、現在は4号を数えている。また各種国際学会や国内学会における発表、美学研究室大学院生が交代で執筆する大阪日日新聞のシリーズ記事「関西美術探訪」の連載など、大学院生および学部学生の活動は非常に活発である。

なお、大橋教授のイニシアチブにより、2004年10月、パリ・ラヴィレット建築エコールと文学研究科および工学研究科建築工学専攻とのあいだの「部局交流協定」が成立した。これにより2005年度からの学生交流が始まると共に、美学研究室と建築学専攻とのあいだの学内交流も始まった。

また2006年3月28、29日の両日にわたって、おなじく大橋教授がオルガナイザー兼・議長をつとめる日独哲学シンポジウム「絶対的なものに即して／あとに」が、文学研究科・哲学講座の協力を得て、中之島センターで盛大に行われ、美学研究室が全面的にサポートした。

文芸学研究室はギリシア喜劇を中心とする研究を行っている。加藤助教授はプラトンの文芸論やスカリゲルの詩学などを、また渡辺助手がアリストテレスの悲劇論などをそれぞれ研究している。文芸学研究会では、機関誌として『文芸学研

究』が発刊され、現在は10号を数えるに至っている。この研究会は本研究室を事務局兼活動母体としながらも、広く西日本の他大学の多くの研究者、学生とも連携したものであり、研究発表を年4回開催すると共に、機関誌を年1冊発行し、そのたびごとに合評会を催すなど、極めて活発に活動している。また本研究室の同様の共同研究であるクインティリアヌスの *Institutio oratoria* の邦訳も現在第2巻までが完了し、第1分冊が2005年5月に刊行された。

12-2. 研究活動

上記の「教育活動」の項で概略は述べたが、各教員の研究活動についてはなお若干のことを付加する。

大橋教授は2004年に『西田天香 天華香洞録』6巻の編著を刊行。2005年には、『京都学派の思想』(編著)、道元『正法眼蔵』ドイツ語訳を日独で同時出版(慶応大学出版会、フロマン・ホルツボーク社)、ハイデッガー全集第65巻『哲学への寄与論稿』の邦訳(共訳)を完成(創文社)、また著書『聞くこととしての歴史』(名古屋大学出版会)、を刊行した。また、ベルリン日独センター主催シンポジウム「諸宗教の共生」、議長(2004年9月27日～28日)を担当した。

上倉教授は、2003年度～2004年度の科研費研究『ドラマと音楽』の研究例会を重ね、研究分担者のひとり渡辺助手とともに現在、報告書を取りまとめた。また第4回を迎えた京都映画祭の企画委員として、その実行に取り組み、研究室学生の有志とともに2004年9月、2万人を動員、映画祭の成功に力を尽くした。

藤田教授は、2004年7月の第16回国際美学会議(リオデジャネイロ)、2004年11月の第4回デザイン史デザイン学国際会議(メキシコ・グアダハラ)では発表および司会等重要な役割を果たした。自ら提唱した一連の「芸術と福祉」国際会議は、2004年(ロンドン)、2005年(倉敷)と開催された。また、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」の研究推進者を務め、2004年に山口修(現名誉教授)とともに研究報告書『映像人文学』を監修・刊行した。2004年度からは、日本学術振興会の人文・社会科学振興プロジェクト于研究事業「文学・芸術の社会的媒介機能」芸術とコミュニケーションに関する実践的研究の研究ループ長を務めている。展覧会の企画・監修も手がけ、「ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ」展、「チャールズ・アンド・レイ・イームズ：創造の遺産」展は、2005年から翌年にかけて、全国を巡回した。また、これらの展覧会のために『ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ』、『チャールズ・アンド・レイ・イームズ』を監修・執筆した。

またすでに留学中だった春木助手代理は2004年4月から2004年9月までストラスブール第2大学で学んだ。猪谷助手代理は、2004年度のデザイン史フォーラム刊行『アーツ・アンド・クラフツ運動と日本』編集事務局を担当、また2005年度から意匠学会事務局幹事を担当している。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 大橋 良介 教授

1944年2月8日生。1969年、京都大学哲学科卒業。1974年、ミュンヘン大学大学院哲学科博士課程、学位取得。1983年、ヴェルツブルク大学で哲学教授資格(ハビリタチオン)取得。専攻：美学・哲学・現象学。

1-1. 論文

大橋良介「もうひとつの“Beiträge zur Philosophie”」鹿島徹他『ハイデッガー〈哲学への寄与〉解説』平凡社, pp. 135-142, 2006/3

大橋良介「ドイツ観念論とは何であったか／ありうるか」大橋良介編『ドイツ観念論を学ぶひとのために』ミネルヴァ書房, pp. 3-23, 2006/1

大橋良介「理性——あるいはシェリングの「無底」の射程」大橋良介編『ドイツ観念論を学ぶひとのために』ミネルヴァ書房, pp. 124-143, 2006/1

Ohashi, Ryosuke, *Etrange sacré*, in: *l'architecture d'aujourd'hui*, 356 janvier-février 2005, pp. 94-99, 2005/2

Ohashi, Ryosuke, *Kunst als Ort für die Kulturbegegnung heute - Oder über das “Schöne” und die “Sterblichkeit” des Menschen*, in: *Philosophie, Gesellschaft und Bildung in Zeiten der Globalisierung. Studien zur Interkulturellen Philosophie*, Bd. 15. Herausgegeben von Hermann-Josef Scheidgen, Nobert Hintersteiner und Yoshiro Nakamura.

Amsterdam – New York, S. 155-170, 2005

Ohashi, Ryosuke, Violence and Religion – Jewish-Christian Thought in Dialogue with Buddhism, in : *Menschenrechte, Kulturen und Gewalt. Ansätze einer interkulturellen Ethik*. Herausgegeben von Ludger Kühnhardt/ Mamoru Takayama. Schriften des Zentrum für Europäische Integrationsforschung. Herausgegeben von Ludger Kühnhardt, Bd.64, Baden-Baden, S. 449-450, 2005

1-2. 著書

大橋良介編著『ドイツ観念論を学ぶ人のために』ミネルヴァ書房, 2006/1

大橋良介共編著 *Dōgen. Shōbōgenzō. Ausgewählte Schriften*. Übersetzt, erläutert und herausgegeben von Ryosuke Ohashi und Rolf Elberfeld 慶応義塾大学出版会/Frommann Verlag, 京都/Stuttgart-Band Cannstatt, 2006/1

大橋良介『聞くこととしての歴史 ——「悲の現象論 歴史篇」——』名古屋大学出版会, 2005/5

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

大橋良介(講演)「哲学と建築(4) —ゴシックと茶室 (1) —西田幾多郎のゴシック論—」『点から線へ』48, pp. 2-19, 2006/3

大橋良介(エッセイ)「花随想(4)顕れと隠れ」『同仁』6, pp. 28-31, 2006/1

大橋良介(エッセイ)「茶の湯の美学(13)松風ノ一声」『茶の湯』383, pp. 6-7, 2006/1

大橋良介(翻訳)*Dogen. Shobogenzo. Ausgewählte Schriften*. Übersetzt, erläutert und herausgegeben von Ryosuke Ohashi und Rolf Elberfeld 慶応義塾大学出版会/Frommann Verlag, 京都/Stuttgart-Band Cannstatt, 313p., 2006 (I.2 「著書」、Nr.3 を参照)

大橋良介(エッセイ)「茶の湯の美学(11)「会」の美学3 [茶会的身体]」『茶の湯』381, pp. 1-2, 2005/11

大橋良介(エッセイ)「茶の湯の美学(10)「会」の美学2 [場所の力]」『茶の湯』380, pp. 6-7, 2005/10

大橋良介(エッセイ)「茶の湯の美学(9)「会」の美学1 [「遊」のコスモス]」『茶の湯』379, pp. 8-9, 2005/9

大橋良介(エッセイ)「茶の湯の美学(8)雪月花3 [禁花の美学]」『茶の湯』378, pp. 8-9, 2005/8

大橋良介(エッセイ)「茶の湯の美学(12)「会」の美学4 [茶会的身体(続)]」『茶の湯』382, pp. 1-2, 2005/7

大橋良介「茶の湯の美学(7)雪月花2 [雪と月]」『茶の湯』377, pp. 6-7, 2005/7

大橋良介(エッセイ)「花随想(3)煩悩と菩提」『同仁』5, pp. 28-31, 2005/7

大橋良介(エッセイ)「茶の湯の美学(6)雪月花1 [雪の美学]」『茶の湯』376, pp. 6-7, 2005/6

大橋良介(エッセイ)「京都学派の世界史的見方『新地球日本史』2「明治中期から第二次大戦まで」」産経新聞社, pp. 239-254, 2005/6

大橋良介(エッセイ)「茶の湯の美学(5)空の美学」『茶の湯』375, pp. 6-7, 2005/5

大橋良介(エッセイ)「茶の湯の美学(4)風の美学」『茶の湯』374, pp. 6-7, 2005/4

大橋良介(エッセイ)「茶の湯の美学(3)土の美学」『茶の湯』373, pp. 10-11, 2005/3

大橋良介(講演)「哲学と建築(3)—都市の生と死」『点から線へ』46, pp. 58-75, 2005/3

大橋良介(エッセイ)「茶の湯の美学(2)火の美学」『茶の湯』372, pp. 12-13, 2005/2

大橋良介(エッセイ)「茶の湯の美学(1)水の美学」『茶の湯』371, pp. 6-7, 2005/1

大橋良介(エッセイ)「花随想(2)移ろうものと移ろわぬもの」『同仁』4, pp. 20-23, 2005/1

1-4. 口頭発表

大橋良介 Nach dem Absoluten? – Eine Frage im Zeitalter des Absolutheitsanspruchs der Technologie, 日独哲学シンポジウム議長挨拶, 大阪大学中之島センター, 2006/3/27

大橋良介「ヘーゲルと京都学派——〈社会の弁証法〉をめぐる——」ヘーゲル学会講演, 京都外国語大学, 2005/12/23

大橋良介「理性と感性」団法人日本能率協会「MA マネジメント・インスティテュート」講演, 神戸ポートピアホテル, 2005/12/16

大橋良介 「歴史と身体——西田哲学の歴史思惟」立命館哲学学会講演, アカデメイア立命, 2005/11/5
 大橋良介 Heidegger-Symposium. 講演, Geschichtsdenken Martin Heideggers, in: Meßkirch, 2005/10/29
 大橋良介 「否定美学か美学の否定か」美学学会学年次大会パネル発表, 慶応大学, 2005/10/8
 大橋良介 Gesellschaft für Interkulturelle Philosophie 講演 Der Ort des Kunstschönen, in: Weingarten, 2005/9/14
 大橋良介 「哲学と建築(4)ゴシックと茶室」西田哲学館講演, かほく市, 西田幾多郎記念哲学館, 2005/8/22
 大橋良介 「純粹経験としての歴史」西田哲学学会年次大会講演, かほく市, 西田幾多郎記念哲学館, 2005/7/23
 大橋良介 「夏目漱石『門』——近代日本人のアイデンティティ」「岡倉天心『茶の本』——ヨーロッパの視点から見た日本」社団法人日本能率協会「MA マネジメント・インスティテュート」講演, 神戸ポートピアホテル, 2004/12/6
 大橋良介 「『世界史』の観点から見た『日本』の位置と課題——グローバリズムの問題をも考慮しつつ——」「『アジア』と『欧米』の思考の違い——日中・日韓の問題をも考慮しつつ——」社団法人日本能率協会「MA マネジメント・インスティテュート」講演, 神戸ポートピアホテル, 2004/12/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

大橋良介 ベルリン高等研究所フェローシップ, 1997/10/1~1998/7/31
 大橋良介 フンボルト・メダル, フンボルト財団総長, 1996/3/31
 大橋良介 ジーボルト賞, ドイツ連邦共和国大統領, 1990/7/3

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

西田哲学館・名誉館長	2002年4月～現在
国際ヘーゲル協会(Internationale Hegel-Vereinigung)・理事	1997年12月～現在
日本フィヒテ協会・理事	1995年6月～現在
日本シェリング協会・理事	1992年2月～現在
日独文化研究所・理事	1991年6月～現在
実存思想協会・理事	1988年7月～現在
国際高等研究所・特別委員	1993年4月～2005年5月
インターカルチャー哲学学会 (Gesellschaft für Interkulturelle Philosophie)・副会長	1995年6月～2004年6月

2. 上倉 庸敬 教授

1949年生。専攻：美学／芸術学／映画学。

2-1. 論文

上倉庸敬 「音楽が明らかにするドラマ構成——谷慶子『タイ・ブレイカー』を例にとって——」科研成果報告書『ドラマ空間における音楽に対する観客反応の実証的な研究』(研究代表者 上倉庸敬), pp. 1-18, 2006/3
 上倉庸敬 「日本に『建築 architecture』はない」『美学研究』3, pp. 1-14, 2005/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上倉庸敬「映画評」『朝日新聞』大阪本社版夕刊, 2004/6~2005/3

「パッション」(2004/6/17), 「ベジャール、パレエ、リュミエール」(2004/7/15), 「キング・アーサー」(2004/8/25), 「きみに読む物語」(2005/1/26), 「香港国際警察」(2005/3/9), 「インフェナル・アフェアⅢ 終極無間」(2005/3/31)

上倉庸敬「美術評」『大阪日々新聞』「前原真証展」(2004/12/29), 「山本洋三水彩画展」(2005/2/2)

上倉庸敬「書評 中島貞夫『遊撃の美学』」『大阪日々新聞』2004/9/20

2-4. 口頭発表

上倉庸敬「乳首に生えた長い毛とパステル・カラー——吉行淳之介の芸術その初めと終わり——」第14回文芸学研究会, 神戸大学, 2004/9/18

Kamikura, Tsuneyuki, “The Logic of the Senses ——on “Tokyo Story” by Yasujiro Ozu”, The 3rd Asian Art Symposium in Taipei, 2004/8/25

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003年度~2004年度、基盤研究(C)、代表者：上倉庸敬

課題番号：1552008

研究題目：ドラマ空間における音楽に対する観客反応の実証的な研究

研究経費：2004年度 1,000千円

研究の目的：

芸術作品の制作理論と、それに基づいて出来あがった作品と、観客とのあいだには、どのようなズレがあるか。本研究はそれを明らかにしたい。いいかえれば「予想された観客」と「実際の観客」のズレを、できるかぎり客観的つまり実証的に明らかにしたい。そのためには、作品の意図などという曖昧な対象ではなく、作品中で何か他のものに役立とうとしていることが明らかな対象を選ばなくてはならない。本研究では、ドラマの伴奏音楽を対象にして、それに対する観客の反応データを多数・多様に集積し、可能なかぎり客観的に記述、考察をほどこしたい。

映画監督の黒澤明は「映画制作において、映画をいちばん熟知しているのは監督であるから音楽担当者は監督の指示にしたがわねばならぬ」と主張したが、同監督の作品『乱』において音楽監督を務めた武満徹は「音楽をいちばん熟知しているのは音楽担当者であるから監督といえどもその提案を受け容れるべきだろう」と反論した。黒澤と武満の対立が現実には『乱』という作品に解消されたのは、劇映画において映像・音楽それぞれが従わねばならぬ対象が、映像・音楽いづれでもなく、「劇」すなわち「ドラマ」だからである。

『乱』の完成後も武満は「音楽の知識が50年前でストップしている黒澤では現代の十分な映画音楽はつくれない」と堂々、不平を洩らすことができた。黒澤とは作品制作の考え方が違うと武満は思っていたろう。しかし実際は両者の「予想する観客」が質的に異なっていたというべきであろう。

映画史100年のなかで映画音楽を革新したのは、ヒッチコック監督『サイコ』の Bernard Hermann だといわれているが、その画期の基準は制作の観点から立てられている。制作側からすれば観客は「予想された観客」でしかない。実際の観客はどうであったか。たとえば活弁につけられたような、剣戟のときは勇ましく2分の1拍子、悲劇のときは短調などという単純な音楽は、観客側からみても否定されるべきなのかどうか。

ドラマをつくりあげる映像について、観客に対し、どのような音楽がどのような効果をあげるかという問題は、一般理論として未だ解決をあたえられていない。映画の場合だけではない。言葉によってドラマをつくりあげる演劇の場合も、おなじ問題がある。演劇をつくりあげる言葉について、観客に対し、どのような音楽がどのような効果をあげるか。

たとえ伴奏音楽のような二義的なものについてであれ、理論の予想する観客と実際の観客のズレが客観的に実証されれば、その結論は広い範囲のさまざまな問題を明らかにしてくれるだろう。一例をあげれば古典芸能における「型」であ

る。「型」の変遷は「予想された観客反応」と「実際の観客反応」のズレのなかで跡づけることができよう。さらに一例をあげれば、造形作品の様式変遷の問題にも照明をあてることができる。本研究の射程範囲は広く遠いというべきである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

おおさかシネマフェスティバル実行委員会・委員	2004年4月～現在
第4回京都映画祭実行委員会・企画委員	2003年10月～2005年3月
美学会・委員	1992年10月～2004年9月

3. 藤田 治彦 教授

1951年生。大阪市立大学大学院生活科学研究科博士課程修了。学術博士(大阪市立大学、1983年)。京都工芸繊維大学工芸学部助教授、ルーヴェン・カトリック大学客員教授、大阪大学大学院文学研究科助教授などを経て、現職。

専攻：美学・芸術学。

3-1. 論文

藤田治彦「芙蓉と木米——同源の書画と工芸」『なごみ』淡交社, pp. 70-73, 2006/3

藤田治彦「漢文から和文へ——文字と言葉のロマン」『なごみ』淡交社, pp. 70-73, 2006/2

藤田治彦「杜甫と意匠——曹覇、龍馬を描く」『なごみ』淡交社, pp. 70-73, 2006/1

3-2. 著書

藤田治彦『天体の図像学：西洋美術に描かれた宇宙』八坂書房, 2006/1

藤田治彦, 要真理子編『倉敷2005「芸術と福祉」国際会議論集』倉敷2005「芸術と福祉」国際会議実行委員会, 2005/7

藤田治彦編『芸術・コミュニケーション・デザイン』国際フォーラム論文集, 2005/3

藤田治彦監修(川端康雄ほか19名との共著)『アーツ・アンド・クラフツと日本』思文閣出版, 2004/9

藤田治彦監修(ピーター・コーマックほか10名との共著)『ウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』梧桐書院, 2004/7

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤田治彦「熊倉功夫, 吉田憲司共編『柳宗悦と民藝運動』」『民族芸術』22, pp. 193-196, 2006/3/31

藤田治彦「田中正明『デザイン研究ノート』」『デザイン理論』46, pp. 210-211, 2005/5/30

藤田治彦「ウィリアム・モリスのイギリス・6・テムズ川の流れに」『英語教育』53-13, 大修館書店, 巻頭グラビア頁, 2005/3

藤田治彦「ウィリアム・モリスのイギリス・5・ケルムスコットとコッツウォルズ地方」『英語教育』53-12, 大修館書店, 巻頭グラビア頁, 2005/2

藤田治彦「ウィリアム・モリスのイギリス・4・レッド・ハウスからクイーン・スクエアへ」『英語教育』53-11, 大修館書店, 巻頭グラビア頁, 2005/1

藤田治彦「ウィリアム・モリスのイギリス・3・オックスフォード」『英語教育』53-10, 大修館書店, 巻頭グラビア頁, 2004/12

藤田治彦「ウィリアム・モリスのイギリス・2・モールバラ校とエイヴベリ」『英語教育』53-9, 大修館書店, 巻頭グラビア頁, 2004/11

藤田治彦「ウィリアム・モリスのイギリス・1・ウォルサムストウとエピングの森」『英語教育』53-7, 大修館書店, 巻頭グラビア頁, 2004/10

3-4. 口頭発表

Fujita Haruhiko, "Design Theory and History of Modern Japan," a fellow lecture for the Institute of Advanced

Studies, Residenza di Studi Superiori, University of Bologna, 2006/2/22

Fujita Haruhiko, "Tradition and Innovation in Japanese Design," Design Workshop "Tradition and Innovation: a Comparison between Italian and Japanese Design, Aula Magna, Faculty of Engineering, University of Bologna, 2006/2/21

藤田治彦「従威廉莫里斯到藝術工藝運動」台湾生活工藝運動 2005 国際会議, 華山創意文化園區(台北), 2005/12/18

藤田治彦「欧州、日本、台湾的生活工藝運動史」台湾生活工藝運動 2005 国際会議, 華山創意文化園區(台北), 2005/12/18

藤田治彦「細やかなデザインと文化変容の可能性」第 19 期・芸術学研究連絡委員会シンポジウム「アートのカ—文化変容の可能性」京都大学大学院文学研究科新館第 3 講義室, 2005/12/18

Fujita Haruhiko, "History and Philosophy of Design History Forum, 1998-2004," 4th International Conference on Design History & Design Studies, Guadalajara, 2004/11/4

Fujita Haruhiko, "Changing Ways of Arts, *Geido*," XVI International Congress of Aesthetics, Rio de Janeiro, 2004/7/22

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤田治彦 意匠学会賞, 2002/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2004 年度～2006 年度、基盤研究(B)、代表者：藤田治彦

課題番号：16320022

研究題目：近代工芸運動の総合的国際比較研究

研究経費：2004 年度 5,200 千円

2005 年度 5,200 千円

研究の目的：

本研究の目的は、イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動、フランスの応用美術推進運動、ドイツとオーストリアの工芸博物館活動などの 19 世紀に興った近代工芸運動、イギリスの影響を受けながらも独自の展開を示したアメリカのクラフツマン運動、アール・ヌーヴォー、アール・デコ、ユーゲントシティルなどの 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて高まった近代装飾美術の諸動向、そして 20 世紀前半の近代建築・デザイン運動という西欧と北米を舞台とした複数の動向の相互関係および、それらと日本の民芸運動や北欧の工芸運動など世界各地の関連諸運動との関係を、各国文化と諸芸術分野の専門家による分担や共同研究を通じて明らかにすることである。工芸・建築・装飾芸術という近代造形芸術の重要な諸分野における思想と活動の変遷を、近代絵画や彫刻のそれと比較しながら体系的に研究し、美学・美術学上の位置づけを試みる。本研究は、それぞれが美術、工芸、建築、装飾芸術あるいはデザインなどの造形芸術諸分野や、英文学、民族学、社会学等、造形芸術以外の諸分野の専門家であると同時に、西欧、東欧、北欧、南欧、アジア、アフリカ、アメリカなどの異なった地域を専門とする研究者多数によってなされる共同研究である。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 21 世紀 COE プログラム分担

「インターフェイスの人文学」(代表者：鷺田清一)

3-7-2. 2004 年度～2006 年度、日本学術振興会・人文・社会科学振興プロジェクト研究事業、研究グループ長：藤田治彦

研究題目：文学・芸術の社会的媒介機能「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」

研究経費：2004 年度 4,930 千円

2005 年度 6,000 千円

研究の目的：

情報技術が表層的な意味でのコミュニケーションを容易にする一方で、人間のコミュニケーション能力は著しく低下している。それは自己表現能力の低下であり、物質的繁栄の陰で進行する社会生活の内実の弱体化は極めて重大な問題である。日常生活においてはもちろん、教育や文化的活動においても、現代社会を支配する技術主導の考え方は、人間が本来もつ柔軟な表現、伝達、相互扶助の能力を損なっている。本研究は、芸術のコミュニケーション力や、地域社会および国際社会における芸術の「媒介機能」に注目して、それらの発展をめざす、芸術とコミュニケーションに関する実践的研究である。近代芸術および近代芸術批評には、芸術家の孤独な探究や自己表現の追究を尊重するモダニズムの理念があった。本研究は、そのような近代的な芸術理念においては必ずしも重視されなかった芸術の側面として、「幸福」、「健康」、「癒し」といった、広義の「福祉」的な側面に注目し、芸術を見直そうとする。また、次の時代を担う子どもたちや若者たちによる芸術・文化の発信に注目し、その促進を試みる。

本研究では、文学、造形芸術、演劇、音楽などさまざまな芸術分野に関わる研究者、芸術家、その他の関係者を招いた研究集会等の開催を通じて、研究それ自体が実践的なコミュニケーション活動として行われる。また、それらを通じて、文学や芸術における実践的な研究とは何かについてのモデルを構築することが計画されている。文学、芸術諸学、教育学等の研究者による共同研究により、文字言語の、視覚言語、音言語、身体言語それぞれとの関係についての、そして、それらの各種言語を適切に活用した教育や文化・芸術活動についての新たな知見を得ることが当面の目標となる。

3-8. 学会役員等の引き受け状況

意匠学会・会長	2005年4月～現在
同上・委員	1994年4月～現在
デザイン史フォーラム・代表	2005年3月～現在
美学会・委員	2000年4月～現在
民族芸術学会・理事	2000年4月～現在
日本デザイン学会・評議員	1994年4月～現在

4. 加藤 浩 助教授

1960年生。1983年、大阪大学文学部美学科卒業。1985年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士(大阪大学、1985年)。1987年10月 岡山大学助手、1995年4月 岡山大学助教授、1998年10月 大阪大学助教授。専攻：文芸学／西洋古典学／美学。

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

5. 内田 次信 助教授

1952年3月12日生。1974年、京都大学西洋古典学科卒業。2003年、博士(京都大学)。専攻：西洋古典学、文芸学。

5-1. 論文

内田次信「ルキアノス『饗宴またはラピテス族』——乱闘する哲学者たちの戯画」『国際学論集』(大阪学院大学), 16-2, pp. 1-11, 2005/12

内田次信「ルキアノス『ゼウス論破さる』とストア的宿命論への諷刺における混ぜ合わせ技法」『国際学論集』(大阪学院大学), 15-1, pp. 21-35, 2004/6

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

内田次信「ルキアノス『饗宴またはラピテス族』について」西洋古典研究会(京都大学文学部), 2005/12

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

6. 渡辺 浩司 助手

1962年生。1994年3月、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。1994年より現職。博士(文学、大阪大学、1998年)。専攻：文芸学／西洋古典学。

6-1. 論文

渡辺浩司「プラトンとアリストテレスの音楽観」(2003年度～2004年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)「ドラマ空間における音楽に対する観客反応の実証的な研究」研究成果報告書 研究代表者：上倉庸敬), pp. 39-50, 2006/3

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

森谷宇一, 戸高和弘, 渡辺浩司, 伊達立晶訳・注『クインティリアヌス 弁論家の教育 1』京都大学学術出版会, 246p., 2005/5

渡辺浩司「海外雑誌論文紹介」『古代哲学研究 METHODOS』37, pp. 100-101, 2005/5

渡辺浩司訳・註・解説『デメトリオス 文体論』(『ディオニュシオス/デメトリオス 修辞学論集』所収), 京都大学学術出版会, pp. 399-506, pp. 548-559, 2004/8

渡辺浩司「海外雑誌論文紹介」『古代哲学研究 METHODOS』36, p. 74, p. 76, p. 79, 2004/5

6-4. 口頭発表

渡辺浩司「ギリシア悲劇の仕掛け——アリストテレス『詩学』より」近現代演劇研究例会, 大阪大学, 2005/7/16

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 学会役員等の引き受け状況

民族芸術学会・委員(庶務)

1994年4月～現在

2-22 音楽学・演劇学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

(音楽学)

本学の音楽学研究室は、1976年の開設から30年を経たが、今でも我が国の総合大学文学部における専攻分野としては極めて稀な存在である。芸術大学、音楽大学における音楽学研究とも、教育大学における音楽学研究とも異なる問題意識を持ち、またいわゆる歴史的手法、作曲学的分析法、人類学的なフィールドワーク、カルチュラルスタディーズのアプローチなど、様々な方法論を組み合わせながら音楽に対する新しい取り組みを行っている。

根岸はオーストリアの作曲家アントン・ブルックナーの研究を機軸に据え、広く西洋音楽史を講ずるとともに、ブルックナーの作品の日本での受容に関する研究を端緒に、大正期から昭和期にかけて関西で活躍した音楽家ヨーゼフ・ラスカの仕事について、集中的に取り組んでいる。

伊東はハンガリーを中心とする中・東欧の音楽史、民俗音楽研究を中心に、バルトーク、オペレッタ、楽師、ハイドンといった様々な切り口から、民衆文化の中での音楽実践の研究に取り組んでいる。

両教員ともそれぞれの研究課題を追究し、それとの密接な関連において教育活動を行っているが、音楽が生きた人間の活動であることを常に意識し、社会におけるさまざまな音楽行動を研究との関わりの中で捉えること、また社会への発言を行うことを重視し、実践に努めている。また、このような見地より、教育においてもさまざまな形での音楽実践を取り込み、多角的な展開をめざしている。学生の個人研究については、上記両教員の研究分野を大きく超えて、日本伝統音楽の研究から、現代の音楽産業論にいたるまで、幅広い対象について、多彩な方法論による研究が展開されている。

(演劇学)

演劇学では、日本伝統演劇と西欧近代演劇との二つの分野を有している。日本伝統演劇を天野文雄教授が、西欧近代演劇を永田靖教授が担当している。天野文雄は世阿弥研究と能楽史研究を専らとし、700年に及ぶ能楽の歴史と理論、作品について縦横に研究し、盛んに論考を発表している。永田靖は近代演劇のロシア語圏やアジアでの展開過程に関心があり、モダン・ドラマの理論と上演分析の統合によって20世紀演劇全体を捉えなおす試みを行っている。授業はそれぞれ、専門の能楽史、近代演劇論に関するものの他に、初学者用の能楽入門的な概説や、西欧演劇史の概説や演劇学概論の講義や演習を行っている。また西欧演劇学と日本伝統演劇史のクロスオーバー的な検討を主題にした、右2人の教員による共同演習を行い、専門領域の細分化の傾向を払拭しようとしている。また実際に劇場に赴き観劇し、上演を分析する観劇実習を行っている。また近隣の公立劇場での劇場制作研修を行い、劇場的思考の育成にも努めている。これらの教育・研究成果は継続的に発表しており、学会・研究会での口頭発表や紀要・論文集への執筆も積極的に行っている。研究室においても紀要『演劇学論叢』を刊行している。これらの教育・研究活動を通して、上演そのものの本質を解明することに加え、日本演劇と世界演劇をトータルに見る視点と、身体的にアプローチする着想を育んでいる。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 3 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：天野 文雄、根岸 一美、永田 靖

助教授：伊東 信宏

助手：上野 正章

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
36	10	29	0	1	0	0	0	9

※うち留学生 8 名、社会人学生 5 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	11	4	5	3	0
'05	16	3	2	2	0
小計	27	7	7	5	0

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	2	1	3
'05	2	0	2
計	4	1	5

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 橋田勲 「清末民国初江南における文人琵琶楽の成立と展開」 2006/3
主査：根岸一美 副査：天野文雄、伊東信宏、浅見洋二
- 谷正人 「イラン伝統音楽の即興概念 即興モデルと対峙する演奏者の精神と記憶のあり方」 2005/3
主査：根岸一美 副査：伊東信宏、上倉庸敬、堂山英次郎
- 牧野淳子 「竹の音楽文化 現代日本における諸相と展開の可能性」 2005/3
主査：根岸一美 副査：伊東信宏、天野文雄
- Stella Zhivkova “EXPRESSION IN JAPANESE CULTURE: AN INQUIRY INTO THE PHENOMENON OF IMAGE-LADEN LOCI OBSERVED IN LANGUAGE, MUSIC AND POETRY”, 2006/3
主査：根岸一美 副査：大橋良介、伊東信宏

【論文博士】

- 小林英一 「本願寺能楽史の研究」 2005/2
主査：天野文雄 副査：永田靖、村田路人

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	4	11	1	0	1	17
'05	5	2	6	1	1	15
計	9	13	7	1	2	32

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	1	13	14	2	3	33
'05	2	11	12	0	4	29
計	3	24	26	2	7	62

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

(音楽学)

井手口彰典「「非一芸人」としてのストリートミュージシャン——「他者」の機能を中心に——」『ポピュラー音楽研究』(日本ポピュラー音楽学会), 8, pp. 3-16, 2004/12

沈金雲「观摩“神戸欢喜合唱团”排练及思考」『人民音楽』中国文学幻術界联合会, pp. 56-58, 2004/12

中村真「『正しい』デクラメーションに託された音楽的戦略——オタカル・ホスチンスキー『チェコ語の音楽的デクラメーションについて』の理念」『スラヴ研究』(北海道大学スラブ研究センター), 51, pp. 373-390, 2004/5

Nakamura, Makoto, “Janáček's case: the 'fear of novelty' and his earliest folk music studies,” *Horror novitatis* (Colloquium Musicologicum Brunense 37, 2002), Praha: KLP —— Konisch Latin Press, [2004], pp. 128-134,

袴田麻祐子「寶塚少女歌劇にみる『西洋』の意味とその変化」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科 芸術学・芸術史講座), 22, pp. 35-52, 2005/3

福本康之「日本におけるベートーヴェン受容 V——明治 40 年までの演奏記録を読む: 資料と解題」『音楽研究所年報』(国立音楽大学), 18, pp. 177-190, 2005/3

山田高誌「町から宮廷へ、娯楽から作品へ; 1760年代から70年代のナポリの喜劇オペラの社会的地位の変化と、台本における「笑い」の重心の変化」『演劇研究センター紀要』(早稲田大学 21世紀 COE プログラム“演劇の総合的研究と演劇学の確立”), 4, pp. 57-69, 2005/1

Yamada, Takashi (山田高誌), “L'Impresa de *Li napoletani in America: nell'attività di Gennaro Bianchi, impresario del Teatro Nuovo*”, in Yamada Takashi, *Edizione scientifica, Piccinni & Cerlone, Li Napoletani in America*” (1768, Napoli): *Commedia per musica di Francesco Cerlone, musica di Niccolò Piccinni*. (Centro Ricerche Musicali “Casa Piccinni” del Conservatorio di musica di Bari, 2004/10), pp. V-XVIII

(演劇学)

菊池あずさ「一九九九年の蜷川幸雄演出『リア王』——道化の演出を中心に——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 7, pp. 196-227, 2004/12

澤野加奈「『妙』の現出をめぐる世阿弥の思索——その方法と位の問題を中心に——」『フィロカリア』(大阪大学大学院

- 文学研究科芸術学・芸術史講座), 22, pp. 53-64, 2005/3
- 團夕紀子「古浄瑠璃〔日本大王〕と林鶯峰『日本王代一覽——神話物古浄瑠璃上演の背景試論——』『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 7, pp. 68-84, 2004/12
- 團夕紀子「竹本義太夫推定正本『頼朝七騎落』をめぐる諸問題』『芸能史研究』(藝能史研究会), 165, pp. 1-20, 2004/4
- 中尾薫「明和本《冊子洗》をめぐる諸問題——詞章・演出・改訂者——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 7, pp. 394-403, 2004/12
- 中尾薫「田安宗武と明和改正謡本——田安家旧蔵『版本番外謡本』の書込みをめぐる——」『芸能史研究』(藝能史研究会), 166, pp. 1-19, 2004/7
- 中尾薫「明和改正謡本と田安宗武——新作能《梅》を中心に——」『能と狂言』(能楽学会), 2, pp. 90-102, 2004/5
- 橋場夕佳「観世大夫元章の小書——《富士太鼓》「現之楽」を中心として——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 7, pp. 403-410, 2004/12
- 正木喜勝「様式の交代——村山知義作・演出『孤児の処置』の分析——」『待兼山論叢(美学篇)』(大阪大学文学会), 38, pp. 77-98, 2004/12
- 【2005年度】**
- (音楽学)**
- 井手口彰典「参照の時代——デジタルオーディオプレイヤーにみる音楽聴取の未来——」『デザイン理論』(意匠学会), 47, pp. 19-32, 2005/11
- 井手口彰典「「レコード鑑賞」再考——テクノロジー進展に伴う新たな鑑賞モデルの提唱——」『2005年全日本電子楽器教育研究会論文集』(全日本電子楽器教育研究会), pp. 31-43, 2005/9
- 井手口彰典「現代のメディアがもたらす「送り手」と「受け手」の関係変化——音系を事例に——」『阪大音楽学報』(大阪大学), 3, pp. 39-55, 2005/4
- 山口篤子「日本の合唱史における『幻の東京オリンピック』——その意義と位置づけをめぐる——」『待兼山論叢』(大阪大学大学院文学研究科), 39, pp. 27-49, 2005/12
- 山口篤子「国民音楽協会と合唱音楽祭の初期事情——小松耕輔の民衆音楽観を中心に」『阪大音楽学報』(大阪大学), 3, pp. 1-16, 2005/4
- 山田高誌「チマローザ《秘密の結婚》(1792)の秘密；国立音楽大学より新発見されたナポリ版(1793)楽譜の同定と、差し替えアリアを創唱したエリゼッタ役歌手の特定」『ロッシニアーナ』(日本ロシーニ協会), 28, pp. 1-33, 2005/12/31
- 山田高誌「チマローザ《秘密の結婚》(1792)の秘密；国立音楽大学より新発見されたナポリ版(1793)楽譜の特定と、2曲の差し替えアリアについて」『IAML ニューズレター』(国際音楽資料情報協会), 26, pp. 1-8, 2005/12/24
- 山田高誌「L'Attività e la strategia di Gennaro Bianchi, impresario dei teatri napoletani nella seconda metà del Settecento: Interpretazione del suo sistema di gestione dalle scritture dell'Archivio Storico dell'Istituto Banco di Napoli-Fondazione.(邦訳；18世紀後半のナポリの劇場支配人、ジェンナーロ・ブランキの活動と戦略；ナポリ銀行歴史文書館所蔵文書に基づくその興行システムの解明)」『Quaderni dell'Archivio Storico』(Istituto Banco di Napoli-Fondazione ナポリ銀行歴史文書館財団), vol. 2004, pp. 95-116, 2005/12/10
- 山田高誌「1770年のナポリ・ヌオーヴォ劇場の興行形態；パイジェッロ作曲《恋のたくらみ》の上演から」『地中海学研究』(地中海学会), 28, pp. 53-77, 2005/7
- 山田高誌「1770年から90年期に見られる、ナポリの民間劇場の“宮廷娯楽化”への道程；ナポリ銀行歴史文書館(ASIBN)史料に基づくパースペクティブ」『阪大音楽学報』(大阪大学), 3, pp. 1-21, 2005/5
- (演劇学)**
- 菊池あずさ「祝祭から静寂へ——二つの蜷川幸雄演出『ロミオとジュリエット』——」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座), 23, pp. 47-70, 2006/3
- 中尾薫「田安宗武と観世元章——『甲子夜話』の記事を中心に——」『叙説』(奈良女子大学国語国文学会), 33, pp. 169-181, 2006/3
- 中尾薫「加藤枝直と明和改正謡本——『謡曲改正草案帳』の再検討から——」『芸能史研究』(藝能史研究会), 172, pp. 29-47,

2006/1

正木喜勝「プロレタリア演劇衰退期の『ハムレット』——1933年築地小劇場改築竣成記念公演をめぐって」『文芸学研究』(文芸学研究会), 10, pp. 107-124, 2006/3

正木喜勝『『不統一』な演劇——村山知義演出『ユードイット』——』『水声通信』(水声社), 3, pp. 77-98, 2005/12

(2)口頭発表

【2004年度】

(音楽学)

[学会]

井手口彰典「「レコード鑑賞」再考——テクノロジー進展に伴う新たな鑑賞モデルの提唱——」日本音楽教育学会第35回大会, 武蔵野音楽大学, 2004/11/3

井手口彰典「音楽における「送り手」と「受け手」との融合: 音系を事例に」日本ポピュラー音楽学会関西地区第1回研究例会, 関西大学, 2004/5/3

小石かつら「Felix Mendelssohn Bartholdy(1809-1849)のロンドン演奏活動」日本音楽学会関西支部例会, 神戸大学, 2004/6/26

谷正人「イラン伝統音楽保存普及センターの目指した知識観・教育観」日本オリエント学会第46回大会, 東京外国語大学, 2004/10/24

谷正人「ダストガーというしくみ: イラン伝統音楽の即興を支える記憶のありかた」ラウンドテーブル「即興: 音楽生成のモデルとその実践をめぐって」東洋音楽学会東日本支部第13回例会, お茶の水女子大学, 2004/5/15

谷正人「イラン音楽にみるCharkh——演奏形式と楽曲構造から」日本中東学会第20回年次大会, 明治大学駿河台キャンパス, 2004/5/9

中村真「いかにしてヤナーチェクは『民族的』な芸術音楽を目指すに至ったのか?——初期の作品と理論的著作群(1870年代-1880年代)を中心に——」民族芸術学会第96回研究例会, 大阪市立東洋陶磁美術館, 2005/3/5

袴田麻祐子「寶塚少女歌劇にみる『西洋』の意味とその変化」日本音楽学会第55回全国大会, 名古屋芸術大学, 2004/11/6

福本康之「聖と俗の西洋音楽受容——仏教界の事例を中心に」『パネル: 音楽を通してみる近代日本の諸相』東洋音楽学会・西日本支部第222回定例研究会, 神戸大学発達科学部, 2005/2/5

福本康之(シンポジウム)テレビ公開討論「アジアにおける仏教音楽の歴史と可能性」(全2回), 韓国仏教学会&韓国仏教音楽学会(放送: 韓国仏教テレビ), 2004/5/26-27

山田高誌「1760年後半から80年代のナポリの喜劇オペラにおける“異国趣味”への趣味の異なり; ピッチンニとパイジェッロ、チマローザの作風から。」日本音楽学会・第55回全国大会, 名古屋芸術大学, 2004/11/7

Yamada, Takashi (山田高誌) “L’Impresa del Teatro Nuovo di Napoli negli anni 1770-71; il caso della “famosa” e mai documentata rappresentazione de *Le Trame per amore* di Paisiello”, Società Italiana di Musicologia, undicesimo convegno (イタリア音楽学会・第11回全国大会), Università di Lecce, Italia(イタリア・レッツェ大学), 2004/10/23

山田高誌「1770年、パーニーはナポリで「誰」を観た? ; 私立劇場興行師の銀行口座から再構築した、パイジェッロ《*Le Trame per amore*》の運営細目と、劇場運営」日本音楽学会・関東支部第308回例会, 東京芸術大学, 2004/4/10

[研究会]

小野真紀, What did Szymanowski experience in Biskra? [研究発表]: an attempt at historical reconstruction based on Bartok's collection” 伊東信宏, ステラ・ジブコバと共同(ワルシャワ芸術史家協会), 2004/11/16

谷正人「イラン音楽における『手癖』と『即興演奏』」国立民族学博物館2004年度共同研究「音楽と身体に関する民族美学的研究(代表者山田陽一), 国立民族学博物館, 2004/10/16

袴田麻祐子「憧れはフランス、花のパリ——昭和初期レビューをめぐる『パリ』イメージの構築」日仏文化交渉の研究班, 京都大学人文学研究所, 2005/2/28

牧野淳子(講演とワークショップ)「アジアの竹の音楽」神戸市長田区 PTA 連合会コンサート, 兵庫県立文化体育館, 2005/2/18

牧野淳子「音楽づくりを身近なものに——サウンドスケープからのアプローチ——」 教員研修会, 宝塚市立高司小学校, 2004/6/23

Yamada, Takashi (山田高誌) “La storia e la prospettiva di rappresentazione dell’opera barocca in Giappone”.

Simposium internazionale “I suoni di Ulisse”(モンテヴェルディ《ウリッセの帰還》と古楽オペラに関する国際シンポジウム), Centro Ricerche Musicali “Casa Piccinni” del Conservatorio di Musica “Niccolo Piccinni” di Bari(バリー音楽院付属音楽研究所), 2005/2/6

Yamada, Takashi (山田高誌), “L’Impresa de *Li napoletani in America* al Teatro de’ Fiorentini: nell’attività di Gennaro Bianchi impresario del Teatro Nuovo.” Sinposium internazionale “Gluck”(グルックに関する国際シンポジウム), Centro Ricerche Musicali “Casa Piccinni” del Conservatorio di Musica “Niccolo Piccinni” di Bari(バリー音楽院付属音楽研究所), 2004/10/18

山田高誌「町から宮廷へ、娯楽から作品へ、ナポリの喜劇オペラの転換点1760-70年代 ——パイジェロ作曲『中国の偶像』(1767)、『なりきりソクラテス』(1775)における笑い」早稲田大学演劇博物館演劇研究センター21世紀COEプログラム, 西洋演劇理論研究「オペラ研究会」早稲田大学, 2004/4/27

(演劇学)

菊池あずさ「蜷川幸雄の演出——「新宿時代」を中心に——」 待兼山演劇懇話会, 大阪大学, 2005/3/23

菊池あずさ「蜷川幸雄の『ハムレット』——平幹二郎から藤原竜也まで——」 近現代演劇研究会, 大阪大学, 2004/7/24

澤野加奈「「妙」としての「無の体」——無の内容とその現出方法をめぐって」 待兼山演劇懇話会, 大阪大学, 2004/7/30

陶原洋子「資料紹介 謡曲「水分」六麓会, 神戸勤労会館, 2004/12/12

田中みどり「『戀に破れたるサムライ』(1937年)の上演意義」 待兼山芸術学会, 大阪大学, 2004/4/17

團夕紀子「上方板歌舞伎浄瑠璃『絵番付』小考——宝暦期浜芝居を中心に——」 芸能史研究会大会, キャンパスプラザ京都, 2004/6/6

團夕紀子「講読『大友真鳥』 演劇研究会五月例会, 2004/5/29

團夕紀子「講読『大友真鳥』 演劇研究会四月例会, 2004/4/17

中尾薫「田安家と明和改正謡本——田安家旧蔵版本番外謡本の書込みをめぐって——」 芸能史研究会大会, キャンパスプラザ京都, 2004/6/6

正木喜勝「アヴァンギャルドからプロレタリアへ——村山知義の場合——」 文芸学研究会, 大阪大学, 2005/3/5

正木喜勝「村山知義作・演出『孤児の処置』の上演分析」 待兼山演劇懇話会, 大阪大学, 2004/7/30

榊井智英「近代俳優術とプラーナ・気の関係」 近現代演劇研究会, 大阪大学, 2004/12/18

【2005年度】

(音楽学)

井手口彰典「欲望するコミュニティ——萌えソング試論——」 日本ポピュラー音楽学会第17回大会, 弘前大学, 2005/11/13

井手口彰典(ワークショップ)「ポピュラー音楽研究とオタク系文化の接合点を探る」(コーディネータ担当, 共同発表者: 木本玲一, 寺田雅典, 吉光正絵), 日本ポピュラー音楽学会第17回大会, 弘前大学, 2005/11/13

井手口彰典「デジタルオーディオプレイヤー論——〈持ち出すもの/参照するもの〉という視点から——」 日本音楽学会第56回全国大会, 明治学院大学, 2005/10/12

小野真紀「転換点としてのオペラ《ロゲル王》——シマノフスキとポーランドの文化的背景——」 日本音楽学会第319回例会(東洋音楽学会西日本支部第224回定例研究会と合同), 京都市立芸術大学, 2005/6/18

小林ひかり「エドヴァルド・グリーグの連作歌曲《丘の妖精》における詩と音楽——〈イェットレの小川で〉を例に」 日本音楽学会中部支部第85回例会, 名古屋芸術大学, 2005/12/10

中村真「鳴り響く母語の形式としての『民族性』——オタカル・ホスチンスキーの文学と音楽に関する著作における『民族性 *národnost*』の理念」 第23回文芸学研究会, 神戸女学院, 2005/7/23

山口篤子「昭和戦前期の合唱運動——国民音楽協会の活動を中心に」 待兼山芸術学会第15回研究発表会, 大阪大学, 2005/4/9

Yamada, Takashi (山田高誌) 「*L'Oriente e l'esotismo in Niccolò Piccinni: dal Finto turco(1762) a Li Napoletani in America(1768)*」(ニコロ・ピッチンニにおける東洋とエキゾティスム：《偽のトルコ人》(1762) から《アメリカのナポリ人》(1768) まで) ペトゥルツェリ歌劇場(イタリア、パリの市)主催、国際研究集会《モーツァルト、西洋音楽、オスマン朝の世界》、パリ音楽院附属音楽研究所“カーサ・ピッチンニ”, 2006/3/18

Yamada, Takashi (山田高誌) 「La versione napoletana de“*Il Matrimonio segreto* di Cimarosa” (1793, T.Fiorentini): Su due arie sostitutive nella partitura ritrovata nella collezione del Kunitachi Music College di Tokyo.(チマローザ《秘密の結婚》ナポリ版(1793); 東京・国立音楽大学コレクションに新発見された, ナポリ版(1793)楽譜にみられる2曲の差し替えアリアについて) イタリア音楽学会(Societa' Italiana di Musicologia)第12回全国大会, 国立ペーザロ音楽院, 2005/10/21

山田高誌「チマローザ《秘密の結婚》(1792)の秘密; 国立音楽大学より新発見された, ナポリ版楽譜(1793)の特定と, 差し替えアリアについて」国際音楽資料情報協会(IAML)日本支部例会, 国立音楽大学, 2005/5/14

山田高誌「ピッチンニの“コメディ・ラルモワイヤント”からの脱却?——ピッチンニ作曲・喜劇オペラ《ニセのトルコ人》(1762, Napoli) の源流となる新発見台本資料(1749, Napoli)と、《アメリカのナポリ人》(1768, Napoli) との比較から明らかになる1760年代の様式転換」早稲田大学演劇博物館演劇研究センター21世紀COEプログラム「オペラ/音楽劇研究会」第39回例会, 早稲田大学, 2005/5/10

(演劇学)

上野暁子「世前期における当道座の音曲活動——琵琶から箏・三味線への展開——」藝能史研究会全国大会, キャンパスプラザ京都, 2005/6/5

小川幹雄「ゴードン・クレイグの『劇場芸術』を巡る舞台監督の概念について」西洋比較演劇研究会, 成城大学, 2005/11/5

小川幹雄「岸田國土を読む」日本近代演劇史研究会, 共立女子大学, 2005/10/29

小川幹雄「地域劇場における創造的なテクニカル・マネージメントとシアター・コミュニティ・プロジェクトの概念について」日本演劇学会研究集会, 浅井学園大学, 2005/10/9

陶原洋子「輪読『わらんべ草』十五段」六麓会, 神戸市勤労会館, 2005/11/13

陶原洋子「輪読『わらんべ草』十四段」六麓会, 神戸市勤労会館, 2005/10/9

中尾薫「田安家旧蔵版本番外謡本への書込み——賀茂真淵の関与をめぐって——」待兼山演劇懇話会, 大阪大学, 2006/3/22

中尾薫「明和本『源氏物語』関係曲の諸問題」東海能楽研究会, 名古屋女子大学, 2005/11/20

中尾薫「観世元章と田安宗武——能面制作などをめぐって——」待兼山演劇懇話会, 大阪大学, 2005/9/27

中尾薫「輪読『わらんべ草』十四段」六麓会, 神戸市勤労会館, 2005/9/18

中尾薫「輪読『わらんべ草』十三段」六麓会, 神戸市勤労会館, 2005/8/28

中尾薫「明和改正謡本の改訂経緯——謡曲改正草案帖の再検討から——」日本演劇学会大会, 大阪大学, 2005/6/11

中山亜衣「森岩雄の初期評論活動——「第八芸術貧燈録」を中心に——」待兼山演劇懇話会, 大阪大学, 2006/3/22

正木喜勝「不統一の演劇——村山知義演出『ユーディット』の上演分析——」待兼山演劇懇話会, 大阪大学, 2005/9/27

栢井智英「俳優教育アレクサンダー・テクニクの現代的展開」日本演劇学会全国大会, 大阪大学, 2005/6/19

横田洋「スタイリストとしての小山内薫——『ある敵討』(1926)をめぐって」近現代演劇研究会, 大阪大学, 2005/12/24

横田洋「水谷八重子のハムレット」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター・プロジェクト研究「近代日本における音楽・芸能の再検討」京都市立芸術大学, 2005/8/26

横田洋 演劇学領域横断フォーラム「メディア、観客、パフォーマンス——明治・大正芸能史の再発見」日本演劇学会全国大会, 大阪大学, 2005/6/17

(3)その他(書評・翻訳など)

【2004年度】

(音楽学)

井手口彰典, 白石奏人共同(レクチャーの企画、構成), 音楽学オープンセミナーシリーズ「阪大コレgium・ムジクム」

- 第2回「スピネット～家庭で愛された小さな鍵盤楽器～」(講師＝三島郁；監修＝根岸一美、伊東信宏), 大阪大学旧医療技術短期大学部本館1階人文学オープンセミナー室(大阪), 2005/3/17
- 井手口彰典「第16回大会報告 ワークショップA」日本ポピュラー音楽学会『NEWSLETTER』#63, 2005/2
- 岡村睦(企画構成・編曲及びレクチャー)「きらめきコンサート——バロック音楽への誘い——」きらめきキッズアカデミー生涯学習会館多目的ホール(神戸市), 2004/10/23
- 小野真紀「特集: 大学院ってどんなところ? 音楽大学のその先 学生さんの声」『ショパン』(ショパン), 246(7月号), p. 47, 2004/7
- 川端美都子([演奏会の解説]プログラム・ノート), 話担当「アルゼンチンの20世紀の奇才アルベルト・ヒナステラの世界」企画(瀬田敦子と共同), カフェ・クレオール(神戸), 2004/7/30
- 小石かつら([演奏会の解説]プログラム・ノート)「多川響子ピアノリサイタル」青山記念音楽会館バロックザール(京都), 2004/11/7
- 小林ひかり([演奏会の解説]プログラム・ノート)「日本・ノルウェー音楽家協会第5回演奏会《ニューイヤーコンサート2005》カスケードホール(東京), 2005/1/8
- 小林ひかり([演奏会の解説]プログラム・ノート)「日本・ノルウェー音楽家協会第4回演奏会《山々からきこえる歌》ノルウェーの民俗音楽と芸術音楽」東梅田教会礼拝堂(大阪), 2004/10/2
- 小林ひかり([演奏会の解説]プログラム・ノート)「日本・ノルウェー音楽家協会第2回演奏会《新しい時代にむかって》ノルウェーの管楽・ピアノ作品」自由学園明日館講堂(東京), 2004/6/12
- 小林ひかり([演奏会の解説]プログラム・ノート), 話・編曲担当「ノルウェー音楽家協会第1回演奏会《ノルウェーの抒情》グリーグとその仲間たち」企画(井上勢津と共同), タワーホール船堀(東京), 2004/4/2
- 白石奏人, 井手口彰典共同(レクチャーの企画、構成), 音楽学オープンセミナーシリーズ「阪大コレギウム・ムジクム」第2回「スピネット～家庭で愛された小さな鍵盤楽器～」(講師＝三島郁；監修＝根岸一美、伊東信宏)大阪大学旧医療技術短期大学部本館1階人文学オープンセミナー室(大阪), 2005/3/17
- 白石奏人(公演プログラム), ひょうごオリジナル音楽公演「佐渡裕とスーパーキッズ・オーケストラ」(神戸, 和田山, 龍野, 2004/8/28-30)公演プログラム曲目解説(※曲目＝ホルスト《セント・ポール組曲》より第1, 2, 4曲; ヴィヴァルディ《四季》より〈夏〉; バッハ《無伴奏チェロ組曲第3番》より〈前奏曲〉; モーツァルト&シュレーダー《アイネ・クライネ・ラッハムジーク》; 《カーペンターズ・メドレー》; アンダーソン《プリンク・プランク・プルンク》; バッハ《無伴奏チェロ組曲第2番》より〈前奏曲〉; レスピーギ《リュートのための古風な舞曲とアリア》より第1, 3, 4曲), 2004/8/28-30
- 谷正人(事典項目)『総合百科事典デジタルポプラディア2005』「ペルシア音楽」項目の音源(サントゥール演奏)と解説(ポプラ社), 2004/11
- 谷正人(共著)「イラン音楽の楽しみかた——三つの観点から——」『イランを知るための65章～エリア・スタディーズ～』(明石書店), pp. 132-137, 2004/9
- 福本康之(解説: CD)「念仏～日々のうた」浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター勤式・仏教音楽研究所, HONG0403, 2004/12
- 福本康之(放送: 企画・台本・出演), NHK-FM「バロックの森」日本放送協会, 2004/4/26-30, 5/24-28, 6/21-25, 7/19-23, 8/23-27, 9/13-17
- 牧野淳子(セミナーコンサート)「藝術夜会——竹の心——」OBPアーツプロジェクト・レクチャー実演シリーズ 田嶋謙一氏と対談, 大阪ビジネスパーク松下IMPビル, 2005/3/1
- 牧野淳子(ワークショップ)「竹による創造的な音楽づくり」福祉におけるグリーン化セミナー, (財)たんぼぼの家アートセンター-HANA, 2005/2/20
- 牧野淳子(演奏とワークショップ)「海のシルクロードの国々をたどる文化の伝播」ワールドフェスタ2005(バンブーアンサンブル京都と共演), (財)亀岡市交流活動センター, 2005/2/6
- 牧野淳子(演奏とワークショップ)「竹楽器コンサート&ワークショップ」バンブーフェスタ(バンブーアンサンブル亀岡と共演), (財)亀岡市交流活動センター, 2004/10/9

山口篤子(寄稿)「ブレイクタイム」『ホールニュースとよなか』(豊中市), 192~204, 2004/3~2005/3
山口篤子(演奏会の解説)「池田混声合唱団秋のコンサート ハイドン オラトリオ《四季》」池田市民文化会館, 2004/9/12
山田高誌(楽譜校訂) Edizione critica “Li Napoletani in America” (1768, Napoli); Commedia per musica di Francesco
Cerlone con musica di Niccolò Piccinni. (Centro Ricerche Musicali “Casa Piccinni” del Conservatorio di musica di
Bari, 2004/10) XVIII(43)p.+ 454p.

(演劇学)

團夕紀子『日本大学総合学術情報センター所蔵 DVD 版歌舞伎番付集成』(作業分担)粕谷宏紀・歌舞伎年表研究会編, 八
木書店刊, 2004/11

【2005年度】

(音楽学)

家田恭(寄稿)「私のチェコ・ノート(1)『テレジーン強制収容所の音楽家とその活動』『ブルタバ』76, 関西チェコ/スロ
バキア協会, unpagged, 2005/11/3
井手口彰典(寄稿)「オタクとコミュニケーション」『Interface Humanities』06, 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「イ
ンターフェイスの人文学」ニューズレター, p. 20, 2005/10
小林ひかり(演奏会解説)プログラム・ノート「日本・ノルウェー音楽家協会第 10 回演奏会《ニューイヤーコンサート
2006》ピアノアンサンブルの世界」メイシアター(大阪), 2006/1/22
小林ひかり(演奏会解説)プログラム・ノート「日本・ノルウェー音楽家協会第 9 回演奏会《F.R.ヴェクレ&L.グラッセ
ルをむかえて》ノルウェー・ホルン音楽の現在」ミレニアムホール(東京), 2005/9/28
小林ひかり(演奏会解説)プログラム・ノート「日本・ノルウェー音楽家協会第 7 回演奏会《音楽と映像でめぐるノル
ウェーの旅》Vol. 1 北ノルウェー&西ノルウェー編」めぐろパーシモンホール(東京), 2005/6/24
小林ひかり(演奏会解説)プログラム・ノート「日本・ノルウェー音楽家協会第 6 回演奏会《グリーグ・アカデミー出身
者によるコンサート》ベルゲンの思い出」札幌・時計台ホール(札幌), 2005/4/14
沈金雲(寄稿)「淡妝濃抹應相宜——有感澳門第 25 屆校際歌唱比賽」『澳門日報・芸海版』(澳門日報社), 2006/3/4-5
山口篤子(演奏会解説), 池田室内合唱団第 12 回定期演奏会, みつなかホール(大阪), 2005/4/16
山田高誌(演奏会解説), シャコモ・カリッシミ生誕 400 周年記念コンサート: オラトリオ編, 指揮・ジャンルーカ・カブ
アーノ(野村国際文化財団助成公演)「“オラトリオ”における宗教音楽としての“オラトリオ”」「ジャコモ・カリッシミ
」「《イエフタ》」「《ヨナ》」各解説, 東京カテドラル聖マリア大聖堂(東京), 2005/7/22
山田高誌(寄稿)「イタリア初の試み! バジリカータ大学院に、ルネサンス・バロック音楽専門課程が開設される」『古楽
情報誌 アントレ』(Entree 編集部), 167, pp. 11-13, 2005/4

(演劇学)

陶原洋子(紹介)「21 世紀 COE 国際日本学研究叢書 I『外国人の能楽研究』『藝能史研究』(藝能史研究会), 172, 2006/1
陶原洋子『申楽談儀』の「しやくめいたる」について『能』(京都観世会館), 567, p. 1, 2005/8
陶原洋子「2005 年度いちよう祭展示会展示図録・解説」(大阪大学付属図書館), pp. 23-24, 2005/4
中尾薫(解説)『古梅園文庫展』(奈良女子大学古梅園プロジェクト), pp. 4-8, 2005/11
中尾薫「醜恩庵に残る観世大夫の書状」『能』(京都観世会館), 566, p. 1, 2005/7
中尾薫「平成17年度いちよう祭展示会展示図録・解説」(大阪大学付属図書館), 2005/4
橋場夕佳「観世大夫元章と明和本『習十番』への書入」『能』(京都観世会館), 565, p. 1, 2005/6
正木喜勝「遊女・宮城野はどうあるべきか——『宮城野プロデュース』の上演をみて——」『act』(国際演劇評論家協会
AICT 日本センター関西支部), 7, pp. 6-7, 2005/11
正木喜勝「妹と核兵器、ダンスホールと核戦争——ニットキャップシアター『美脚ルノアール』——」『act』(国際演劇
評論家協会 AICT 日本センター関西支部), 5, pp. 10-11, 2005/5

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2004年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)
2005年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004年度 学部:0名 大学院:3名 (計3名)
2005年度 学部:0名 大学院:2名 (計2名)

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度～2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)
なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004年度～2005年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4 名

2004年度:2名 2005年度:2名

<内訳> 放送局 1名 新聞社 1名 プログラマー 1名 技術職 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

3名

9. 刊行物

2004年度 『演劇学論叢』第7号
2005年度 『阪大音楽学報』第3号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

民族藝術学会事務局	2004年度・2005年度
日本演劇学会事務局	2004年度・2005年度
近現代演劇研究会事務局	2004年度・2005年度
近現代演劇研究会例会開催	2006年3月4日・5日 2005年12月24日, 10月15日, 7月16日, 5月14日, 2月23日～25日 2004年12月18日, 10月30日, 7月24日, 5月29日
日本演劇学会全国大会開催	2005年6月18日・19日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

音楽学オープンセミナーシリーズ 阪大コレギウム・ムジクム

於:大阪大学

第5回 アルゼンチン大衆音楽の世界——タンゴだけではない、その魅力——	2006年3月22日
第4回 インドネシア、ヌサンタラ交響楽団を迎えて——交流会のタベ——	2005年10月3日
第3回 フィレンツェのルネサンス音楽——オペラ誕生への足取り——	2005年4月7日
第2回 スピネット——家庭で愛された小さな鍵盤楽器——	2005年3月17日
第1回 ジョン・ケージのプリペアド・ピアノ——書かれた音と鳴り響く音——	2004年12月16日

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

(音楽学)

本専門分野における教育活動の中心は、根岸、伊東の両教員が担当する演習である。ここでは、卒業論文、修士論文、博士論文の主題、研究手法、論文構成などについて常に真剣な討議が行われ、着実な成果を挙げている。これに加えて、年に一回開催されている合宿でも、これらの論文についての中間報告会が行われている。こういった論文指導を中心とした教育活動のほか、研究室主催の「コレギウム・ムジクム」が年に数回開催されているが、これは本研究室で行われている多様な研究活動をレクチャー・コンサートという形で広く一般に還元するものである。2004年度には2回、2005年度には3回開催され、インドネシアのガムラン音楽やアルゼンチンの大衆音楽など多彩なテーマについて、レクチャーと実演が行われた。また、本専門分野では、社会との連携についても力を入れはじめており、音楽ホール、新聞社などにおける音楽の実務に関するインターンシップを実施してきた。これらについては、事前指導、事後指導、報告会なども行い、また報告書も作成している。さらに下記の研究活動でふれる人文社会振興プロジェクト、「魅力ある大学院教育イニシアティヴ」などのプロジェクトに関連する、様々な芸術施設をつなぐフォーラムの形成や、音楽の実践家を招いてのワークショップの実施などにおいても、本研究室の大学院生は中心的な役割を担っているが、このことも本研究室における教育活動の充実に貢献している。

(演劇学)

本研究室の教育活動は、2人の専任教員と毎年2名前後の非常勤講師とで行われている。専任教員は能楽を中心とする日本伝統演劇の歴史と理論、及び作品分析を中心にすすめている天野文雄教授と、西欧近代演劇の歴史と理論、作品分析を中心にすすめている永田靖教授との2人の構成である。毎年、演劇史、演劇学、作品講読、外国語講読、などの授業を5コマ前後は担当して教育に当たっている。学部生は当該年度の2年間でのべ39名、大学院学生は前期後期合わせてのべ34名の教育に当たってきている。とりわけ大学院学生の教育効果は、博士論文1本(論文博士)、学会誌、紀要、機関誌などへの論文14本、また学会・研究会発表なども活発に指導し、計31回の研究発表を行っている。その内実は、日本演劇学会、能楽学会などの全国規模の大会や研究集会、また学会の分科会である近現代演劇研究会や六麓会などの研究会や、個別の研究プロジェクトでの研究発表など多岐にわたるようになり、大学院学生の活動の活発さが窺われる。ことに日本演劇学会と能楽学会への参加の度合いは著しく、本研究室が学会活動の主要な部分を担いつつあることが分かる。難をいえば、提出された博士論文が1本であったのは、博士後期学生の数からすればいささか少ないように思われるが、現在執筆中また、予備論文の段階であるので今後提出されていくものと思われる。問題点としてあるとすれば、日本伝統演劇のジャンルへの海外からの留学生は研究生を含んで少なくはないが、西欧近代演劇のジャンルへの留学生が僅少である点である。日本へ西欧演劇を学びに来る留学生が少ないのは理解できなくもないが、今後世界がグローバリゼーションの中でさらに関係を強めていく傾向にある現在、このジャンルへの留学生がもう少し増えることが望まれる。また、高度専門職業人、とりわけ研究職への就職が極少である点は依然として課題を残している。ただ、演劇学という日本において稀少の専攻である点を考慮すれば、一概に研究室だけの問題でもないと思われる。少なくとも、本研究室の大学院修了者に非常勤講師の職がないものではなく、その他の研究費などを併用することで、研究活動を今のところ維持できていることも明記しておきたい。また、学部学生とともに観劇実習、紀要・劇評誌発行、劇場研修などを行っている。観劇実習は、歌舞伎、能、浄瑠璃、小劇場、新劇、商業演劇などのジャンルから偏りなく、毎年5本の演劇を選択し、上演についての準備勉強を経た後に、観劇し、批評を書かせることで、上演そのものに触れさせる授業として受講者が多い。劇場研修とは、公立劇場と提携して、劇場の制作実務を経験させる教育プログラムである。2002年度以来継続して行っており、兵庫県立ピッコロ劇場の定期公演に研修生として学生を参加させ、演劇学の実践的な展開に向けて努力している。大学院生も、社会人入学者を含めて着実に増え、現在学部学生とあわせると40名ほどの学生が在籍して、それぞれの研究活動を行い、社会に開かれた大学院となっている。

12-2. 研究活動

(音楽学)

本専門分野は、本学文学研究科が中心となって採択された 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」について、特に「映像人文学」の分野と「モダニズムと中東欧の芸術文化」の分野で積極的な役割を果たし、海外調査、演奏会、シンポジウム、ワークショップの開催などを行ってきた。また、2004 年度に採択された日本学術振興会の「人文社会科学振興プロジェクト」においても「文学・芸術の社会的媒介機能」のうちの「コミュニティ・アート」に関わり、ゲストを招いての講演会や「実践会」と称するワークショップなどを主催し、成果をあげた。さらに 2005 年度から開始された「魅力ある大学院教育イニシアティブ」のプログラムにおいて、関西を中心とした芸術施設のフォーラム形成、および Web 上の芸術批評誌『diatxt.』編集などについても大きな役割を果たし、今後大きな展開が予測される。

こういった活動に加えて、根岸一美教授、伊東信宏助教授、上野正章助手の各教員はそれぞれに、日本音楽学会、東洋音楽学会、民族芸術学会などの学会において役員として活発な活動を展開している。大学院生も、これらの学会を中心に、極めて精力的な研究発表を行っており、学界に大きな寄与を果たしている。

また本研究室は論文集として『阪大音楽学報』の発行を続けている。これは、全国的に見ても稀な、音楽学に関する学術誌として今後さらに重要性を増してゆくものと思われる。これらの特筆すべき活動の他に、論文執筆、講演、解説や音楽評などの寄稿、などの通常の研究活動も非常に活発に行われており、全国的に見ても当研究室が、音楽学の分野における重要な拠点の一つを形成していると言っても過言ではない。

(演劇学)

天野文雄教授、永田靖教授とも、いずれも多くの論文や著書、また学会等への出席、会議運営などきわめて活発に研究活動を行っている。本研究室には、天野が副会長、永田が事務局長を務める日本演劇学会の事務局がおかれている。またその分科会の近現代演劇研究会は実質的に永田が主宰して、毎年 5 回ほどの研究会を行っている。また天野教授は日本演劇学会以外にも能楽学会、藝能史研究会、民族芸術学会などの役員として中心的メンバーであり続けており、それぞれの例会運営、個別のフォーラムなどの企画に中心的に関わっており、大学院学生などに対して、研究の面で学界に接する貴重な場を提供している。永田教授は近年国際会議への出席が頻繁となっており、FIRT 国際演劇学会を始め、主催する研究会を上海やソウルで開催して、アジア諸国における演劇研究と接続を図っている。また科研、COE、人文社会プロジェクトなどを通じて、学内外の研究会が増えていることも研究活動を活発化させることに通じている。天野、永田ともに、複数の科研グループの分担者となって研究会や研究を組織しており、これらの成果は科研費成果報告書ばかりではなく、個別の論文や学会発表に反映されている。これらは大学院学生の研究活動の活発化につながっており、その評価は上記「教育活動」において触れた。COE についても、「モダニズムと中東欧の芸術・文化」などの研究グループの事業推進者として研究活動をリードし、また日本学術振興会人文社会振興プロジェクトにおいても研究部門代表となり、研究活動を活発に行っている。総じて、近年の予算削減にもかかわらず、専任教員と大学院学生の研究活動はむしろ活発さを増しているようにも見える。これらの研究成果の発表活動である紀要も、毎年刊行しており、現在第 7 号を編集準備中である。これらのことを通して、日本伝統演劇と西欧近代演劇と細分化していくのではなく、広く演劇としてトータルに捉える視点を軸に、社会の中の営みとして理解する方向性も大切にしている。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004 年度～2005 年度の過去 2 年間)

1. 天野 文雄 教授

1946 年生。国学院大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。上田女子短期大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1996 年から現職。専攻：能楽研究。

1-1. 論文

天野文雄 『神歌』という名称と演式『おもて』87, pp. 8-9, 2005/12

天野文雄 「《桧垣》前場の設定をめぐる」『おもて』86, pp. 8-9, 2005/9

天野文雄 「能の復活上演の実際と課題——私の「復曲」参画体験から——」『国文学』50-7, pp. 77-83, 2005/7

- 天野文雄 『待謡』をめぐる二、三の問題 『おもて』 85, pp. 8-9, 2005/6
- 天野文雄 「東山雲居寺という場所——《自然居士》《花月》《東岸居士》の思想的背景——」 『鍊仙』 535, pp. 3-4, 2005/6
- 天野文雄 「《砧》の“三年の秋”とその背景——『戸令』の「再嫁」規定などをめぐって——」 『第五回廣田鑑賞会誌』 pp. 4-6, 2005/5
- 天野文雄 「世阿弥の『家名』を再考する」 『おもて』 84, pp. 8-9, 2005/3
- 天野文雄 「《花筐》復原覚書」 『第三八〇回大槻能楽堂自主公演能研究公演』 pp. 3-5, 2005/2
- 天野文雄 「原作《猩々》の上演から教えられたこと」 『国立能楽堂』 257, p. 6, 2005/1
- 天野文雄 「《高砂》の主題と成立の背景——応永二十九年の阿蘇大宮司雑掌の上洛と義持の治政をめぐって——」 『演劇学論叢』 7, pp. 14-51, 2004/12
- 天野文雄 「明和改正謡本と現代の能(二)——濁音から清音への改訂をめぐって——」 『演劇学論叢』 7, pp. 378-385, 2004/12
- 天野文雄 「貝塚御坊願泉寺蔵『翁之大事次第』をめぐる二、三の問題 『おもて』 83(能苑逍遥 24), pp. 4-5, 2004/12
- 天野文雄 「《田村》の「男体」や《芭蕉》《葛城》などの「女体」は世阿弥の芸論用語なるべし」 『おもて』 82(能苑逍遥 23), pp. 4-5, 2004/9
- 天野文雄 「開口についての覚書」 『横浜能楽堂〔ワキとその職能(六)〕』 p. 3, 2004/9
- 天野文雄 「ワキと地謡」 『横浜能楽堂〔ワキとその職能(五)〕』 p. 3, 2004/8
- 天野文雄 「空蟬はなぜ碁に負けたのか——《碁》を再読する——」 『能楽観世座サマースクール』 pp. 4-5, 2004/8
- 天野文雄 「「脇留め」とその歴史」 『横浜能楽堂〔ワキとその職能(四)〕』 p. 3, 2004/7
- 天野文雄 「新出能楽資料五点」 『おもて』 81(能苑逍遥 22), pp. 4-5, 2004/6
- 天野文雄 「アイの段におけるワキの語り」 『横浜能楽堂〔ワキとその職能(二)〕』 p. 3, 2004/5
- 天野文雄 「「真之次第」と「礼脇」」 『横浜能楽堂〔ワキとその職能(三)〕』 p. 3, 2004/5
- 天野文雄 「夢の憂世の中宿の——《頼政》の主題と趣向——」 『第二回廣田鑑賞会能冊子』 pp. 5-7, 2004/5
- 天野文雄 「夢幻能のワキは観客の代表なのか」 『横浜能楽堂〔ワキとその職能(一)〕』 p. 3, 2004/4

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

- 天野文雄 「五月十四日付世阿弥書状の「三村殿」について」 六麓会, 神戸女子大学, 2005/12
- 天野文雄 「近世末期の能界と仙助能——〔新出資料〕『仙助能停止一件書留』をめぐって——」 六麓会, 神戸市勤労会館, 2005/8
- 天野文雄 「世阿弥と月菴宗光——両者をつなぐもの——」 能楽学会世阿弥忌セミナー, 生駒宝山寺, 2005/8
- 天野文雄 「義教初政期の世阿弥——《花筐》制作の事情をめぐって——」 日本演劇学会大会, 大阪大学, 2005/6
- 天野文雄 「石田少左衛門友雪事績考——江戸初期謡師兼書家の足跡——」 待兼山芸術学会, 大阪大学, 2005/4
- 天野文雄 「世阿弥という名前——能役者の阿弥号の意味と来歴——」 第四回能楽学会大会, 早稲田大学, 2005/3
- 天野文雄 「《錦木》分析 曲趣・詞章をめぐって」 第四回能楽フォーラム, 大槻能楽堂, 2005/2
- 天野文雄 「《金札》の作意と成立の背景——永徳元年「花の御所」造営との関連——」 芸能史研究会十一月例会, 京都キャンパスプラザ, 2004/11

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 天野文雄 第18回観世寿夫記念法政大学能楽賞, 法政大学, 1996/1

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

民族芸術学会・理事	2003年4月～2006年3月
芸能史研究会・委員	2003年4月～2006年3月
日本演劇学会・副会長	2002年4月～2006年3月
能楽学会・委員	2002年4月～2006年3月

2. 根岸 一美 教授

1946年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。文学修士。大阪音楽大学専任講師，大阪教育大学助教授・教授，大阪大学文学部教授を経て現職。専攻：音楽学。

2-1. 論文

根岸一美「復活の夢限りなく」読売新聞大阪本社版夕刊(「潮音風声」欄), p. 7, 2004/11/17

根岸一美「オーストリアへ」読売新聞大阪本社版夕刊(「潮音風声」欄), p. 8, 2004/11/16

根岸一美「“音”の再現へ」読売新聞大阪本社版夕刊(「潮音風声」欄), p. 9, 2004/11/15

根岸一美「チラシも貴重」読売新聞大阪本社版夕刊(「潮音風声」欄), p. 7, 2004/11/12

根岸一美「ラスカとの出会い」読売新聞大阪本社版夕刊(「潮音風声」欄), p. 3, 2004/11/11

根岸一美「A. ブルックナー《テ・デウム》」京都シティーフィル合唱団第30回演奏会 プログラム冊子, pp. 8-11, 2004/11

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

根岸一美「武満徹《ノスタルジア》、ブルックナー《交響曲第7番》」大阪フィルハーモニー交響楽団第395回定期演奏会，ザ・シンフォニーホール，プログラム冊子, pp. 6-7, 2006/2/16-17；「曲目同じ」大阪フィルハーモニー交響楽団第43回東京定期演奏会，サントリーホール，プログラム冊子, pp. 6-7, 2006/2/14

根岸一美「ブルックナー《交響曲第3番》(第1稿)」NHK交響楽団第1560回定期演奏会，NHKホール，プログラム冊子, pp. 14-15, 2006/2/3-4

根岸一美「弓張美季ピアノリサイタル」『関西音楽新聞』p. 3, 2006/1

根岸一美「シューマン《クライスレリアーナ》、同《詩人の恋》、同《幻想曲ハ長調》；シューベルト《4つの即興曲》作品90、同《ピアノ・ソナタ》変ロ長調D960、同《4つの即興曲》作品142、同《小人》D771ほか歌曲4曲；ベートーヴェン《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第6番》、同《ピアノ・ソナタ第30番》、《同第31番》、《同第32番》」イエルク・デームス&フレンズ 77歳を祝って、フェニックスホール、プログラム冊子, pp. 5-10, 2005/12/12, 2005/12/14-15

根岸一美「ブルックナー《交響曲第6番》」NHK交響楽団第1554回定期演奏会，NHKホール，プログラム冊子, pp. 15-16, 2005/11/18-19

根岸一美「松澤須美ソプラノリサイタル」『関西音楽新聞』p. 3, 2005/11

根岸一美「兵庫県立芸術劇場オープニング・コンサート」『毎日新聞』(大阪本社版夕刊), p. 8, 2005/10/28

根岸一美「ザ・カレッジ・オペラハウス第12回推薦コンサート」『関西音楽新聞』p. 3, 2005/8

- 根岸一美「ブルックナー《序曲ト短調》、ブルックナー《テ・デウム》、シューベルト《交響曲第8番「ザ・グレート」》」
 関西フィルハーモニー管弦楽団第165回定期演奏会、ザ・シンフォニーホール、プログラム冊子, pp. 3-4, 2005/7/21
- 根岸一美「釜洞祐子プロデュース・オペラ・シリーズ、プーランク《カルメル会修道女の対話》」『関西音楽新聞』p. 6,
 2005/6
- 根岸一美「マーラー《花の章》、ベルク《ヴァイオリン協奏曲》、ブラームス《交響曲第2番》」大阪シンフォニカー
 交響楽団第101回定期演奏会、ザ・シンフォニーホール、プログラム冊子, p. 4, 2005/5/27
- 根岸一美「モーツァルト《交響曲第36番》、《ピアノ協奏曲第20番》、《ピアノ協奏曲第22番》」みつなかベストク
 ラシックス、ゲルハルト・ボッセ指揮、池田洋子ピアノ、神戸市室内合奏団「モーツァルトの2大ピアノ協奏曲と交
 響曲」川西市みつなかホール、プログラム冊子, p. 4, 2005/4/9
- 根岸一美「日本の絵～ヨーゼフ・ラスカ没後40年記念コンサート」(制作CD), 解説書, 18p., 2005/3
- 根岸一美「大阪シンフォニカー交響楽団第97回定期演奏会」『関西音楽新聞』p. 3, 2005/3
- 根岸一美「ヨーゼフ・ラスカの生涯と本日の演奏曲目について」「日本の絵～ヨーゼフ・ラスカ没後40年記念演奏会」
 プログラム冊子(含歌詞対訳), pp. 3-14, 2004/11
- 根岸一美「過去そして本日のプログラムによせて」大阪シンフォニカー交響楽団第11回いずみホール定期演奏会「古
 典派の現在」プログラム冊子, p. 7, 2004/9
- 根岸一美「ザ・タローシンガーズ第11回定期演奏会」『関西音楽新聞』p. 3, 2004/9
- 根岸一美「ヘンデル《メサイア》(プラウト版)」川西市民合唱団設立10周年記念・川西市市制施行50周年記念演奏会 プ
 ログラム, p. 6, 2004/7
- 根岸一美「第46回大阪国際フェスティバルから 劇場コンサート・オペラ《ラ・ボエーム》」『関西音楽新聞』p. 3, 2004/6
- 根岸一美「モーツァルト《ピアノ協奏曲第9番「ジュノーム」》, ブルックナー《交響曲第4番「ロマンティック」》」
 関西フィルハーモニー管弦楽団第165回定期演奏会 プログラム冊子, pp. 4-5, 2004/6

2-4. 口頭発表

根岸一美「ブルックナーの《テ・デウム》について」京都シティーフィル合唱団合宿, 関西セミナーハウス, 2004/9/4

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本音楽学会・関西支部監事

2003年4月～2007年3月

3. 永田 靖 教授

1957年生。1981年、上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988年、明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程
 単位取得退学。文学修士。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究所客員研究員、鳥取女子短期大学助教授を
 経て、1996年から大阪大学文学部助教授。2004年から現職。専攻：演劇学。(ロシア演劇史・近代演劇理論)

3-1. 論文

Yasushi Nagata 'Juro Kara and Transvestism in Modern Japanese Theatre'. Asia-Pacific Arts Forum 2005.

"(Un)Masking: The Art of Disguise/Disclosure in Asia-Pacific Cultures" National Taipei University of Arts. pp. 90-94. Oct. 2005

Yasushi Nagata 'Transformation of the Character —Contemporary Japanese Drama in the Cold War and Post-Cold War Era', International Symposium of Korean Theatre Studies Association "Innovation of Asian Theatre: Plot and Narrative". Hanyang University. pp. 294-304. Oct. 2005

永田靖 『「20 世紀演劇」の誕生と演劇史学の研究』科学研究費基盤研究(C)報告書, pp. 1-37, 2005/5

永田靖 「ロシア演劇史」『比較演劇史の方法論の構築』科学研究費基盤研究(B)(1)報告書, pp. 105-113, 2005/3

永田靖 「如月小春の 80 年代都市的演劇」『日本、もうひとつの顔』ストラスブール大阪大学フォーラム 2004, pp. 152-165, 2005/2

永田靖 「演劇史とナショナル・モデル——ロシアにおける演劇史記述の諸問題」『演劇学論叢』大阪大学大学院演劇学研究室, 7, pp. 249-268, 2004/12

永田靖 「演劇史としての回想——ボグダノフ・オルロフ『ノーラ』を稽古するメイエルホリド」を読む『演劇学論集』日本演劇学会紀要, 42, pp. 33-50, 2004/11

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖 「純粋と混淆——両大戦間の東欧アヴァンギャルド演劇の閃光」『アヴァンギャルド宣言——中東欧のモダニズム』三元社, pp. 277-278, 2005/9

永田靖(書評)「瀬戸宏著『中国話劇成立史研究』(東方書店)」『ACT』6, 国際演劇批評家協会日本センター関西支部, pp. 18-19, 2005/8

永田靖 「演劇教育インタビュー」『日本演劇学会演劇教育プロジェクト活動報告』日本演劇学会, pp. 18-23, 2005/6

永田靖 「夢の回廊——頼声川演出表演工作坊『如夢之夢』を見る」『ACT』5, 国際演劇批評家協会日本センター関西支部 pp. 18-19, 2005/5

永田靖 「批評についてこう考える」『季刊上方芸能』155, 上方芸能, pp. 48-49, 2005/3

永田靖 「パフォーマンスと社会参加」『芸術 コミュニケーション デザイン』国際フォーラム 人文社会プロジェクト 「芸術とコミュニケーションの実践的研究」 p.8, p. 67, 2005/3

永田靖 「パリ陥落と『ボン・ヴォヤージュ』」『ボン・ヴォヤージュ』日本配給用プレスキット, Asmik Ace, pp. 18-19, 2004/10

永田靖 「ロシア演劇は我らの同時代人!？」『ACT』創刊号, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 16-17, 2004/5

3-4. 口頭発表

Yasushi Nagata Disciplinary Moves: Performance Studies Years On. Discussant. The IV International Colloquium of Theatre Studies. Meiji University. 27 March 2006

永田靖 「アナトーリイ・キムと朝鮮系ロシア演劇の展開」日本演劇学会分科会近現代演劇研究会ソウル集会, 韓国藝術総合学校演劇院, 2006/3/4

永田靖 「コミュニティ・アート報告」人社プロ「文学・芸術の社会的媒介機能」第1回活動報告・研究交流会, 東京大学, 2005/11/27

永田靖(合評会)「瀬戸宏著『中国話劇成立史研究』(東方書店 2005)をめぐって」西洋比較演劇研究会 11 月例会, 成城大学, 2005/11/5

Yasushi Nagata Emigre and Touring a way to meet Russian theatre in the Central-East Europe. International Symposium. Aspects of Central- & East-European Arts. Art, Architecture, Theatre & Music. Osaka University. Nakanosima Center. 31 Oct. 2005

Yasushi Nagata Juro Kara and Transvestism in Modern Japanese Theatre. Asia-Pacific Arts Forum 2005. International Conference on "(Un)Masking: The Art of Disguise/Disclosure in Asia-Pacific Cultures" National Taipei University of Arts. 11 Oct. 2005

Yasushi Nagata Transformation of the Character Contemporary Japanese Drama in the Cold War and Post-Cold War Era, International Symposium of Korean Theatre Studies Association "Innovation of Asian Theatre: Plot and Narrative". Hanyang University, Seoul. 1 Oct. 2005

Yasushi Nagata A Portrait of Family—Japanese Contemporary Theatre in the Postwar Era. Lecture. Korean National University of Arts. 30 Sept. 2005

Yasushi Nagata Intercultural and Hybrid Theatre; Finland, Ukraina and Japan. New Scholars Forum. Chair. University of Maryland, International Federation for Theatre Studies, Annual Conference. Citizen Artist: Theatre, Culture and Community. 28 June 2005

永田靖「演劇／歴史／国家／地域——グローバル化とローカル化の時代における演劇史構築の可能性」日本演劇学会全国大会, 大阪大学, 2005/6/19

Yasushi Nagata, Sanat-Art and Social Engagement, commentator, International Forum: Art and Communication, 14 March 2005

永田靖「劇と場所」日本演劇学会分科会近現代演劇研究会上海集会, 上海戲劇学院, 2005/2/24

永田靖「アジア演劇への／からの研究視座」司会, 日本演劇学会秋の研究集会, 福岡女学院大学, 2004/11/27

永田靖「世界の最先端をゆく舞台芸術」『国境を越えた舞台芸術』舞台美術家協会, 大阪芸術大学, 2004/11/15

Yasushi Nagata, Lin Yu Pin, Le theatre moderne japonais et son double – La renaissance et l'évolution du theatre d'avant-garde japonais dans les années 80's, Forum 2004 de l'Université d'Osaka a Strasbourg, 6 Nov. 2004

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2002 年度～2004 年度、基盤研究(C)(2)、代表者：永田靖

課題番号：14510063

研究題目：「20 世紀演劇」の誕生と演劇史学の研究

研究経費：2004 年度 直接経費 700 千円

研究の目的：

- ① 本研究は 3 年計画の研究である。従来の演劇研究は各国別の言語域に分けて独自の発展様態をたどる研究が多かった。しかし 20 世紀演劇は 19 世紀までの演劇と、様々な理由で様相を異にしており、「20 世紀演劇」という様式を生み出すに至ったと考えられる。それは 20 世紀に特有の現象、交通網の発達や情報伝達手段の高速化などによって、それまでになく、多くの地域での連鎖によって演劇が形成されている。そのためにこの時代に形成された演劇は幾つかの演劇的文化を共有し、また欧米世界の多くの場所で共有しうる主題を持つことになった。この研究では、その「20 世紀演劇」が誕生し展開する経緯を踏まえながら、「20 世紀演劇」なるものの本質を解明する。
- ② 先に触れたように、現在の演劇研究は当該の言語による各国別の研究が主流であった。それはそれで豊かな成果をもたらしたといえるが、現在の段階で演劇研究がなすべき事は、それらの縦に積みあげられた研究を横断的に調査検討を加えていって、再整理することだろうと思われる。とりわけ 20 世紀には演劇における異文化交流が活発化し、地域的な演劇ではなく、よりグローバルな演劇の形態が探求されている。この研究はそのような演劇の異文化交流のあり方にも視野を向けるもので、まさに現代的な課題を孕んでいると思われる。さらに、この研究では、20 世紀の演劇の誕生に焦点をしぼり、横断的に考察していきたい。第 2 には、それは 19 世紀演劇との関係によって考察される必要がある。従来は 19 世紀と 20 世紀とは演劇的に断絶として考えられていたが、19 世紀の広い演劇的土壌の中から 20 世紀的な演劇が誕生してきている。19 世紀との連続の側面から 20 世紀演劇に照明を当てる必要が生じている。第 3 に

は、大衆娯楽演劇との関係の中で 20 世紀演劇の誕生を考える。従来の演劇史演劇学では芸術的な価値を議論する傾向が高く、20 世紀演劇は、芸術のモダニズムという枠組みの中で議論されてきている。しかし 20 世紀演劇には、19 世紀後半期以後の大衆娯楽演劇の諸要素が抜きがたく吸収されており、その側面からの照射が必要とされている。このような研究をなすためには、演劇史研究の渉猟が不可欠となる。演劇の場合には、他の芸術ジャンルと異なって、作品自体は残らない。そのため、過去の作品の研究をする場合には、歴史的研究を基礎に据えねばならない。演劇学は 20 世紀初頭から開花した比較的若い学問であるが、演劇史を研究する場合には、その演劇の史的記述のイデオロギーを検討していかなければならない。20 世紀後半の人文諸学の発達によって、歴史記述の客観的な記述は言わば疑問に付され、歴史的記述もまたイデオロギー的な負荷を備えていることが明らかになっている。そのために、基本的に演劇史の研究は、演劇史学の研究でもある必要がある。この研究が、演劇史学の研究を含まざるをえないのはこのためである。ただ演劇的な事実を回収していくのではなく、その史的事実が記述されているイデオロギーを相対化することなしには、演劇史研究は成り立ち得ない時点に来ているのである。これらの 4 つの点がこの研究を独自のものとするだろう。第 1 に、各国別の演劇研究ではなく、それらを横断的に渉猟して、20 世紀に特徴的だった「20 世紀演劇」的なものの芸術的本質を把握する。第 2 に、それは 19 世紀までの演劇との対極的な視野のもとに考察されることになるだろう。と同時に、第 3 に同時代の大衆娯楽演劇という芸術研究から抜け落ちたジャンルとの連鎖の中で考察される必要がある。そして最後に、従来の演劇史研究のイデオロギーを再検討することになるだろう。

この研究は基本的には演劇研究の分野で書き継がれてきた演劇史研究を根底から洗い直すことになるだろう。例えば、Oscar Brockett や Alladice Nicoll は 20 世紀後半の演劇史研究を支える演劇史を書き継いできている。Brockett の代表的なものは *History of the Theatre*. Allyn&Bacon. であるが、これは 1968 年に出版され、世界各国の演劇学科で教科書に採用されることになる演劇史であるが、現在これは 8 版を数えている。あるいは Nicoll の *The World Drama* は 1949 年に初版された後、改訂を続け、10 版を数えている。が共に各国別の記述に重点がある。この研究は演劇研究の成果を再整理することで演劇の美的特質を解明するものである。現在までのところ、この方向性での研究は、戯曲(ドラマ)研究では一定の成果を見せている。それは近代劇という様式が広く欧米アジアに展開されたために、各国別研究にとらわれず、近代劇の精神を研究者が広く探究するところとなっている。しかし、上演をも含めたこの種の研究は現在までのところそれほど顕著なものではない。というのも、演劇研究においては、基本的には上演研究よりも、戯曲研究が先に行われ、広く成果を見せたからである。上演研究は、どうしても研究対象が戯曲のようにテキストに固定されるのではなく、過去の資料に痕跡がのこされるだけであるので、戯曲の研究と比較すると、進度が遅いということになる。しかし、現在の演劇研究の深化を見ると、おおよそ上演研究もほぼ揃い始めており、申請者の見るところ、この種の研究は今後多数成果を見せてくるように思われる。この研究はその意味でも新しい試みになるだろう。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 21 世紀 COE プログラム分担

3-7-2. 人文社会振興プロジェクト「文学・芸術の社会的媒介機能」プロジェクト分担

3-8. 学会役員等の引き受け状況

International Federation for Theatre Research (国際演劇学会) ・理事	2004 年 11 月～現在
日本演劇学会 ・理事	2002 年 4 月～現在
同上 ・事務局長	2002 年 4 月～現在
同上 ・分科会近現代演劇研究会事務局	2000 年 12 月～現在
日本映像学会 ・理事	2002 年 4 月～現在
同上 ・関西支部幹事	2002 年 4 月～現在
同上 ・紀要『映像学』編集委員	2002 年 4 月～現在
同上 ・国際版紀要 ICONICS 編集委員	2002 年 4 月～現在
日露演劇交流推進会議 ・理事	2002 年 3 月～現在

4. 伊東 信宏 助教授

1960年京都生れ。大阪大学文学部卒業，同大学院博士課程単位修得退学。文学修士。リスト音楽院，ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所などに留学。1993年より大阪教育大学助教授。2004年4月より現職。

4-1. 論文

伊東信宏「ロマの楽師になる」『民博通信』111, pp. 7-9, 2005/12

伊東信宏「ルーマニア民俗音楽の「性格」をめぐって：エネスク《ヴァイオリン・ソナタ第3番》に関するいくつかの論点」『待兼山論叢』39, pp. 1-22, 2005/11

伊東信宏「音楽機械の夢のもつれ」井口壽乃，関府寺司編『アヴァンギャルド宣言：中東欧のモダニズム』三元社，pp. 275-276, 2005/9

Nobuhiro ITO “Japanese composers confront Japanese tradition: works by Michio Mamiya and Minao Shibata”, *Handai Ongakugaku-ho*, Vol. 3, pp. 57-70, 2005/4

伊東信宏(ステラ・ジブコバと共著)「ブルガリアのチャルガ：アイデンティティ，変革，グローバリゼーション」『民族芸術』21, pp. 177-184, 2005/3

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

伊東信宏(演奏会評)「シュタットフェルト ピアノリサイタル」朝日新聞文化欄，2006/3/16夕刊

伊東信宏(演奏会評)「ヴィヴァルディ『バヤゼット』」朝日新聞文化欄，2006/2/23夕刊

伊東信宏(演奏会評)「テツラフ，フォークト デュオリサイタル」朝日新聞文化欄，2006/2/9夕刊

伊東信宏(演奏会評)「若林顕ピアノリサイタル『たった一人の『第九』』」朝日新聞文化欄，2005/12/12夕刊

伊東信宏(演奏会評)「クレール＝マリ・ルゲ ピアノリサイタル」朝日新聞文化欄，2005/11/24

伊東信宏(論考)「夏の祭典」『奏』24，日本室内楽振興財団，pp. 15-16, 2005/11

伊東信宏(演奏会評)「鈴木秀美 バッハ・無伴奏チェロ組曲」朝日新聞文化欄，2005/10/6夕刊

伊東信宏(演奏会評)「男声ア・カペラ合唱団『シャンティクリア』」朝日新聞文化欄，2005/10夕刊

伊東信宏(書評)「関口義人著『ジブシー・ミュージックの真実』」図書新聞，2005/10

伊東信宏(演奏会評)「東京シティ・フィル，J・ポンス指揮」朝日新聞文化欄，2005/9/15夕刊

伊東信宏，権代敦彦「子守歌」の評，朝日新聞文化欄，2005/9/2夕刊

伊東信宏(翻訳)「音楽の機械化」シュトゥッケンシュミット著『アヴァンギャルド宣言：中東欧のモダニズム』井口壽乃，関府寺司編，三元社，pp.270-271, 2005/9

伊東信宏(論考)「とおoryんせとしての《春の祭典》」『民族芸術学会会報』66，民族芸術学会，p. 3, 2005/9

伊東信宏(演奏会評)「プロムジカ女声合唱団」朝日新聞文化欄，2005/7/14夕刊

伊東信宏(演奏会評)「スロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団」朝日新聞文化欄，2005/6/30夕刊

伊東信宏(演奏会評)「プーランク《カルメル会修道女の》話」朝日新聞文化欄，2005/5/26夕刊

伊東信宏(演奏会評)「フェルメール・カルテット」朝日新聞文化欄，2005/4/28夕刊

伊東信宏(演奏会評)「新国立劇場『コジ・ファン・トゥ』テ」朝日新聞文化欄，2005/4/7夕刊

伊東信宏(論考)「リゲティが見入る地図」『奏』23，日本室内楽振興財団，pp. 15-16, 2005/4

伊東信宏(解説)「終末はいつも唐突にやってくる：バルトークの形式感覚」東京交響楽団第525回定期演奏会プログラムノート，pp. 10-11, 2005/4

伊東信宏(演奏会評)「キュッヘル・アンサンブル・ウィーン」朝日新聞文化欄，2005/3/31夕刊

伊東信宏(演奏会評)「アンサンブル・ゼフィロ」朝日新聞文化欄，2005/2/3夕刊

伊東信宏(解説)「バルトークという一人の『青ひげ公』」愛知芸術文化センター演奏会プログラムノート，2005/2

- 伊東信宏(演奏会評)「ソフィア国立オペレッタ『メリー・ウィドウ』」朝日新聞文化欄, 2005/1/18夕刊
- 伊東信宏(解説)「ハイドンとショスタコーヴィチをめぐって」小澤征爾第34回サントリー音楽賞受賞記念コンサート解説, サントリーホール, 2004/12/12
- 伊東信宏(演奏会評)「二期会『イエヌーファ』」朝日新聞文化欄, 2004/11/9夕刊
- 伊東信宏(解説)「ラカトシュ・アンサンブル: 正統と異端と」『ラカトシュ・アンサンブル演奏会解説書』ザ・フェニックスホール, 2004/11/4
- 伊東信宏(論考)「パリのロシア風ナイト・クラブ: ケッセル『朝のない夜』再読」(日本室内楽振興財団機関誌『奏』22, pp. 7-8, 2004/11
- 伊東信宏(演奏会評)「クレメル&クレメラータ・バルティカ演奏会」朝日新聞文化欄, 2004/10/28夕刊
- 伊東信宏(演奏会評)「読売日響『ストラヴィンスキー・チクルス』」朝日新聞文化欄, 2004/10/7夕刊
- 伊東信宏(演奏会評)「ニューヨーク・ハーレムシアター『ボーギーとベス』」朝日新聞文化欄, 2004/9/16夕刊
- 伊東信宏(演奏会評)「タランテッラ——地中海の民の音楽」朝日新聞文化欄, 2004/8/2夕刊
- 伊東信宏(論考)「音楽の謀略家としてのJ・ハイドン」『レコード芸術』53-8, pp. 42-44, 2004/8
- 伊東信宏(演奏会評)「パウル・バドゥラ・スコダ ピアノ・リサイタル」朝日新聞文化欄, 2004/7/7夕刊
- 伊東信宏(論考)「《東京の夏》が形成してくれたもの」第20回《東京の夏》音楽祭2004フェスティバル・マガジン, pp. 74-75, 2004/7
- 伊東信宏(演奏会評)「コンポーザム2004 リンドベルイ『三つの協奏曲』」朝日新聞文化欄, 2004/6/10夕刊
- 伊東信宏 サントリー音楽財団コンサート「対話する作曲家, 権代敦彦」(2004年5月22日, ザ・シンフォニーホール), 企画, およびインタビュー記事「作曲家と語る」(同コンサート・パンフレットpp. 6-7)
- 伊東信宏(論考)「水車小屋の娘はなぜ不実なのか?」日本室内楽振興財団機関誌『奏』21, pp. 7-8, 2004/5
- 伊東信宏(解説)「バルトーク《弦楽四重奏曲第1・4・6番》」静岡AOIレジデント・カルテット演奏会, 静岡AOIホール, 2004/5
- 伊東信宏(演奏会評)「N響定期(コパチンスカヤ独奏)」朝日新聞文化欄, 2004/4/27夕刊
- 伊東信宏「作品解説」『ドヴォルジャーク交響曲第9番ホ短調《新世界より》作品95』音楽之友社, pp. 3-8, 2004/4
- 伊東信宏(演奏会評)「コリン・デイヴィス指揮ロンドン響」朝日新聞文化欄, 2004/4

4-4. 口頭発表

- 伊東信宏「『バルトークと黄金分割』再考」日本アルバン・ベルク協会例会(タカギクラヴィア「松濤サロン」), 2005/12/21
- 伊東信宏「『ルーマニア音楽』は誰に帰属するのか?: モルドヴァのブラス・バンドをめぐって」神戸大科学研究費講演会, 神戸大学国際文化学部, 2005/12/13
- 伊東信宏「シャガールのヴァイオリン: 東欧の村の楽師と20世紀の前衛音楽」(出演: トリオ・ミンストレル, 講演と企画担当), ザ・フェニックスホール, 2005/12/3
- 伊東信宏「バルトーク: 村の楽師と20世紀音楽の前衛」京都女子大学公開講座, 京都女子大学, 2005/11/19
- 伊東信宏「アーノンクールは語る/アーノンクールと語る」京都賞ワークショップ, 京都国際会議場大ホール, 2005/11/12
- Nobuhiro ITO "A Moldavian Brass Band: Beyond the Symbol of a Nation", MCE, Aspects of Central- & East-European Arts : Art, Architecture, Theatre & Music. 2005/10/31, Osaka University, Nakanoshima Center.

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 伊東信宏 第7回吉田秀和賞, 吉田秀和芸術振興基金, 1997/11
- 伊東信宏 1990年度アリオン賞(音楽評論部門)奨励賞, アリオン音楽財団, 1991/3

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2003年度~2005年度, 基盤研究(C), 代表者: 伊東信宏

課題番号: 15520088

研究題目: 東欧の村の楽師たちと20世紀音楽の前衛: ロマ(ジプシー)とクレズマーを中心に

研究経費：2004年度 1,100千円
2005年度 900千円

研究の目的：

本研究は、東欧やロシアの農村において、結婚式や葬式などの機会に器楽奏者として雇われ、舞曲などの楽曲を提供してきたロマ(ジプシー)やクレズマー(東欧ユダヤ人社会の大衆音楽家)による音楽について、それを20世紀音楽史の総体の中に位置づけ、その影響と意味を探ろうとするものである。主に目指すのは次の五点である。

1.ロマやクレズマーの音楽の実態解明、2.この二種の音楽が持っていた関係の解明、3.これらの音楽が20世紀の前衛音楽に与えた影響の分析、4.これらの音楽が20世紀の大衆音楽に与えた影響の分析、5.彼らの音楽のアジアへの軌跡の追跡。

2004年度には、上記五点のうち、まず1.についてルーマニア、モルドヴァにおいて現地調査を行い、さらに専門家によるレビューを受ける予定である。本年度計画に計上されている外国旅費は、このための経費である。2.については、前年度から引き続き、文献による調査を行い、それを整理する予定であるが、同時に上記調査旅行に際して、現地での聞き取りなどの必要があるものと思われる。また3.については前年度に研究を進めたバルトークやコダーイの作品の他に、エネスク(モルドヴァ地方出身で、この地方の民俗音楽に深く関係していた)、ラヴェル(東欧ユダヤ人のイディッシュ語による歌曲を残している)、ショスタコーヴィチ(ロシアのユダヤ人に関する作品を残している)などの作品について、分析を進める。ここでは、本主題に関連のある作品について、ロマやクレズマーのオリジナルの音楽との関係、あるいはそれが置かれた文脈などに特に注目することになる。4.については、主にアメリカにおける音楽産業初期の状況について、ユダヤ移民の果たした影響に焦点を絞って文献調査を行う。これまでの研究ではあまり触れられてこなかったマネジメントや流通の問題についても検討する必要がある。最後に5.について、とりわけロシアからハルピン、上海、神戸などに移り住んだ音楽家について文献調査を行い、さらに現地における追跡調査を行う予定である。

本課題の最終年度にあたる2005年度には、上記五点を統合、総合したいと考えている。まず1.について、これまで集めてきた資料を検討し、このジャンルの音楽についての概論的研究論文を作成する予定である。2.については、モルドヴァ地方での調査を行い、実際にロマの音楽とクレズマーの音楽とが関係を持っていたかどうかについて具体的な手がかりを得たいと考えている。本年度計画に計上されている外国旅費は、このための経費である。また3.については前年度に引き続き、エネスク(モルドヴァ地方出身で、この地方の民俗音楽に深く関係していた)、ショスタコーヴィチ(ロシアのユダヤ人に関する作品を残している)などの作品について、分析を進め、論文の形にまとめる予定である。ここでは、本主題に関連のある作品について、ロマやクレズマーのオリジナルの音楽との関係、あるいはその演奏の身体性のレベルでの関連などに特に注目することになる。4.については、前年度に引き続き、主にアメリカにおける音楽産業初期の状況について、ユダヤ移民の果たした影響に焦点を絞って文献調査を行う。その際、マネジメントや流通の問題についても検討する予定である。最後に5.について、とりわけロシアからハルピン、上海、神戸などに移り住んだ音楽家について文献調査を行い、さらに国内各地における追跡調査を行う予定である。

そして以上の内容を総合し、研究成果報告書としてまとめる予定である。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

民族学博物館・館外研究員	2004年4月～現在
「サントリー音楽賞」「佐治敬三賞」選考委員	2001年4月～現在
文化庁芸術祭・選考委員	2005年4月～2006年3月
「京都賞」選考委員会・専門委員	2004年4月～2005年11月
日本音楽学会・関西支部長	2003年4月～2005年3月

5. 上野 正章 助手

1966年生。1999年、大阪大学文学研究科博士課程修了。博士(文学、大阪大学)。1989年から1990年まで富山県立図書

館司書。2004 年より大阪大学助手。専攻：音楽学。

5-1. 論文

上野正章「昭和前期の日本における工場に音楽を導入する試みについて—サウンドスケープの観点から」『サウンドスケープ』(日本サウンドスケープ協会), 7, pp. 37-46, 2005/8

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上野正章「書評：『書評 Bonnie C. Wade, Music in Japan: Experiencing music, expressing culture (Global Music Series)』」『東洋音楽研究』(東洋音楽学会), 70, pp. 160-163, 2005/8

上野正章「書評：『ジェルジ・リゲティ論—音楽における現象学的空間とモダニズムの未来』」『音楽学』(日本音楽学会), 49-3, pp. 171-172, 2004/6

5-4. 口頭発表

上野正章「ジョン・ケージのプリペアド・ピアノ—書かれた音と鳴り響く音」音楽学オープンセミナーシリーズ 阪大コレギウム・ムジクム第1回, (『Letters and Music』2005 年春号, pp. 15-16, 2005/春), 2004/12/16

上野正章「日本における 1980 年代のジョン・ケージ評について——鍵谷幸信を中心に」日本音楽学会第 315 回例会, 2004/9/18

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2005 年度～2006 年度、萌芽研究、代表者：上野正章

課題番号：17652014

研究題目：明治初期から昭和前期の日本における地方文化としての西洋音楽の研究

研究経費：2005 年度 900 千円

研究の目的：

本研究の目的は、各都府県を単位に、明治初期から昭和前期の日本における西洋音楽普及の地域的特質を明らかにすることである。その際に注目するのは、1. 音楽行政的観点と 2. 民間による西洋音楽普及という観点で、調査するのは、中国、近畿、中部地方の各府県、および東京都である。従来音楽学において、日本における西洋音楽を論じる際に暗黙の前提とされていたのは、日本中が常に均質な西洋音楽文化の内にあるという考え方であった。この考え方を問い直す。おそらく、国が主導的に行った全国を網羅する唱歌教育等の西洋音楽の普及と、音楽鑑賞や西洋楽器の練習といった民間による西洋音楽の愛好は、普及の進展に地域的な違いがあるのではないだろうか。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

日本音楽学会・関西支部委員(IT)	2005 年 4 月～2007 年 3 月
同上・選挙管理委員	2002 年度、2004 年度
サウンドスケープ協会・理事	2005 年 4 月～現在

民族藝術学会・委員(例会・会報)

2004年4月～現在

東洋音楽学会・西日本支部委員(例会企画, 運営およびホームページ担当)

2002年9月～2006年8月

2-23 美術史学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

先史美術から現代美術にいたるまで、絵画、彫刻はもとより、建築や工芸、デザイン、カリグラフィーも含めたあらゆる造形芸術を研究対象とし、その歴史学的研究を行っている。主として芸術理論に関する研究を行う芸術学とは密接な関連を保っているが、美術作品に関する諸問題を作品に即して実証的に解明し、あるいは美術作品が生成され、受容される歴史的背景を考究することに美術史学の特色がある。また、そのために考古学、歴史学(文献史学)、宗教学、文学、民俗学など、さまざまな隣接領域と関わりをもち、領域横断的に研究が進められていることも近年の美術史学の大きな特色である。

美術史学専修は、芸術史講座のスタッフで運営されており、日本・東洋美術史と西洋美術史の二つの研究室から構成されている。日本・東洋美術史スタッフの専門領域は仏教美術、日本絵画、西洋美術史スタッフのそれは近現代美術・建築、キリスト教美術、中南米美術であるが、その他の地域、時代、ジャンルの教育に関しては非常勤講師を招聘して補っている。学内における授業のほか、美術館、寺社などにでかけて作品を見学する学外演習にも力を入れ、さらに国内外を問わず、作品研究のためのフィールドワークを奨励している。また、コンピューターによる画像処理や文献データベースの検索、写真やビデオによる画像の収集にも力を入れている。なお、学内の総合学術博物館と連携して研究プロジェクトを推進しているほか、社会的活動としては美術展覧会の企画運営、種々の美術作品調査、鑑定などに協力し、また文化財保護、市史編さん事業などにも協力している。

I. 現在の組織

1. 教員(2006年4月現在)

教授 3(うち兼任 1) 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：奥平 俊六、園府寺 司、泉 万里(兼任)

助教授：藤岡 穰

助手：赤木 美智

2. 在学生(2006年4月現在)

2006年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
32	12	18	1	0	0	2	0	4

※うち留学生 1 名、社会人学生 2 名

3. 修了生・卒業生(2004年度～2005年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'04	7	8	0	0	2
'05	15	10	1	2	4
小計	22	18	1	2	6

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'04	0	0	0
'05	1	1	2
計	1	1	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

大野陽子「対抗宗教改革期のヴェラッロのサクロモンテ礼拝堂内部の装飾の変容」2006/2

主査：若山映子 副査：囀府寺司、上倉庸敬

【論文博士】

仲間裕子「カスパー・ダーヴィト・フリードリヒ——視覚と構成の風景画——」2006/2

主査：若山映子 副査：囀府寺司、大橋良介

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'04	2	2	0	1	0	5
'05	0	4	0	0	0	4
計	2	6	0	1	0	9

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'04	1	3	3	0	0	7
'05	0	4	10	0	0	14
計	1	7	13	0	0	21

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2004年度】

赤木美智「河村若芝の研究——文献と初期作品を中心に——」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座), 22, pp. 65-100, 2005/3

池上裕子「ロバート・ラウシェンバーグの《ゴールド・スタンダード》——現代美術のグローバル化に関する一試論——」『美術史』158, pp. 339-355, 2005/3

池上裕子「反復のパラドックス: アド・ラインハートとアンディ・ウォーホル」『西洋美術研究』(三元社), 11, pp. 66-86, 2004/9

國吉貴奈「マックス・エルンスト作《カストルとポリュシオン》における雷雲のモチーフと自然現象のテーマ」『美術史』158, pp. 207-222, 2005/3

小谷真弓「ウィリアム・ブレイクの『無垢と経験の歌』」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座), 22, pp. 121-143, 2005/3/29

【2005年度】

國吉貴奈「マックス・エルンスト作《風景》(S/M612)について——アメデ・ギルマン著『磁気学と電気学』からの一考察——」『待兼山論叢』39, pp. 23-45, 2005/12/25

城市真理子「岳翁——了庵桂悟との関わりにみる周文派詩画軸制作の様相——」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座), 23, pp. 71-110, 2006/3/31

城市真理子「画師、胸次に丘壑を蔵す——画僧岳翁の詩画軸について——」『テキストの読解と伝承』大阪大学大学院文学研究科, pp. 71-110, 2006/3

松野早恵“The Concept of Monumentality in the Architecture of Het Amsterdams Lyceum”『フィロカリア』23, pp. 1-29, 2006/3

(2)口頭発表

【2004年度】

出川哲朗, 青木智史「熱ルミネッセンス年代測定法による小形唐三彩の年代推定」「洛陽の夢 唐三彩展」開催記念シンポジウム「唐三彩研究の新成果」愛知県陶磁資料館, 2004/11/21-22(『「洛陽の夢 唐三彩展」開催記念シンポジウム「唐三彩研究の新成果」資料集 pp. 出川 1-出川 13』)

池上裕子“Lost in Translation?: Robert Rauschenberg in Tokyo, 1964”国際美術史学会, モントリオール, パレ・ド・コングレ, 2004/8/25(国際美術史学会プログラムに要旨掲載)

池上裕子「ロバート・ラウシェンバーグのゴールド・スタンダード」美術史学会全国大会, 慶應義塾大学, 2004/5/23(『美術史』157, pp. 199-200 に要旨掲載)

大野陽子「ヴェラッロのサクロモンテ——初期構想とその展開——」イタリア学会第52回大会, 東北大学, 2004/10/23

郷司泰仁「山王の絵像」物語/絵画研究会, 和歌山市立博物館, 2005/1/10

古谷優子「石山寺蔵涅槃図試論——大乘涅槃経との関わり——」物語/絵画研究会, 学習院大学, 2005/3/5

森實久美子「華嚴宗祖師絵伝についての一考察——中国絵画の受容——」物語/絵画研究会, 学習院大学, 2005/3/5

【2005年度】

- 小野尚子「アルフォンソ・ムハ作《スラヴ叙事詩》」関西チェコ/スロバキア研究会, 兵庫トヨタ本社ビル 8 階会議室, 2005/11/19
- 小野尚子「アルフォンソ・ムハ作《スラヴ叙事詩》——演出家としてのムハとその舞台?——」MCE(モダニズムと中東欧の藝術・文化研究会), 大阪大学文学部美学棟 B13 教室, 2005/11/18
- 木下京子「池玉瀾の画業について」大阪大学文学部広域文科表現論研究会, 大阪大学, 2006/3/11
- 郷司泰仁「京都・北野天満宮所蔵「北野社絵図」について」天満天神研究会, 太子信仰と天神信仰の比較史研究会の合同研究会, 大阪天満宮文化研究所, 2006/1/29
- 郷司泰仁「北野天満宮所蔵「北野社絵図」に関する一考察」物語/絵画研究会, 愛知教育大学, 2005/12/4
- 郷司泰仁「北野天満宮所蔵「北野社絵図」に関する一考察」密教図像学会, 皇學館大学, 2005/11/26
- 郷司泰仁「個人蔵「春日若宮曼荼羅図」について」歴史美術懇談会, 大阪市立美術館, 2005/6/29
- 鈴木雅子「来迎図と講式——長谷寺蔵「阿弥陀聖衆来迎図」をめぐって——」第 58 回美術史学会全国大会, 大阪大学, 2005/5/28
- 鈴木雅子「奈良・長谷寺蔵「阿弥陀聖衆来迎図」をめぐって」南都文化研究会, 大阪大学, 2005/4/17
- 城市真理子「岳翁と了庵桂悟——周文派詩画軸制作の様相——」第 58 回美術史学会全国大会, 大阪大学, 2005/5/29
- 古谷優子「石山寺蔵涅槃図試論——「大乘涅槃經」による場面解釈の可能性——」第 58 回美術史学会全国大会, 大阪大学, 2005/5/27
- 古谷優子「石山寺涅槃図試論」待兼山芸術学会第15回研究発表会, 大阪大学, 2005/4/9
- 森實久美子「義湘絵における宋代絵画の受容をめぐる一考察」美術史学会西支部例会, 大阪大学, 2005/9/17
- 森實久美子「華嚴宗祖師絵伝についての一考察——中国絵画の受容——」南都文化研究会, 大阪大学, 2005/4/17

(3)その他(書評・翻訳など)

【2005年度】

- 古谷優子「町誌よもやま話(75)早瀬・瑞林寺の涅槃図について」『広報みはま』422, p. 18, 美浜町, 2006/2/23
- 古谷優子「仏涅槃図 作品解説」大河内智之編『浄教寺の文化財』pp. 42-44, 浄教寺, 2006/1/21
- 古谷優子「仏涅槃図 宝珠寺(熊野町)作品解説」『新修豊中市史』(美術), 6, pp. 145-146, 豊中市, 2005/12/28
- 松野早恵訳「デュッセルドルフにおける国際芸術家会議、議事概要(1922年5月29-31日)」『アヴァンギャルド宣言 中東欧のモダニズム』井口壽乃, 関府寺司編, 三元社, pp. 233-236, 2005/9/5
- 三田覚之「笠置寺の仏像 誕生釈迦仏立像 作品解説」科学研究費補助金 基盤研究(B)17320039 研究報告書: 2005年度, 小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開 Vol. 1——講演録・随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告, pp. 99-101, 研究代表者 荒木浩, 大阪大学, 2006/3/6
- 森實久美子「十六羅漢像」作品解説, 大河内智之編『浄教寺の文化財』pp. 45-53, 浄教寺, 2006/1/21
- 森實久美子「親鸞聖人絵伝(誓願寺)」作品解説『新修豊中市史』(美術), 6, pp. 163-165, 豊中市, 2005/12/28
- 森實久美子「町誌よもやま話(72)親鸞聖人絵伝と報恩講」『広報みはま』419, p. 20, 美浜町, 2005/11/22
- 山口隆介「笠置寺の仏像の内「毘沙門天像」作品解説」科学研究費補助金基礎研究(B)17320039 研究報告書, 小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開 Vol. 1——講演録・随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告, pp. 108-113, 研究代表者 荒木浩, 大阪大学, 2006/3/6

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2004年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計1名)
2005年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2004年度 学部：0名 大学院：4名（計4名）

2005年度 学部：0名 大学院：4名（計4名）

6. 専門分野出身の研究者

(2004年度～2005年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

鈴木雅子 博士後期課程, 膳所焼美術館, 学芸員, 2006/3

林朋子 博士前期課程, 京都造形芸術大学, 2006/2

牧口千夏 博士前期課程, 京都国立近代美術館, 学芸員, 2005/12

赤木美智 博士後期課程, 大阪大学大学院文学研究科, 助手, 2005/4

保崎裕徳 博士前期課程, 名古屋市美術館, 学芸員, 2005/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2004年度～2005年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 5名

2004年度：3名 2005年度：2名

<内訳> 教員 2名 司書 1名 システムエンジニア 1名 ジャーナリスト 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

古画研究会	2005年12月26日
シンポジウム「中東欧の近現代芸術——美術・建築・音楽・演劇——」 大阪大学 21世紀 COE「インターフェイスの人文科学」主催	2005年10月
美術史西支部例会	2005年9月17日
美術史学会全国大会	2005年5月27日～29日
シンポジウム「越境／モダン・アート」 大阪大学 21世紀 COE「インターフェイスの人文科学」主催	2005年5月
南都文化研究会	2005年4月17日
物語／絵画研究会	2004年7月7日
講演会 マリノフスキー氏招聘	2004年7月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

MCE 研究会 2004年度～2006年度

12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

12-1. 教育活動

美術史学を専門とする講座としては日本で最大規模をほこるスタッフによる授業に、さらに非常勤講師の授業を加え、

美術史学全般にわたる偏りのない授業を実施している。現教員(教授、助教授)は全員、専門領域が異なるため多彩な授業が可能で、現教員では手薄な領域については非常勤講師で補ってきた。全教員が出身大学を異にしており、いわゆる「純血率」の高さによる弊害がなく、逆に幅広い人的ネットワークを保持し、多様な教育方法の導入を可能にしていることも大きな特色である。なお、2004年度をもって総合学術博物館との兼任教授(南アジア・東南アジア美術史)が退職し、2005年度からは新たに日本中世絵画史を専門領域とする兼任教授が着任した。また、2005年度をもって教授1名(13世紀～17世紀イタリア美術史)が退職し、今後その後任人事が進められる予定である。

授業に関しては、美術史に関する講義、美術作品に関わる文献を講読する演習のほか、学外における作品の見学演習を実施している。毎週一日をかけて美術館、博物館の展覧会や寺社の文化財などを見学し、レポートを課すことにより学部生の作品記述能力の向上に資するとともに、院生にとっては研究課題の発見などに大きな効果をあげている。また、論文作成指導については、カリキュラムの演習の他、オフィスアワーやその他の時間に個別にも実施しており、きめ細かな指導を実現している。これに加え、西洋美術史分野にあつては、論文作成のための現地調査を奨励しており、博士前期課程大学院生の場合、修士論文作成前に少なくとも一ヶ月程度、ないしは数ヶ月以上の期間、現地調査を行うことが定着してきた。博士後期課程の院生には常時2、3名以上の留学生がおり、その中には博士論文作成中の者もいる。一方、日本・東洋美術史分野の学生には、論文作成のための作品調査はもとより、社会的活動の一環として行っている近隣の博物館施設との連携、市史編さん事業や文化財行政に関わる作品調査などに継続的に参加させ、調査方法を実地指導している。

21世紀COE「インターフェイスの人文科学」プログラムの一環として2002年度に文学研究科内にメディアラボが設置された。芸術史講座はその設置、運営に深く関わってきたが、メディアスタッフによる授業を通じて学生にデジタル・メディアのより高度な利用法を学ぶ機会を提供している。また、同プログラムにおいては、別に「モダニズムと中東欧の芸術」MCE研究会を主催し、これを通じて若手研究者の養成に努めている。

2005年度に「魅力ある大学院教育のためのイニシアティブ」(IAE)に採択された「ソーシャルネットワーク型人文科学教育」の一環として、諸芸術研究者、芸術関連機関に関わる人々のアーツ・ネットワーク(PAN, Praxis for Arts Network)を設立し、第一回会議を開催した。今後はさらに、学外芸術関連諸機関や制作、上演の現場で活動する方々を招聘し、講演やセミナーを開催するとともに、これまでも実施してきた近隣博物館施設におけるボランティア活動などを発展させて、学外機関におけるインターン活動を促進、支援し、学生の研究能力および幅広い適応能力の開発をめざしていく。

以上のような活動の結果、学部生、院生ともに着実に教育成果をあげている。卒業論文は概ね優秀であり、大学院進学者は2004年度には2名、2005年度には5名とそれぞれ約3割に達した。大学院には他大学からの進学希望者も多く、過去2年間とも10余名を数えた。ただし、そのうち合格者は2005年度3名、2006年度1名と狭き門であった。内部進学希望者の優秀さが際立つ結果とも言えるが、留学生の受け入れが少ないこともあわせ、今後は外部からも優秀な人材を多く得て研究室を一層活性化させることが課題である。博士前期課程修了後の進路は、2004年度は8名のうち後期課程への進学4名、研究職1名、高度職業人1名、一般職2名、2005年度は10名のうち進学6名、研究職ないし専門分野に密接に関連した技術職2名、高度職業人1名、一般職1名であった。研究者ないし高度職業人を養成する大学院大学としての責務は十分に果たしていると言えよう。後期課程の院生にあつては論文発表、口頭発表も盛んであり、2年間における研究者としての他大学、他機関就職者が4名(うち学芸員3名)にのぼることも特筆される。なお、この間の博士号取得者は2名で、うち課程博士号取得者が1名のみである点についてはさらに努力が必要である。ただし、早期に学芸員として採用される学生の多いこと、また、特に西洋美術史分野の院生の場合には留学先での学位取得を目指す学生が多く、留学期間が長期化していることが大きな要因とも言える。

最後に、講座自体の問題ではないが、芸術史講座の授業において必要不可欠な問題として、講義室、演習室の充実に向けた取り組みがある。芸術史講座は、2005年度に行われた一部教室のマルチメディア機器の導入、更新に協力したが、なお視聴覚機器を利用できる教室が不足しており、機器類の老朽化が甚だしい教室が残っている。今後は一層、教室および機器類の整備のために働きかけを行っていききたい。また、学生の利用できる研究室が著しく狭隘であることも大きな問題である。学部生だけで32人、院生は30人ほどが在籍しているにもかかわらず、学生の研究スペースは実質的に約40㎡しかなく、他の国立大学の美術史学専門分野の状況にくらべてきわめて狭隘である。解決策の見出しがたい問題であるが、改善のために粘り強く働きかけていきたい。

12-2. 研究活動

教員(教授、助教授、助手)各人については、意欲的に研究活動を継続している。教員全員は、ほぼ継続的に科学研究費によるプログラムを遂行してきた。2004年度、2005年度ともに教員6名のうち4名が代表者として科学研究費を受託し、その研究成果については口頭発表、論文、報告書など種々のかたちで着実に公表してきた。これに加え、園府寺教授は、2004年度学術振興会特定国派遣により、ワルシャワ(ポーランド)のユダヤ歴史研究所を拠点に、ポーランド学術アカデミー芸術研究所、ワルシャワ国立美術館などにおいて研究・調査活動を行った。滞在期間中、トルニ大学において招待講演を行ったほか、ワルシャワ美術史家協会ほかにおいて、ポーランド、日本の研究者による、中東欧芸術についてのワークショップを共催した。また、PD、DC各1名が日本学術振興会研究員に採択されている。なお、若山映子教授の単著『システィーナ礼拝堂天井画 イメージとなった神の慈悲』(東北大学出版会、2005年11月)も科学研究費(研究成果公開促進費)の交付を受けたものである。

この2年間では、日本・東洋美術史を専門領域とする教員が10年以上にわたり関わってきた『新修豊中市史6 美術』、兼任の泉万里教授執筆の『大阪大学総合学術博物館叢書1 扇のなかの中世都市——光円寺所蔵「月次風俗図扇面流し屏風」』が刊行されたことも大きな成果である。また、博物館と連携して、東南アジア彫刻および日本近世の風俗画の画像データベース作成を手がけた。21世紀COE「インターフェイスの人文科学」プログラムの一環として、「モダニズムと中東欧の芸術」MCE研究会を主催し、事業推進担当者として研究に従事した。国内外研究者とのネットワーク作りに尽力するとともに、海外からの研究者招聘も実現し、国際的な研究環境の形成に奏功した。同プログラムでは、さらに国際シンポジウム(「越境/モダン・アート ファン・ゴッホからラウシェンバークまで」於大阪大学中之島センター、2005年5月31日)の開催にも中心的な役割を果たした。

学生の研究活動も着実に成果をあげている。とりわけ、2004年度の論文発表のひとつである池上裕子の『美術史』掲載論文が2006年度の美術史学会賞を受賞したことは特筆される。研究成果の発表にも積極的な姿勢がみられ、過去2年間に比べると口頭発表や作品解説等の本数が格段に増加した。もっとも、『美術史』や外国雑誌など、厳格なレフリー制を採用している雑誌への掲載数、博士論文の提出数なども、さらに増やせばよかったと考える。

学会活動については、奥平教授、藤岡助教授が美術史学会の常任委員を務め、2005年度には全国大会の当番機関として事務局を務めた。さらに民族芸術学会事務局、種々の研究会の幹事を務めるなど、さまざまな形で貢献してきた。園府寺教授が大阪大学COEプログラム「インターフェイスの人文科学」の事務局長を務めてきたことも、これに準じる貢献と言えよう。

懐徳堂記念会の主催する講演、講座のほか、各種文化講座、美術展覧会の監修、カタログ執筆、美術館での講演活動など、さまざまな形で一般市民向けの教育、普及活動も行い、市史編纂事業などにも協力してきた。

COE関係、学会運営、社会貢献等、学内外ともに従事する仕事が多く、そのような中での研究活動は決して余裕のあるものではなかった。仕事の効率化を図り、教育、研究全般にわたってさらに改善する努力が必要であると考えられる。

Ⅲ. 教員の研究活動(2004年度～2005年度の過去2年間)

1. 奥平 俊六 教授

1953年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程1984年単位取得退学。文学修士。大阪府立大学総合科学部専任講師、大阪大学文学部助教授を経て1997年現職。日本文化研究センター共同研究員、京都国立博物館調査員、東北大学、名古屋大学、岡山大学などの講師を歴任。専攻：日本美術史／中近世絵画史。

1-1. 論文

奥平俊六「不思議な聖者たち——布袋・蜆子・陳搏——」佐藤康宏編『講座日本美術史3 図像の意味』東京大学出版会、pp. 237-268, 2005/6

奥平俊六「こう見えるからこう描く——自閉症の人の認知と表現——」『コミュニティ・アート・シンポジウム』(「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」コミュニティ・アート部門)、pp. 26-34, 2005/3

奥平俊六「遍在する異文化」『一冊の本』朝日新聞社、pp. 52-54, 2004/5

1-2. 著書

肥塚隆, 奥平俊六, 藤岡穰, 山本英男, 永井則男, 原田平作『新修豊中市史第6巻 美術』(担当部分: 第一章「若冲と西福寺」、第三章「近世の絵画」), 豊中市, pp. 5-62, pp. 167-298, 2005/12

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

奥平俊六「佐藤康宏『伊藤若冲——生涯と作品——』『紫明』(紫明の会), 18, p. 98, 2006/3

奥平俊六「大久保純一『北斎の富岳三十六景』『紫明』(紫明の会), 17, p. 100, 2005/10

奥平俊六「服部正『アウトサイダー・アート——現代美術が忘れた「芸術」——』『紫明』(紫明の会), 16, p. 88, 2005/3

奥平俊六「戸田和孝『まちなみまんがな草子』『紫明』(紫明の会), 15, p. 96, 2004/10

1-4. 口頭発表

奥平俊六「姿の意味——散聖・美人・カブキモノ——」広域文化表現論共同研究会, 2006/3/11

奥平俊六「アウトサイダー・アート——解釈と公開——」ボーダレス・アートギャラリーNO-MA 研究会基調講演, 2005/12/17

奥平俊六「こう見えるからこう描く——自閉症の人の認知と表現——」コミュニティ・アート・シンポジウム, 2005/3/21

奥平俊六「カブキの時代のミヤコ——舟木本「洛中洛外図」の世界——」千里ライフサイエンスフォーラム, 2005/3/18

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

奥平俊六, 國華賞(第2回), 國華社・朝日新聞社, 1990/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2005年度~2007年度、基盤研究(C)、代表者: 奥平俊六

課題番号: 17520079

研究題目: カブキモノと初期歌舞伎の図像研究

研究経費: 2005年度 800千円

研究の目的:

本研究では、近世初期風俗画に遺された図像を用いて以下の点を明らかにしたい。まず、カブキモノの(1)着衣の特色とその意味、(2)身に付ける器物の特色とその意味を明らかにする。たとえば、その着衣がなぜ「十徳」に由来する着衣なのか、あるいは『駿府記』に言う「狂紋」とは具体的にどのような文様なのか、また、舞台上のカブキモノが身に付けるロザリオや聖遺物入れはどの時点でまたどのような理由で用いられるようになったのか、といった問題である。これらは、路上のカブキモノと舞台のカブキモノの図像の異同をたんねんに分析することで読み解いていけると思う。たとえば、革袴組、茨組あるいは大鳥逸兵衛、織田左門(道八)といった実在のカブキモノの姿を何らかのかたちで反映したと考えられる画像があり、それが阿国伝説の中で架空のカブキモノの姿に集約されていく過程をたどれると思うからである。次に、カブキモノの(3)「姿型」を、やはり路上と舞台上の両者において比較分析することによって、(4)見得の発生の意味と初期的な展開について新しい見解が述べられるのではないかと思う。これはすなわち、現実のカブキモノの様態が舞台上で典型化されていく道筋を、絵画という「もう一つの現実」を通して見ていく作業となる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

美術史学会・常任委員

2004年5月~現在

美術史学会・全国大会主催責任者

2005年5月

2. 園府寺 司 教授

1957年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren (文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋美術史。

2-1. 論文

園府寺司「ファン・ゴッホ 孤高の画家の〈現〉風景 グローバル・メガ・マーケット時代のお色直し」『美術手帖』20 (2005年4月号), pp. 84-88, 2005/4

2-2. 著書

園府寺司『ゴッホ 西洋絵画の巨匠 2』小学館, 2006/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

園府寺司, 井口壽乃編『アヴァンギャルド宣言 中東欧のモダニズム』三元社, 2005/9

園府寺司(カタログ)『ゴッホ展 Van Gogh in Context』東京国立近代美術館, 国立国際美術館, 愛知県美術館, 2005/3

2-4. 口頭発表

園府寺司「〈芸術・国家・世界〉 AICA(国際批評家連盟)ワルシャワ大会(1960年) 国際シンポジウム「越境／モダンアート」大阪大学中之島センター, 2005/5/31

KODERA, Tsukasa, "AICA VII International Congress, Warsaw, 1960. 'L'Art – Les Nations – L'Univers' 'Sztuka – Narody – Świat' Spotkanie Japońskich i Polskich Historyków Sztuki i Muzykologów Stowarzyszenie Historyków Sztuki, Warszawa, 2004/11/16

KODERA Tsukasa, "Evolution of Perspectives in Japanese Early Modern Art and its Relation to European Art", III spotkanie historyków sztuki i konserwatorów dzieł sztuki Orientu na Wydziale Sztuk Pięknych Uniwersytetu Mikołaja Kopernika w Toruniu, 2004/6/17

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

園府寺司 エラスムス研究賞(オランダ、エラスムス財団)Praemium Erasmianum, Studieprijis(Stichting Erasmusprijs), 1989/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2005年度～2008年度、基盤研究(B)、代表者：園府寺司

課題番号：17320030

研究題目：モダニズムと中東欧の近代芸術に関する国際・学際共同研究

研究経費：2005年度 3,700千円

研究の目的：

中東欧の近代芸術について中東欧諸国ならびに北米などの研究者と国際共同研究を行う。

2-6-2. 2001年度～2004年度、基盤研究(C)、代表者：園府寺司

課題番号：1450077

研究題目：モダニスト・イコノクラスムの研究

研究経費：2004年度 800千円

研究の目的：

モダニズムの絵画、彫刻、建築などについて、そのイコノクラスム的性質に注目し、それらがどのような営みだったの

かを明らかにする。

2-6-3. 2004年度、基盤研究(C) (企画調査)、代表者：園府寺司

課題番号：16632001

研究題目：中・東欧の近現代芸術に関する国際・学際共同研究

研究経費：2004年度 2,900千円

研究の目的：

これまで研究と情報の乏しかった中・東欧の近現代芸術について、現地の研究者との国際・学際共同研究を立ち上げるため、組織、情報データベースとネットワーク、教育普及・成果発表の体制を整備する。また、プロジェクトの一環として2006年前半期に計画している国際シンポジウム「中・東欧の近現代芸術」の準備もあわせて行う。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2004年度、日本学術振興会 特定国派遣(ポーランド ワルシャワ ユダヤ歴史研究所)、派遣者：園府寺司

研究題目：近代美術史におけるポーランド系ユダヤ人芸術家、批評家の研究——エコール・ド・パリ期を中心に——

研究経費：渡航費(学術振興会) 滞在費・国内旅費(ポーランド学術アカデミー PAN)

2-7-2. 21世紀COEプログラム分担

2-8. 学会役員等の引き受け状況

民族芸術学会・理事

2002年度～2005年度

3. 泉 万里 教授

1957年生。1980年東北大学文学部史学科卒業。1992年大阪大学文学研究科博士課程後期課程単位修得退学。1996年博士(文学)を取得。大阪大学文学部美学科助手、神戸市看護大学助教授を経て、2005年より現職。専攻：日本美術史、中世絵画史。

3-1. 論文

泉万里「幸若舞曲『八島』とその絵画」『大和文華』113, pp. 1-18, 2005/8

3-2. 著書

泉万里『大阪大学総合学術博物館叢書1 扇のなかの中世都市 光円寺所蔵「月次風俗図扇面流し屏風」』大阪大学出版会, 2006/3

玉蟲敏子, 泉万里ほか8人(共著)『講座 日本美術史5「かざり」と「つくり」の領分』東京大学出版会, 2005/10

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003年度～2005年度、萌芽研究、代表者：泉万里

課題番号：15652010

研究題目：幸若舞と絵画

研究経費：2004年度 500千円

2005年度 500千円

研究の目的：

芸能としてはすでに絶えてしまったといってもよい幸若舞は、演じられるだけでなく、そのひとつひとつの演目の台本が物語として読み継がれ、さらに、その物語の絵画化が積極的に行われていることが近年確認されつつある。具体的には、屏風や扇面といった物語本文を伴わない形式から、絵入り本や絵巻という、本文を伴った形までさまざまな形式にわたる作例が残されている。そして、ながらく画題不明とされてきた作例が、幸若舞によって読み解かれたという例も少なくない。本研究では、幸若舞という芸能がどのように絵画化されてきたのか、ということ把握することをめざし、それによって、この芸能がどのように享受されてきたかを考察することを第1の目的とする。そして、それは同時に近世初期の物語絵画の豊かな1ジャンルを解明することになると予想する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

4. 藤岡 穰 助教授

1962年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。1990年4月～1999年3月大阪市立美術館学芸員、1999年4月～現職。専攻：東洋美術史。

4-1. 論文

藤岡穰「石造釈迦三尊像」『国華』1324, pp. 34-35, 2006/2

藤岡穰「仏像と本様——鎌倉時代前期の如来立像における宋仏画の受容を中心に」板倉聖哲編『講座日本美術史2 形態の伝承』東京大学出版会, pp. 133-163, 2005/5

藤岡穰「ブロンペン国立博物館蔵「癩王像」をめぐって」2002年度～2004年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(1))研究成果報告書『東南アジア彫刻史における<インド化>の再検討(論文編)』(研究代表者：肥塚隆), pp. 26-32, 2005/3

4-2. 著書

藤岡穰 2004年度～2005年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書『隋時代彫刻における紀年銘作品の研究』2006/3

藤岡穰(肥塚隆, 奥平俊六, 川本重雄, 山本英男, 永井規男, 原田平作)『新修 豊中市史 第6巻 美術』豊中市史編さん委員会編, 豊中市, 2005/12

藤岡穰(芝田寿朗, 須田悦生, 高早恵美, 戸田浩之, 森田恵理子, 吉田純一, 杉本泰俊, 前川幸雄)『わかさ美浜町誌<美浜の文化>第三巻 拝む・描く』美浜町誌編纂委員会編, 美浜町, 2005/3

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤岡穰(三田覚之, 山口隆介)「笠置寺の仏像」科学研究費補助金基礎研究(B)17320039 研究報告書, 小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開—vol. I—講演録・随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告(研究代表者 荒木浩), pp. 108-113, 大阪大学, 2006/3

藤岡穰「阿弥陀如来像 宝積院」『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 第四巻』(編纂者代表 水野敬三郎), 中央公論美術出版, pp. 161-166, 2006/2

藤岡穰「聖徳太子の忿怒相と八幡神」『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第三号 論集 カミとほとけ——宗教文化とその歴史的基盤——』(GBS 実行委員会編, 東大寺), pp. 27-28, 2005/12

4-4. 口頭発表

藤岡穰「仏像と本様——鎌倉時代前期の如来立像における宋仏画の受容を中心に——」南都文化研究会, 2004/12

藤岡穰「蔵王権現の説話と形相」絵画/物語研究会, 2004/9

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤岡穰 第3回国華賞, 国華社, 1991/10

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2004年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者名：藤岡穰

課題番号：16520080

研究題目：隋時代彫刻における紀年銘作品の研究

研究経費：2004年度 1,400千円

2005年度 1,000千円

研究の目的：

本研究は、中国・隋時代(581-618A.D.)の紀年銘を有する主要な彫刻作品を網羅的に調査し、信頼しうる基礎データを集成し、カタログを作成することを目的としている。隋時代彫刻は、中国で初めて本格的に仏教彫刻が制作された南北朝時代と強大な統一王朝のもとで再び仏教彫刻が隆盛した唐時代とのはざまにあって、従来は必ずしも積極的な評価を受けてこなかった。しかしながら、仏教史研究において、隋時代は北周末の廢仏により一時的に断絶していた西域やインドとの仏教文化の交流が再開して新しい思潮が生まれ、都長安を中心に国際的な仏教文化が花開いた変革の時代とされている。こうした認識を踏まえて彫刻作品を見直すと、実はそこにはインド・グプタ美術、さらにはペルシア・ササン朝美術からの影響や東南アジア彫刻との類似などきわめて豊かな国際性が認められ、隋時代彫刻がむしろ仏教彫刻史における大きな画期を形成していた可能性が想定される。本研究は、こうした観点から隋時代彫刻に着目し、その様式理解の基準を確立することを目的としており、中国のみならず日本も含めた東アジア全体の彫刻様式の理解に新たな視座をつくるものである。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

美術史学会・西支部常任委員

2004年7月～2006年6月

京都国立博物館・客員研究員

2004年4月～2006年3月

5. 赤木 美智 助手

1977年生。2000年、大阪大学文学部人文学科卒業。2004年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。文学修士(大阪大学、2004年)。2005年4月、大阪大学大学院文学研究科助手。専攻：日本近世絵画史

5-1. 論文

赤木美智「河村若芝の研究——文献と初期作品を中心に——」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座), 22, pp. 65-100, 2005/3

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

赤木美智「舞楽図」「韋駄天図」「白雉図」作品解説、『新修豊中市史第6巻 美術』（豊中市），pp. 43-51, pp. 188-189, pp. 200-202, 2005/12

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪大学文学会・編集委員

2005年4月～現在

民族芸術学会・会計委員

2005年4月～現在

2-24 文化基礎学(広域文化形態論講座)

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

文化基礎学の名称に見られるとおり、主に哲学的な観点から人文学全体を貫く基礎的な諸問題を人文学のみならず、場合によっては社会科学、自然科学の領域をも視野に入れて研究する。

2003年度までは「科学と社会」をテーマとする研究プロジェクトを遂行してきたが、それを受けて2004年度からは3年間の予定で「コミュニケーションと現代社会」を共同研究のテーマとして取り上げている。コミュニケーションの重要さはいつの時代でも変わることはないが、現代社会にはコミュニケーションに伴う特有の諸位相がある。各領域の専門家と非専門家(市民)との公共的対話をサポートすることも重要である。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月から)

教授 1(兼任) 助教授 0 講師 0 助手 0

教授：中岡成文(兼任)

II. 組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

2. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

3. 刊行物

なし

4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

5. 専門分野主催の研究会等活動状況

英語プレゼンテーション・スキル向上勉強会(週1回)

大北全俊、桑原英之、高橋綾「高等教育における哲学・倫理学教育のありかたについて」

2005年3月12日

堀江剛「遺伝カウンセリング：現代社会における医療コミュニケーションの課題」

2004年11月6日

鏡史織「対話が生まれる場所——哲学カフェについて」

2004年7月31日

屋良朝彦「薬害エイズと予防の原則」

2004年5月29日

2-25 地域社会論(広域文化形態論講座)

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本研究分野は、主に歴史学、考古学、地理学、民族学、民俗学などの学問分野に関わるテーマについて、本研究科内外の研究者と博士後期課程の大学院学生による共同研究を行い、人文学の新たな分野を開拓することをめざしています。2004年度より「死と生の習俗をめぐる比較史研究」をテーマとする共同研究がスタートしました。日本、アジア、欧米などの諸文明圏、あるいは文明圏のなかの個別地域における、死の習俗のあり方とその「生」のあり方への影響、およびその時代的変化等の意味、さらに習俗という実態と理念との間の相関などを、地域社会や国家・宗教・民族・ジェンダーの問題と関連させながら解明するとともに、これら個別研究を人類史全体のなかに位置づける方向をめざしています。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月から)

教授 1(兼任) 助教授 0 講師 0 助手 0

教授：片山 剛(兼任)

II. 組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

2. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

3. 刊行物

なし

4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

5. 専門分野主催の研究会等活動状況

2005年度 共同研究テーマ「死と生の習俗をめぐる比較史研究」 研究報告 12本

村田路人(本研究科教授)「幕藩制国家と鳴物停止令」

2006年1月28日

江川温(本研究科教授)「西欧中近世における権力者の表象——聖堂内の墓の横臥像から市中の騎馬像へ——」

2006年1月28日

指昭博(神戸市外国語大学教授)「アイデンティティとしての殉教」

2005年12月10日

荒川正晴(本研究科教授)「敦煌本十王経と漢人在俗仏教信徒の冥界観」

2005年12月10日

早瀬晋三(大阪市立大学教授)「ポスト戦後の慰霊 part2：現代東・東南アジアのなかの日本との戦争」	2005年11月12日
片山剛(本研究科教授)「江蘇省における仏教寺院と位牌祭祀の現況について」	2005年11月12日
中村生雄(学習院大学教授)「死後イメージと葬送の規制緩和——御巢鷹山の墓標から With ペット墓まで——」	2005年10月15日
福永伸哉(本研究科教授)「墳墓様式と集団・民族——韓国の長鼓墳(前方後円墳)をめぐる議論について」	2005年10月15日
中村武司(本研究科博士後期課程3年・西洋史)「イギリスのパンテオンの創出と受容——19世紀前半のセント・ポール大聖堂」	2005年7月9日
牧田満知子(本研究科博士後期課程1年・日本学)「国際援助としての社会福祉——カンボジアの農村で福祉を考える——」	2005年6月11日
榎本文雄(本研究科教授)「初期のインド仏教における業・輪廻」	2005年5月14日
湯浅邦弘(本研究科教授)「懷徳堂の祭祀空間——中国古礼の受容と展開——」	2005年4月23日
2004年度 共同研究テーマ「死と生の習俗をめぐる比較史研究」 研究報告13本	
長井伸仁(徳島大学助教授)「フランスの『無名戦士の墓』」	2005年1月8日
平雅行(本研究科教授)「来世観の変容と天皇家の葬送」	2004年12月11日
村田路人(本研究科教授)「鳴物停止令と近世支配」	2004年12月11日
荒川正晴(本研究科教授)「漢人仏教徒の葬礼文書と冥界観：トゥルフアン出土資料の検討を中心として」	2004年11月27日
指昭博(神戸市外国語大学教授)「幽霊と宗教改革：死者の魂の行方」	2004年11月27日
成田静香(関西学院大学助教授)「中国の自梳女」	2004年11月20日
福永伸哉(本研究科助教授)「葬送儀礼のコントロールと政治権力：前方後円墳の歴史的評価をめぐる」	2004年11月20日
片山剛(本研究科教授)「江蘇省常州市の寺院における位牌安置の現況」	2004年10月9日
中村生雄(本研究科教授)「死者と生者の相関：日本の死者儀礼に見る慣習と革新」	2004年10月9日
江川温(本研究科教授)「帝王の墓と記念：日仏比較の試み」	2004年7月31日
中村武司(本研究科博士後期課程3年・西洋史)「セント・ポール大聖堂：陸海軍の英雄のための“イギリスのパンテオン”」	2004年7月31日
早瀬晋三(大阪市立大学教授)「ポスト戦後の慰霊：現代東・東南アジアのなかの日本との戦争」	2004年6月5日
片山剛(本研究科教授)「《死者祭祀空間の地域的構造：華南珠江デルタの過去と現在》補足および最近の研究動向」	2004年5月15日

2-26 言語文芸学(広域文化表現論講座)

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野は、広く言語表現をめぐる諸領域に関連して、文学・芸術作品とそれが生まれた時代や社会背景との相互関連、また広く人間にとっての文学・芸術の意味を追求するため、多元的・総合的に言語文芸の諸相を考究する学際的な共同研究を進めている。

2002年度からは、中国文学兼任の浅見洋二助教授が共同研究「テキストの読解と伝承——〈書くこと〉と〈読むこと〉、〈聴くこと〉と〈話すこと〉を結ぶ言説の場に関する社会文化論的研究——」を開催、メディア論的な視点をも踏まえながら、文学作品を中心とするテキストの制作・受容・読解・伝承の諸過程をめぐる研究を行っている。これと連動する形で、本研究科客員研究員である周裕鍬四川大学教授らとともに、恵洪『石門文字禪』の共同訳注の作成を行った。

2005年度からは、日本文学兼任の飯倉洋一教授が共同研究「テキストの生成と変容」を開催、文学テキストのみならず、思想・芸術(絵画・音楽・演劇)の「作品」をもテキストにとらえ、文字通り〈広域文化表現論〉の立場から、テキストの生成と変容の問題を考えている。テーマとしては、①テキストが生成されるための、広い意味での〈場〉の問題。②テキストの推敲・添削・改作などめぐる問題。③テキストの引用・翻案・パロディなどめぐる問題などを扱っており、多角的な観点からテキストの生成と変容の問題に迫り、テキストの動的側面をとらえる方法を模索している。これと連動する形で、上田秋成の『文反古』というテキストを稿本本文から刊本本文への変容を分析しつつ、読解を進めている。

I. 組織(2004年度～2005年度)

1. 教員

2005年度から	教授 1(兼任)	助教授 0	講師 0	助手 0
	教授: 飯倉 洋一(兼任)			
2002年度～2004年度	教授 0	助教授 1(兼任)	講師 0	助手 0
	助教授: 浅見 洋二(兼任)			

II. 組織としての教育・研究活動(2004年度～2005年度)

1. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

2. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

3. 刊行物

2005年度 浅見洋二編『テキストの読解と伝承』大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究研究成果報告書, 2006/3/31

4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

5. 専門分野主催の研究会等活動状況

【2005年度】

- 第5回(特別)研究会 テクストの生成と変容——絵画を読む—— 2006年3月11日
木下京子(フィラデルフィア美術館学芸員・大阪大学大学院博士後期課程)「池玉瀾の画業について」
荒木浩(大阪大学大学院文学研究科助教授)「朝政の風景——院政と聖帝をめぐって——」
奥平俊六(大阪大学大学院文学研究科教授)「姿の意味——散聖・美人・カブキモノ——」
- 第4回研究会 2005年12月22日
後藤昭雄(大阪大学大学院文学研究科教授)「呪願文の形成——文体論の視点から——」
- 第3回研究会 2005年10月20日
服部典之(大阪大学大学院文学研究科助教授)「遺棄されたイギリス小説起源——Bastardyとイギリス現代小説——」
- 第2回研究会 2005年7月7日
浅見洋二(大阪大学大学院文学研究科助教授)「言葉と物——「形似」論から見た中国における言語表現の秩序とその変容」
- 第1回研究会 2005年5月19日
飯倉洋一(大阪大学大学院文学研究科教授)「テキストの生成と変容——近世における「奇談」の場合——」

【2004年度】

- 第六回特別研究会・研究報告 2004年12月17日
尚永亮(武漢大学教授)「『以意逆志』説の特質について」
- 第五回特別研究会・研究報告 2004年11月24日
蔡罕(浙江万里学院教授)「浙東文化の特質」
何俊(浙江大学教授)「『宋元学案』全氏補本の性質とその思想史観」
- 第四回特別研究会・研究報告 2004年10月6日
衣若芬(中央研究院研究員)「瀟湘八景の詩と絵画」

2-27 留学生専門教育

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

留学生専門教育では、留学生の勉学・研究をサポートするために、日本語の授業やオフィスアワーを設けている。日本語の授業では、論文作成法、発表や議論の仕方などを学ぶ。とくに論理的思考の訓練に重点をおき、質を落とさずにわかりやすく文章(論文)を書けるようにすることを目指している。

教員の研究活動(2004 年度～2005 年度の過去 2 年間)

1. 鄭 聖汝 講師

1957 年生。神戸大学大学院文化科学研究科博士後期課程修了。博士(学術、神戸大学、1999 年)。日本学術振興会外国人特別研究員(大阪大学)を経て現職。専攻：言語学／韓国語学、日本語学。

1-1. 論文

鄭聖汝「自他交代とサセ」『台湾における日本文学・国語学の新たな可能性』2004 年度～2005 年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書, 大阪大学大学院文学研究科東アジア国際フォーラムプロジェクト(編), pp. 73-89, 2006/2

鄭聖汝「状態述語のふるまいから見た分裂自動詞性——動格言語の分裂主語システムと韓国語の自動詞システムの証拠から——」*KLS proceedings*, pp. 33-43, 2005/6

鄭聖汝「分裂自動詞性の本性について——類型論の観点から見た非対格性の仮説とその問題点——」『大阪大学紀要』45, 大阪大学, pp. 19-58, 2005/3

鄭聖汝「規範的使動構文と非規範的使動構文」*Language Research* 41-1. Language Research Institute Seoul National University, pp. 49-78, 2005/3

鄭聖汝「韓国語の自動詞とヴォイス——自発と受身の連続性——」影山太郎, 岸本秀樹(編)『柴谷方良教授還暦記念論文集日本語の分析と言語類型』くろしお出版, pp. 319-335, 2004/6

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Shibatani Masayoshi and Chung Sung-Yeo “On Grammaticalization of Going and Coming Verbs: A Comparative Perspective of Japanese and Korean,” Japanese Korean Linguistics Conference. Wisconsin University, 2005/10/8

鄭聖汝「言語類型論から見た能格性と非体格性の仮説」全国冬季学術発表大会, 大邱: 言語科学会, pp.195-208, 2005/2/19

鄭聖汝「自他交替とサセ」国際フォーラム「台湾における日本文学・日本語学の新たな可能性——国際化の中の日本文学・日本語学——」長栄大学(台湾), 2004/12/12

鄭聖汝「状態述語のふるまいから見た分裂自動詞性——動格言語の分裂主語システムと韓国語の自動詞システムの証拠から——」第 29 回関西言語学会, 京都外国語大学, 2004/10/30

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

付 録

2005 年度実施アンケート結果

- 1. 「大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」**
- 2. 「卒業生アンケート」**

付 録 1

2005 年度「大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」実施結果報告

文学研究科評価・広報室では2005年度文学研究科に在籍する大学院生(休学者を除く)を対象に標記のアンケートを行った。実施期間は2005年11月21日から12月2日。マークシート(自由記入欄付き)を各研究室の助手等を通じて各人に配布し、文学部棟正面玄関に設置したボックスにて回収した。517名が対象で、回答は195名。回答率37.7パーセントであった。

2006年 3月 20日
文学研究科・文学部
評 価 ・ 広 報 室

I アンケート依頼状の文面

大学院生に対し、下記のような文書をもって依頼した。

平成 17 年度 11 月実施

大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート

文学研究科 評価・広報室

文学研究科では、教育・研究環境ならびに指導体制の改善のために、院生の方々を対象にアンケートを実施することになりました。別紙の質問に、率直にお答えいただきたいと思います。結果を真摯に受けとめ、できるところから改善したいと考えています。質問は全部で 20 項目あります。自由記述をふくめて 15～20 分程度で済むと思いますので、宜しくおねがいします。

記

- 実施期間 11月21日(月)～12月2日(金)
- 対象者 休学者を除く文学研究科在籍大学院生
- 記入方法 設問ごとに回答を1つ選んで、マークシートの回答マーク欄の設問1～設問20に記入してください。
- 提出方法 実施期間内に各自、記入済みマークシートのみを教務係前の回収箱に投函してください。余った質問用紙およびマークシートは文学部棟1階正面玄関にある評価・広報室のメールボックスへ返却してください。

◆概観

回答率は全体で37.7%。昨年度の回収率(9.6%)を大きく上回った。後期課程より前期課程のほうがやや回答率が高いが、評価結果の偏差はほとんどない。ブロック別では設問によって若干偏差がある。

◆問題点の分析

1 設備について(設問4~7)

日数としては大学に結構来ているわりに、主な研究場所を自宅と答えている学生が多い(設問4, 5)。研究環境が十全でなく、学内を拠点としにくい事情があると見られる。本研究科の設備については、常時使えるデスク・パソコン・保管ロッカー・自習スペースがない(設問6, 7・自由記述1, 2, 12, 14, 16, 21, 23, 24, 28, 30, 32, 35, 38, 40, 45, 49)、夜間および休日の入室が不自由である(自由記述3, 4, 13, 16, 18, 20, 29, 41)、トイレが棟内にない(自由記述3, 31, 35)、託児施設がない(自由記述3)、仮眠室がない(自由記述18)、水が悪い(自由記述18)、コピーがとりにくい(自由記述14, 37)などの声がある。文学部棟以外でもよいので学内に自習室を確保してほしいという希望もあった(自由記述30)。附属図書館を拠点とする学生も多くはなく、設備・開館時間・サービス(特にコピー)への不満が相当数ある(設問4・自由記述1, 3, 5, 8, 9, 11, 38, 39)。

教室設備については、電灯交換・空調・スライド装置・暗幕の不備の訴えがあった(自由記述19, 26, 46, 47, 52)。その他に、基本ソフトの一括サイトライセンス契約(自由記述45)、研究室における電磁波遮断フィルターの設置・屋上の開放・文学部棟と図書館の連絡路設置(自由記述18)、エレベーターの更新(自由記述19)を望む声があった。

2 本学の文献・資料の整備と活用について(設問8~9)

整備内容に回答者の約3割半が不満を感じている(設問8・自由記述1, 7, 15, 17, 22, 39)。活用については約4割半が使い勝手の悪さを訴えており、特に研究室ごとに分散している図書の貸出管理の改善(集中化、手続きの明確化など)を求める声が多い(設問9・自由記述3, 17, 34, 37)。

3 指導について(設問10~11)

指導機会ならびに指導内容については不満は少ない(設問10, 11)。だが後期課程において一部に不満の訴えがある(自由記述24, 34, 44)。

4 授業について(設問12~13)

開講授業の数や種類については目立った不満はないようだが、十分とする回答数が特に多いわけでもない(設問12)。一部に、大学院専門の授業が少ない・教員の渡航不在を補う授業がないといった不満の声がある(自由記述24, 44)。非常勤講師等の招聘数については評価が二分するが、増やしてほしいと希望する回答者もほぼ4割ある(設問13・自由記述6, 45)。

5 自分の研究について(設問14~16)

研究上の悩みは大半が教員や助手・研究室の仲間に打ち明けている。ただ、相談相手がいないと回答した院生がどのブロックにも何人か存在する(設問14)。

研究進捗については、過半数は必ずしも計画書通りに進んでおらず、何らかの不調をもらす院生は前期課程で約2割半、後期課程で4割に達する(設問15, 16)。

6 進路について(設問17~20)

前期課程について見ると、回答者のほぼ4割が本研究科博士後期課程への進学を、同じくほぼ4割が就職を考えている(設問17)。就職と回答した院生のうち半数は最初からそう決めていたと答えているが、あと半数は経済的理由・自信喪失・

進学後の就職の見込みのなさをあげている(設問18)。

後期課程について見ると、在学中の3年以内に博士号を取得できると見込んでいる院生は1割に満たない。あとのほとんどの院生は修了年限いっぱい・あるいはそれ以上かかって博士号を取得したいと考えている(設問19)。回答者のほぼ8割は研究職・教育職(学振特別研究員等任期付研究職を含む)への就職を考えており、それ以外の就職を考えている回答者はごく少数である(設問20)。研究職に就くためのバックアップ体制を整えてほしいとの声もあった(自由記述22)。

7 その他

自由記述からは、授業料が高いわりにしかるべき給付を受けていないという不満が見て取れる。授業料が高すぎる(自由記述27)、研究費が少ない(自由記述7, 38)、文献等の収集やコピーの費用・学会の交通費などの補助がない(自由記述8, 48, 50, 51)、TA・RAなどのアルバイト給与が低い(自由記述43, 45)、助手不足で院生の雑務が増えている(自由記述25)、教員が忙しすぎて指導が不十分(自由記述24)、建物が古い(自由記述36)など。他大学ないし他学部と比較して研究環境が見劣りすると感じているようである。

その他、教務事務について、成績配布のさいの個人情報守秘、重要な連絡事項のホームページ掲載(自由記述42, 33, 37)を望む声があった。また、本アンケート結果とその対応の公表を求める声があった(自由記述10, 14)。

III

資料:数値集計

◆課程別集計

設問1 あなたは博士前期課程・後期課程のどちらに属していますか

所属	全体
①博士前期課程	106
②博士後期課程	89
合計	195

設問2 あなたはその課程に入って何年目になりますか(休学期間を含む)

期間	前期課程	後期課程	合計
①1年	49	19	68
②2年	48	31	79
③3年	6	26	32
④4年	3	8	11
⑤5年以上	0	5	5
合計	106	89	195

設問3 あなたが属する専門分野は次のどれですか

専門分野	前期課程	後期課程	合計
①哲学・思想系	14	7	21
②歴史学・考古学系	24	19	43
③文学・語学系	40	38	78
④日本学・日本語学・人文地理学系	13	11	24
⑤芸術学系	15	14	29
合計	106	89	195

設問4 あなたが文学研究科に通う頻度はどの程度ですか

通学頻度	前期課程	後期課程	合計
①ほとんど毎日	29	19	48
②週4～5日	36	17	53
③週2～3日	36	43	79
④週1日程度	5	9	14
⑤ほとんど行かない	0	1	1
合計	106	89	195

設問5 あなたの主な研究場所はどこですか

研究場所	前期課程	後期課程	合計
①専門分野の研究室	48	32	80
②研究推進室(もと合同研究室)	3	1	4
③附属図書館	11	6	17
④自宅・アパート	42	49	91
⑤その他	2	1	3
合計	106	89	195

設問6 専門分野の研究室のデスクについて

デスクの有無	前期課程	後期課程	合計
①自分専用のデスクがある	1	1	2
②共用のデスクがあり常時使用できる	64	42	106
③共用のデスクがあるが常時使用できるわけではない	36	34	70
④共用のデスクがあるがほとんど使用できない	4	7	11
⑤使えるデスクはない	1	5	6
合計	106	89	195

設問7 専門分野の研究室のパソコンについて

パソコンの有無	前期課程	後期課程	合計
①共用のPC(研究室備品)があり常時使用できる	41	31	72
②共用のPC(研究室備品)があるが常時使えるわけではない	54	41	95
③共用のPC(研究室備品)があるがほとんど使用できない	9	7	16
④自分所有のPCを持ち込んで使用している	2	8	10
⑤使えるPCはない	0	2	2
合計	106	89	195

設問8 あなたの研究に必要な基本的文献・資料の本学における整備状況について

文献・資料の整備状況	前期課程	後期課程	合計
①十分に整備されている	24	13	37
②なんとか整備されている	44	44	88
③あまり整備されていない	30	23	53
④ほとんど整備されていない	7	7	14
⑤不備であるが、研究の特殊性から見てやむを得ないと思う	1	2	3
合計	106	89	195

設問9 本学における文献や資料の利用について

文献・資料の利便性	前期課程	後期課程	合計
①たいへん利用しやすい	5	3	8
②利用しやすい	26	10	36
③とくに不便は感じない	35	31	66
④やや利用しにくい	28	34	62
⑤たいへん利用しにくい	12	11	23
合計	106	89	195

設問10 指導教員の指導について

教員の指導	前期課程	後期課程	合計
①必要なときにはいつでも指導を受けられる	44	34	78
②アポイントメントが必要だが、必要な指導は受けられる	58	50	108
③面会してもらうことは難しいが、メールなどを通じて指導は受けられる	2	1	3
④なかなか指導は受けられない	2	3	5
⑤ほとんど指導は受けられない	0	1	1
合計	106	89	195

設問11 指導教員の指導内容に満足していますか

指導内容	前期課程	後期課程	合計
①大いに満足している	40	32	72
②満足している	51	42	93
③どちらともいえない	14	8	22
④あまり満足していない	1	4	5
⑤全く満足していない	0	2	2
合計	106	88	194

設問12 専門分野が開講する講義・演習等の数や種類は十分ですか

講義・演習等の多様性	前期課程	後期課程	合計
①十分である	30	25	55
②ほぼ十分である	42	26	68
③どちらともいえない	22	24	46
④やや不十分である	11	12	23
⑤全く不十分である	1	2	3
合計	106	89	195

設問13 専門分野の非常勤講師等の招聘数は十分ですか

講師等の招聘数	前期課程	後期課程	合計
①現状で十分である	10	9	19
②ほぼ十分である	31	14	45
③どちらともいえない	29	26	55
④少し増やしてほしい	26	27	53
⑤大幅に増やしてほしい	10	13	23
合計	106	89	195

設問14 あなたは研究上の悩みを主に誰に相談していますか

相談者	前期課程	後期課程	合計
①指導教員	32	38	70
②指導教員以外の教員	2	2	4
③助手や研究室の仲間	62	32	94
④その他の人	5	8	13
⑤相談相手がいない	5	9	14
合計	106	89	195

設問15 今年度の研究の進行は順調ですか

研究の進行状況	前期課程	後期課程	合計
①大変順調	1	2	3
②順調	23	18	41
③何とも言えない	54	34	88
④やや不調	19	26	45
⑤不調	8	9	17
合計	105	89	194

設問16 あなたの研究は、年度初めに提出した研究計画書どおり進んでいますか

研究計画書との合致	前期課程	後期課程	合計
①研究計画書どおり進んでいる	1	3	4
②だいたい研究計画書どおり進んでいる	50	26	76
③あまり研究計画書どおり進んでいない	49	43	92
④まったく研究計画書どおり進んでいない	3	8	11
⑤研究計画書の計画を変更した	2	7	9
合計	105	87	192

設問17 (設問17と18は博士前期課程(MC)の方への質問です)あなたの前期課程修了後の進路について

進路(MC)	前期課程
①本研究科博士後期課程(DC)への進学を考えている	42
②他大学への進学(留学を含む)を考えている	5
③就職を考えている	39
④未定	16
⑤その他	3
合計	105

設問18 (設問17で3と答えた人に)その進路を決めた主な要因について

就職理由	前期課程
①最初から前期課程修了後は就職すると決めていたから	21
②研究への興味や意欲や自信を失い、見通しが立たなくなったから	6
③家庭の事情で、あるいは経済的に大学で研究を続けることが困難だから	9
④進学しても、就職できる見通しがあるようには思えないから	3
⑤その他	0
合計	39

設問19 (本問は博士後期課程(DC)の方への質問です)博士号の取得について

博士号取得(DC)	後期課程
①博士後期課程在学中の3年以内に取得するつもりである	8
②1~2年留年しても博士後期課程在学中に取得するつもりである	37
③博士後期課程在学中には無理だが、単位修得退学後3年以内に取得したいと考えている	29
④単位修得後3年以内では無理かもしれないが、いずれはなんらかの形で博士号を取得したいと考えている	11
⑤博士号の取得については考えていない	2
合計	87

設問20 (本問は博士後期課程(DC)の方への質問です)あなたの博士課程修了後の進路について

進路(DC)	後期課程
①研究職・教育職(学振特別研究員等任期付き研究職を含む)への就職を考えている	66
②他大学における研究(留学を含む)を考えている	2
③研究・教育関係以外の就職を考えている	2
④未定	16
⑤その他	1
合計	87

◆ブロック別集計

設問1 あなたは博士前期課程・後期課程のどちらに属していますか

所属	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①博士前期課程	14	24	40	13	15	106
②博士後期課程	7	19	38	11	14	89
合計	21	43	78	24	29	195

設問2 あなたはその課程に入って何年目になりますか(休学期間を含む)

期間	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①1年	9	14	27	7	11	68
②2年	6	16	32	14	11	79
③3年	4	11	10	2	5	32
④4年	1	2	6	0	2	11
⑤5年以上	1	0	3	1	0	5
合計	21	43	78	24	29	195

設問3 あなたが属する専門分野は次のどれですか

専門分野	全体
①哲学・思想系	21
②歴史学・考古学系	43
③文学・語学系	78
④日本学・日本語学・人文地理学系	24
⑤芸術学系	29
合計	195

設問4 あなたが文学研究科に通う頻度はどの程度ですか

通学頻度	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①ほとんど毎日	6	11	20	3	8	48
②週4～5日	6	13	19	7	8	53
③週2～3日	7	14	37	13	8	79
④週1日程度	2	5	2	1	4	14
⑤ほとんど行かない	0	0	0	0	1	1
合計	21	43	78	24	29	195

設問5 あなたの主な研究場所はどこですか

研究場所	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①専門分野の研究室	14	21	28	5	12	80
②研究推進室(もと合同研究室)	0	2	0	2	0	4
③附属図書館	1	1	11	3	1	17
④自宅・アパート	6	19	38	14	14	91
⑤その他	0	0	1	0	2	3
合計	21	43	78	24	29	195

設問6 専門分野の研究室のデスクについて

デスクの有無	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①自分専用のデスクがある	0	0	1	1	0	2
②共用のデスクがあり常時使用できる	13	23	45	9	16	106
③共用のデスクがあるが常時使用できるわけではない	7	15	27	10	11	70
④共用のデスクがあるがほとんど使用できない	1	4	2	2	2	11
⑤使えるデスクはない	0	1	3	2	0	6
合計	21	43	78	24	29	195

設問7 専門分野の研究室のパソコンについて

パソコンの有無	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①共用のPC(研究室備品)があり常時使用できる	8	20	26	6	12	72
②共用のPC(研究室備品)があるが常時使えるわけではない	12	16	42	12	13	95
③共用のPC(研究室備品)があるがほとんど使用できない	1	4	8	3	0	16
④自分所有のPCを持ち込んで使用している	0	3	1	3	3	10
⑤使えるPCはない	0	0	1	0	1	2
合計	21	43	78	24	29	195

設問8 あなたの研究に必要な基本的文献・資料の本学における整備状況について

文献・資料の整備状況	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①十分に整備されている	5	12	14	3	3	37
②なんとか整備されている	7	19	42	7	13	88
③あまり整備されていない	8	8	17	12	8	53
④ほとんど整備されていない	0	4	4	2	4	14
⑤不備であるが、研究の特殊性から見てやむを得ない	1	0	1	0	1	3
合計	21	43	78	24	29	195

設問9 本学における文献や資料の利用について

文献・資料の利便性	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①たいへん利用しやすい	0	3	3	1	1	8
②利用しやすい	5	12	11	1	7	36
③とくに不便は感じない	6	16	30	4	10	66
④やや利用しにくい	7	10	24	12	9	62
⑤たいへん利用しにくい	3	2	10	6	2	23
合計	21	43	78	24	29	195

設問10 指導教員の指導について

教員の指導	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①必要なときにはいつでも指導を受けられる	8	14	36	12	8	78
②アポイントメントが必要だが、必要な指導は受けられる	11	27	38	12	20	108
③面会してもらうことは難しいが、メールなどを通じて指導は受けられる	1	1	1	0	0	3
④なかなか指導は受けられない	1	1	2	0	1	5
⑤ほとんど指導は受けられない	0	0	1	0	0	1
合計	21	43	78	24	29	195

設問11 指導教員の指導内容に満足していますか

指導内容	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①大いに満足している	4	15	33	12	8	72
②満足している	11	25	32	10	15	93
③どちらともいえない	5	3	8	1	5	22
④あまり満足していない	1	0	2	1	1	5
⑤全く満足していない	0	0	2	0	0	2
合計	21	43	77	24	29	194

設問12 専門分野が開講する講義・演習等の数や種類は十分ですか

講義・演習等の多様性	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①十分である	4	14	27	6	4	55
②ほぼ十分である	4	13	31	9	11	68
③どちらともいえない	10	12	10	6	8	46
④やや不十分である	3	4	8	2	6	23
⑤全く不十分である	0	0	2	1	0	3
合計	21	43	78	24	29	195

設問13 専門分野の非常勤講師等の招聘数は十分ですか

講師等の招聘数	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①現状で十分である	0	7	8	3	1	19
②ほぼ十分である	6	9	19	2	9	45
③どちらともいえない	10	8	18	11	8	55
④少し増やしてほしい	5	11	23	6	8	53
⑤大幅に増やしてほしい	0	8	10	2	3	23
合計	21	43	78	24	29	195

設問14 あなたは研究上の悩みを主に誰に相談していますか

相談者	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①指導教員	11	14	26	7	12	70
②指導教員以外の教員	1	0	1	2	0	4
③助手や研究室の仲間	7	26	36	12	13	94
④その他の人	1	2	7	1	2	13
⑤相談相手がいない	1	1	8	2	2	14
合計	21	43	78	24	29	195

設問15 今年度の研究の進行は順調ですか

研究の進行状況	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①大変順調	0	0	0	2	1	3
②順調	3	6	22	5	5	41
③何とも言えない	12	19	32	11	14	88
④やや不調	3	11	20	5	6	45
⑤不調	2	7	4	1	3	17
合計	20	43	78	24	29	194

設問16 あなたの研究は、年度初めに提出した研究計画書どおり進んでいますか

研究計画書との合致	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①研究計画書どおり進んでいる	0	0	1	3	0	4
②だいたい研究計画書どおり進んでいる	9	13	33	9	12	76
③あまり研究計画書どおり進んでいない	9	22	38	9	14	92
④まったく研究計画書どおり進んでいない	2	4	2	2	1	11
⑤研究計画書の計画を変更した	1	2	3	1	2	9
合計	21	41	77	24	29	192

設問17 (設問17と18は博士前期課程(MC)の方への質問です)あなたの前期課程修了後の進路について

進路(MC)	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①本研究科博士後期課程(DC)への進学を考えている	4	5	23	3	7	42
②他大学への進学(留学を含む)を考えている	0	1	2	2	0	5
③就職を考えている	9	13	9	5	3	39
④未定	0	4	6	3	3	16
⑤その他	0	1	0	0	2	3
合計	13	24	40	13	15	105

設問18 (設問17で3と答えた人に)その進路を決めた主な要因について

就職理由	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①最初から前期課程修了後は就職すると決めていたから	3	7	5	5	1	21
②研究への興味や意欲や自信を失い、見通しが立たなくなったから	2	1	2	0	1	6
③家庭の事情で、あるいは経済的に大学で研究を続けることが困難だから	2	4	2	0	1	9
④進学しても、就職できる見通しがあるようには思えないから	2	1	0	0	0	3
⑤その他	0	0	0	0	0	0
合計	9	13	9	5	3	39

設問19 (本問は博士後期課程(DC)の方への質問です)博士号の取得について

博士号取得(DC)	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①博士後期課程在学中の3年以内に取得するつもりである	1	1	3	2	1	8
②1~2年留年しても博士後期課程在学中に取得するつもりである	2	9	13	6	7	37
③博士後期課程在学中には無理だが、単位修得退学後3年以内に取得したいと考えている	4	4	14	2	5	29
④単位修得後3年以内では無理かもしれないが、いずれはなんらかの形で博士号を取得したいと考えている	0	5	5	1	0	11
⑤博士号の取得については考えていない	0	0	1	0	1	2
合計	7	19	36	11	14	87

設問20 (本問は博士後期課程(DC)の方への質問です)あなたの博士課程修了後の進路について

進路(DC)	哲学	史学	文学	日本学	芸術	合計
①研究職・教育職(学振特別研究員等任期付き研究職を含む)への就職を考えている	4	12	29	9	12	66
②他大学における研究(留学を含む)を考えている	0	0	2	0	0	2
③研究・教育関係以外の就職を考えている	0	0	2	0	0	2
④未定	3	7	2	2	2	16
⑤その他	0	0	1	0	0	1
合計	7	19	36	11	14	87

付 録 2

2005年12月実施 「卒業生アンケート」の結果のまとめ

文学研究科評価・広報室では、1998(平成10)年～2001(平成13)年の学部卒業生を対象にアンケートを行った。これは、昨年度実施された、学部在学学生に対する「授業アンケート」、大学院生に対する「教育・研究環境などに関するアンケート」に続いて、＜内部＞で体験したことを＜外部＞の目で意見を聴取するために行ったものである。教育評価部門で素案を提出し、全体会議で最終案を確定した。自宅などに用紙を郵送し、無記名で回答を得た。12月16日に547件分を発送し、91件分が住所不明で返送され、回答を得たのは最終的に107件分であった。

2006年3月20日
文学研究科・文学部
評価・広報室

I アンケート依頼状の文面

大学院生に対し、下記のような文書をもって依頼した。

卒業生の皆様へ アンケートのお願い

大阪大学文学部では、昨年度、より充実した学生生活が送れるように様々な改善を進めるための一助として、学部生に「授業アンケート」を、大学院生に「教育・研究環境等に関するアンケート」を実施しました。今回は学部卒業生を対象に、＜内部＞で体験したことについて、＜外部＞の目でご意見をいただきたく、下記のように、アンケートを実施することといたしました。年末年始の慌ただしい時期ではございますが、本学のいっそうの発展のためにご協力をいただきたく、お願い申し上げます。

平成17年12月16日

大阪大学文学部・文学研究科
評価・広報室

記

- 1) 今回のアンケートにつきましては、大阪大学文学部同窓会で管理している住所データに基づき、平成10年卒業から平成13年卒業までの皆様を対象としています。
ただし、同データのうち、現在は不明となっている方々については、割愛させていただきました。
- 2) 別紙アンケート用紙の1～14について、それぞれお答え下さい。複数の回答が用意されているものにつきましては、該当すると思われるものを1つ選び、その番号を○で囲んでください。
- 3) 回答（卒業生アンケート設問兼回答用紙）は同封の封筒により、差出人は無記名のまま、平成18年1月31日までにご返送下さるようお願いいたします。

以上

Ⅱ 回答数、発送内訳、回答率

◆回答数

12月16日に547件発送。91件住所不明で返送。(456件着)1月末日までの回答数103件。最終締切日2月10日までの回答数106件。2月20日に1件延着。集計に追加。合計107件。2月24日に1件延着。集計に追加。合計108件。

◆発送内訳、回答率(2月24日〆切)

卒業年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	計
発送数	130	129	145	143	547
到着数	113	102	120	121	456
不着数	17	27	25	22	91
回答数					108
回答率					23.7%

Ⅲ アンケート設問および問題点の分析

◆アンケート設問

1. 教員の授業に対する意欲はどのようだったと思いますか。
2. 授業に出ることによって身についたことが多かったと思いますか。
3. 授業に満足していましたか。

4. 全般的に授業にはどの程度出席しましたか。
5. 成績評価について、今の時点でどのように思いますか。
6. 受講してよかったと思う科目はどれくらいありましたか。
7. 在学中に開講されていればよかったと思う授業科目はありますか。あるとすればどのような科目かをお書きください。
8. 在学中に、資格取得などのために学外の学校などに通ったことがありましたか。
9. 大阪大学文学部に在籍していたことがよかったと思いますか。
☆ ④あまり思わない・⑤まったく思わないを選んだ方にお聞きます。どうしてそのように思いますか。
10. 卒業してから、在学中に学生生活全般に関してもっとしておけばよかったと思うことはありますか。
11. 将来、機会があれば大学院などで改めて勉強したいと思いますか。
12. <11で①思うを選んだ方にお聞きます。>その際は、在学中と同じ分野ですか。
13. 後輩が受ける授業の改善のために、何か提案があればお書きください。
14. 今、大阪大学にどのようなことを望んでいますか。

◆分析

1 教員の授業に対する意欲

否定的な答えは6.5%に止まっており、「意欲的」とするのが3分の1を越え、「普通」以上に意欲的が計50.0%に達していることから、まずまずの評価というところか(選択肢の記述にやや不十分なところがあったかも)。ただし、自由回答のところ、「やる気の明らかでない先生は、研究成果に関わらず、降格、及び給与ダウンを実行したほうが良い」と一名が記している。そういう例がないわけではないということか。ただし、当時の共通教育での経験の反映かもしれない。

2 授業で身についたことが多いか

「大いに」と「まずまず」で72.2%ある。否定的な答が、11.1%に止まっていることを考え合わせると、これもまずまずの評価というところか。

3 授業の満足度

「おおむね満足」以上が、68.6%。「身についた」に比べると若干下がっている。教員の意欲を「普通」と感じていても、その半分近くは、「おおむね満足」しているとも取れる。言葉を変えれば、「普通」でも止むなしと思っているのか。「あまり満足しな」以下は、10.3%で、「不満が多かった」もわずかだがあり、皆無ではない。教員の意欲だけではすまない問題がある、ということか。

4 出席について

「少なくとも7割以上」出席したのが、計78.7%に達している。そのうちの1割あまりが、満足していないという計算になる。半分以下は、6.5%に止まっている。

5 成績評価

「おおむね適切」以上が、82.4%に達している。「あまり適切ではない」以下は、6.5%に止まるが、「全く適切とは思わない」も、1.9%ある(実数2名)。これは学生側の勘違い？

6 受講してよかった科目

「まずまずあった」以上が、8割近い。「満足」に比べて1割多い。個別に考えてみれば、満足度が上がったということか。「あまりなかった」以下も9.2%(10名)ある。当然の事ながら、「あまり身につかなかった」や「あまり満足していない」の率に近い。

7 開講されていればよかった科目

図書館司書資格取得のための授業を求めるものが、8名。明確であり、人数も多い。就職関連などで情報処理など実学的なものを求めるものが、回答者54(内10名は「特になし」)名の要求がある。希望する者の4分の1に上っている。他学部などとの融合科目などを求める声も注目される。ディベートを求めるものも複数ある。

8 資格のための学校

22.2%が経験があるとしている。どのようなものか、あるいはどこに通ったかを書いてもらうべきだったかもしれない。学外あるいは文学部外の資料と比べることも必要かもしれない。

9 阪大文学部に在籍していて良かったか

「まずまず」以上が、86.1%。「あまり思わない」以下が4.6%。授業の満足度などの率を越えている。否定的なものとしては、実社会と遠いというものがある。

10 学生時代にしておけばよかったと思うこと

他学科・学部、実学などを含んだ幅広い勉強が目立つ。もっと勉強をしておけばよかったという声も。

11、12 機会があれば大学院への進学

「思う」が58.3%、「思わない」17.6%の3倍以上に達している。しかも、「別の分野」とする者が、61.9%になっている。10の設問結果とも連動しているようにも読み取れる。潜在的マーケット？

13 後輩のための提案

授業アンケート、教員が研究と授業が別のスキルと自覚すること、成績評価を厳しくする、(最近の学生は...)学生の面倒見をよくする必要、就職関係、インターネットの活用、学生参加型の授業...、など。

14 大阪大学に望むこと

実学・外部評価・論文数などにとらわれない、純粋な学問の場であること。就職支援。社会に貢献する人材の輩出。文系の重視。授業料の適正化。

Ⅲ 資料：数値集計

◆回答数、構成比

1. 教員の授業に対する意欲はどのようだったと思いますか。

	回答	構成比
①意欲的な授業が多かった	38	35.2%
②あまり多くなかった	16	14.8%
③普通であった	47	43.5%
④少なかった	7	6.5%
⑤非常に少なかった	0	0.0%
合計	108	100%

2. 授業に出ることによって身についたことが多かったと思いますか。

	回答	構成比
①大いに思う	27	25.0%
②まずまずだと思う	51	47.2%
③なんともいえない	18	16.7%
④あまりそうは思わない	12	11.1%
⑤まったくそうは思わない	0	0.0%
合計	108	100%

3. 授業に満足していましたか。

	回答	構成比
①満足していた	18	16.7%
②おおむね満足していた	56	51.9%
③どちらともいえない	20	18.5%
④あまり満足しなかった	9	8.3%
⑤不満が多かった	2	1.9%
無回答	3	2.8%
合計	108	100%

4. 全般的に授業にはどの程度出席しましたか。

	回答	構成比
①非常によく出席した	42	38.9%
②少なくとも7割以上は出席した	43	39.8%
③半分以上は出席した	16	14.8%
④出席は半分にも満たなかった	4	3.7%
⑤ほとんど出席しなかった	3	2.8%
合計	108	100%

5. 成績評価について、今の時点でどのように思いますか。

	回答	構成比
①適切に評価されていた	30	27.8%
②おおむね適切だった	59	54.6%
③なんともいえない	12	11.1%
④あまり適切ではなかった	5	4.6%
⑤まったく適切とは思われなかった	2	1.9%
合計	108	100%

6. 受講してよかったと思う科目はどれくらいありましたか。

	回答	構成比
①かなりあった	26	24.1%
②まずまずあった	60	55.6%
③なんともいえない	12	11.1%
④あまりなかった	9	8.3%
⑤ほとんどなかった	1	0.9%
合計	108	100%

8. 在学中に、資格取得などのために学外の学校などに通ったことがありましたか。

	回答	構成比
①ある	24	22.2%
②ない	84	77.8%
合計	108	100%

9. 大阪大学文学部に在籍していたことがよかったと思いますか。

	回答	構成比
①よかった	61	56.5%
②まずまずだった	32	29.6%
③なんともいえない	10	9.3%
④あまり思わない	4	3.7%
⑤まったく思わない	1	0.9%
合計	108	100%

11. 将来、機会があれば大学院などで改めて勉強したいと思いますか。

	回答	構成比
①思う	63	58.3%
②思わない	19	17.6%
③何ともいえない	21	19.4%
無回答	5	4.6%
合計	108	100%

<11で①を選んだ方にお聞きます。>12. その際は、在学中と同じ分野ですか。

	回答	構成比
①はい	23	36.5%
②別の分野	39	61.9%
無回答	1	1.6%
合計	63	100%

編集後記

『年報 2006』は、文学研究科および文学部の 2004 年度および 2005 年度の教育・研究活動の記録である。法人化に伴い教育・研究の支援体制として整備された 4 室の活動状況が詳細に報告されている点や、「魅力ある大学院教育」、「性差別問題委員会の活動」、「大阪外国語大学との統合にともなう改組計画」といった記事が掲載されている点が、『年報 2004』とは異なっているが、基本的な編集方針はこれを踏襲した。

本誌刊行のため、2004 年度計画達成状況評価記入シート(教育・研究・社会貢献)作成および『外部評価報告書 2005』刊行に際して収集したデータに加え、2006 年 3 月に大学院生に関する 2005 年度分のデータを収集し、2006 年 5 月に 2004 年度(追加分)、2005 年度の各専門分野の記事および各教員のデータを収集するため、これらの提供を各専門分野および各教員に依頼した(この際、各専門分野・専修の 2006 年度教育研究目標設定および 2005 年度の目標達成状況についての自己評価の報告も、同時に依頼)。収集はおおむねすみやかに行われ、第 1 次締め切りの段階で専門分野の記事も教員データも、ともに回収は約 3/4、締め切り後約 1 ヶ月で回収を終了できた。

とはいえ、『年報 2004』においてもそうだったように、教員データに関して言えば、記載項目および記載順の不統一や該当ページ数の記載漏れ、括弧や句読点、コンマの用い方の不備などが多々見受けられた。また、専門分野の記事に関して言えば、『年報 2004』の記事に上書きされたためか、該当年度以外の活動が多く記載されたまま提出され、複数回の校正にもかかわらず、修正されない場合があった。記事の提出後すぐに、評価・広報室による校正を行うべきであったのかもしれない。この他にも反省すべき点はいくつかあるが、それらは 2 年後の発刊が予定されている『年報 2008』編纂のための申し送り事項としたい。

末筆ながら、評価・広報室の高橋理恵さんに謝意を表したい。データ収集・編集・校正・印刷・出版までのスケジュール作成から、紙面のレイアウトや印刷紙および表紙の選択に関する貴重なアドバイスをいただいただけでなく、煩瑣な校正作業を繰り返し行っていただき、不明な点に関しては逐一専門分野に問い合わせをしていただいた。『年報 2006』はこのようなご尽力なくしては出版にこぎつけなかったかもしれないと言っても、それは決して過言ではない。

(猪飼隆明・出原隆俊・栗原麻子・舟場保之)

大阪大学大学院文学研究科
年報 2006
教育・研究(2004-2005年度)
2007年3月発行

編集 大阪大学大学院文学研究科／評価・広報室
発行 大阪大学大学院文学研究科
〒560-8532 豊中市待兼山町1-5
TEL;FAX 06-6850-5107(評価・広報室)
印刷 (株)ケーエスアイ

後て為る角の事

要するに一島で切ると踏切

一級は行屋所しるすは口業し因りる

人多し切破り多し

一人し切破り更事多し切破り倍人

より多し切破り多し

心

安永七年戊戌六月